

令和7年度

「学生による授業評価」の概要

令和8年5月

県立広島大学大学教育実践センター

目 次

■全学共通教育科目

【前期】総評	1
集計結果	2
担当教員コメント	3
【後期】総評	34
集計結果	35
担当教員コメント	36

■地域創生学部専門科目

【前期】総評	63
集計結果	64
担当教員コメント	65
【後期】総評	89
集計結果	90
担当教員コメント	91

■生物資源科学部専門科目

【前期】総評	118
集計結果	119
担当教員コメント	120
【後期】総評	129
集計結果	130
担当教員コメント	131

■保健福祉学部専門科目

【前期】総評	139
集計結果	140
担当教員コメント	141
【後期】総評	167
集計結果	168
担当教員コメント	169

■教職課程科目

【前期】総評	189
集計結果	190
担当教員コメント	191
【後期】総評	195
集計結果	196
担当教員コメント	197

※資料「担当教員コメント」の「回答者数」及び「回答率」欄の数値の一部には、担当教員のコメント作成後に、追加回答のあった数値を含んでいます。

全学共通教育科目

【 前 期 】

- 授業科目の概要 全学共通教育科目
- 授業科目の名称 担当教員コメント欄参照
- 回答数 3,996
- 回答率 49.3%

【 総 評 】

本調査における回答率の向上が数年来の課題であることは周知の通りである。全学共通教育科目全体を俯瞰すると過去3年間の回答率の推移は以下の通りとなっており、全体にその値は向上しつつあることが読み取れる。

	令和4年度	令和5年度	令和6年度
前期	37.3%	39.0%	44.0%
後期	21.4%	27.7%	31.8%

今期の回答率は49.3%であったが、この数値はこれまでの取り組みの上に得られたものと評価できるであろう。しかし、100%の回答を得た科目が複数ある一方で10%以下にとどまった科目も散見されており、回答率の向上については引き続き策を講ずる必要がある。後期は一般に回答率が下がる傾向もあるため、一層の努力が求められている。

学生からの回答を見ると、学生は「授業に集中し、真剣に取り組ん」でおり、多くの授業で「能動的学修機会」が保障されていることがわかる。授業の満足度を問う設問に「強くそう思う」と答えた者が48.9%、「そう思う」と答えた者が46.8%おり、総じて満足度の高い授業が成立しているものと総括できる。

課題となるのは、いかに学生に授業外学修を促すかということに尽きるであろう。単に課題の内容や分量の検討にとどまることなく、優れた実践例に学ぶことにより、授業外学修そのもののあり方を本質的に問うような機会があればよいと考える。

科目担当者からのコメントを読むと、授業の「改善」を怠らない各教員の姿が浮かび上がってくる。一定の高い評価を受ける一方で努力を惜しむことのない姿勢に頭の下がる思いがする。今回は特に、各教員と受講者との日頃のインタラクションを彷彿とさせるコメントが散見されたことも特徴的であった。授業を一方的で硬直化したものとしないう、各個人の内面において不断の意識改革が進められていることの発露ととらえたい。

■学部・学科 全学共通教育科目
■科目名 全学共通教育科目全体

■受講登録者数 8,102
■回答者数 3,996
■回答率 49.3%

■設問別評価集計

アンケート設問内容		強く そう思う	そう思う	そう 思わない	全くそう 思わない	当該 科目区分 平均値
		評価4	評価3	評価2	評価1	
Q1	わたしはこの授業に集中し、真剣に取り組んだ。	2,171	1,733	84	8	3.52
		54.3%	43.4%	2.1%	0.2%	
Q2	わたしがこの授業に関連して行っている授業外学修（課題,準備,復習等）時間。（1週間の平均）※	567	1,262	1,758	409	2.50
		14.2%	31.6%	44.0%	10.2%	
Q3	この授業では授業時間外に取り組むべき課題が示されている。	1,910	1,674	316	96	3.35
		47.8%	41.9%	7.9%	2.4%	
Q4	この授業では能動的学修機会がある。	2,151	1,373	358	114	3.39
		53.8%	34.4%	9.0%	2.9%	
Q5	この授業の課題の内容・量は適切である。	1,938	1,876	147	34	3.43
		48.5%	47.0%	3.7%	0.9%	
Q6	この授業の目標とする力（知識や技能など）が身につく。	1,921	1,921	135	18	3.44
		48.1%	48.1%	3.4%	0.5%	
Q7	この授業の教材（教科書・資料など）・教具（アプリ・ファイルなど）は適切だ。	1,957	1,852	152	34	3.43
		49.0%	46.4%	3.8%	0.9%	
Q8	この授業の内容に関してさらに学びたい。	1,574	2,001	355	65	3.27
		39.4%	50.1%	8.9%	1.6%	
Q9	この授業での学修活動（発言や提出物など）に対して必要な支援を得ている。	1,793	2,037	139	26	3.40
		44.9%	51.0%	3.5%	0.7%	
Q10	総合的に判断して、この授業に満足している。	1,952	1,870	141	32	3.44
		48.9%	46.8%	3.5%	0.8%	

※平均時間数の評価

2単位科目：4時間以上…4 / 2時間以上4時間未満…3 / 2時間未満…2 / 全くしていない…1
1単位科目：1時間以上…4 / 30分以上1時間未満…3 / 30分未満…2 / 全くしていない…1

■設問別科目平均の範囲と中央値

平均の範囲（当該学部・学科科目）					
最小値	25%点	中央値	75%点	最大値	標準偏差
2.48	3.31	3.50	3.62	3.91	0.47
1.44	2.23	2.50	2.81	3.63	0.65
2.09	3.11	3.36	3.60	3.93	0.58
2.10	3.00	3.45	3.67	3.93	0.59
2.29	3.29	3.47	3.59	3.96	0.51
2.43	3.23	3.43	3.57	3.91	0.47
2.33	3.31	3.49	3.58	3.93	0.49
2.11	3.14	3.31	3.50	3.96	0.58
2.35	3.29	3.43	3.56	3.95	0.50
2.38	3.31	3.44	3.60	3.95	0.51

■担当教員コメント（全学共通教育科目） 令和7年度前期

キャンパス	科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
広島	大学基礎セミナーⅠ（Q1）	重安 哲也	この授業は、高校生から大学生へ学び方が大きく変化することを踏まえ、新入生が少しでも早く大学での学びや大学生活に慣れるために設置された科目である。アンケート回答率は66.4%と、大学初年次、Q1の授業としては、若干、低い回答率となっている。今後は、10クラス構成の各担当者とも連携し、確実なアンケート実施について連携を行う必要がある。さて、アンケート結果からは、以下の設問に、ポジティブな「（強く）そう思う」と回答した学生が非常に高いことから、概ね、授業の目標とする効果が得られたのではないかと判断できる。・「わたしはこの授業に集中し、真剣に取り組んでいる。」（97%）・「総合的に判断して、この授業に満足している。」（99%）また、「この授業の内容に関してさらに学びたくなる。」については、「（全く）そう思わない」が20%となっているが、これは、中等教育と高等教育の橋渡しが役目となっている授業の性格上、当然の結果であると思われる。また、自由記述欄からは、・プレゼンテーション実施による成長・教員や他の学生のコメントによる多くの気づき・大学生基礎力の育成などにおいて好意的な感想が多く得られている。一方では、・更なるグループワークの増加を求める・課題提出期限の短さから来る忙しさ・授業中に、質問や発表（発言）を求められることの苦痛などについて、ネガティブなコメントも寄せられている。「グループワークの増加」については、クラス担当教員ごとに差が出ているものと考えられるが、妥当な時間設定などについて、教員間でも意見交換を行いたい。また、「提出期限の短さから来る忙しさ」については、来年度からの授業形態（当授業あるいは、同時期開講の他の授業数）などの影響によって変わってくるものと考えられるが、この後、注視を行い、必要に応じて対応を検討したい。なお、「授業中に求められる発言についての苦痛」については、やはり、積極的かつ能動的な授業参加の重要性を鑑みると、授業中における必要かつ適切な指導であると考えられる。そのため、この重要性について、授業中にも、学生にもしっかりと認識させることを行なっていきたい。	217	145	66.8%
広島	大学基礎セミナーⅡ（Q2）	鍛島 秀明	本授業では、学生の授業への集中度や満足度が非常に高く、能動的学修機会や課題内容の適切さも良好であると評価された。特に、発表やグループ活動を通してプレゼンテーションスキルやチームでの協働力を高める機会が提供されている点は学生に好評であり、学修成果に直結していることがうかがえた。学修活動に対する支援も十分で、授業設計や教材・教員の適切さも高く評価されており、基礎的学修能力の向上に資する授業であったと考えられる。さらに、期末試験前の限られた時間の中でも現地視察に出向き、自ら課題を発見・考察してオリジナリティのある解決策を発表する学生も見られ、主体的かつ探究的に学修に取り組む姿勢が育まれていることも確認できた。一方、授業外学修時間は1単位あたり30分未満が約半数を占め、課題準備の負荷や学修の定着度には個人差が見られた。また、発表の準備期間が短いことや、グループを変えて繰り返す発表の意義が十分に理解されていないとの指摘もあり、学習効果の最大化に向けた課題調整が求められる。さらに、グループ発表中に聴衆として参加する学生の集中や態度、発言への受け止め方に関する課題も示されており、授業運営上の指導や環境改善の余地がある。改善策としては、発表準備期間や課題配分の見直し、グループ編成や回数の最適化による学習効率の向上が考えられる。今後は課題準備時間の確保、発表活動の効果的運用、学修態度の指導を中心に改善することで、学修効果と授業満足度のさらなる向上が期待できる。	218	146	67.0%
広島	ICTリテラシーⅠc（Q1） （肖）	肖 業貴	後で携帯をいじる人もいたので、概ね想定通り。	36	30	83.3%
広島	ICTリテラシーⅠd（Q1） （佐々木）	佐々木 宣介	【昨年度の結果を踏まえた改善点】 第3Qに実施するICTリテラシーⅡのシラバス変更との対応をとるため、一部の授業内容については今年度変更を行っているが、授業内容、演習課題などの難易度については前年度と大きな差がないように配慮している。また、学生の演習作業の進捗状況などは、注意深く確認するように心がけた。【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】 授業の際の演習の実施状況を注意深く確認して、進め方、課題の内容などの調整を行っている。これまでに使ったことがないと想定される機能については、特に丁寧に操作方法の説明を行っている。キーボードからの文字入力など、パソコンの操作自体に慣れている学生と慣れていない学生の差はあったが、比較的、順調に演習が進んでいるように見受けられた。【期末アンケート結果から見た今後の課題】 アンケート結果の数値については、おおむね問題ない範囲と考えられる。自由記述では、特に授業に関する不満のコメントなどはなく、演習時の対応に好意的なコメントが複数あり、大きな問題はなかったと考えている。入学の時点で学生のパソコン操作の習熟度にある程度差があるという状況は見受けられ、今後も操作に慣れていない学生への対応は注意していきたい。	37	22	59.5%
広島	ICTリテラシーⅠa（Q1） （岡部）	岡部 正幸	操作の説明はできるだけゆっくり、同じ説明を複数回繰り返すようにしている。引き続き丁寧な操作説明とサポートを行っていききたい。	36	20	55.6%
広島	ICTリテラシーⅠf（Q1） （小川）	小川 仁士	今年度から教科書を使わずに授業を行った。結果、前半の説明にかけていた時間を整理・短縮することができ、後半の演習にかかる時間を多くとれた。来年度から新しい科目がスタートするので、引き続き、学生満足度の高い授業を実施していきたい。	38	24	63.2%

■担当教員コメント（全学共通教育科目） 令和7年度前期

キャンパス	科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
広島	ICTリテラシーⅠb（Q1） （陳春）	陳 春祥	今年度は、テキストを使用しなかったので、チームズを通じて、資料を事前掲示し、予習の質問などをしやすいように工夫した。毎回課した宿題は、次の授業までに回収し、レビューして返却するようにした。設問の回答を見ると概ね肯定的な回答だった。設問10「総合的に判断して、この授業に満足している」について、肯定的な回答は94%だった（昨年87%）が、1名の履修者はそう思わなかった。設問8「この授業の内容に関してさらに学びたいくなる」に対しては“強くそう思う”と、そう思う”併せて100%だったが、学生自身に関する設問1「わたしはこの授業に集中し、真剣に取り組んでいる」に対して、1名の履修者はそう思わなかったと回答している。何かを知りたい。今後の課題となる。	38	15	39.5%
広島	ICTリテラシーⅠe（Q1） （重安）	重安 哲也	この授業では、PCを使用してビジネス文書や、発表スライド資料の作成、レポート作成などに必要なりテラシー能力を育成する演習をメインに内容を構成している。 アンケート結果を参照すると、概ね、全体的には、授業課題の量や難易度の適切さが確認できる。また、授業の目的とする力は身に付かなかったという学生はゼロだったことから、目的は達成できたと考えられる。 自由記述アンケートからは、多くの学生が、満足出会った旨の好意的なコメントを寄せており、感謝している。一方では、一部ではあるが、授業課題が難しかったと記述しているコメントもあることから、元々のPCに関する経験値の違いによるものかと思われるが、そのような学生には、演習中に巡回を増やすことで、学生から教員へ質問しやすい状況を作ることが必要であるとより感じた。	36	33	91.7%
広島	英語総合Ⅰa（Q1）	笠本 晃代	・ 昨年度の結果を踏まえた授業改善点 例年、設問4が他の質問項目よりも低くなる傾向があるあるため、できる限りグループごとに意見を発信できる機会を作った。しかしながら、「強くそう思う」が50%に達していなかったこと、また 「そう思う」と合わせても77%であったことから、これらのパーセンテージを上げられるように努力を続けていかなければならないと感じている。 ・ 履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 積極的に机間巡視を行い、受講者の理解度を把握するよう努めたつもりではあったが、より受講者に寄り添い、質問しやすい環境作りの工夫をしたいと考えている。 ・ アンケート結果から見た今後の課題 設問6、設問8、設問9の各質問項目において、「強くそう思う」が50%以上になるように、受講者の興味・関心をひきつけられる授業展開を目指したい。	38	30	78.9%
広島	英語総合Ⅰb（Q1）	黒住 奏	アンケートへのご協力、ありがとうございました。多くの学生が「授業に集中している」「授業に満足している」と回答しており、前向きに取り組んでいる姿勢がうかがえました。「能動的に学ぶ機会がある」「課題の内容・量が適切」などの点でも高い評価をいただき、授業設計の意図が伝わったことを嬉しく思います。 一方で、授業外学修時間が十分に確保できていないという回答も見られました。課題の意図や復習の仕方について、授業内でさらに明確に伝えることで、自主的な学習が促せるよう工夫していきます。 自由記述では、「英語の長文が地球問題と関連していて興味深かった」「映画やプレゼンを通じて楽しく学べた」といった声が寄せられました。英語を通じて思考を深め、実社会とのつながりを感じてもらえたことを大変うれしく思います。 一方、「グループによって成績や授業頻度に差がある」とのご意見については、複数教員による授業の特性上、授業の進め方に一定の違いが生じることがあります。ただし、学習目標や評価方針は学科内で共有されています。こうした違いも多様な学びの一環として前向きに受け止めていただければ幸いです。 今後も学生の学びがより深まるよう、改善と工夫を重ねてまいります。	37	28	75.7%
広島	英語総合Ⅰc（Q1）	ホーソン寿栄	リスニングが難しかったと感じた学生がいますが、レベルとしては適切だったと思っています。	20	18	90.0%
広島	英語総合Ⅰd（Q2）	笠本 晃代	・ 昨年度の結果を踏まえた授業改善点 例年、設問4が他の質問項目よりも低くなる傾向があるあるため、できる限りグループごとに意見を発信できる機会を作った。しかしながら、「強くそう思う」が50%に達していなかったこと、また 「そう思う」と合わせても85%であったことから、これらのパーセンテージを上げられるように努力を続けていかなければならないと感じている。 ・ 履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 積極的に机間巡視を行い、受講者の理解度を把握するよう努めたつもりではあったが、より受講者に寄り添い、質問しやすい環境作りの工夫をしたいと考えている。 ・ アンケート結果から見た今後の課題 設問8、設問9の各質問項目において、「強くそう思う」が50%以上になるように、受講者の興味・関心を最大限に引き出す授業展開を目指したい。	36	21	58.3%
広島	英語総合Ⅰe（Q2）	笠本 晃代	・ 昨年度の結果を踏まえた授業改善点 例年、設問4が他の質問項目よりも低くなる傾向があるあるため、できる限りグループごとに意見を発信できる機会を作った。「強くそう思う」と「そう思う」を合わせると85%となったものの、これを90%以上に保つことができるように努力を重ねたい。 ・ 履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 積極的に机間巡視を行い、受講者の理解度を把握するよう努めたつもりではあったが、より受講者に寄り添い、質問しやすい環境作りの工夫をしたいと考えている。 ・ アンケート結果から見た今後の課題 受講者の興味・関心を最大限に引き出し、英語をより身近に感じてもらうことができる授業展開をしていきたい。	35	26	74.3%

■担当教員コメント（全学共通教育科目） 令和7年度前期

キャンパス	科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
広島	英語総合Ⅰf (Q2)	黒住 奏	アンケートへのご協力、ありがとうございました。多くの学生が「授業に集中し、真剣に取り組んでいる」と感じており、また「満足している」との評価も高く、大変心強く感じています。特に、教材の適切さ（100%が肯定）、能動的学修の機会（100%が肯定）への評価が高く、参加型の授業が英語学習の深化につながっていることがうかがえました。 授業外学修については、週2時間未満の学生が一定数いたため、今後は予習・復習の方法や目的をより明確に伝えることで、自主的な学びを後押ししていきます。 自由記述からは、教科書の内容を他者に伝える活動やグループディスカッション、英語で自分の意見を表現する経験が、英語力の向上と自己成長につながったことがよく伝わってきました。「教えることの難しさを知った」「文法理解の曖昧さに気づいた」「社会問題に興味をもてた」といった声は、学びが表面的な理解にとどまらず、深い思考へと進んでいることを示しています。 今後も、英語を実践的に使いながら、考えを深めることができる授業をめざして取り組んでまいります。	37	21	56.8%
広島	英語表現Ⅰa (Q2)	D チャップマン	Q1と同様に、このディベート中心の授業もとても気に入っています！生徒たちは自分の意見を選び、その理由を説明します。そして、他の生徒と意見を交換しながら、反対意見を述べ合います。反対意見を述べる際には、その理由をきちんと説明することが重要です。ディベートのテーマは面白くて、かつ少し真剣な内容です。毎週、生徒たちの英語でのコミュニケーション能力を向上させるために、様々なスピーキング活動を行っています。これらの活動は、生徒たちのモチベーションを高めるだけでなく、とても楽しいものです。今回のアンケートで生徒たちが答えてくれた意見を見ると、生徒たちはこの授業を通して、英語で話す練習をたくさんできたようです。また、生徒たちが自分でディベートのテーマを選ぶことで、自分の生活に密接に関わる内容になるため、モチベーションも高まると思います。またこの授業を担当できることを楽しみにしています！	36	25	69.4%
広島	英語表現Ⅰb (Q2)	K カゼミ	Previously, students commented that the size of the writing on the board was difficult to see, generally because students prefer to sit at the back of the room. This semester, I recommended that they sit further forward. As a result, one commenter remarked that the size of the writing is just right. The feedback from Q1 showed that students were not doing much coursework outside of the classroom, so I gave more homework. This has resulted in an increase in the amount of work that students have reported doing outside the class. I will continue to strive to keep the students motivated and engaged by not only teaching the targets, but giving students the chance to practise and use them through activities, pair- and groupwork and ensuring that I check in on each group to communicate, help, and encourage them to use their language skills actively.	37	31	83.8%
広島	英語表現Ⅰc (Q2)	D リー	One of the areas that I need to address is motivating the students to take a more active role in their education outside of the class. I will try and do this by recommending things that they might enjoy, such as, books, novels or music. All of these things can help students develop their English in a way that is engaging and fun.	20	17	85.0%
広島	英語表現Ⅰd (Q1)	D チャップマン	この授業が大好きでした！この授業ではディベートに重点を置いています！生徒たちは自分の好きな意見を選び、その意見を支持する理由を述べます。そして、他の生徒たちとディベートを行い、反対意見を述べます。理由をつけて反対意見を述べるのが大切です！ディベートのトピックは楽しいですが、少し真面目な内容です。毎週、生徒たちの英語コミュニケーション能力向上のため、スピーキングの課題をたくさん行っています。これらのスピーキングの課題は、やる気を起こさせるだけでなく、楽しいものだと思います。生徒たちがこの授業に興味を持ち、積極的に参加し続けるようにすることが重要です！今後は、授業をより良くするために、生徒たちに関連のあるディベートのトピック（例えば、日本の文化や政治、若者が関心を持つ環境問題など）をもっと取り上げていきたいと思います。Q2の授業を楽しみにしています！	37	33	89.2%
広島	英語表現Ⅰe (Q1)	K カゼミ	I am glad to see that almost all the students' responses were positive, that they felt they worked suitably hard, had opportunities for active learning, that the content and quantity of assignments were appropriate, that they acquired the skills that were the goal of the class, and were satisfied overall. To further improve on this, I will consider adding more out-of-class work for the students to do at home.	36	35	97.2%
広島	英語表現Ⅰf (Q1)	D リー	One of the areas that I need to address is motivating the students to take a more active role in their education outside of the class. I will try and do this by recommending things that they might enjoy, such as, books, novels or music. All of these things can help students develop their English in a way that is engaging and fun.	38	30	78.9%

■担当教員コメント（全学共通教育科目） 令和7年度前期

キャンパス	科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
広島	韓国語Ⅰa（Q1）	鄭 遇澤	2025年度韓国語Ⅰaの授業は、任意振り分けのクラス分けとなったので、基礎レベルの語学授業としては多めの34人の受講生で行うことになった。それで、グループワーク形式を積極入れて、自律相互学習を進める形での授業は、かなり効果的だったと思います。課題とミニテストを毎回導入して、毎週個人別の達成度をフィードバックしながら、確認したことで、学習意欲を高めることが出来たと評価しています。特に、授業目標達成についての受講生の満足度は、全員肯定の評価だったので、今後も同じ授業方式を維持したいと考えています。	34	22	64.7%
広島	韓国語Ⅰb（Q1）	鞠 承姫	授業は学生が能動的に取り組める形式とし、声に出す練習を重視した。その結果として、言語学習に有益であったことが確認できた。本文暗記、会話応用、ペア発表を柱に授業を展開し、さらに文化的な背景を学ぶため映画を取り入れ、学習意欲の向上につなげた。映画を見て習った言葉が聞き取れるようになったのが効果的で、アンケートでも肯定的な内容が大半を占め、「さらに学びたい」という前向きな学習意欲の高まりが感じられた。	48	30	62.5%
広島	ドイツ語Ⅰa（Q1）	小田 智敏		39	20	51.3%
広島	ドイツ語Ⅰb（Q2）	小田 智敏		23	11	47.8%
広島	アカデミック日本語Ⅰ（Q1）	中石 ゆうこ	メールの書き方などを学ぶクラスであるため、生成AIの普及によって対応が必要になった。昨年度同様、メールの書き方に関する教科書を用いたが、作文をメール形式だけではなくチャット形式などに置き換えて授業で作文などを実施した。設問7（この授業の教材（教科書・資料など）・教具（アプリ・ファイルなど）は適切だ。）に着目したところ、おおむね好評であり、現在の教科書やその扱い方に受講生が満足していることがうかがえる。	15	15	100.0%
広島	アカデミック日本語Ⅱ（Q2）	中石 ゆうこ	このクラスは、担当教員が指導するほかにも、教育実習、実践研修の教壇実習の場として、実習生、研修生が教壇に立った。設問4、5、8、9において否定的な回答が1名ずつ見られた。改善点としては毎回指導者が異なるため、宿題や指導の仕方に統一感がなかったことが挙げられる。その結果は設問9（この授業での学修活動（発言や提出物など）に対して必要な支援を得ている。）の「そう思う」29%、「そう思わない」6%という結果にに表れているように思われる。一方、楽しいクラスだったという自由記述も見られ、様々な教え方を楽しんでいる受講生がいたことも分かった。	19	17	89.5%
広島	哲学（Q1）広島C	大草 輝政	設問2（肯定62%, 否定28%）および設問4（肯定60%, 否定40%）以外、全設問で肯定評価80%以上である。独自に中間アンケート的なものも一度実施した（自由記述、回答任意）が、寄せられたコメントは概して好感触であり特に軌道修正を迫られるものは無かった。このたびの授業評価の自由記述（7件）も基本的に好意的なものが並んでいる（「自分になかった視点や考え方が身についたし、考える時間がとても楽しかったのでこの講義をとってよかったなと思います」等）。なお、学生からの指摘は無かったものの、最終回に実施した「対面」では、機材の連携が悪く、授業運営にしばしばモタツキが生まれたことを指摘しておく。こちらが教学にたいして要望したとおり、確かに、1)書画カメラ、2)DVD、3)パソコンを使える教室があてがわれたところまではよいが、その3機材の切り替えにいちいちタイムラグが生じ、他キャンパスでの対面回に比べ、10～15%減の講義内容になったように思う。結果、1)は使用すらしなかったし、2)も途中で幾つか用意した資料提示を断念した。スイッチャー以外に、1)2)の機材自体が古いものであることも一因であると思われ、特に、2)は最新機種に替えていただきたい（仮に三原Cと同じものに買い換えても経費は数万円内だろう）。また、ついですが設問4に意味があるのか疑問である（過去にもこのようなコメントにて幾度か指摘済み）。設問がミスリーディングであり、学生にも勘違いが蔓延している気がしてならない。一人ひとりが哲学書を精読し（この時点で反転学習にほぼ相当。ただし、文言も「予習を必須とする講義」などと噛み砕かないかぎり学生には通じないだろうが）、毎回考え、アウトプットが要求される科目は能動的学習でなく、それに対して隣席学生との意見交換や、教室を飛び出す機会があれば能動的学習とでも言うのだろうか。皮相的教育観がにじみ出ている設問に見えなくはない。	125	46	36.8%

■担当教員コメント（全学共通教育科目） 令和7年度前期

キャンパス	科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
広島	文学（Q2）広島C	福田 涼	本科目は、広島（対面）、三原・庄原（オンライン）の3キャンパスで同時開講されている。そのこと自体が、たとえば「対面講義を希望する」（庄原）、「オンライン授業においても、板書をリアルタイムで見れるようにしてほしいです」（三原）といった要望に直結していることは否定できない。一方、①発言する際の心理的安全性を担保する、②遠隔授業にあっても可能な限り双方向性を担保する、という目的で導入しているアプリ「バババコメント」については、概ね好評が得られているようであり、「チャットではなくバババコメントと呼ばれる匿名のコメントで授業を行ってくれたので、記名のコメントよりも自分が思ったままのコメントがしやすかった」（広島）、「バババコメントのおかげで、オンラインで受けていたけど、能動的に授業に取り組めた」（庄原）といった回答が見受けられた。今年度に関しては、TA等の授業支援については依頼しなかったが、とくに「板書をリアルタイムで見れるようにしてほしいです」といった学生からの要望に応えるべく（現状は、定期的にホワイトボードを撮影し、Teams「会議」のチャットで送信している）、教学課や関係の部署とも相談の上、導入可能な機器や方法について精査してゆきたい。	26	12	46.2%
広島	社会学（Q1）広島C	澤田 千恵	本授業のアンケート回答率は58%であり、全体として肯定的な評価が得られた。設問ごとの否定的回答は比較的低い割合であったが、特に「授業時間外に取り組むべき課題が示されている」と感じていない学生が22%とやや多かった。また、「能動的学修機会がある」「課題の内容・量は適切である」「目標とする力が身につく」「教材・教具が適切である」「学修活動への支援」「総合的満足度」については、それぞれ4～10%の学生が否定的な回答を示した。自由記述では、「いい授業」「教材だけでは理解しづらかった内容も、まとめたスライドや先生の説明で分かりやすかった」「初回の参加方法で苦労した学生への丁寧な対応に安心した」「オンラインで自由に場所を選べるのが良かった」「地元が紹介されて親近感が湧いた」「初めてのオンライン授業でグループ活動は最初緊張したが、慣れてスムーズにできた」「どんな質問にも詳しく答えてくれたのが嬉しかった」など、授業内容や運営に対する肯定的な意見が多く寄せられた。一方で、オンラインで毎回グループディスカッションの時間を設けていたにもかかわらず、「能動的学修機会があると思わない」とする回答が6%存在しており、オンラインでのグループ学習が一部の学生にとって十分に機能していなかった可能性が示唆される。総じて、授業運営や説明の分かりやすさ、学生への配慮は高く評価されているが、課題提示や能動的学修機会の質、教材・教具の工夫については、さらなる改善の余地があると考えられる。今後は、オンライン環境下でもより多くの学生が積極的に参加できるようなグループ活動の運営方法や、授業時間外の課題提示の明確化に努めたい。	88	51	58.0%
広島	歴史学（Q2）	岡本 弘道	複数キャンパスからの配信で授業を行ったため、ネット回線のトラブルに対する不満が多かった。設備に関する問題なので今後の改善に期待したい。また、授業外学修が少ない学生が多く、授業の内容に対する手応えへの不満に繋がっているようなので、事前課題をもっと充実させたい。	67	25	37.3%
広島	倫理学（Q2）広島C	大草 輝政	設問2（肯定54%, 否定46%）および設問4（肯定70%, 否定29%）以外、全設問で肯定評価80%以上である。問6、7、9、10で肯定100%。独自に中間アンケート的なものも一度実施した（自由記述、回答任意）が、寄せられたコメントは概して好感触であり特に軌道修正を迫られるものはなかった。このたびの授業評価の自由記述（7件）も基本的に好意的なものが並んでいる（「オンデマンドだからこそしっかりと自分で教材や、資料を読んだり、それを元に深く考えることが出来て、とても楽しかったです」等）。3キャンパスで300名を超える履修者である。「授業改善」アンケート実施以前に、カリキュラム「設計」に問題はないだろうか。	118	26	22.0%
広島	経済学（Q1）広島C	山根 智沙子	このたび実施されたこのクラスの授業評価アンケートでは、高い回答率を得ることができました。内容面においても、多くの項目で肯定的な評価が示されており、受講学生の関心の高さと授業への積極的な取り組み姿勢がうかがえます（1年生の受講生が多かったため）。一方で、「課題の提示」や「能動的学修機会の提供」については評価がやや分かれ、授業外学修時間も比較的小さい傾向が見られました。こうした点を踏まえ、今後は課題提示の工夫や、学生がより主体的に学べる授業運営に努めてまいります。	82	74	90.2%
広島	科学史（Q1）広島C	村田 和賀代		46	16	34.8%

■担当教員コメント（全学共通教育科目） 令和7年度前期

キャンパス	科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
広島	生命倫理（Q2）広島C	吉川 ひろみ	1昨年度の結果を踏まえた授業改善点：各回のテーマを明確にし、教科書の該当箇所を明示した。 2履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点：毎回の授業後にフォームズで、学生からのフィードバックを得て、次の授業で共有したり、コメントを述べた。 3アンケート結果から見た今後の課題：回答した14名中8名が、すべての項目で肯定的評価をした。自由記載「自分の意見を出したときに次の授業でその意見に対するコメントや逆にこう考えたらどうだろうかという質問をぶつけてもらえるので、探求力が上がったと思う。さらに、安楽死などの話題では、正直賛成派が多いと考えていたが、倫理的に考えたら反対という意見も教えてもらえた時、どちらの気持ちもわかるからこそとても難しい問題なんだなと思いました。この授業を履修したことで色々な物事に対して視野を広く考えることができるようになった。」から、授業の目標が達された学生がいることがわかった。今後も双方向的授業を展開していきたい。	14	8	57.1%
広島	文化人類学（Q2）	上水流 久彦	授業後に感想を出してもらい、気になる意見や質問には回答を行うようにし、学生ニーズをくみ取る努力は行った。能動的な学習が少ないという意見があり、来年度以降、増やすことを検討したい。また時間外の課題がないという点については、教科書の事前読み込みを課しており、この点が十分に伝わっておらず、来年度徹底を図りたい。	80	35	43.8%
広島	日本国憲法（Q2）広島C	岡田 高嘉	【昨年度の結果を踏まえた改善点】 昨年度の学生のコメントからは、オンライン授業時は声が聞き取りにくいというコメントが散見された。今年度は、教学課やTAと綿密に連携しながら、オンライン授業のトラブルを回避するよう、事前準備をしっかりとこなした。お陰で目立ったトラブルはなかった。また、記述式の課題（ミニレポート）について、翌週にできるだけ丁寧なフィードバックを心がけた。代表的な意見や興味深い意見などをいくつかピックアップし、全体で共有した。 【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】 毎週、小テスト（択一式）を実施し、学生の理解度を確認した。また論述式の課題も毎週課して、学生に憲法問題について深く考える機会を作った。小テストや論述課題については、翌週にフィードバックを行うこととした。 【期末アンケート結果から見た今後の課題】 アンケート回答率は、85%であった。総合的な満足度（設問10）について肯定的評価は100%であるが、「強くそう思う」の割合が4割弱だったので、今後は5割に近づけることを目標としたい。一方、「さらに学びたい」（設問8）については、否定的評価が17%であったので、この評価は1割以下に減らしたい。そのため、授業内容や方法を再検討し、課題や小テストの設定の仕方についても、見直しを図りたい。自由記述では、「これまで深く考えたことがない事象に真面目に向き合い考える機会になった」「新しい視点や疑問をもてるようになった」「毎週の課題に取り組むことで自分の考えや知識を文章にして説明する力がついた」といった肯定的なコメントがあり、励みになった。学生が関心を持って深く考えることができる課題設定を今後も模索していきたい。	48	41	85.4%
広島	環境と科学（Q2）広島C	内藤 佳奈子	毎回の授業内における質疑応答時間、授業後の課題提出時に意見・感想を任意で記載する欄を設け、全体（3キャンパス、受講生400名）の理解度と授業の方向性を確認しながら進める工夫を施した。アンケートの結果から、真摯に取り組める授業スタイルで環境についての科学的な知識を身に付けられるように進めることができたのではないかといえる。毎回、事前に授業資料を提示し、授業内容についての課題を明示して、理解度を高める授業スタイルで実施した結果、真剣に取り組んだ（設問1：肯定98%）、取り組むべき課題が示されている（設問3：肯定88%）、課題の内容・量は適切である（設問5：肯定98%）、目標とする力が身につく（設問6：肯定96%）、教材・教具は適切である（設問7：肯定92%）、必要な支援を得ている（設問9：肯定96%）、との回答を得られたものと思われる。また、さらに学びたい（設問8：肯定94%）、総合的に満足している（設問10：肯定94%）との結果より、専門分野外の学生さんにも本科目の授業内容に興味を持っていただき、今後の学習意欲も高めることができたのではないと思われる。しかし、アンケート結果（設問4：肯定62%、否定38%）からも読み取れるように、授業体制上、能動的学修機会を取り入れるのは難しいが、この点に関しては担当教員間で事前に要検討し、授業時間内にもアクティブラーニングの要素を組み入れながら、自主的に学習できるように授業内容の改善と更なる工夫を凝らした授業進行に努めたい。設問11の回答について、3キャンパス（受講生400名）に対するオンライン（リアルタイム）授業をMicrosoft Teamsにて実施しているために生じる問題や不便さに関して、新たな手段や方法などを如何に取り入れることができるのかも考慮し、できる限りスムーズで分かりやすい授業進行ができるように改善していきたい。	135	51	37.8%

■担当教員コメント（全学共通教育科目） 令和7年度前期

キャンパス	科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
広島	英語入門演習（前期集中） 広島C	笠本 晃代	・ 昨年度の結果を踏まえた授業改善点 例年、設問4が他の質問項目よりも低くなる傾向があるため、できる限り Teams のチャット機能を利用して意見交換ができる機会を作った。しかしながら、「強くそう思う」が50%に達していなかったこと、また 「そう思う」と合わせても80%であったことから、これらのパーセンテージを上げられるように努力を続けていかなければならないと感じている。 ・ 履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 解説した文保事項について疑問点があればすぐに対応できるように、終始質問のための時間を確保した。すると、ほとんどの受講者が毎回積極的に質問をし、キャンパスを越えて受講者同士でも疑問点を解決していく場面が多々見られた。より受講者に寄り添い、さらに質問しやすい環境作りの工夫をしたいと考えている。 ・ アンケート結果から見た今後の課題 設問4、設問6、設問8の各質問項目において、「強くそう思う」が50%以上になるように、受講者の興味・関心を最大限に引き出す授業展開を目指したい。	9	6	66.7%
広島	数学入門演習（前期集中） 広島C	岩田 貴樹	（受講者がいなかったため、コメントなし）	0	0	—
広島	生物入門演習前期 広島C	金岡 雅浩	本講義は、大学で生物学関連の講義を学ぶことにおいて不安のある学生を対象に、演習形式でおこなうものである。具体的には、私が担当している生物学Ⅰ（4002004_生物学ⅠQ1：生命環境学科）の講義資料を提示して予習してもらい、その内容に関する質問を事前に提出し、本講義の時間中に解説する、という形式でおこなっている。本年度は広島キャンパスからの受講生はいなかった。本講義は来年度からは廃止されるが、生物学Ⅰの講義を担当していると学生によって理解度に大きな差があると感じられるので、生物学Ⅰを理解度別のクラス編成にするなどの対応がとれると良いと思う。	0	0	—
広島	化学入門演習（Q1, Q2）広島C	小関 良卓	受講生なし	0	0	—
広島	英語総合Ⅲ（Q2）b （ホーソン）	ホーソン寿栄	みなさん、真摯に取り組んでいたと思います。コメントがなかったので、答えようがありませんが、プレゼンは非常によかったです。	9	7	77.8%
広島	英語総合Ⅲ（Q1）a（西原）	西原 貴之	昨年度からの変更として、授業時間に学習内容について振り返りを行う時間を増やした。そして、振り返りにより、特に学生がよく理解できなかった箇所を極力すべて拾い上げ、フォローアップをする形式を強化した。今回の授業結果を見る限り、学生は大変満足してくれたようであった。また、授業時間にスピーキングなどの機会を多めに取ったこともこの結果につながったと考えている。教材は、今年度も好評であった。怪奇小説という不思議な物語を通じた英語学習という形が学習者にとって目新しいものになったと思う。学生に英語でのリーディングの楽しさの一端を感じてもらえたようで、大変うれしい。なお、今回は振り返りの中心が「授業で分からなかったこと」の確認が中心になってしまった。学生は分からなかったこと以外にも、面白いと感じたこと、驚いたことなど物語文に対して様々な経験をしているため、来年度以降はこのような側面の振り返りも授業の中に積極的に取り入れていきたい。今年度、しっかりと授業に取り組んでくれ、アンケート結果も大変よい結果であったが、来年度はさらに「強くそう思う」の割合が増えていくように、引き続き授業の改善に取り組んでいきたい。	25	24	96.0%
広島	英語表現Ⅲ（Q1）a （ボールドウィン）	P・ボールドウィン	2時間続きなのでこちらの回答は少なかったですが、全て100%という評価は、満足されていたと理解します。4限もほぼ同じ結果でしたので、このままの方式で続けます。	22	10	45.5%
広島	ひろしま理解（Q2） （広島C）	和田 崇	昨年度から授業担当順を一部変更した。また、広島キャンパスのみ対面、庄原・三原キャンパスがオンラインでは授業実施が困難で、学習効果もキャンパスにより異なると思われるため、3キャンパスともオンラインで授業を実施した。さらに、期末試験は設問数を昨年度より増やすことにより、幅広く学習内容の理解度を測定できるようにした。授業時に学生に質問して回答してもらうようにしたり、授業後に感想を提出してもらうことにより、学生の理解度等を測るよう努めた。昨年度と比べて特に庄原・三原キャンパスの履修人数が大幅に減少したが、依然として150名を超える履修があり、しかも3キャンパス同時開講なので、グループワークなどは物理的に不可能であった。また、期末試験対策が授業外学習になると考えたが、教員から具体的な課題提示などがないと授業外学習の機会がなかったと捉える学生もあり、与えられないと授業外学習が自ら計画的に実施できない状況がみてとれた。なお、本授業は本年度が最終年度であり、来年度以降は開講されない。	108	28	25.9%

■担当教員コメント（全学共通教育科目） 令和7年度前期

キャンパス	科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
広島	地域情報発信論 （前期集中）	広谷 大助	本授業は3キャンパスの学生がサテライトキャンパスひろしまに集まって行う夏季集中講義であり、本年度も高校生が数名加わった。本年度は当初考えていた通りに対面3日・オンライン（リアルタイム）1日の日程となった。昨年度起こったトラブルを踏まえ、学生にはこれまで以上に丁寧な説明を心がけた。その結果、本年広島市が行っている被爆者の講話を初めて行ったにも関わらず大きなトラブルは1つもなく終了した。毎日の授業の終わりには振り返りシートを提出させており、かつ最終日にはグループ振り返りシートも提出させている。加えて、ルーブリック評価も初日と最終日にさせている。その結果、全ての項目で肯定的回答が100%であった。更にルーブリックで学生の成長が見て取れた。コメントにあった最終レポートのフィードバックについては、どのような形式がふさわしいかを検討することが今後の課題となる。	18	10	55.6%
広島	キャリアビジョン（デベロップメント）3年生以上対象（集中講義）	原田 淳	回答率が低いため、参考にしかないが、いずれの設問に対する回答も「強くそう思う」、「そう思う」が大半であった。【昨年度の結果を踏まえた授業改善点】 毎回の授業において、ブレイクアウトルームを用いてテーマに関するグループワークを行うことにより、理解をうながすようにした。また、毎回の授業を録画して公開し、レポート作成の際に見直せるようにした。【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】 毎回の授業終了時にFormsで出席登録する際に質問、意見を提出するようにした。質問は、翌日（次回）の授業冒頭で回答した。【アンケート結果から見た今後の課題】 自由回答には、「期待したと通りの内容や技法を学ぶことができた」というコメントが見られた。シラバスに各回の具体的な内容をわかりやすく記載するようにしたい。	62	7	11.3%
広島	リーダー論（前期集中）	原田 淳	3キャンパスの学生が参加する集中講義で行動型学習の科目としても採択されている。授業評価アンケートの回答率が低いため、参考にしかないが、いずれの設問に対する回答も「強くそう思う」、「そう思う」であった。【昨年度の結果を踏まえた授業改善点】 4日間の集中講義のうち、3日間はオンライン授業で、コミュニケーションとディベートの基礎について開設し、演習で理解を深めるようにした。初めてディベートを行う学生が多いため、最初の演習では、ステップごとに教員が介入・解説しながら進めるようにした。4日目は、サテライトキャンパスにおいて対面でのディベートを行った。初めてディベートに取り組んだ学生も演習の回数を重ねて、4日目には自信をもって発言する様子が見られた。【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】 毎回の授業終了時にFormsで出席登録する際に質問、意見を提出するようにした。質問は、翌日（次回）の授業冒頭で回答した。【アンケート結果から見た今後の課題】 受講前後のルーブリックの比較をしたところ、差分の大きな項目は、傾聴的態度、傾聴技法、クリティカルリーディングの3つで、いずれも1.3以上伸びている。差分の小さな項目に関しては、解説や演習について見直しを行いたい。	28	2	7.1%
広島	ライフデザイン（Q2） 広島C	岡田 高嘉	【昨年度の結果を踏まえた改善点】 本科目は昨年度から、各々のキャンパスの受講生を教室に集め、3キャンパスの教室をオンラインでつなぐ「ハイフレックス型」で実施している。昨年度のアンケート結果から、教員のいないキャンパスで一部の学生が私語を続けるなど授業に参加していない様子が伺えたため、今年度は教室環境を静穏に保つことやグループワークを適正に行うことを目指し、座席指定を行った。【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】 3キャンパス全体で約500名の受講生がおり、教員不在でTAのみが対応しているキャンパスもあるため、毎回（毎週）小テストを実施し、受講生の解答状況の確認を通じて授業態度の把握に努めた。また、小テストの結果は、学生の理解度や到達度を把握する手段として活用し、必要に応じて補足解説を加えたり、次回以降の授業内容を柔軟に調整したりするなど、授業改善に役立てた。【期末アンケート結果から見た今後の課題】 今年度は初めて座席指定を導入した。その結果、昨年度よりも学修環境の管理をより適切に行うことができたと思う。特に座席指定によりグループワークへの移行がスムーズになり、授業の効率が向上した。一方で、大講義室（階段教室）でのグループワーク実施の難しさや、座席指定方法の改善を求める意見も散見された。これらの課題を踏まえ、来年度に向けてグループ分けの方法や座席指定の運用について再検討したい。さらに、オンライン授業時は声が聞き取りにくいという指摘も依然として見られた。来年度は教学課やTAとの連携をより一層強化し、授業開始時の音声チェックなどの準備を徹底したい。	248	87	35.1%
広島	ボランティア（Q1）	手島 洋	アンケートの回答者は少なかったが、回答者の満足度は高かった。本科目は、ボランティアの学び・実践・省察を授業の中で一体的に学修するプログラムとしているため、能動的学習の満足感が高かったものと思われる。今後も、引き続き受講生のニーズを把握しながら授業改善を行いたいと思う。	17	5	29.4%

■担当教員コメント（全学共通教育科目） 令和7年度前期

キャンパス	科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
広島	韓国語Ⅰc（Q2）	鄭 銀志	授業評価アンケートの全ての設問において「強くそう思う」と「そう思う」を合わせた肯定的回答が88%以上、特に多くは100%となり、受講生が授業に集中し、真剣に取り組んでいることがうかがえる結果となった。授業時間外の課題提示（88%）を除き、その他の項目では満足度が100%と非常に高く、教材・教具の適切性（100%）、能動的学修機会の提供（100%）、課題の内容・量の適切性（100%）、目標とする力の達成度（100%）、学びの意欲喚起（100%）、必要な支援の提供（100%）、総合的満足度（100%）と、全般に対する高い評価が示された。自由記述でも授業が「楽しく、分かりやすい」との肯定的な意見が寄せられ、真面目に受講する学生にとってプラスとなる授業運営が評価された。一方、教室後方で私語により集中しづらいとの指摘もあった。実際、授業中に私語をしている学生にはこれまでに3回ほど注意を行ったが、学びの環境を守るため、今後はさらに毅然と対応しつつ、全員が集中できる空間づくりを徹底していく所存である。最後に、この授業を前向きに盛り上げ、積極的に発信や活動（韓国語でのスピーチなど）に参加した学生に心から感謝する。学生の前向きな姿勢が授業の質を高め、活気ある学びの場を形成した。今後も満足度の高い授業を提供できるよう、工夫を重ねていく所存である。	50	8	16.0%
広島	韓国語Ⅰd（Q2）	鞠 承姫	授業では、覚えた本文を基に会話を作り、発表する活動を継続的に行った。学生が自発的に声を出すことで、より実践的な力を養うことを重視した。文化的側面を学ぶため、映画を取り入れ学んだ語彙を実際の会話の中で確認する機会を設けた。アンケートでは能動的な学習で楽しく勉強が出来たという感想もあり、さらに学びを深めたいという意欲が示された。	57	17	29.8%
広島	英語表現Ⅲ（Q1）b（スティチェック）	ウルシュラ スティチェック		6	3	50.0%
広島	英語表現Ⅲ（Q2）c（ボールドウィン）	P・ボールドウィン	こちら高評価でしたので、このままの形で進めてまいります。	9	1	11.1%
広島	地域教養ゼミナールA（エリア型）（Q1）a（樹木の保全と活用）	荻田 信二郎	こちら受講者なし回答者なしです 他キャンパスで頂いたコメントを参考に授業改善に努めます。	15	2	13.3%
広島	地域教養ゼミナールA（エリア型）（前期集中）b（都市近郊）	荻田 信二郎	別途実施した総括Forms回答を参考に、さらなる工夫改善に努める。	35	7	20.0%
広島	地域教養ゼミナールB（テーマ型）（夏季集中）j（英語で伝える広島）	馬本 勉	地域教養ゼミナールB「英語で伝える広島」は、今年度より教育ネットワーク中国を通じた「広域単位互換科目」となり、本学3キャンパスから7名、県内外の他大学学生4名、計11名の履修者を迎えた。サテライトキャンパスひろしまでの4日間の集中講義では、平和公園近接地であることのメリットを活かし、原爆ドームや広島平和記念資料館でのフィールドワークを交えて実施した。今年度、広島平和文化センターより「広島・長崎講座」に認定されたことにより、資料館の入館料免除や教材提供等の支援を受け、より被曝の実相に迫った英語表現の演習を実施することができた。多様な学生の参加を得たことが、頻繁に実施したグループワークやプレゼンテーションの活性化を生み、履修者の多くは授業の狙いに叶う成長を遂げてくれたものと思われる。これらが授業の満足度につながったものと考えているが、配付した資料を十分に活かせなかった活動もあるため、次年度の授業については、より綿密な計画を立てて臨みたい。	9	2	22.2%
広島	地域教養ゼミナールB（テーマ型）（Q2）h（少子化と子育て支援）	田中 聡子	アンケート回答者数 0人 / 15人中、回答率 0%であった。次年度は授業アンケートへの協力について、何度か依頼していきたい。	15	0	0.0%
広島	地域教養ゼミナールB（テーマ型）（Q2）i（子ども虐待とヤングケアラーを考える）	松宮 透高	3キャンパスを対象とした科目であり、時間的物理的な制約からオンデマンド開講を主体とした。最後に、学習内容を各自パワーポイントにまとめてプレゼンテーションとディスカッションを行うことで、自己学習と参加機会を組み込んだ。また、多くの当事者や支援者をゲストスピーカーとして招いた。概ね満足度が高いことから、こうした特殊な開講形態であってもリアリティのある講義となるよう工夫したことが一定の満足につながったものと思われる。一方、自己学習を求める要素が大きくなかったためか、授業外学修の時間が少ない回答者も少なかった。すべてを教え込むのではなく、調べて共有するといったプログラムへの工夫を重ねたい。また、より多様なゲストを招いて、より刺激的な学習につながるよう努めたい。極めて低い回答率については、今後回答を促す工夫も必要と考えている。	41	9	22.0%

■担当教員コメント（全学共通教育科目） 令和7年度前期

キャンパス	科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
広島	中国語Ⅰa（Q1）	袁 葉	回答率が高いことをとてもありがたく思います。 1回で2コマの授業をするので、やむを得ず課題を多めに出していました。 それに対する理解があった上で、短期間に中国語が上達したことを喜んでくれて、大変嬉しく思います。 後期お互い楽しく頑張りましょうね。よろしくお願いします。	48	37	77.1%
広島	中国語Ⅰb（Q1）	徐 亜文	【昨年度の結果を踏まえた授業改善点】 昨年度の授業においては、学生の多くが授業に集中し、真剣に取り組む姿が見られた。課題の内容や量も適切で、学習内容の定着につながり、教材・教具や学習支援も有効に機能して、多くの学生が授業に満足していた。一方で、いくつかの課題も確認された。第一に、授業外学修時間が週1時間未満にとどまる学生が一定数存在した。第二に、能動的学習の機会が十分でないと感じる学生も見られた。今後の改善策としては、授業外学修の成果を細かく確認する方法を導入するとともに、授業内外で能動的学習の時間や機会を増やす工夫を行いたい。 【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】 中国語の学習において、日本人にとって発音は最も難しい課題の一つである。特にピンインの習得は学習の基礎となるため、授業では工夫を重ねた。具体的には、発音一つひとつを丁寧に説明し、日常でよく使われる単語を例に多くの練習を行うと同時に、学習したピンインを用いた聴き取り問題を授業内で実施し、理解度を確認した。その結果、期末試験における聴き取り問題の成績が全体的に大きく向上し、学生の習得度の改善が確認された。一方で、ピンイン学習は単調になりやすく、学生が飽きやすいという課題も見られた。今後は、多様な方法でピンインの学習を工夫し、学生がより関心を持って取り組める環境を整えることで、学習効果を一層高めたい。 【アンケート結果から見た今後の課題】 まず、限られた授業時間の中で、学生が主体的に学べる能動的学習の機会をいかに提供するかが課題である。また、授業外学修の実施状況を把握できるよう、課題の内容や量を工夫する必要がある。さらに、発音学習は、従来の単調な方法に加え、多様な学習手法を取り入れることで、学習効果をより高めることが求められる。	72	21	29.2%
広島	中国語Ⅰc（Q2）	袁 葉	学生の率直な感想が聞けてありがたく思います。「大学に入って一番集中して取り組めた学科だ」という声があって、大変励みになりました。改善すべきことを改善し、より学生の満足できる講義にしたいと思います。 よろしくお願いします。	31	13	41.9%
広島	中国語Ⅰd（Q1）	徐 亜文	【昨年度の結果を踏まえた授業改善点】 昨年度の授業では、学生の多くが集中して真剣に取り組む姿が見られた。課題の内容や量も適切で、学習内容の定着につながり、多くの学生が授業に満足していた。教材・教具や学習支援も概ね適切であったが、一方でいくつかの課題も確認された。第一に、授業外学修時間が週1時間未満にとどまる学生が一定数存在した。第二に、教材・教具や学習支援に対して満足していない学生が一部見られた。今後の改善策としては、授業外学修の成果をより細かく確認できる方法を導入するとともに、多様な教材・教具を活用し、学習支援の強化を図りたい。 【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】 中国語学習において、日本人にとって発音は最も難しい課題の一つである。特にピンインの習得は学習の基礎となるため、授業では工夫を重ねた。具体的には、発音を一つひとつ丁寧に説明し、日常でよく使われる単語を例に練習を行った。また、学習したピンインを用いた聴き取り問題を授業内で実施し、理解度を確認した。その結果、期末試験の聴き取り問題の成績が全体的に大きく向上し、学生の習得度の改善が確認された。さらに、「一人一人に音読を確認してもらえ、わからないところは何度も教えてくれるので上達できました」というコメントも多数寄せられた。一方で課題は、今後いかに工夫して学生一人一人の発音をより的確に確認していくか、という点である。 【アンケート結果から見た今後の課題】 教材・教具をさらに工夫し、学習支援を充実させることが課題である。また授業外学修の実施状況を適切に把握できるよう、課題の内容や量を工夫する必要がある。さらに発音学習については従来の単調な方法に加え、多様な学習手法を取り入れることで、より高い学習効果を目指すことが求められる。	37	20	54.1%
広島	いのちと科学（Q1）	岡田 玄也	講義時間内でアンケートへの回答を依頼したため、アンケートの回答率は90%以上と履修者が100名以上の中で良好であった。多くの学生がこの講義に熱心に取り組み、コースや学年の垣根を超えてグループワーク・反転授業を行うことができており、能動的学習に関する取り組みに対して、どの質問項目に対しても好意的な意見が得られた。一方で、反転授業時における授業担当者の姿勢について、学生から改善を求める指摘をいただいた。今後は講義内容だけでなく、講義担当者の講義に対する姿勢についても見直しを行い、より良い講義となるよう努める必要がある。	119	114	95.8%

■担当教員コメント（全学共通教育科目） 令和7年度前期

キャンパス	科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
庄原	大学基礎セミナーⅠ Q1	荻田 信二郎	受講していただきありがとうございます。講義内Formsで頂いたコメントや、本アンケート結果を参考に授業改善に努めます。 本講義は1年次配当で、Q1の入学当初から、大学講義の受講、やりとりに至る方法やポイントを身に付けて頂く目的があります。講義内容は全学共通で調整したものを各キャンパスの担当教員にて分担して進めております。 庄原キャンパスではガイダンス時から一貫してTeamsを組み、連絡指示の共有をしながら進めておりました。 ポータルを活用した課題提出など多くの講義で対応する機能ですので、ぜひ使い方をマスターし、また分からなければ事後ではなく提出前に質問するなどして 今後の受講にも生かしてください。 発表課題につきましても初回ガイダンスで説明し、またTeams内でのアナウンスもしておりますので、講義の進め方（シラバス記載）と共に理解した上で、ぜひ主体的に学習をする様にお願いいたします。	154	74	48.1%
庄原	大学基礎セミナーⅡ Q2	五味 正志	授業の評価は概ね良好だったのではないかと思います。コメントしてくれた内容として、発表に対する他グループの評価のフィードバックは検討したいと思います。また、他学科・コースの学生との交流や広島県に対する理解の深まり、プレゼンテーションやレポート作成方法の習得など、これからの大学生生活に活かしてもらえれば嬉しいと思います。	151	58	38.4%
庄原	ICTリテラシーⅠ Q1(b)	菅 裕	<コメントをくれた学生へ> >先生やボランティア学生の方に気軽に質問できる環境が整っていたので、PCに不慣れな私でも安心して授業を受けることができました。また、基本的な事項から丁寧に教えてくださったので、PCを使用していて分からないことや疑問に思うことが発生したときに、人に聞くばかりではなく自分で調べて解決させる習慣もつけることができました。 授業を単に受けるだけでなく、自分で考えて解決法を見つけることができたのは、大変重要なことです。ICTの技術獲得には、まず「自分はこうしたい」と感じ、それを実現する手法を自ら調べていくことが最も効果的です。 <授業評価全体へのコメント> おおむね好意的な反応と捉えている。 受講者には、PC操作が得意な者とそうでない者がおり、講義の進度をどこに持っていくかは難しい問題であるが、初年度に比べて適切なスピードで進められたのではないと思う。今年度は、少し全体のスピードを速め、追加の発展課題を課すなど、少し工夫をこらした。発展課題をこなすかどうかは自由としたため、提出者が想定したより少なかったのは残念であった。	58	28	48.3%
庄原	ICTリテラシーⅠ Q1(c)	橋本 温	おおむね良好に進行していると感じた。演習型の授業であり、TA学生のサポートもあり質問もしやすい雰囲気であったと思われる。学生のこれまでの習得度がばらばらであり、高等学校で十分に学修してきた一部の学生にとっては簡単であったことも否めないが、本講義は専門教育等を受ける前に学生のICTに関するレベル統一を目指すものであることから、目的としては機能していたと考える。それを踏まえて、今年度より発展問題を取り入れている。	55	23	41.8%
庄原	ICTリテラシーⅠ Q1(a)	山本 幸弘	回答率が低いので何とも言えないが、適宜内容はアップデートしながら同様な授業スタイルで進めてゆきたい。	59	13	22.0%
庄原	英語総合Ⅰ Q1(A)	馬本 勉	英語総合ⅠAの授業では、学習管理システム(LMS)の一つであるmoodleを駆使し、映画の聞き取りやニュース記事の読解、自身で選び読んだ本を紹介するプレゼンテーションやパラグラフライティング等の諸活動を組み合わせて実施した。概ね満足度の高い授業を展開できたと考えているが、十分な授業外学修時間や、さらに学びたいという意欲につながっていない様子も見られた。興味関心を持って取り組んでいる学生を、さらに動機づけ、個人で学ぶ習慣へと結びつけるため、より丁寧な個別対応を心がけていきたい。	44	12	27.3%
庄原	英語総合Ⅰ Q1(B)	河村 和也	総合的な満足度を問う設問では、「強くそう思う」と「そう思う」を合わせて93%の回答を得ることができました。その他の問いに対しても総じて高評価を得たものと認識しています。次年度以降は、授業外学修の時間が増えるよう課題の内容や分量を検討していきたいと考えています。 自由回答では、授業の方法や内容に対し複数の好意的なコメントを得ることができました。基本的な方針は変えず、引き続きブラッシュアップを心がけていきたいと思います。1年次前期の科目ですので、要望を踏まえ、グループワークの際の座席指定等、次年度以降はより細やかな配慮を心がけていきます。なお、共通の目標を掲げていても授業の方法や内容は担当者によって異なるものであることを理解願えば幸いです。	35	32	91.4%

■担当教員コメント（全学共通教育科目） 令和7年度前期

キャンパス	科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
庄原	英語総合ⅠQ1(C)	笠本 晃代	・ 昨年度の結果を踏まえた授業改善点 例年、設問4が他の質問項目よりも低くなる傾向があるあるため、できる限りグループごとに意見を発信できる機会を作った。しかしながら、「強くそう思う」が50%に達していなかったこと、また 「そう思う」 と合わせても80%であったことから、これらのパーセンテージを上げられるように努力を続けていかなければならないと感じている。 ・ 履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 積極的に机間巡視を行い、受講者の理解度を把握するよう努めたつもりではあったが、より受講者に寄り添い、質問しやすい環境作りの工夫をしたいと考えている。 ・ アンケート結果から見た今後の課題 設問3、設問6、設問8の各質問項目において、「強くそう思う」 が50%以上になるように、受講者の興味・関心を最大限に引き出す授業展開を目指したい。	36	20	55.6%
庄原	英語総合ⅠQ1(D)	河村 和也	総合的な満足度を問う設問では、「強くそう思う」と「そう思う」を合わせて97%の回答を得ることができました。その他の問いに対しても総じて高評価を得たものと認識しています。次年度以降は、授業外学修の時間が増えるよう課題の内容や分量を検討していきたいと考えています。 自由回答では、授業の方法や内容に対し複数の好意的なコメントを得ることができました。基本的な方針は変えず、引き続きブラッシュアップを心がけていきたいと思います。なお、同一の授業名で共通の目標を掲げていても、授業の方法や内容、また試験の有無や実施方法などについては担当者によって異なるものであることを理解願えれば幸いです。	34	30	88.2%
庄原	英語総合Ⅰ前期集中(G)(2019以前英語Ⅰ読替)	河村 和也	本科目の受講者は1名であったが、残念ながら授業改善のためのアンケートの回答を得ることができなかった。 受講学生は積極的な学修姿勢を示しており、文字通りマンツーマンの学びを通じて得るものがあったことを期待している。	1	0	0.0%
庄原	英語総合ⅡQ2(A)	馬本 勉	英語総合ⅡAの授業では、学習管理システム(LMS)の一つであるmoodleを駆使し、映画の聞き取りやニュース記事の読解、自身で選び読んだ本を紹介するプレゼンテーションやパラグラフライティング等の諸活動を組み合わせて実施した。習得の度合いや教材選択などの具体的なコメントや集計結果から、概ね満足度の高い授業を展開できたと考えているが、十分な授業外学修時間や、さらに学びたいという意欲につながっていない様子も見られた。興味関心を持って取り組んでいる学生を、さらに動機づけ、個人で学ぶ習慣へと結びつけるため、より丁寧な個別対応を心がけていきたい。	44	38	86.4%
庄原	英語総合ⅡQ2(B)	河村 和也	総合的な満足度を問う設問では、「強くそう思う」と「そう思う」を合わせて100%の回答を得ることができました。その他の問いに対しても総じて高評価を得たものと認識しています。学生のみなさんの授業外学修を質・量ともに増やすことがわたしの授業の課題です。次年度以降も、課題の内容や分量を検討するなどし、みなさんの授業外での学びを促していきたいと考えています。 自由回答では、授業の方法や内容に対し複数の好意的なコメントを得ることができました。 授業の形態を指す古いことばに"chalk & talk" というものがあります。チョークではなく各種のツールを使用していますので、わたしの授業のスタイルを正確に言い当てるものではありませんが、能動的学修の機会を保証しながらも"talk"つまり話すことを授業の基本に置くという点では通じるものがあると思います。懇切な説明を通じ既習事項との適切な融合を企図している点が評価されたものと考え、たいへんありがたく思っています。 新たに英語の参考書を購入したとのコメントには、この授業がきっかけとなりより深い学びを得ようとしてくれた方がいらっしやったことを率直に喜んでいます。また、学生のみなさんを人間として尊重するという教職に就いて以来のわたしの基本的な姿勢を理解してくださったことにも感謝します。	35	28	80.0%
庄原	英語総合ⅡQ2(C)	笠本 晃代	・ 昨年度の結果を踏まえた授業改善点 例年、設問4が他の質問項目よりも低くなる傾向があるあるため、できる限りグループごとに意見を発信できる機会を作った。しかしながら、「強くそう思う」が50%に達していなかったこと、また 「そう思う」 と合わせても76%であったことから、これらのパーセンテージを上げられるように努力を続けていかなければならないと感じている。 ・ 履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 積極的に机間巡視を行い、受講者の理解度を把握するよう努めたつもりではあったが、より受講者に寄り添い、質問しやすい環境作りの工夫をしたいと考えている。 ・ アンケート結果から見た今後の課題 設問6、設問7、設問8、設問9の各質問項目において、「強くそう思う」 が50%以上になるように、受講者の興味・関心を最大限に引き出す授業展開を目指したい。 また、設問11で受講者から提案された教授法も検討していきたいと考えている。	36	25	69.4%

■担当教員コメント（全学共通教育科目） 令和7年度前期

キャンパス	科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
庄原	英語総合Ⅱ Q2(D)	河村 和也	総合的な満足度を問う設問では、「強くそう思う」と「そう思う」を合わせて96%の回答を得ることができました。その他の問いに対しても総じて高評価を得たものと認識しています。学生のみなさんの授業外学修を質・量ともに増やすことがわたしの授業の課題です。次年度以降も、課題の内容や分量を検討するなどし、みなさんの授業外での学びを促していきたいと考えています。自由回答では、授業の方法や内容に対し複数の好意的なコメントを得ることができました。授業をする者にとって「満足」や「楽しかった」ということばがどれほどうれしいものか、あらためて実感しています。オンデマンドでの授業を希望する意見に触れ、新型コロナウイルスの感染が拡大したときのことを思い出しました。2020年度の第1クォーターは完全オンデマンドの授業をつくったのですが、これを受けた学生のみなさんから《オンラインであってもクラスの人たちと繋がれないか》との要望が寄せられ、第2クォーターからはZoomを用いたリアルタイム接続の授業に切り替えたのです。ときは移ろうものだとしみじみ思うことです。なお、わたしの授業では、すべての教材や回答用フォームをTeamsにアップロードしていますので、欠席した場合にもこれらを用いてオンデマンド的な学修が可能です。	33	28	84.8%
庄原	英語総合Ⅱ 前期集中 (G)(2019以前英語Ⅱ読替)	河村 和也	本科目の履修登録者は6名いたものの、継続的な受講者は1名であった。残念ながら当該学生から授業改善のためのアンケートの回答を得ることはできなかったが、文字通りマンツーマンの学びを通じて得るものがあったことを期待している。	6	0	0.0%
庄原	英語表現Ⅲ Q1(A)	Clingwall Dion		31	3	9.7%
庄原	英語表現Ⅲ Q1(B)	Clingwall Dion		48	5	10.4%
庄原	英語表現Ⅲ Q1(C)	Clingwall Dion		23	1	4.3%
庄原	英語表現Ⅳ Q2(A)	Clingwall Dion		30	1	3.3%
庄原	英語表現Ⅳ Q2(B)	Clingwall Dion		39	2	5.1%
庄原	英語表現Ⅳ Q2(C)	Clingwall Dion		17	2	11.8%
庄原	中国語Ⅰ Q2(A)庄原C	徐 亜文	【昨年度の結果を踏まえた授業改善点】 昨年度の授業では、学生の多くが集中して真剣に取り組む姿が見られた。課題の内容や量、教材・教具も適切で、学習内容の定着につながり、多くの学生が授業に満足していた。一方で、いくつかの課題も明らかになった。第一に、授業外学修時間が週1時間未満にとどまる学生が一定数存在した。第二に、授業内容について「さらに学びたい」と感じない学生が一部見られた。今後の改善策としては、授業外学修の成果をより細かく確認できる方法を導入するとともに、授業内容をより楽しく興味を引くものにする工夫を行いたい。【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】 中国語学習において、日本人学習者にとって発音は最も大きな課題の一つである。特にピンインの習得は学習の基礎となるため、授業では指導方法を工夫した。具体的には、発音を一つひとつ丁寧に説明し、日常でよく使われる単語を例に練習を行った。また、学習したピンインを用いた聴き取り問題を授業内で実施し、理解度を確認した。その結果、期末試験の聴き取り問題の成績が全体的に向上し、学生の習得度の改善が確認された。一方で課題は、今後いかに工夫して学生一人一人の発音をよりの確に把握し、指導につなげていくかという点である。【アンケート結果から見た今後の課題】 多様な教材・教具を活用し、より魅力的な授業を実現することが求められる。また、授業外学修の実施状況を適切に把握できるよう、課題の内容や量を工夫する必要がある。さらに発音学習については、従来の単調な方法に加え、多様な学習手法を取り入れることで、より高い学習効果を目指したい。	49	6	12.2%

■担当教員コメント（全学共通教育科目） 令和7年度前期

キャンパス	科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
庄原	中国語ⅠQ2(B)庄原C	徐 亜文	【昨年度の結果を踏まえた授業改善点】 昨年度の授業では、多くの学生が集中して真剣に取り組む姿が見られた。課題の内容や分量も適切で、学習内容の定着につながり、教材・教具や学習支援も有効に機能していたため、学生の満足度も高かった。一方で、受講生の人数が少なかったため、アンケート回答数が限られた。今後は、授業内容をさらに魅力的に工夫し、より多くの受講生を引きつけることが課題である。 【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】 中国語学習において、日本人学生にとって発音は最も難しい課題の一つである。特にピンインの習得は基礎となるため、授業では工夫を重ねた。具体的には、各発音を丁寧に説明するとともに、日常で頻繁に用いられる語彙を例に練習を重ね、さらに習得したピンインを活用した聴解問題を授業内で実施し、理解度を確認した。その結果、期末試験における聴解問題の成績が全体的に大きく向上し、学習効果が確認された。一方で、ピンイン学習は単調になりやすく、学生が飽きやすいという課題も明らかになった。今後は、多様な学習手法を取り入れることで、学生が主体的かつ継続的に取り組める環境を整え、学習効果の一層の向上を図りたい。 【アンケート結果から見た今後の課題】 教材・教具の活用方法、課題の内容や分量、能動的な学習機会の提供などを工夫し、より多くの学生の興味を喚起できる授業を目指す。また、発音学習については、従来の方法に加え多様なアプローチを取り入れることで、学習効果をさらに高めていきたい。	6	1	16.7%
庄原	韓国語ⅠQ2(A)庄原C	鞠 承姫	本授業では、知識の習得だけでなく、実際に声に出して使う練習を重視した。本文を覚え、ペアで発表する活動を繰り返すことで、自然な表現力を養うことを目的とした。文化的背景を理解するために映画も活用した。アンケート結果からは、能動的な学びであったとの評価や、継続的に学習したいとの意向が強く示された。	69	16	23.2%
庄原	韓国語ⅠQ2(B)庄原C	鞠 承姫	授業は本文暗記、会話練習、ペア発表を中心に構成し、学生が積極的に参加できる環境を整えた。文化理解を深めるため、映画を取り入れ、学んだ語彙を実際の会話の中で確認する機会を設けた。アンケートでは、授業全般の満足度が高く、さらに学びたいという意欲が示された。	36	7	19.4%
庄原	ドイツ語ⅠQ2	大草 輝政	全設問で肯定評価100%である（回答率25%）。 「大福帳」と呼ばれるシャトル・ペーパーを用い履修者の反応を毎授業後確かめているが、そこで軌道修正を迫られるようなコメントは無かった。このたびは自由記述が一件あり全文を引用しておく：「ペアとの活動やドイツの暮らしも感じられるようなビデオの視聴、ドイツ語の歌詞の読み取りを通して、学んでいることを実践的に使う経験ができて良かった。また、語学学習の地道な日々の学習の大切さを実感できた点も、これからの自身の語学学習に活かせることなので有意義だった」。これには背筋の伸びる思いがした。コメント後半は、一言語をというよりも語学の「学び方」を学んだというニュアンスに見える。さらに、「語学学習」に活かせる、という表現の選定も「英語学習」にとどまらない広がりを感じさせる。まるで初習外国語の意義（汎用性）について代弁してくれているかのようである。今後も学生の真のニーズに向き合っていくたい。	12	3	25.0%
庄原	ドイツ語Ⅱ夏季集中	大草 輝政	全設問で肯定評価100%である（回答率66.7%）。 自由記述が一件あり全文を引用しておく：「今年は開講期間が通常よりも短いなかでしたが、授業の構成や進行もメリハリがあり集中して授業を受けることができました」。特に問題は無さそうである。今年度は科目担当者の都合によってドイツ語Ⅱを後期でなく8月中旬に集中講義（1日3コマ×5日間）として開講したため履修者数が少ない（例年はドイツ語Ⅰ履修者の基本5割超がドイツ語Ⅱを履修）。それはある程度致し方ないとして、ただそのような例外ケースにおいては、ドイツ語Ⅰ（第2Q開講）の感触でドイツ語Ⅱを履修を決めたいという学生ために、8月初旬頃に、集中講義受講用の履修登録期間をもう一度設けてもよかったのではないかと（目下、前期履修登録のチャンスは、第1Q開始時と、微調整用として第2Q開始時、の2回のみ）。教学的な設計の点で、夏季集中講義のドイツ語Ⅱ履修断念に至った学生もいたとみられ、今後、より柔軟なカリキュラム構築に向け模索する際の参考にしてもらえたらとも思う。	3	2	66.7%
庄原	アカデミック日本語ⅠQ2(留学生のみ)	中石 ゆうこ	メールの書き方などを学ぶクラスであるため、生成AIの普及によって対応が必要になった。昨年度同様、メールの書き方に関する教科書を用いたが、作文をメール形式だけではなくチャット形式などに置き換えて授業で作文などを実施した。設問7（この授業の教材（教科書・資料など）・教具（アプリ・ファイルなど）は適切だ。）に着目したところ、おおむね好評であり、現在の教科書やその扱い方に受講生が満足していることがうかがえる。	4	3	75.0%

■担当教員コメント（全学共通教育科目） 令和7年度前期

キャンパス	科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
庄原	スポーツ実技ⅠQ1(A) (地域資源開発学科)	楠堀 誠司	単一競技に設定しているので、それ以外の競技にも挑戦したい学生は、スポーツ実技Ⅱに置いてた種目採用しています、そちらも合わせて考えてもらいたいと期待しています。大学では、90分授業になることの意味は、ひとつには深く学ぶということがあります。競技種目もを多種も苦にすれば、一見楽しさを提供することにはなりますが、学修・まなびの深さという視点を失ってしまいます。この点を考慮し、スポーツ実技Ⅰでは単一競技に設定しています。実技時間を長くすることは簡単なようで、実際には多くの学生がコロナ後に体力が落ち、90分×2回の授業制度に於いては実技時間を適切に抑えないと学修・まなびにつながらないことを懸念しています。振り返りの時間を確保していながらも実際には翌週に来入学生が多く、やはり多くの学生が「やればいい体育、できればいい体育」から離れられていない現状が続いています。これらを解消するための学修・まなびの時間であることをまた学生には訴え続けていくつもりです。というのも、学生達が社会に出てから実際に運動に自分自身携わるときに、何を行うべきか、何を整備すべきかなどが分からず、結局取り組まないことになっていきます。このような懸念事項を払拭するためには、スポーツ実技Ⅰの中で、学修・まなびということを身につけてほしいと考えています。	44	38	86.4%
庄原	スポーツ実技ⅠQ1(B) (生命環境学科)	楠堀 誠司	ヒトの移動・行動に関する多様性に関しては、授業内でチャレンジシステムを導入して環境整備を進めましたが、これはもう一週早く導入すべきかもしれません。ただし教員側の立場からすれば、固定化した文脈の中から主体的な行動を学生自身ができる様に環境整備はしていますが、結局教員の指示待ちであることが分かり、これは残念な結果といえます。固定的な文脈を解消するために、初回時授業ではアイスブレイカーを導入し、学生間の交流促進を図りましたが、これを活かしていないのは学生自身であると思えます。アイスブレイカーを活かす、これは学生がどの程度意識できたのだろうか。と残念な結果です。	35	19	54.3%
庄原	スポーツ実技ⅠQ1◎ (2019以前体育実技Ⅰ読替)	楠堀 誠司	単一競技に設定しているので、それ以外の競技にも挑戦したい学生は、スポーツ実技Ⅱに置いてた種目採用しています、そちらも合わせて考えてもらいたいと期待しています。大学では、90分授業になることの意味は、ひとつには深く学ぶということがあります。競技種目もを多種も苦にすれば、一見楽しさを提供することにはなりますが、学修・まなびの深さという視点を失ってしまいます。この点を考慮し、スポーツ実技Ⅰでは単一競技に設定しています。スライドのアップロードは改善します。	38	29	76.3%
庄原	スポーツ実技ⅠQ1(D) (2019以前体育実技Ⅰ読替)	楠堀 誠司	単一競技に設定しているので、それ以外の競技にも挑戦したい学生は、スポーツ実技Ⅱに置いてた種目採用しています、そちらも合わせて考えてもらいたいと期待しています。大学では、90分授業になることの意味は、ひとつには深く学ぶということがあります。競技種目もを多種も苦にすれば、一見楽しさを提供することにはなりますが、学修・まなびの深さという視点を失ってしまいます。この点を考慮し、スポーツ実技Ⅰでは単一競技に設定しています。スライドのアップロードは改善します。	34	22	64.7%
庄原	哲学Q1(庄原C)	大草 輝政	設問2（肯定62%, 否定38%）および設問4（肯定73%, 否定28%）以外、全設問で肯定評価80%以上である。独自に中間アンケート的なものも一度実施した（自由記述、回答任意）が、寄せられたコメントは概して好感触であり特に軌道修正を迫られるものは無かった。このたびの授業評価の自由記述（2件）も好意的なものである（「とても刺激のある科目」「哲学が間違いなく自己実現や人生の幸福の追求に役立つと確信」）。3キャンパスで400名を超える履修者である。「授業改善」アンケート実施以前に、大学が提供するカリキュラム「設計」に問題はないか。	126	26	20.6%
庄原	文学Q2(庄原C)	福田 涼	本科目は、広島（対面）、三原・庄原（オンライン）の3キャンパスで同時開講されている。そのこと自体が、たとえば「対面講義を希望する」（庄原）、「オンライン授業においても、板書をリアルタイムで見れるようにしてほしい」（三原）といった要望に直結していることは否定できない。一方、①発言する際の心理的安全性を担保する、②遠隔授業にあっても可能な限り双方向性を担保する、という目的で導入しているアプリ「パパバコメント」については、概ね好評が得られているようであり、「チャットではなくパパバコメントと呼ばれる匿名のコメントで授業を行ってくれたので、記名のコメントよりも自分が思ったままのコメントがしやすかった」（広島）、「パパバコメントのおかげで、オンラインで受けていたけど、能動的に授業に取り組めた」（庄原）といった回答が見受けられた。今年度に関しては、TA等の授業支援については依頼しなかったが、とくに「板書をリアルタイムで見れるようにしてほしい」といった学生からの要望に応えるべく（現状は、定期的にホワイトボードを撮影し、Teams「会議」のチャットで送信している）、教学課や関係の部署とも相談の上、導入可能な機器や方法について精査してゆきたい。	16	5	31.3%

■担当教員コメント（全学共通教育科目） 令和7年度前期

キャンパス	科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
庄原	社会学Q1(庄原C)	澤田 千恵	本授業のアンケート回答率は16.7%と低かったものの、おおむね肯定的な評価が得られた。設問の中では、「授業時間外に取り組むべき課題が示されていない」と感じた学生が25%存在したが、その他の項目に関して大きな否定的意見は見られなかった。自由記述は寄せられていない。この結果から、授業内容や進行自体には特段の問題は見受けられないが、授業外での学習課題の明確な提示についてはさらなる工夫が必要であると考えられる。今後は、授業時間外に取り組むべき課題や学習の方向性をより具体的に示し、学生の主体的な学びを促進するよう改善を図りたい。	24	4	16.7%
庄原	歴史学Q2	岡本 弘道	複数キャンパスからの配信で授業を行ったため、ネット回線のトラブルに対する不満が多かった。設備に関する問題なので今後の改善に期待したい。	11	1	9.1%
庄原	倫理学Q2(庄原C)	大草 輝政	設問4（肯定66%, 否定33%）以外、全設問で肯定評価80%以上である。問1、2、3、5、6、7、9で肯定100%。独自に中間アンケート的なものも一度実施した（自由記述、回答任意）が、寄せられたコメントは概して好感触であり特に軌道修正を迫られるものは無かった。このたびの授業評価の自由記述（1件）も好意的なものである（「どこからが人であるかの課題が印象的だった。漫画なのでわかりやすかった」）。3キャンパスで300名を超える履修者である。「授業改善」アンケート実施以前に、カリキュラム「設計」に問題はないだろうか。	65	6	9.2%
庄原	経済学Q1(庄原C)	山根 智沙子	この度の授業評価アンケートでは、全体的に高い満足度を得ることができました。多くの項目で肯定的な評価寄せられており、学生が授業に前向きに取り組んでいる様子がうかがえます。一方で、「課題の提示」や「能動的学修機会」については、否定的な回答が一定数見られました。また、授業外学修時間も比較的小さい傾向があり、学生の自発的な学修を促す工夫の必要性を感じています。今後は、より主体的な学びができる授業設計に努めてまいります。	20	14	70.0%
庄原	科学史Q1(庄原C)	村田 和賀代		79	13	16.5%
庄原	生命倫理Q2(庄原C)	吉川 ひろみ	1昨年度の結果を踏まえた授業改善点：各回のテーマを明確にし、教科書の該当箇所を明示した。2履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点：毎回の授業後にフォームズで、学生からのフィードバックを得て、次の授業で共有したり、コメントを述べた。3アンケート結果から見た今後の課題：10名中3名しか回答が得られず残念だ。自由記載「この授業で一番印象深かったのは「安楽死」についてです。今までは、安楽死は人生に希望を見いだせない人が行うもの、という程度の認識だったのですが、今回の授業を受けて、人を殺害するという線引きの曖昧さや陥りやすい思考の罠などに気づくことができました。身近なようでどこか遠い概念であった安楽死を深く理解することができたので、とても価値のある授業であったと思います。」、「命の重さについて、考える機会が得られた。良い学びになったと思う。」から、授業の目標が達された学生がいることがわかった。今後も双方向的授業を展開していきたい。	10	3	30.0%
庄原	文化人類学Q2	上水流 久彦	授業ごとに感想を出してもらい、学生の疑問や意見に回答するようにし、学生のニーズにそうよう努力した。ただ、アンケート回答率が低く、来年度以降、積極的な回答を促したい。	8	2	25.0%
庄原	日本国憲法Q2（庄原C）	岡田 高嘉	庄原C 【昨年度の結果を踏まえた改善点】 昨年度の学生のコメントからは、オンライン授業時は声が聞き取りにくいというコメントが散見された。今年度は、教学課やTAと綿密に連携しながら、オンライン授業のトラブルを回避するよう、事前準備をしっかりとこなした。お陰で目立ったトラブルは無かった。また、記述式の課題（ミニレポート）について、翌週にできるだけ丁寧なフィードバックを心がけた。代表的な意見や興味深い意見などをいくつかピックアップし、全体で共有した。 【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】 毎週、小テスト（択一式）を実施し、学生の理解度を確認した。また論述式の課題も毎週課して、学生に憲法問題について深く考える機会を作った。小テストや論述課題については、翌週にフィードバックを行うこととした。 【期末アンケート結果から見た今後の課題】 アンケート回答率は52.5%であった。15回目の授業の最後に10分程回答時間を確保したが、あまり上がらなかった。次年度は呼びかけをしっかりと行いたい。総合的な満足度（設問10）について肯定的評価は、90%である。つまり、1割は否定的なので、これをできるだけ0に近づけたい。「さらに学びたい」（設問8）については、否定的評価が24%であった。学生の専攻（専門分野）と距離があるのでやむを得ない部分はあるが、改善の努力は続けたい。自由記述は多くなかったが、小テストの振り返り（解説）が教室の画面（スクリーン）上で見づらかったとの指摘があった。たしかにFormsの画面をスクリーンに投影すると、文字が小さかったのは事実である。次年度は見やすくなるよう改善を図りたい。	40	21	52.5%

■担当教員コメント（全学共通教育科目） 令和7年度前期

キャンパス	科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
庄原	いのちと科学Q1 (2019以前生命科学読替)	五味 正志	授業への評価は概ね良好だったのではないかと思います。「身近に起きていることについて深く学んで、多くの気づきがありました。」というコメントがあり、これからも興味を持って学習を進めていってもらえれば嬉しいです。	109	33	30.3%
庄原	環境と科学Q2(庄原C) (2019以前環境科学概論読替)	内藤 佳奈子	毎回の授業内における質疑応答時間、授業後の課題提出時に意見・感想を任意で記載する欄を設け、全体（3キャンパス、受講生400名）の理解度と授業の方向性を確認しながら進める工夫を施した。アンケートの結果から、真摯に取り組める授業スタイルで環境についての科学的な知識を身に付けられるように進めることができたのではないかと見える。毎回、事前に授業資料を提示し、授業内容についての課題を明示して、理解度を高める授業スタイルで実施した結果、真剣に取り組んだ（設問1：肯定92%）、取り組むべき課題が示されている（設問3：肯定93%）、教材・教具は適切であり、課題の内容・量は適切で、必要な支援を得て、目標とする力が身についた（設問5～7、9：肯定100%）との回答を得られたものだと思う。また、さらに学びたくなる（設問8：肯定92%）、総合的に満足している（設問10：肯定93%）との結果および設問11の3件の回答から、本科目の授業内容に興味を持ていただき、今後の学習意欲も高めることができたのではないかとと思われる。しかし、アンケート結果（設問4：肯定69%、否定30%）からも読み取れるように、授業体制上、能動的学修機会を取り入れるのは難しいですが、この点に関しては担当教員間で事前に要検討し、授業時間内にもアクティブラーニングの要素を組み入れながら、自主的に学習できるように授業内容の改善と更なる工夫を凝らした授業進行に努めたい。	111	13	11.7%
庄原	ひろしま理解Q2(庄原C)	和田 崇	昨年度から授業担当順を一部変更した。また、広島キャンパスのみ対面、庄原・三原キャンパスがオンラインでは授業実施が困難で、学習効果もキャンパスにより異なると思われたため、3キャンパスともオンラインで授業を実施した。さらに、期末試験は設問数を昨年度より増やすことにより、幅広く学習内容の理解度を測定できるようにした。授業時に学生に質問して回答してもらうようにしたり、授業後に感想を提出してもらうことにより、学生の理解度等を測るよう努めた。昨年度と比べて特に庄原・三原キャンパスの履修人数が大幅に減少したが、依然として150名を超える履修があり、しかも3キャンパス同時開講なので、グループワークなどは物理的に不可能であった。また、期末試験対策が授業外学習になると考えたが、教員から具体的な課題提示などがないと授業外学習の機会がなかったと捉える学生もあり、与えられないと授業外学習が自ら計画的に実施できない状況がみてとれた。なお、本授業は本年度が最終年度であり、来年度以降は開講されない。	34	7	20.6%
庄原	地域情報発信論Q2 前期集中夏季	広谷 大助	まず、回答率が他と比べて低い点であるが、説明の時間が多く時間を取っていないことが挙げられる。しかし、後述するループリックの時間は取っていることから同様に取ることは可能だと考え、来年度から実施する。本授業は3キャンパスの学生がサテライトキャンパスひろしまに集まって行う夏季集中講義であり、本年度も高校生が数名加わった。本年度は当初考えていた通りに対面3日・オンライン（リアルタイム）1日の日程となった。昨年度起こったトラブルを踏まえ、学生にはこれまで以上に丁寧な説明を心がけた。その結果、本年広島市が行っている被爆者の講話を初めて行ったにも関わらず大きなトラブルは1つもなく終了した。毎日の授業の終わりには振り返りシートを提出させており、かつ最終日にはグループ振り返りシートも提出させている。加えて、ループリック評価も初日と最終日にさせている。その結果、ほとんどの項目で肯定的回答が100%であった。更にループリックで学生の成長が見て取れた。コメントにあった3日目の対面実施であるが、最終レポートで対面が良かったかオンラインが良かったかを書かせており、集計を行った上で来年度の形態を決定する。よって、学生の感想を基によりよい形態にすることが今後の課題となる。	10	3	30.0%
庄原	地域教養ゼミナールA(エリア型)Q1(樹木の保全と活用から地域)	荻田 信二郎	アンケートに回答いただきましてありがとうございます。他キャンパスで頂いたコメントも参考に授業改善に努めます。フィールドワークにつきまして、各回のオンライン講義の中でコメント（録画済み）また専用Teams内に掲示しております。また、事前調査計画提出の工夫を加えておりますので 指示された内容を確認していただく様に リマインド、メンションの仕方などを工夫してみます。	33	4	12.1%
庄原	地域教養ゼミナールA(エリア型)前期集中(都市近郊)	荻田 信二郎	別途実施した総括Forms回答を参考に、さらなる工夫改善に努める。	8	0	0.0%
庄原	地域教養ゼミナールB(テーマ型)Q2(少子化と子育て支援)	田中 聡子	アンケート回答者数 1人 / 29人、回答率 3.4%である。回答者はすべての設問に対して100%肯定的な評価である。ハイブリッドであるが、積極的にオンラインでもグループワークに参加し、発表もできた。ただし、事前のインフォメーションでグループワークが中心で、プレゼンテーション資料の作成、報告、ディスカッションに参加することをシラバスに示してある。次年度は履修時に、そのことを理解して履修がさらにできるような工夫をした。	29	1	3.4%

■担当教員コメント（全学共通教育科目） 令和7年度前期

キャンパス	科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
庄原	地域教養ゼミナールB(テーマ型)Q2(子ども虐待とヤングケアラーを考える)	松宮 透高	3キャンパスを対象とした科目であり、時間的物理的な制約からオンデマンド開講を主体とした。最後に、学習内容を各自パワーポイントにまとめてプレゼンテーションとディスカッションを行うことで、自己学習と参加機会を組み込んだ。また、多くの当事者や支援者をゲストスピーカーとして招いた。概ね満足度が高いことから、こうした特殊な開講形態であってもリアリティのある講義となるよう工夫したことが一定の満足につながったものと思われる。一方、自己学習を求める要素が大きくなかったためか、授業外学修の時間が少ない回答者も少なかった。すべてを教え込むのではなく、調べて共有するといったプログラムへの工夫を重ねたい。また、より多様なゲストを招いて、より刺激的な学習につながるよう努めたい。極めて低い回答率については、今後回答を促す工夫も必要と考えている。	51	3	5.9%
庄原	地域教養ゼミナールB(テーマ型)Q2(英語で伝える広島)	馬本 勉	地域教養ゼミナールB「英語で伝える広島」は、今年度より教育ネットワーク中国を通じた「広域単位互換科目」となり、本学3キャンパスから7名、県内外の他大学学生4名、計11名の履修者を迎えた。サテライトキャンパスひろしまでの4日間の集中講義では、平和公園近接地であることのメリットを活かし、原爆ドームや広島平和記念資料館でのフィールドワークを交えて実施した。今年度、広島平和文化センターより「広島・長崎講座」に認定されたことにより、資料館の入館料免除や教材提供等の支援を受け、より被曝の実相に迫った英語表現の演習を実施することができた。多様な学生の参加を得たことが、頻繁に実施したグループワークやプレゼンテーションの活性化を生み、履修者の多くは授業の狙いに叶う成長を遂げてくれたものと思われる。これらが授業の満足度につながったものと考えているが、配付した資料を十分に活かせなかった活動もあるため、次年度の授業については、より綿密な計画を立てて臨みたい。	3	1	33.3%
庄原	キャリアビジョン（デベロップメント）Q1(庄原C)	原田 淳	いずれの設問に対する回答も「強くそう思う」、「そう思う」が大半であった。【昨年度の結果を踏まえた授業改善点】学生の理解を促すため、前提となる情報や知識を絞ってねいに解説を行うように変更し また、毎回、商品企画のどの段階に取り組んでいるのか示したうえで、グループワークにより少しずつ課題を進めるようにした。【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】受講カードに意見、感想、質問を記すよう求めて、質問に対しては翌週の講義冒頭で回答した。また、グループワークの際には教員が各グループを巡回して質問への対応や助言を行うようにした。【アンケート結果から見た今後の課題】グループでの活動を前向きにとらえているコメントが複数見られた。今後もグループワークの際の質問対応や支援・助言をきめ細かく行いたい。	48	32	66.7%
庄原	キャリアビジョン（デベロップメント）前期集中(3年生以上対象)	原田 淳	回答率が低いと、参考にしかないが、いずれの設問に対する回答も「強くそう思う」、「そう思う」が大半であった。【昨年度の結果を踏まえた授業改善点】毎回の授業において、ブレイクアウトルームを用いてテーマに関するグループワークを行うことにより、理解をうながすようにした。また、毎回の授業を録画して公開し、レポート作成の際に見直せるようにした。【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】毎回の授業終了時にFormsで出席登録する際に質問、意見を提出するようにした。質問は、翌日（次回）の授業冒頭で回答した。【アンケート結果から見た今後の課題】自由回答には、「期待したとりの内容や技法を学ぶことができた」というコメントが見られた。シラバスに各回の具体的な内容をわかりやすく記載するようにしたい。	59	3	5.1%
庄原	ライフデザインQ2	岡田 高嘉	【昨年度の結果を踏まえた改善点】 本科目は昨年度から、各々のキャンパスの受講生を教室に集め、3キャンパスの教室をオンラインでつなぐ「ハイフレックス型」で実施している。昨年度のアンケート結果から、教員のいないキャンパスで一部の学生が私語を続けるなど授業に参加していない様子が伺えたため、今年度は教室環境を静穏に保つことやグループワークを適正に行うことを目指し、座席指定を行った。【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】 3キャンパス全体で約500名の受講生がおり、教員不在でTAのみが対応しているキャンパスもあるため、毎回（毎週）小テストを実施し、受講生の解答状況の確認を通じて授業態度の把握に努めた。また、小テストの結果は、学生の理解度や到達度を把握する手段として活用し、必要に応じて補足解説を加えたり、次回以降の授業内容を柔軟に調整したりするなど、授業改善に役立てた。【期末アンケート結果から見た今後の課題】 今年度は初めて座席指定を導入した。その結果、昨年度よりも学修環境の管理をより適切に行うことができたと思う。特に座席指定によりグループワークへの移行がスムーズになり、授業の効率性が向上した。一方で、大講義室（階段教室）でのグループワーク実施の難しさや、座席指定方法の改善を求める意見も散見された。これらの課題を踏まえ、来年度に向けてグループ分けの方法や座席指定の運用について再検討したい。さらに、オンライン授業時は声が聞き取りにくいという指摘も依然として見られた。来年度は教学課やTAとの連携をより一層強化し、授業開始時の音声チェックなどの準備を徹底したい。	153	24	15.7%
庄原	ボランティアQ1(2019以前ボランティア活動読替)	手島 洋	アンケートの回答者は少なかったが、回答者の満足度は高かった。本科目は、ボランティアの学び・実践・省察を授業の中で一体的に学修するプログラムとしているため、能動的学習の満足感が高かったものと思われる。今後も、引き続き受講生のニーズを把握しながら授業改善を行いたいと思う。	31	1	3.2%

■担当教員コメント（全学共通教育科目） 令和7年度前期

キャンパス	科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
庄原	リーダー論前期集中夏季	原田 淳	3キャンパスの学生が参加する集中講義で行動型学習の科目としても採択されている。授業評価アンケートの回答率が低いため、参考にしかないが、いずれの設問に対する回答も「強くそう思う」、「そう思う」であった。【昨年度の結果を踏まえた授業改善点】4日間の集中講義のうち、3日間はオンライン授業で、コミュニケーションとディベートの基礎について開設し、演習で理解を深めるようにした。初めてディベートを行う学生が多いため、最初の演習では、ステップごとに教員が介入・解説しながら進めるようにした。4日目は、サテライトキャンパスにおいて対面でのディベートを行った。初めてディベートに取り組んだ学生も演習の回数を重ねて、4日目には自信をもって発言する様子が見られた。【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】毎回の授業終了時にFormsで出席登録する際に質問、意見を提出するようにした。質問は、翌日（次回）の授業冒頭で回答した。【アンケート結果から見た今後の課題】受講前後のルーブリックの比較をしたところ、差分の大きな項目は、傾聴的態度、傾聴技法、クリティカルリーディングの3つで、いずれも1.3以上上げている。差分の小さな項目に関しては、解説や演習について見直しを行いたい。	23	1	4.3%
庄原	英語入門演習前期集中(庄原C)	笠本 晃代	・昨年度の結果を踏まえた授業改善点 例年、設問4が他の質問項目よりも低くなる傾向があるあるため、できる限りTeamsのチャット機能を利用して意見交換ができる機会を作った。しかしながら、「強くそう思う」が50%に達していなかったこと、また「そう思う」と合わせても80%であったことから、これらのパーセンテージを上げられるように努力を続けていかなければならないと感じている。・履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 解説した文保事項について疑問点があればすぐに対応できるように、終始質問のための時間を確保した。すると、ほとんどの受講者が毎回積極的に質問をし、キャンパスを越えて受講者同士でも疑問点を解決していく場面が多々見られた。より受講者に寄り添い、さらに質問しやすい環境作りの工夫をしたいと考えている。・アンケート結果から見た今後の課題 設問4、設問6、設問8の各質問項目において、「強くそう思う」が50%以上になるように、受講者の興味・関心を最大限に引き出す授業展開を目指したい。 ※広島キャンパスとの合同の授業のため、共通のコメントを作成した。	29	2	6.9%
庄原	数学入門演習前期集中(庄原C)	岩田 貴樹	(アンケート回答がなかったため、コメントなし)	1	0	0.0%
庄原	生物入門演習Q1・Q2(庄原C)	金岡 雅浩	本講義は、大学で生物学関連の講義を学ぶことにおいて不安のある学生を対象に、演習形式でおこなうものである。具体的には、私が担当している生物学Ⅰ(4002004_生物学ⅠQ1:生命環境学科)の講義資料を提示して予習してもらい(生命環境学科の学生については生物学Ⅰの講義を聞いて)、その内容に関する質問を事前に提出し、本講義の時間中に解説する、という形式でおこなっている。本年度は庄原キャンパスからの履修登録は数名いたが、途中から出席者がいなくなった。出席者がいなくなった理由としては、木曜日の6限という開講日時が大きく影響していると思われる(昨年度以前もこの科目は履修登録者が少なく、最後まで出席する学生も非常に少なかった)。本講義は来年度からは廃止されるが、生物学Ⅰの講義を担当していると学生によって理解度に大きな差があると感じられるので、生物学Ⅰを理解度別のクラス編成にするなどの対応がとれると良いと思う。	12	2	16.7%
庄原	物理入門演習Q1・Q2(庄原C)	米村 正一郎		35	6	17.1%
庄原	化学入門演習Q1・Q2(庄原C)	小関 良卓	①昨年度の結果を踏まえた授業改善点 今年度から講義を担当しているため該当なし ②履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 講義中の質問の受け付け、講義終了後のFormsにより質問を受け付けた。スライドを用いた講義スタイルよりも黒板に手書きでの講義スタイルの方が履修学生にとって理解しやすいことが分かり、途中から黒板・手書きのスタイルに変更した。 ③アンケート結果から見た今後の課題 講義内容や講義スタイルについてポジティブなコメントが寄せられた。一方、履修登録者10名のうち8名が履修放棄した。履修放棄した理由は不明であるが、どのような講義を求めているのか初回の講義で情報収集することが必要であると考える。	10	2	20.0%

■担当教員コメント（全学共通教育科目） 令和7年度前期

キャンパス	科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
三原	大学基礎セミナーⅠ（Q1）	山中 道代	【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】全額共通で実施している内容についてはWebアンケートを実施し、学生の質問や感想を求めている。現状、必要な改善点はないと思われる。【期末アンケート結果から見た今後の改善点】多くの学生の満足度が高い結果であった。取り組むべき課題が明確であったにも関わらず、時間外学習時間が2時間未満や全くしていない学生が半数近くあったことから、課題の内容や提示の仕方などについては再考の余地があるかもしれない。一方で、教員間で課題の量や授業の進め方が異なる点に一部不満が表出されていた。これについては、キャンパス間での取り決めに基づき進めていたことや、教員個々の理念や方針が異なることで生じる可能性もあり、個別に関わることは難しいと考える。これらは、複数の教員に関わる科目で生じやすい問題であり、できるだけ対応に相違が出ないよう、最低限の約束事を決めるなどできるだけの対応を考えていきたい。	195	177	90.8%
三原	大学基礎セミナーⅡ（Q2）	佐藤 勇太	アンケートへのご回答ありがとうございます。今回、毎週の授業における振り返りシートや第1・5週目の講演後のミニレポート等の課題を実施して履修生の皆様が自身の学修を振り返ることができるような機会を提供させていただきました。また同時に教員もこれらをはじめとする提出物を通して履修生の皆様がより深い学びへと到達できるように必要に応じて助言や支援を実施してきました。結果として、授業全体での活動を通して概ね肯定的な意見をもらうことができ、皆様が様々な学びを得ることができたようで何よりでした。本科目は主体的なグループ演習が中心であることから内容の自由度が高いことが特徴の一つです。このため次年度も、その都度どのような助言や支援が必要かを検討しつつ、履修生の皆様がグループ演習をより主体的に取り組めるように教員間での情報交換および協力のもと、授業内容を吟味していきたいと考えています。	197	98	49.7%
三原	ICTリテラシーⅠ（Q1） （看A）	麻生 浩司	【①昨年度の結果を踏まえた授業改善点】昨年度も学生間で入学前のパソコンやソフトウェアの習熟度が異なっていたため、今年度も全体の授業進行のペースを確認しながら実施した。【②履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】昨年度の意見を参考にして、教員や学生間で相談しやすいように、授業内で習得と解決ができるように、教員からの声掛けやペアワークの時間・回数を増やした。授業内では、学生も教員の教授活動に主体的に応じており、今年度の「不安なことも少なく、楽しんで学習することが出来ました」「パソコン超初心者から初心者レベルが少し上がったように思えます」などの意見は、意識した取り組みを反映していると考え。【③アンケート結果から見た今後の課題】学生からの意見では、「これから繋げていこうと思った」「ICTリテラシーⅡも頑張りたい」などがあがっており、今後の学習をより効果的かつ実践的なものとするため、単なる知識や技術の習得に留まらず、具体的な成果物の作成を通じて今後の学修内容に関連したスキルを習得できることを目指していきたいと思う。	30	30	100.0%
三原	ICTリテラシーⅠ（Q1） （看B・コース選択）	麻生 浩司	【①昨年度の結果を踏まえた授業改善点】昨年度も学生間で入学前のパソコンやソフトウェアの習熟度が異なっていたため、今年度も全体の授業進行のペースを確認しながら実施した。【②履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】昨年度の意見を参考にして、教員や学生間で相談しやすいように、授業内で習得と解決ができるように、教員からの声掛けやペアワークの時間・回数を増やした。授業内では、学生も教員の教授活動に主体的に応じており、今年度の「楽しく参加できる授業で意欲が湧いた」「不安なことも少なく、楽しんで学習することが出来ました」「パソコン超初心者から初心者レベルが少し上がったように思えます」などの意見は、意識した取り組みを反映していると考え。【③アンケート結果から見た今後の課題】学生からの意見では、「これから繋げていこうと思った」「ICTリテラシーⅡも頑張りたい」などがあがっており、今後の学習をより効果的かつ実践的なものとするため、単なる知識や技術の習得に留まらず、具体的な成果物の作成を通じて今後の学修内容に関連したスキルを習得できることを目指していきたいと思う。	32	30	93.8%
三原	ICTリテラシーⅠ（Q1） （理学）	飯田 忠行	・昨年度の結果を踏まえた授業改善点 本講義では、対面講義を主として、講義後演習を行った。講義中は巡回し、質問できる環境を設けた。また、課題を与え、進捗の確認を行うためレポート提出を行わせた。レポート拝受時は、必ず返事を返したコメントを付した。・履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 レポートや課題を提出させ、学生ひとりひとりの考えをくみ取り、一人ずつコメントを行った。なお、課題に対して、採点基準を講義中に説明し、その採点項目が出来ているか出来ていないかについて、コメントを付けて返却するようにした。自由記載欄の感想には、「先生が話を盛り上げてくれるので楽しく授業受けることができた」など、対面で質問の時間を設けた良さが見受けられた。・期末アンケート結果から見た今後の課題 講義前半は個人でスキルを身につけ、後半はグループワークを行った。個人では毎週課題を出した。その結果、課題の量が多かったのか、課題の内容量に関して、6%がそう思わないと回答した。本学では教員に対して、学生が授業時間外の学修時間を行うよう指示が出されている。課題を出すことによって授業評価の「そう思わない」という回答が増えるのは否めない。しかしながら、コメント欄には「ExcelやWord、PowerPointの使い方を理解することができた」など、スキルの取得は順調であったように感じる。	33	33	100.0%

■担当教員コメント（全学共通教育科目） 令和7年度前期

キャンパス	科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
三原	ICTリテラシーⅠ（Q1） （作業）	飯田 忠行	・昨年度の結果を踏まえた授業改善点 本講義では、対面講義を主として、講義後演習を行った。講義中は巡回し、質問できる環境を設けた。また、課題を与え、進捗の確認を行うためレポート提出を行わせた。レポート拝受時は、必ず返事を返したコメントを付した。 ・履修者の反応を知るために学期中に実施した方法 ・その結果を踏まえた授業改善点 レポートや課題を提出させ、学生ひとりひとりの考えをくみ取り、一人ずつコメントを行った。なお、課題に対して、採点基準を講義中に説明し、その採点項目が出来ているか出来ていないかについて、コメントを付して返却するようにした。自由記載欄の感想には、「授業を受けるごとにできることが増えていくことがうれしかった」など、対面で質問の時間を設け、コメントを返却することで学ぶ喜びを感じたようである。 ・期末アンケート結果から見た今後の課題 講義前半は個人でスキルを身につけ、後半はグループワークを行った。個人では毎週課題を出した。その結果、課題の量が多かったのか、課題の内容量に関して、10%がそう思わないと回答し、コメント欄には「課題が多すぎて精神的にしんどかった。しかし、必要な課題であると感じ、期限も適切だった。」とあった。本学では教員に対して、学生が授業時間外の学修時間を行うよう指示が出されている。課題を出すことによって授業評価の「そう思わない」という回答が増えるのは否めない。しかしながら、コメント欄には「授業を通してコースみんなで協力して学ぶ機会が多く、難しくても楽しく学ぶことができた」など、スキルの取得とアクティブラーニングは順調であったように感じる。	30	30	100.0%
三原	ICTリテラシーⅠ（Q1） （コミュ）	飯田 忠行	・昨年度の結果を踏まえた授業改善点 本講義では、対面講義を主として、講義後演習を行った。講義中は巡回し、質問できる環境を設けた。また、課題を与え、進捗の確認を行うためレポート提出を行わせた。レポート拝受時は、必ず返事を返したコメントを付した。 ・履修者の反応を知るために学期中に実施した方法 ・その結果を踏まえた授業改善点 レポートや課題を提出させ、学生ひとりひとりの考えをくみ取り、一人ずつコメントを行った。なお、課題に対して、採点基準を講義中に説明し、その採点項目が出来ているか出来ていないかについて、コメントを付して返却するようにした。自由記載欄の感想には、「パソコンの使い方についてより詳しく学ぶことができた」など、対面で質問の時間を設けた良さが見受けられた。 ・期末アンケート結果から見た今後の課題 講義前半は個人でスキルを身につけ、後半はグループワークを行った。個人では毎週課題を出した。その結果、課題の量が多かったようで、課題の内容・量は適切であるが32%がそう思わないと回答した。コメント欄には「課題だけ少し多い気がしました」があり、課題の多さが反省点である。しかしながら、本学では教員に対して、学生が授業時間外の学修時間を行うよう指示が出されている。課題を出すことによって授業評価の「そう思わない」という回答が増えるのは否めない。	29	29	100.0%
三原	ICTリテラシーⅠ（Q1） （人福）	伊藤 泰三	さらなるアクティブラーニングの強化を目指していきたい	40	14	35.0%
三原	英語総合Ⅰ（Q1）（看A）	本岡 直子	（１）昨年度の結果を踏まえた授業改善点としては、より授業時間外に取り組むべきことについてわかりやすい指導を心がけた点が挙げられる。また、能動的学修機会も増やすようにしてみたが、どちらもアンケート結果に肯定的に表れている。（２）履修者の反応を知るために学期中に実施したことは、毎回の小テストで理解度を確認しながら進めていったこと、またその小テストについての解説を丁寧に行ったことである。（３）自由記述のアンケート内容を見ても、わかりやすい授業だったというコメントをいくつかいただいたので、今後の課題としては、これからもわかりやすい授業を心がけたいと思う。	30	30	100.0%
三原	英語総合Ⅰ（Q1） （看B・コース選択）	本岡 直子	（１）昨年度の結果を踏まえた授業改善点としては、より授業時間外に取り組むべきことについてわかりやすい指導を心がけた点が挙げられる。また、能動的学修機会も増やすようにしてみたが、どちらもアンケート結果に肯定的に表れている。（２）履修者の反応を知るために学期中に実施したことは、毎回「本日の課題」を課すことで、どれくらい授業内容を理解しているか、確認していた。（３）この授業においては自発的に発言するということを重視し、教師から指名せずに発言するという形態をとっているが、それに対して、指名してもよいのではないかという意見もある一方、今回のこのクラスにおいては、「自ら発言しようとする力がついた」「少しできるようになった」という肯定的なコメントを見ることができ、とてもうれしかった。また、「本日の課題」という授業終了前に、その日にやった授業をしっかりと聞いていてかつ自分で考える課題を課していたが、この課題をすぐ肯定的にとらえたコメントももらうことができ、この課題を毎回考える苦労が報われた気がしてすごくうれしかった。	32	31	96.9%

■担当教員コメント（全学共通教育科目） 令和7年度前期

キャンパス	科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
三原	英語総合Ⅰ（Q1）（理学）	高島 裕臣	【昨年度の結果を踏まえた授業改善点】 受講者が学ぼうとしている専門分野と関連のある内容の教材として、リハビリテーションを学ぶ学生向けの英語教科書を採用した。能動的学修機会を補うため、教材の中の会話文（療法士と患者の英会話）を題材に毎回ベアを組んでロールプレイを行い、教科書各章に取り上げられた疾患に関係のある専門用語について調べる問題（教科書に出題されている）への取り組みを奨励した。3クラスで同様の授業を展開した。 【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】 授業時間中に限らず質問は随時Teamsチャットメッセージで受け付け、授業中は受講者の反応をできるだけ探るようにした。個別に出た質問も、全体でシェアすべきことに関してはTeams投稿欄でシェアするようにした。 【アンケート結果から見た今後の課題】 このクラスでは設問3（授業時間外に取り組むべき課題が示されている）以外はすべて6%から37%減少した。昨年度は前年比で評価が向上していたので大きなショックを受けた。設問2（週当たり勉強時間）は30分～1時間が50%と多数を占めた（1時間以上は31%）。正確には週当たりでなく1コマ当たりだと思われるが、1時間以上となることを期待していたので、やや少ないと感じた。授業時間中に調査への回答を奨励したと記憶するが、回答率が前年度から18.1%減少した。 授業の方法はあまり変化していないはずなので、受講者と良好な関係を構築できなかったか、あるいは、受講者の期待に応えられなかったのではないだろうか。 受講者が学ぼうとしている専門分野と関連のある内容の教材を用いて関心を高めようとしたが、うまくいかなかったので、今後の課題として、受講者と良好な関係を構築する方法を模索したい。	33	26	78.8%
三原	英語総合Ⅰ（Q1）（作業）	高島 裕臣	【昨年度の結果を踏まえた授業改善点】 受講者が学ぼうとしている専門分野と関連のある内容の教材として、リハビリテーションを学ぶ学生向けの英語教科書を採用した。能動的学修機会を補うため、教材の中の会話文（療法士と患者の英会話）を題材に毎回ベアを組んでロールプレイを行い、教科書各章に取り上げられた疾患に関係のある専門用語について調べる問題（教科書に出題されている）への取り組みを奨励した。3クラスで同様の授業を展開した。 【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】 授業時間中に限らず質問は随時Teamsチャットメッセージで受け付け、授業中は受講者の反応をできるだけ探るようにした。個別に出た質問も、全体でシェアすべきことに関してはTeams投稿欄でシェアするようにした。 【アンケート結果から見た今後の課題】 このクラスでは設問1（授業に集中し真剣に取り組んだ）、設問3（授業時間外に取り組むべき課題が示されている）、設問7（教材の適切性）、設問8（さらに学びたい）以外は8%から25%減少した。昨年度は前年比で評価が向上していたので大きなショックを受けた。設問2（週当たり勉強時間）は30分～1時間が46%と多数を占めた（1時間以上は38%）。正確には週当たりでなく1コマ当たりだと思われるが、1時間以上となることを期待していたので、やや少ないと感じた。授業時間中に調査への回答を奨励したと記憶するが、回答率が前年度から13.3%減少した。 授業の方法はあまり変化していないはずなので、受講者と良好な関係を構築できなかったか、あるいは、受講者の期待に応えられなかったのではないだろうか。 受講者が学ぼうとしている専門分野と関連のある内容の教材を用いて関心を高めようとしたが、うまくいかなかったので、今後の課題として、受講者と良好な関係を構築する方法を模索したい。	30	24	80.0%
三原	英語総合Ⅰ（Q1）（コミュ）	高島 裕臣	【昨年度の結果を踏まえた授業改善点】 受講者が学ぼうとしている専門分野と関連のある内容の教材として、リハビリテーションを学ぶ学生向けの英語教科書を採用した。能動的学修機会を補うため、教材の中の会話文（療法士と患者の英会話）を題材に毎回ベアを組んでロールプレイを行い、教科書各章に取り上げられた疾患に関係のある専門用語について調べる問題（教科書に出題されている）への取り組みを奨励した。3クラスで同様の授業を展開した。 【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】 授業時間中に限らず質問は随時Teamsチャットメッセージで受け付け、授業中は受講者の反応をできるだけ探るようにした。個別に出た質問も、全体でシェアすべきことに関してはTeams投稿欄でシェアするようにした。 【アンケート結果から見た今後の課題】 このクラスでは設問1（授業に集中し真剣に取り組んだ）、設問3（授業時間外に取り組むべき課題が示されている）、設問5（課題の内容・量）、設問6（目標とする力が身につく）、設問7（教材の適切性）、設問8（さらに学びたい）の好意群の割合が81%から100%で、前年比では3%から11%増加した。設問4（能動的学修機会）、設問9（教員から支援を得ている）、設問10（総合的満足度）は90%から96%で、前年比では1%から6%減少した。ほぼ昨年と同様の結果と言える。設問2（週当たり勉強時間）は1時間以上が52%と多数を占めた（30分～1時間は29%）。正確には週当たりでなく1コマ当たりだと思われるが、1時間以上となることを期待していたので、半数以上の受講者がそれを実現できてよかった。授業時間中に調査への回答を奨励したと記憶するが、回答率が前年度から14.7%減少した。 比較的良好な結果と解釈したが、同じ教材を用いて同様の授業を展開した他のクラスと異なる様相を呈した原因は不明である。受講者との関係が良好だったと感じる。そこで、今後の課題として、受講者と良好な関係を構築する方法を模索したい。	29	21	72.4%

■担当教員コメント（全学共通教育科目） 令和7年度前期

キャンパス	科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
三原	英語総合Ⅰ（Q1）（人福）	本岡 直子	（１）昨年度の結果を踏まえた授業改善点としては、より授業時間外に取り組むべきことについてわかりやすい指導を心がけた点があるが、そう思わないという回答もわずかであるが見られた。オンライン課題の登録などが少しわかりにくかったのかもしれない。（２）履修者の反応を知るために学期中に実施したことは、毎回「本日の課題」を課すことで、どれくらい授業内容を理解しているか、確認していた。（３）今後の課題としては、このクラスでは、この授業の授業外学修にあてた時間が少ない受講者数の割合が他のクラスと比べて多かったことについて、授業外学修をやる気にさせる工夫をするということを検討していきたい。	41	38	92.7%
三原	英語総合Ⅱ（Q2） （看A・コース選択）	高島 裕臣	【昨年度の結果を踏まえた授業改善点】 受講者が学ぼうとしている専門分野と関連のある内容の教材として、看護学生向けの英語教科書を採用した。実践的な教科書で、臨床現場での外国人患者と看護師の英会話がアニメーションになっている。能動的学修機会を補うため、外国人患者と看護師の英会話を題材に毎回ペアを組んでロールプレイを行った。また、その会話の内容と場面についての気づきをできるだけ詳細に述べるという問題を予習課題の中で出題し、より深い学習を行うよう奨励した。3クラスで同様の授業を展開した。【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】 授業時間中に限らず質問は随時Teamsチャットメッセージで受け付け、授業中は受講者の反応をできるだけ探るようにした。個別に出た質問も、全体でシェアすべきことに関してはTeams投稿欄でシェアするようにした。【アンケート結果から見た今後の課題】 このクラスでは全設問の好意群の割合が昨年度以上だった。特に、設問6（目標とする力が身につく）と設問9（教員から支援を得ている）で7%、設問4（能動的学修機会）で10%、設問8（さらに学びたくなる）で15%昨年度から増加した。例年好意群が比較的小さい設問4と8で増加が顕著だった点に注目したい。設問2（週当たり勉強時間）は30分～1時間が43%と多数を占め、30分未満は39%、1時間以上は18%であった。正確には週当たりでなく1コマ当たりと思われるが、1時間以上となることを期待していたので、やや少ないと感じた。授業時間中に回答を促したところ回答率が40.0%から87.5%に増加した。受講者のコメントから、受講者が学ぼうとしている専門分野と関連のある内容の教材を用いたことが効果的だったことがうかがえた。また、定着を図るため、単語や英文の音読（リピートやシャドウイング）を奨励し授業中もできるだけ英語を声に出すようにしたことを評価するコメントも見られた。今後によりよい授業を目指して努力を重ねたい。	32	28	87.5%
三原	英語総合Ⅱ（Q2）（看B）	高島 裕臣	【昨年度の結果を踏まえた授業改善点】 受講者が学ぼうとしている専門分野と関連のある内容の教材として、看護学生向けの英語教科書を採用した。実践的な教科書で、臨床現場での外国人患者と看護師の英会話がアニメーションになっている。能動的学修機会を補うため、外国人患者と看護師の英会話を題材に毎回ペアを組んでロールプレイを行った。また、その会話の内容と場面についての気づきをできるだけ詳細に述べるという問題を予習課題の中で出題し、より深い学習を行うよう奨励した。3クラスで同様の授業を展開した。【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】 授業時間中に限らず質問は随時Teamsチャットメッセージで受け付け、授業中は受講者の反応をできるだけ探るようにした。個別に出た質問も、全体でシェアすべきことに関してはTeams投稿欄でシェアするようにした。【アンケート結果から見た今後の課題】 このクラスの好意群の割合は、設問5（課題の内容・量）で18%、設問8（さらに学びたくなる）で12%、設問10（総合的満足度）で15%前年より増加した。設問3（授業時間外に取り組むべき課題が示されている）と設問7は増減がなく、設問1（授業に集中し真剣に取り組んだ）と設問9（教員から支援を得ている）で4%、設問4（能動的学修機会）で7%、設問6（目標とする力が身につく）で3%減少した。例年好意群が比較的小さい設問8と10で増加が顕著だった点に注目したい。設問2（週当たり勉強時間）は30分～1時間が50%と多数を占めた。30分未満は38%、1時間以上は12%であった。正確には週当たりでなく1コマ当たりだと思われるが、1時間以上となることを期待していたので、やや少ないと感じた。授業時間中に回答を促したところ回答率が48.5%から77.4%に増加した。受講者のコメントから、受講者が学ぼうとしている専門分野と関連のある内容の教材を用いたことが効果的だったことがうかがえた。また、定着を図るため、単語や英文の音読（リピートやシャドウイング）を奨励し授業中もできるだけ英語を声に出すようにしたことを評価するコメントも見られた。今後によりよい授業を目指して努力を重ねたい。	31	24	77.4%
三原	英語総合Ⅱ（Q2）（理学）	本岡 直子	（１）昨年度の結果を踏まえた授業改善点としては、より授業時間外に取り組むべきことについてわかりやすい指導を心がけた点が挙げられるが、思ったほどそうでなかったようである。特に課題として指定していたオンライン課題が少しわかりにくかったのかもしれない。そのためか、授業外学修にあてた時間が少ないという結果となっていた。（２）履修者の反応を知るために学期中に実施したことは、毎回「本日の課題」を課すことで、どれくらい授業内容を理解しているか、確認していた。（３）今後の課題としては、授業外学修にあてる時間を増やすこと、およびどのようなことをすればよいかという取り組みべき課題をわかりやすく示すことが挙げられる。	40	35	87.5%

■担当教員コメント（全学共通教育科目） 令和7年度前期

キャンパス	科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
三原	英語総合Ⅱ（Q2）（作業）	本岡 直子	（１）昨年度の結果を踏まえた授業改善点としては、より授業時間外に取り組むべきことについてわかりやすい指導を心がけた点があるが、これについては肯定的な回答である。また、能動的学修機会を増やすようにしてみたが、こちらについてはもう少し改善点があるようである。（２）履修者の反応を知るために学期中に実施したことは、毎回「本日の課題」を課すことで、どれくらい授業内容を理解しているか、確認していた。（３）この授業においては自発的に発言するという点を重視し、教師から指名せずに発言するという形態をとっており、毎回どうやったら発表してくれるか苦労している点であるが、「発表を頑張った」というアンケート回答も見られ、少しでもこの授業でその姿勢が身についた受講生がいることをうれしく思う。今後の課題としては、自発的に発表する雰囲気をもどくようにしたら作れるかということを検討していきたい。	31	26	83.9%
三原	英語総合Ⅱ（Q2）（コミュ）	本岡 直子	他のクラスと同様に授業時間の一部を使ってアンケート回答を求めたが、このクラスはアンケートの回答率が非常に悪かった。回答時間にほかのことをしていたのだろうか？それと関連するのか、真剣に取り組んでいたかという項目に否定的に回答した受講生がこのクラスには見られたことがとても残念だ。（１）昨年度の結果を踏まえた授業改善点としては、より授業時間外に取り組むべきことについてわかりやすい指導を心がけた点があるが、否定的回答がみられよくわかっていなかった受講生がいたということで、（２）履修者の反応を知るために学期中に実施したことは、毎回「本日の課題」を課すことで、どれくらい授業内容を理解しているか、確認していた。（３）このクラスにおいてはすべての項目に対して否定的な回答が一部見られ、他のクラスと同じように行っていたにもかかわらず、わかりにくかった点があったのだろうと推察され、授業中にもっと受講生の様子に気を配るべきだったと思われる。一番活発に授業に参加していたように思えたが、逆にその雰囲気にはいれなかった受講生がいたことが考えられ、表面的な活動状況だけで判断しないように、次年度は気を付けたい。	29	22	75.9%
三原	英語総合Ⅱ（Q2）（人福）	高島 裕臣	【昨年度の結果を踏まえた授業改善点】 医療系英語テキスト（看護学生向けの英語教科書）を採用した。実践的な教科書で、臨床現場での外国人患者と看護師の英会話がアニメーションになっている。能動的学修機会を補うため、教材の中の会話文（看護師と患者の英会話）を題材に毎回ペアを組んでロールプレイを行った。また、予習課題の中に、その会話の内容と場面についての気づきをできるだけ詳細に述べるという問題を出題し、より深い学習を行うよう奨励した。【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】 授業時間中に限らず質問は随時Teamsチャットメッセージで受け付け、授業中は受講者の反応をできるだけ探るようにした。個別に出た質問も、全体でシェアすべきことに関してはTeams投稿欄でシェアするようにした。3クラスで同様の授業を展開した。【アンケート結果から見た今後の課題】 このクラスの好意群の割合は、設問3（授業時間外に取り組むべき課題が示されている）、設問4（能動的学修機会）、設問5（課題の内容・量）、設問10（総合的満足度）では前年比1%から4%の増加、設問1（授業に集中し真剣に取り組んだ）・設問9（教員から支援を得ている）は増減がなく、設問7（教材の適切性）で3%、設問6（目標とする力が身につく）と設問8（さらに学びたくなる）で10%の減少であった。設問6と8の減少が顕著だったのは、このクラスの受講者が学ぼうとしている専門分野と異なる内容の教科書を採用したためかも知れない。設問2（週当たり勉強時間）では30分未満が50%と多数を占め、30分～1時間及び1時間以上はそれぞれ25%であった。正確には週当たりでなく1コマ当たりだと思われるが、1時間以上となることを期待していたので、少ないと感じた。授業時間中に回答を促したところ回答率が54.5%から63.6%に増加した。受講者のコメントには、看護英語に触れることで学びにつながったというものもあった。また、定着を図るため、単語や英文の音読（リピートやシャドウイング）を奨励し授業中もできるだけ英語を声に出すようにしたことを評価するコメントも見られた。今後もよりよい授業を目指して努力を重ねたい。	44	28	63.6%
三原	中国語Ⅰ（Q2）三原C（理学・コミュ・人福・コース選択）	徐 亜文	【昨年度の結果を踏まえた授業改善点】 昨年度の授業では、多くの学生が集中して真剣に取り組む姿が見られた。課題の内容や量、教材・教具、能動的学修の機会も適切で、学習内容の定着につながり、多くの学生が授業に満足していた。一方で、授業外学修時間が週1時間未満にとどまる学生が一定数存在した。これは、授業外学修の成果を確認する仕組みが十分でなかったことが一因と考えられる。【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】 中国語学習において、日本人学習者にとって発音は最大の課題の一つである。特にピンインの習得は学習の基礎となるため、授業では指導方法を工夫した。具体的には、発音を一つひとつ丁寧に説明し、日常でよく用いられる単語を例に練習を行った。また、学習したピンインを用いた聴き取り問題を授業内で実施し、理解度を確認した。その結果、期末試験における聴き取り問題の成績が全体的に向上し、学生の習得度の改善が確認された。今後の課題としては、学生一人ひとりの発音をより的確に把握し、個別の指導につなげていく方法をさらに工夫する必要がある。【アンケート結果から見た今後の課題】 今後は、多様な教材・教具を活用し、授業をより魅力的なものとするのが求められる。また、授業外学修の実施状況を適切に把握できるよう、課題の内容や量を一層工夫する必要がある。さらに発音学習については、従来の方法に加えて多様な学習手法を取り入れ、より高い学習効果を目指していきたい。	29	6	20.7%

■担当教員コメント（全学共通教育科目） 令和7年度前期

キャンパス	科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
三原	中国語Ⅰ（Q2）三原C （看護・作業）	徐 亜文	【昨年度の結果を踏まえた授業改善点】 昨年度の授業では、多くの学生が集中して真剣に取り組む姿が見られた。課題の内容や分量も適切で、学習内容の定着につながり、教材・教具や学習支援も有効に機能していたため、学生の満足度も高かった。一方で、受講生の人数が少なかったため、アンケート回答数が限られた。今後は、授業内容をさらに魅力的に工夫し、より多くの受講生を引きつけることが課題である。 【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】 中国語学習において、日本人学生にとって発音は最も難しい課題の一つである。特にピンインの習得は基礎となるため、授業では工夫を重ねた。具体的には、各発音を丁寧に説明するとともに、日常で頻繁に用いられる語彙を例に練習を重ね、さらに習得したピンインを活用した聴解問題を授業内で実施し、理解度を確認した。その結果、期末試験における聴解問題の成績が全体的に大きく向上し、学習効果が確認された。一方で、ピンイン学習は単調になりやすく、学生が飽きやすいという課題も明らかになった。今後は、多様な学習手法を取り入れることで、学生が主体的かつ継続的に取り組める環境を整え、学習効果の一層の向上を図りたい。 【アンケート結果から見た今後の課題】 教材・教具の活用方法、課題の内容や分量、能動的な学習機会の提供などを工夫し、より多くの学生の興味を喚起できる授業を目指す。また、発音学習については、従来の方法に加え多様なアプローチを取り入れることで、学習効果をさらに高めていきたい。	13	2	15.4%
三原	韓国語Ⅰ（Q2）三原C （理学・人福）	鞠 承姫	授業は本文暗記と会話発表を軸に進め、学生が主体的に参加できるよう設計した。宿題は課していないが、映画やドラマを通じて韓国語や文化に触れることを推奨している。アンケートでは「楽しく学べた」との意見が大半を占め、さらに学びたいという積極的な学習意欲が示された。	48	21	43.8%
三原	ドイツ語Ⅰ（Q2）三原C	小田 智敏		14	2	14.3%
三原	アカデミック日本語Ⅰ留学生のみ履修可（Q1）三原C	中石 ゆうこ	受講者なし	0	0	—
三原	スポーツ実技Ⅰ（Q1） （作業）	弘中 満雄		30	19	63.3%
三原	スポーツ実技Ⅰ（Q1） （人福）	村上 妃斗美	運動を実施することだけでなく、他学生とのコミュニケーションやリーダーシップ培われるよう教示し授業を行った。 授業の目標、内容理解については概ね達成できたと考えられる。 また、授業準備については、取り組む学生が少なかったため、今後授業を実施する場合は工夫していきたい。 入学後すぐに交友関係を築くのが難しいところではあるが、この授業をきっかけとしてもらえたことは良かった。 体の健康だけでなく、心の健康にもつながったように思われる。	40	16	40.0%
三原	スポーツ実技Ⅰ（Q1） （看A）	村上 妃斗美	積極的に参加する学生が多く、こちらの説明についてもより理解するため質問したり自ら行動する学生が多かった。 アンケート結果より、授業準備、予習については、毎時間提示していたが、なかなか進んで取り組んでもらうまでには至っていないようであった。 今後は、運動することが主となる授業であるため、授業の前半、終盤の時間を活用し意識づけできるようにしていきたいと考える。	30	16	53.3%
三原	スポーツ実技Ⅰ（Q1） （コミュ・コース選択）	武藤 亮佑		31	22	71.0%
三原	スポーツ実技Ⅰ（Q1） （理学）	弘中 満雄		33	20	60.6%
三原	哲学（Q1）三原C	大草 輝政	設問4（肯定77%, 否定22%）および設問4（肯定53%, 否定46%）以外、全設問で肯定評価80%以上である。独自に中間アンケート的なものも一度実施した（自由記述、回答任意）が、寄せられたコメントは概して好感触であり特に軌道修正を迫られるものは無かった。このたびの授業評価の自由記述（16件）も、ほぼ好意的なものが並んでいる（「哲学の講義を通して最も衝撃だったのは、メノンを読む前と読み終わった後で嘘のように自分の考えが変わっていたことです」「私のこれからの人生に活きる授業でした。履修できてよかったと思います」「かなり身になっているように思い、いつもの講義を楽しみにしていた」等）。3キャンパスで400名を超える履修者、100km離れた各キャンパスをオンデマンドで結ぶという、一人二役、三役を迫られる環境であり、「授業改善」と謳われても、不器用な私にできることはこのあたりが限界かとも思う。まずは、6年前に退職された教員の補充による援護を切望する。	166	80	48.2%

■担当教員コメント（全学共通教育科目） 令和7年度前期

キャンパス	科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
三原	文学（Q2）三原C	福田 涼	本科目は、広島（対面）、三原・庄原（オンライン）の3キャンパスで同時開講されている。そのこと自体が、たとえば「対面講義を希望する」（庄原）、「オンライン授業においても、板書をリアルタイムで見れるようにしてほしい」（三原）といった要望に直結していることは否定できない。一方、①発言する際の心理的安全性を担保する、②遠隔授業にあっても可能な限り双方向性を担保する、という目的で導入しているアプリ「パパバコメント」については、概ね好評が得られているようであり、「チャットではなくパパバコメントと呼ばれる匿名のコメントで授業を行ってくれたので、記名のコメントよりも自分が思ったままのコメントがしやすかった」（広島）、「パパバコメントのおかげで、オンラインで受けていたけど、能動的に授業に取り組めた」（庄原）といった回答が見受けられた。今年度に関しては、TA等の授業支援については依頼しなかったが、とくに「板書をリアルタイムで見れるようにしてほしい」といった学生からの要望に応えるべく（現状は、定期的にホワイトボードを撮影し、Teams「会議」のチャットで送信している）、教学課や関係の部署とも相談の上、導入可能な機器や方法について精査してゆきたい。	21	7	33.3%
三原	社会学（Q1）三原C	澤田 千恵	授業のアンケート回答率は62.1%であり、おおむね肯定的な評価が得られた。真剣に取り組んでいなかった学生は2%にとどまり、授業時間外に取り組むべき課題が示されていると感じていない学生は17%であった。また、目標とする力が身につくと思わない学生が2%、授業内容に関してさらに学びたいと思わない学生が9%、総合的に満足していない学生は2%であった。自由記述では、「具体例がわかりやすかった」「グループワーク活動が印象的で、社会学の知識だけでなくコミュニケーション能力も身についた」「教科書とスライドの文章が同じが多かったため、重要な部分を簡潔にまとめてほしい」「社会学を初めて学び、最終的には理解できて良かった」「グループディスカッションを通じて、動的に学ぶ力がついた」などの意見が寄せられた。総じて、グループ学習や具体例の提示が学生の理解を深め、学習意欲やコミュニケーション能力の向上に寄与したことが評価されている。一方で、教材の工夫や課題提示の明確化といった改善点も指摘されている。今後は、教材の要点整理や課題の提示方法を工夫し、より多くの学生が積極的に学べる環境づくりを目指す必要がある。	87	54	62.1%
三原	歴史学（Q2）三原C	岡本 弘道	複数キャンパスからの配信で授業を行ったため、ネット回線のトラブルに対する不満が多かった。設備に関する問題なので今後の改善に期待したい。	5	3	60.0%
三原	倫理学（Q2）三原C	大草 輝政	設問4（肯定49%、否定51%）および設問4（肯定75%、否定26%）以外、全設問で肯定評価80%以上である。問1、7、10で肯定100%。独自に中間アンケート的なものも一度実施した（自由記述、回答任意）が、寄せられたコメントは概して好感触であり特に軌道修正を迫られるものは無かった。このたびの授業評価の自由記述（2件）も、好意的なものと言える（「他の授業の課題も考慮された適切な課題の量・内容だったと感じる」等）。3キャンパスで300名を超える履修者、100km離れた各キャンパスをオンデマンドで結ぶという、一人二役、三役を迫られる環境であり、「授業改善」と謳われても、不器用な私にできることはこのあたりが限界かとも思う。まずは、6年前に退職された教員の補充による援護を切望する。	123	39	31.7%
三原	経済学（Q1）三原C	山根 智沙子	このたびの授業評価アンケートでは、全体として高い満足度をいただきました。特に、「授業に集中し、真剣に取り組んでいる」「教材・教具の適切さ」「目標とする力が身につく」「学修活動に対する支援」などの項目において、全回答者が肯定的な評価が寄せられ、学生が本授業に前向きに取り組んでいる様子がうかがえます。一方で、「課題の提示の明確さ」「能動的学修機会の提供」に関しては、否定的な回答も一部見られ、今後の授業運営における改善点として受け止めております。また、自由記述では「資料の量が多い」「PDF資料が見づらい」といった具体的な意見も出されており、これらの指摘を踏まえ、次年度以降は、より効果的な学修環境の提供に努めてまいります。	23	16	69.6%
三原	科学史（Q1）三原C	村田 和賀代		48	21	43.8%

■担当教員コメント（全学共通教育科目） 令和7年度前期

キャンパス	科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
三原	生命倫理（Q2）三原C	吉川 ひろみ	1昨年度の結果を踏まえた授業改善点：各回のテーマを明確にし、教科書の該当箇所を明示した。 2履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点：毎回の授業後にフォームズで、学生からのフィードバックを得て、次の授業で共有したり、コメントを述べた。 3アンケート結果から見た今後の課題：28名中19名が回答した。自由記載「教科書の必要性をあんまり感じなかった」、「テストがあるのかないのか決まるのが遅すぎる」という点は、今後改善したい。「安楽死や動物実験など色々な問題について知識を深めると同時に自分とは異なる立場の意見を知ることができて本当によかった。授業を受ける中で自分の未熟さを恥づかしく思ったり現状に苛立ったりと他の授業ではなかなか感じられないような思いになった。視野を広げるきっかけになったと思う。」、「1つの物事について深く考え、議論していく上で多面的に考える力がついたので良かったです。」、「身近な問題について議論してみると、自分にやない考えや、はっと気づかされる場面が多くあって、とても興味深い授業でした。」、「生命倫理は考えたくない事が多かったけど、この授業に出ないと知らなかったことや気づかなかったことがたくさんあった。」というコメントから授業の目標が達された学生がいることがわかった。今後も双方向的授業を展開していきたい。	28	19	67.9%
三原	文化人類学（Q2）三原C	上水流 久彦	感想を毎回出すようにし、学生の質問や意見などにリプライを行い、学生のニーズに寄り添うことは行った。時間外の学習として、教科書の事前の読み込みを指示しているが、時間外の学習がないと回答した学生もあり、今後、教科書の予習を徹底させたい。	8	5	62.5%
三原	日本国憲法（Q2）三原C	岡田 高嘉	【昨年度の結果を踏まえた改善点】 昨年度の学生のコメントからは、オンライン授業時は声が聞き取りにくいというコメントが散見された。今年度は、教学課やTAと綿密に連携しながら、オンライン授業のトラブルを回避するよう、事前準備をしっかりとこなした。お陰で目立ったトラブルは無かった。また、記述式の課題（ミニレポート）について、翌週にできるだけ丁寧なフィードバックを心がけた。代表的な意見や興味深い意見などをいくつかピックアップし、全体で共有した。 【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】 毎週、小テスト（択一式）を実施し、学生の理解度を確認した。また論述式の課題も毎週課して、学生に憲法問題について深く考える機会を作った。小テストや論述課題については、翌週にフィードバックを行うこととした。 【期末アンケート結果から見た今後の課題】 アンケート回答率は85.5%であった。総合的な満足度（設問10）について肯定的評価は、91%であり、1割弱が否定的である。否定的評価はできるだけ0に近づけるよう努力したい。「さらに学びたいくなる」（設問8）については、否定的評価が23%であった。看護学コースでは本科目は必修という位置づけであるものの、学生の専攻（専門分野）とはやはり距離があると感じられるのでやむを得ない部分はあるが、改善の努力は続けたい。自由記述では「履修したのは必修だったからという理由でしたが人生で知っておくべきことたとえば政治のことだったりかつて起きた大きな憲法上の問題だったりを知ることができたので有意義な時間になった」とのコメントがあり、大変励みになった。教科書がないため勉強しにくかったというコメントがある一方で、授業資料（スライド）が詳しく分かりやすかったとのコメントがあったので、悩ましいと感じた。さしあたり高価な教科書を指定するよりも、よりいっそう授業資料を充実させるよう努めたい。「同じことを何度も言っている」との指摘については、自分自身多少の自覚はあるが、大事なことやきっちり理解してほしいことは、何度も言う必要はあると感じている。	62	53	85.5%
三原	いのちと科学（Q1）三原C	加藤 洋司		77	37	48.1%
三原	環境と科学（Q2）三原C	内藤 佳奈子	毎回の授業内における質疑応答時間、授業後の課題提出時に意見・感想を任意で記載する欄を設け、全体（3キャンパス、受講生400名）の理解度と授業の方向性を確認しながら進める工夫を施した。アンケートの結果から、真摯に取り組める授業スタイルで環境についての科学的な知識を身に付けられるように進めることができたのではないかと見える。毎回、事前に授業資料を提示し、授業内容についての課題を明示して、理解度を高める授業スタイルで実施した結果、真剣に取り組んだ（設問1：肯定94%）、取り組むべき課題が示されている（設問3：肯定87%）、課題の内容・量は適切である（設問5：肯定100%）、目標とする力が身につく（設問6：肯定97%）、教材・教具は適切である（設問7：肯定92%）、必要な支援を得ている（設問9：肯定97%）、との回答を得られたものと思われる。また、さらに学びたい（設問8：肯定87%）、総合的に満足している（設問10：肯定99%）との結果より、専門分野外の学生さんにも本科目の授業内容に興味を持っていただき、今後の学習意欲も高めることができたのではないかと見える。しかし、アンケート結果（設問4：肯定58%、否定43%）からも読み取れるように、授業体制上、能動的学修機会を取り入れるのは難しいが、この点に関しては担当教員間で事前に要検討し、授業時間内にもアクティブラーニングの要素を組み入れながら、自主的に学習できるように授業内容の改善と更なる工夫を凝らした授業進行に努めたい。設問11の回答について、3キャンパス（受講生400名）に対するオンライン（リアルタイム）授業をMicrosoft Teamsにて実施しているために生じる問題や不便さに関して、新たな手段や方法などを如何に取り入れることができるのかも考慮して、できる限りスムーズで分かりやすい授業進行ができるように改善していきたい。	154	52	33.8%

■担当教員コメント（全学共通教育科目） 令和7年度前期

キャンパス	科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
三原	英語入門演習（Q1・Q2）三原C	笠本 晃代	今年度は、三原キャンパスの受講者がいませんでした。	0	0	—
三原	数学入門演習（Q1・Q2）三原C	岩田 貴樹	（受講者がいなかったため、コメントなし）	0	0	—
三原	生物入門演習（Q1・Q2）三原C	金岡 雅浩	本講義は、大学で生物学関連の講義を学ぶことにおいて不安のある学生を対象に、演習形式でおこなうものである。具体的には、私が担当している生物学Ⅰ（4002004_生物学ⅠQ1：生命環境学科）の講義資料を提示して予習してもらい、その内容に関する質問を事前に提出し、本講義の時間中に解説する、という形式でおこなっている。本年度は三原キャンパスからの受講生はいなかった。本講義は来年度からは廃止されるが、生物学Ⅰの講義を担当していると学生によって理解度に大きな差があると感じられるので、生物学Ⅰを理解度別のクラス編成にするなどの対応がとれると良いと思う。	0	0	—
三原	化学入門演習（Q1・Q2）三原C	小関 良卓	受講生なし	0	0	—
三原	ひろしま理解（Q2）（三原C）	和田 崇	昨年度から授業担当順を一部変更した。また、広島キャンパスのみ対面、庄原・三原キャンパスがオンラインでは授業実施が困難で、学習効果もキャンパスにより異なると思われたため、3キャンパスともオンラインで授業を実施した。さらに、期末試験は設問数を昨年度より増やすことにより、幅広く学習内容の理解度を測定できるようにした。授業時に学生に質問して回答してもらうようにしたり、授業後に感想を提出してもらうことにより、学生の理解度等を測るよう努めた。昨年度と比べて特に庄原・三原キャンパスの履修人数が大幅に減少したが、依然として150名を超える履修があり、しかも3キャンパス同時開講なので、グループワークなどは物理的に不可能であった。また、期末試験対策が授業外学習になると考えたが、教員から具体的な課題提示などがないと授業外学習の機会がなかったと捉える学生もあり、与えられないと授業外学習が自ら計画的に実施できない状況がみてとれた。なお、本授業は本年度が最終年度であり、来年度以降は開講されない。	9	1	11.1%
三原	地域教養ゼミナールA（エリア型）（Q1）樹木の保全と活用から地域のあり方を考える	荻田 信二郎	受講ありがとうございます。皆さんに講義内で回答いただいたForms、他キャンパスで頂いたコメントを参考に授業改善に努めます。	0	0	—
三原	地域教養ゼミナールB（テーマ型）（夏季集中）英語で伝える広島	馬本 勉	地域教養ゼミナールB「英語で伝える広島」は、今年度より教育ネットワーク中国を通じた「広域単位互換科目」となり、本学3キャンパスから7名、県内外の他大学学生4名、計11名の履修者を迎えた。サテライトキャンパスひろしまでの4日間の集中講義では、平和公園近接地であることのメリットを活かし、原爆ドームや広島平和記念資料館でのフィールドワークを交えて実施した。今年度、広島平和文化センターより「広島・長崎講座」に認定されたことにより、資料館の入館料免除や教材提供等の支援を受け、より被曝の実相に迫った英語表現の演習を実施することができた。多様な学生の参加を得たことが、頻繁に実施したグループワークやプレゼンテーションの活性化を生み、履修者の多くは授業の狙いに叶う成長を遂げてくれたものと思われる。これらが授業の満足度につながったものと考えているが、配付した資料を十分に活かせなかった活動もあるため、次年度の授業については、より綿密な計画を立てて臨みたい。	1	1	100.0%
三原	地域教養ゼミナールB（テーマ型）（Q2）少子化と子育て支援	田中 聡子	回答者はすべての設問に対して100%肯定的な評価である。ハイブリッドであるが、積極的にオンラインでもグループワークに参加し、発表もできた。三原キャンパスの学生は対面での参加となり、グループワークではオンライン参加の学生と積極的にディスカッションを行った。最終日の児童館の訪問も全員が参加し、子育て支援と少子化対策について学びを深めることができた。行政施策について直接担当課へ質問ができることなどが高い評価の要因の1つと考えている。	16	2	12.5%

■担当教員コメント（全学共通教育科目） 令和7年度前期

キャンパス	科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
三原	キャリアビジョン（デベロップメント）（Q1）三原C	原田 淳	すべての設問において「強くそう思う」、「そう思う」の回答が大半であった。【昨年度の結果を踏まえた授業改善点】毎回の授業において、テーマに関するグループワークを行うことによって理解をうながすようにした。また、呼吸法、瞑想法など実践的なストレスマネジメントの技法について説明し、練習する時間を設けた。瞑想法などの実践に関して前向きに評価するコメントが複数見られた。【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】毎回の授業終了時にFormsで出席登録する際に質問、意見を提出するようにした。質問は、翌週の授業冒頭で回答した。【アンケート結果から見た今後の課題】講義による説明だけでなく、瞑想法などの実践を前向きに評価するコメントが複数見られたため、今後とも技法に関する説明だけでなく、練習の時間を適宜設けるようにしたい。	151	119	78.8%
三原	ボランティア（Q1）	手島 洋	アンケートの回答者は少なかったが、回答者の満足度は高かった。本科目は、ボランティアの学び・実践・省察を授業の中で一体的に学修するプログラムとしているため、能動的学習の満足感が高かったものと思われる。今後も、引き続き受講生のニーズを把握しながら授業改善を行いたいと思う。	16	4	25.0%
三原	スポーツ実技Ⅰ（Q1）（看B）	村上 妃斗美	授業時間外学習について、授業内、シラバスにて提示しているが積極的に取り組んでもらうところには至っていないようであった。運動することは、体だけでなく心の健康にもつながるため積極的に行ってもらえるよう今後は工夫していかなければならない。また、この授業ではチームでの活動が多いため、リーダーシップを発揮しなければならない場面やゲームの運営を考えなければならないことも多く取り入れた。運動技能を身につけることだけでなく、人間関係やコミュニケーション能力を培ってもらえるよう工夫した。自由記述欄にコミュニケーションに関するコメントがあったことは嬉しく思う。今後とも、積極的な授業外学習を行ってもらえるよう考えていきたいと思う。	30	20	66.7%
三原	英語表現Ⅲ（Q1）（看A）	Daniel McCourt（ダニエル マコート）		2	1	50.0%
三原	英語表現Ⅲ（Q1）（看B）	Daniel McCourt（ダニエル マコート）		8	1	12.5%
三原	英語表現Ⅲ（Q1）（理学）	岩崎 愛美	直接教授法による英語ライティングの授業は、少人数クラスで実施できたことが大変効果的でした。学生が提出した英文課題の添削と詳細なフィードバックには多くの時間と労力を要するため、少人数制が適切であったと考えております。授業においては、学生の学習状況や反応を把握するため、学生が自身の学習を振り返り、その感想を英語で記述して毎回Teamsを通じて提出していただきました。これにより、学生の思考や理解度をリアルタイムで把握することができました。この「振り返り」課題についても、通常の課題と同様に添削を行い、それに対する学生からのコメントをアップロードさせました。学生からは、添削に対する感謝の言葉や、学習意欲の向上を伝えるコメントを（英語で）うけとり、教員としても大変やりがいを感じました。このメッセージ機能を活用することで、ライティングでも英語コミュニケーションが円滑に図られたと実感しております。当初、初回だけにしようと思っていた「教員からのコメントをポジティブな表現にする」という取り組みは、予想以上に学生に好意的に受け入れられました。このことから、学生の学習意欲を持続させ、心から実力を高めていただきたいという願いを込め、教員からのコメントを常にポジティブなトーンで記述するよう努めました。これは、これまでの成果を踏まえた授業改善点の一つです。受講した学生全員が予想以上に私の授業に真剣に取り組んでくれたことが教学アンケートの結果から読み取れました。この結果を踏まえた今後の課題としましては、来年度も引き続き学生の皆様に喜んでいただける授業を心がけ、直接教授法による指導を継続していく所存です。	4	4	100.0%
三原	英語表現Ⅲ（Q1）（作業）	岩崎 愛美	直接教授法による英語ライティングの授業は、少人数クラスで実施できたことが大変効果的でした。学生が提出した英文課題の添削と詳細なフィードバックには多くの時間と労力を要するため、少人数制が適切であったと考えております。授業においては、学生の学習状況や反応を把握するため、学生が自身の学習を振り返り、その感想を英語で記述して毎回Teamsを通じて提出していただきました。これにより、学生の思考や理解度をリアルタイムで把握することができました。この「振り返り」課題についても、通常の課題と同様に添削を行い、それに対する学生からのコメントをアップロードさせました。学生からは、添削に対する感謝の言葉や、学習意欲の向上を伝えるコメントを（英語で）うけとり、教員としても大変やりがいを感じました。このメッセージ機能を活用することで、ライティングでも英語コミュニケーションが円滑に図られたと実感しております。当初、初回だけにしようと思っていた「教員からのコメントをポジティブな表現にする」という取り組みは、予想以上に学生に好意的に受け入れられました。このことから、学生の学習意欲を持続させ、心から実力を高めていただきたいという願いを込め、教員からのコメントを常にポジティブなトーンで記述するよう努めました。これは、これまでの成果を踏まえた授業改善点の一つです。受講した学生全員が予想以上に私の授業に真剣に取り組んでくれたことが教学アンケートの結果から読み取れました。この結果を踏まえた今後の課題としましては、来年度も引き続き学生の皆様に喜んでいただける授業を心がけ、直接教授法による指導を継続していく所存です。	5	5	100.0%

■担当教員コメント（全学共通教育科目） 令和7年度前期

キャンパス	科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
三原	英語表現Ⅲ（Q1）（コミュ）	Daniel McCourt（ダニエル マコート）		12	7	58.3%
三原	英語表現Ⅲ（Q1）（人福）	Daniel McCourt（ダニエル マコート）		31	13	41.9%
三原	英語表現Ⅳ（Q2）（人福）	Daniel McCourt（ダニエル マコート）		9	6	66.7%
三原	ライフデザイン（Q2）三原C	岡田 高嘉	【昨年度の結果を踏まえた改善点】 本科目は昨年度から、各々のキャンパスの受講生を教室に集め、3キャンパスの教室をオンラインでつなぐ「ハイフレックス型」で実施している。昨年度のアンケート結果から、教員のいないキャンパスで一部の学生が私語を続けるなど授業に参加していない様子が伺えたため、今年度は教室環境を静穏に保つことやグループワークを適正に行うことを目指し、座席指定を行った。 【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】 3キャンパス全体で約500名の受講生がおり、教員不在でTAのみが対応しているキャンパスもあるため、毎回（毎週）小テストを実施し、受講生の解答状況の確認を通じて授業態度の把握に努めた。また、小テストの結果は、学生の理解度や到達度を把握する手段として活用し、必要に応じて補足解説を加えたり、次回以降の授業内容を柔軟に調整したりするなど、授業改善に役立てた。 【期末アンケート結果から見た今後の課題】 今年度は初めて座席指定を導入した。その結果、昨年度よりも学修環境の管理をより適切に行うことができたと思う。特に座席指定によりグループワークへの移行がスムーズになり、授業の効率が向上した。一方で、大講義室（階段教室）でのグループワーク実施の難しさや、座席指定方法の改善を求める意見も散見された。これらの課題を踏まえ、来年度に向けてグループ分けの方法や座席指定の運用について再検討したい。さらに、オンライン授業時は声が聞き取りにくいという指摘も依然として見られた。来年度は教学課やTAとの連携をより一層強化し、授業開始時の音声チェックなどの準備を徹底したい。	111	69	62.2%
三原	リーダー論（Q2）三原C	原田 淳	3キャンパスの学生が参加する集中講義で行動型学習の科目としても採択されている。授業評価アンケートの回答率が低いため（三原キャンパスは受講者1で回答者0であった）、参考にしかないが、いずれの設問に対する回答も「強くそう思う」、「そう思う」であった。 【昨年度の結果を踏まえた授業改善点】 4日間の集中講義のうち、3日間はオンライン授業で、コミュニケーションとディベートの基礎について開設し、演習で理解を深めるようにした。初めてディベートを行う学生が多いため、最初の演習では、ステップごとに教員が介入・解説しながら進めるようにした。4日目は、サテライトキャンパスにおいて対面でのディベートを行った。初めてディベートに取り組んだ学生も演習の回数を重ねて、4日目には自信をもって発言する様子が見られた。 【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】 毎回の授業終了時にFormsで出席登録する際に質問、意見を提出するようにした。質問は、翌日（次回）の授業冒頭で回答した。 【アンケート結果から見た今後の課題】 受講前後のループリックの比較をしたところ、差分の大きな項目は、傾聴的態度、傾聴技法、クリティカルリーディングの3つで、いずれも1.3以上伸びている。差分の小さな項目に関しては、解説や演習について見直しを行いたい。	1	0	0.0%
三原	地域教養ゼミナールA（エリア型）（前期集中）都市近郊における竹林と共創プロジェクト	荻田 信二郎	別途実施した総括Forms回答を参考に、さらなる工夫改善に努める。	2	0	0.0%
三原	地域教養ゼミナールB（テーマ型）（Q2）メンタルヘルス問題のある養育者による子育て～子ども虐待とヤングケアラーの背景要因	松宮 透高	3キャンパスを対象とした科目であり、時間的物理的な制約からオンデマンド開講を主体とした。最後に、学習内容を各自パワーポイントにまとめてプレゼンテーションとディスカッションを行うことで、自己学習と参加機会を組み込んだ。また、多くの当事者や支援者をゲストスピーカーとして招いた。概ね満足度が高いことから、こうした特殊な開講形態であってもリアリティのある講義となるよう工夫したことが一定の満足につながったものと思われる。一方、自己学習を求める要素が大きくなかったためか、授業外学修の時間が少ない回答者も少なかった。すべてを教え込むのではなく、調べて共有するといったプログラムへの工夫を重ねたい。また、より多様なゲストを招いて、より刺激的な学習につながるよう努めたい。	67	25	37.3%
三原	韓国語Ⅰ（Q2）三原C（作業・コミュ）	鞠 承姫	授業では、覚えた本文を基に会話を作り、発表する活動を継続的に行った。学生が自発的に声を出すことで、より実践的な力を養うことを重視した。文化的側面を学ぶため、映画や映像資料も活用した。アンケートでは能動的な学習であったとする評価で、さらに学びを深めたいという意欲が示された。	49	14	28.6%

■担当教員コメント（全学共通教育科目） 令和7年度前期

キャンパス	科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
三原	韓国語Ⅰ（Q2）三原C（看護・コース選択）	鞠 承姫	本授業では、本文を暗記して会話に応用する練習やペアでの発表を行い、実際の場面で活用できる韓国語力の習得を目指した。文化理解の一環として映画を取り入れ、学習意欲を高める工夫も行った。アンケートでは能動的に学べたとの評価や、さらに学びたいという回答が多く寄せられ、授業全体を肯定的に受け止めていることがうかがえた。	56	17	30.4%
三原	キャリアビジョン（デベロップメント）（集中）三原C	原田 淳	回答率が低いため、参考にしかないが、いずれの設問に対する回答も「強くそう思う」、「そう思う」が大半であった。【昨年度の結果を踏まえた授業改善点】毎回の授業において、ブレイクアウトルームを用いてテーマに関するグループワークを行うことにより、理解をうながすようにした。また、毎回の授業を録画して公開し、レポート作成の際に見直せるようにした。【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】毎回の授業終了時にFormsで出席登録する際に質問、意見を提出するようにした。質問は、翌日（次回）の授業冒頭で回答した。【アンケート結果から見た今後の課題】自由回答には、「期待したとおりの内容や技法を学ぶことができた」というコメントが見られた。シラバスに各回の具体的な内容をわかりやすく記載するようにしたい。	5	2	40.0%

全学共通教育科目

【 後 期 】

- 授業科目の概要 全学共通教育科目
- 授業科目の名称 担当教員コメント欄参照
- 回答数 3,014
- 回答率 41.9%

【 総 評 】

本調査は、回答率の向上を第一の課題としている。前期の総括に続き、全学共通教育科目全体を俯瞰してみると、今年度を含むここ4年間の回答率の推移は以下の通りとなっている。

	令和 4 年度	令和 5 年度	令和 6 年度	令和 7 年度
前期	37.3%	39.0%	44.0%	49.3%
後期	21.4%	27.7%	31.8%	41.9%

全体に後期は回答数が少なくなる傾向があるが、今期はおよそ42%の回答率をマークし、一定の評価をしてよいものと考えたい。しかし、極端に回答数の少ない科目が散見されるのも事実であり、単に平均値を見るにとどめることなく、当該の科目において回答率を下げる要因はいかなるものなのかを分析的にとらえ直す必要があるであろう。

科目担当から寄せられたコメントを読めば、質の高い授業を展開するため常に改善を怠らない教員の姿が浮かび上がってくる。一定の高い評価を受ける一方で努力を惜しむことのない姿勢に頭の下がる思いがすることである。

学生からの回答によれば、97.7%の学生は「授業に集中し、真剣に取り組ん」でいる。ほとんどの授業で「能動的学修機会」が保障され、「授業時間外に取り組むべき課題」の「内容・量は適切」ととらえられている。学生の多くが「授業で用いられる「教材（教科書・資料など）・教具（アプリ・ファイルなど）は適切」と評価し、「学修活動（発言や提出物など）に対して必要な支援を得ている」と回答している。

授業の満足度を問う設問に「強くそう思う」と答えた者が47.4%、「そう思う」と答えた者が46.7%おり、総じて満足度の高い授業が成立しているものと総括できる。95.1%の学生が「授業の目標とする力（知識や技能など）が身につく」と評価し、90.3%の学生が「授業の内容に関してさらに学びたい」と回答している。

では、なぜ「授業に関連して行っている授業外学修（課題、準備、復習等）」の1週間あたりの平均時間を問われて「1時間未満」（2単位科目）もしくは「30分未満」（1単位科目）と回答する者が45.6%、「全くしていない」と回答する者が10.9%に及ぶのか。授業を出発点とし自ら進んで学びの世界を拓げていくことが学生には求められている。

令和07年度後期 授業評価アンケート集計結果

県立広島大学

■学部・学科 全学共通教育科目
■科目名 全学共通教育科目全体

■受講登録者数 7,185
■回答者数 3,014
■回答率 41.9%

■設問別評価集計

アンケート設問内容		強く そう思う	そう思う	そう 思わない	全くそう 思わない	当該 科目区分 平均値
		評価4	評価3	評価2	評価1	
Q1	わたしはこの授業に集中し、真剣に取り組んだ。	1,553 51.5%	1,391 46.2%	53 1.8%	16 0.5%	3.49
Q2	わたしがこの授業に関連して行っている授業外学修（課題、準備、復習等）時間。（1週間の平均）※	428 14.2%	883 29.3%	1,375 45.6%	328 10.9%	2.47
Q3	この授業では授業時間外に取り組むべき課題が示されている。	1,355 45.0%	1,370 45.5%	220 7.3%	69 2.3%	3.33
Q4	この授業では能動的学修機会がある。	1,623 53.8%	1,102 36.6%	206 6.8%	83 2.8%	3.42
Q5	この授業の課題の内容・量は適切である。	1,423 47.2%	1,393 46.2%	144 4.8%	54 1.8%	3.39
Q6	この授業の目標とする力（知識や技能など）が身につく。	1,455 48.3%	1,412 46.8%	101 3.4%	46 1.5%	3.42
Q7	この授業の教材（教科書・資料など）・教具（アプリ・ファイルなど）は適切だ。	1,419 47.1%	1,428 47.4%	112 3.7%	55 1.8%	3.40
Q8	この授業の内容に関してさらに学びたい。	1,203 39.9%	1,518 50.4%	212 7.0%	81 2.7%	3.28
Q9	この授業での学修活動（発言や提出物など）に対して必要な支援を得ている。	1,343 44.6%	1,484 49.2%	119 3.9%	68 2.3%	3.36
Q10	総合的に判断して、この授業に満足している。	1,430 47.4%	1,408 46.7%	108 3.6%	68 2.3%	3.39

※平均時間数の評価

2単位科目：4時間以上…4 / 2時間以上4時間未満…3 / 2時間未満…2 / 全くしていない…1

1単位科目：1時間以上…4 / 30分以上1時間未満…3 / 30分未満…2 / 全くしていない…1

■設問別科目平均の範囲と中央値

平均の範囲（当該学部・学科科目）					
最小値	25%点	中央値	75%点	最大値	標準偏差
2.56	3.33	3.47	3.63	3.94	0.46
1.49	2.25	2.44	2.70	3.70	0.69
2.15	3.09	3.38	3.50	3.90	0.55
2.33	3.14	3.49	3.73	3.95	0.53
2.41	3.31	3.43	3.56	3.92	0.52
2.45	3.27	3.40	3.56	3.90	0.49
2.33	3.24	3.40	3.54	3.90	0.50
2.14	3.15	3.34	3.50	3.92	0.56
2.33	3.23	3.41	3.56	3.91	0.51
2.39	3.25	3.44	3.60	3.94	0.51

■担当教員コメント（全学共通教育科目） 令和7年度後期

キャンパス	科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
広島	ICTリテラシーⅡa（Q3） （陳春）	陳 春祥	今年度から、「ICTリテラシーⅡ」の内容が改められ、データサイエンスとデータ分析、応用を強化した。授業内容の量と質も大きく変わった。アンケート結果を見ると、学生に関する設問1（授業に集中し真剣に取り組んでいるか）に7%がそう思わなかったと回答している。授業の課題が示されているか（問3）、内容・量が適切か（問5）、学習活動に対して必要な支援を得ているか（問9）については、強くそう思うとそう思う併せて9割強の回答になっている。総じて授業の満足度（Q10）は93%だった。自由回答欄には、「エクセルの解答例を載せてくれるのはありがたかった」「先生は丁寧に指導しました」など、好意的な自由回答があったが、この授業に真剣に取り組めなかった（7%）、満足できなかった（7%）回答についても、何故そう思うかの意見を書いてほしかった。	31	15	48.4%
広島	ICTリテラシーⅡe（Q3） （佐々木）	佐々木 宣介	【昨年度の結果を踏まえた改善点】 本科目は演習が中心の科目である。高校までの情報教科のカリキュラム改訂の影響を受ける最初の学年であったため、その対応のため、使用する教科書・演習教材の変更も含め、昨年度から大きな変更を行った。ただ、その結果として、演習内容が増えてしまった面があった。【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】 授業中の学生の様子に注意をして、演習の進捗を確認しながら進めるよう配慮した。しかし、後述のようにアンケートでは進捗が速かったという趣旨の個別コメントが見受けられ、この点は反省点と考えている。【期末アンケート結果から見た今後の課題】 前述のように演習の進行速度には配慮をしていたつもりであったが、それでも進捗が速いというコメントが見受けられた。基本的なソフトウェアの操作に慣れているかどうか（主にエクセルを利用した演習を実施）で操作の速度には差が生じてしまう面もあるが、さらにこまめな進捗の確認や演習を行う時間の確保等の工夫を検討したい。	34	10	29.4%
広島	ICTリテラシーⅡb（Q3） （重安）	重安 哲也	今年度は履修登録者数36名中29名が回答しており、80.6%の回答率となった。今年度は、昨年度の授業内容から、大きく変更点はないものの、PC操作の習熟度によって操作指示時の追従において学生間に差が出ることを考慮し、長い説明となることを避け、できる限り短い間隔で操作説明を区切ることで遅れによる大きな差がつかないように配慮した。また、履修者の反応を見るために、今年度では、課題管理をTeamsの課題機能を用いて行った。これにより、適宜、リマインドの実施や、学生も自身の提出漏れをすぐに把握できるように配慮した。アンケート結果からは、概ねどの項目も肯定的意見が多数を占めたことから、大きな問題はなかったと考えているが、自由記述欄では、課題量の多さなどに起因する負担の軽減を求める声もあった。来年度以降は、セメスター制度になるが、その際は、課題に向き合う期間も変わってくるため、適切な対応が必要になると考えている。	36	29	80.6%
広島	ICTリテラシーⅡc（Q3） （佐々木）	佐々木 宣介	【昨年度の結果を踏まえた改善点】 本科目は演習が中心の科目である。高校までの情報教科のカリキュラム改訂の影響を受ける最初の学年であったため、その対応のため、使用する教科書・演習教材の変更も含め、昨年度から大きな変更を行った。ただ、その結果として、演習内容が増えてしまった面があった。【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】 授業中の学生の様子に注意をして、演習の進捗を確認しながら進めるよう配慮した。しかし、後述のようにアンケートでは進捗が速かったという趣旨の個別コメントが見受けられ、この点は反省点と考えている。【期末アンケート結果から見た今後の課題】 前述のように演習の進行速度には配慮をしていたつもりであったが、それでも進捗が速いというコメントが見受けられた。基本的なソフトウェアの操作に慣れているかどうか（主にエクセルを利用した演習を実施）で操作の速度には差が生じてしまう面もあるが、さらにこまめな進捗の確認や演習を行う時間の確保等の工夫を検討したい。	34	17	50.0%
広島	ICTリテラシーⅡf（Q3） （肖）	肖 業貴	この授業は全学共通で行われています。内容が時間のない中で更新され、今年は初めての実施です。来年度からは廃止です。①課題の多さは確かです。演習中心ですので、学生の負担感があったと思います。②動画の視聴ですが、見る期限を一週間延長しても、ごまかす学生がいたので、口調が厳しくなったと思います。受講生から意見が出ましたが、指導する側としては特に問題があるとは思っていません。	35	27	77.1%
広島	ICTリテラシーⅡd（Q3） （小川仁）	小川 仁士	新しいテキストで授業を行った。データサイエンスは今後すべての学生に必要な知識領域になるので、学科・コース間の差が生まれないよう、さらなる工夫が必要である。	31	12	38.7%
広島	英語総合Ⅱa（Q4）	黒住 奏	本授業に参加し、積極的に取り組んでくれた皆さんに感謝します。授業外学修や発表など、準備や復習にしっかり取り組む姿が多く見られ、皆さんの学びが深まったことをうれしく思います。授業では、ディスカッションやプレゼン、映画教材などを通して、知識や技能を実践的に身につける機会を提供しましたが、多くの学生が内容を楽しみながら理解を深められたとの声をいただき、励みになりました。	37	26	70.3%
広島	英語総合Ⅱe（Q4）	草薙 邦広		35	13	37.1%

■担当教員コメント（全学共通教育科目） 令和7年度後期

キャンパス	科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
広島	英語総合Ⅱc（Q4）	笠本 晃代	・ 昨年度の結果を踏まえた授業改善点 例年、設問4が他の質問項目よりも低くなる傾向があるあるため、できる限りグループごとに意見を発信できる機会を作った。しかしながら、「強くそう思う」が50%に達していなかったことから、このパーセンテージを上げられるように努力を続けていかなければならないと感じている。 ・ 履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 積極的に机間巡視を行い、受講者の理解度を把握するよう努めたつもりではあったが、より受講者に寄り添い、質問しやすい環境作りの工夫をしたいと考えている。 ・ アンケート結果から見た今後の課題 設問6、設問7、設問8、設問9の各質問項目において、「強くそう思う」が50%以上を維持できるように、受講者の興味・関心を最大限に引き出す授業展開を目指したい。	23	20	87.0%
広島	英語総合Ⅱd（Q3）	ホーソン寿栄	授業をまじめに受講した学生が多く、試験もレポート課題もほとんどの学生がよくできていました。自主学习としてのオンデマンドの演習は半数以上がやりとげており、できなかった学生はこのような学習方式が苦手だったのかもしれない。もっと授業中に励ましてやれるように促す必要があると感じています。	39	26	66.7%
広島	英語総合Ⅱb（Q3）	黒住 奏	本授業にご参加いただき、ありがとうございました。 昨年度の結果を踏まえ、授業では予習・復習の重要性をより明示し、ディスカッションやプレゼンなどの能動的学修の機会を増やしました。学期中には、理解度や授業の進め方に関する簡単なアンケートやグループワーク中の観察を行い、学生の反応を確認しました。その結果をもとに、説明の仕方や補足例を調整し、理解を深める工夫を行いました。今回のアンケート結果では、多くの学生が授業に集中し、課題や教材を活用して学習を進めていることが分かりました。特に、予習や発表後のフィードバックを通して理解が深まったという声は励みになりました。今後の課題としては、より一人ひとりが学びを実感できるよう、グループ活動やフィードバックの機会をさらに工夫することが挙げられます。また、テストや評価の過程でも、公平かつ安心して取り組める環境づくりを引き続き意識していきます。皆さんが学びを楽しみ、深められる授業を目指して改善を続けていきます。	37	20	54.1%
広島	英語総合Ⅱf（Q3）	笠本 晃代	・ 昨年度の結果を踏まえた授業改善点 例年、設問4が他の質問項目よりも低くなる傾向があるあるため、できる限りグループごとに意見を発信できる機会を作った。しかしながら、「強くそう思う」が32%にとどまったこと、また「そう思う」と合わせても71%であったことから、これらのパーセンテージを上げられるように努力を続けていかなければならないと感じている。 ・ 履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 積極的に机間巡視を行い、受講者の理解度を把握するよう努めたつもりではあったが、より受講者に寄り添い、質問しやすい環境作りの工夫をしたいと考えている。 ・ アンケート結果から見た今後の課題 設問6、設問7、設問8、設問9の各質問項目において、「強くそう思う」が50%以上になるように、受講者の興味・関心を最大限に引き出す授業展開を目指したい。	36	29	80.6%
広島	英語表現Ⅱa（Q3）	K カゼミ	Student feedback was generally positive, I am glad to see students felt everyone felt the class level, materials, opportunities for active learning, support and overall satisfaction were good. This year a small number of students reported not spending much time studying outside of the class. I will encourage the students to do so. I will also continue to strive to keep the students motivated and engaged by not only teaching the targets, but giving students the chance to practise and use them through activities, pair- and groupwork and ensuring that I check in on each group to communicate, help, and encourage them to use their language skills actively.	37	33	89.2%
広島	英語表現Ⅱb（Q3）	D リー	Overall, the student feedback for this course was very positive. Students reported high levels of concentration, satisfaction, and engagement, and all agreed that assignments were clearly explained and support was sufficient. Active learning activities were especially appreciated, and several students noted that the class was enjoyable and motivating. A few comments mentioned that discussion time sometimes felt long and that some textbook illustrations were not appealing, and over half of the students reported studying less than the recommended amount outside of class. Going forward, I will clarify expectations for out-of-class study by offering more specific guidance. I will also adjust the pacing of discussion activities so they feel more balanced, and I plan to supplement the textbook with additional visuals when helpful. By making these small changes, I hope to maintain the strengths of the course while improving the overall learning experience.	37	30	81.1%

■担当教員コメント（全学共通教育科目） 令和7年度後期

キャンパス	科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
広島	英語表現Ⅱc（Q3）	D チャップマン	When I read the results (回答), I see some VERY good data: in most questions the students said that they can enjoy ACTIVE LEARNING and they understand the goals of the class (over 90-95%) . This class discusses different social problems using original prints made by the teacher. Students express their personal opinions, then give reasons why they agree and disagree with other students. From these results, I believe they practice a LOT of English speaking, and can become more confident in their English ability. One area I want to change is discussing social problems more focused on university lifestyle (students' personal lives). Currently, most topics are global social problems. But most important is that they express their opinions freely!	25	22	88.0%
広島	英語表現Ⅱd（Q4）	D リー	The course evaluation results indicate a highly positive perception of the class. All respondents reported that they were concentrating and working hard, and overall satisfaction was high. Students agreed that the assignments, materials, and active learning opportunities were appropriate and aligned with the course objectives. Throughout the semester, student responses were monitored through reflective activities, observation of participation, and informal feedback, enabling adjustments to pacing and task design where necessary. A key issue identified in the survey is the limited time devoted to independent study. Future improvements will focus on promoting more consistent out-of-class engagement and strengthening autonomous learning habits.	39	27	69.2%
広島	英語表現Ⅱe（Q4）	D チャップマン	This class content is the same as Q3! And I am very happy with the results (回答) of Q4, too! I can see some VERY good data: in most questions the students said that they can enjoy ACTIVE LEARNING and they understand the goals of the class (over 90-95%) . This class discusses different social problems using original prints made by the teacher. Students express their personal opinions, then give reasons why they agree and disagree with other students. Out of a 90 minute class, students have speaking tasks over 70 minutes! From these results, I believe they practice a LOT of English speaking, and can become more confident in their English ability. One area I want to change is discussing social problems more focused on university lifestyle (students' personal lives). Currently, most topics are global social problems. But most important is that they express their opinions freely!	35	16	45.7%
広島	英語表現Ⅱf（Q4）	K カゼミ	Thank you for the feedback, I am pleased to see a 100% satisfaction rate, with many of you noting that the focus on "pair talking" helped your speaking skills. ① Improvements This quarter I implemented weekly out-of-class assignments related to each unit's topic to ensure you had the chance to do meaningful self-study. This is reflected in an increase in the amount of time the you reported doing self-study (question 2) compared with previous quarters. ② Mid-Semester Adjustments To gauge reactions, I monitored peer-to-peer interactions and used your immediate feedback to adjust my pacing. This helped 93% of you feel you are successfully acquiring the course objectives. ③ Future Challenges Independent Study: As 32% of students spend less than 2 hours (for 2-credit subjects) on outside study, I will continue to adjust the out-of-class assignments and encourage students to do the work required.	34	28	82.4%
広島	韓国語Ⅱa（Q3）	鄭 遇澤	基礎レベルの語学授業で、結構多めの受講者だったが、皆満足度が高かったので、嬉しいと思っています。今年度は、クラス分けは指定制だったので、前期後期同じ受講者で、一貫性ある授業が出来た。後期の授業レベルは、前期と比べて相当高くなったが、皆最後までやり遂げることが出来たことは良かったと思います。今回は授業の形式として、個人ノートを作成すること、グループでの課題作成と発表することを主に利用したんですが、今後も維持発展させたいと考えています。	23	5	21.7%
広島	韓国語Ⅱb（Q3）	鞠 承姫	本授業では、本文暗記とペアによる会話発表を中心に、発話の機会を多く設けた。繰り返し声に出して練習することで、日常会話表現の定着を目指した。映画などの映像資料も取り入れ、学習内容を実際の使用場面と結び付けられるよう工夫した。今後は、学習内容を整理する時間をより充実させていきたい。	24	12	50.0%
広島	ドイツ語Ⅱa（Q3）	小田 智敏		8	4	50.0%
広島	ドイツ語Ⅱb（Q4）	小田 智敏		10	4	40.0%
広島	中国語Ⅱa（Q3）	袁 葉	1タームに続き、高い評価を得られたことを大変光栄に思います。とても励みになっております。学生の要望に応じて今後独学のできるアプリ（duolingo）を紹介したいと思います。Duolingo—世界で最も人気のオンライン学習プラットフォーム。楽しく、無料で、効果的です。	14	10	71.4%
広島	中国語Ⅱb（Q4）	袁 葉	学生から高い評価をいただき、大変嬉しく思います。そして、さらに中国語を勉強し続けたい学生も多く、とても励みになります。今後さらに教え方に磨きをかけて、もっとみんなの満足できる授業にしたいと思います。	11	5	45.5%

■担当教員コメント（全学共通教育科目） 令和7年度後期

キャンパス	科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
広島	中国語Ⅱc（Q4）	徐 亜文	【昨年度の結果を踏まえた授業の改善点】 昨年度の授業では、多くの学生が集中して意欲的に取り組む様子が見られた。課題の内容および分量、教材・教具についても概ね適切であり、学習内容の定着につながったと考えられる。また、多くの学生から授業に対する満足感が示された。一方で、授業内容に対して「さらに学びたい」と感じるまでには至らない学生も一部に見られた。この点を課題として受け止め、今後は授業外学修の成果をより具体的かつ継続的に把握できる方法を導入するとともに、学習意欲を一層高めるため、内容や活動方法に工夫を加え、興味・関心を引き出す授業づくりを進めていきたい。 【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた改善点】 中国語学習において、日本人学習者にとって発音は最も大きな課題の一つである。そのため、テキストのデジタル版を活用し、音声や映像を取り入れながらスキットを用いた会話練習を実施した。その結果、学生からは「実際の場面をイメージしながら楽しく練習できる」「自然に頭に入り、定着しやすい」といった肯定的な反応が得られた。今後は、発音練習の時間をさらに確保し、個別フィードバックの機会を増やすことで、より効果的な学習につなげていきたい。 【アンケート結果から見た今後の課題】 多様な教材・教具を積極的に活用し、学習意欲を高める魅力ある授業づくりを一層推進する必要がある。また、授業外学修の実施状況を的確に把握できるよう、課題の内容や分量を工夫し、学習成果が可視化できる仕組みを整えることが求められる。さらに発音学習については、テキストのデジタル版の活用に加え、ペアワーク等の多様な学習方法を取り入れ、より高い学習効果を目指したい。	41	19	46.3%
広島	スポーツ実技Ⅰe（Q3）	辻 文	1. 昨年度の結果を踏まえた授業改善点 本科目では技能の習得に加え、協働的な学びと主体的な取組を重視して授業を構成した。特に、学生自身が練習メニューを考える活動を取り入れ、実践的に学ぶ機会を設けた。 2. 履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 授業中の様子や活動への参加状況を踏まえ、練習内容や進行を適宜調整した。 3. 期末アンケート結果から見た今後の課題 アンケートでは「能動的学修機会がある」に対して高い肯定的回答が得られ、主体的に取り組める授業となっていたと考える。自由記述では、運動機会の確保や協働的活動の意義を評価する意見が見られた。一方で、体力差への不安や休憩の取り方、活動の進め方に関する意見もあったため、安全面や負担のバランスには今後も配慮していきたい。「集中して取り組んでいる」「目標とする力が身につく」「総合的に満足している」などの設問では概ね高い評価を得た。一方で、課題量や活動内容に対して否定的回答も一部見られたことから、練習内容の難易度や休憩の設定などを含め、より多様なレベルに対応できる授業運営を検討する。また、授業外での運動習慣につながる働きかけも今後の課題である。	35	27	77.1%
広島	スポーツ実技Ⅰc（Q4）	黒坂 志穂		36	19	52.8%
広島	スポーツ実技Ⅰa（Q3）	村上 妃斗美	授業時間外学習について実施できていない学生が多いかと思われたが、自宅で行えるストレッチやエクササイズについて情報提供を行ったことがよかったのではないと思われる。 グループで協力して行う競技も多かったため、学生間のコミュニケーション促進ができたことは、授業の目的を達成に繋がることである。また、回答率が低かったため、次年度以降はアンケート回答について授業内で伝える頻度を増やしていきたい。	36	16	44.4%
広島	スポーツ実技Ⅰd（Q4）	村上 妃斗美	授業に対して積極的に参加する学生が多く、グループワークについてもスムーズに行うことができた。それは、学生がお互いにコミュニケーションをとり円滑に授業ができるよう協力して頂けた結果だと考えられる。授業の目的を理解し、健康になるために日頃からできる取り組みについて説明を行うことによって学生の理解も深まり、積極的に参加することで授業時間外学習に対する意欲にも繋がったのではないだろうか。しかし、回答率についてQ3の反省を活かし、呼びかけを増やしたと思うように回答していただけなかった。次回は、アンケートについて回答する時間を授業時間内に設けようとする。	37	21	56.8%
広島	芸術（Q3）広島C	佐々木 悠	今年度は久しぶりの授業担当であり、本科目は3キャンパス同时对面およびオンラインで実施した。授業当初、授業中に把握した学生のコメントから、オンライン授業時に音声聞き取りにくいとの指摘が散見された。第3回目以降は、数学課およびTAと連携し、オンライン授業におけるトラブルを回避できるよう事前準備を徹底した。 履修者の反応を把握するため、学期中に実施した方法およびその結果を踏まえた授業改善として、毎週、授業内で問いとなる課題を提示し、それについて意見を共有した上で、さらに各自が自らの考えを深める機会を設けた。翌週には簡単なフィードバックを行うよう努めた。 期末アンケートの結果からは、授業内課題をさらに増やしてほしいとの意見や、新たな知見が得られたとの肯定的な回答が多く見られた。一方で、教員からのコメントを返すタイミングに関する意見もあったため、今後は学生とのコミュニケーション方法についてさらに検討していきたい。また、履修者数が非常に多く、十分にきめ細かなフォローができなかった点についても、来年度に向けて改善を図りたい。	168	66	39.3%

■担当教員コメント（全学共通教育科目） 令和7年度後期

キャンパス	科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
広島	心理学（Q4）	向居 暁	回答率73.7%のアンケート結果から、回答者の範囲では、授業に集中して真剣に取り組めたという自己評価が高く、授業時間外に取り組むべき課題が明確に示されている点が特に高く評価されました。また、能動的学修の機会がある、教材（教科書・資料等）や教具（アプリ・ファイル等）が適切である、学修活動（発言や提出物等）に対して必要な支援を得られている、といった項目でも高評価が多く見られました。さらに、授業の目標とする力（知識や技能など）が身につく実感や、「授業内容に関してさらに学びたい」という学習意欲、そして総合満足度についても肯定的な回答が大半でした。これらは授業設計の強みとして維持し、次年度以降も再現できる形で継続します。自由記述には「すごく勉強になって、1番とってよかった」という趣旨のコメントがあり、学びの手応えが伝わってきました。一方で、能動的学修機会については少数ながら否定的回答もあり、活動の目的や進め方、参加の仕方が十分に共有されない回があった可能性があります。今後は、各回の冒頭で活動のねらい・手順・到達目標を簡潔に明示し、具体的に何をどうすればよいか（発言・作業・提出物の例）を提示して、参加のハードルを下げます。加えて、授業外学修時間に「2～4時間未満」が多い一方で短めの回答も一定数あるため、課題の所要時間の目安と取り組み例を事前に示し、学修計画を立てやすくすることで、学修ペースの個人差を縮められるよう改善します。	19	14	73.7%
広島	基礎数学（Q3）	富田 哲治	昨年度は学生からの自発的な発表が一定数の学生に限られる傾向があったため、今年度は自発的な発表は加点要素とすることで発表を促し、できるだけ分散するように努めたが、今年度は受講者数が大幅に増加したため、発表者は限定的な傾向であることは大きく改善はされなかった。各週、複数回の演習を盛り込むことで、理解度などの受講者の反応を確認するようにしている。アンケートの結果から、まずQ1「わたしはこの授業に集中し、真剣に取り組んでいる」はすべての受講者が肯定的な回答であったことから、真摯な受講姿勢がうかがえる。Q2「授業外学修（課題、準備、復習等）時間」については、約半数の学生が2時間位上をあてている一方、若干名が全くしていなかった。Q3「授業時間外に取り組むべき課題が示されている」は96%の学生が肯定的な回答であることから、課題の難易度については次年度に向けて検討する必要があると考える。Q4「能動的学修機会の有無」は約72%が肯定的な回答であり、演習で相互相談を促したことへの反応であるといえる。Q5「課題の内容・量」、Q6「目標とする力が身につく」、Q7「教材・教具の適切さ」、Q8「更に学びたい」、Q9「学習活動支援」については、概ねすべての学生が肯定的な回答であったことと、Q10「総合的な満足度」がすべての学生が肯定的であったことから、来年度も同様な方法で授業を実施して問題ないとする。なお、この講義は来年度から情報学科の学生は必修となるため、更に受講者数は増加することが見込まれる。	35	26	74.3%
広島	統計入門（Q4）	富田 哲治	昨年度に比べて今年度は履修者数が大幅に増加して30名であった。そのため、受講生の様子を確認しつつ演習のペース配分に気をつけた。各週、複数回の演習を盛り込むことで、理解度などの受講者の反応を確認するようにしている。アンケートの結果から、まずQ1「わたしはこの授業に集中し、真剣に取り組んでいる」はすべての受講者が肯定的な回答であったことから、真摯な受講姿勢がうかがえる。Q2「授業外学修（課題、準備、復習等）時間」については、約42%の学生が2時間位上をあてている一方、若干名が全くしていなかった。Q3「授業時間外に取り組むべき課題が示されている」は95%の学生が肯定的な回答であることから、課題の分量等は適切であったと考えられる。Q4「能動的学修機会の有無」は約79%が肯定的な回答であり、演習で相互相談を促したことへの反応であるといえる。Q5「課題の内容・量」、Q6「目標とする力が身につく」、Q7「教材・教具の適切さ」、Q8「更に学びたい」、Q9「学習活動支援」については、概ねすべての学生が肯定的な回答であったことと、Q10「総合的な満足度」がすべての学生が肯定的であったことから、来年度も同様な方法で授業を実施して問題ないとする。Q11の自由回答の内容には「内容は難しかったがRを使うのは面白かった」「コードがどうしても難しかった」と相対する意見があった。この授業は全学共通教育科目であることから、プログラミングは比較的コードの短いものに工夫して、あまり複雑なものにならないよにはしているが、受講生は複数のコースの学生であることから、プログラミングの内容をどのレベルに設定するかは次年度に向けて検討すべき課題である。	30	19	63.3%
広島	家族社会学（Q4）広島C	澤田 千恵		78	8	10.3%

■担当教員コメント（全学共通教育科目） 令和7年度後期

キャンパス	科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
広島	法学（Q3）広島C	岡田 高嘉	【昨年度の結果を踏まえた改善点】 例年、本科目は新遠隔システム講義室を活用していたが、今年度は受講者数の関係で、新遠隔システム講義室を用いず、3Cの教室をZOOMでつないだハイブリット型の授業を行った。この形態の授業は、準備に時間を要したり、通信トラブル等に見舞われたり、いろいろ困難に直面することが多いが、われわれ教職員（及びTA）も慣れてきたので、トラブルは減ったと思われる。また授業内容の見直しを行い、今年度は近年注目されている「情報法」を取り上げた。遠隔授業では、受信キャンパスの学生の参加意欲や集中力が低下する傾向にあるため、授業への参加意欲を高めるべく、毎週、小テストを実施した。 【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】 毎週記述式の課題を提出してもらい、受講生の理解度や考えを把握するよう努めた。課題の提出はTeamsの課題提出機能を利用した。また、Formsを活用し、クイズ形式（択一式）の小テストを毎週実施し、学生の理解度と共に授業参加度を調査した。小テストの解説は翌週に行った。 【期末アンケート結果から見た今後の課題】 アンケートの回答率は、95%であった。総合的な満足度（設問10）に関する肯定的な回答は97%以上である。「強く思う」は45%で決して悪くない。一方、さらに学びたいとなる（設問8）は、肯定的な回答が86%であり、14%が否定である。この否定的な回答は、改善を要する点である。授業では、条文を読んだり、抽象的な概念を説明したりする時間がどうしても必要であるが、より身近な例や学生が関心を持ちそうな話題を取り上げて、学生が今後も法学に興味や関心を抱き続けるよう、工夫を凝らしたい。	40	38	95.0%
広島	食と健康（Q4）	長尾 則男	当初測定体験を予定していましたが積雪等により移動困難となり実施できませんでした。言い訳ばかりで申し訳ございません。 授業の内容と小テストの内容がかみ合っていないので、授業の動画の中でも小テストの内容の解説をしてほしいとの要望がございましたが、それを講義内容に取り込みますと、資格試験に興味のない受講生にとっては苦痛になるかもと考えております。小テストの回答後に解説文が表示されるようにしましたので、それで復習しさらに自分で調べて理解を深めてもらえたらと思います。	103	31	30.1%
広島	生活に役立つ力学（Q3）広島C	吉野 浩生		58	45	77.6%
広島	地域社会と言語（Q4）広島C	小川 俊輔	【1. 昨年度の結果を踏まえた改善点】本科目は3キャンパス同時にオンラインで実施している。学生は画面オフなので、どのような姿勢・態度で授業に臨んでいるかが不明である。そこで、本科目で学生が取り組む3つの課題のうち2つは全員（実際には班ごとに学修している為、「全班」）が発表する機会を授業時間内に設け、能動的に参加するよう促した。残る1つの課題については、優秀者を選定し、当日その場で指名し、発表してもらった。この方法により、画面オフであっても、幾らか緊張感をもって授業に臨むよう導けたのではないかと考えている。【2. 履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】①上に書いたことの繰り返しになるが、全員（全班）が発表する機会を設け、履修者の反応を掴むようにした。②また、班別活動においては、teams内に班ごとのチャネルを設け、オンライン会議をする際には録画するように伝え、また、積極的に文字情報によって記録を残すよう指導した。この方法により、班別活動における各個人の様子を把握するよう努めた。③さらに、各班の課題発表の後、どの班の発表が良かったかを、Google formを用いて投票させ、その場で共有した。対面授業に比べると、オンライン授業には限界があることは否定しようがないけれども、以上のような方法を組み合わせ、その機会を増やし、講義者のモノローグにならぬよう、引き続き工夫を重ねたい。【3. 期末アンケート結果から見た今後の課題】3キャンパスすべての学生が、どの設問に対しても「強く思う」「そう思う」のいずれかを選択しており、また、以下の自由記述（○優秀レポートに選ばれると思わずとてもうれしかったです。地域言語以外にもレポートの考え方や観察力などさまざまなことを学ぶことができました。グループで何かする講義は新鮮で刺激をもらい、とても楽しい講義でした。ありがとうございました。○自分たちでテーマを考えてフィールドワークするという経験が初めてだったので、楽しかったです。○自由度高く、だけど規律ある「努力した者が報われる」講義スタイルが魅力的でした。これからもこのスタイルで続けてほしいと思います。）からも、「成功した授業」と総括できそうである。授業時間内に回答時間を設けたにも関わらずアンケートの回答率が低い点は課題である。工夫したい。	16	4	25.0%

■担当教員コメント（全学共通教育科目） 令和7年度後期

キャンパス	科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
広島	アカデミック・ライティング (Q3)	福田 涼	本講義は、大まかな授業計画と教科書をクラス間で共有しているものの、具体的な講義内容や授業運営の方法については、各教員の裁量に任されています。そのことについて、「毎回いただくフィードバックから、先生が学生の成長を促すために非常に熱心にご指導くださっていることを実感しています」といった意見もあれば、「教授によって授業の内容などが変わるのはやめてほしいです」といった意見も見受けられました。また「グループワーク活動において、活動における力の入れ方には差があるため、頑張った人が報われる形にして欲しかった」などといった声も上がっており、成績評価のあり方については再考を要する部分があると考えます。 運営の体制や教室環境については、担当教員の専門分野と受講者の所属コースとが一致しない場合に、説明の分野的な偏りが気になってしまう、という意見がありました。また「教室の大きさに対してテレビの画面が小さく、スライドの字も小さなので見えにくく感じる時がある」という指摘も見られました。前者については、次年度以降、受講生の専門により紐づいた形での授業が実施される予定です。後者に関しては、使用する教室や設備の見直しが必要であると思いますので、関係の部署にも情報を共有します。 授業内容に関しては、「今までレポートとは何かははっきり分からなかったけどこの授業を通して理解することができました」という、まさに「アカデミック・ライティング」の基礎を身につけることができたという感想が多く見受けられました。さらに「実際に他の授業のレポートにも活用できるのもよかった」、「個人でのライティングの能力だけでなくグループワークやプレゼン、グループでの論文作成の能力も伸ばすことができた」といった、関連する学問的な資質・能力を伸ばす上でも有益だったとの感想も散見されます。そして「レポートを交換してそれを他の人と評価しあう時間があり、自身のレポートの書き方の改善点がはっきり見えてよかった」、「グループワークで自分にはない視点や考え方を知ることができたのでよかった」といった、学生同士での協働それ自体が、有益な学びに繋がっている様子も窺えました。 本講義を通して身に付けた「大学生活で使える技術」や「大学生活において大切なこと」を、まさに今後の「大学生活」で活用して貰えることを、担当教員一同、期待しています。	219	122	55.7%
広島	クリティカル・シンキング (Q4)	岡田 高嘉	【昨年度の結果を踏まえた改善点】 授業当日の個人ワーク及びグループワークを円滑に進めるため、事前学修（授業外学修）をしっかりと行うよう促した。演習課題が難しいというコメントが散見されたので、ヒントを多く出して、一つ一つの演習問題に十分な時間をかけた。具体的には、まずは個人で課題に取り組む時間を多くとり、その後にグループで考える機会を設け、最後に教室全体で共有する時間を設けた。 【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】 毎回（毎週）ワークシートの提出を求め、授業内容の理解度や授業への参加度を確認した。また、身に付けた知識やスキルの今後の活かし方についても学生自身に考えてもらった。ワークシートの内容から、演習課題に取り組む前に、自分で考える時間をやや長くとり、その後、比較的短いグループワークを行う方がよいと考え、そのとおり実践した。 【期末アンケート結果から見た今後の課題】 アンケート回答率は62.9%であり、総合的な満足度（設問10）では97%程度が肯定的に回答している。そのうち「強くそう思う」と回答した割合は約50%である。自由記述を見ると、「自由に発言できる」、「深く考えさせられる質問や課題が多く、思考力が身に付いた」、「教室の雰囲気よかった」、「他人の意見や考え方を聞く機会が多く、自分の考えを深めることにつながった」など、肯定的な意見が多かった。しかし、その一方、「クラスによって課題の量（負担）が異なるのは公平な評価を妨げる」、「教科書の内容についてのレポートのフィードバックが行われず、クリティカルシンキングの力が身についたのかよくわからない」、「教科書が適正に利用されていなかった」など、この授業科目の実施運営体制や教員個人の資質や姿勢に疑問を呈するコメントもあった。このようなコメントは、真摯に受け止める必要がある。本科目は、クラス別で複数の教員が担当する。同一科目で同じ授業目標の下、複数の教員が担当すると、教員ごとに授業スタイルや扱う内容（テキスト等）が多少異なってくる。これをすべて統一することは容易なことではない。しかし、課題の量や受講生の満足度（学修効果）に大きな差を生んでしまっては大きな問題となる。この点は大いに反省せねばならない。	170	107	62.9%
広島	世界の言語と文化 (Q4) 広島C	河村 和也	この授業は3名の専任教員と2名の特別講師によるオムニバス授業です。担当者ごとにそれぞれの授業について感想や意見をもらえるよう努めています。が、このアンケートへの回答も全員で共有し来年度以降に活かしていきます。	180	98	54.4%
広島	スポーツ実技Ⅰf (Q3)	辻 文	1. 昨年度の結果を踏まえた授業改善点 本科目では技能の向上だけでなく、グループでの協働や主体的な活動を重視して授業を構成した。特に、学生自身が練習メニューを考え実践する機会を設け、自ら考え行動する力の育成を意識した。 2. 履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 授業中の活動状況や振り返りの内容を確認しながら、難易度や進行を調整した。 3. 期末アンケート結果から見た今後の課題 アンケートでは「能動的学修機会がある」に対して高い肯定的回答が得られ、主体的に取り組める授業となっていたと考える。自由記述では「様々な人と関われた」「健康のために良かった」「レベルに合わせた授業で楽しかった」といった意見が見られ、協働的な活動の意義は達成できた。一方で、練習メニュー作成の難しさを挙げる声もあり、支援方法については検討の余地がある。 「目標とする力が身につく」「総合的に満足している」などの設問で高い肯定的回答が得られ、授業の方向性は概ね適切であった。一方で、授業外学修時間が少ない学生が多いため、実技科目として自主的な運動習慣につなげる工夫を今後の課題とした。	37	30	81.1%

■担当教員コメント（全学共通教育科目） 令和7年度後期

キャンパス	科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
広島	スポーツ実技Ⅰb（Q4）	辻 文	1. 昨年度の結果を踏まえた授業改善点 本科目では技能の向上だけでなく、運動を通じたコミュニケーションや協働を重視して授業を構成した。グループでの活動を多く取り入れ、運動が得意でない学生も参加しやすい環境づくりに努めた。 2. 履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 授業中の様子や振り返りの内容から、活動の難易度や種目の進行を調整した。 3. 期末アンケート結果から見た今後の課題 アンケートでは「能動的学修機会がある」に対する肯定的回答が100%であり、主体的に取り組める授業となっていたと考える。また、「楽しかった」「知らない人も関わられた」といった記述も見られ、協働的活動の意義は一定程度達成できた。一方で、「違う種目もやりたかった」という意見もあり、種目構成については今後検討したい。「集中して取り組んでいる」「目標とする力が身につく」「総合的に満足している」などの設問で高い肯定的回答が得られ、授業の方向性は概ね適切であったと考える。一方で、授業外学修時間が十分でない学生も見られるため、実技科目としてどのような自主的取組が望ましいかをより具体的に提示することが今後の課題である。	36	31	86.1%
広島	英語総合Ⅳ（Q4）（西原）	西原 貴之	昨年度この授業はうまく運営することができたので、今年度も昨年度と同じ形式で実施をした。ただし、昨年度よりも学生への課題を少し増やしての実施とした。授業中にも学習者の英語ライティングをチェックする機会を増やし、学習者がどれくらい授業内容を習得しているか、共通した誤りがないか、といったことを丁寧に観察し、授業の指導に反映させた。結果として、学生はこの授業に対して、大変高い満足度を示してくれたようであった。来年度はセメスター制に戻っての実施となるため、授業での課題の出し方や授業内でのライティングチェックのタイミングなどを変更する必要があるが、今年度と同様な効果を学習者が感じてくれるように工夫をしたい。	7	5	71.4%
広島	英語表現Ⅳ（Q3）a（ボールドウィン）	P・ボールドウィン	受講生が楽しくたくさん学んだという意見を直接、またはTeamsでコメントをたくさんいただきました。このまま学生が学びたい表現などに耳向け、発音に慣れてもらいながらリアルな場面でどんどん英語で自分の伝えたい気持ちを表現できるよう、お手伝いして参ります（現状維持）	7	1	14.3%
広島	スポーツ実技Ⅱ（Q3）	辻 文	1. 昨年度の結果を踏まえた授業改善点 本科目では実技を通して主体的に取り組む姿勢と協働的な活動を重視して授業を構成した。個々の技能向上だけでなく、互いに支え合いながら活動できる環境づくりに努めた。 2. 履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 授業中の様子や活動への参加状況を確認しながら、練習内容や進行を適宜調整した。 3. 期末アンケート結果から見た今後の課題 アンケートでは「能動的学修機会がある」に対する肯定的回答が100%であり、主体的に取り組める授業となっていたと考える。自由記述はなかったが、各設問において概ね肯定的な評価が得られていることから、授業の方向性は適切であったと判断している。「目標とする力が身につく」「総合的に満足している」などの設問で肯定的回答が100%であった。一方で、授業外学修時間が少ない学生が多いことから、実技科目として自主的な体力づくりや技能練習の重要性をより具体的に示すことが今後の課題である。また、回答率がやや低かったため、アンケートへの積極的な回答を促す工夫も検討したい。	16	10	62.5%
広島	保健体育理論（Q4）	辻 文	1. 昨年度の結果を踏まえた授業改善点 本科目では「理論を実生活や将来の実践と結び付けて考えること」を意識して授業を設計した。単なる知識の習得にとどまらず、考える機会を増やすためにディスカッションや課題を取り入れ、能動的に学べる構成とした。 2. 履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 授業内での発言や提出課題の内容を通して理解度や負担感を把握し、必要に応じて補足説明を行った。 3. 期末アンケート結果から見た今後の課題 アンケート結果では「能動的学修機会がある」に対する肯定的回答が100%であり、授業形態の意図は概ね伝わっていたと考える。一方で、自由記述では課題量やテスト前の負担についての指摘があったため、課題の配分や提示時期については改善の余地があると認識している。「授業に集中して取り組んでいる」「目標とする力が身につく」「総合的に満足している」といった設問では高い肯定的回答が得られた。一方で、授業外学修時間が十分でない層も見られること、課題量に関する意見があったことから、学修の質を保ちながら負担のバランスを調整することが今後の課題である。また、教室マイクの不具合についての指摘もあったため、授業環境の改善にも努めたい。	79	58	73.4%
広島	プレゼンテーション演習（Q4）	村上 恵子	【昨年度の結果を踏まえた改善点】 昨年度の授業評価では、ほぼすべての設問において肯定的な評価を得たが、教材に対する否定的な回答割合が12%と若干高く、自由記述欄に教科書は無い方がよいというコメントもあった。しかし、この科目は全学共通教育科目であり、3キャンパスで同じテキストを使用し、同内容で授業を行う必要があるため、今年度は授業開始前に教科書の活用について担当教員間で再確認した。 【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】 1クラスあたりの学生数が18～19名の少人数演習授業であるため、毎回、課題の進捗状況を確認したり学生からの質問に回答したりする等、履修者と密にコミュニケーションを取りながら授業を進め、学生からの要望にはその都度対応するよう心掛けた。 【期末アンケート結果から見た今後の課題】 今年度も概ね良好な評価を得たが、一部にクラス間の授業運営の差異に関する指摘が見られた。この指摘は、1つの科目を複数クラスで開講する際の担当者間の連携・調整の必要性を示すものである。本授業は今年度で開講を終了するため、得られた示唆は他の授業改善に活用したい。	93	51	54.8%

■担当教員コメント（全学共通教育科目） 令和7年度後期

キャンパス	科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
広島	国際社会の理解（Q3）広島C	上水流 久彦	オンラインの授業で顔を出さず、グループワークでも発言しない学生がいるという意見があった。来年度では、この点について対応するようにしたい。	102	23	22.5%
広島	キャリアビジョン（デベロップメント）（Q3）	原田 淳	いずれの設問に対する回答も「強くそう思う」、「そう思う」が大半であった。【昨年度の結果を踏まえた授業改善点】学生の理解を促すため、前提となる情報や知識を絞り込んで丁寧に解説を行うように変更しまた、毎回、商品企画のどの段階に取り組んでいるのか示したうえで、グループワークにより少しずつ課題を進めるようにした。また、授業でのAIの使い方について具体的にプロンプト例を示して活用をうながした。【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】受講カードに意見、感想、質問を記すよう求めて、質問に対しては翌週の講義冒頭で回答した。また、グループワークの際には教員が各グループを巡回して質問への対応や助言を行うようにした。【アンケート結果から見た今後の課題】自由記述の回答において、グループでの活動を前向きにとらえているコメントが複数見られた。今後もグループワークの際の質問対応や支援・助言をきめ細かく行いたい。また、実務家教員による授業を高く評価するコメントもあった。	60	16	26.7%
広島	インターンシップ（Q1・Q2火曜ペア）	原田 淳	すべての設問において「強くそう思う」、「そう思う」の回答が大半であった。【昨年度の結果を踏まえた授業改善点】インターンシップの事前学習では、座学だけでなくビジネスマナーの実践的な演習やプレゼンテーション講座など、就業体験に必要な内容を行った。【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】インターンシップ先の調整は、担当の教職員が学生の意向を聞きながら実施した。また、質問・相談に対しては、授業中だけでなく、随時キャリアセンターにおいても対応を行い、不安なく就業体験に臨めるよう配慮した。【アンケート結果から見た今後の課題】インターンシップを有意義だとしてらえている自由記述の回答が複数みられた。来年度の授業初回にはインターンシップ参加者の体験報告を実施する予定である。	29	16	55.2%
広島	多様性理解（ジェンダー論）（Q3）広島C	澤田 千恵		117	25	21.4%
広島	人間関係論（Q3）	勝見 吉彰		151	32	21.2%
広島	人権論（Q4）	岡田 高嘉	【昨年度の結果を踏まえた改善点】 昨年度までは、全面オンライン授業で実施していた。学生は任意の場所で自分のノートPC等を活用し、受講するスタイルである。昨年度の自由記述で、オンライン授業よりも対面授業がよい（とりわけグループワーク時）というコメントが散見されたので、今年度からオンラインと対面の併用型、いわゆるハイフレックス型で実施することとした。【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】 毎週記述式の課題を提出してもらい、受講生の理解度や考えを把握するよう努めた。課題の提出はTeamsの課題提出機能を利用した。また、Formsを活用し、クイズ形式（択一式）の小テストを毎週実施し、学生の理解度と共に授業参加度を調査した。小テストの解説は翌週に行った。 2100133_人権論（Q4）【期末アンケート結果から見た今後の課題】 アンケート回答率は44.1%である。授業時間中にアンケート回答時間を確保したにもかかわらず、回答率が低かった。回答率が半分を下回ると、あまり参考にならないかもしれないが、総合的な満足度（設問10）は肯定的回答が100%であり、「強くそう思う」が53%である。一方、授業外学修時間の質問項目（設問2）では、「全くしていない」が20%、「2時間未満」が47%であり、大きな問題を感じざるを得ない。総合的な授業満足度（設問10）は、しばしば単位修得可能性又は単位の修得のしやすさが大きな影響を及ぼすと考えられるところ、上記の満足度100%の裏には、結局、単位が比較的容易（授業外学修なし）に修得できそうだという期待があると考えざるを得ない。実際に単位が修得しやすいか否かは別として、そのように受け取られているのは大きな問題である。そのように受け取る理由として、①期末試験は実施せずに、期末レポートで評価をすること、②毎週の小テストが比較的易しいこと、などが考え得る。来年度に向けては、これらの点を再考したい。	34	15	44.1%
広島	世界の宗教（Q4）	上水流 久彦	概ね、満足度の高い結果となった。ただ、他のキャンパスのアンケートには問題点の指摘もあり、その指摘も踏まえ、次年度の授業内容について検討したい。	98	11	11.2%

■担当教員コメント（全学共通教育科目） 令和7年度後期

キャンパス	科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
広島	韓国語Ⅱc（Q4）	鄭 銀志	今回の授業アンケートは回答率が35.8%にとどまっているものの、回答内容から判断する限り、本授業に対する評価は総じて高い水準にあるといえる。多くの学生が積極的に授業に参加しており、韓国語によるプレゼンテーション、小テスト、期末テストにおいて優れた成果を収め、満点に近い高得点を取得した学生が複数見られたことから、学修成果の高さがうかがえる。 設問1「授業に集中し、真剣に取り組んでいる」では肯定的回答が100%（「強くそう思う」70%）であり、受講者が主体的かつ意欲的に学修に取り組んでいることが確認できる。また、設問10の総合満足度においても全員が肯定的に回答し、そのうち60%が「強くそう思う」としていることから、本授業は受講者の期待に応える内容であったと評価できる。 さらに、設問6「授業の目標とする力が身につく」、設問8「さらに学びたいくなる」においても肯定的回答が100%であり、語学力の向上を目標とする授業として、到達目標の達成および学習意欲の喚起という点で成果を上げていると判断できる。設問4の能動的学修機会についても全員が肯定的に評価しており、教員が事前に撮影した動画を用いた予習と、授業内での実践活動を組み合わせた構成は適切であったと評価できる。特に韓国語によるプレゼンテーションでは、全員が興味深い内容を高い水準で発表しており、実践的な言語運用能力の向上がうかがえた。加えて、設問5・7・9の結果から、課題の量および内容、教材・教具の適切性、学修支援体制はいずれも十分に機能していたと判断できる。 一方で、設問2の授業外学修時間については、「2時間未満」と回答した学生が40%を占めており、今後の課題として位置づけられる。設問3の結果から課題提示自体は概ね適切であったと考えられるが、今後は授業内容とより密接に連動した継続的学修の仕組みを整え、授業外学修時間の質および量の向上を図る必要がある。 なお、自由記述欄には肯定的な意見が多く寄せられており、学生が意欲的かつ楽しみながら学修していた様子がうかがえることから、本授業に対する高い満足度が示された。 次年度も、学生一人一人の学修成果を最大化するとともに、高い満足度を維持・向上させることを目標として、継続的な授業改善に取り組んでいきたい。	28	10	35.7%
広島	韓国語Ⅱd（Q4）	鞠 承姫	授業では、テキスト内容を応用して自ら会話を構成する活動を重視した。単なる問題演習にとどまらず、実際に話すことを通して理解を深めることを目的とした。継続的な練習により表現の定着を図った。今後は、学習段階に応じた課題設定をさらに工夫したい。	36	12	33.3%
広島	英語表現Ⅳ（Q4）b （ボールドウィン）	P・ボールドウィン	受講生が楽しくたくさん学んだという意見を直接、またはTeamsでコメントをたくさんいただきました。このまま学生が学びたい表現などに耳向け、発音に慣れてもらいながらリアルな場面でどんどん英語で自分の伝えたい気持ちを表現できるよう、お手伝いして参ります（現状維持）	3	1	33.3%
広島	地域教養ゼミナールA（エリア型）（Q3）d （大学生による児童館プロジェクト）	松宮 透高	3キャンパスから履修があったが実質的には三原Cのみの受講であった。6名（50.0%）の回答であった。準備学習を経て、3週間にわたり児童館「ラフラフ」で活動を行った。来館した子どもや保護者との交流、里親会との交流では里親、里子との直接的な交流体験もすることができた。大半の項目で「強くそう思う」との評価であったが、授業外での課題は最終報告パワーポイント程度であったため、若干授業外学習が短いとする回答もあった。自由記述では「ほんとうに良い授業でした」とのコメントもあり、この科目でなければ体験できなかったこと、出会えなかった人たち、することが無かったであろう情報に触れる機会があった。今後ともプログラムを工夫し、リアルな社会課題に出会い、考え、働きかける経験が詰める科目として育てていきたいと考えている。	0	0	—
広島	地域教養ゼミナールA（エリア型）（Q3）c （特産品から地域資源）	荻田 信二郎	メッセージコメントありがとうございます。 まず本講義に際しまして通常座学はオンライン配信、フィールドワークは各自事前計画の上、本通りサテライトキャンパスにて実施しております。受講生が各キャンパスから多数いらっしゃいましたので、私の方で準備した情報が少ない回もあったと思います。 機会があれば、少人数、内容自体を濃くした講義として展開すると良いかもしれません。頂いたコメントを参考に改善に努めます。 なお、疑問に思ったことは 各自調べる、Forms等を活用して質問するなど 機会を設けました。 こちらを積極的に活用していただければ幸いです。	67	6	9.0%

■担当教員コメント（全学共通教育科目） 令和7年度後期

キャンパス	科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
広島	地域教養ゼミナールC (複合型) (Q3) n (宮島観光学入門 (英語))	馬本 勉	宮島を英語でガイドする力を身につける本授業は、5日間の集中講義中3日間を教室での英語演習、2日間を宮島でのフィールドワークにあてて実施した（①ガイド予定箇所の実地見学と英語演習、②叡啓大学の留学生3名に対する英語ガイド実践演習）。集中講義初日と最終日に行った科目ループリック自己評価（6観点、各5段階評価）の結果から、履修学生が授業を通じて成長を実感している様子が見て取れた。 集中講義期間中、のべ8名の本学教員からピアレビューを受けることができた。最終回に寄せられた本学教員のコメントの一部を紹介したい。「当初は片言でしか英語を話せなかった学生たちが、このゼミナールを通して、自分で考えた英文をすらすらと話し、堂々とガイドできるようになっていたことは本当に素晴らしいことです。特に、フィールドワークで外国人留学生と1対1で英語で対話し、コミュニケーションをとる姿は、生き生きとしていて印象的でした。」 本授業には、留学生在がガイドされる側として、また、かつての履修生がアドバイザーとして参画し、さらに先取り履修の高校生も受け入れるなど、授業そのものが「多文化交流」を実践する場となっている。この点は、授業者の期待を上回る様々な相乗効果を生み出していると感じる。授業アンケートでは好意的な評価が得られ、自由記述では「異なる学年の人と学ぶことでたくさん刺激を受けることができた。協力し合って、良い時間が過ごせたと思う」とのコメントが見られた。 宮島学センターのミッションの一つである「宮島学教育」を担う科目の一つとして、本学の教育資源と、地域の持つ教育力を最大限に活かしつつ、次年度以降も一層充実した授業を目指していきたい。	2	1	50.0%
広島	地域教養ゼミナールA (エリア型) (Q3) e (地域課題の解決に向けた住民活動)	手島 洋	昨年度に続けて地域の課題について具体的に理解できるような授業を工夫した。また、少人数の授業の利点を生かし、対話型の演習による授業方法を行った。十分なアンケート回答数はなかったが、一定の学生の理解を図ることができたと考えている。	1	0	—
広島	地域教養ゼミナールB (テーマ型) (前期集中) k (広島県内の高校生と)	飯田 忠行	1) 昨年度の結果を踏まえた授業改善点 昨年度、授業評価への記載がなかった。今年度は、積極的に高校へ訪問し、ディスカッションを促した。また、イベントへの参加も促した。 2) 履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 高校生とのディスカッションを踏まえ、参加した当日の話し合いの内容をTeams上で共有した。また、高校生のプレゼンテーションについてコメントをさせた。 3) 期末アンケート結果から見た今後の課題 期末アンケートより、すべての項目で肯定100%であり、概ね良好な結果であった。	0	0	—
広島	地域教養ゼミナールA (エリア型) (Q4) g (宮島学・文化観光の提案)	大知 徳子		23	9	39.1%
広島	地域教養ゼミナールB (テーマ型) (Q3) m (宮島学・歴史資料活用)	大知 徳子		5	3	60.0%
庄原	ICTリテラシーⅡQ3(E)(2019 以前情報リテ演習読替)	谷垣 悠介	昨年度よりかなりレベルを下げた講義だったが、取り組み態度の差がそのままレポートに反映されているように感じられた。	40	13	32.5%
庄原	ICTリテラシーⅡQ3(F)(2019 以前情報リテ演習読替)	谷垣 悠介	昨年度よりかなりレベルを下げた講義だったが、取り組み態度の差がそのままレポートに反映されているように感じられた。	11	3	27.3%
庄原	英語総合ⅢQ3(A)	河村 和也	7人という小さなクラスの授業でしたが、そのうち5人の方から回答をいただき、いずれも肯定的なものであったことをうれしく思っています。授業外の学修をいかに促すか、引き続き考えていきたいです。 自由回答の欄には以下のコメントをいただきました。この授業のねらいとするとところをきちんと受け止めていただき、ありがたく思っています。 「この講義を履修しなかったら、英語でことわざを学ぼうと思わなかったと思うし、オ・ヘンリーの作品も読まなかったと思います。英語以外にも豆知識みたいなものもたくさん知ることができて、楽しかったです。」	7	5	71.4%

■担当教員コメント（全学共通教育科目） 令和7年度後期

キャンパス	科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
庄原	英語総合III Q3(B)	笠本 晃代	・ 昨年度の結果を踏まえた授業改善点 例年、設問4が他の質問項目よりも低くなる傾向があるあるため、できる限りグループごとに意見を発信できる機会を作った。しかしながら、「強くそう思う」が50%に達していなかったことから、このパーセンテージを上げられるように努力を続けていかなければならないと感じている。 ・ 履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 積極的に机間巡視を行い、受講者の理解度を把握するよう努めたつもりではあったが、より受講者に寄り添い、質問しやすい環境作りの工夫をしたいと考えている。 ・ アンケート結果から見た今後の課題 設問6、設問7、設問8、設問9の各質問項目において、「強くそう思う」が50%以上になるように、受講者の興味・関心を最大限に引き出す授業展開を目指したい。 また、TOEIC形式の問題を解く際にも、できる限りグループでの活動を検討していきたいと考えている。	53	14	26.4%
庄原	英語総合IV Q4(A)	馬本 勉	本授業は2年次の選択科目として開講しているが、1年次までの基礎的な知識・技能に加え、より実践的な英語スキルを高めるため、映画によるリスニング、英文ニュースの読解を中心とした演習を行なった。さらに、履修学生自ら選んで教材化する「Pleasure Reading / Pleasure Listening」や、言語に関する様々な関心事を「Language News」として発表し合う活動を盛り込み、既存の知識・技能を応用する機会を設けた。アンケートでは、履修学生の積極的な取り組みと、好意的な評価を見て取ることができた。 授業後には感想や質問等の記入を求め、次の回到返却する「コメントシート」の往復を続け、毎回の小さな授業改善に役立てた。第二言語習得理論からヒントを得た学習活動の意義を履修学生も理解し、共に授業を作り上げていく経験をすることができた。次年度も一層の学習意欲を引き出す授業を心がけたい。	5	2	40.0%
庄原	英語総合IV Q4(B)	笠本 晃代	・ 昨年度の結果を踏まえた授業改善点 例年、設問4が他の質問項目よりも低くなる傾向があるあるため、できる限りグループごとに意見を発信できる機会を作った。しかしながら、「強くそう思う」が50%程度にとどまったことから、このパーセンテージを上げられるように努力を続けていかなければならないと感じている。 ・ 履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 積極的に机間巡視を行い、受講者の理解度を把握するよう努めたつもりではあったが、より受講者に寄り添い、質問しやすい環境作りの工夫をしたいと考えている。 ・ アンケート結果から見た今後の課題 設問6、設問7、設問8、設問9の各質問項目において、「強くそう思う」が50%以上を維持できるように、受講者の興味・関心を最大限に引き出す授業展開を目指したい。 また、TOEIC形式の問題を解く際にも、できる限りグループでの活動を検討していきたいと考えている。	35	12	34.3%
庄原	英語表現Ⅰ Q3(A)	Clingwall Dion		22	5	22.7%
庄原	英語表現Ⅰ Q3(B)	マイケル ホーム	It appears that the large majority of the class is satisfied with the English lessons for the third quarter. I will continue to present lessons that challenge the students' thinking skills while they interact with each other to advance their abilities in speaking English and engaging in higher critical reasoning. I may have to consider the feelings of a student regarding his or her perception of the curriculum and how to make the student feel more at ease even though the students' communication of the feelings are unclear.	35	23	65.7%
庄原	英語表現Ⅰ Q3(C)	Clingwall Dion		36	10	27.8%
庄原	英語表現Ⅰ Q3(D)	Clingwall Dion		36	8	22.2%
庄原	英語表現Ⅰ Q3(E)	マイケル ホーム	It appears that the large majority of the class is satisfied with the English lessons for the third quarter. I will continue to present lessons that challenge the students' thinking skills while they interact with each other to advance their abilities in speaking English and engaging in higher critical reasoning. I may have to acquiesce to some of their requests to display class materials in order to amend any lack of understanding on the part of some students.	22	16	72.7%
庄原	英語表現Ⅱ Q4(A)	Clingwall Dion		23	2	8.7%

■担当教員コメント（全学共通教育科目） 令和7年度後期

キャンパス	科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
庄原	英語表現Ⅱ Q4(B)	マイケル ホーム	I will continue to encourage participation in class as I have always done. I will work on engaging the students more in activities that will promote their interest in the English language allowing technological devices that support learning while discouraging distractions via such devices. I will seek for ways to improve the support that students need.	34	17	50.0%
庄原	英語表現Ⅱ Q4(C)	Clingwall Dion		35	8	22.9%
庄原	英語表現Ⅱ Q4(D)	Clingwall Dion		35	7	20.0%
庄原	英語表現Ⅱ Q4(E)	マイケル ホーム	I will continue to encourage participation in class as I have always done. I will work on engaging the students more in activities that will promote their interest in the English language allowing technological devices that support learning while discouraging distractions via such devices. I will seek for ways to improve the support that students need.	22	5	22.7%
庄原	中国語Ⅱ Q3(A)庄原C	徐 亜文	【昨年度の結果を踏まえた授業の改善点】 昨年度の授業では、学生の多くが集中して真剣に取り組む姿が見られた。課題の内容や量、教材・教具も適切で、学習内容の定着につながり、多くの学生が授業に満足していた。一方で、課題も明らかになった。授業内容については「さらに学びたい」と感じない学生がわずかながらも見られた。今後の改善策としては、授業外学修の成果をより細かく確認できる方法を導入するとともに、授業内容をより楽しく興味を引くものにする工夫を行いたい。 【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた改善点】 中国語学習において、日本人学習者にとって発音は最も大きな課題の一つである。そのため、テキストのデジタル版を活用し、音声や映像を取り入れながらスキットを用いた会話練習を実施した。その結果、学生からは「実際の場면을イメージしながら楽しく練習できる」「自然に頭に入り、定着しやすい」といった肯定的な反応が得られた。今後は、発音練習の時間をさらに確保し、個別フィードバックの機会を増やすことで、より効果的な学習につなげていきたい。 【アンケート結果から見た今後の課題】 多様な教材・教具を積極的に活用し、学習意欲を高める魅力ある授業づくりを一層推進する必要がある。また、授業外学修の実施状況を的確に把握できるよう、課題の内容や分量を工夫し、学習成果が可視化できる仕組みを整えることが求められる。さらに発音学習については、テキストのデジタル版の活用に加え、ペアワーク等の多様な学習方法を取り入れ、より高い学習効果を目指したい。	24	7	29.2%
庄原	中国語Ⅱ Q3(B)庄原C	徐 亜文	【昨年度の結果を踏まえた授業の改善点】 昨年度の授業では、多くの学生が集中して真剣に取り組む姿が見られた。課題の内容や分量、教材・教具の活用も概ね適切であり、学習内容の定着につながったと考えられる。授業満足度も比較的高い結果であった。一方で、課題も明らかとなった。授業外学修時間が週1時間未満にとどまる学生が一定数存在していた点である。今後は、授業外学修の成果をより具体的に把握できる方法を導入し、学修状況を可視化する仕組みを工夫することで、主体的な学習を促進したい。 【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた改善点】 中国語学習において、日本人学習者にとって発音は最も大きな課題の一つである。そのため、テキストのデジタル版を活用し、音声や映像を取り入れながらスキットを用いた会話練習を実施した。その結果、学生からは「実際の場면을イメージしながら楽しく練習できる」「自然に頭に入り、定着しやすい」といった肯定的な反応が得られた。今後は、発音練習の時間をさらに確保し、個別フィードバックの機会を増やすことで、より効果的な学習につなげていきたい。 【アンケート結果から見た今後の課題】 多様な教材・教具を積極的に活用し、学習意欲を高める魅力ある授業づくりを一層推進する必要がある。また、授業外学修の実施状況を的確に把握できるよう、課題の内容や分量を工夫し、学習成果が可視化できる仕組みを整えることが求められる。さらに発音学習については、テキストのデジタル版の活用に加え、ペアワーク等の多様な学習方法を取り入れ、より高い学習効果を目指したい。	4	0	—
庄原	韓国語Ⅱ Q3(A)庄原C	鞠 承姫	本授業では、本文暗記とペアによる会話発表を中心に、発話の機会を多く設けた。繰り返し声に出して練習することで、日常会話表現の定着を目指した。映画などの映像資料も取り入れ、学習内容を実際の使用場面と結び付けられるよう工夫した。今後は、学習内容を整理する時間をより充実させていきたい。	44	9	20.5%
庄原	韓国語Ⅱ Q3(B)庄原C	鞠 承姫	授業は例文暗記を基礎とし、それを応用した会話作成と発表を継続的に行った。実際に使う活動を通して、実践的な運用力の育成を図った。発音や文法については適宜説明を加え、理解の定着に努めた。今後は、活動前後の振り返りを工夫し、より効果的な学習につなげたい。	18	3	16.7%
庄原	アカデミック日本語Ⅱ Q3 (留学生のみ)	中石 ゆうこ	おおむね良好な評価であった。「設問3 この授業では授業時間外に取り組むべき課題が示されている。」において、「そう思わない」という評価が1件のみあった。毎回宿題として、課題は出していたが、それ以上学びたいときに追加の課題を設定するように求めているのかもしれない。次回は学期途中にニーズを聞く機会を持ちたい。	5	5	100.0%

■担当教員コメント（全学共通教育科目） 令和7年度後期

キャンパス	科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
庄原	スポーツ実技ⅡQ3：地域資源開発学科	楠堀 誠司	授業内容を大幅に修正したためか、そもそも履修者が極端に少なく、かつ、授業に出席しないため、授業の実施もアレンジしながらになるのは避けられなかったが、アンケートの回答もなかったのは教員としては残念です。	3	0	—
庄原	保健体育理論Q4	楠堀 誠司	資料については配付は改善します。 RnnKeeperの使用や提出レポートは、授業内で説明しておりますが、「何がダメなのか」という視点からの説明では残念ながらうまく理解してもらえないようです。しかしながら、ここは学生自身が考えるべき部分であると思いますので、何がダメなのか考えてもらって実施したいと思います。	52	34	65.4%
庄原	芸術Q3(庄原C)	佐々木 悠	今年度は久しぶりの授業担当であり、本科目は3キャンパス同时对面およびオンラインで実施した。授業当初、授業中に把握した学生のコメントから、オンライン授業時に音声聞き取りにくいとの指摘が散見された。第3回目以降は、教学課およびTAと連携し、オンライン授業におけるトラブルを回避できるよう事前準備を徹底した。履修者の反応を把握するため、学期中に実施した方法およびその結果を踏まえた授業改善として、毎週、授業内で問となる課題を提示し、それについて意見を共有した上で、さらに各自が自らの考えを深める機会を設けた。翌週には簡単なフィードバックを行うよう努めた。 期末アンケートの結果からは、授業内課題をさらに増やしてほしいとの意見や、新たな知見が得られたとの肯定的な回答が多く見られた。一方で、教員からのコメントを返すタイミングに関する意見もあったため、今後は学生とのコミュニケーション方法についてさらに検討していきたい。また、履修者数が非常に多く、十分にきめ細かなフォローができなかった点についても、来年度に向けて改善を図りたい。	71	11	15.5%
庄原	心理学Q4	坪田 雄二	36名中7名の回答であるが、時間外学修以外の項目では概ね、高い評価を得ているようである。ただ、受講者同士のディスカッションなどについてはその機会を設けておらず、そのような機会を望む声も上がっているようなので、今後の講義では取り入れていくことを考えている。	36	7	19.4%
庄原	基礎数学Q3後期集中	岩田 貴樹		9	4	44.4%
庄原	統計入門Q4 (2019以前統計学読替)	岩田 貴樹		31	8	25.8%
庄原	家族社会学Q4(庄原C)	澤田 千恵		54	6	11.1%
庄原	法学Q3	岡田 高嘉	【昨年度の結果を踏まえた改善点】 例年、本科目は新遠隔システム講義室を活用していたが、今年度は受講者数の関係で、新遠隔システム講義室を用いず、3Cの教室をZOOMでつないだハイブリット型の授業を行った。この形態の授業は、準備に時間を要したり、通信トラブル等に見舞われたり、いろいろ困難に直面することが多いが、われわれ教職員（及びTA）も慣れてきたので、トラブルは減ったと思われる。また授業内容の見直しを行い、今年度は近年注目されている「情報法」を取り上げた。遠隔授業では、受信キャンパスの学生の参加意欲や集中力が低下する傾向にあるため、授業への参加意欲を高めるべく、毎週、小テストを実施した。 【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】 毎週記述式の課題を提出してもらい、受講生の理解度や考えを把握するよう努めた。課題の提出はTeamsの課題提出機能を利用した。また、Formsを活用し、クイズ形式（択一式）の小テストを毎週実施し、学生の理解度と共に授業参加度を調査した。小テストの解説は翌週に行った。 【期末アンケート結果から見た今後の課題】 アンケートの回答率は、56.3%であった。回答時間を確保したにもかかわらず、回答率が低い結果となった。オンライン遠隔授業なので、受信キャンパスでは、このような結果になるのかもしれない。質問項目に対する回答のうち、全体的に否定的な回答が、他キャンパスに比して多い。さらに学びたい（設問8）の項目は、否定的回答が33%にのぼる（うち、全くそう思わないは11%）。全学共通教育科目は、専門性に関係なく、ひとしく同じ内容の授業を受けるのが基本であるところ、3キャンパスの学生の専門性によっては、授業の受け取り方や理解度が異なるのは、やむを得ないことかもしれない。しかし、このようなキャンパス間の格差は極力抑える努力は続けなければならない。授業では、より身近な例や学生が関心を持ちそうな話題を（それぞれの専門性に留意しつつ）取り上げて、学生が今後も法学に興味や関心を抱き続けるような授業実践を心がけたい。	16	9	56.3%
庄原	食と健康Q3 (2019以前生活化学読替)	長尾 則男	授業の内容と小テストの内容がかみ合っていないので、授業の動画の中でも小テストの内容の解説をしてほしいとの要望がございましたが、それを講義内容に取り込みますと、資格試験に興味のない受講生にとっては苦痛になるかもと考えております。小テストの回答後に解説文が表示されるようにしましたので、それで復習しさらに自分で調べて理解を深めてもらえたらと思います。	114	27	23.7%
庄原	生活に役立つ力学Q3(庄原C)(2019以前物質科学読替)	吉野 浩生		67	32	47.8%

■担当教員コメント（全学共通教育科目） 令和7年度後期

キャンパス	科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
庄原	地域社会と言語Q4(庄原C)	小川 俊輔	【1. 昨年度の結果を踏まえた改善点】本科目は3キャンパス同時にオンラインで実施している。学生は画面オフなので、どのような姿勢・態度で授業に臨んでいるかが不明である。そこで、本科目で学生が取り組む3つの課題のうち2つは全員（実際には班ごとに学修している為、「全班」）が発表する機会を授業時間内に設け、能動的に参加するよう促した。残る1つの課題については、優秀者を選定し、当日その場で指名し、発表してもらった。この方法により、画面オフであっても、幾らか緊張感をもって授業に臨むよう導けたのではないかと考えている。【2. 履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】①上に書いたことの繰り返しになるが、全員（全班）が発表する機会を設け、履修者の反応を掴むようにした。②また、班別活動においては、teams内に班ごとのチャンネルを設け、オンライン会議をする際には録画するように伝え、また、積極的に文字情報によって記録を残すよう指導した。この方法により、班別活動における各個人の様子を把握するよう努めた。③さらに、各班の課題発表の後、どの班の発表が良かったかを、Google formを用いて投票させ、その場で共有した。対面授業に比べると、オンライン授業には限界があることは否定しようがないけれども、以上のような方法を組み合わせ、その機会を増やし、講義者のモノログにならぬよう、引き続き工夫を重ねたい。【3. 期末アンケート結果から見た今後の課題】3キャンパスすべての学生が、どの設問に対しても「強くそう思う」「そう思う」のいずれかを選択しており、また、以下の自由記述（〇優秀レポートに選ばれると思わずとでもうれしかったです。地域言語以外にもレポートの考え方や観察力などさまざまなことを学ぶことができました。グループで何かする講義は新鮮で刺激をもらい、とても楽しい講義でした。ありがとうございました。〇自分たちでテーマを考えてフィールドワークするという経験が初めてだったので、楽しかったです。〇自由度高く、だけど規律ある「努力した者が報われる」講義スタイルが魅力的でした。これからもこのスタイルで続けてほしいと思います。）からも、「成功した授業」と総括できそうである。授業時間内に回答時間を設けたにも関わらずアンケートの回答率が低い点は課題である。工夫したい。	23	5	21.7%
庄原	アカデミック・ライティングQ3（河村先生）	河村 和也	履修者15人のうち11人の方から回答をいただきました。ほぼすべて肯定的な回答であったことをうれしく思います。 授業外学修の時間が極端に短い方がいましたが、レポートの課題を提出するためにはその時間では足りないと思いますので、算定の方法に誤解があったのかなと思っています。さらに学びたいとなるとは思わないという方もいましたが、ものを書くということの大切さについて伝えられるよう、わたくし自身も学びを続けていきたいと思います。 この授業では1対1の対面により提出されたレポートについてコメントをする機会を多く取りましたが、自由記入欄へのコメントを読み、その機会を通じて深みのあるやり取りができていたのかもしれないと考えています。	15	11	73.3%
庄原	アカデミック・ライティングQ3（古山先生）	古山 真一	（1）昨年度の結果を踏まえた授業改善点 昨年度は前任教員が担当しており、本年度より担当を引き継いだ。本授業は、レポート作成方法の習得を主たる目的としている。そのため、完成度の高いレポートを匿名化したうえで学生に配布し、優れている点および改善点についてグループディスカッションを行い、各グループから報告させる形式で授業を実施した。また、各自のレポート返却時には、グループディスカッションの時間を活用してマンツーマンでの個別指導を行い、文章構成や論理展開、表現方法について具体的な助言を行った。（2）履修者の反応を把握するために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 授業外学修時間の確保を目的として、レポート課題を比較的多く設定した。提出されたレポートの完成度や理解状況を総合的に把握し、それを踏まえて授業の進捗や解説内容を適宜調整することで、学生の理解度向上を図った。（3）アンケート結果から見た今後の課題 教員が一方向的に知識を伝達するのではなく、学生に多様な意見を出させる授業スタイルが、主体的な学びの促進につながっていると思われた。今後もこの双方向型の授業形態を継続したい。また、レポート返却時のマンツーマンによる個別指導についても、学修効果を高める取り組みとして、引き続き実施していく予定である。	14	10	71.4%
庄原	アカデミック・ライティングQ3（村田先生）	村田 和賀代		16	2	12.5%
庄原	アカデミック・ライティングQ3（馬淵先生）	馬淵 良太	アンケートの回答率は、10/18人（55.6%）であった。ある程度の回答率であったが、次年度はまず回答率が向上するように学生に促したい。アンケート結果については、多くの回答で「強くそう思う」「そう思う」の割合が高かったことから一定の授業の質が保てたと考える。設問10では、「強くそう思う」60%、「そう思う」40%であり、総合的な授業の満足が得られた。そのため、次年度も本年度をベースに授業の質を保ちつつ、改善できるところは改善し、よりよい授業構築を行う。自由回答では、【授業で丁寧に解説してもらったことを、実践的に学べるところがとても良いと思った。事例ごとに学ぶことで、よい「レポートの書き方」に近づいていけると思った。】とあり、学生が作成したレポートに対し、添削し個別に学生へ解説したことが良かったと考える。次年度も実践的にレポート作成ができるような授業を行う。	18	10	55.6%
庄原	アカデミック・ライティングQ3（岡田先生）	岡田 守弘	アンケート回答者数 12人 / 16人中で、ほとんどの項目に関して、強くそう思う、そう思うであったため、この授業の当初の目標は達成されたと思う。ただ、Wi-Fi通信が快適に使えるようにしてほしいです、という要望があった。授業にパソコンを使って文献の調べ方を教えた回があったが、電波が弱く非常に苦労したため、大学と相談して改善したい。	16	12	75.0%

■担当教員コメント（全学共通教育科目） 令和7年度後期

キャンパス	科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
庄原	アカデミック・ライティング Q3（馬本先生）	馬本 勉	本授業は、学術的な文章を書くスキルの向上を目指しているが、ライティングの「型」に加えて、「アカデミックとは何か」を掘り下げる活動を取り入れた。具体的には、毎回「私のアカデミック・ニュース」を紹介し合うグループワークの時間を設け、日々の関心事をどう科学的な思考に近づけていけるかを問いつけた。アンケートでは、履修学生の積極的な取り組みと、好意的な評価を見て取ることができた。自由記述には「アカデミックニュースという取り組みによって、何事にも興味を持ち探求していく姿勢が促されたと強く思う」というコメントがあり、授業者の意図が通じたものと思われる。授業後には感想や質問等の記入を求め、次の回に返却する「コメントシート」の往復を続け、毎回の小さな授業改善に役立てた。3年間この授業を担当し、今年度が最後となったが、大学1年生の学術的な探究心を少しでも揺さぶることができたとしたら幸いである。	15	4	26.7%
庄原	アカデミック・ライティング Q3（金岡先生）	金岡 雅浩	本講義の履修者は15名であった。授業評価アンケートは最終回の講義中に提出するように呼びかけたところ、最終回の出席者11名中10名が回答した。各設問の回答を見ると、概ね良い評価が並んでいた。自由記述には「課題提出後の添削で訂正箇所を丁寧に解説していたのでわかりやすかった」「いつも説明を丁寧にしてくださるので、苦手だったレポートの書き方が以前より書きやすくなったと実感することができました。」という2件のコメントが寄せられていた。このことから、適切な講義ができていたと考えているが、現状に満足せずより一層のブラッシュアップをしていきたい。	15	10	66.7%
庄原	アカデミック・ライティング Q3（有馬先生）	有馬 寿英	このアンケート結果から、受講者の一定数が総合的な判断としては満足していることが示されていた。しかしながら、受講者のうち2名程度がほとんどその評価をしていない。この講義をより良いもの、そして実りあるものとするためには、この2名程度を無視することはできないと考えられる。これらの受講者の方々からは、是非、講義の充実化を図るためのご指摘等をいただきたい。さらに、自由回答欄には「課題のテーマに関するワークシートがあれば良い」とのご意見があった。レポートの構想を練り、そしてその作成をする上では、このワークシートは自身で作成するものであると考える。ワークシートをこちらから提示した場合、その内容に則ったレポートになることが懸念される。受講者自身の構想等を色濃く反映させるためには、ワークシートは不要ではないでしょうか。	16	14	87.5%
庄原	アカデミック・ライティング Q3（小林先生）	小林 謙介	学生からの評価はおおむね良好であると認識しますが、中には不十分な点があったと思います。特に回によっては内容が盛りだくさんになり、時間的にタイトになったり、演習やディスカッションの時間を短くせざるをえなかったりすることもありました。今後に向けてはこれらの改善などにも取り組んでいく必要があると認識しています。	16	9	56.3%
庄原	アカデミック・ライティング Q3（米村先生）	米村 正一郎		16	9	56.3%
庄原	クリティカル・シンキングQ4（八木先生）	八木 俊樹	回答いただいた項目を確認すると、本講義はおおむね好評だったようである。が、一点、気になったのは、講義時間外の学修時間が、30分未満の学生が3名いた点である。この講義は、講義時間内で「議論、討論」することが主体で、効果的に議論を進めるには、事前学習（教科書の通読と課題の回答）がマストとなる。30分未満の事前学習では、内容を十分理解することがかなり難しいと考える。実際、各講義では、一部学生の議論内容が希薄に感じられる例が散見された。来年度は、講義の受講方法を何度も学生に確認し、講義前の積極的な取り組み（予習）を促したい。教員間の講義進行方法に違いがあり不公平、というコメントものがあつた。異なる教員間でやり方・進行に違いが出るのはある程度仕方がないと思う。が、講義時間数などの差が不公平感につながるのも理解できる。来年度以降、教員間で差が出ないように事前協議を行い、是正したい。	18	9	50.0%
庄原	クリティカル・シンキングQ4（岩田先生）	岩田 貴樹		19	13	68.4%
庄原	クリティカル・シンキングQ4（朴先生）	朴 壽永		18	2	11.1%
庄原	クリティカル・シンキングQ4（齋藤先生）	齋藤 靖和	①昨年度の結果を踏まえた授業改善点 昨年に続き、学生同士のグループディスカッションの時間をしっかりとるように心掛けた。また、昨年度は教科書の内容をなるべく進めようと授業を急ぎすぎたところがあったので、授業で取り組む課題や内容を絞り込み、無理のない範囲での授業展開を心掛けた。②履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 学科、コースを跨いだグラスメンバー構成であることから、より多様な意見交換を促進させるため、グループを固定せず、毎回メンバーを変えての議論、発表を行わせた。1グループのメンバー構成人数を変え、議論がしやすいメンバー人数を模索しながら授業を進めた（最後のアンケートで学生から意見を聞いた）。③アンケート結果から見た今後の課題 最後の授業に出席した学生は全員アンケートに回答しており、授業参加者の意見は集約できていると考えている。設問10 総合的に判断して、この授業に満足している。に対しては、全員が「強くそう思う」、「そう思う」と答えており、今後も現授業スタイルを基本として進めていきたい。教員から学生へグループ人数に対する意見を尋ねた結果、代表的意見として「三人班が一番良かった。全員の役割が一つずつあるのがよかった。二人だと意見が割れた時に決めるのが難しかった。四人だと意見をまとめるのが大変だった。意見をまとめる観点でも役割の観点でも三人がいいと思う。」があり、次年度の授業の参考とした。	19	13	68.4%

■担当教員コメント（全学共通教育科目） 令和7年度後期

キャンパス	科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
庄原	クリティカル・シンキングQ4 （西本先生）	西本 潤	履修登録者18名の内6名しかアンケートに答えてくれていないが、全体としては好意的な意見となっている。気になるのは教科書が適切でないという意見が出ている点である。同じ人の意見と思われるが、この授業の内容についてさらに学びたいとは思わないとも書いてある。教科書は13年前に発刊されたものであるが、議論の対象となる事柄が少し古く感じられる点は、私も気にはなっている。出版元の名古屋大学出版会にも要望は出していると聞いているが、直ぐに対応できるものでもないようである。なので、議論の対象となる事柄をどうこちらでアップデートできるかが大事と考えている。ただすべてに対応できるわけではない。よって、今年と同様に、スキルとして掲載されている点の指導が来年も多くなるかもしれない。	18	6	33.3%
庄原	クリティカル・シンキングQ4 （藤田先生）	藤田 景子	アンケートに回答した学生がいなかったため、コメントを差し控えます。	18	0	—
庄原	クリティカル・シンキングQ4 （安藤先生）	安藤 杉尋	【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】 予習をしっかりさせるため、事前レポートと事後レポートの2つを書かせる取組みを行った。事前レポートを作成することで、議論における自分の意見を言いやすくなった反面、書いた内容を読んで発表するだけになりがちで、それを取りまとめる担当に負担がかかるようであった。授業の途中でやり方を変えていくなど、マンネリ化しない工夫が必要と思われる。 【アンケート結果から見た今後の課題】 回答率は低い、概ね内容には納得してもらえているようではあるが、更に学びたいかという質問には「そう思わない」という回答が目立った。テキストの内容はトピックは理系を意識したものであるが、細かい内容が文系よりのものであり、専門用語も分かりにくい印象であった。このようなことが影響し、更に学びたいとは思わなかったのではないかと思う。教える側からしても専門ではないため、分かり良い講義にブラッシュアップするには数年必要な内容かと思う。 【その他】 学生間の議論が重要な講義であることから、グループディスカッションの時間を多くとった。なかなか発言に勇気があるようであったので、リラックスさせるために、カフェ風のBGMを流したところ空気が和んだようであった。思い付きではあったが、よい効果はあったと思う。	18	7	38.9%
庄原	プレゼンテーション演習Q4	尾崎 則篤	学生からの回答を参照する限り、総じて授業の満足度は一定程度高かった。各教員の割当学生は少なく、そのため一定程度学生に対してケアができたことによると思う。本講義自体は引き継がれないが、学生自身が表現をしていくという広義の取り組みは継続的に続くため、今年度の実施を別の共通類型講義に継続的に活かしていきたいと思う。	46	16	34.8%
庄原	国際社会の理解Q3(庄原C) (2019以前県大生として…読替)	上水流 久彦	オンラインの授業で顔を出さず、グループワークでも発言しない学生がいるという意見があった。来年度では、この点について対応するようにしたい。	63	10	15.9%
庄原	地域教養ゼミナールA（エリア型）(Q3) 大学生による児童館プロジェクト	松宮 透高	3キャンパスから履修があったが実質的には三原Cのみの受講であった。6名（50.0%）の回答であった。準備学習を経て、3週間にわたり児童館「ラフラフ」で活動を行った。来館した子どもや保護者との交流、里親会との交流では里親、里子との直接的な交流体験もすることができた。大半の項目で「強くそう思う」との評価であったが、授業外での課題は最終報告パワーポイント程度であったため、若干授業外学習が短いとする回答もあった。自由記述では「ほんとうに良い授業でした」とのコメントもあり、この科目でなければ体験できなかったこと、出会えなかった人たち、することが無かったであろう情報に触れる機会があった。今後ともプログラムを工夫し、リアルな社会課題に出会い、考え、働きかける経験が詰める科目として育てていきたいと考えている。	1	0	—
庄原	地域教養ゼミナールA(エリア型)Q3 (特産品から地域資源の価値2)	荻田 信二郎	回答ありがとうございます。満足という評価を頂いております。他キャンパスからのメッセージコメントを参考に 改善に努めます。	42	1	2.4%
庄原	地域教養ゼミナールB(テーマ型)(後期集中)(農業英語入門)	Clingwall Dion		35	1	2.9%
庄原	地域教養ゼミナールC(複合型)(地球温暖化問題)	米村 正一郎		18	2	11.1%
庄原	インターンシップ通年	吉野 智之		16	3	18.8%
庄原	多様性理解（ジェンダー論）Q3(庄原C)	澤田 千恵		61	3	4.9%
庄原	人間関係論Q3(庄原C)	勝見 吉彰		41	4	9.8%

■担当教員コメント（全学共通教育科目） 令和7年度後期

キャンパス	科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
庄原	人権論Q4(庄原C)	岡田 高嘉	【昨年度の結果を踏まえた改善点】 昨年度までは、全面オンライン授業で実施していた。学生は任意の場所で自分のノートPC等を活用し、受講するスタイルである。昨年度の自由記述で、オンライン授業よりも対面授業がよい（とりわけグループワーク時）というコメントが散見されたので、今年度からはオンラインと対面の併用型、いわゆるハイフレックス型で実施することとした。 【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】 毎週記述式の課題を提出してもらい、受講生の理解度や考えを把握するよう努めた。課題の提出はTeamsの課題提出機能を利用した。また、Formsを活用し、クイズ形式（択一式）の小テストを毎週実施し、学生の理解度と共に授業参加度を調査した。小テストの解説は翌週に行った。 【期末アンケート結果から見た今後の課題】 アンケート回答率は、授業時間中にアンケート回答時間を確保したにもかかわらず、36.7%とかなり低かった。質問項目に対する回答はおおむね肯定的であるが、そもそも回答率が低いので、あまり参考にできない。第4Qという時期（学生のアンケート疲れ）もあるかもしれないが、まずは回答率の向上に努めたい。自由記述からは「実際に起こった事件を踏まえて学べてわかりやすかったし、他人と意見を交流することで新たな視点から考えることができた」というコメントがあり、励みにしたい。授業の実施方法については現状維持でよいが、小テスト問題や課題の内容は再検討していく必要がある。	49	18	36.7%
庄原	世界の宗教Q4(庄原C)	上水流 久彦	満足できない学生もいる結果となった。他のキャンパスのアンケートには問題点の指摘が具体的にあり、その指摘も踏まえ、次年度の授業内容について検討したい。学生アンケートの回収率の低さは改善したい。	61	3	4.9%
庄原	世界の言語と文化Q4(庄原C)	河村 和也	この授業は3名の専任教員と2名の特別講師によるオムニバス授業です。担当者ごとにそれぞれの授業について感想や意見をもらえるよう努めています。が、このアンケートへの回答も全員で共有し来年度以降に活かしていきます。	142	61	43.0%
三原	ICTリテラシーⅡ（Q3） （看護）	菅井 敏行	11名の受講者があり、6名から回答がありました。回答をいただきありがとうございます。 ①昨年度の結果を踏まえた授業改善点について：昨年度(R6年度)よりICTリテラシーが高くPC操作等にも慣れた学生が受講されていました。昨年度よりPC操作等を教える時間は少なくなり、 ICTリテラシーの本質部分を教示する時間を増やすことができました。 ②履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点について：出席カードをファイルで個別に作成し授業前に配付、授業後に回収しました。疑問や学んだことを授業内で書くように指示し、それらを授業中確認しながら、PC操作の習熟度も加味しながら授業を進めました。 ③アンケート結果から見た今後の課題など：次年度は当該科目は開講されない予定です。	11	7	63.6%
三原	ICTリテラシーⅡ（Q3） （理学）	飯田 忠行	1）昨年度の結果を踏まえた授業改善点 理学療法・作業療法・コミュニケーション障害学コースの合同授業を行っている。身近な医療に関する時系列データの解析を試みた。例示するとともに、データが収録されている国民衛生の動向を数年分持参し、講義とグループディスカッションを行わせた。今年度も対面にて実施した。データサイエンス認定を受け、社会で利用されているデータやAIについて講義や実習を通して理解させた。その後、身近な医療データを時系列に解析させ、現状の社会問題を把握し、その解決策をグループディスカッションで導き出す取り組みを行った。 2）履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 医療現場におけるデータ・AIの利活用および医療従事者として疾患データを扱う上での個人情報保護について個人レポートを課した。その後、国民衛生の動向や厚労省等のデータから時系列データを用い、医療における課題を抽出し、数値データを用いた図表もいれ、プレゼンさせた。グループディスカッションにおいては、進捗をポートフォリオにて把握し、随時コメントを返却した。調べた内容を照らし合わせて、データからわかること、AIを活用した解決策の提案をさせた。 3）期末アンケート結果から見た今後の課題 「能動的学習機会」「目標とする力」「満足度」（肯定100%、否定0%）であり、ディスカッションを促した講義は行えたと考える。一方、「教材の量」「さらに学びたい」では、肯定94%否定6%であった。自由記載欄に「みんながすごく協力的に参加してくれて、良い授業だったと思います。」とコメントもあり一定の理解・効果は得られたと考える。	34	34	100.0%

■担当教員コメント（全学共通教育科目） 令和7年度後期

キャンパス	科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
三原	ICTリテラシーⅡ（Q3） （作業）	飯田 忠行	1）昨年度の結果を踏まえた授業改善点 理学療法学・作業療法学・コミュニケーション障害学コースの合同授業を行っている。身近な医療に関する時系列データの解析を試みた。例示するとともに、データが収録されている国民衛生の動向を数年分持参し、講義とグループディスカッションを行わせた。今年度も対面にて実施した。データサイエンス認定を受け、社会で利用されているデータやAIについて講義や実習を通して理解させた。その後、身近な医療データを時系列に解析させ、現状の社会問題を把握し、その解決策をグループディスカッションで導き出す取り組みを行った。 2）履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 医療現場におけるデータ・AIの利活用および医療従事者として疾患データを扱う上での個人情報保護について個人レポートを課した。その後、国民衛生の動向や厚労省等のデータから時系列データを用い、医療における課題を抽出し、数値データを用いた図表もいれ、プレゼンさせた。グループディスカッションにおいては、進捗をポートフォリオにて把握し、随時コメントを返却した。調べた内容を照らし合わせて、データからわかること、AIを活用した解決策の提案をさせた。 3）期末アンケート結果から見た今後の課題 「能動的学習機会」「教材の量」「さらに学びたい」「学修活動の支援」「満足度」「目標とする力」（肯定100%、否定0%）であり、ディスカッションを促し目的意識をもった講義を行えたと考える自由記載欄に「発表テーマが被りすぎて評価が難しかったので班同士でテーマなどを共有できるようにしたほうがいいと思いました。」とコメントもあり、工夫が必要であるように感じた。一方、大変だったけど良かったです。」とコメントもあり一定の理解・効果は得られたと考える。	29	28	96.6%
三原	ICTリテラシーⅡ（Q3） （コミュ）	飯田 忠行	1）昨年度の結果を踏まえた授業改善点 理学療法学・作業療法学・コミュニケーション障害学コースの合同授業を行っている。身近な医療に関する時系列データの解析を試みた。例示するとともに、データが収録されている国民衛生の動向を数年分持参し、講義とグループディスカッションを行わせた。今年度も対面にて実施した。データサイエンス認定を受け、社会で利用されているデータやAIについて講義や実習を通して理解させた。その後、身近な医療データを時系列に解析させ、現状の社会問題を把握し、その解決策をグループディスカッションで導き出す取り組みを行った。 2）履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 医療現場におけるデータ・AIの利活用および医療従事者として疾患データを扱う上での個人情報保護について個人レポートを課した。その後、国民衛生の動向や厚労省等のデータから時系列データを用い、医療における課題を抽出し、数値データを用いた図表もいれ、プレゼンさせた。グループディスカッションにおいては、進捗をポートフォリオにて把握し、随時コメントを返却した。調べた内容を照らし合わせて、データからわかること、AIを活用した解決策の提案をさせた。 3）期末アンケート結果から見た今後の課題 「能動的学習機会」「必要な支援」「満足度」（肯定100%、否定0%）であり、目的意識をもって講義に取り組めたと考えられる。自由記載欄に「普段かわりのない人とグループになって取り組めたので楽しかった」とコメントもあり一定の理解・効果は得られたと考える。	6	5	83.3%
三原	ICTリテラシーⅡ（Q4） （人福）	細川 淳嗣	①昨年度の結果を踏まえた授業改善点 ・授業の演習で使うデータファイルや操作説明の資料を授業回ごとにまとめてダウンロードできるようにした。 ②履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 ・データ分析やエクセルの関数についての演習時には随時机間巡回を行い学生の進捗を確認するとともに質問や操作の方法についての指導を行なった。 その様子を見て、その日の進捗を調整した。	31	11	35.5%
三原	英語表現Ⅰ（Q3）（看A）	Daniel McCourt（ダニエル マコート）		30	5	16.7%
三原	英語表現Ⅰ（Q3）（理学）	岩崎 愛美	①昨年度の結果を踏まえた授業改善点 昨年度、英語のみで授業を行う「直接教授法」に対し、一部の学生から日本語での補足説明を求める声がありました。本年度はこれを受け、学習の補助として、連絡事項の重要な英文に日本語訳を一部併記するなどの工夫を導入しました。全ての解説を日本語化するのではなく、文書による最小限の補足に留めることで、英語を英語のまま理解する「直接教授法」本来の学習効果を維持しつつ、理解の定着を図っています。 ②履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 学生の声を迅速に授業へ反映させるため、毎回の授業後に記入するコメントシートを改良しました。これにより、学生は自身の学びを振り返ることができ、教員側も学生の理解度や反応をリアルタイムで把握することが可能となりました。この双方向のやり取りが、きめ細やかな指導に繋がっていると思います。 ③アンケート結果から見た今後の課題 「全てを英語で学ぶ環境」に大きな価値を感じている学生の期待に応えつつ、初学者や苦手意識を持つ学生がいかにか脱落せずにステップアップできるかが課題です。今後は、直接教授法の利点を最大限に活かしながら、どの程度の日本語補足が学習の質を高めるのに最適か、学生の習熟度に合わせてそのバランスを精査していきたいと考えています。	35	31	88.6%
三原	英語表現Ⅰ（Q3）（作業）	Daniel McCourt（ダニエル マコート）		32	7	21.9%

■担当教員コメント（全学共通教育科目） 令和7年度後期

キャンパス	科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
三原	英語表現Ⅰ（Q3）（コミュ）	岩崎 愛美	①昨年度の結果を踏まえた授業改善点 昨年度、英語のみで授業を行う「直接教授法」に対し、一部の学生から日本語での補足説明を求める声がありました。本年度はこれを受け、学習の補助として、連絡事項の重要な英文に日本語訳を一部併記するなどの工夫を導入しました。全ての解説を日本語化するのではなく、文書による最小限の補足に留めることで、英語を英語のまま理解する「直接教授法」本来の学習効果を維持しつつ、理解の定着を図っています。 ②履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 学生の声を迅速に授業へ反映させるため、毎回の授業後に記入するコメントシートを改良しました。これにより、学生は自身の学びを振り返ることができ、教員側も学生の理解度や反応をリアルタイムで把握することが可能となりました。この双方向のやり取りが、きめ細やかな指導に繋がっていると思います。 ③アンケート結果から見た今後の課題 「全てを英語で学ぶ環境」に大きな価値を感じている学生の期待に応えつつ、初学者や苦手意識を持つ学生がいかに脱落せずにステップアップできるかが課題です。今後は、直接教授法の利点を最大限に活かしながら、どの程度の日本語補足が学習の質を高めるのに最適か、学生の習熟度に合わせてそのバランスを精査していきたいと考えています。	30	26	86.7%
三原	英語表現Ⅰ（Q3）（人福）	Daniel McCourt（ダニエル マコート）		40	16	40.0%
三原	英語表現Ⅱ（Q4）（看A）	岩崎 愛美	①昨年度の結果を踏まえた授業改善点 昨年度、英語のみで授業を行う「直接教授法」に対し、一部の学生から日本語での補足説明を求める声がありました。本年度はこれを受け、学習の補助として、連絡事項の重要な英文に日本語訳を一部併記するなどの工夫を導入しました。全ての解説を日本語化するのではなく、文書による最小限の補足に留めることで、英語を英語のまま理解する「直接教授法」本来の学習効果を維持しつつ、理解の定着を図っています。 ②履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 学生の声を迅速に授業へ反映させるため、毎回の授業後に記入するコメントシートを改良しました。これにより、学生は自身の学びを振り返ることができ、教員側も学生の理解度や反応をリアルタイムで把握することが可能となりました。この双方向のやり取りが、きめ細やかな指導に繋がっていると思います。 ③アンケート結果から見た今後の課題 今年度の学生アンケートにおいて、Moodleの使いづらさを指摘する回答が1件ありました。100名以上の学生を指導する際、膨大になるプリント印刷の手間を改善するために、Moodleの導入に踏み切りました。当初はブラウザ上での操作に慣れていない学生も少なくなく、パスワード管理などに時間を要する場面も見受けられました。私自身にとっても初めての試みであり、操作に戸惑うこともありましたが、運用が軌道に乗った今、この取り組みの利便性を高く評価しています。ただし、オンラインゆえの不安定さも痛感しました。学内のフリーWi-Fiが途切れ、30分以上全く使用できない事態が何度か発生したからです。デジタル化が万全ではないことを前提に、通信トラブルへの対処法を準備しておくことが、今後の喫緊の課題です。	31	28	90.3%
三原	英語表現Ⅱ（Q4）（看B）	Daniel McCourt（ダニエル マコート）		31	8	25.8%
三原	英語表現Ⅱ（Q4）（理学）	Daniel McCourt（ダニエル マコート）		35	11	31.4%
三原	英語表現Ⅱ（Q4）（作業）	岩崎 愛美	①昨年度の結果を踏まえた授業改善点 昨年度、英語のみで授業を行う「直接教授法」に対し、一部の学生から日本語での補足説明を求める声がありました。本年度はこれを受け、学習の補助として、連絡事項の重要な英文に日本語訳を一部併記するなどの工夫を導入しました。全ての解説を日本語化するのではなく、文書による最小限の補足に留めることで、英語を英語のまま理解する「直接教授法」本来の学習効果を維持しつつ、理解の定着を図っています。 ②履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 学生の声を迅速に授業へ反映させるため、毎回の授業後に記入するコメントシートを改良しました。これにより、学生は自身の学びを振り返ることができ、教員側も学生の理解度や反応をリアルタイムで把握することが可能となりました。この双方向のやり取りが、きめ細やかな指導に繋がっていると思います。 ③アンケート結果から見た今後の課題 今年度の学生アンケートにおいて、Moodleの使いづらさを指摘する回答が1件ありました。100名以上の学生を指導する際、膨大になるプリント印刷の手間を改善するために、Moodleの導入に踏み切りました。当初はブラウザ上での操作に慣れていない学生も少なくなく、パスワード管理などに時間を要する場面も見受けられました。私自身にとっても初めての試みであり、操作に戸惑うこともありましたが、運用が軌道に乗った今、この取り組みの利便性を高く評価しています。ただし、オンラインゆえの不安定さも痛感しました。学内のフリーWi-Fiが途切れ、30分以上全く使用できない事態が何度か発生したからです。デジタル化が万全ではないことを前提に、通信トラブルへの対処法を準備しておくことが、今後の喫緊の課題です。	31	25	80.6%

■担当教員コメント（全学共通教育科目） 令和7年度後期

キャンパス	科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
三原	英語表現Ⅱ（Q4）（コミュ）	岩崎 愛美	①昨年度の結果を踏まえた授業改善点 昨年度、英語のみで授業を行う「直接教授法」に対し、一部の学生から日本語での補足説明を求める声がありました。本年度はこれを受け、学習の補助として、連絡事項の重要な英文に日本語訳を一部併記するなどの工夫を導入しました。全ての解説を日本語化するのではなく、文書による最小限の補足に留めることで、英語を英語のまま理解する「直接教授法」本来の学習効果を維持しつつ、理解の定着を図っています。 ②履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 毎回の授業の終わりにMoodleのフォーラムを活用したコメント投稿を実施しました。オンライン化の最大の利点は、準備の負担を抑えつつ、紙媒体では不可能だった「クラス全体でのコメント共有」を実現できた点にあります。学生同士の書き込みを許可したことで、互いに励まし合う姿も多く見られました。また、直接教授法を採用しつつも、自由な発信を優先して使用言語の選択を学生に委ねました。その結果、当初は日本語による投稿も目立っていましたが、徐々に英語での発信へと移行していく学生が現れたことは大きな収穫でした。一方で、一部に参加が滞る学生も見受けられました。今後はこうした学生への追跡や個別のサポートを強化することが、学習意欲を継続させるための重要な鍵になると感じています。 ③アンケート結果から見た今後の課題 今年度の学生アンケートにおいて、Moodleの使いづらさを指摘する回答が1件ありました。100名以上の学生を指導する際、膨大になるプリント印刷の手間を改善するために、Moodleの導入に踏み切りました。当初はブラウザ上での操作に慣れていない学生も少なくなく、パスワード管理などに時間を要する場面も見受けられました。私自身にとっても初めての試みであり、操作に戸惑うこともありましたが、運用が軌道に乗った今、この取り組みの利便性を高く評価しています。ただし、オンラインゆえの不安定さも痛感しました。学内のフリーWi-Fiが途切れ、30分以上全く使用できない事態が何度か発生したからです。デジタル化が万全ではないことを前提に、通信トラブルへの対処法を準備しておくことが、今後の喫緊の課題です。	28	16	57.1%
三原	英語表現Ⅱ（Q4）（人福）	岩崎 愛美	①昨年度の結果を踏まえた授業改善点 昨年度、英語のみで授業を行う「直接教授法」に対し、一部の学生から日本語での補足説明を求める声がありました。本年度はこれを受け、学習の補助として、連絡事項の重要な英文に日本語訳を一部併記するなどの工夫を導入しました。全ての解説を日本語化するのではなく、文書による最小限の補足に留めることで、英語を英語のまま理解する「直接教授法」本来の学習効果を維持しつつ、理解の定着を図っています。 ②履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 学生の声を迅速に授業へ反映させるため、毎回の授業後に記入するコメントシートを改良しました。これにより、学生は自身の学びを振り返ることができ、教員側も学生の理解度や反応をリアルタイムで把握することが可能となりました。この双方向のやり取りが、きめ細やかな指導に繋がっていると思います。 ③アンケート結果から見た今後の課題 今年度の学生アンケートにおいて、Moodleの使いづらさを指摘する回答が1件ありました。100名以上の学生を指導する際、膨大になるプリント印刷の手間を改善するために、Moodleの導入に踏み切りました。当初はブラウザ上での操作に慣れていない学生も少なくなく、パスワード管理などに時間を要する場面も見受けられました。私自身にとっても初めての試みであり、操作に戸惑うこともありましたが、運用が軌道に乗った今、この取り組みの利便性を高く評価しています。ただし、オンラインゆえの不安定さも痛感しました。学内のフリーWi-Fiが途切れ、30分以上全く使用できない事態が何度か発生したからです。デジタル化が万全ではないことを前提に、通信トラブルへの対処法を準備しておくことが、今後の喫緊の課題です。	40	27	67.5%
三原	中国語Ⅱ（Q3）三原C（理学・コミュ・人福）	徐 亜文	【昨年度の結果を踏まえた授業の改善点】 昨年度の授業では、多くの学生が集中して真剣に取り組む姿が見られた。課題の内容や分量、教材・教具の活用も概ね適切であり、学習内容の定着につながったと考えられる。授業満足度も比較的高い結果であった。一方で、課題も明らかとなった。授業外学修時間が週1時間未満にとどまる学生が一定数存在していた点である。今後は、授業外学修の成果をより具体的に把握できる方法を導入し、学修状況を可視化する仕組みを工夫することで、主体的な学習を促進したい。 【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた改善点】 中国語学習において、日本人学習者にとって発音は最も大きな課題の一つである。そのため、テキストのデジタル版を活用し、音声や映像を取り入れながらスキットを用いた会話練習を実施した。その結果、学生からは「実際の場面をイメージしながら楽しく練習できる」「自然に頭に入り、定着しやすい」といった肯定的な反応が得られた。今後は、発音練習の時間をさらに確保し、個別フィードバックの機会を増やすことで、より効果的な学習につなげていきたい。 【アンケート結果から見た今後の課題】 多様な教材・教具を積極的に活用し、学習意欲を高める魅力ある授業づくりを一層推進する必要がある。また、授業外学修の実施状況を的確に把握できるよう、課題の内容や分量を工夫し、学習成果が可視化できる仕組みを整えることが求められる。さらに発音学習については、テキストのデジタル版の活用に加え、ペアワーク等の多様な学習方法を取り入れ、より高い学習効果を目指す。	28	9	32.1%

■担当教員コメント（全学共通教育科目） 令和7年度後期

キャンパス	科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
三原	中国語Ⅱ（Q3）三原C （看護・作業）	徐 亜文	【昨年度の結果を踏まえた授業の改善点】 昨年度の授業では、学生の多くが集中して真剣に取り組む姿が見られた。課題の内容や量、教材・教具も適切で、学習内容の定着につながり、多くの学生が授業に満足していた。今後の改善策としては、授業外学修の成果をより細かく確認できる方法を導入するとともに、授業内容をより楽しく興味を引くものにする工夫を行いたい。 【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた改善点】 中国語学習において、日本人学習者にとって発音は最も大きな課題の一つである。そのため、テキストのデジタル版を活用し、音声や映像を取り入れながらスキットを用いた会話練習を実施した。その結果、学生からは「実際の場面をイメージしながら楽しく練習できる」「自然に頭に入り、定着しやすい」といった肯定的な反応が得られた。今後は、発音練習の時間をさらに確保し、個別フィードバックの機会を増やすことで、より効果的な学習につなげていきたい。 【アンケート結果から見た今後の課題】 多様な教材・教具を積極的に活用し、学習意欲を高める魅力ある授業づくりを一層推進する必要がある。また、授業外学修の実施状況を的確に把握できるよう、課題の内容や分量を工夫し、学習成果が可視化できる仕組みを整えることが求められる。さらに発音学習については、テキストのデジタル版の活用に加え、ペアワーク等の多様な学習方法を取り入れ、より高い学習効果を目指したい。	12	2	16.7%
三原	韓国語Ⅱ（Q3）三原C （理学・人福）	鞠 承姫	本文暗唱と会話応用を軸に、学生が主体的に取り組める授業構成とした。ペアでの反復練習を通して、自然な発話力の向上を目指した。また、映画を活用し、言語と文化の理解を深める機会を設けた。今後は、到達目標をより明確に示しながら授業を展開していきたい。	50	19	38.0%
三原	ドイツ語Ⅱ（Q3）三原C	小田 智敏		10	2	20.0%
三原	アカデミック日本語Ⅱ留学生のみ履修可（Q3）三原C	中石 ゆうこ	受講者なし	0	0	—
三原	芸術（Q3）三原C	佐々木 悠	今年度は久しぶりの授業担当であり、本科目は3キャンパス同时对面およびオンラインで実施した。授業当初、授業中に把握した学生のコメントから、オンライン授業時に音声聞き取りにくいとの指摘が散見された。第3回目以降は、教学課およびTAと連携し、オンライン授業におけるトラブルを回避できるよう事前準備を徹底した。 履修者の反応を把握するため、学期中に実施した方法およびその結果を踏まえた授業改善として、毎週、授業内で問いとなる課題を提示し、それについて意見を共有した上で、さらに各自が自らの考えを深める機会を設けた。翌週には簡単なフィードバックを行うよう努めた。 期末アンケートの結果からは、授業内課題をさらに増やしてほしいとの意見や、新たな知見が得られたとの肯定的な回答が多く見られた。一方で、教員からのコメントを返すタイミングに関する意見もあったため、今後は学生とのコミュニケーション方法についてさらに検討していきたい。また、履修者数が非常に多く、十分にきめ細かなフォローができなかった点についても、来年度に向けて改善を図りたい。	137	35	25.5%
三原	心理学（Q4）	古屋 泉		125	30	24.0%
三原	基礎数学（Q3）三原C	岩田 貴樹		1	1	100.0%
三原	統計入門（Q4）（看A）	菅井 敏行	30名の受講者があり、24名から回答がありました。回答をいただきありがとうございます。 ①昨年度の結果を踏まえた授業改善点について：昨年度（R6年度）よりICTリテラシーが高くPC操作等にも慣れた学生が受講されていました。昨年度よりPC操作等を教える時間は少なくなり、統計の学修の本質部分を教示する時間を増やすことができました。 ②履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点について：出席カードをファイルで個別に作成し授業前に配付、授業後に回収しました。疑問や学んだことを授業内で書くように指示し、それらを授業中確認しながら、PC操作の習熟度も加味しながら授業を進めました。 ③アンケート結果から見た今後の課題など：2名の方から回答をいただきました。「Excelの使い方を丁寧に説明を受けて非常にわかりやすかった。」「久しぶりにExcelを使えて楽しかったです」。Excelは集計、分析に特化したソフトのように思えますが、グラフやデータベース作成を行うことができたり多くの用途があるソフトです。「楽しかった」という感想をいただいたのは、Excelに慣れたからからこそその感想だと思いました。ソフトはあくまでも「道具」ですので、道具が使いこなせるようになったということは、能力が上がったということと解釈します。よく学修されたのだと思いました。	30	19	63.3%

■担当教員コメント（全学共通教育科目） 令和7年度後期

キャンパス	科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
三原	統計入門（Q4）（看B）	菅井 敏行	30名の受講者があり、19名から回答がありました。回答をいただきありがとうございます。 ①昨年度の結果を踏まえた授業改善点について：昨年度（R6年度）よりICTリテラシーが高くPC操作等にも慣れた学生が受講されていました。昨年度よりPC操作等を教える時間は少なくなり、統計の学修の本質部分を教示する時間を増やすことができました。 ②履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点について：出席カードをファイルで個別に作成し授業前に配付、授業後に回収しました。疑問や学んだことを授業内で書くように指示し、それらを授業中確認しながら、PC操作の習熟度も加味しながら授業を進めました。 ③アンケート結果から見た今後の課題など：2名の方から回答をいただきました。「Excelの使い方を丁寧に説明を受けて非常にわかりやすかった。」「久しぶりにExcelを使えて楽しかったです」。Excelは集計、分析に特化したソフトのように思えますが、グラフやデータベース作成を行うことができたり多くの用途があるソフトです。「楽しかった」という感想をいただいたのは、Excelに慣れたからからこそその感想だと思いました。ソフトはあくまでも「道具」ですので、道具が使いこなせるようになったということは、能力が上がったということと解釈します。よく学修されたのだと思いました。（この「統計入門」は看護Aと看護Bに同じ内容を教示しました。本回答の内容は看護Aと看護B共通の内容を含んでいます。）	30	24	80.0%
三原	統計入門（Q4）（理学）	飯田 忠行	1）昨年度の結果を踏まえた授業改善点 講義にて正規分布や数式の理解を促し、その後、理解させた数式を使ったExcelおよびEZRの課題演習を行わせている。演習では、理解度を踏まえ、時間をかけ、解説した。また、講義中は巡回し、質問できる環境を設けた。また、別途時間を設け、最終課題前に質問できる時間を設けた。 2）履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 できるだけ難しい数式は使わず、タバコと肺がんとの関連といった具体的事例を用いて講義を行った。数学が不得意な学生は、苦手に感じるため、誰もが理解できるExcelの簡単な関数しか用いず、統計の講義・演習を行った。講義内容の把握については、毎時間演習を行った。演習内容を理解した上で、EZRにて検定をした。全員が演習を終了するまで解答の説明は行わず、不得意な学生には講義後に別途解説を行った。 3）期末アンケート結果から見た今後の課題 期末アンケートより、「目標とする力」（肯定100%, 否定0%）「教材の適切性」（肯定100%, 否定0%）という結果であり、講義に関する内容の提示および理解の定着は行えていると考えられる。しかしながら、「さらに学びたい」（肯定91%, 否定10%）で統計の魅力を伝える努力が必要なだと感じた。自由記載では「とてもよかった」「数学などが苦手でも理解できた」との意見もあり、円滑に講義を実施できたと考える。（回答数33名：履修登録者数34名、回答率97.1%）	34	33	97.1%
三原	家族社会学（Q4）三原C	澤田 千恵		23	11	47.8%
三原	法学（Q3）三原C	岡田 高嘉	【昨年度の結果を踏まえた改善点】 例年、本科目は新遠隔システム講義室を活用していたが、今年度は受講者数の関係で、新遠隔システム講義室を用いず、3Cの教室をZOOMでつないだハイブリット型の授業を行った。この形態の授業は、準備に時間を要したり、通信トラブル等に見舞われたり、いろいろ困難に直面することが多いが、われわれ教職員（及びTA）も慣れてきたので、トラブルは減ったと思われる。また授業内容の見直しを行い、今年度は近年注目されている「情報法」を取り上げた。遠隔授業では、受信キャンパスの学生の参加意欲や集中力が低下する傾向にあるため、授業への参加意欲を高めるべく、毎週、小テストを実施した。 【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】 毎週記述式の課題を提出してもらい、受講生の理解度や考えを把握するよう努めた。課題の提出はTeamsの課題提出機能を利用した。また、Formsを活用し、クイズ形式（択一式）の小テストを毎週実施し、学生の理解度と共に授業参加度を調査した。小テストの解説は翌週に行った。 【期末アンケート結果から見た今後の課題】 アンケートの回答率は、87.5%であった。総合的な満足度（設問10）に関する肯定的な回答は100%であるが、「強く思う」は30%程度で低水準である。さらに学びたい（設問8）の項目も、肯定的な回答が100%であるものの、「強く思う」は同じく30%である。実質的な満足度や、法学への関心を高めるための取り組みが必要である。次年度から、授業名称と共に授業内容が大幅に変わるので、授業で取り上げるべき内容を抜本的に見直したい。	24	21	87.5%
三原	食と健康（Q4）三原C	長尾 則男	当初測定体験を予定していましたが積雪等により移動困難となり実施できませんでした。言い訳ばかりで申し訳ございません。 授業の内容と小テストの内容がかみ合っていないので、授業の動画の中でも小テストの内容の解説をしてほしいとの要望がございましたが、それを講義内容に取り込みますと、資格試験に興味のない受講生にとっては苦痛になるかもと考えております。小テストの回答後に解説文が表示されるようにしましたので、それで復習しさらに自分で調べて理解を深めてもらえたらと思います。	192	45	23.4%
三原	生活に役立つ力学（Q3）三原C	吉野 浩生		13	13	100.0%

■担当教員コメント（全学共通教育科目） 令和7年度後期

キャンパス	科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
三原	地域社会と言語（Q4）三原C	小川 俊輔	【1. 昨年度の結果を踏まえた改善点】本科目は3キャンパス同時にオンラインで実施している。学生は画面オフなので、どのような姿勢・態度で授業に臨んでいるかが不明である。そこで、本科目で学生が取り組む3つの課題のうち2つは全員（実際には班ごとに学修している為、「全班」）が発表する機会を授業時間内に設け、能動的に参加するよう促した。残る1つの課題については、優秀者を選定し、当日その場で指名し、発表してもらった。この方法により、画面オフであっても、幾らか緊張感をもって授業に臨むよう導いたのではないかと考えている。【2. 履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】①上に書いたことの繰り返しになるが、全員（全班）が発表する機会を設け、履修者の反応を掴むようにした。②また、班別活動においては、teams内に班ごとのチャネルを設け、オンライン会議をする際には録画するように伝え、また、積極的に文字情報によって記録を残すよう指導した。この方法により、班別活動における各個人の様子を把握するよう努めた。③さらに、各班の課題発表の後、どの班の発表が良かったかを、Google formを用いて投票させ、その場で共有した。対面授業に比べると、オンライン授業には限界があることは否定しようがないけれども、以上のような方法を組み合わせ、その機会を増やし、講義者のモノログにならぬよう、引き続き工夫を重ねたい。【3. 期末アンケート結果から見た今後の課題】3キャンパスすべての学生が、どの設問に対しても「強くそう思う」「そう思う」のいずれかを選択しており、また、以下の自由記述（○優秀レポートに選ばれると思わずとてもうれしかったです。地域言語以外にもレポートの考え方や観察力などさまざまなことを学ぶことができました。グループで何かする講義は新鮮で刺激をもらい、とても楽しい講義でした。ありがとうございました。○自分たちでテーマを考えてフィールドワークするという経験が初めてだったので、楽しかったです。○自由度高く、だけど規律ある「努力した者が報われる」講義スタイルが魅力的でした。これからもこのスタイルで続けてほしいと思います。）からも、「成功した授業」と総括できそうである。授業時間内に回答時間を設けたにも関わらずアンケートの回答率が低い点は課題である。工夫したい。	12	8	66.7%
三原	アカデミック・ライティング（Q3）	吉田 倫子	「強くそう思う」の回答割合が高かった設問は、設問3「この授業では授業時間外に取り組むべき課題が示されている」（50%）、設問4「この授業では能動的学習機会がある」（48%）、設問1「わたしはこの授業に集中し、真剣に取り組んでいる」（44%）であった。本授業は、アカデミック・ライティングを課題遂行を通して少人数で学修する科目である。そのため、「取り組むべき課題が明確に示されている」および「能動的学習機会がある」に対する評価が高いことは、授業設計の意図が一定程度達成されていることを示していると考えられる。また、学生自身が「真剣に取り組んでいる」と回答している割合も比較的高く、主体的な学修態度が形成されている点は好ましい結果である。一方で、自由記述では班ごとの課題提示方法に関する指摘がみられた。今後は、課題設定や提示方法について教員間でより一層の連携・協議を行い、運営の一貫性および公平性を高めていきたい。	198	86	43.4%
三原	世界の言語と文化（Q4）三原C	河村 和也	この授業は3名の専任教員と2名の特別講師によるオムニバス授業です。担当者ごとにそれぞれの授業について感想や意見をもらえるよう努めています。が、このアンケートへの回答も全員で共有し来年度以降に活かしていきます。	53	38	71.7%
三原	英語総合Ⅲ（Q3）（理学）	本岡 直子	このクラスは受講生がいなかったためアンケートの回答はありませんでした	0	0	—
三原	英語総合Ⅲ（Q3）（作業）	本岡 直子	受講生が少なかったため一人ひとりの理解度を確認しながら丁寧に授業を行うことができ、受講生もまた熱心に取り組んでくれたアンケート結果が示されていると思う。前年度と同様、受講生の個々人の要望を取り入れながら授業を組み立てることができたと思う。今後の課題としては、自発的な学習を促す活動を授業に取り入れることを検討していきたいと思う。	3	2	66.7%
三原	英語総合Ⅲ（Q3）（コミュ）	本岡 直子	このクラスは受講生がいなかったためアンケートの回答はありませんでした	0	0	—
三原	英語総合Ⅳ（Q4）（看A）	本岡 直子	途中までしか受講しなかったためアンケートの回答はありませんでした	1	0	—
三原	英語総合Ⅳ（Q4）（作業）	高島 裕臣	受講者は1名のみだったが回答してくれた。ありがたいことだと思った。最後の授業で科目ループリックの記入をする際に、ある観点で「この点はかなり力がついたと思う」という声が聞こえた。8週間一緒にやってきて本当によかった。三原キャンパスの英語総合Ⅲ・Ⅳはカリキュラム改訂後、今までと同様か、今まで以上に少人数の授業になる可能性があるが、今回の英語総合Ⅳの授業が受講者の学びを促進することができたのであれば、今後も同様に受講者の学びを促進していきたいと思う。	1	1	100.0%

■担当教員コメント（全学共通教育科目） 令和7年度後期

キャンパス	科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
三原	英語総合Ⅳ（Q4）（人福）	本岡 直子	授業外学修のために小テストを実施することは継続して行った。少人数クラスだったため授業中の態度で理解度を推し量ることができたが、授業時間の終了時に行う簡単な課題においても理解度を確認した。少人数のため受講生は熱心に取り組んでくれ、自発的に発言もしてくれたが、もう少し気軽に発言できる雰囲気を作れたらもっと発言が増えたのではないかと思います、どのようなタイミングで声掛けをするべきかは今後の課題である。	7	5	71.4%
三原	スポーツ実技Ⅱ（Q3）	武藤 亮佑		51	9	17.6%
三原	保健体育理論（Q4）	武藤 亮佑		122	34	27.9%
三原	プレゼンテーション演習（Q4）	西上 智彦		20	5	25.0%
三原	国際社会の理解（Q3）三原C	上水流 久彦	オンラインの授業で顔を出さず、グループワークでも発言しない学生がいるという意見があった。来年度では、この点について対応するようにしたい。	91	30	33.0%
三原	多様性理解（ジェンダー論）（Q3）三原C	澤田 千恵		37	11	29.7%
三原	人間関係論（Q3）	勝見 吉彰		117	34	29.1%
三原	世界の宗教（Q4）	上水流 久彦	満足度がかなり低い回答も存在した。そのひとつの要因としてオンライン講義であることがあげられていた。対面実施が望ましいことは重々理解しているが、現時点では、対応できず、申し訳ないと感じている。客観性の確保については、地域の専門家やその宗教を研究している者を中心に講師としているつもりである。なかなか複数の教員が対話しながらの講義の実施は現状難しいが、もう少し質問などを十分に受けるようにし、受講生が感じる疑問に回答できるようにしていきたい。	7	1	14.3%
三原	人権論（Q4）三原C	岡田 高嘉	【昨年度の結果を踏まえた改善点】 昨年度までは、全面オンライン授業で実施していた。学生は任意の場所で自分のノートPC等を活用し、受講するスタイルである。昨年度の自由記述で、オンライン授業よりも対面授業がよい（とりわけグループワーク時）というコメントが散見されたので、今年度からはオンラインと対面の併用型、いわゆるハイフレックス型で実施することとした。 【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】 毎週記述式の課題を提出してもらい、受講生の理解度や考えを把握するよう努めた。課題の提出はTeamsの課題提出機能を利用した。また、Formsを活用し、クイズ形式（択一式）の小テストを毎週実施し、学生の理解度と共に授業参加度を調査した。小テストの解説は翌週に行った。 【期末アンケート結果から見た今後の課題】 アンケート回答率は、授業時間中に回答時間を確保したにもかかわらず、40.9%とかなり低かった。質問項目に対する回答はおおむね肯定的であるが、そもそも回答率が低いので、あまり参考にできない。第4Qという時期（学生のアンケート疲れ）もあるかもしれないが、まずは回答率の向上に努めたい。自由記述からは「人権論の授業を通して、人権問題に関心を持つようになりました。たまにインターネットやSNS等で人権や差別についてのニュース・投稿を目にすることがあるのですが、関心を持って自分なりに問題について考えるようになりました」というコメントがあり、励みにしたい。授業の実施方法については現状維持でよいと思われるが、小テスト問題や課題の内容は再検討していく必要がある。	22	9	40.9%
三原	インターンシップ（Q4）	原田 淳	履修登録していた2名ともに体調不良等の理由により就業体験にいたらず、途中で受講をやめることとなったためアンケートへの回答が得られなかった。 【昨年度の結果を踏まえた授業改善点】 前期のうちに事前学習、就業体験、事後学習について説明する受講ガイダンスを実施し、履修に関する疑問点を解消するようつとめた。 【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】 Teamsに授業のチームを作成し、情報提供や質問対応等を行った。	2	0	—

■担当教員コメント（全学共通教育科目） 令和7年度後期

キャンパス	科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
三原	統計入門（Q4）（作業）	飯田 忠行	1）昨年度の結果を踏まえた授業改善点 講義にて正規分布や数式の理解を促し、その後、理解させた数式を使ったExcelおよびEZRの課題演習を行わせている。演習では、理解度を踏まえ、時間をかけ、解説した。統計を全く学んだことがない学生や文系の学生もおり、平易な言葉を使って理解を促した。演習では、理解度を踏まえ、時間をかけ、解説した。また、講義中は巡回し、質問できる環境を設けた。また、別途時間を設け、最終課題前に質問できる時間を設けた。 2）履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 できるだけ難しい数式は使わず、タバコと肺がんとの関連といった具体的事例を用いて講義を行った。数学が得意な学生は、苦手に感じるため、誰もが理解できるExcelの簡単な関数しか用いず、統計の講義・演習を行った。講義内容の把握については、毎時間演習を行った。演習内容を理解した上で、EZRにて検定をした。全員が演習を終了するまで解答の説明は行わず、得意な学生には講義後に別途解説を行った。 3）期末アンケート結果から見た今後の課題 期末アンケートより、「目標とする力」（肯定100%, 否定0%）「教材の適切性」（肯定100%, 否定0%）「学習活動の支援」（肯定100%, 否定0%）「さらに学びたいくなる」（肯定100%、否定0%）という結果であり、講義に関する内容の提示および理解の定着は行えていると考えられる。自由記載では「具体例を示して解説があったので理解しやすかった」といった意見があり円滑に講義を実施できたと考ええる。一方、「やり方が複雑で難しかった」との意見もあり、EZRの操作性を考慮する必要がある。（回答数26名：履修登録者数26名、回答率100.0%）	26	26	100.0%
三原	統計入門（Q4）（コミュ）	飯田 忠行	1）昨年度の結果を踏まえた授業改善点 講義にて正規分布や数式の理解を促し、その後、理解させた数式を使ったExcelおよびEZRの課題演習を行わせている。演習では、理解度を踏まえ、時間をかけ、解説した。統計を全く学んだことがない学生や文系の学生もおり、平易な言葉を使って理解を促した。演習では、理解度を踏まえ、時間をかけ、解説した。また、講義中は巡回し、質問できる環境を設けた。また、別途時間を設け、最終課題前に質問できる時間を設けた。 2）履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 できるだけ難しい数式は使わず、タバコと肺がんとの関連といった具体的事例を用いて講義を行った。数学が得意な学生は、苦手に感じるため、誰もが理解できるExcelの簡単な関数しか用いず、統計の講義・演習を行った。講義内容の把握については、毎時間演習を行った。演習内容を理解した上で、EZRにて検定をした。全員が演習を終了するまで解答の説明は行わず、得意な学生には講義後に別途解説を行った。 3）期末アンケート結果から見た今後の課題 期末アンケートより、「目標とする力」（肯定100%, 否定0%）「教材の適切性」（肯定100%, 否定0%）「学習活動の支援」（肯定100%, 否定0%）という結果であり、講義に関する内容の提示および理解の定着は行えていると考えられる。しかしながら、「さらに学びたいくなる」（肯定85%、否定15%）であり、保健医療分野に関するデータを交え、身近に統計を感じるように促したい。自由記載では「苦手な内容だったが、大丈夫か？と確認してくださって理解が深まった」「丁寧に教えてもらってよかった。」との意見もあり、円滑に講義を実施できたと考ええる。（回答数31名：履修登録者数28名、回答率90.3%）	31	28	90.3%
三原	統計入門（Q4）（人福）	飯田 忠行	1）昨年度の結果を踏まえた授業改善点 講義にて正規分布や数式の理解を促し、その後、理解させた数式を使ったExcelおよびEZRの課題演習を行わせている。演習では、理解度を踏まえ、時間をかけ、解説した。統計を全く学んだことがない学生や文系の学生もおり、平易な言葉を使って理解を促した。演習では、理解度を踏まえ、時間をかけ、解説した。また、講義中は巡回し、質問できる環境を設けた。また、別途時間を設け、最終課題前に質問できる時間を設けた。 2）履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 できるだけ難しい数式は使わず、タバコと肺がんとの関連といった具体的事例を用いて講義を行った。数学が得意な学生は、苦手に感じるため、誰もが理解できるExcelの簡単な関数しか用いず、統計の講義・演習を行った。講義内容の把握については、毎時間演習を行った。演習内容を理解した上で、EZRにて検定をした。全員が演習を終了するまで解答の説明は行わず、得意な学生には講義後に別途解説を行った。 3）期末アンケート結果から見た今後の課題 期末アンケートより、「目標とする力」（肯定100%, 否定0%）「教材の適切性」（肯定100%, 否定0%）「学習活動の支援」（肯定100%, 否定0%）「さらに学びたいくなる」（肯定100%、否定0%）という結果であり、講義に関する内容の提示および理解の定着は行えていると考えられる。（回答数1名：履修登録者数1名、回答率100.0%）	1	1	100.0%
三原	地域教養ゼミナールA（エリア型）(Q3) 特産品から地域資源の価値と利用を考える	荻田 信二郎	メッセージコメントありがとうございます。 まず本講義に際しまして通常座学はオンライン配信、フィールドワークは各自事前計画の上、本通りサテライトキャンパスにて実施しております。受講生が各キャンパスから多数いらっしゃいました。 講義は週末土日設定が基本でした。 3キャンパス100名を超える受講生ですので 平日設定に難しさもあります。 が、土日以外の開講も機会があれば検討してみたいと思います。 なお特産品に関する発表会と、最終レポート課題は内容が異なりますので、それについては提出までの期間を十分に確保することで対応しております。 分量が多いかどうかは皆さんの印象かと思いますが、ぜひ学修の一環として取り組んで頂ければ。 なお、疑問に思ったことは 各自調べる、Forms等を活用して質問するなど 機会を設けました。 こちらを積極的に活用していただければ幸いです。	28	6	21.4%

■担当教員コメント（全学共通教育科目） 令和7年度後期

キャンパス	科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
三原	地域教養ゼミナールB（テーマ型）(Q2・Q3)広島県内の高校生と取り組む世代を超えた健康支援	飯田 忠行	受講生がいません。	1	1	100.0%
三原	地域教養ゼミナールA（エリア型）(Q3)大学生による児童館&里親プロジェクト	松宮 透高	3キャンパスから履修があったが実質的には三原Cのみの受講であった。6名（50.0%）の回答であった。準備学習を経て、3週間にわたり児童館「ラフラフ」で活動を行った。来館した子どもや保護者との交流、里親会との交流では里親、里子との直接的な交流体験もすることができた。大半の項目で「強くそう思う」との評価であったが、授業外での課題は最終報告パワーポイント程度であったため、若干授業外学習が短いとする回答もあった。自由記述では「ほんとうに良い授業でした」とのコメントもあり、この科目でなければ体験できなかったこと、出会えなかった人たち、することが無かったであろう情報に触れる機会があった。今後ともプログラムを工夫し、リアルな社会課題に出会い、考え、働きかける経験が詰める科目として育てていきたいと考えている。	12	6	50.0%
三原	地域教養ゼミナールA（エリア型）(後期集中)地域課題の解決に向けた住民活動	手島 洋	昨年度に続けて地域の課題について具体的に理解できるような授業を工夫した。また、少人数の授業の利点を生かし、対話型の演習による授業方法を行った。十分なアンケート回答数はなかったが、一定の学生の理解を図ることができたと考えている。	10	1	10.0%
三原	韓国語Ⅱ（Q3）三原C（看護）	鞠 承姫	授業は例文暗記を基礎とし、それを応用した会話作成と発表を継続的に行った。実際に使う活動を通して、実践的な運用力の育成を図った。発音や文法については適宜説明を加え、理解の定着に努めた。今後は、活動前後の振り返りを工夫し、より効果的な学習につなげたい。	54	6	11.1%
三原	韓国語Ⅱ（Q4）三原C（作業・コミュ）	鞠 承姫	本授業は「覚えて使う」ことを目標とし、本文暗記とペア発表を柱として進めた。発話中心の活動を通して、韓国語を実際に運用する力の育成を目指した。映像資料の活用により、学習内容を実生活の場面と結び付けた。今後は、理解度確認の方法についても検討していきたい。	47	9	19.1%
三原	英語表現Ⅰ（Q3）（看B）	岩崎 愛美	①昨年度の結果を踏まえた授業改善点 昨年度、英語のみで授業を行う「直接教授法」に対し、一部の学生から日本語での補足説明を求める声がありました。本年度はこれを受け、学習の補助として、連絡事項の重要な英文に日本語訳を一部併記するなどの工夫を導入しました。全ての解説を日本語化するのではなく、文書による最小限の補足に留めることで、英語を英語のまま理解する「直接教授法」本来の学習効果を維持しつつ、理解の定着を図っています。 ②履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 学生の声を迅速に授業へ反映させるため、毎回の授業後に記入するコメントシートを改良しました。これにより、学生は自身の学びを振り返ることができ、教員側も学生の理解度や反応をリアルタイムで把握することが可能となりました。この双方向のやり取りが、きめ細やかな指導に繋がっていると思います。 ③アンケート結果から見た今後の課題 「全てを英語で学ぶ環境」に大きな価値を感じている学生の期待に応えつつ、初学者や苦手意識を持つ学生がいかにか脱落せずにステップアップできるかが課題です。今後は、直接教授法の利点を最大限に活かしながら、どの程度の日本語補足が学習の質を高めるのに最適か、学生の習熟度に合わせてそのバランスを精査していきたいと考えています。	31	30	96.8%
三原	クリティカル・シンキング（三原C）1班	古屋 泉		19	3	15.8%
三原	クリティカル・シンキング（三原C）2班	池田 ひろみ	学生がグループワークを通して主体的にディスカッションできるような授業構成とした。 学生からの評価は、概ね肯定的であった。 より「主体的に学び続けたい」と感じてもらえるような授業になるよう、発問の仕方を検討することや教材の工夫をさらに検討していきたいと考えます。	18	4	22.2%
三原	クリティカル・シンキング（三原C）3班	土路生 明美		18	3	16.7%
三原	クリティカル・シンキング（三原C）4班	加利川 真理		19	8	42.1%
三原	クリティカル・シンキング（三原C）5班	金指 美帆	本科目は、各グループの教員と学生がそれぞれの専門性や視点を活かしながら、クリティカルシンキングを多角的に学ぶことを目的としています。そのため、授業の進め方や課題の形式には一定の多様性があります。 一方で、各グループで課題の量や負担感に差があるところのご意見については、今後の授業計画の参考とさせていただきます。学修目標に大きな差が生じないよう、開始前に教員間で情報共有を行い、必要に応じて調整を検討していきます。本科目を通して、物事を批判的に考えることの重要性和難しさを実感できたという意見は、本科目の目的に沿った学びであり、大変意義があるものです。今後も、学生の皆さんが主体的に思考を深められる授業づくりに努めます。	18	18	100.0%

■担当教員コメント（全学共通教育科目） 令和7年度後期

キャンパス	科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
三原	クリティカル・シンキング (三原C) 6班	久野 真矢	①昨年度の結果を踏まえた授業改善点 昨年度の授業評価結果では、各設問項目において概ね高評価であったことから、授業内容や方法に大きな変更はせずに、グループディスカッションを中心に授業を実施した。 ②履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 授業におけるグループディスカッション参加中の学生の参加態度が積極的であったことから、大きな方向転換はしなかった。グループ分けを毎回変更して学生間の交流を促し、学習意欲の向上に努めた。 ③期末アンケート結果から見た今後の課題 各設問項目における「強くそう思う」の回答比率は50%～100%であった。今後、引き続き「強くそう思う」の回答比率が高い水準で維持できるよう、学習課題も取り入れ、授業外学修につなげたいと考える。	19	2	10.5%

【 前 期 】

- 授業科目の概要 地域創生学部専門科目
- 授業科目の名称 担当教員コメント欄参照
- 回答数 2,465
- 回答率 48.0%

【 総 評 】

一昨年度以降、授業は原則として対面で実施されている。今年度前期のアンケート回答数は、受講登録者数 5,137 名に対し 2,465 名であり、回答率は 48.0%であった。これは昨年度前期の 34.2%から大幅に上昇している。しかし、アンケートはオンライン形式で行われたが、授業内で回答時間を設けても回答が得られないケースがあった。今後は、アンケート結果に基づき各教員が授業改善を図っていることを学生に周知し、回答の意義を理解させる取組が一層求められる。

以下、設問別の傾向について述べる。まず、学生の自己評価に関する項目では、問 1「わたしはこの授業に集中し、真剣に取り組んだ」の肯定的回答が 98.3%で、昨年度（98.2%）と同水準であった。学生が授業に真摯に向き合い、学修に積極的に取り組んだ様子がうかがえる。一方、問 3「授業時間外に取り組むべき課題が示されている」で 94.5%、問 5「課題の内容・量は適切である」で 94.2%が肯定的であったにも拘わらず、問 2「授業外学修時間」において週 2 時間以上と回答した割合が 55.4%（昨年度 57.2%）とやや減少し、かつ「全くしていない」は昨年度と同じ 3.8%であった。授業外学修に取り組む学生が減少しており、学修時間が短い学生も一定程度存在していることが示唆される。今後は授業外の学修機会をいかに確保するか、工夫が求められる。

次に、授業評価に関する項目では、問 4「能動的学修機会がある」が 84.4%（昨年度 85.2%）とほぼ横ばいで、学生が主体的に学ぶ仕組みが定着しつつあることが示唆される。履修者数の多い講義では実施に限界があり、大規模授業での能動的学修の在り方が今後の課題ではあるものの、問 6「目標とする力が身につく」は 97.6%、問 7「教材・教具」は 95.6%、問 8「この授業の内容に関してさらに学びたくなる」は 93.5%、問 9「学習活動に対して必要な支援を得ている」は 96.2%の学生が肯定的評価を下しており、教員が丁寧な指導と支援を行い、授業の質向上に努めていることがうかがえる。問 10「総合的に判断して、この授業に満足している」の 96.3%（昨年度 96.5%）はその結果得られた数字である。

総じて、令和 7 年度前期は学生の学習意欲・満足度ともに高く、授業改善の取り組みが着実に成果を上げている。各分野で実践的・双方向的な授業が展開され、理解の深化に寄与していることが教員コメントからも明らかである。一方で、アンケート回答率の向上、授業外学修時間の確保、能動的学修の一層の推進が今後の課題である。引き続き、アンケート結果を授業改善に活かしながら、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指していくことが重要である。

■学部・学科	地域創生学部	■受講登録者数	5,137
■科目名	地域創生学部専門科目	■回答者数	2,465
		■回答率	48.0%

■設問別評価集計

アンケート設問内容		強く そう思う	そう思う	そう 思わない	全くそう 思わない	当該 科目区分 平均値
		評価4	評価3	評価2	評価1	
Q1	わたしはこの授業に集中し、真剣に取り組んだ。	1,325 53.8%	1,098 44.5%	37 1.5%	5 0.2%	3.52
Q2	わたしがこの授業に関連して行っている授業外学修（課題,準備,復習等）時間。（1週間の平均）※	477 19.4%	887 36.0%	1,008 40.9%	93 3.8%	2.71
Q3	この授業では授業時間外に取り組むべき課題が示されている。	1,348 54.7%	982 39.8%	113 4.6%	22 0.9%	3.48
Q4	この授業では能動的学修機会がある。	1,114 45.2%	966 39.2%	294 11.9%	91 3.7%	3.26
Q5	この授業の課題の内容・量は適切である。	1,179 47.8%	1,143 46.4%	112 4.5%	31 1.3%	3.41
Q6	この授業の目標とする力（知識や技能など）が身につく。	1,249 50.7%	1,156 46.9%	51 2.1%	9 0.4%	3.48
Q7	この授業の教材（教科書・資料など）・教具（アプリ・ファイルなど）は適切だ。	1,255 50.9%	1,103 44.7%	94 3.8%	13 0.5%	3.46
Q8	この授業の内容に関してさらに学びたい。	1,160 47.1%	1,144 46.4%	135 5.5%	26 1.1%	3.39
Q9	この授業での学修活動（発言や提出物など）に対して必要な支援を得ている。	1,209 49.0%	1,164 47.2%	78 3.2%	14 0.6%	3.45
Q10	総合的に判断して、この授業に満足している。	1,266 51.4%	1,108 44.9%	74 3.0%	17 0.7%	3.47

■設問別科目平均の範囲と中央値

平均の範囲（当該学部・学科科目）					
最小値	25%点	中央値	75%点	最大値	標準偏差
2.95	3.41	3.57	3.77	3.97	0.40
1.92	2.44	2.72	3.00	3.76	0.61
2.62	3.31	3.60	3.75	3.95	0.46
2.54	3.07	3.50	3.81	3.94	0.48
2.64	3.29	3.50	3.70	3.96	0.46
2.94	3.39	3.56	3.77	3.98	0.40
2.71	3.35	3.53	3.75	3.97	0.44
2.67	3.32	3.48	3.74	3.94	0.43
2.83	3.35	3.52	3.75	3.95	0.42
2.87	3.38	3.54	3.81	3.98	0.41

※平均時間数の評価
2 単位科目：4 時間以上…4 / 2 時間以上 4 時間未満…3 / 2 時間未満…2 / 全くしていない…1
1 単位科目：1 時間以上…4 / 30 分以上 1 時間未満…3 / 30 分未満…2 / 全くしていない…1

■担当教員コメント（専門科目） 地域創生学部 令和7年度前期

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
韓国・朝鮮語Ⅵ （前期集中）	鄭 遇澤	今回の韓国・朝鮮語Ⅵ（前期集中）の授業は、一人の受講生で、今までの韓国語能力を保持する事を重点的に学習指導したので、次回の授業への履修登録が無理なくできると思う。	1	0	0.0%
東アジア社会論（前期）	植村 広美	履修者がいなかった。	0	0	—
ディベート・プレゼンテーション（栗原）（Q1）	栗原 武士	概ね好意的な評価を受けたものと理解している。以下の自由記述のように、履修生のみなさんが授業に前向きに取り組んでくれるよう、来年度以降も授業改善に努めたい。【自由記述コメント】 英語を話す貴重な機会になりました！ 授業の冒頭にやっていたPECHAKUCHA（ウォーミングアップ）が非常にありがたかったです。英語の授業を受けるモードに切り替える際に非常に有益だったからです。ありがとうございました。 みんな発言の機会があったよかった。 フィードバックをしてくださったので、自分がどうすべきか具体的にわかってよかったです。	7	4	57.1%
ディベート・プレゼンテーション（工藤）（Q1）	工藤 卓司	特になし。	0	0	—
ディベート・プレゼンテーション（鄭遇）（Q1）	鄭 遇澤	今回の授業は、7名の受講生で、討論形式の授業にちょうど良かったと思います。 毎回、主題ことのグループワークと発表で、主題について相互理解を深めることが上手く出来たと思います。 non-native 言語での発表においては、思考と表現とのmismatchをどの様に克服出来るのかが重要な課題であるので、とりあえず発表の先にグループワークで発表の内容を検討する時間を設けることである程度解消出来たと評価しています。	7	0	0.0%
英語文化論基礎演習 （前期）	草薙 邦広	学生から頂いたコメントについては、今後授業内容の最適化、教育方法の見直し、授業者の態度の改善に活用します。	0	0	—
英語表現論基礎演習 （前期集中）	草薙 邦広	学生から頂いたコメントについては、今後授業内容の最適化、教育方法の見直し、授業者の態度の改善に活用します。	0	0	—
日本語文化論特論A（Q2日本語文化論（日本語学）同時開講）	小川 俊輔	受講者なしのため、回答しない	0	0	—
博物館実習（Q1）	杉山 聖子	一連の実習を実施する前に、教室で総復習を実施しました。 改正博物館法に関する各館の対応から資料の取り扱い方、展示企画の立案等、学生に主体的に学んでもらうことを心掛けました。	15	2	13.3%
上級中国語Ⅰ（Q2上級中国語総合同時開講）	植村 広美	履修者がいなかった。	0	0	—
上級韓国・朝鮮語Ⅱ（Q2上級韓国語総合同時開講）	鄭 遇澤	今回の上級韓国語総合の受講生は、聴講生1人を含め、6人の少人数の授業だったので、討論と質疑応答が十分できたと思う。 受講生たち自分が選定した主題の資料を輪読しながら、相互意見交換もうまく進んでいたのも、少人数のセミナー形式の学修が出来て、良かったと評価したいと思う。	0	0	—
英文法（Q1）	草薙 邦広	学生から頂いたコメントについては、今後授業内容の最適化、教育方法の見直し、授業者の態度の改善に活用します。	34	2	5.9%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
日本語教授法（Q1）	中石 ゆうこ	意欲的なクラスであるという印象であったが、受講生がしっかり取り組んだことがアンケート調査でも設問1の回答に「強くそう思う」と全員が答えていることからうかがえる。この授業は日本語教員養成課程の最終関門である日本語教育実習の準備につながるクラスであるが、日本語教員養成課程を修了する予定がない学生も受講していた。クラス設計とニーズのずれが気になっているが、満足度もおおむね高かった。昨年度と比べ、授業外課題を多く設定したことで授業外学修（課題、準備、復習等）時間の平均が増えたが、さらに改善に余地がある。	16	16	100.0%
中国語Ⅰ（前期）（中国語Ⅰ読替）（徐）	徐 亜文	未開講	0	0	—
中国語Ⅱ（前期）（中国語Ⅰ読替）（徐）	徐 亜文	未開講	1	0	0.0%
微生物学（Q2）	多山 賢二	1）昨年度、アンケートへの回答がなかったが、今年度は理系の健康科学コースの学生が皆無であったことから、シラバスの内容は変えないものの、話題は難しくないものを選択し、これらについて詳しく説明するよう改善した。2）授業期間中、出席カードの空欄部分に、授業を聞いて、わからなかった箇所や質問事項を書いてもらうようにし、次の授業で、しっかり説明・回答する形を取った。これを実施すると、学生からは感謝のコメントが書かれていたため、実施して良かったと考えている。3）今後の課題として、理系と文系のコースの学生が選択できる講義となっていることから、この両者が履修した場合、どのような説明をしていくか、何を重点的に理解してもらうか、担当教員は非常に悩むことになる。このため、履修学生が授業内容に期待することをヒアリングして、これに配慮しつつ、両者が何とか満足してくれる講義にしていける必要があり、担当教員は苦労が多いと思われる。	4	0	0.0%
生体防御学（Q1）	保田 朋波流	①【昨年度の結果を踏まえた授業改善点】2024年度のアンケートでは、「発表形式や資料作成を通じて理解が深まった」「テストがなく発表の場数を踏めるのが良い」「オンライン発表も有効」といった肯定的な意見が寄せられた。2025年度は毎回の課題提示をより明確にし、自己学習の機会や学生の発表の場を増やすことで、より多くの学生が積極的に参加できるよう工夫した。その結果、「課題の提示」「能動的学修機会」について肯定的な評価がさらに増加した可能性がある。②【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】講義期間中はMicrosoft Formsによるレポートや、授業内での口頭フィードバックを実施した。特に「教科書内容のまとめ発表」形式は、学生から「内容理解に非常に役立った」との声が多く、発表後は内容に関する補足説明の時間を増やすなど、双方向性を意識した授業を実施した。③【アンケート結果から見た今後の課題】一方で、「授業外学修時間が十分でない」「能動的学修機会への参加が一部消極的」といった課題も見受けられた。来年度は、課題の量や内容について学生の興味や集中力を引き出す工夫を行い、より多くの学生が積極的に学修に取り組める講義環境を構築する。また、「自身で担当範囲の教科書の内容をまとめ、授業として発表する形式は、内容を理解する上で非常に役立った」との意見も踏まえ、今後も同様に学生主体の講義として内容の充実に努める。	37	12	32.4%
トレーニング科学（Q1）	三浦 朗	昨年度のアンケートの「授業外学修」において2時間未満と回答した学生があった。それ以外の設問はすべて肯定的（強くそう思う・そう思う）回答であった。そのことを踏まえて、今年度も授業中や授業後に小レポートを課し、ディスカッションを交えて学生が自ら考える時間を作る工夫を行った。昨年度よりディスカッションの時間を多めにとったため、学生間の活発な意見交換ができた。昨年度に引き続き、まず、授業計画（シラバス）を示した時点で、取り上げてほしい内容や、興味のあるテーマについてコメントシートに書いてもらい、それを参考にして授業の内容や計画をガイダンス後に修正した。また、授業に対する要望（随時）や、授業内容・教材に対する希望を毎回の授業におけるコメントシートに書いてもらい、それに対応するようにした。今後も、「授業外学修時間の確保」に注意を払い、課題の提示を積極的に行い、引き続き、授業外学修を促す工夫を継続したいと思う。いずれにせよ、学生の積極的な学習を引き出す工夫が必要であると思われるので、①グループ学習を取り入れる、②授業中に小レポートを課し学生が自ら考える時間を作る、③事前学習を促すような具体的な課題を授業終了時に出す、の3点を積極的に行いたい。またFD・SD研修会への参加や、専門書でそのスキルを学びたいと考えている。	5	0	0.0%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
スポーツ医学（Q1）	鍛島 秀明	スポーツ医学の授業評価を見ると、学生は授業への集中度や学修意欲は高く、課題提示や能動的学修の機会も十分に提供されていると感じている。特に、グループワークや双方向授業などの能動的学修機会は高く評価されており、授業設計の方向性は概ね適切であると判断できる。また、学修活動に対する支援についても全員が「そう思う」と回答しており、学生の学習環境やサポート体制は良好であることが確認できる。一方で、授業外学修時間や課題内容・量については改善の余地がある。授業外学修時間は1単位あたり30分未満～1時間未満の学生が4割を占め、学修負荷の認識や自主的学習の促進が課題となる可能性がある。また、課題の内容・量や授業目標の達成度について「強くそう思う」が2割に留まることから、学習到達目標の理解や課題の挑戦度に対してさらなる工夫が求められる。今後は、学生の授業外学修を促す具体的な指針や、到達目標と課題の関連性をより明確化することが望ましい。また、興味・関心をさらに高めるための追加資料や応用的な演習、ケーススタディの導入も有効と考えられる。授業の双方向性は評価が高いため、グループディスカッションや実習の時間をさらに活用し、学習内容の定着と応用力の向上につなげることが改善点として挙げられる。	6	5	83.3%
臨床栄養アセスメント（Q1）	神原 知佐子	昨年度は全体的に履修者の満足度は高く、回答者全員が「強くそう思う」「そう思う」を選択した。自由記述では「実際にアセスメントをしてみたり、SOAP記録を書いたりする中で、一連の流れを覚えることができた。」「この授業を通して栄養アセスメントの記入シート、SOAP、栄養食事計画などの書き方と生化学検査の指標の基準値を覚えるのが大切だと学びました。」などがあった。本科目は講義と演習を併用し、4人程度のグループ演習形式を取り入れた授業を行った。課題に対しての指導により、履修者の理解度や学修意欲の把握に努め、授業への反映を試みた。履修者一人から寄せられた質問は履修者全員で共有し、履修者全員に対して回答した。授業内外で、教員から積極的に履修者とコミュニケーションをとることを心がけ、ささいな疑問や要望にも随時対応した。今年度のアンケートの結果では履修者の満足度は高く、回答者全員が「強くそう思う」「そう思う」を選択した。自由記述では、「さまざまな症例に対応する診断方法を学び、実践することができた。」「SOAPが最初は難しく感じたが、今では、情報を見れば何を書いたらいいかわかるようになった。」「SOAPが書けるようになってうれしかったです。」などが見られた。「Q2わたしがこの授業に関連して行っている授業外学修時間」が少ない傾向にあったので、授業外での学びについて検討が必要だと感じた。引き続き、履修者の反応を見ながら、学びが深まるようにきめ細やかに対応したい。	37	32	86.5%
病態別栄養マネジメント（Q2）	神原 知佐子	昨年度は全体的に履修者の満足度は高く、回答者全員が「強くそう思う」「そう思う」を選択した。自由記述では自由記述では「課題が少し多かった」「どの病態がどのように対応するのかを詳しく知ることができました。」などがあった。本科目は、臨床実習に向け臨床現場のイメージを具体化させ、今後の学修意欲の向上を目的の一つとしている。現職病院勤務の管理栄養士を非常勤講師及び外部講師として招聘し、実践的な内容の授業を展開している。教員は履修者の学びたい内容やレベルと提供した授業のそれらが合致しているかどうか、授業中の履修者の反応を見ながら、授業のレベルを修正する、課題を提示するなど細やかな対応を心がけた。自由記述では「いろいろな症例に触れ、面白かったです。」とあった。「Q2わたしがこの授業に関連して行っている授業外学修時間」が少ない傾向にあったので、授業外での学びについて検討が必要だと感じた。引き続き、履修者の反応を見ながら、学びが深まるようにきめ細やかに対応したい。	37	27	73.0%
食品衛生学実験（Q2）	谷本 昌太	1）昨年度の結果を踏まえた授業改善点 実験の円滑な進行のため、大学院生TA 2名の体制で授業を実施した。庄原Cでの行動型学修も前年度と同様に実施した。また、シラバスを改変した。 2）履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 コメントシートを実施しており、改善点があればこれを踏まえて行っている。 3）期末アンケート結果から見た今後の課題 自己評価の項目において、設問1の授業に対する取り組みは、すべての学生で真摯に取り組んでいた。設問2の授業外学修時間は、一部の学生（8%）で1時間未満であった。レポートを不完全な状態で提出した学生の可能性が高い。授業評価については、すべての設問で、“そう思う”以上の回答であった。これらのことから、概ね、すべての学生が授業に真摯に取り組む、授業に満足していることが示唆された。今年度の回答率は、68.4%と去年の18.4%から改善したがさらにアンケートの提出を促す必要がある。	38	26	68.4%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
公衆栄養学（Q1）	森脇 弘子	1）昨年度の結果を踏まえた授業改善点 昨年度は、毎回の小テストが好評であったため、本年度も継続した。授業外学修時間が2時間未満の者が約7割おり、授業外学修時間を増やすよう、課題を工夫し、毎回の授業で興味をもったことを調べるように課し、さらに授業時に声掛けを行った。対象者が異なるため比較は難しいが、今年度は授業外学修時間が2時間未満の者が約3割に減少した。 2）履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 毎回、Formsによる小テストと感想・質問を課した。小テストでは知識を確認するための択一式の問題と、知識を基に考えたリ、さらに調べたりして記述する問題を作成した。学生の理解度を確認し、理解度が低い内容については次回授業で補足説明をおこなった。また、感想・質問から、課題を抱える学生の個別対応をすることができた。また、知識を得ることが中心の授業であるため、この授業がこれからの授業や臨地実習でどのように役立つのかがわかるような資料を配付し、説明した。 3）期末アンケート結果から見た今後の課題 「課題の提示」、「授業の目標とする力が身につく」、「学習活動に対して必要な支援」、「授業の満足度」がすべて肯定的な回答であったため、授業の目標が達成できたと判断し、今後も同様な授業運営を継続していきたい。自由記述より、授業終了時の小テストや課題で、知識や技能を習得できたようであった。しかし、「課題に対するフィードバックが粗い」という意見があり、さらに丁寧にフィードバックしていきたい。	38	35	92.1%
地域栄養論（Q2）	森脇 弘子	1）昨年度の結果を踏まえた授業改善点 昨年度は、毎回の小テストが好評であったため、本年度も内容を最新のものに換え継続した。また、授業内容に最新の情報を取り入れた。例えば食事摂取基準2025にあわせて資料や授業内容を修正した。わかりやすくするために、実例を挙げ、動画を用いた。また、外部講師の講話を行ったが、授業の目的に沿ったポイントを明確にした講話内容をお願いし、学生のレポートからも理解がさらに深まったようであった。 2）履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 毎回課しているアンケートでの質問・感想で学生の意見を、毎回行っている小テストで学生の理解度を確認した。理解度がよくない内容は、次回の授業で復習した。 3）期末アンケート結果から見た今後の課題 「総合的な授業の満足度」はすべて肯定的回答であり、適切な授業が提供できたと判断し、基本的には今年度の授業運営を継続し、さらに学生の意見を取り入れ、工夫していきたい。特に演習やグループ活動、課題が好評であったので今後も継続したい。レポート課題について、「取り入れてほしい内容を詳しく記載してほしい」とあり、内容を自ら考えさせることも課題であることを説明したい。	38	30	78.9%
給食経営管理論（Q1）	杉山 寿美	○ 給食経営管理論・同実習（杉山寿美） 1）昨年度の結果を踏まえた授業改善点 給食経営管理論・同実習は、連動して開講しているため、一括してコメントする。本実習は食事を提供する科目であり、コロナ感染症拡大の影響を受けてきた。R2年度はオンライン、R3年度、R4年度はお弁当実習で対応したが、R5年度のGW以降、通常の給食実習に徐々に戻し、昨年度（R6年度）、今年度（R7年度）はコロナ感染症拡大以前の実習に戻っている。学生の負担は軽減されたと思うが、コロナ感染症拡大下で、高校生生活以降を過ごしてきた学生にとって、グループワーク（チームでの活動）の負担は大きいと思う。よく頑張ってくれている。 2）履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 学生主体の授業であるために、常に学生の様子には留意している。今年度の学生は、クラス全体が和やかな雰囲気であり、多少もめながらも楽しそうに取り組んでいた。科目担当として状況を把握しつつも少し離れてみてきた。 3）期末アンケート結果から見た今後の課題 アンケート回答者は10名である。授業の満足度は、「強く思う」21名（81%）「そう思う」5名（19%）であり、昨年度はそれぞれ、36%、61%、一昨年度はそれぞれ36%、52%であった。今年度の履修学生の授業評価は、2年次の他の科目においても高く、評価の高さはこの学年の特質と考えている。クラスのとまり方が授業評価に影響すると感じているが、個人的な感想に過ぎない（根拠はない）。今年度は自由記述がなく残念である。 なお、本科目の教育目標は、管理栄養士養成カリキュラムにおいて「給食運営や関連の資源を総合的に判断し、栄養面、安全面、経済面、全般のマネジメントを行う能力を養う。組織管理などのマネジメントの基本的な考え方や方法を習得する」であり、調理学から始まる一連の食事に関する講義・実験実習のまとめの科目でもある。喫食対象となっていたいただいた教職員の皆様には、学生の組織的活動に寄り添っていただき心より感謝している。現在3Qとなり、臨地実習に向けた事前学修を学生は行っている。その成長は著しく、主体的な活動をみると学生はすばらしいと思う。教職員の皆様と共に4年間見守ってきたい。	35	10	28.6%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
給食経営管理実習（Q1）	杉山 寿美	○ 給食経営管理論・同実習（杉山寿美，古田歩） 1）昨年度の結果を踏まえた授業改善点 給食経営管理論・同実習は、連動して開講しているため、一括してコメントする。本実習は食事を提供する科目であり、コロナ感染症拡大の影響を受けてきた。R2年度はオンライン、R3年度、R4年度はお弁当実習で対応したが、R5年度のGW以降、通常の給食実習に徐々に戻し、昨年度（R6年度）、今年度（R7年度）はコロナ感染症拡大以前の実習に戻っている。学生の負担は軽減されたと思うが、コロナ感染症拡大下で、高校生活以降を過ごしてきた学生にとって、グループワーク（チームでの活動）の負担は大きいと思う。よく頑張ってくれている。 2）履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 学生主体の授業であるために、常に学生の様子には留意している。今年度の学生は、クラス全体が和やかな雰囲気であり、多少もめながらも楽しそうに取り組んでいた。科目担当として状況を把握しつつも少し離れてみてきた。 3）期末アンケート結果から見た今後の課題 アンケート回答者は16名である。授業の満足度は、「強くそう思う」21名（81%）「そう思う」5名（19%）であり、昨年度はそれぞれ、36%、61%、一昨年度はそれぞれ36%、52%であった。今年度の履修学生の授業評価は、2年次の他の科目においても高く、評価の高さはこの学年の特質と考えている。クラスのまとまり方が授業評価に影響すると感じているが、個人的な感想に過ぎない（根拠はない）。今年度は自由記述がなく残念である。 なお、本科目の教育目標は、管理栄養士養成カリキュラムにおいて「給食運営や関連の資源を総合的に判断し、栄養面、安全面、経済面、全般のマネジメントを行う能力を養う。組織管理などのマネジメントの基本的な考え方や方法を習得する」であり、調理学から始まる一連の食事に関する講義・実験実習のまとめの科目でもある。喫食対象となっていたいただいた教職員の皆様には、学生の組織的活動に寄り添っていただき心より感謝している。現在3Qとなり、臨地実習に向けた事前学修を学生は行っている。その成長は著しく、主体的な活動をみると学生はすばらしいと思う。教職員の皆様と共に4年間見守ってきたい。	37	16	43.2%
イノベーション論（Q2）	朴 唯新	授業アンケートのフィードバックを寄せていただき感謝する。授業の説明が分かりやすく、イノベーションを多様な業界事例を通じて学ぶ点に興味を持てただけことは、本授業の狙いとも合致しており大変喜ばしいことである。一方で、能動的学修機会が十分でなかったとの指摘については真摯に受け止める。今後はディスカッションや事例分析など、学生が主体的に学ぶ場面をより充実させるよう改善していきたいが、履修者数などで実施形式について悩んでいる。 また、使用資料の共有に関して、現在はTeamで配布しているが、復習や理解に資するよう、より早くアクセスできるよう改善を図る予定である。	65	21	32.3%
組織行動論（前期集中）	平野 実	アンケート回答数が2名ととても少なく、今回は回答を作成していない	12	2	16.7%
管理会計論（Q2）	足立 洋	本科目は経営活動の管理が会計情報を用いながらどのようなメカニズムのもとで行われるのかを理解することを目的とした科目である。最終回の課題提出に合わせてアンケートの回答を行うように依頼したが、回答率は33%と振るわなかった。今後は講義時間にアンケートを実施することを検討したい。アンケート結果については、少なくとも以下の設問については、全員が「（強く）そう思う」または「そう思う」と回答している。このことから、おおむね、授業の目標とする効果が得られたと判断している。 ・「設問 1 わたしはこの授業に集中し、真剣に取り組んでいる」 ・「設問 6 この授業の目標とする力（知識や技能など）が身につく」 なお、自由記述欄では、「課題の解説動画が毎回あがるので復習ができてよかった」「学んだ知識を将来や直近なら紫苑祭の出店等で活かしていきたい」などの好意的な意見が寄せられている。 一方、「設問 8 この授業の内容に関してさらに学びたい」「設問 9 この授業での学修活動（発言や提出物など）に対して必要な支援を得ている」については、わずかながら「そう思わない」という回答が寄せられた。原因は明らかではないが、自由記述欄に「課題が少し難しく感じました」とのコメントがあったため、今後は課題の難易度の適正化と課題解説動画の質のさらなる向上に向けた取り組みを行ってきたい。	60	20	33.3%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
コーポレートファイナンス論（Q1）	村上 恵子	【昨年度の結果を踏まえた授業改善点】昨年度の授業評価の結果が良好であったため、今年度も昨年度までと同様、講義とグループワーク、プレゼンテーションを取り入れる形で授業を行った。また、提出されたレポート課題は評価基準等を付して返却した。【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】毎週、論述式の小テストを実施し、学生の理解度を確認した。また、小テスト解答用紙に質問記入欄を設け、質問を受け付けた。記入された質問には翌週、復習を兼ねて解答し、小テストについても翌週に解説を行った。【期末アンケート結果から見た今後の課題】授業評価アンケート回答者が少なく信頼性に欠けるため、来年度は授業評価アンケートへの回答をより促していきたい。授業については、グループワーク、プレゼンテーションを取り入れることで、発表力、資料作成力が身に付いたと回答した学生がいたため、来年度も同様の形で講義を行いたい。一方で、今年度は、設問7（この授業の教材（教科書・資料など）・教具（アプリ・ファイルなど）は適切だ）、設問8（この授業の内容に関してさらに学びたい）、設問9（この授業での学修活動（発言や提出物など）に対して必要な支援を得ている）に対して否定的な回答をした学生が1名いた。小テストの解説やレポート課題の評価返却、ニュースの紹介などはこれまでも行ってきたが、教材・教具や発言・提出物への支援の方法、関心を高める講義内容について再検討したい。	57	13	22.8%
金融システム論（Q1）	塚原 一郎義治	①課題の提出期間が短いという指摘があったので、毎週月曜から水曜にのびしました。 ②オンデマンド授業は毎回、リアルタイムは時々課題を出し、理解度を確かめるとともに、その次のリアルタイム授業の時にフィードバックをしました。 ③アンケート結果及び課題や試験結果から、真剣に取り組んでいる学生と、まともにオンデマンド動画も視聴していない学生の差がかなり大きいことを感じました。両者に対応していくことが、今後の課題です。	56	12	21.4%
経営法務（Q1）	松原 正至	人数が多い講義のため、学生の能動的参加を求めることは難しいですが、いろいろと検討していきたいと思っています。	65	19	29.2%
税務会計論（Q1,Q2）	加納 慶太	授業評価は好評であり、学生からのコメントから、様々な視点からの税の学習が評価されていました。引き続き学生に資する授業を展開していきたいと思っています。	55	18	32.7%
オペレーションズリサーチⅠ（前期）	呉 漢生	回答者が1名のため、今回は、教員コメントの入力は行わない	1	1	100.0%
シミュレーション論（前期）	市村 匠	経営情報学部の授業であり、設備等が当初の授業と異なる環境で行ったため、教員も学生も苦労した点がありました。また、受講生が2名という少ない環境のなかで、課題への取り組み時においても友人に相談できないという点も苦労したかと思います。一方で、教員と学生の距離が近くなったため、互いに意思疎通ができた授業になっていたと思います。特に最後のレポートは、理系の実験系が少ない授業のなかで、よく仕上げられたと思います。お疲れさまでした。	2	1	50.0%
社会情報論（前期）	市村 匠	経営情報学部の授業であり、設備等が当初の授業と異なる環境で行ったため、教員も学生も苦労した点がありました。また、受講生が2名という少ない環境のなかで、課題への取り組み時においても友人に相談できないという点も苦労したかと思います。一方で、教員と学生の距離が近くなったため、互いに意思疎通ができた授業になっていたと思います。特に最後の課題として、外部のコンテストと同じ内容で行った授業において、ITアプリの企画内容はよく仕上がっていたと思いますし、そのままコンテストに出してもよい評価が得られるのではないかと期待しています。お疲れさまでした。	2	1	50.0%
経営情報システム開発論（前期）	広谷 大助	本授業は旧経営情報学部向けの講義で前回は2022年に開講し、3年ぶりの開講である。受講者は1名でその1名がアンケートに回答した。回答結果を見ると全て肯定的結果になっていた。受講者が前述の通り1名であるため、授業中何度も受講者に問いかけ、多くの質問をもらい回答をした。また、Excelの演習についても何度も確認しきめ細かに対応した。本授業は本年度で実質閉講となるが、この経験を他の授業でも生かしていきたいと考える	1	1	100.0%
経営情報システム実験（前期）	韓 虎剛	受講生が一人しかなく、授業内容を満足していると評価されている。	1	1	100.0%

■担当教員コメント（専門科目） 地域創生学部 令和7年度前期

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
情報リスクマネジメント（前期）	重安 哲也	再編前の科目であり、今年度は受講生がいなかった。	0	0	—
数理情報論（前期）	折本 寿子	開講していないため、回答対象外	0	0	—
情報システム実験（前期集中）	肖 業貴	この科目は、受講生がいいため、開講せず。	0	0	—
情報ネットワーク実験（Q2）	陳 春祥	選択科目で実践的な内容なので、履修者は概ね真剣に取り組んだ。授業に関する設問は、全て"強くそう思う、そう思う"と肯定的な回答だった。自由回答においては、“やるべき内容がきちんと示されていて、分かりやすく学びやすかった”とある一方、少し難しい内容があったとのコメントもあった。今後も授業の改善に努めたい。	18	6	33.3%
政治学（Q1）	森邊 成一	総合的にみて、この授業は、参加学生から高い満足度を得ることができた(強く79%そう思う21%)ことは、担当者としても「満足」である。こうした高い評価を支えるものとして、授業における課題の量と内容の適切さ、目標とする力が身につく、教材・教具の適切さ、そして、学習活動に対する必要な支援などの諸項目に対する、学生諸君の強い満足・高い評価がある。これらの点は、今年度開講授業の成果として、次年度にも引き続き維持改善していきたいと思う。 他方で、授業時間外に取り組むべき課題の明示については、全くそう思わない14%、そう思わない29%と否定的評価が比較的高い。これに関連して、授業外学習時間がゼロの学生が43%もいる。担当教員としては、教材テキストの予習を毎回義務付けて、ネット検索等で、知らない人物、事項を調べることを求めているが、徹底できなかった。また、グループワークやディスカッションを予定した回では、自分の意見を明確化するための論点整理や予習事項のためのメモ教材を配布したが、これも徹底しなかったように思う。能動的な学習機会の有無という点では、機会があると強く思うが43%あると思うが57%で、能動的な学習機会の存在は認知されている。しかし、能動的な学習機会に、授業時間外での自学自習の成果を持ち寄ることができるように、学生諸君を促せなかった点は、大きな反省点である。対策としては、第一に、能動的学習機会をさらに増やすことが挙げられる。第二に、それにむけて、事項の事実調べ、論点についての自分の意見の整理などを促す分かり易い予習メモの作成、第三に、そのメモを学生同士で交換して、相互に発表し合うなど授業の在り方に工夫を加えたい。これらによって、授業時間外での自学自習を踏まえた能動的学習をより広く・深く実施し、ひいては、政治・社会へのより深い理解と、知識の現実生活への応用、そして政治的な万台に関して適切な行動の指針を身に着けることができるようにしたい。 なお、自由回答欄に見られた、「毎週変わる政治的なニュースについても授業中に質問できたのが、身近な学びとなってとても良かった」などの声を踏まえて、学生と教員間で気軽にやり取りできる雰囲気づくりと、そこでの実用的な学びも、今後とも大切にしていきたい。	9	7	77.8%
自然地理学（Q1）	澤田 結基		13	9	69.2%
経営学概論（Q1）	長桶 和也	授業評価アンケートの回答率は93.8%と、授業中に授業評価アンケート回答のための時間を取り、なぜ授業評価アンケートに回答する必要があるのか、このようなアンケートは企業に入社後にどのような意味を持つのかを丁寧に説明したことで、高いアンケート回答率となった。 また、各設問の結果を詳細に分析すると強くそう思う・そう思うと回答した学生が設問4以外では9割近くとなり、履修者から評価していただけたことが明らかになった。次年度も高いアンケート回答率と回答結果となるよう精進したい。 【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】(1)講義中に学生に質問を投げかけて、講義の理解ができていないかを確認し、理解ができていない点は丁寧に説明することで履修者の理解を促した。(2)講義後レポートで、学生から質問やコメントを受け付け、その質問やコメントに対して次の講義で説明することを行った。その際、必要があれば補足資料を作成して説明し、履修者の理解を促した。【アンケート結果から見た今後の課題】課題として、設問4に関する能動的学修機会の提供である。講義の特性上、グループワークやディスカッションを行うことが困難であり、講義後レポートでフィールドワークを実施するような課題を設定したが、履修者に伝わっていないことが明らかになった。この点について、内容も含めて再検討し、履修者の能動的学修機会を提供できるよう努めたい。	193	183	94.8%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
会計学概論（学部学科専門科目）（Q2）	加納 慶太	学生の評価についてはおおむね好評で、特に経験学習を良いと思ってもらえていました。引き続き会計が好きになるような授業を進めて行きたいと思っています。	103	80	77.7%
ファイナンス概論（Q2）	村上 恵子	【昨年度の結果を踏まえた授業改善点】昨年度の授業評価において否定的な回答はほとんど見られず、良好な結果であったため、今年度も昨年度までと同様の形式で授業を行った。また、提出されたレポート課題はすべて評価を付して返却し、評価基準についても授業内で解説した。【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】毎週、正誤式の小テストを実施し、学生の理解度を確認した。小テストは翌週に解説を行い、不正解者が多かった問題は復習を行った。【期末アンケート結果から見た今後の課題】授業評価アンケート回答者が少なく信頼性に欠けるため、来年度は授業評価アンケートへの回答をより促していきたい。今年度の結果も概ね良好であったが、設問2（わたしがこの授業に関連して行っている授業外学修（課題、準備、復習等）時間）で「2時間未満」、「全くしていない」と回答した学生が約半数いた。課題を出す回数や内容について改めて検討したい。自由記述欄では、各回の授業構成（グループワークの時間の短さ等）を指摘する意見が見られた。来年度はグループワークにどの程度の時間を割くか再検討したい。また、ChatGPTの使用に対する指摘もあり、ChatGPT使用者をどのように見分け、評価するかについて、レポート課題の内容も含めて来年度に向けて検討したい。その他、出席の取り方やメモを取る講義に対する意見も見られたため、改善できる部分は改善し、説明不足が招いたと思われる指摘に対してはより丁寧な説明を心がけることで改善につなげたい。なお、受講生が182名いたため大講義室で講義を行ったが、第2Qの午後に授業を行ったことも影響してか、大講義室の暑さを指摘する意見が10件以上見られ、体調を崩したというコメントもあった。何度か教学課の方に来ていただいで対応をお願いしたが、設備について担当課に相談するとともに、授業時間を午前中にする等の工夫が必要かもしれない。	182	87	47.8%
入門統計学（Q1）	富田 哲治	昨年度は学生からの自発的な発表が一定数の学生に限られる傾向があったため、今年度は自発的な発表は加点要素とすることで発表を促し、できるだけ分散するように努めた。各週、複数回の演習を盛り込むことで、理解度などの受講者の反応を確認するようにした。アンケートの結果から、まずQ1「わたしはこの授業に集中し、真剣に取り組んでいる」はすべての受講者が肯定的な回答であったことから、真摯な受講姿勢がうかがえる。Q2「授業外学修（課題、準備、復習等）時間」については、約6割の学生が2時間位上をあてている一方、若干名が全くしていなかった。Q4「能動的学修機会の有無」は約73%が肯定的な回答であり、演習で相互相談を促したことへの反応であるといえる。Q5「課題の内容・量」、Q7「教材・教具の適切さ」、Q9「学習活動支援」については、概ねすべての学生が肯定的な回答であったことと、Q10「総合的な満足度」も概ねすべての学生が肯定的であったことから、来年度も同様な方法で授業を実施して問題ないとする。	59	37	62.7%
IoT・情報システム基礎学（Q2）	小川 仁士	自由記述の指摘にもあるが、問題演習用の問題のアップデートが滞っているので、来年度の授業改善として行う予定である。引き続き、学生満足度の高い授業を実施していきたい。	83	28	33.7%
生命科学（学部学科共通）（Q1）	木下 英司	回答率87.2%について、授業内や授業終了後もアンケートに協力するよう声掛けをしたが、5名の履修生から回答が得られなかったのは残念だった。今後も講師として機会があれば100%を目指す。本授業科目は入学後の最初の専門科目であるため、履修生のモチベーションが高く真面目に取り組んでおられた印象が強かった。そのため授業はとてもやりやすかったが、能動的学習機会を設けることを失念した。今後も講師として機会があれば、この点に注意する。配布資料について、毎回の授業でカラー印刷を準備してくれた教学課教務係の皆さんに感謝する。	39	36	92.3%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
基礎化学（Q1）	多山 賢二	(1)昨年のアンケート結果を受けての今年の改善：教科書が難しかったとの指摘があったことから、重要な部分は時間を多く割いて説明するようにした。また、配布プリントからも、しっかり試験に出たが、その事を事前に言って欲しかったとの要望があったことから、今年度は事前に伝えた。(2)学生の反応を見るための方法：毎回の授業でカードを配布し、授業でわからなかった箇所や質問事項を記入して提出してもらう形を採用した。(2.2)それを踏まえた改善：全ての質問に対し、個人を特定しない形で、次の授業の初めの部分で回答し、理解が難しかった箇所は再度説明した。(3)今回のアンケートを受けての今後の課題：総合的に見て授業に満足しているかとの問いに対し、そう思う以上の割合が、昨年は88%だが今年は80%に低下していた。個人目標の80%以上はクリアしているが、対策として、より身近な化学の話題を増やしていきたい。自由記述での改善を求める声では、"強制的に書かせて、眠くならないようにして欲しい"との提案があり、これは今後採用したいし、昨年同様、"教科書のレベルが高い（難しい）"との指摘があったため、今後教科書の変更を検討する事としたい。	37	31	83.8%
国際法（Q2）	西谷 元	回答者が1名のみですので、コメントを控えさせていただきます。	6	1	16.7%
経営管理論（前期集中）	平野 実	アンケート回答数が1名ととても少なく、今回は回答を作成していない	28	1	3.6%
中級簿記（Q1）	加納 慶太	授業に関しておおむね良い評価をいただきました。オンデマンドについてのコメントをいただきまして、より良いバランスで学習効果を高める授業を展開できたと考えています。いただいたコメントを参考に来年度以降の授業について検討させていただこうと思います。	69	55	79.7%
工業簿記（Q2）	足立 洋	本科目は日商簿記2級相当の工業簿記の知識と考え方を提供する科目である。講義時間にアンケートを実施したこともあり、アンケート回答率は80%を超えた。 アンケート結果については、少なくとも以下の設問については、全員が「（強く）そう思う」または「そう思う」と回答している。このことから、おおむね、授業の目標とする効果が得られたと判断している。 ・「設問1 わたしはこの授業に集中し、真剣に取り組んでいる」 ・「設問6 この授業の目標とする力（知識や技能など）が身につく」 なお、自由記述欄では、「解説がわかりやすくていい」「課題に対する解説動画が学習に大変役立った」などの好意的な意見が寄せられている。 一方、能動的学修機会があること（設問4）については、「そう思わない」「全くそう思わない」が3分の1程度を占めているが、これは科目の性格上、能動的学修機会の典型とされるグループディスカッションやフィールドワークがそぐわないことによると考えられる。本科目では、こうした典型的手法は採用していないが、提供した知識のアウトプットを通じて理解を深めるため、単元ごとに練習問題に取り組む時間を提供し、解説を行うようにしており、この問題演習と解説のプロセスが本科目における能動的学修機会の中心となっている。	53	43	81.1%
経営戦略論（Q2）	朴 唯新	授業アンケートへの貴重なご意見をいただき感謝する。 座席確保や教室環境、発音などについて不便を感じさせてしまった点は申し訳なく思う。可能な範囲で改善に努めたいと考えている。 課題の提示時期についても、ご指摘の通り受講者が計画的に取り組めるよう、今後は授業終了時に案内することを心がけ、通知方法についても工夫を検討する。 授業内容に関して、経営戦略論に加えて就職活動に関する話題が多いとの指摘があったが、これは戦略的思考をキャリア形成に結びつける狙いがあったためである。 ただし、今後は理論的内容とのバランスをより意識したい。 また、能動的学修機会については、履修者数が多いため実施に制約があるが、参加型の学習や体験的要素を少しずつ取り入れられるよう工夫していきたい。	66	32	48.5%
基礎情報活用演習（Q1）	重丸 伸二	課題の演習を中心に授業をおこなっているためか、授業の取り組み状況は良く、概ね良好なアンケート結果になっている。自由記述欄を見ても、授業の形態、演習のサポートは概ね好意的受け取られている。 なお、今年度は履修者が多かったことから2部屋に分けて遠隔授業を実施したため、演習のサポートが十分でなかった可能性がある。来年度は実施方法について変更を検討したい。	93	59	63.4%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
人工知能概論（Q1）	市村 匠	授業は教科書の内容をもとに行っており、予めスライドのPDFを配布している。さらに、毎時間の課題も授業時間内で解くことを目標としており、授業時間内で終了しない場合でもその日のうちに終了するようにしている。課題の量や内容は適切だと考えているが、一部、計算を要する問題はどうしても必要となる。学部科目なので、数学が苦手だと思込んでいる学生にとっては大変かもしれないが、基本的には高校までの数学の範囲で履修できるものだと考えている。一方で、授業科目は人工知能であり、人工知能はアプリを使うのではなく、どのように作られるかを考えるもので、「考える」ことに慣れていない学生にとっては、難しいかもしれない。しかしながら、我々は日常生活において、常に「考える」ことを要求されており、その訓練はどこでも行われていないため、普段の生活で、「考える」ことを訓練してください。	25	6	24.0%
データサイエンス入門・同演習（Q2）	富田 哲治	この授業は、授業中に統計ソフトウェアによるデータ読込・編集などのデータハンドリングから可視化・数値化、様々な統計手法によるデータ分析を演習形式で行う。授業中の演習で実行したコードを提出してもらい、その内容をチェックすることで受講者の理解度等の確認を行った。アンケートの結果から、まずQ1「わたしはこの授業に集中し、真剣に取り組んでいる」は約96%の受講者が肯定的な回答であったことから、真摯な受講姿勢がうかがえる。Q2「授業外学修（課題、準備、復習等）時間」については、約半数の学生が2時間位上をあてている一方、若干名が全くしていなかった。Q4「能動的学修機会の有無」は約74%が肯定的な回答であり、演習で相互相談を促したことへの反応であるといえる。Q5「課題の内容・量」、Q7「教材・教具の適切さ」、Q9「学習活動支援」については、90～95%の学生が肯定的な回答であったことと、Q10「総合的な満足度」も約9割の学生が肯定的であったことから、来年度も同様な方法で授業を実施して問題ないとする。ただ、自由記述の記載内容から、「演習や説明のスピードが早い」と感じている学生がいることがわかったため、ペース配分について考える必要があるといえる。	39	27	69.2%
上級英語総合(Critical Reading I)（Q1）	草薙 邦広	学生から頂いたコメントについては、今後授業内容の最適化、教育方法の見直し、授業者の態度の改善に活用します。	16	10	62.5%
上級英語表現(Global Communication I)（Q2）	ジェシカ タインズ	真面目でやる気のある学生でしたが、自信をもって発言してもらうことに苦労しました。昨年のクラスと雰囲気の違い、グループ分けやウォームアップ課題などで工夫しながら進めていきました。初回と比べてクォーターが終わるまではある程度の自信がついた様子でしたが、ばらつきがまだ生じた状態で終わりました。いつでも戦略を変更し、柔軟な対応ができるように、何通りかのアクティビティを用意すると、そのクラスやその日の雰囲気に合わせて行えると期待できます。	16	6	37.5%
上級中国語総合（Q2）	植村 広美	履修者が1名しかおらず、またアンケートにも解答していなかった。	1	0	0.0%
英国社会文化論（Q2）	吉本 和弘	アンケートへの回答割合が半分にも達していないので、結果を見てもそれが学生の本当の感想なのかははっきりしない面があると思われます。設問の1～4に対する回答としては、概ね好意的な結果になっていると思われます。しかし、それ以後の設問で、課題の量が多い、あるいは適切ではないという回答があったのは、一面ではクォーター制と1日に2コマ連続で授業が行われることの弊害ではないかと思っています。1コマごとの授業の間に時間があればできることも、2コマ連続だと難しくなるわけで、どうしても一度にこなす課題の量が増えてしまいます。また、テキストの精読、英語劇の上演、映画を見ての議論という3つの異なる活動（さらには歌の課題も）を盛り込んだことによる過剰な感じを持った学生がいることは、こちらとしても予想していたことで、この一つの授業で教えたことがたくさんあったということで理解して欲しいと思います。チームスを使って、テキストの読み上げ音源を用意して読むことの手助けをしたつもりですが、これが読む量として多すぎると感じるとすれば、やはり英語の読解力不足、あるいは英語の本を読む経験の不足、の問題があるだろうと思われます。翻訳本も併用することを推奨していたので、それをやらずにちゃんとテキストを読み込まなかったとすれば、本人の努力不足と言わざるを得ないと思います。筆記試験の結果は概してはかばかしくないもので、英文の精読の時間、文法解説など、をもっと取るべきだったというのが反省点ですが、いかんせん時間が足りなかった感があります。最後に行った劇の発表会では皆それぞれに頑張ってくれたと思われ、この経験を各自が大切にしたいと願うばかりです。	48	15	31.3%
英米文化史論（Q2）	栗原 武士	概ね学生からは一定の評価をもらったものと理解している。特に大人数授業のため、学生からのコメントを収集するためのSlidoの導入は一定の成果が出たと考えられる。来年度に向けて、細部の授業のブラッシュアップに努めたい。	73	28	38.4%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
英語学（Q1）	草薙 邦広	学生から頂いたコメントについては、今後授業内容の最適化、教育方法の見直し、授業者の態度の改善に活用します。	46	11	23.9%
英語音声学（Q2）	西原 貴之	昨年度の授業では、扱う内容が多くなってしまい、学生が消化不良を起こしてしまった様子が見られたため、昨年よりも授業の内容を精選して授業を行いました。今年度も、学生が授業内容を理解できているかどうかを見るために、毎回小テストを実施し、学生の理解具合を確認しました。多くの学生が誤解している内容については、授業の中で改めてフォローアップを行いました。学生は授業にしっかりと取り組んでくれました。授業外の学修時間も確保し、難しい内容でしたがしっかりと内容を消化してくれたと思います。残念ながら、アンケートに回答してくれた学生のうち、3分の1ぐらいの学生には英語音声学に関するさらなる興味関心を引き起こすことはできなかったようです。ですが、授業自体には総合的に満足してくれた学生が大半でした。今後については、今年度の授業形式を基本としつつ、学生の興味関心を引き付けることができる話題をさらに盛り込んでいきたいと思います。	35	20	57.1%
メディア・イングリッシュ（Q1・Q2ペア）	黒住 奏	アンケートへのご協力、ありがとうございました。すべての設問で肯定的な回答が100%となっており、特に「授業に集中している」「課題が明確に示されている」「能動的に学べる」といった点で高い評価をいただけたことを大変うれしく思います。グループワークやディスカッションなどを通じて、英語を使って主体的に学ぶ姿勢が定着していることが感じられました。自由記述からは、授業を「楽しかった」と感じたという素直な声や、CNNの教材を通じて多様な表現に触れられたことへの関心が伝わってきました。授業中に扱いきれなかった内容にも、自発的に取り組みたいという意欲を示してくれた点は、今後の学びにつながる大変良い傾向だと受け止めています。一方で、授業外学修時間が「2時間未満」と回答した学生が多数を占めている点は、今後の課題です。英語力をさらに伸ばすには、授業内外での継続的な取り組みが必要です。今後は、家庭学習の進め方や目的をより明確に伝え、学びのサポートを強化していきます。今後も、学びが楽しく深まる授業をめざして取り組んでまいります。ありがとうございました。	16	4	25.0%
米国史論（Q1・Q2）	山本 貴裕	この授業では、アメリカ史に関する映画のシーンを毎回のようで紹介したが、そのことに関して、受講生から「映画や小説などの創作物から歴史を読み取ることの楽しさを見出すきっかけになった」というコメントがあった。この授業ではアメリカという外国の歴史を扱うため、日本人の受講生の日常のリアルティとかけ離れたものになりがちだが、映画などの媒体を用いることで授業で扱う内容に関心をもってもらうきっかけになったなら幸いです。最先端の専門の知識と、受講生の日常のリアルティとをどのようにつなぐか、という課題を常に考えていきたいと思います。	27	5	18.5%
中国語文化論（Q2）	工藤 卓司	もともとの受講者が少なく、かつ欠席者が多く、予定通り進まなかったが、学生たちの善意にも助けられて、例年通り比較的高い満足度の高い教育（学修）内容が提供できたのではないと思う。	6	3	50.0%
国際関係史論（Q2）	岡本 弘道	回答数は少ないものの、回答内容はポジティブなものが多く、真剣に授業に取り組んでいる様子が見取れた。今後も引き続き良い授業ができるよう努力したい。	39	6	15.4%
日本文化史論（Q2）	杉山 聖子	現在に残る絵図や写真、出版物、動画を基礎資料として、江戸～昭和に至る社会のあゆみを解説しました。解説文章だけでなく、写真や動画といった画像を用いることで、興味・関心をもって聞いてもらえました。課題の締切り時間を21時と設定していましたが、通学時間上困難な場合があるとのことで、今后再考します。	87	47	54.0%
日本文化論（Q2）	目黒 将史	「内容はよくわからなかったが、単位は欲しい。」というコメンがあった。授業内容が身についていない学生は単位修得できないように徹底していく。	83	16	19.3%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
日本語表象論（Q1）	福田 涼	本科目については、今年度から必修の枠を外れたこともあって、受講者数は少しく減少した。受講態度や、授業内課題（コメントペーパー）への取り組みは概ね良好で、それが「設問1 わたしはこの授業に集中し、真剣に取り組んでいる」の回答（「強くそう思う」が83%、「そう思う」が17%）にもよく反映されていると考えられる。自由記述欄については、授業中に設ける小休憩（5分程度）や、学生らの「考え」を比較的自由に解答し得るような試験の形態について、好意的に評価する回答が見受けられた。また日本近代文学を題材とする本科目から得えられた知識・技能・習慣を、今後小説を読んだり、映画・ドラマを視聴したりする際にも活用したい、との記述もあった。なお学生からの要望として具体的に示されている訳ではないが、使用している教室（2455中講義室）について、もっぱら無線マイクの収音範囲が狭いこと、また座席が固定式であることなどから、「能動的学修機会」を設けることに困難を感じている。教室環境に左右されない方法で「能動的学修機会」を導入する術について考慮すると同時に、（他の教員とも情報共有を図りながら）設備や授業支援体制の改善等についても、適宜要望を上げていきたい。	46	18	39.1%
日本語文化論（日本語学）（Q2）	小川 俊輔	アンケート結果より、受講者、授業者ともに、満足のいく授業を展開できたと総括できる。	46	12	26.1%
中日対照言語学（Q1）	徐 亜文	【昨年度の結果を踏まえた授業改善点】 昨年度の授業では、学生の多くが集中して真剣に取り組む姿が見られた。課題の内容や量、教材・教具、能動的学修の機会提供なども適切であり、学習支援も十分に行われた。その結果、学習内容の定着につながり、多くの学生が授業に満足していた。一方で、課題としては、授業外学修時間が週1時間未満にとどまる学生が一定数存在した点が挙げられる。これは、授業外学修の成果を確認する仕組みが十分ではなかったことに起因すると考えられる。【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】 中日対照言語学の授業では、中国からの留学生も履修できるため、日本人学生と中国人学生が討論を通じて交流できる場を設けた。具体的には、中日両言語の違いや、その背景にある文化の差異をテーマとし、毎回具体的な課題を提示してグループ討論を行わせ、討論結果を回収・整理したうえで、次回授業にて発表するという方法を実施した。その結果、学生は積極的に討論に参加し、中日両言語および文化に対する関心を一層高めることができた。実際に、「留学生とディスカッションできてとても楽しく、特に中国語と日本語の文法の違いに関する講義が面白かった」という声も寄せられた。一方で課題は、今後いかに工夫して討論テーマを設定し、学生がより深く議論できるようにするかである。【アンケート結果から見た今後の課題】 多様な教材・教具を活用し、授業をより魅力的なものとするのが求められる。また、授業外学修の実施状況を的確に把握できるよう、課題の内容や量をさらに工夫する必要がある。加えて、学生がより深い議論を展開できるようなテーマの設定も重要な課題となる。	46	19	41.3%
東アジア地域史論（Q2）	岡本 弘道	回答数は少ないものの、回答内容はポジティブなものが多く、真剣に授業に取り組んでいる様子が見み取れた。今後も引き続き良い授業ができるよう努力したい。	26	3	11.5%
東アジア文学論（中国文学）（Q1）（工藤）	工藤 卓司	初開講にしては、おおむね肯定的な意見だったと思われる。授業内容については、難易度は下げて実施したが、事前学習を用いたGWなどで相互確認の時間をとりながらだったにも関わらず、一部についてこれない学生がいたようだ。改善策をさぐりたい。また、数名の学生は今後関連科目をとりたくないとの反応も見られる。反省しているところである。89名の学生が履修しているので、全員に目配りをするものの難しさを実感した。	89	62	69.7%
書誌学（Q1）	目黒 将史	>『論語』における仁や礼などを学ぶ中で、紀元前に生きた人々の言葉や考えを現代に生きる私たちが共感したり、受容したりすることができるのはすごいことなんだと改めて感じた。個人的に、中国の詩を現代語訳・解釈したりする課題が印象に残っており、人によって異なる解釈を共有するのが楽しかった、このような授業は行っておらず、他の教員へのアンケートと間違っていると回答していると思われる。アンケート結果の有益生にも直結する事案である。社会は自分たちが担っているのだという自覚を持ち、アンケートへ真摯に取り組んで欲しい。	66	25	37.9%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
博物館概論（Q1）	杉山 聖子	教科書を指定して授業を進めると単調になりがちなので、あえて指定せず、博物館・美術館の事例を取り上げることで、興味・関心をもって聞いてもらえました。事前学習を提示していましたが、それを発表（または提出）する機会を設ける等の工夫を行ってまいります。実際の資料に触れることで、劣化しやすい部分、汚損しやすい部分を理解しやすくなるので、この取り組みは継続します。	34	32	94.1%
上級英語総合(Cross-Cultural Studies) (Q1)	栗原 武士	概ね好意的な評価を受けたものと理解している。以下のコメントのように、学生が前向きに取り組めるよう来年度以降も授業改善に努めたい。【自由記述コメント】 最初、パラフレージングに苦戦していたのですが、ほかの人の訳し方を参考にするなどして少しは上達させることができたと思います。授業には全力で取り組んだが、TOEICの点数が下がってしまい残念だった。メンバーとの交流時間が多く充実していた。本文読解に時間を割いてくれてよかったです。自分の読解のミスとかに気づきやすくて助かりました 音楽の歌詞を推測するのが、楽しかったです。	10	10	100.0%
上級英語表現(Presentation I) (Q2)	ジェシカ タインズ	プレゼンテーションでは、学生に4回の発表をしてもらいました。抵抗感を和らぎ、発表することに慣れるために、回数を可能な限り多く設けました。昨年と比べて人数が多かったため、発表とフィードバックの時間が長くなり、ある程度の焦りが生じました。履修者の人数が多くても少なくとも、ペースがちょうどいいと感じさせるように、授業の進め方に柔軟性がある程度必要だと考えられます。「ためになった」というコメントが嬉しいのですが、今後の課題はまだあります。	10	4	40.0%
中級中国語表現（Q1）	工藤 卓司	履修者が少ない点以外は特に大きな問題はなかったように思われる。前年度は毎回の前半のオンデマンド部分が好評であったが、今年はやや難しく感じられたようだ。やや学生の質の変化があるのかもしれない。	8	7	87.5%
上級韓国語総合（Q2）	鄭 遇澤	今回の上級韓国語総合の受講生は、聴講生1人を含め、6人の少人数の授業だったので、討論と質疑応答が十分できたと思う。受講生たち自分が選定した主題の資料を輪読しながら、相互意見交換もうまく進んでいたため、少人数のセミナー形式の学修が出来て、良かったと評価したいと思う。	5	1	20.0%
中級韓国語表現（Q1）	鄭 銀志	設問10項目（自由記述を除く）のうち、9項目において「強くそう思う」との回答が得られたことから、学生に対して満足度の高い授業を提供できたと判断する。本年度の受講生は、ほぼ同等の語学力を有していたため、均等な指導が可能であり、それが高い評価につながったと考えられる。また、すべての学生が達成目標を持ち、授業に積極的に取り組んだ結果、個々の学生の語学力が向上したと認められる。次年度においても、学生のニーズに対応しながら、一人ひとりが成長できる授業を実施していきたいと考える。	5	2	40.0%
経営史（前期集中）	張 楓	全体的に学生の反応はよかったと受け止めております。ただし、「授業時間外に取り組むべき課題」の提示が十分ではないとの指摘がありましたので、今後、集中講義のなかでいかなる形で改善していくべきかを考えていきたいと思います。なお、回答数は1名のみでしたので、次年度以降、学生に回答するように強く要望したいと考えています。	21	2	9.5%
金融論（Q1）	村上 恵子	【昨年度の結果を踏まえた授業改善点】今年度初めて担当した科目であるため、昨年度の結果を踏まえた授業改善点は無い。【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】毎週、授業内容に関する課題を提示し、学生に考察を記入してもらうことで、学生の関心度や理解度を確認した。また学生の回答をもとに、重点的に説明・復習する点を変えた。【期末アンケート結果から見た今後の課題】授業評価アンケート回答者が少なく信頼性に欠けるため、来年度は授業評価アンケートへの回答をより促していきたい。今年度は、期末試験の評価を主とし、レポート課題は出さなかったため、設問2（わたしがこの授業に関連して行っている授業外学修（課題、準備、復習等）時間）で回答された授業外学習時間が短く、設問3（この授業では授業時間外に取り組むべき課題が示されている）について3割の学生が否定的な回答をしていた。授業時間外に取り組むべき課題の提示については、来年度の課題として検討していきたい。また、授業内容に関する課題の考察とそれに対するフィードバックという形で能動的学修機会を提供したが、グループワーク等は特に取り入れなかったためか、オンラインでも良かったのではないかという意見があった。対面で行うことに意義がある講義内容についても、改めて検討したい。	67	32	47.8%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
ベンチャービジネス論 （前期集中）	矢澤 利弘	集中講義であったためかもしれないが、この科目については学生からの回答がなかったため、コメントすることができない。	40	0	0.0%
社会調査論（前期集中）	中島 満大		41	2	4.9%
マネジメント工学（Q1）	広谷 大助	まず、回答率が他と比べて著しく低い点があるがこれまで最終週は1コマ目でまとめ及びレポートの返却を行い、それを基にして試験の準備をしてもらい、2コマ目の最後で試験を行う形式をしていた。これをした理由として学生の試験勉強の時間を最大限に確保する意図があった。そのため、授業中でアウンスはするが回答時間を試験勉強に充てて回答時間がなかったことが挙げられる。しかし、問題との指摘を受け最終週の一番最初に授業評価アンケートの入力の時間を必ず設けることとする。本年度の回答数は前述の通り少なく1件のみであるが、回答学生の評価としては肯定的評価100%であった。昨年度と比較して受講人数がほとんど変わらないことから、昨年と同様にTeamsにPDF資料を掲載し、出席カードにて学生の質問や感想を収集した。また、アンケートの自由記述では演習や課題の解説を希望していたが、演習については授業の最後に、課題については試験の週に行っていた。その後演習の解答についてはTeamsにアップした。よって、説明よりも周知に問題があると考え学生がより理解できる周知・配布方法が今後の課題となる。	10	1	10.0%
応用情報研究序論（Q2）	重丸 伸二	地域産業コース情報分野の教員によるオムニバス形式の授業で、各教員の研究分野の入門的な内容の講義であるため、授業への取り組み状況は良く、概ね良好なアンケート結果になっている。専門科目履修の動機付けや卒業論文のゼミ選択の参考にもなることから、来年度も同様の形式で実施したい。	37	22	59.5%
プログラミング（Q1）	宇野 健	①昨年度の結果を踏まえた授業改善点 事前学習のための新しい教材提供を考えていたが、システム開発が間に合わず。昨年度と同じ形態の授業提供となった。その代わり、次回授業に関する事前演習問題の提供数を増やしたり、Webテキストの公開時期を早めるなどの対応を行った。②履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 独自開発したプログラミング演習システムを用いているため、個人ごとの演習の状況を把握して、これを用いて授業内容や課題の調整を行ってきた。また、授業時間外においては、Teamsのチャットを使った質問を受け付け、即時対応を行ってきた。③アンケート結果から見た今後の課題 授業で利用しているプログラミング演習システムにおいて、例年より多くのバグが見られた。自由記述欄でもこれに関するコメントが見られた。この対策として、システムの改修と、発生したバグとその対応についての情報を一元的に提供する仕組みを考える必要がある。また、新たな事前学習についての対応が出来なかったため、後期のプログラミング演習での実施を踏まえて、新たな方法を開発、実施したいと考える。	48	45	93.8%
線形代数（Q1）	陳 春祥	【昨年度の結果を踏まえた授業改善点】 使用教材、学習範囲、学習指導など、昨年度と同様だったが、事前課題（テキストの予習範囲など）を指定し、チームスにて予習質問を受け付けて授業中に重点的に取り上げるようにした。【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】 授業中にワークショップでの演習を増やし、履修者の反応を確認するようにした。宿題は毎週課しており、1回（2コマ分）の授業内容をカバーした宿題量については、多かったと感じた学生もいた。これについては、来年度からセメスター制に変わる予定であり、課外で履修者の取り組む時間が増えることに期待する。宿題はレビュー後に返却し、また解答例をチームスにて掲載した。【期末アンケート結果から見た今後の課題】 本授業は、じっくり時間をかけてテキストを読みながら演習し、宿題を通して身につけるような取り組みが必要な科目であり、クォーター制の授業構成では、短期集中で履修者には大きな負荷がかかったと思われる。今後のセメスター制への移行に期待する。	46	23	50.0%
情報数学Ⅰ（Q2）	折本 寿子	・昨年度の結果を踏まえた授業改善点 授業後半に行っている演習を時間内に収まるよう、残りの時間を見ながら調整することで対応した。・アンケート結果から見た今後の課題 すべての設問に対してポジティブな回答であった。自由記入欄に「とんでもなくわかりやすかった」と書かれてうれしかった。一方で「難しかった」との回答もあり、数学に苦手意識のある学生に対するフォローを考えていきたい。	42	31	73.8%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
知能情報学（Q1）	韓 虎剛	本授業について、7割以上の学生が総合的に「満足している」と評価しており、特に授業の目標とする力（知識や技能など）が身についてきたと感じている学生は9割以上にあった。一方で、「授業内容がシラバスの計画と異なる」「教科書などの明示がほしい」といった指摘も見受けられた。今後は、シラバスの授業計画を見直すとともに、参考書等の情報提供にも努める。	24	13	54.2%
解剖学・病理学実習（Q2）	北台 靖彦	この実習は、疾患の病理標本をもちいて肉眼的、顕微鏡的に観察し、病気の本態を明らかにすることを目的としている。最近の顕微鏡の改良は目覚ましく、またバーチャル顕微鏡の登場により、講義内容も学生にとって、理解しやすくなったようである。また、私たちは、体外式超音波を学生自身に操作をさせることにより、人体の構造に興味を持たせることにしている。	37	6	16.2%
生理学実験（Q2）	辻 文	「昨年度の結果を踏まえた授業改善点」昨年度は動物実験に多くの時間を要し、班別のヒト実験の結果についてプレゼン発表する時間を設けることができなかった。今年度は、倫理的観点からカエルの解剖を廃止して、模擬解剖（テキストを使ったカエルの模擬解剖）のみとした。また、班別実験およびプレゼン発表の時間を確保して実施した。「履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点」小テストや課題（実験レポート、研究計画書、実験記録など）によって理解度を把握した。十分理解が得られていたことから、その後の授業内容を修正・改善することはしなかった。「期末アンケート結果から見た今後の課題」いずれの設問も、強くそう思う・そう思うの回答であったことから、授業内容やプレゼン発表などの取り組みが、履修者に好意的に評価されていたと考えている。これまでの取り組みを継続しつつ、プレゼンの発表の準備時間をもう少し長くする、修授業時間外学修を充実（増加）させるなどの改善を図っていきたい。	38	13	34.2%
運動生理学（Q1）	鍛島 秀明	運動生理学の授業評価を見ると、学生の集中度や授業満足度は概ね高く、授業目標の達成度や教材・支援体制についても多くの学生が肯定的に評価している。一方で、授業外学修時間は1単位あたり30分未満～1時間未満の学生が7割弱を占め、課題内容・量や能動的学修機会の評価にばらつきが見られる。特に、課題内容・量に「そう思わない」と答えた学生が28%存在し、重要事項の資料不足による学習の困難さが指摘されていることから、課題設計や資料提供の改善が求められる。能動的学修機会についても、授業参加型活動の存在は評価される一方で「そう思わない」と答えた学生が19%おり、活動内容や時間配分の見直し、双方向性の明確化が改善点として挙げられる。また、授業内容に関してさらに学びたいかどうかの評価で「そう思わない」と答えた学生が14%存在することから、学習意欲をさらに引き出す工夫も必要である。具体的には、重要な講義内容に対応した資料や補助教材を事前に提供することで、授業内外での学習効率を高めることが可能である。加えて、課題の挑戦度や量の調整、グループディスカッションや演習の実施を通して、能動的学修の効果をさらに高めることも望ましい。学生の自主学修時間を確保するための明確な課題提示や、学習到達目標との関連性の強調も、学習意欲向上に寄与する。総じて、授業設計や教材・支援体制はおおむね適切であり満足度も高い。しかし、資料提供の不足や課題設計の一部改善により、学習効率の向上と学習意欲のさらなる喚起が期待できる。今後は資料整備、課題調整、能動的学修機会の強化を中心に改善を図ることで、学修効果の最大化が可能となる。	38	36	94.7%
食品加工学実験（Q2）	杉山 寿美	○ 食品加工学実験（杉山 寿美） 1）昨年度の結果を踏まえた授業改善点 調理学(1Q)の履修学生と同じ学生であり、調理学へのコメントのとおり、今年度は一昨年度よりも評価が高く、昨年度より評価が低い。年度によって評価の基準（学生気質）が異なるのかもしれない。学生指導は難しいと改めて感じている。 2）履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 この授業では、毎回、翌月曜にレポートを提出させている。他の授業の学修時間を学生が確保できること、翌週に返却して双方向性を確保することを目的として期限を設定している。このことについては、限られた時間の中でできる範囲で提出することが大事であることも含め、目的を授業開始時に説明している。レポートの記述から、学生の間違った解釈も含め、理解度を把握できることから、この形は継続したい。なお、実習後の掃除中等において、加工のメカニズム等を質問してくる学生もあり、楽しく取り組んでくれていると感じている。 3）期末アンケート結果から見た今後の課題 アンケート回答者は27名である。「この授業に関してさらに学びたい」について、「強くそう思う」20名（74%）、「そう思う」7名（26%）であった。昨年度は、それぞれ85%、15%、一昨年度はそれぞれ45%、55%であった（一昨年度は「そう思わない」「まったくそう思わない」も7%、3%であった）。自由記述は、「レポートの提出期限の延長」の1件であったが、上記のとおり、期限の意図を繰り返し説明したい。	37	28	75.7%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
調理学（Q1）	杉山 寿美	○ 調理学（杉山 寿美） 1）昨年度の結果を踏まえた授業改善点 昨年度、一昨年度（R5年度）の評価が低かったため、より学生との双方向性を意識した結果、昨年度（R6年度）の学生評価は極めて高かった。今年度は昨年度と同様に行ったが、昨年度より低かった。授業を同じように実施あるいは改善しても、学生の評価は年度によって異なることを感じている。迅速に対応しつつも、芯をもって、授業を運営することが必要だと感じている。 2）履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 この授業では、学内の梅の収穫、「今日の料理」「今日の料理ビギナーズ」に掲載された料理の自宅調理等、調理経験が十分でない学生（19,20歳であるので経験不足は当然）に、食と季節の関係を感じさせることを、調理科学の学びの基盤において（文化の中に科学が存在）。また、飲食につながる授業内容であるため、授業時間内に食中毒対策を講じながら、関連する食材の試食をさせている。学生の反応は、授業期間内の複数回のコメントシート等で把握しており、授業に反映している。 3）期末アンケート結果から見た今後の課題 アンケート回答者は34名である。「この授業に関してさらに学びたい」について、「強くそう思う」19名（56%）、「そう思う」15名（44%）であった。昨年度は、それぞれ、66%、34%、一昨年度は、それぞれ、42%、58%であった。昨年度、一昨年度の中間程度の評価であることは、学生との関わりから想定通りと感じている。自由記述は「食べながら学ぶことが出来て良かった」等の肯定的な意見2件のみであった。（回答数37：履修登録者数34名、回答率91.9%）	37	34	91.9%
基礎栄養学実験（Q1）	山岡 雅子	① 昨年度の結果を踏まえた授業改善点 使用する実験書は教員が独自に作成したものであり、必要最低限の情報のみ記載している。これにより、学生が自ら考える力、班で協力して課題を解決する力、教員の口頭説明から要点を聞き取り記録する力などを身につけることを目的としている。これらの方針は学生に受け入れられており、特に否定的な意見は見られなかった。 ② 履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 各実験テーマごとに個人レポートを課し、教員が全てに個別コメントを記入した。今年度は中間時点で一度レポートを返却し、学生が自分の課題点を早期に把握できるようにした。その後、全実験終了後にも全体返却と総括的なフィードバックを行った。また、レポート全体の傾向を分析し、図表の使い方や統計手法の課題点などを整理した上で、全体に向けた指導を実施したことで、学生のレポート作成に対する理解と質の向上が図られた。さらに、最終回にはテーマごとにグループ発表会を行い、討論を通して個人では気づけない視点に気づき、理解を深める機会を提供した。個別対応・中間でのレポート返却・協働学習という多面的なアプローチにより、学生の学びの質とモチベーションの向上が確認できた。 ③ アンケート結果から見た今後の課題 期末アンケートでは、すべての設問項目において肯定的な評価が多く、学生満足度は非常に高かった。また、教員作成の実験書に対しても否定的な意見は見られず、授業設計は学生の学習意欲や理解促進に適していると判断される。今年度はレポートの中間返却を実施し、改善に役立ったとの反応もあったが、さらに個々の進捗や課題に応じて、返却やフィードバックのタイミングを柔軟に対応することが今後の課題と考えられる。また、実験書の構成意図（最低限の情報で学生の思考を促す）については、オリエンテーション時に明確に説明を行うことを引き続き実施し、学生の理解と納得を得られるよう努めたい。	37	27	73.0%
応用栄養学（Q1）	栢下 淳	設問10 総合的に判断して、この授業に満足している。に対する学生の回答は、強くそう思う54%、そう思う46%とおおむね満足度が高いと判断される。管理栄養士国会試験の対象科目であり、引き続き理解しやすい講義を心がけていきたい。	38	13	34.2%
スポーツ栄養学（Q2）	山岡 雅子	① 昨年度の結果を踏まえた授業改善点 毎回グループディスカッションの機会を設けることで、学生同士の意見交換を促進した。特に、健康情報に関するテレビ番組の視聴を取り入れ、それが科学的根拠（エビデンス）に基づいているかを考察する視点を育むよう工夫した点は、学びの深化につながったと考えられる。また、関連科目である「基礎栄養学」の内容を踏まえた反転授業を取り入れ、学習の定着を図った。 ② 履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 グループディスカッションや発表内容を通じて学生の理解度や反応を随時把握していた。また、授業後のコメントや口頭でのフィードバックを通じて、学生の声を授業運営に反映した。これらのリアルタイムな反応を踏まえ、適宜ディスカッションテーマの調整や資料の補足を行い、学生が興味・関心を持って取り組めるよう努めた。結果として、授業への集中度や理解度が高まり、活発な参加が見られた。 ③ アンケート結果から見た今後の課題 今回の期末アンケートでは、全ての設問項目において肯定的な回答を得ており、授業に対する満足度は非常に高かった。一方で、アンケート結果を見ると、授業外学習の時間が少ないことが課題として浮かび上がっている。授業内容への興味・理解は高いものの、それを深めるための自主的な学習習慣が十分に定着していない可能性がある。 今後は、授業外学習を促進する仕組み（ミニ課題など）を取り入れ、学習の定着と応用力の強化を目指すしたい。	37	23	62.2%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
世代別栄養教育論（Q1）	森脇 弘子	1）昨年度の結果を踏まえた授業改善点 昨年度、動画で栄養教育の実際について視聴したことが好評であったため、今年度も動画を厳選し、提示した。授業外学修時間が2時間未満の者が約5割おり、授業外学修時間を増やすよう、課題を増やしたところ、約4割弱と少なくなった。 2）履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 毎回、授業後に授業の感想・確認問題を課した。次の授業で感想や質問に回答し、確認問題の解説等を行い知識の定着を図った。授業の感想から、学生が興味を持った事項や教育法を把握し、より実践的な内容や、ペアワークを取り入れた。 3）期末アンケート結果から見た今後の課題 「総合的な満足度」はすべての者が肯定的な回答をしており、適切な授業が提供できたと判断し、基本的には今年度の授業運営を継続し、さらに学生の意見を取り入れ、工夫していきたい。能動的学修について2名（6％）の学生が否定的な回答をしており、学生の求める能動的学修を模索していきたい。自由回答より、課題の内容、ディスカッション、DVDの視聴、外部講師の講話などが好評であり、今後も改良しながら継続したい。	38	32	84.2%
栄養教育論実習Ⅰ（Q2）	栢下 淳	本科目は2年生2Qni開講している実習である。栄養教育（個人、集団）ができるようにするための実習であり、個人、集団のいずれにおいても必ず質問を行いようにし、それについての回答を考える力も養成している。Q10総合的な満足度は、強くそう思う50%そう思う50%とおおむね良好な評価と考えられ、引き続き現状の形態で進めていきたい。	38	6	15.8%
臨床医学（Q1）	北台 靖彦	多くの医学知識を得るため、授業が受動的となり、能動的な要素が少なくなっていたことは否めない。 広く知識を与えるよりも、動画やケーススタディーを各回取り入れることにより、学生は興味を持って聴講していた。今後は、学生の負担にならない程度に課題を出すことも考慮している。	38	9	23.7%
博物館資料保存論（Q1）	大知 徳子	昨年度の学生の反応をふまえて、今年度も実践的な学修ができるようフィールドワークや施設見学を継続実施した。特に広島県立文書館の見学実習については、授業後に得た学生の感想から、教科書では学べない体験をさせていただくことにより、資料保存に関する学修意欲がさらに高まったことが読み取れた。授業外学修時間は「2時間未満」であるため、次年度は学生自らがさらに高い目標を設定し、挑戦できるよう工夫したい。	16	3	18.8%
博物館展示論（Q2）	大知 徳子	この授業では、宮島学センターが所蔵する資料（浮世絵版画、絵図、絵葉書等）を用いた展示体験をおこなう。グループワークにおいて展示案を作成する回においては、一昨年度のアンケート結果をふまえ、グループワークと並行して個別対応を増やした。これにより、昨年度・今年度はさらに能動的に学修を進める学生が増えた。授業外学修時間は「4時間以上」「2時間以下」などバラつきがあるが、毎時間に到達すべき目標は履修者全員が達成していたため、適切な時間数であると考えている。自由記述欄により、実践的な展示体験をおこなうことが学修意欲に結びついていることが読み取れるため、次年度以降も展示体験を行い、その成果物を地域連携事業に活用できるよう調整したい。	14	7	50.0%
博物館教育論（前期集中）	久下 実	5日間の集中講義で、教育論の理論の基礎的理解と、実践としての展示会を想定した教育プログラム作りを柱として実施した。 内容にやや詰め込み過ぎている感がある中、受講生は、真剣に、前向きに取り組んでいたのは、とても良かったと思う。 アンケートでは概ね満足度は高いようだが、理論編については、改善の余地があると考えており、より良いプログラムとなるよう、努めていきたい。	16	13	81.3%
多文化共生マネジメント（Q1）	植村 広美	68名の履修者のうち回答者がわずかに4名だったため、限定的な意見と言わざるをえない。 とはいえ、1名が授業時間以外に取り組むべき課題が示されていないと答えていた為、授業時間以外での課題量を増やしていこうと思う。 また、自由記述において、履修者とゲストスピーカーが自由に対話する機会を設けてほしかったとの意見が出されていたことから、来年度にはそうした対話型の授業のあり方も模索していきたい。	68	4	5.9%
多文化共生教育論研究（Q2）	植村 広美	21名の履修者のうち回答者が1名のみ、おまけにすべての項目において「強くそう思う」と肯定的な回答を示していたため、客観的な評価として捉えることができない。	21	1	4.8%
共生認知心理論研究（Q1）	向居 暁	回答がなかったので、何とも言えない。ただ、これまで中間レポート、及び、期末レポートを成績評価の一部としていたが、レポート作成に生成AIを作成したとしか考えられないものがあり、今後は成績評価の在り方を再考しなければならないと感じた。	15	0	0.0%

■担当教員コメント（専門科目） 地域創生学部 令和7年度前期

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
多文化接触と言語（Q2）	馬本 勉	「多文化接触と言語」の授業は、動画教材を織り交ぜながら、西洋の言葉と文化との接触の歴史をたどることを中心に行なった。その上で、異文化・異言語に向き合う姿勢や、幅広い捉え方を学び、自身の考えを表明する機会を多く設けた。学習管理システムmoodleによって履修者間で意見を共有できることや、教材の内容や動画利用等についての具体的なコメントを含め、概ね満足度の高い授業を展開することができたと考えている。一方、アンケートでは授業外での課題提示と授業外学修時間の確保が十分でないことが示されたため、次年度はより工夫をして臨みたい。	68	19	27.9%
米国社会文化論研究（Q2）	栗原 武士	概ね学生からは一定の評価をもらったものと理解している。 来年度に向けて、細部の授業のブラッシュアップに努めたい。	9	2	22.2%
英語表現論研究（Q1）	ジェシカ タインズ	多くの学生、上級英語やゼミ生以外の学生も履修してくれることは非常に嬉しいことだと思っています。 英語を練習すること以外にも、英語表現論の内容に興味を持って、オールイングリッシュであるのにも関わらず参加してもらって大変ありがたく思っております。ただし、英語で授業を受けることにどれぐらい慣れているかがばらばらで、全員が学べる環境を作り上げることが課題です。今回は、回答が少なかったことも物語っていますが、授業の内容や課題を工夫したものの、支持や説明が多くの学生にとって難しかったかと思います。次回は、課題などを出したときに、より丁寧な説明をするように心がけていきたいと思います。	18	2	11.1%
韓国語文化論研究（Q2）	鄭 遇澤	今回の韓国語文化論研究への履修登録者は3、4年生10人で、在学中最後の韓国語関連授業になった。 それで、今までの習得してきた韓国語能力を振り返りながら、自らの発表や相互討論ができるように授業を進行した。 入学してから3、4年間の間、真面目に勉強して頂いたこと、ありがたいと思います。	10	1	10.0%
文化継承マネジメント（Q1）	小川 俊輔	一、受講生64名、回答者7名、回答率は10.9%であった。 二、回答率を高め、より多様な学生の声を拾う必要がある。 三、回答者7名からは極めて高い評価を受けた。「第1Qでは1番面白い授業だった。」とのコメントもあった。何よりである。	64	7	10.9%
観光まちづくり論研究（Q2）	和田 崇	昨年度から授業内部の一部をリニューアルし、観光まちづくりに関する最新の話題を提供した。また、授業各回の最後にミニツッペーパーを提出してもらうことにより授業理解度等を把握した。 学生からの授業評価がないので、上記以外の教員コメントはできない。	18	0	0.0%
日本地域史論研究（Q1）	光成 準治	ほとんどの受講者にとって、古文書を解読することは初めてで、報告レジュメを作成することは大変だったと思うが、各受講者は熱心に取り組んでくれた。受講者が学生生活を送っている広島という地域の歴史に興味を持ち、地域理解が進んだことと思う。	8	1	12.5%
日本文学論研究（Q2）	西本 寮子	回答率は24%（受講者50名、うち回答者12名）とひくいものの、総合的な満足度は100%（「強くそう思う」92%、「そう思う」8%）であり、ほぼ狙いどおりの授業を展開できたと考えている。対面授業ではあったが、日本の古典になじみのない留学生の受講が10名を超えていたこともあり、teamsを連絡、補助・補足資料等提示用として日常的に活用したことも高い評価を得た要因の一つであったのではないかと考えている。 最も力を入れたのは、毎回の振り返り課題（記述内容は毎回異なる）や感想の記述を、すべて手書きのコメントシートで行ったことである。翌週、授業開始時にまとめを提示、フィードバックを行ってから授業に入った。同じ話を聞いて他の受講生はどう考えたのか、異なる文化的背景をもつ人たちがどう理解したのかを知ること、小さな疑問や考えを深め、自分で調べるための方法を無理なく身につけることを狙ったのである。この方法が功を奏したことは、個人差はあるものの、記載内容が毎回少しずつ深まっていたこと、最終アンケートの自由記述欄にはこの狙いが伝わったと思われる記述が認められたことで確認できた。	50	12	24.0%
日本語文化論研究（Q1）	小川 俊輔	一、受講者44名に対して回答者3名。繰り返し回答するように声を掛けているのに、なぜだろうか。 二、アンケート回答者が僅少で、回答結果に基づいて判断、コメントすることは困難である。	44	3	6.8%
東アジア文学論研究（Q2） （工藤）	工藤 卓司	初めての授業であったが、概ね高い評価となった。レポートの質が予期した以上に高く、その分、予想以上の教育効果が得られたと思う。	26	17	65.4%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
財務会計論（Q1）	山崎 敦俊	履修者46名のうち26名（56.5％）の方にアンケートをいただきました。 ご回答をいただいた学生の方には心より御礼申し上げます。 「この授業の目標とする力（知識や技能など）が身につく」という問いに関しては、「強くそう思う50％」、「そう思う50％」という回答を頂きました。 会計学の基本的な概念を学びつつ、実際の財務諸表（貸借対照表、損益計算書、キャッシュ・フロー計算書）の作成を毎回の講義で取り入れていきましたので、講義内容をマスターするのに、毎回の講義でご苦勞もあったかと思います。 ですが、この度の期末試験の結果を見てみて、多くの学生さんが必要な部分の理解をしていただけていると感じられて安心しました。 「この授業の教材（教科書・資料など）は適切だ」という問いに関しては、「強くそう思う65％」、「そう思う34％」、「そう思わない4％」という回答を頂きました。 毎回の講義でA3サイズ・両面印刷のプリントを配布し、重要語句の単語記入や赤ペンやマーカーで重要な部分を可視化していく作業を行って頂きました。 全15回の講義を終えて、会計学の基礎的な知識を集約できたプリントが学生さんのお手元に残ったのではないのでしょうか（捨てないで大切にしておいて欲しいです）。 「総合的に判断して、この授業に満足している」という問いに関しては、「強くそう思う46％」、「そう思う50％」、「そう思わない4％」という回答を頂きました。 96％の方にはおおむね満足にいただけた回答でしたが、まだ私自身でも改善するべき点もありますので、今後の講義に活かしていきたいと思います。 自由回答記述では3件のありがたいコメントを頂きました。 毎回の授業内容の趣旨をご理解いただきながら、会計学の知識の重要な部分を身につけていただけたのだと思いました。 多くの学生さんが熱心に講義を受講して下さっていたことが印象に残りました。	46	26	56.5%
コンテンツ産業論（Q2）	矢澤 利弘	全ての授業回に渡ってオンデマンド方式によるオンライン授業であり、能動的な学修機会が取れないことが危惧されたが、アンケート結果を見ると、決して能動的な学習の機会がないわけではなく、課題への取り組みなどで、学生は能動的に学んでいたようである。身近な例を題材にした分かりやすい講義であるとの評価があり、今後も身近な例を出しながら講義を進めていきたいと考えている。オンデマンド方式はいつでも受講できることに加え、復習がしやすいという意見が多い。ただ、それゆえに集中力を欠くとの意見もあった。ただ、これは如何ともしがたい問題であるので、オンデマンドはオンデマンドなりの特性を活かした授業を心がけたい。	94	18	19.1%
数値解析（Q1）	重丸 伸二	授業への取り組み状況は良く、概ね良好なアンケート結果になっている。自由記述欄を見ても、授業の実施方法、学生の質問への対応等のサポートは概ね好意的受け取られている。 これまでは授業時間内に終わることができた課題を基本としてきたが、授業時間外の学習時間が少ないことから、授業時間外のレポート課題を課すことも検討したい。	41	21	51.2%
プログラム言語処理（Q2）	重安 哲也	今年度の履修登録者は33名であったが、実際に出席をした学生は25名程度であり、授業を実際に受講した学生のほぼ全員がアンケートに回答してくれている。 アンケート結果からは、以下の設問に対し、回答学生全員が「強くそう思う」もしくは、「そう思う」と回答していることから、概ね授業内容は受講生のレベルにあったものとなっていたと考えられる。 ・授業に集中して真剣に取り組んだ ・授業の内容・量は適切である ・この授業内容についてさらに学びたくなる ・総合的にこの授業に満足している なお、「この授業の学修活動で必要な支援をえている」についても全員の学生が「（強く）そう思う」と回答しているものの、自由記述欄では、「見直しのための提出課題の返却を希望」していることがわかった。毎回の授業で課す課題提出ではあるが、2コマ授業で進むスピードが速く、教員としても、課題のチェック、返却が、次週までに間に合わないことが多くあったことは改善する必要があると感じた。 ただし、一方では、「解答の解説が毎回あり、課題の答えがよく理解できた」旨の記載もあり、提出物は返却できなかったが、課題の内容は理解してもらえていると感じている。	33	25	75.8%
音声情報処理（Q1）	折本 寿子	①昨年度の結果を踏まえた授業改善点 自由記入欄を含め、実施内容に満足したコメントばかりだったので、今年度も同様の授業展開で行った。 ③アンケート結果から見た今後の課題 昨年度までのアンケート結果に比べ、設問4.能動的な学び、設問5. 目標の力が身に付く、設問7. 教材の適切性、設問10. 授業の満足度について、「強くそう思う」と「そう思う」の割合が逆転し、そう思うと回答した割合が70％、強くそう思うと回答した割合が30％となった。 また、その他の項目についても、10％ほど「そう思う」と回答した学生が増加した。 昨年度との違いとして、受講生が12名増加し、TAを付けることができなかったため、演習に対して一人一人の理解力を上げるためのサポートを十分に行えなかったことが、アンケート結果として出てきたのだと思われる。自由記入欄にも、授業の進みが早すぎる、授業内での課題に対する説明が不十分といったコメントがあり、演習の時間を確保し学生の進捗を考慮しつつ、授業内容の十分な説明には時間が足りなかったのだと思う。 来年度以降は、テキストに記されているプログラムは自宅学習とし、授業では説明と応用演習を行うことで、説明時間の確保、および演習を増やすことで理解力を向上させる工夫を行う。	29	23	79.3%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
ビッグデータ解析演習（Q1）	岡部 正幸	課題については、できるだけ現実に起こりうる問題を想定して作成しており、難易度は適切に設定されていると考えている。引き続き基本構文の丁寧な説明と課題に取り組む際のサポートを行っていきたい。	41	12	29.3%
応用情報システム特別講義（前期集中）	菅原 一真	【昨年度の結果を踏まえた改善点】 本科目は昨年度まで半期開講だったが、今年度から集中講義に変更された。「データ分析ソフトTableauを用いた社会課題の原因探索・説明力の養成」という科目の本質を維持することが課題だった。 そのため以下の対応を実施した。 ・ソフト操作説明を講義内でコンパクト化し、復習用動画を開講前から視聴可能にした ・時間のかかる社会課題設定において、生成AIをデータ探索やロジック整理の補助ツールとして活用してもらった 【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】 少人数講義の利点を活かし、以下を実施した。 ・講義前後の質問時間確保と、教室巡回による個別フォロー ・気軽に質問できる距離の近い雰囲気づくり 【アンケート結果から見た今後の課題】 アンケート結果は概ね好評だったが、オープンデータの加工負担が大きく、可視化に十分な時間を割けなかった学生がいた。 データ加工の重要性和プロセスの難しさを体験してもらう意図はあったものの、次回に向けて以下の改善案を検討する。 ・加工済みデータの提供：分野別に準備し、分析・可視化作業に注力できる環境を整備 ・生成AI活用の提案：検証済みの手法を伝え、データ加工の負担を軽減 学生にデータ分析工程のどこにフォーカスしてもらうべきかを再検討し、次回開講までに方針を固める。	5	4	80.0%
確率統計（Q1）	富田 哲治	この授業は、授業中に講義スライドに数式などを書き込んで説明する形式を多用するため、前方スクリーンと天井モニターだけでは、座席によって受講が困難になることが想定される。 そのため、各座席のサブモニターに教員PCを表示させるために、サブモニター配信用にTeamsで作成したミーティングに各学生がオンライン参加し、教員PCを画面共有することで、中間モニターの代わりとなる環境を構築した。 また、ミーティングを録画し、授業後に復習用動画として一定期間配信した。 アンケートの結果から、まずQ1「わたしはこの授業に集中し、真剣に取り組んでいる」はすべての受講者が肯定的な回答であったことから、真摯な受講姿勢がうかがえる。 Q2「授業外学修（課題、準備、復習等）時間」については、2時間位上をあてている学生は約63%であり、昨年度より20ポイント増加し、全くしていない割合は若干減少した。 これは、復習用に配信した動画が昨年度よりは活用されたものと考え、肯定的な回答が、Q5「課題の内容・量」が93%、Q6「授業目標の力が身につく」が100%、Q7「教材・教具の適切さ」が96%、Q9「学習活動支援」が89%であったことと、Q10「総合的な満足度」で肯定的な回答が100%であったことから、来年度も同様な方法で授業を実施して問題ないと考え、ただし、自由記述の内容で、授業の進行速度や復習用動画の配信期間などについて個別の要望があり、来年度に向けて検討する必要があると感じた。	46	29	63.0%
情報システム論（Q2）	宇野 健	①昨年度の結果を踏まえた授業改善点 この授業は座学と演習から成っているため、試験が両方の範囲から出題されるということで、試験対策が難しいとの意見があった。そこで、今年度は授業と試験のやり方を大きく変更し、座学の小テストを毎週実施し、定期試験（2回）は演習のみで実施した。 ②履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 Teamsを積極的に利用して、毎回の授業の補足や試験対策問題などを、随時発信した。個別チャットの質問等は、授業時間でも即時対応を心がけ、自学習のスムーズな支援を行えたと考える。 ③アンケート結果 授業形式を大きく変えたためか、例年とは異なるコメントが見られた。授業のサポートについては、評価するコメントが幾つか見られたが、課題が多いこと、説明部分を増やしてほしいなどの意見が見られた。これは毎回小テストと、その振り返りを行っていたため、これまでよりも説明時間を減らしたことが影響しているのかもしれない。次年度以降は小テストと説明時間をうまく両立するための授業設計をする必要がある。また、Webテキストの使い勝手に言及したコメントも見られたので、取り入れられるものは改善したい。	45	39	86.7%
情報セキュリティ（Q2）	佐々木 宣介	【昨年度の結果を踏まえた改善点】 授業の構成は昨年度とおおむね同じとしているが、情報セキュリティはトレンドの移り変わりの早い分野であるため、授業資料は最新の動向を一部盛り込んだ改訂を行っている。 【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】 各回の授業の最後に、知識の定着を図ることを目的とした四問択一式の簡単なテストおよび、やや深い考察を必要とする記述式のテスト課題を出題している。今回は、学生の回答状況によって授業内容を変更するような対応は行っていないが、正解率等の状況により、追加の解説を実施する等の対応は今後検討したい。 【期末アンケート結果から見た今後の課題】 アンケートの数値自体はおおむね問題のない範囲と考えられる。ただ、設問3の「授業時間外に取り組むべき課題の提示」、設問9の「学修活動に対する支援」の項目に各1名、評価の低い回答があり、反省点と考えている。自由記述欄には不満のコメントなどはなく、大きな問題はなかったと考えている。今後も最新の動向を講義に反映させるよう、内容を改訂していく予定である。	43	11	25.6%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
画像情報処理（Q2）	肖 業貴	この授業は基礎から教えている。演習前にすでに授業内容をクリアしている。復習する時間を確保できたと思う。 テストの記号はただの記号であり、a,b,cでも、ア、イ、ウでも、問題にならず、中身の理解度が問題だと考える。 スライドを優しく作ったつもりで、毎年見直している。今後も工夫するが、授業中に携帯を見ないで集中してほしい。 授業資料にある一部の英語表記は、授業の最初に説明した通り、慣れてもらうためである。今後もそのようにしていくと思っている。	42	31	73.8%
最適化理論（Q2）	肖 業貴	概ね想定通り。少人数で学生と話をしながら内容や宿題を調整した。今後も同じ方針で行きたい。 教科書については、なかなかいいのがない。教科書の訂正を1からやりたいのだが、そんな時間が とても取れないのが実情である。	8	5	62.5%
技術英語講読Ⅰ（Q2）韓	韓 虎剛	本授業は、約9割の学生が総合的に「満足している」と評価しており、特に全学生が真剣に取り組んでいる様子がアンケート結果からうかがえる。自由記述では、「授業の終盤には関連語句や連句がしっかり頭に入った」といったコメントも見られた。一方で、「内容が難しく、理解しづらい」「発表の量にばらつきがあり、不公平に感じる」といった指摘もあった。これに対する改善策として、難解と思われる内容は板書を用いて丁寧に説明し、理解を促進する。また、発表担当の内容を事前に均等に振り分けることで、公平性の向上を図る。	23	7	30.4%
技術英語講読Ⅰ（Q2）広谷	広谷 大助	まず、回答率が他と比べ低い点であるが、本講義の最終週では時間がぎりぎりとなりアンケートを授業内で回答する時間が取れなかった。本講義では毎年時間がぎりぎりで終了していることから、アンケートを取る余裕を持つような設計をする必要がある。本講義では技術英語に慣れてもらうためになぜ技術英語を学ぶ必要があるかを文献によって理解し、それを踏まえ当方の専門分野の論文とテキストを両方読んでもらうことによって違いを理解してもらうことを目的にしている。授業中は学生に発表してもらいそれに関係する問いに答えてもらいフィードバックを行っている。また、出席カードでは質問を受け付け、個別に回答希望する場合にはTeamsのチャットにて、それ以外はPDFにてTeamsに掲載している。昨年と比較して前述の論文とテキストを変えた。それを踏まえ今回は回答率が50%弱であるが、回答内容を見るとあまり良くないと思われる。また、これまでになかった意見が噴出した。一番多かった意見はこれまでの内容だと意味がないというものである。また、論文やテキストよりも単語や文法の方に力を入れた方が良いとの意見も複数あった。このようにした理由としては少なからず英語が苦手な学生もいることへの配慮があった。よって、これまでなかった否定的な意見が噴出したことから来年度は半分以上内容を改訂し、これまで使わなかったテキストも使い真の"技術英語"を学ぶことを検討する。	18	8	44.4%
モバイルネットワークシステム（Q2）	重安 哲也	学生の回答からは、概ねほとんどの項目において、ほぼ全員の学生から好意的な回答結果がえられた。この授業では、前半を技術解説、後半を、前半の説明を受けたより詳細な内容について各自での調査活動の2パートから構成している。自由記述欄からは、複数の回答において、このような形式について、「前半の内容を調査活動によってより深く理解することができた」と言った、好意的な記述が寄せられている。取り扱った内容では、難しい内容もあったが、説明方法に工夫をするなどの改善を行なっていきたい。さて、自由記述欄からは、1名であるが、「調べたい内容を解説する文献に辿り着けなかった」と言った記述もあった。これについては、次年度以降、どのようなものを調査すれば、求める内容に辿りつきやすいのかと言った示唆を行なっていきたい。この授業は3年前期に配当されるものであり、当学部では、3年から卒研配属をしていることもあり、この授業のように学生各自による調査は、研究活動におけるサーベイ能力の育成につながることもあり、その活動によってえられる学生の成長効果をさらに増大させるために、引き続き、検討を行なっていきたい。	18	15	83.3%
臨床栄養学実習Ⅰ（Q2）	神原 知佐子	本科目は従来のグループワークに加え、個人（個別）で実習課題に取り組む形式を併用した。実習課題について、細かく項目分けて具体的に示すことで、本科目において身に付けさせたい技術や技能を養えるように工夫した。実習中には、履修者全員が積極的に実習に取り組めるように声かけや指導を行った。授業内外で、教員から積極的に履修者とコミュニケーションをとることを心がけ、ささいな疑問や要望にも随時対応した。机間巡視やレポート指導により、履修者の理解度や学修意欲の把握に努め、授業への反映を試みた。全体的に履修者の満足度は高く、回答者全員が「強くそう思う」「そう思う」を選択した。自由記述からは、「病態別の食事と常食の違いを、実習を通して味わうことができました。管理栄養士側だけでなく患者側の立場にもなり考えることができました。」「実習が多くて楽しく学ぶことができました。」とあった。授業内外での履修者とのかわりおよびレポート提出等を通じて、履修者とコミュニケーションを取ることで、履修者の反応を的確に捉え、授業内容および課題等に随時対応していきたい。	38	30	78.9%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
東アジア社会文化論（Q1） （R5年度以前中国社会文化論 同時開講）	上水流 久彦	読む文献を昨年度から変更したものもあり、学生が関心を持ちやすい内容にした。また台湾のエスニシティについては見せる教材をかえ、より理解しやすいものにした。ゲスト講師も活用し、受講生の視野が広がるものとした。 授業毎回ごとに感想を出してもらい、質問に回答するようにした。授業方法に対する意見などは確認できなかった。 修学旅行コース案をグループで作成してもらったが、修学より観光に近いところもあり、課題の出し方については、今後、工夫が必要である。	74	34	45.9%
企業法（Q2）	松原 正至	アンケートには誰も解答がありませんでしたが、次年度も受講生と双方向の授業を目指したいと考えています。	6	0	0.0%
基礎生化学（Q2）	岡田 玄也	対象学年が1年生ということもあり、多くの学生が高い学習意欲を持ってこの講義に取り組んだことが伺える。 今年度は教科書に加えてワークブックを採用し、学習課題として授業時間外で能動的学習としてグループワークと反転授業を実施した。 結果として「時間外学習時間」は昨年度よりも増加傾向にあり、「講義時間外で取り組むべき課題が示されているか」についても好意的な意見が多く見られた。 回答率については50％程度と学生に対する周知が不十分であったため、次年度以降は今年度以上に授業評価アンケートへの回答を学生にお願いすることとしたい。	37	17	45.9%
健康スポーツ科学（Q2）	鍛島 秀明	健康スポーツ科学の授業では、学生の集中度や授業満足度が高く、授業目標の達成度や教材・支援体制も概ね肯定的に評価されている。特に、授業内容への興味や学習意欲の喚起、学修活動に対する支援は評価が高く、授業設計の方向性は適切であると判断できる。また、授業を通して身体構造や機能について理解が深まったという声が多く、学習成果も得られていることがうかがえる。 一方で、授業外学修時間は1単位あたり30分以上1時間未満が6割強を占め、課題提示や自主学修の促進にさらなる工夫の余地がある。能動的学修機会についても「そう思わない」と答えた学生が2割超おり、グループワークや実習などの参加型学修の充実や時間配分の見直しが求められる。また、黒板の文字が見えにくいといった学習環境に関する指摘もあり、視認性の確保や資料の提供によって理解しやすさを向上させることが望ましい。 改善策としては、授業外課題や復習の明確な指針を提示し、学習到達目標との関連性を強調することで、学生の自主学修を促すことが可能である。また、重要事項の資料やスライドの事前配布、黒板記載の視認性向上、実習・演習の時間や方法の工夫により、能動的学修の効果と理解度をさらに高められる。学生の興味関心が高く学習意欲もあるため、教材・課題・学修活動をより有機的に組み合わせることで、学修効果の最大化が期待できる。 総じて、授業設計や教材・支援体制は良好で満足度も高いが、授業外学修の促進、能動的学修機会の充実、学習環境の改善を中心に取り組むことで、理解度・学習効果のさらなる向上が可能である。	38	32	84.2%
スポーツ科学実習（Q1）	三浦 朗	1）昨年度の結果を踏まえた授業改善点 一昨年度・昨年度の実習の実施状況とアンケート結果を踏まえ、今年度の授業内容を決定した。改善点として「能動的な学習」をうながすために、グループディスカッションや授業の後半にレポート課題を課して、自主的な学習を促す工夫につとめた。しかし、残念ながら、設問2：授業外学修において、2時間未満のものが約半数いた。一方、設問3：授業時間外に取り組むべき課題の提示においては、90％が肯定的回答であった。課題の量について再考してみたい。なお、それ以外の項目は、ほぼすべて肯定的回答を得ており設問10：総合的な満足度においては、肯定的回答100％であり概ね良好であった。 2）履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 授業後に送信してもらったコメントシートに、授業に対する要望（随時）や授業内容・教材に対する希望や意見を書いてもらい、それらにすぐに対処したので「設問5：課題の内容・量（肯定的回答100％）」「設問7：教材・教具は適切（肯定的回答97％）」の評価は良好であった。しかし、課題の量については、肯定的な回答を得ているにも関わらず、授業外学修時間が少ないので今後の改善点である。 3）期末アンケート結果から見た今後の課題 集計結果から考察すると、「設問1：真剣な取り組み（肯定的回答100％）」や「設問8：さらに学びたい（肯定的回答97％）」など、授業自体への取り組みや興味は高評価を得ているものの、依然として「設問2：授業外学習時間」が不十分であることがわかる。よって、学生の授業外学習を引き出す工夫が必要であると思われるので、昨年度に引き続き、事前学習を促すような課題を毎回の実習終了時に出すことを積極的に行いたい。またFD・SD研修会への参加や、専門書でそのスキルを学びたいと考えている。課題ではないが、身体運動をとまぬ実習なので、教具の選定と準備および安全管理面での管理は最優先で望むべく準備を怠らないようにしたい。	36	32	88.9%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
分析化学（Q2）	岡田 玄也	対象学年が1年生ということもあり、多くの学生が高い学習意欲を持ってこの講義に取り組んだことが伺える。 昨年度は教員による講義形式が主であったため、今年度は能動的学習としてグループワークと反転授業を実施した。 能動的学習に対して概ね好意的な意見が得られ、「目標とする力が身につく」などの回答も比較的良好であった。 「課題の量」については適切であったとの意見が学生から多くある一方で、授業外学習時間の少ない学生も散見することから、来年度は課題を含めた授業外学習の増加を目標に講義を展開していきたい。	36	16	44.4%
食品学（Q2）	谷本 昌太	1）昨年度の結果を踏まえた授業改善点 昨年と同様に試験を含め原則としてすべて対面で実施した。尚、諸事情で対面に参加で見ない学生については、リアルタイムオンラインでの聴講を可能とした。前年度までの授業録画の公開と今年度の授業録画を公開し、予習・復習への活用を促進した。 2）履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 昨年と同様にコメントシートを実施した。一方、授業中にも積極的に質問をするように心がけた。 3）期末アンケート結果から見た今後の課題 自己評価の項目において、設問1で、すべての学生が“そう思う”以上の回答をした。一方、設問2の学生の授業外学修時間が2時間未満の学生が17%であった。この結果は、昨年度より割合が増えており、予習・復習をさらに促す必要がある。授業評価においては、設問3の授業時間外に取り組むべき課題については、すべての学生が、“そう思う”以上の回答をした。設問3の能動的学修機会について22%の学生が“そうは思わない”以下の回答をし、これまでと同様の結果であった。設問4の課題の量については、17%の学生が、“そう思わない”以下の回答をした。設問7の教材および教具、設問8の更に学びたいとおよび設問10の総合評価では、6%が、“そう思わない”と回答した。この結果は昨年と同様であった。一方、設問9の学修活動の支援については、“そう思わない”の回答はなかった。なお、回答率は、複数回呼びかけを行ったにも関わらず、48.6%と例年と同様に低値であった。自由記述でテスト問題の指摘があり、来年度はこれまで以上に問題作成時にその精査を行っていきたい。	37	18	48.6%
栄養教育概論（Q2）	栢下 淳	本科目は1年生2Q開講で、食事摂取基準を中心に講義している。食事摂取基準には専門用語も多く、学生が知らないと考えられる専門用語は、逐次補足説明を行い講義を進めている。Q10総合的な満足度の学生評価は、強くそう思う38%、そう思う62%と全体に満足していると推定される。引き続き、現状の形態で講義を進めていきたい。	36	16	44.4%

【 後 期 】

- 授業科目の概要 地域創生学部専門科目
- 授業科目の名称 担当教員コメント欄参照
- 回答数 2,292
- 回答率 43.9%

【 総 評 】

地域創生学部の専門科目に対して、令和7年度後期は2,292の授業評価アンケートの回答が寄せられたが、その結果（Q1の平均値3.55やQ8の平均値3.45）および担当教員コメントからは、全体として学生は授業に対して高い意欲をもって主体的に学修へ取り組んでいることがうかがえた。特に語学科目においては、ディスカッションやプレゼンテーションなどの参加型学修が効果的に機能し、授業への集中度や総合満足度について高い評価が多く見られる。また、到達目標に対する理解や語学力向上への手応え、さらに学び続けたいという意欲の向上など、学修成果に関する肯定的な意見も多く確認された。語学以外の専門科目においても、同様に、学生は概ね主体的に授業へ参加しており、ディスカッションや発表、グループワークなどの参加型学修が学習理解の促進に寄与していることが明確となった。Q4「この授業では能動的学修機会がある」に対する回答（平均値3.36）や教員コメントによく表れている。多くの授業で学修成果や満足度（Q10の平均値3.51）は比較的高い水準にあり、Q6（平均値3.52）やQ7（平均値3.52）の回答に明らかなように、授業目標と学習活動が適切に結びついていると考えられる。

一方で、Q2「わたしがこの授業に関連して行っている授業外学修時間」に対する回答（平均値2.83）などに表れているように、「授業外学修時間が十分でない」という指摘も一部に見られ、今後は授業内容と連動した継続的な学修機会の充実が課題として挙げられる。今後も学生の主体的な学びを促す授業設計と継続的な授業改善を通して、学修成果の向上と高い満足度の維持に努めていくことが期待される。また、授業アンケートの回答率については、全体では43.9%であったが、科目間で一定の差が見られた。アンケート結果は授業改善に資する重要な資料であることから、今後も学生への周知や回答機会の確保を通じて、より多くの学生から意見を収集できるよう回答率の向上に努めていくことが望まれる。

■学部・学科	地域創生学部	■受講登録者数	5,219
■科目名	地域創生学部専門科目	■回答者数	2,292
		■回答率	43.9%

■設問別評価集計

アンケート設問内容		強く そう思う	そう思う	そう 思わない	全くそう 思わない	当該 科目区分 平均値
		評価4	評価3	評価2	評価1	
Q1	わたしはこの授業に集中し、真剣に取り組んだ。	1,291 56.3%	976 42.6%	21 0.9%	4 0.2%	3.55
Q2	わたしがこの授業に関連して行っている授業外学修（課題、準備、復習等）時間。（1週間の平均）※	597 26.0%	783 34.2%	829 36.2%	83 3.6%	2.83
Q3	この授業では授業時間外に取り組むべき課題が示されている。	1,253 54.7%	926 40.4%	101 4.4%	12 0.5%	3.49
Q4	この授業では能動的学修機会がある。	1,152 50.3%	880 38.4%	203 8.9%	57 2.5%	3.36
Q5	この授業の課題の内容・量は適切である。	1,142 49.8%	1,046 45.6%	87 3.8%	17 0.7%	3.45
Q6	この授業の目標とする力（知識や技能など）が身につく。	1,234 53.8%	1,014 44.2%	38 1.7%	6 0.3%	3.52
Q7	この授業の教材（教科書・資料など）・教具（アプリ・ファイルなど）は適切だ。	1,256 54.8%	975 42.5%	54 2.4%	7 0.3%	3.52
Q8	この授業の内容に関してさらに学びたい。	1,136 49.6%	1,055 46.0%	89 3.9%	12 0.5%	3.45
Q9	この授業での学修活動（発言や提出物など）に対して必要な支援を得ている。	1,177 51.4%	1,045 45.6%	58 2.5%	12 0.5%	3.48
Q10	総合的に判断して、この授業に満足している。	1,233 53.8%	994 43.4%	55 2.4%	10 0.4%	3.51

■設問別科目平均の範囲と中央値

平均の範囲（当該学部・学科科目）					
最小値	25%点	中央値	75%点	最大値	標準偏差
2.97	3.47	3.60	3.75	3.98	0.41
1.86	2.51	2.82	3.22	3.76	0.65
2.72	3.33	3.57	3.74	3.95	0.46
2.43	3.09	3.52	3.75	3.93	0.52
2.65	3.30	3.51	3.67	3.96	0.47
2.84	3.39	3.56	3.70	3.98	0.45
2.81	3.39	3.57	3.70	3.97	0.45
2.75	3.33	3.50	3.70	3.98	0.46
2.75	3.38	3.53	3.70	3.98	0.46
2.78	3.36	3.57	3.75	3.98	0.44

※平均時間数の評価
2 単位科目：4 時間以上…4 / 2 時間以上 4 時間未満…3 / 2 時間未満…2 / 全くしていない…1
1 単位科目：1 時間以上…4 / 30 分以上 1 時間未満…3 / 30 分未満…2 / 全くしていない…1

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
韓国・朝鮮語Ⅷ（後期集中）	鄭 遇澤	国際文化学科の韓国語科目で、最後まで頑張っていたいただいたこと、ありがたいと思います。	1	0	—
上級中国語Ⅱ（Q3上級中国語表現同時開講）	工藤 卓司	受講生無し。	0	0	—
上級韓国語表現（Q3） ※上級韓国・朝鮮語Ⅰ同時開講	鄭 銀志	回答率は66.7%であり、一定の回答数のもとで本授業に対する評価を把握することができた。授業への集中度については全員が「強くそう思う」と回答しており、受講者が高い意欲をもって主体的に学修へ取り組んでいることが明確に示された。また、ディスカッション等の能動的学修機会についても100%が強い肯定的評価を示しており、語学力の向上を目指す参加型学修の設計は有効に機能していたと判断できる。課題の内容・量の適切さ、到達目標とする知識・技能の修得、教材・教具の妥当性、学修活動に対する支援体制、さらには総合的満足度に至るまで、すべての項目で100%の強い肯定的評価が得られたことは、本授業の目標設定と運営方法が受講者の学びと適切に接続していたことを示している。加えて、「さらに学びたい」との回答が全員から得られた点は、学生の学修意欲の持続・発展という観点からも重要な成果である。なお、受講者の積極的な姿勢こそが、授業全体の質を高める原動力となった。次年度も満足度の高い授業を提供できるよう、主体的かつ深い学びを実現するための継続的な授業改善に努める所存である。	6	4	66.7%
韓国・朝鮮語Ⅲ（後期） （韓国語Ⅱ読替）	鄭 遇澤	国際文化学科の韓国語科目で、最後まで頑張っていたいただいたこと、ありがたいと思います。	0	0	—
中国語Ⅲ（後期） （中国語Ⅱ読替）（袁葉）	袁 葉	学生から高い評価をいただき、大変嬉しく思います。そして、さらに中国語を勉強し続けたい学生も多く、とても励みになります。今後さらに教え方に磨きをかけて、もっとみんなの満足できる授業にしたいと思います。	1	0	—
中国語Ⅳ（後期） （中国語Ⅱ読替）（徐）	徐 亜文	本授業は昨年度未開講。	1	0	—
食品化学（Q3）	谷本 昌太	1）昨年度の結果を踏まえた授業改善点 昨年度と同様の方式で授業を行った。 2）履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 これまでと同様にコメントシートを実施し、必ず回答した。 3）期末アンケート結果から見た今後の課題 設問1では、すべての授業に集中し、真剣に取り組んでることが示唆された。設問2では、2時間に満たない学生が10%認められた。課題やテストを実施したにもかかわらず、このような結果となったため、改善のためには原因を評価する必要がある。授業評価にあたる設問3～10において能動的学習機会について1名が“そう思わない”と回答した。反転授業を行っているにも関わらずこのような結果となった。自由記述において、“テストは問題を紙でも印刷して欲しい”とあったが、ペーパーレスが求められる中、難しいと考える。回答率は今年度も非常に低かった。	38	10	26.3%
公衆衛生学（Q3）	菅井 敏行	令和7年度「公衆衛生学」を担当した菅井敏行です。多くの受講者の方からアンケートへの回答をいただきありがとうございました。 ①昨年度の結果を踏まえた授業改善点について：昨年度は別の教員の先生が担当されていましてので改善点は自身はわかりづらいのですが、初めて担当する者として 皆さんが学んできた内容を把握しつつ、特に重要な項目については復習として強調しました。 ②履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点について：授業中には皆さんにはできるだけ1回は「発話」してもらうこと、また、自身の考えをまとめて表現する 課題を課しました。多くの皆さんが適切に解答されていました。 ③アンケート結果から見た今後の課題について：ほぼ全ての受講者から回答を得ました。また、5名の学生からはからアンケートの自由記述をいただきました。ありがとうございました。「他の授業で学んだことがある内容であるからでかもしれないが、得たものが少なかったように感じた。」「管理栄養士の国試に合うような授業にしてもらえると嬉しい。」という意見をいただきました。これら2名の方からの意見については真摯に受け止め、管理栄養士の国家試験内容もより盛り込んでいきたいと思ひます。また、一方で「管理栄養士に合わせてくださっていた。学生が参加できたらしいなとは思ひった。」「グループワークを少し行くと理解が深まると思ひった。」については、できるだけ管理栄養士の社会的役割を含め公衆衛生との繋がりをお話したつもりです。R8年度はグループワークも含め、学生相互の意見交換も取り入れていきたいと思ひます。「課題量は適切だと思ひます。事前に試験の重要事項を教えていただける点も素晴らしいです。」「ありがとうございました」については、肯定的な意見をいただきました。試験前に重要となる点をまとめる時間をつくりましたが、こゑは皆さんが再度一連の学修を振り返ることができ、知識を定着する機会となると思ひて行っています。R8年度も実施する予定とします。以上、重ねますがアンケートへの回答をいただきありがとうございました。	39	36	92.3%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
公衆栄養学実習（Q3）	森脇 弘子	1）昨年度の結果を踏まえた授業改善点 昨年度、おおむね好評であったが、学生の発表資料が人数分準備されていないとの指摘を受け、配布資料の準備を徹底した。授業の目的や目標を明確にするため、この授業の後に行う臨地実習にむけて、昨年度履修した4年生による受講生の発表の参観とアドバイスをを行った。特にアドバイスはメモを取ってよく聴いており、この授業の目標の理解が深まったようである。 2）履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 毎回、実習記録票と課題を提出させ、それにコメントを記して返却した。理解が難しかった点等について、次の授業で補足説明を行い、必要に応じて個別に指導をした。 3）期末アンケート結果から見た今後の課題 総合的な満足度は、すべての回答者が、肯定的な回答をしており、授業の目標が達成できたと判断し、今後も改善しながら、同様な授業運営を継続していきたい。自由記述より、「事業計画の立案、効果的な資料の作成、参加者の意欲をかき立てる発表の仕方など非常に貴重な学びを得ることができた」など肯定的意見がある一方、遅刻や欠席の報告や教員からのフィードバックの仕方について意見をいただき、改善していきたい。	38	27	71.1%
リスクマネジメント論（Q4）	朴 唯新	授業アンケートへのフィードバックに深く感謝する。授業の説明が分かりやすく、多様な業界事例を通じたリスクマネジメントの学習に興味を持ってもらえたことは、本授業の狙いと合致しており、大変喜ばしい。 一方で、能動的学修の機会が十分ではなかったとの指摘については、真摯に受け止める。今後は、履修者数に応じた適切な実施形式を検討し、ディスカッションや事例分析など、学生が主体的に学べる場面をより充実させていく考えである。 また、資料共有に関しては、現在はMicrosoft Teamsにて配布しているが、復習や理解の一助となるよう、より迅速にアクセスできる運用方法へと改善を図る予定である。	65	41	63.1%
ビジネスモデル論（Q3）	矢澤 利弘		82	8	9.8%
マーケティングリサーチ（Q3）	川原 直毅	今年度のMRの受講生は57名と前年よりも多かった。アンケート設問1に関してはスコアは3.7だった。授業中は携帯などの使用は一切禁止し、授業で配布したレジュメに沿って授業を行った。なお、授業終了後は毎回、出生cardに質問などを記入させ、次の授業開始時に前回授業の復習が出来るように配慮した。設問2に関しては、MRの実務的な手法が学べることから受講生の興味・関心の高さが伺われた。なお、スコアは2.5だった。設問3に関しては授業外の課題についてどれ程の学生が取り組んだのか、レジュメの内容は常に新鮮なデータ・内容で受講生に身近なケーススタディとしたので分かり易かったのではないかと考えた。因みにスコアは3.0だった。設問4は、このMRの授業そのものが能動的であったか否かを問うものであるが、ほぼ毎回のように入講生にランダムに教える側が一方通行にならない様に常に受講生主体で授業を進めた。受講生は授業中の個別質問はしにくいのか、必ず自分自身が分からなければ質問して自主的に学ぼうとする姿勢が感じられた。スコアは2.4だった。 設問5は授業のボリュームについてだが、2コマ連続の授業であっても1コマですべてが完結出来ない場合があり、学生の理解度を見ながら授業を進めた。なお、前述したように毎回、出席cardに質問が書かれるので教える側としては学生が共通して十分理解していない点については次の授業で補足した。スコアは3.5だった。 このMR授業の担当は、今年度で終了することを栗島先生から聞いていたので、小職も19年間、本学にお世話になったことを感謝する。	57	9	15.8%
NPO会計論（Q3）	山崎 敦俊	オンデマンド講義に関して好意的なコメントがありました。 何度も聴き直しができたりという利点もあったのだと思います。 配布プリントの分量も適量であったと理解できました。 さらなる能動的な学びになるような工夫もしていきたいと思いました。	53	26	49.1%
知的財産権関連講座（Q4）	川畑 哲郎	① 昨年度の結果を踏まえた授業改善点（昨年度の授業実施状況を踏まえた授業改善点） 昨年度は第7週目と第8週目に分けて発表会を実施したが、準備期間等の公平性の観点を踏まえ、今年度は第8週目の1・2限目に集約して実施した。 ② 履修者の反応を把握するために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 学生に対し、受講前および受講後にアンケートを実施した。今後はその結果を分析し、授業内容の改善に反映させていく予定である。 また、各回の授業終了時に小テスト等を実施して理解度を確認し、次の講義で補足・解説を行った。 ③ アンケート結果から見た今後の課題 アンケート結果から、最終レポート課題の提出期限が短いとの意見が見られた。今回は4年生の成績提出期限との兼ね合いから、公平性を考慮して提出期限を設定したが、その点が負担感につながった可能性がある。今後は、最終レポート課題を早期に周知するなど、提出準備期間を十分に確保できるよう工夫したい。	54	39	72.2%

■担当教員コメント（専門科目） 地域創生学部 令和7年度後期

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
技術マネジメント論（Q3）	魚谷 滋己		50	5	10.0%
情報科学論（後期） （経情学科）	重丸 伸二	旧課程の授業科目であるため履修者は少なく、今年度は1名の履修があった。そのため、本人の学習進度、理解度に合わせて授業内容及び演習内容を修正し、きめ細かい指導を行った。	1	1	100.0%
オペレーションズリサーチⅡ （後期）	市村 匠	旧学部 of 授業と言うことで受講者1人の開講でしたが、授業、課題ともに毎回しっかり勉強していました。お疲れさまでした。	1	1	100.0%
システム運用論（後期）	岡部 正幸	履修者が1人ということもあり、グループワークを通じたディスカッションが行えなかったのは残念であったが、必要なサポートは行えたと考えている。	1	1	100.0%
多文化共生入門Ⅰ（Q3）	草薙 邦広		93	47	50.5%
文化継承入門Ⅰ（Q3）	和田 崇	本授業は昨年度から担当者が変更になったこともあり、授業の構成と内容の一部を変更して行った。具体的には4名担当から3名担当となり、それに伴い、各教員の担当回数が1～2回増加した。本年度は地理学と歴史学、博物館学に関する基礎知識を教授する導入科目として実施した。授業期間中の学生の理解度等の確認は、各回授業でのミニッツペーパーや課題提出、発問等を通じて積極的に実施した。学生による授業評価では、各項目とも概ね肯定的な評価が得られたが、「とてもそう思う」と「そう思う」を比較すると、「そう思う」を選択した学生の割合のほうが高く、「とてもそう思う」を選択した学生がやや少なかった点は反省すべき点といえる。ただ、自由記述をみると、各教員がそれぞれの専門分野の基礎知識を提供したことに対して、学生が各分野への興味関心を抱く機会となったことが確認できる。特に、博物館学については、具体的事例を紹介したこともあり、高い関心を引き出すことに成功した。なお本授業の開講は本年度限りであり、次年度以降は開講されないため、本授業に対する評価は別の授業で生かしていきたい。	127	85	66.9%
地誌学（Q3）	横川 知司	本授業へのご回答ありがとうございました。多くの項目で肯定的な評価をいただき、大変うれしく思います。特に「授業目標が身につく」「課題の内容・量が適切である」との回答が高かったことから、授業の構成や到達目標は概ね適切であったと受け止めております。また、「質問への丁寧な解説が分かりやすかった」とのコメントも励みになりました。本授業では、アメリカ・日本・インドなど複数地域を扱いながら、自然環境・歴史・社会・経済を関連づけて理解することを重視しました。例えば、アメリカ農業では環境決定論と環境可能論を整理しつつ立地の変化を考察し、都市問題ではインナーシティやゲートッドコミュニティを通して社会構造を分析しました。日本の人口問題では統計資料や地図を用い、地域差を読み取る力を養うことを目指しました。また、講義後に提出された質問は文章で整理し、次回講義で必ず返答しました。特に重要な問いについては冒頭で取り上げ、復習を兼ねて再度説明する形をとりました。こうした双方向のやり取りを通して、単なる知識の暗記ではなく、考える力の育成を意識しました。一方で、授業外学修時間が十分とは言えない結果も見られました。地誌学は、授業時間内の理解に加えて、地図や統計を自ら読み取り、地域を比較することが重要です。今後は、予習・復習につながる具体的な問いの提示や、自主的な学びを促す工夫をさらに検討していきたいと考えています。引き続き、地域を多角的に捉え、自分の言葉で説明できる力が身につく授業を目指して改善を重ねていきます。ありがとうございました。	29	11	37.9%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
人文地理学（Q4）	横川 知司	このたびは多くのご意見をありがとうございました。「人文地理学を学んで外へ目を向ける大切さが分かった」「卒業論文の参考になった」「面白かった」といった感想をいただき、大変うれしく思います。本授業では、都市問題、災害・防災、伝統行事（トンド）、地理学の歴史、時間地理学、農業立地論・工業立地論など、幅広いテーマを扱いました。内容は決して易しいものではありませんが、社会を多面的に見る視点を身につけることを目標としました。その意図が伝わっていることを感じ、励みになります。授業後の質問については、その場での説明に加え、文章にまとめて次の授業で返答するようにしました。また、特徴的な質問や重要な論点については、次回授業の冒頭で取り上げ、復習も兼ねて説明しました。今後も、皆さんの疑問を大切にしながら授業を進めていきたいと考えています。一方で、試験や資料配布に関するご意見もいただきました。工業立地論の講義資料については、試験対策がしやすいように、試験の1週間前の授業で配布していました。そのため、資料が手元になかった場合は、その回を欠席していたことが理由になります。授業の出席と資料管理は、各自で責任を持って行っていただく必要があります。また、「持ち込み可」の試験について、「資料を探すだけの試験になるのではないか」という意見もありました。本試験は、基礎的事項は資料を参照すれば確認できるようにしつつ、理解していなければ解けない問題や、自分の言葉で説明する記述問題も含めて作成しています。暗記量を競うのではなく、内容を理解し、整理し、説明できるかを重視しています。資料を持っているだけでは十分な得点にはならない構成です。授業外学修時間については、まだ十分とは言えない状況も見られました。人文地理学は考える時間を重ねることで理解が深まる科目です。配布資料を読み返すこと、用語を自分の言葉で説明できるか確認することだけでも、大きな差が生まれます。今後も、内容の充実と分かりやすさの両立を目指して授業改善に取り組みます。引き続き積極的に質問し、主体的に学んでください。ありがとうございました。	77	20	26.0%
マーケティング概論（Q3）	栗島 浩二	概ね満足度高い授業を実施できたと感じている。ただし、定期試験のやり方は改善しておく必要があると感じている。カンニングに関しては、やったという学生のコメントがすべてではないし、物理的に会場の改善には受講生の人数が多いため、無理が多い点もある。事前の学習や復習に十分な時間を要したかどうかにも改善の余地あると感じている。	98	38	38.8%
簿記原理（Q3）	加納 慶太	授業の内容について良い評価をいただき、引き続き継続して丁寧な学習のフォローに努めていきたい。また、今後はオンデマンド授業なども取り入れ、より学生の学習に寄与する授業計画を実施したい。	113	54	47.8%
ミクロ経済学（Q4）	山根 智沙子	【今年の授業において意識した点】 本学での担当は今年度が初年度であるため、これまでの教育経験を踏まえ、授業の到達目標を明確に示し、理論と具体例を往復しながら理解を深める構成を意識した。また、毎回の練習問題を通じて理解度を確認し、能動的に取り組める授業運営を心がけた。その結果、「授業に集中し真剣に取り組んだ」について98%、「課題の内容・量は適切」98%、「目標とする力が身につく」98%、「総合的に満足している」95%と、概ね肯定的な評価を得ることができた。【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】 授業内ではグループワークや演習時間を確保し、学生の進捗を確認しながら説明を行った。アンケート結果では「能動的学習機会がある」94%、「必要な支援を得ている」98%と評価されており、一定の双方向性は確保できていると考えられる。一方で、「授業時間外学修時間」が十分でない学生も多く見られた（基準未達53%）。また、「授業外に取り組む課題が示されている」について否定的な回答が18%あった。これらを踏まえ、今後は予習・復習の具体的な指示をより明確に提示し、授業外学習の質と量を高める工夫を検討する。【期末アンケート結果から見た今後の課題】 自由記述では、「分かりやすい」「練習問題が理解に役立った」「難しいが面白い」といった肯定的な意見が多く見られた。一方で、「説明が分かりにくい」「進捗が整理されていない」との指摘や、演習解説後の振り返り時間を求める意見もあった。これらを踏まえ、今後は授業内容の構造をより明示的に示す工夫や、演習解説後に理解を整理する時間の確保を検討したい。また、小テストの実施方法や成績評価の公平性に関する意見も見られた。評価が公正に行われることは授業運営上重要であるため、試験方法や配点のあり方についても必要に応じて見直しを行い、より適切な評価方法を検討する。	68	50	73.5%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
経営情報論（Q3）	広谷 大助	まず、前期に記載した回答率が低かったことについては今回は授業内で時間を取って行った。その結果、90%以上の回答率を達成できた。昨年のアンケートでExcelについて要望があり、Excelについては昨年よりも巡回の回数を増やしよりきめ細やかな対応を心がけた。それに加え、Excelの演習の時間を昨年以上に十分とることにより理解の向上を図った。また、授業の最後には毎週出席カードにて質問を書かせ、全ての質問にPDF形式で回答し、個別回答を希望する学生はチャットにて個別に回答した。その結果、満足度は86%と高い水準を達成できたが、課題の多さ・難しさについて複数要望が出た。来年からセメスター制になることから1週間における課題の量は実質減ることになるが、複数要望が出たことから課題の内容について再検討することが今後の課題である。	26	24	92.3%
基礎プログラミング入門（Q4）	重丸 伸二	演習を中心とした授業であり、課題への取り組み状況は良く、概ね良好なアンケート結果になっている。演習に取り組む時間の確保と基本問題の丁寧な解説を心がけた。自由記述欄を見ても、授業の実施方法、学生の質問への対応等のサポートは概ね良い評価を受けている。なお、授業アンケートの回答率が低いことから、回答期間中にさらに学生に案内・依頼を行おうと考えている。	50	34	68.0%
基礎情報学入門（Q4）	小川 仁士	「丁寧に、分かりやすく」をモットーに授業をしていることは学生たちにも評価されているようだが、時間配分が悪くなりがちで申し訳なく思っている。ある程度「簡潔さ」も調整しつつ、授業時間内に確認問題に取り掛かれるように工夫していきたい。	87	35	40.2%
予防医学 （学部学科専門科目）（Q3）	安武 繁	【昨年度の結果を踏まえた改善点】 作成した授業資料を中心に、この科目の大切な内容について、できるだけ詳しく、わかりやすく解説を行いました。この科目に関連する統計学の内容についても、重要な所を中心に、計算問題を解くなど、できるだけ具体的に解説を行いました。【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】 学習のポイントは何かをできるだけ明示するようにしました。【期末アンケート結果から見た今後の課題】 この科目の大切な内容を、主な授業内容にしました。今後の課題としては、限られた授業時間の中で、予防医学および予防医学に関連する統計学に関する項目について、さらに多くの項目について、幅広い内容について解説を行うようにすることです。	37	15	40.5%
保健政策論 （学部学科専門科目）（Q4）	安武 繁	科目「保健政策論」 【昨年度の結果を踏まえた改善点】 作成した授業資料を中心に、この科目の大切な内容について、保健医療福祉の行政機関、保健医療福祉に関する制度や現代の重要課題など、できるだけ幅広く、詳しく、わかりやすく解説を行いました。この科目に関連する統計学の内容についても、重要な所を中心に、計算問題を解くなど、できるだけ具体的に解説を行いました。【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】 学習のポイントは何かをできるだけ明示するようにしました。【期末アンケート結果から見た今後の課題】 この科目の大切な内容を、主な授業内容にしました。今後の課題としては、限られた授業時間の中で、保健医療福祉に関する制度に関する項目について、さらに多くの項目について、幅広い内容について、具体的な解説を行うようにすることです。	40	17	42.5%
多文化共生入門Ⅱ（Q4）	栗原 武士	アンケート結果を見る限り、学生からは一定の評価をしてもらったものと理解している。最終回の座談会でも各担当教員からの講評があったが、学生の取り組みも熱心で、学生教員相互で1年生科目としては十分な学びの空間を作り上げることができたと考えている。座談会に向けての授業の感想・コメントでも概ね好評だったため、来年度以降の「国際共生入門」へとつながる内容となったのではないと思われる。	105	26	24.8%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
文化継承入門Ⅱ（Q4）	福田 涼	本講義は木曜日の1・2限に実施されるものですが、しっかりと前を向き、意欲的に授業に参加している受講者が、総じて多かったように思われます。また本講義は小川俊輔・福田涼・目黒将史・工藤卓司（敬称略）の4名が担当するオムニバス形式を取っていますが、「オムニバスの授業でも今までなかった授業に複数人先生が常にいる状態だったので面白かった」、「どの先生方も楽しみながら講義をしてくださるので、受けている側も楽しく学びを得ることができて良かったと思います」といったコメントが見受けられることから窺えるように、受講者の皆さんと教員との協働の下で、良質な学びの雰囲気醸成されていたと思います。内容面に関しては、「各先生の専門分野について深く理解することができ、ゼミ選択のヒントを得られた。また、これから大学生活を送る上で重要なポイントについても知ることができた」、「様々な分野の内容を学習でき、自分の興味関心を広げることができた」といったコメントが見受けられました。その一方、「文化継承とはとても幅広く、それぞれに関連づけるのはとても難しいと感じました」、「それぞれの分野の文化継承については何となく理解したけれど、それぞれを結びつけるにはまた新しく知識を身に着けなければそれぞれを別々に考えてしまうので、習ったことをつなげて考えることができるようにしたいと思いました」との感想が示しているように、各教員の講義内容がどのように繋がっているのかという点に関して、受講者の皆さんのよりクリアな理解を手助けし得るような手立てがないか、再考する必要があると考えています。レポート課題においても、本講義を通じて学んだことを示すように求めましたが、本アンケートでも「この授業を通して文化は形としてだけでなく言葉や表現を通しても受け継がれていくものだ」と学ぶことができました、「文化継承は心の豊かさを持つための選択肢を維持、または増加させるためのものだと考えた」といった総論的な見解を提示してくれた受講生もいました。本講義から得られた学び、とりわけ「言葉」や「表現」に関する知見や発見が、今後の大学における学修はもちろん、皆さんが更なる「心の豊かさ」を育んでゆく上でも有益なものになれば幸いです。（文責 福田涼）	91	28	30.8%
健康科学情報処理演習（Q4）	鍛島 秀明	今年度は、総合満足度において「強くそう思う」「そう思う」が100%となり、昨年度と比較して全体評価は向上した。能動的学修機会（97%）、到達目標の獲得実感（100%）、教材・支援体制（いずれも100%）についても高い評価が得られており、授業設計の方向性は概ね妥当であったと考える。また、授業外学修時間について「2時間以上」と回答した学生が87%を占め、昨年度より課題への主体的取り組みが増加した点は重要な成果である。自由記述からは、英語論文への接触、Excel・PowerPointの習得、ディベートやプレゼンテーション経験を通じた実践的スキルの向上が確認でき、本科目の目的である情報処理能力および発信力の育成に一定の教育効果が認められた。一方で、課題の難易度や量、プレゼン準備期間、グループワーク負荷に関する意見も昨年度に引き続き見られた。学修効果を維持しつつ、課題設計の段階化、準備期間の確保、協働学習の分量調整など、学生の負担感を軽減する工夫が今後の課題である。次年度は、実践的要素を維持しながら、個人作業と協働作業のバランス改善、および課題提示スケジュールの見直しを行い、より持続可能な学修環境の構築を図る。	37	32	86.5%
データ分析とプログラミング（Q4）	野呂 正明	【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】 ・ Formsを用いた小テストでの理解度確認や演習結果の提出物の内容に基づいて、理解度が低い場合は次回の講義において解説する時間を設けた。 【アンケート結果から見た今後の課題】 ・ 演習は手順書を添付するなどして、誰でも迷いなくできるようにしたはずであったが、手順書等の中身が「わかりづらい」との声もあるため、追記の必要性などを確認の上で改版する。	28	18	64.3%
人工知能応用基礎論（Q4）	松井 猛	・履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 毎回、小テストを実施し、学生の理解度を確認した。毎回実施する小テストに対しては正解／不正解の判定のみであるため、解説コメントをつけるなど授業外でのサポートをする仕組みを検討する。 ・ アンケート結果から見た今後の課題 アンケート結果から、授業に対する満足度は高く、「さらに学びたい」に関して、学生の回答は「強くそう思う」または「そう思う」であったため、発展的な内容も加えつつ講義の改善を図る。	19	8	42.1%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
地域政策論（Q3）	和田 崇	本授業は昨年度から一部内容を変更して実施した。具体的には、最新の動向である「地方創生」に関する内容を充実させるとともに、受講者ニーズを踏まえて広島市副市長によるゲストスピーチを実施した。また、授業期間中の理解度確認等は毎回の授業の最後にミニッツペーパーを提出してもらうことにより実施した。学生による授業評価は履修者の約1／4の回答にとどまっているが、いずれの項目も概ね肯定的な評価が得られたと感じている。この評価を受け、次年度以降も本年度授業の内容・方法を継続するとともに、地域政策の動向を踏まえ、適宜、授業内容の更新を測っていく予定である。	46	11	23.9%
上級英語総合(Critical Reading II) (Q3)	吉本 和弘	『赤毛のアン』Anne of Green Gablesというカナダ文学の最高峰とされ、児童文学、あるいはヤング・アダルト文学としても非常に質が高く、人気も高い作品を、原文ですべて読破するという目標をたて、短い期間にそれをこなすというかなりハードな授業であったと思われる。その文量の多さゆえに、教える側としても、かなり難解な文章を十分に解説することができないままに、どんどん先を読み進めなければならないというジレンマを抱えていた。それについては学生の不満もあったと思う。しかし自分がどれだけ努力したか、そこが重要なのだ。このように多読しながら、少々意味がわからず難解で歯がたたない部分はあっても、最後まで読み通すということを一つの経験としてやってもらいたかったのであり、そしてこの主人公アンの生き方から学んで欲しいというのが最大の目的だったので、そこは理解して欲しいと思う。感想を読むと、最後に行った英語による寸劇の体験が非常に新鮮なものだったという声が多かった。何より言葉は意味や感情を伝えるための発声なのであるから、文字を読むことも大事だが、何より気持ちを込めて込めて発声するということを体験して欲しかったのである。それについては皆、グループでの練習を通して貴重な体験をしてくれたと思うので、その際の成功体験（失敗も含めて）を今後の糧にしていってくれば良いと思う。言葉を学ぶとはどういうことかを、それぞれ自分で考え、自分の英語を改善するのに何が必要かを自分で考えて欲しいのだ。自分の能力不足を実感するところからしか改善は生まれない。英語の達人となることを決意し、自己を鍛錬してほしい。	15	8	53.3%
上級英語表現(Global Communication II) (Q4)	ジェシカ タインズ	昨年度の肯定的な評価を踏まえ、今年度も学生が安心して意見交換できる雰囲気づくりを重視し、毎回の“listening log”共有や多様な視点からのディスカッション活動を継続しました。学期中は口頭での振り返りなどを通して反応を確認したところ、クラスメイトとの議論を通じて自信がついたという声が多く、特に難しいテーマにもオープンに向き合っていました。アンケートでも同様に前向きなコメントをいただいたため、今後はより深い議論を促す補助資料の充実や、批判的思考を育てるタスクの工夫が課題と考えています。	16	8	50.0%
中級中国語総合（Q4）	徐 亜文	【昨年度の結果を踏まえた授業の改善点】 昨年度の授業では、多くの学生が集中して真剣に取り組む姿が見られた。課題の内容や分量、教材・教具の活用も概ね適切であり、学習内容の定着につながったと考えられる。授業満足度も比較的高い結果であった。一方で、課題も明らかとなった。授業外学修時間が週1時間未満にとどまる学生が一定数存在していた点である。今後は、授業外学修の成果をより具体的に把握できる方法を導入し、学修状況を可視化する仕組みを工夫することで、主体的な学習を促進したい。 【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた改善点】 本授業は、中級中国語へ進む前の準備科目として位置づけられるものであり、「読む・聞く・話す・書く」の四技能を総合的に向上させることを目的としている。一つのテーマについて、長文の聴解および読解を行い、その内容に基づいた会話練習、さらにまとまった文章を書く活動へと発展させる構成としている。特に文章作成指導に重点を置いた。初級段階では長文を書く機会が比較的に少なく、文章を書くことに自信を持てず、最初の一步を踏み出すことに困難を感じる学生も少なくない。そのため、段階的な指導と具体的な支援を行い、書く活動への心理的負担を軽減するよう努めた。その結果、「書くことに自信が持てるようになった」との反応が多く見られた。今後の改善点としては、より学生の興味・関心を引くテーマを設定し、主体的に書こうとする意欲を一層高める工夫を行うことが挙げられる。 【アンケート結果から見た今後の課題】 多様な教材・教具を積極的に活用し、学習意欲を一層高める魅力ある授業づくりを推進する必要がある。また、授業外学修の実施状況をより的確に把握するため、課題の内容や分量を工夫するとともに、学習成果を可視化できる仕組みを整備することが求められる。さらに、話す力の向上を図るため、中国語による発表活動やペアワークなど多様な学習方法を取り入れ、実践的な運用能力の育成と学習効果の向上を目指したい。	10	7	70.0%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
中級韓国語総合（Q4）	鄭 遇澤	この講座は、中級レベルの講座であるが、まだ初級の授業を受けている方も積極的に頑張っていたので、ありがたいと思っています。今年度の中級レベルへの受講者は増加していたが、皆関心と興味をもって真面目に勉強していただき嬉しかったと思います。特に授業の形式面では、様々なレベルの受講者たちだったので、今回のグループワークでの課題と発表は、かなり効果的な授業方法だったと思います。今後もこのようなグループワークの利点を生かしたいと思います。	12	4	33.3%
共生社会論（Q3）	富田 和広		39	11	28.2%
多文化共生教育論（Q3）	植村 広美		72	18	25.0%
人口社会論（後期集中）	中島 満大		13	2	15.4%
共生認知心理論（Q3）	向居 暁	今回の授業評価では、授業への取り組み、教材・資料の適切さ、学修支援、学びを深めたいという意欲、総合満足度について、回答者の皆さんから非常に高い評価をいただきました。受講してくださった皆さんの真剣な参加に感謝します。本授業では、毎回「事前課題・事後課題」を課し、感想や質問を継続的に受け付けることで、理解度や負担感を把握しながら授業を進めました。寄せられた質問やコメントは、授業内での補足や説明の追加、資料の改善などに反映し、学期中も小さな調整を重ねています。今後も、このフィードバックの循環を基盤として、能動的に考える機会と学修支援の両立を図ります。一方で、自由記述にあった「レポートとテストが被ると大変でした」という指摘は重要です。今年度までのクォーター制は授業進行が速く、レポート等の間隔が短くなりやすいため、学修負担が特定の時期に集中しやすい構造がありました。来年度からはセメスター制に移行するため、課題や評価の配置に時間的な余裕が生まれます。この利点を活かし、レポート締切とテスト時期が過度に重ならないよう評価スケジュールを再設計し、学修を計画的に進めやすい形に改善します（早期の全体見通し提示、締切の分散など）。今後の課題としては、授業外学修時間に個人差が見られる点を踏まえ、限られた時間でも学びを積み上げやすいガイド（要点整理の観点、学修の進め方の例、振り返りの焦点化）をさらに整備します。また、より多くの意見を授業改善に反映できるよう、アンケートへの協力依頼や周知方法も工夫していきます。	16	5	31.3%
米国社会文化論（Q3）	栗原 武士	アンケート結果を見た限り、授業の内容・手法に一定の評価をしてもらったものと理解している。一部ネガティブな回答もあったが、概ねポジティブな回答が多く、自由記述も授業内容への好評価が多かったので来年度も同様の方針で授業を運営していきたいと考えている。情報デバイスを多用する授業なので、引き続き大学には設備の整備・メンテナンスをお願いしたい。	29	24	82.8%
英語文学論（Q4）	吉本 和弘	「英語文学論」ということで、英語で書かれた文学作品を網羅的に解説することができれば良かったが、ほぼイギリス文学に絞った内容にならざるを得なかったことは少し残念であった。15回の授業でイギリス文学以外のすべての英語文学をこなすのはどう考えても無理があったと思う。学生のコメントに課題が多すぎるという声があったが、日本語で書かれたテキストを用い、原文を読むことをほぼ省略してしまったことを考えれば、作品の背景に関する知識や評価についての参考文献などを讀んだり、復習の小テストを行うなどの活動は多くなることは致し方ないと思う。文学はとにかく自ら興味を持って読まないと話にならないので、学生にはさらに多読、熟読の習慣をつけて欲しいと考える。学生コメントには英文学への興味が湧いたとか、英語帝国主義についての新たな知見が得られたという肯定的なものもあったので、意欲的に取り組んでくれた者にはそれなりの意義があったと信じたい。最終的に書いてもらった、ある作品を取り上げた個人研究を読むと、独自の視点を持って作品を読み込んでくれた学生もいたようなので、これが各自の卒業研究へとつながる学びであったことを願う。	43	6	14.0%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
英語表現論（Q3）	ジェシカ タインズ	書き込みのコメントはすべて肯定的でしたが、回答者の満足していない一人は、残念ながら何もコメントを残していないようです。授業に積極的に参加した人はそれなりに成果を出したと私は感じましたので、もしかしたら、授業に来なくなった人を見失ってしまった可能性は十分考えられます。教員として、人数の多い授業はまだ管理できていないようで、今までは上手くいっていましたが、たまたま協力的な学生しかいなかったおかげかも知れません。人数が多くても、フィードバックなどを徹底し、一人ひとりの学生を見ることは今後の課題とします。	57	16	28.1%
英語コミュニケーション（Q4）	草薙 邦広		49	7	14.3%
英国史論（Q4）	井内 太郎	【昨年度の結果を踏まえた改善点】 Teamsに科目のTeamを作成し、授業の資料ならびに補足資料を添付することで、さらに内容の理解を高めるように努力した。また毎回、授業を録画することで、学生の復習効率をあげるようにつとめた。また、毎回の授業内容の理解度をチェックするために、コメントを書かせた。	42	5	11.9%
日本語教育学（Q4）	中石 ゆうこ	「設問2 わたしがこの授業に関連して行っている授業外学修（課題、準備、復習等）時間。（1週間の平均）」で半数以上が2時間以下であった。テーマに関するニュースを探したり、理解確認課題を準備したりしたが、ざっと終わらせる受講者が多くいたことがこの結果から見て取れる。教材や教え方は適切であるという評価が非常に多かった。自由回答欄を見る限り、この授業の目標とした観点については深く考えるようになった受講生もいることが分かった。	54	44	81.5%
韓国語文化論（Q3）	鄭 遇澤	この講座は、理論的な内容も結構多いですが、皆頑張っていたでき良かったと思っています。特に韓国語能力を上げながら、課題と発表を準備していたので、受講者たちには相当負荷がかかったこともあったが、だいたいやり遂げることが出来たと思います。受講者の言語能力のレベルに合わせた課題と授業の形式を提供することについて、今後もより工夫したいと思います。	6	3	50.0%
東アジア比較文化論（Q4）	鄭 銀志	今回の授業アンケート結果は、受講者数に比して回答率が低いという点に留意する必要があるものの、回答内容から判断する限り、本授業に対する評価は概ね高いものであったといえる。設問1「授業に集中し、真剣に取り組んでいる」では回答者全員が肯定的に回答しており、受講者が主体的かつ誠実に学修に取り組んでいることがうかがえる。設問10の総合満足度においても全員が満足していると回答しており、本授業の内容および運営が受講者の期待に応えるものであったと評価できる。加えて、授業内での発表およびミニレポート2本はいずれも全員が提出しており、その記述内容から、多くの学生が真摯に学修に向き合っていたことが確認できた。また、設問6「授業の目標とする力が身につく」、設問7「教材・教具は適切である」、設問8「さらに学びたい」といった項目においても全員が肯定的に回答しており、授業目標の明確化、教材の選定、授業内容の構成はいずれも適切であったと判断できる。設問5「課題の内容・量は適切である」についても全員が肯定的であった。さらに、設問9の結果から、学修活動（発言や提出物など）に対する支援体制も十分に機能していたことが確認できる。一方で、設問2の授業外学修時間については、学修時間が短い受講者が半分以上を占めている点が課題として挙げられる。設問3「授業時間外に取り組むべき課題が示されている」の結果から、課題提示自体は明確に行われていたと考えられるが、今後は発表やレポートに加え、日常的に取り組むことのできる具体的な学修方法や指針をより明確に示し、自主的学修を一層促進する必要がある。なお、本年度は受講生数が昨年度より増加し、94名規模での開講となった。そのため、教員による講義と学生による発表を組み合わせた授業運営においては、時間配分や進行管理の面で一定の困難が生じた。特に、授業時間内に出席確認の時間を十分に確保することができず、やむを得ず休憩時間にカードリーダーによる出席確認を行う対応を取った。次年度はクォーター制からセメスター制へ移行することに伴い、時間的運用にも一定の余裕が見込まれるため、こうした点に起因する学生の不満は解消できる見込みである。次年度においても質の高い授業実践を継続するとともに、多人数授業における効果的な運営方法をさらに工夫していきたい。	94	16	17.0%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
観光まちづくり論（Q4）	和田 崇	この授業が昨年度と改善した点は授業構成・内容にある。具体的に、まちづくりの歴史と最新動向に関して、2010年代半ば以降の地方創生の動きを詳述し、それに関わる政策の批判的検討を行うようにした。授業期間中は毎回ミニッツペーパーを提出させることにより、授業の理解度ならびに関心を測るよう努めた。学生による授業評価結果をみると、学生も主体的に授業に臨んでおり、また授業の内容・方法等に関して概ね高い評価を得ることができた。また個別意見には、昨年度から変更した授業構成・内容を肯定的に捉える記述がみられ、授業改善効果を認めることができた。なお本授業は、学部再編に伴い、令和8年度が最終開講となる見込みである。本年度の成果を踏まえ、令和8年度も同様の構成・内容で実施していきたい。	37	5	13.5%
宮島学（Q3）	大知 徳子		53	33	62.3%
日本地域論（Q3）	加藤 博和	「出席カード」を毎回提出してもらい、履修者の理解度や反応を知ることに努めた。出席カードに書かれた内容・質問などを次回にフィードバックしたり、また、授業の中で履修者に発表してもらう機会を作ったりして、一方通行とならないように配慮した。 アンケートの設問10：総合的な満足度について、「強くそう思う」55%・「そう思う」45%という結果で、安堵している。 自由回答（設問11）では、「分かりやすかった」、「授業中に挙げられた具体的な例を通して理解に努めることが出来た」、「楽しく授業を受けることができた」、「クイズや先生の話がとても面白かった」、「GI製品について興味を持ったので、自分でさらに調べて学びを深めたい」といったメッセージがあり、履修者の理解や興味につながったことはうれしい。 この授業に関連して行っている授業外学修（課題、準備、復習等）時間（設問2）は、「2時間未満」が90%と大半で、授業外学修をどのように増やすかは課題である（自由回答にも同様（増やしてもよい）の意見があった）。	53	20	37.7%
日本地域史論（Q3）	光成 準治	・昨年度の結果を踏まえた授業改善点 昨年度は3コマを1セットで実施したが、その場合、クォーター制だと、小レポート作成の負担が大きくなるため、今年度は4コマ1セットで実施した。 ・今後の課題 来年度から前後期制になるため、来年度は3コマ1セットに戻す。小レポート作成の回数は増えるが、作成期間に余裕はできるので、積極的に取り組んで欲しい。	19	5	26.3%
日本文学論（国文学）（Q3）	西本 寮子	受講生の約3割から回答が得られたのは、当該システムになってから初めてのことでであると記憶するが、能動的学修機会の有無を当質問以外は、「強くそう思う」「そう思う」という回答であり、総じて肯定的な評価が得られたと考えている。講義中心の授業を選択したことについては受講者数（50名）によるところが大きい。ただ、それを補うべく、teamsを活用して事前に読解のための補助資料を配布する、適宜質問を発し、教室内を移動しながら複数の学生にマイクを渡し教室全体に向けての回答を促す、毎回課したコメントシートの記載内容は単調にならないよう工夫を凝らすなど、受講態度をチェックすることは怠らなかった。こうしたことは好意的に受け止められていたと考えている。ノートを取りながら聴いている受講者、互いに話し合いながら真剣に回答しようと努力を怠らなかった留学生の存在がほどよい緊張感をもたらしていたように思う。一方で、繰り返し注意喚起したにもかかわらず、最後までテキストを購入しない受講生が目立ったのは残念であった。これまで知らなかったことを知り、物語を楽しく読むことができたなど好意的なコメントが寄せられたことに安堵した。 次年度は、テキストを変更することとした。	49	15	30.6%
日本語音声学（Q4）	高永 茂		53	10	18.9%
東アジア交流史論（Q3）	哈木格図	①昨年度の結果を踏まえた授業改善点 本授業は講義を中心に、板書がメインであったが、昨年度のアンケートの結果を受け、本年度はスライドショーを用いながら授業を施した。 ②履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 本授業では、履修者の反応を知るためにリアクションペーパーを配布している。リアクションペーパーは、履修者が関心を寄せているサブジェクトをめぐって、さらなる説明をするために役立てている。また、リアクションペーパーでの質問やコメントにより履修者の主体的な思考を引き出すことができた。今後も、リアクションペーパーを素材に、履修者とのディスカッションを盛んに行き行く予定である。 ③アンケート結果から見た今後の課題 スライドショー等、昨年度のアンケート結果を活かした授業改善のこともあり、本年度の授業に対する履修者の反応は良かったのである。来年度は週1コマになり、これまでの連続の2コマの授業と違う。それを意識して、授業内容のバランスをとりながら授業を施して行く予定である。	9	1	11.1%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
日中比較文学論（Q3）	工藤 卓司	33%の学生が授業外学修時間が30分未満ということに驚愕した。講義内容からすれば到底30分未満ということはないからである。よほどの天才が受講していたのであろうか。ただし、予習の大切さを感じてくれた学生もいたことがコメントからわかり、嬉しく思った。また、3%の学生が課題の提示が不明確で、支援も不足、さらには授業内容にも不満を覚えたようである。非常に残念。課題については予習と感想との2つ、それも毎回のことなので、最初は不明確でも徐々にわかってくるものと思うが、そうではないことがわかった。わからなければ聞いてもらいたいのだが、そういうこともできない雰囲気だったのであろうか。反省したい。支援についても、授業内で参考書籍を紹介したり、レポートの書き方まで細かく指示をしたはずだが、まだ足りないということであれば、丁寧にしていこうと思う。総じて、不満を感じさせたのであれば申し訳ない。「真を入れていないものは減点」という意見があったが、そうしたいのは山々であるものの、意外に真を入れていない人が多かったのと今回は1週目と2週目とで公平性を欠くので諦めた。また、「修正後の再提出」については3Qの授業ではやや困難を覚える。次年度以降の参考としたい。様々なコメント、ありがとうございました。いずれにせよ、広くいろいろなものを今のうちに読んで、自分の可能性を広げてもらいたいと思っているが、少しは役に立つ内容だったのではないかと思う。	48	40	83.3%
書道・書写 （Q3・Q4月曜ペア）	森 哲之		39	3	7.7%
生涯学習概論（後期集中）	天野 かおり		29	5	17.2%
上級英語総合(Seminar) （Q3）	栗原 武士	アンケート結果を見た限り、授業の内容・手法に一定の評価をしてもらったものと理解している。一部ネガティブな回答もあったが、概ねポジティブな回答が多く、自由記述も授業内容への好評価が多かったので来年度も同様の方針で授業を運営していきたいと考えている。情報デバイスを多用する授業なので、引き続き大学には設備の整備・メンテナンスをお願いしたい。	5	5	100.0%
上級英語表現(PresentationⅡ) （Q4）	ジェシカ タインズ	昨年度の結果を踏まえ、今年度も学生が安心して挑戦できる雰囲気づくりを重視し、個人・地域・国内外とテーマの範囲を広げながら全4回のプレゼンテーションに取り組めるよう構成しました。学期中は口頭での振り返りや相互評価を通して反応を確認したところ、動画教材の分析やクラスメイトからの具体的なフィードバックが自信向上に大きく結びついていました。また毎回の“listening/reading log”共有も学習習慣の維持に役立っていました。アンケートでも肯定的な評価を得たため、今後は根拠づけや構成の工夫をさらに深められるよう、モデル例や分析タスクの充実を図ることが課題と考えています。	6	2	33.3%
上級中国語表現（Q3）	工藤 卓司	受講生が少なかったため、それぞれの受講生に合わせるかたちで授業ができたと思う。本人たちからのコメントがないので、何とも言えない。国際共生になったら、受講生がもう少し増えるといいなと思います。	2	2	100.0%
博物館経営論（Q4）	杉山 聖子	1 昨年度の結果を踏まえた授業改善点 該当なし 2 履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 博物館経営論は、多数の事例を紹介しながら理論を説明する方法で、授業を進めました。 次回は、事例を用いたディスカッションの時間を設けて、学生自身で博物館経営の意義・特色について、意見・感想を伝える時間を設定します。 3 アンケート結果から見た今後の課題 ・博物館への新しい視点 常設展や企画展で展示資料を見ることも重要ですが、博物館を維持する方法やその意義について、今後も事例とともに提示していきます。 ・ショップの意義 博物館の物販（レストランやミュージアムショップ）は、来館者サービスのためだけに存在するものではありません。博物館のより大きな使命（ミッション）に貢献しうる場であるといえます。これまで博物館のあまり目にとめなかった部分にも、ぜひ注目してもらえるよう、テーマを設定していきます。	32	26	81.3%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
博物館資料論（Q4）	花本 哲志	昨年度もそうであるが、設問2・3（授業外学修の時間、時間外課題）に関しては「2時間未満・全くしていない」と「そう思わない」の割合が高かった。（展示論・教育論に比べ）授業の性格上難しい面もあるが、何か出せる課題はないか、検討してみたい。授業では博物館実習につながるよう資料に接する機会を極力設けるようにしている。アンケートを見る限り、学生の反応もよく、今後さらに内容を充実させていきたい。実務経験のなかで自身が体験したことを学生に語るように心がけているが、リアルな現場の姿をイメージしてもらっているのではないと思う。博物館を取り巻く現状と課題について考えていくことは、学生の将来にも生かせる点が多いと考えている。私自身、最新の動向や課題について情報収集に努め、問題意識を高めていきたいと考えている。	16	16	100.0%
経営組織論（Q3）	長桶 和也	今年度より本科目を担当したが、受講者から肯定的な評価・コメントをいただけた。しかしながら、至らぬ点が多々あり、次年度の講義で改善していきたい。【履修者の反応を知るため学期中に実施した方法・その結果を踏まえた講義改善点】毎回の講義にて講義後レポートを提出してもらう形を取り、その際にコメントや質問を記述する欄を設けて学生からコメントや質問を募った。受講者からのコメントは講義の最初に取り上げること、受講者からの質問には口頭で補足することと必要に応じて追加で資料を作成して説明することを実施した。また、講義の中で学生に質問し、受講者が講義内容を理解できているのかを確認した。その反応が悪い時は、再度丁寧に説明することを心掛けた。【期末アンケート結果から見た今後の課題】まず、アンケートの回答数が低調だったことが大きな課題である。本講義では、講義スケジュールの都合で講義中にアンケートに取り組む時間を捻出することができず、学生には口頭ならびにTeamsでのメッセージにてアンケートに回答するよう依頼したが、アンケートの回答数が増加しなかった。次年度はアンケートの回答数が増加するよう取り組んでまいりたい。アンケート内容を確認すると設問2,4を除いて肯定的な回答が90%以上あった点は評価に値し、次年度以降も継続していきたい。しかしながら、設問4の能動的学修に対する評価が低く、教員もそのような機会を作ることができなかったので次年度以降の課題としたい。	76	20	26.3%
流通システム論（Q4）	栗島 浩二	概ね高い満足度評価を得ていると感じている。ただし、予習や復習に適切な指示があったかどうかに関しては、改善していく必要を感じている。また、動画などをできるだけ多く活用していこうと思っているが、本学の教室のシステムが古くて十分に対応できなかった点も今後改善したいと考えている。	65	10	15.4%
公共経営論（Q3） （R7以降地域政策論同時開講）	和田 崇	本授業は昨年度から一部内容を変更して実施した。具体的には、最新の動向である「地方創生」に関する内容を充実させるとともに、受講者ニーズを踏まえて広島市副市長によるゲストスピーチを実施した。また、授業期間中の理解度確認等は毎回の授業の最後にミニツペーパーを提出してもらうことにより実施した。学生（1名）による授業評価はなかったが（授業途中から出席しなくなった）、「地域政策論」受講生からはいずれの項目も概ね肯定的な評価が得られたと感じている。この評価を受け、次年度以降も本年度授業の内容・方法を継続するとともに、地域政策の動向を踏まえ、適宜、授業内容の更新を測っていく予定である。	1	0	—
経営分析論（Q3）	足立 洋	履修者の反応を知るため、学期中には毎回の課題の中で自由記述欄を設け、講義内容に関する質問や感想を書き込んでもらえるようにしてきた。そのことも一助となり、アンケートの結果は、授業内容や課題へのフォローについては概ね不満はなかった。ただその一方では、解答例を求める声があった。これについてはさほどコストを要するものではないので、前向きに検討したい。その一方、これは「授業内容は理解はできるが、自分で再現することが難しい」という反応とも解釈できる。したがって、セメスター制が再開する新年度を機に、毎回基礎的な内容に焦点を絞って丁寧に説明することを意識したほうが良いとも考えられ、この点についても履修者の反応を見ながら検討したい。	69	56	81.2%
マクロ経済学（Q3）	山根 智沙子	このたび実施されたこのクラスの授業評価アンケートでは、高い回答率を得ることができました。内容面においては、複数の項目で肯定的な評価が示されましたが、授業外学習時間については「2時間未満」が多数を占め、授業外学習の定着に課題があることが明らかとなりました。今後は課題提示の工夫や、学生がより主体的に学べる授業運営を通じて、授業外学習の促進に努めてまいります。	48	43	89.6%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
パーソナルファイナンス論（Q3・Q4ペア）	村上 恵子	【昨年度の結果を踏まえた授業改善点】 昨年度の授業評価結果において履修者の授業外学修（課題、準備、復習等）時間の短さが確認されたため、今年度は講義終了後に毎回取り組むべき課題を提示した。また、本授業は外部講師によるオムニバス形式の講義であるが、適度にグループワークを入れたことが評価されていたため、外部講師と事前に打ち合わせを行い、できるだけグループワークを取り入れていただいた。【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】 履修者の反応を確認するため、講義後に毎回コメントシートの提出を求め、質問が出た場合は次の授業で回答するなど、対応できることはその都度対応するよう心掛けた。【期末アンケート結果から見た今後の課題】 今年度は講義終了後に毎回取り組むべき課題を提示したが、履修者の授業外学修時間の短さは改善されなかった。課題の内容の検討が今後の課題である。	52	10	19.2%
地域産業特別講義（Q3・Q4金曜ペア）	栗島 浩二	半期15回のゲストスピーカーによる連続講義という特別な内容であるが、概ね企業活動実践に興味を持ってもらうことに成功したと感じている。時間外の予習や復習は特に必要はない講義スタイルであるが、むしろ時間内にゲストスピーカーの経営に対する熱意を感じ取ってもらった。今年度に関しては、授業内での質問や意見が活発に出たことで、ゲストスピーカーからも本学の教学レベルの高さに感銘のコメントをいただくことができた。実践系科目として、次年度以降も本コースの売りになる科目であると感じている。	49	9	18.4%
サプライチェーンマネジメント（Q3）	広谷 大助	まず、前期に記載した回答率が低かったことについては今回は授業内で時間を取って行った。但し、中間集計で60%だったため2度Teamsで督促を行った。しかし、結果は60%のままであった。原因としては期末試験を行う関係で授業の最初に行ったが、遅刻した学生が数名いたためその時間にはいなかったことが挙げられる。また、アンケートに回答せず期末試験の勉強をしていた学生もいると考えられる。来年に向けて実施時間・方法の検討が必要である。昨年度は期末試験・演習について要望が出ており、特にExcel演習については昨年度オンラインから対面にした。その結果、Excelについては理解度が学生によって違うためきめ細かい対応ができたと考える。また、授業の最後には毎週出席カードにて質問を書かせ、全ての質問にPDF形式で回答し、個別回答を希望する学生はチャットにて個別に回答した。特にその中で配布資料にメモを書ける欄が少ないとの指摘を受け配布資料の形式を途中で変えた。以上により満足度は1名以外95%満足と高い水準を達成できた。今年度の要望は小テストの解答例を示してほしいとのことであった。実際小テストの内容を期末試験に出題するため事前に回答例またはポイントを示すべきでありどのように示すかが今後の課題である。	30	18	60.0%
情報数学Ⅱ（Q4）	市村 匠	回答が1名ということで驚いています。講義では毎回演習を行っており、時間内で終わるような内容を設定していますが、本年度は授業内で終了しない学生が多かったです。また、課題についても毎回チェックしておりましたが、例年より誤りが多く見受けられました。課題を解答が配布されてから提出したとしても、自分で考えながら、解けるようにしてください。	9	1	11.1%
プログラミング演習（Q3）	宇野 健	・昨年度の結果を踏まえた授業改善点 昨年度に効果が見られた予習の促進のために、専用のシステムを構築し、予習のためのWebテキスト、事前の演習、確認テストを一元化し、運用した。その結果、昨年度よりも利用回数を増加させることができた。・履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 前述した予習システムや、プログラミングの演習システムで、利用状況を把握し、授業の進捗や内容、課題などを調整するなどした。中間テストの内容についても分析し、その後の授業の内容に反映させた。また、筆記テストではできないスキルの確認と評価を行うため、実践的なプログラムのソースを作成する演習などを取り入れた。順位点などを導入することにより、モチベーションの向上を図った。・アンケート結果から見た今後の課題 予習に掛ける時間が長い、という意見があったが、プログラミングにおいて予習は効果があると考えているので、最低限の時間の確保は必要と考えている。個人によって理解度は異なるので、個別に対応するのは難しい。しかし、来年度からはセメスター制に戻り、1回の予習内容が単純に半減するため、自動的にこの問題は解決できるのではないかと考えている。	42	37	88.1%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
オペレーティングシステム（Q4）	重安 哲也	今年度は46名の履修のうち、41名がアンケートに回答しており、回答率としては89.1%であった。今年度は、昨年度までの授業において、アルゴリズムなどの抽象的な単元についての理解が不十分であったことを踏まえ、1コマを新たに演習の時間に充てるなどの変更を理解度深化に取り組んだ。また、さらに、IT企業のSEの方を授業にお招きし、1コマを使用して実際のIT現場におけるシステム開発の話をしていただく機会を設定し、その聴講により、授業で学んだ専門性がどのように将来に活用されているのかを理解できるように配慮した。履修者の理解度については、毎回の授業の最後で実施する小テストの内容を適宜確認することで把握し、理解度が不十分であったと思われる授業回については、後日の授業週でフォローを行った。アンケート結果からは全ての項目で肯定的な回答が大半であったことから大きな問題点があるとの認識はしていないが、一方では、自由記述欄において、「授業内容が多いこと、最終回に近い授業では説明が駆け足になったこと」などを指摘する学生もいる。これについては、前述した今年度導入した2コマの内容（新たな演習、IT現場に関する講演）により、後半の授業回のボリュームが過多になってしまったためであると認識しており、来年度以降は、修正すべき内容であると考えている。	46	41	89.1%
データベース（Q4）	岡部 正幸	今年度は例年行っている中間試験、期末試験において出来の悪い箇所を重点的に説明するように心がけた。中間試験では例年と比較して得点の向上が見られたものの、期末試験は全体的に出来が悪かった。一夜漬けでは試験に対処できないので、毎回の課題を都度消化することを再度促していきたい。	42	6	14.3%
システム開発論（Q3）	折本 寿子	・昨年度の結果を踏まえた授業改善点 話し合いの時間を増やしてほしいと要望があり、昨年度実施していた内容を一部変更し、グループワークの時間を増やしました。・アンケート結果から見た今後の課題 どの項目についてもポジティブな意見が多く寄せられたことから、授業内容はおおむね学生の皆さんの期待に応えるものであったと感じました。ただし、回答率が69.7%であったため、履修者全員の意見が網羅されているとは言いきれません。自由記述欄からは、グループ活動におけるグループ内での適切な役割分担の必要性について言及する意見がありました。来年度は、グループと個人に対する進捗管理の重要性をより意識して取り組むよう、伝える必要があると感じました。	33	23	69.7%
機械学習（Q3）	岡部 正幸	アンケートの中に、課題はグループワークで行うのが望ましいという意見が見受けられたが、基礎知識を持たない多くの学生にとって難しいものになるため現在はあえて行っていない。代わりに、近くの人と相談して課題を解いたり、知識を共有したりすることをを促しているため、次年度以降もこれを続けていきたい。	35	9	25.7%
運動生理学実験（Q3）	鍛島 秀明	今年度の運動生理学実験に関する授業評価では、全設問において「そう思う」以上が100%となり、昨年度と同様、極めて高い満足度が維持された。特に設問1「授業への集中・真剣度」および設問4「能動的学修機会」では、「強くそう思う」が50%となり、昨年度と比較して向上が認められた。実験操作を中心とした参加型授業の構成が、学生の主体的関与を促進していることが示唆される。また、設問2「授業外学修時間」では基準以上が75%であり、昨年度と同程度の水準を維持している。一方で、課題の適切性、教材、到達目標、総合満足度など多くの設問において「強くそう思う」は25%にとどまり、肯定的評価は高いものの、より高い達成感や深い理解につなげる余地が残されている。以上を踏まえ、次年度は各実験における「目的一測定結果一考察」の関連性をより明確に示した資料構成とし、事前課題には簡潔な予習ガイドを付加することで、学修の見通しを高める。また、測定データを用いたミニディスカッションや即時フィードバックの時間を拡充し、理解の定着と主体的思考を一層促進する。これらの改善により、実験技能の習得に加え、生理学的解力およびデータ活用能力の向上を図り、「強くそう思う」評価のさらなる増加を目指す。	6	4	66.7%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
体力科学（Q3）	三浦 朗	1）昨年度の結果を踏まえた授業改善点 今年度も昨年度に引き続き以下の3つの授業改善を試みた。①授業中に課題設定型の小レポートを課題②グループ学習の時間を設定する③発展的な内容の資料を配布し抄読する。これらのことにより、学生が自ら考える時間を作ることを試みた。結果として「設問2：授業外学修」においては、事前学修や事後学修を促すようなメッセージを伝えたにもかかわらず、2時間未満の回答がみられ、引き続き課題を残している。また、「設問3：取り組むべき課題」が9%、「設問4：能動的学修機会」が3%、「そうは思わない」と回答していた。それ以外の評価項目においては、すべて肯定的評価であった。 2）履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 中間アンケートおよび毎回の小レポート（課題・質問・授業に対する要望）を実施した。昨年度と同様に、授業計画・テーマ（取り上げてほしいテーマを初回の授業でアンケートしている）や、教材・教具・ビジュアル・エイドについては適切であるという回答が多かった。体力科学についての基礎的な知識を身につける内容の単元においては受け身の学習時間が多くなりがちなので、一昨年度以降、課題設定による小レポート課題を課すなど、学生が自ら考える時間を増やすようにしている。 3）期末アンケート結果から見た今後の課題 期末アンケート結果から見た今後の課題としては、引き続き、レポートへの対応や、教材・授業内容の設定には注意を払いたい。「設問2：授業外学修」においては、継続的な働きかけが必要である。さらに明確な課題・レポートを授業終了時に出すことを取り入れていきたい。またFD研修会への参加や専門書でそのスキルを学びたいと考えている。	37	34	91.9%
体力評価実習（Q4）	三浦 朗	1）昨年度の結果を踏まえた授業改善点 昨年に引き続き、各実習テーマにおいて学生の自主的な取り組みを引き出し、達成感を与えるために以下の4点を実施した。①実習の手順と授業外のレポート課題を明確に示すこと②レポートを毎回の実習後に読みコメントを与えること③データー処理と評価をグループごとに分かれてテーマを決めて行わせること④実習の最終回に全体発表会（グループによるプレゼンテーション）を行うこと。また、身体運動をとまなう実習なので、安全第一と言う観点から時間的に余裕をもって実習ができるように毎年少しずつ実習内容を修正している。また「教材・教具は適切」という観点から器具や設備の安全管理面での配慮は最優先で望んでいる。 2）履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 8回の実習であるため特に中間アンケートは実施しなかったが、毎回の実習中に学生の反応を観察し、提出される実習レポートを確認しながら授業改善を要する点が無いかどうかについて注意を払った。 3）期末アンケート結果から見た今後の課題 集計結果から「1：真剣な取り組み」「10：総合的な満足度」においては高評価（100%肯定的評価）が維持されている。アクティブラーニングに関する項目は「3：授業時間外の課題の明示」「4：能動的学修機会」において高評価（100%肯定的評価）を得た。難易度の確認のためのレポートのチェックにより、学生の理解度に注意を払いながら実習を進めたことにより「6：目標とする力が身につく」についても高評価（100%肯定的評価）であった。また「7：教材・教具は適切」「8：さらに学びたい」「9：学修活動への支援」についての評価も昨年と同様に高評価（100%肯定的評価）を維持している。今後も学生の積極的な学修を引き出す工夫を継続すべく、引き続き①学生自らが検者と被検者の両方を体験させる②実習テーマごとのレポートを課し学生が自ら考える時間を作る③事前学習を促すような課題を実習マニュアルにおいて明確に提示する④最後に全体発表会を行う、の4点を行いたい。	36	20	55.6%
食品衛生学（Q4）	馬淵 良太	アンケート回答率89.5%（34/38人）で多くの学生の回答が得られた。回答結果は、多くの項目で「強くそう思う」、「そう思う」が80-100%を占めているため、一定の授業の質が確保できていたと考える。設問4の能動的学修機会では、「強くそう思う」38%、「そう思う」47%に対し、「そう思わない」が15%であった。本授業は講義形式であり、食品衛生に関する幅広い内容を教授する授業であったため、いわゆる例に示してあるようなフィールドワークやグループワーク、反転授業など行っていない。それがこの結果につながっていたと思う。しかしながら、講義形式のみの授業ではあるが、肯定的な評価が85%もあった。これは毎授業にコメントシート（ミニツペーパー）を渡し、その中で学生が感じた疑問・質問は、Q and A形式で次の授業の冒頭で全体で共有・補足説明を行った。これも能動的学修機会（双方向授業）になるが、この手法が学生にもこれも能動的学修であると伝わっていたと感じた。本授業は、講義形式の授業が重要であり、実践的な学びは、食品衛生学実験などあるので、この形式は次年度も変えずに行っていく。なんでもかんでも能動的学修を行えばよいというわけではないため、講義形式の授業でも多くの学生が自身で能動的学修を行っていると感じたのは大変よかった。設問10の総合的評価では、「強くそう思う」44%、「そう思う」56%で否定的な評価がなかったことは良かった。次年度は、「強くそう思う」が増えるように授業改善を行いたい。自由回答では、「チームズで配信する時に、メンションをして欲しいです。それがないと通知が来なくて連絡に気がつくことができません。お願いします。」とあった。今まで一度も言われたことがなかったが、確かにメンションあったほうがわかりやすいと思うので、次年度からこの授業に限らずチームズでの配信で特に重要なものについては、メンションするように改善する。また、「オンラインで授業して欲しかったです。」とあった。本講義はオンライン不可（管理栄養士養成に係るため）のため、次年度は対面の良さを活かせるような授業構成を取り入れたい。	38	34	89.5%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
調理科学実験（Q3）	杉山 寿美	調理科学実験（杉山寿美・古田歩） 回答数は30/37名である。「総合的に判断して、この授業に満足している」の評価は3.43であった。本実験の評価は本学着任後、概ね3.8以上であるが、年度による揺れはあり、昨年度3.85、一昨年度3.50であった。本実験では、食品を扱うため、実験の前後で衛生管理が不可欠であり、また、食中毒やけがのリスク回避のために、学生自身がリスク対策としての必要な事柄を理解し、実践できなければならない。そのため、実験前後の衛生管理の必要性を何度も説明し、掃除時間が可能な限り短くなるよう段取りをしているが、「納得」の程度は学年によって異なる。その「納得」の程度が授業評価に影響していると感じている。 1）昨年度の結果を踏まえた授業改善点：上記のとおり、評価の高低は学年による揺れもあると認識しており、年度ごとの大きな変更は行っていない。授業においては、学生の調理経験の乏しさを理論的に補えられるよう「なぜその調理工程を行うのか考えつつ動く」ことをしつつ伝えていく。 2）履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点：レポートへの回答や実技指導等、学生に基礎的な力が定着するよう、可能な限り一人ひとりの双方向性の確保に努めている。調理科学の理解のためのレポート作成は、本科目の学修に必須であり、レポート期限を短く設定している理由については、他の授業に時間を割いてもらうためであることも説明し、期限の短さへの対応としては、テーマは限定する等の配慮を行っている。 3）期末アンケート結果から見た今後の課題：自由記述は「家が遠いので帰宅が遅くなることもありしんどかった」の1件であった。これまでこのような意見については、学生全体に衛生管理の必要性等を説明し丁寧に対応してきた。ただし、本学の調理実験科目は1科目のみであったため、1回あたりの学修内容は多くならざるを得なかった。R8入学生（R9実施）から、調理実験科目を2科目としたため、R9年度からは学生の「しんどさ」は緩和されると考えている。ただし、R8年度は1科目であるため、開講時間の変更等で対応する予定である。学生が楽しく学べるよう常に考えていきたい。（回答者数30名：履修登録者数37名、回答率81.1%）	37	30	81.1%
ライフステージ栄養学（Q3）	辻 愛	①昨年度の結果を踏まえた授業改善点 昨年度は前任の教員が担当であり、本年度から本講義を担当した。このため、昨年度の結果に基づく授業改善に関しては記載を控える。授業の冒頭に本授業の目標および到達点を提示するとともに、授業内容に関連した問いを投げかけることで、学生が意欲をもって授業に取り組めるよう配慮した。 ②履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 各授業の終わりに本授業内容に関するレポートを提出させ、学生の理解度を把握に努めた。また、レポートについては評価結果をフィードバックするとともに、理解が不十分であった点についてコメントを付し捕捉説明を行った。レポートには質問欄を設け、質問しやすい環境を提供した。次週の授業内で質問の回答、理解の深化や興味をもてるテーマとなるように改善した。 ③アンケート結果から見た今後の課題 97%が授業に満足しおり、特に全員が「目標とする力が身につく」「授業の内容に関してさらに学びたい」という回答が100%であったことから、魅力的な授業内容を提供することができたと考えられる。一方で、能動的学習機会については、学習機会がないと回答した学生が17%であった。来年度は授業内でグループディスカッションを取り入れるなど学生が主体性を持って授業に取り組める機会を設けるよう改善を図りたい。課題の内容・量について適切であると答えている割合は多く、来年度も引き続きレポート課題を行い、授業の理解度の把握に活用する。授業外学習が2時間以上と回答した学生は64%であった。概ね良好な結果であるが、より多くの学生が継続的に学修時間を確保できるよう、今後は他の授業の課題とのバランスを考慮しつつ、授業外学習の支援を工夫していきたい。	37	36	97.3%
応用栄養学実習（Q4）	辻 愛	①昨年度の結果を踏まえた授業改善点 昨年度は前任の教員が担当しており、本年度から本講義を担当した。このため、昨年度の結果に基づく授業改善に関しては記載を控える。個々人が学習目標に到達できるよう、積極的に学生への声かけを行うようにした。 ②履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 実習中は学生との対話を通して学修目標の到達状況を確認した。また、その日の実習内容に対する気づき・学びをレポートとしてまとめて提出させることで、学生の理解度を把握するよう努めた。レポートには、学習内容に対する理解が深まるようコメントした。加えて、学生の発表に対して良い点と改善点を具体的に示し、考えるきっかけを与えることで、応用栄養学分野への学習意欲が高まるよう留意した。 ③アンケート結果から見た今後の課題 アンケート結果より、「教材・教具が適切」「学修活動に対する必要な支援を得ている」は97%であり、「目標とする力が身につく」「内容に関して学びたい」と答えた人は100%であった。また、授業の満足度も94%であり高い結果であった。これらのことから、魅力的な授業が提供できしており、さらに学習目標を達成するための支援も十分行えていると考えられる。「課題の内容・量」について大多数が適切であると感じている一方で、一部の学生は不満を感じていることが分かった。そのため、課題内容の改善や量の調整を行い、学習効果の向上を図りたい。また、授業時間内に終わるようにしてほしいとのコメントがあった。実習の質を維持しつつ、スケジュールの効率化などの工夫を進めたい。	37	33	89.2%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
臨床栄養教育論（Q4）	栢下 淳		37	16	43.2%
栄養教育論実習Ⅱ（Q4）	栢下 淳		37	10	27.0%
臨床栄養学Ⅰ（Q3）	神原 知佐子	昨年度のアンケートでは、全項目で肯定的な回答を得ており、履修者の満足度は高かった。本年度も昨年度と同様に、理解をより深めるための授業運営に努めた。具体的には、各単元終了時の確認テスト、レポート、グループ学習を課すことで、授業外学修を促すとともに、履修者の理解度や意欲を把握し、授業運営に反映させた。板書の視認性や授業進度、課題の締切設定についても履修者の意見を取り入れ、随時改善を図った。本年度のアンケート結果も、昨年度同様に全項目で肯定的な評価を得た。自由記述に「オンラインが良かったです。」との意見があった。本科目は管理栄養士国家試験に係る必修科目であり、対面での教育効果を重視している背景がある。今後は初回授業でのガイダンスを強化し、科目の位置づけや授業形態の意図について十分な説明を行いたい。グループ学習については、アウトプットによる知識の定着や多様な視点の獲得に有効であると感じているため、次年度も継続したい。引き続き履修者の反応をきめ細やかに汲み取り、教育の質のさらなる向上を目指したい。	37	23	62.2%
臨床栄養学Ⅱ（Q4）	神原 知佐子	本年度も昨年度に引き続き、理解をより深めるための授業運営に努めた。各単元終了時の確認テスト、レポート、グループ学習の実施により、授業外学修を促すとともに、履修者の理解度や意欲を把握し、授業運営に反映させた。その結果、授業アンケートでは全項目で肯定的な回答を得ており、満足度は高かった。自由記述には、「テストを臨床栄養学Ⅰのようにしてほしかったです。」との意見があった。本科目の期末試験は記述式で実施し、臨床栄養学Ⅰは択一式であった。これは、それぞれの科目の学修教育目標や内容に即した評価方法として選択したものである。今後は、科目ごとに学修教育目標や内容が異なり、それに伴って評価手法も適切な方法が選択されることを、初回授業等でより丁寧に説明する必要があると感じた。グループ学習は、アウトプットによる知識の定着はもちろんのこと、個人の責任感醸成に有効であると感じているため、次年度も継続したい。今後も履修者の反応を注視し、きめ細やかな対応を通じて教育の質のさらなる向上を目指したい。	37	29	78.4%
給食栄養・安全管理論（Q4）	杉山 寿美	給食栄養・安全管理論 回答数は34/37名である。「総合的に判断して、この授業に満足している」の評価は3.47であった。昨年度はアンケート回答を促すことを失念しており回答者がゼロであり、一昨年度は3.20であった。本学着任後、本科目の評価は常に高かったが、一昨年、今年と3.50を切っている。本科目は、給食経営管理実習の準備を兼ねたグループワーク中心の科目であるため、オンラインになれた学生にとって、全員が集まって調理すること、全員で物事を決めること等の負担は大きいと感じている。 1）昨年度の結果を踏まえた授業改善点：一昨年の評価が低かったため、授業時間外で行っていた学生のグループワークの一部を授業時間内で行えるように配慮した。ただし、その分、授業は進んでおらず、3年次の続く科目の中で補う必要が生じている。教員の苦慮は学生も理解していると思う。 2）履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点：グループワーク中心の授業であるため、学生個々、グループ個々の動きを、常に注視している。学生は直近1か月（1月末から2月末）で格段に成長し、「意見を述べチームを活性化できる」ところまで到達している。続く、給食経営管理実習、給食経営管理論において、学生個々がチームを牽引していけると信じている。 3）期末アンケート結果から見た今後の課題：自由記述は「授業時間外に集まることが多く辛かった」の1件であった。これまでこのような学生からの意見については、授業担当者としても心苦しく、給食関係科目全体で負荷を調整していることなどを丁寧に説明・対応してきた。ただし、本学の給食実習科目は1科目のみであったため、本実習の準備を時間外でせざるを得なかった。R8入学生（R9実施）から、給食実習科目を2科目としたため、R9年度からは学生の「辛さ」はいくらか緩和されると考えている。ただし、R8年度は1科目であるため、何らかの方策を考えたい。組織的に動かなければ100食規模の食事を提供できないため、学生指導に困惑することも多々あるが、学生は突然にこちらの想定を超えて急成長し、教員を驚かせる。成長を支援できることをありがたいと感じている。（回答者数34名：履修登録者数37名、回答率91.9%）	37	34	91.9%
博物館情報・メディア論（Q4）	小川 仁士	使用しているテキストの内容が古くなって来ているので、近年の状況も調査しつつ授業資料をブラッシュアップしていきたい。	16	3	18.8%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
多文化共生社会と法（Q3）	岡田 高嘉	【昨年度の結果を踏まえた改善点】 グループワークやプレゼンの時間を十分にとるため、講義時間や扱う情報量を少し減らした。昨年度との一番の大きな違いは、グループワークの翌週にプレゼンの機会を設けて、十分な準備時間を取るとともに、授業外での活動（学修）を促した点である。また、取り扱う内容も再検討し、「多文化共生」の概念を広くとらえて、外国人のみならず、社会的少数者の人権問題も取り上げた。さらに、授業中に実施する個人課題やグループワークの課題の内容も見直し、抽象的な課題設定を改めるよう心がけた。 【期末アンケート結果から見た今後の課題】 毎週課題の提出を求めた。授業の前半は個人課題であり、授業への参加度や授業内容の理解度を探った。授業の後半は、グループワークが主流となり、毎週プレゼンを行った。グループワークとプレゼンについては毎回、自己評価シートを作成してもらい、自分の役割や今後の改善点などを記述してもらい、授業への理解度や参加度を調査した。 【期末アンケート結果から見た今後の課題】 アンケート回答率は82.1%であり、決して低くはない。総合的な満足度において、肯定的な評価は100%であるが、「強くそう思う」と回答した割合は4割程度である。昨年度は3割だったので改善しているが、今後は5割以上を目指したい。自由記述は多くないが、「先生の話聞くだけの授業ではなく、毎回のプレゼンによって主体的にテーマに疑問を持ち、学びを深めることができた」というコメントがあったので、授業の基本的な枠組みはこのまま継続していきたい。一方、プレゼンへの準備時間（つまりグループワークの時間）が短いというコメントもあった。昨年度に比べて、準備時間は相当増えたので、これ以上に増やすことが妥当か否かは慎重に検討したい。徒にグループワークの時間が長くなっても、必ずしも効果が上がるとは限らない。相当な時間を定めて、その時間内に集中的に実施することも必要と考える。	39	32	82.1%
英国社会文化論研究（Q3）	吉本 和弘	学生によるアンケートへの書き込みがゼロだったのでコメントしづらいが、全般的に皆真剣に取り組んでくれたので、良かったと感じている。社会文化論とは言いながら、ほぼ文学作品の読みに終始した授業となったが、文学作品の中から、より大きな社会的、文化的、歴史的な問題点について色々と議論できたのではないと思う。文学と植民地主義や帝国主義との関わりを扱った冒険物語や、ゴシック小説または怪奇小説、そして推理小説というジャンルに描かれる社会不安の問題、SF小説に見られる階級問題、戦争の問題、人類の未来の問題、など広範なトピックを扱ったわけだが、学生諸君それぞれが、独自の問題意識を見つけることができたならば、この授業も成功だったと言えるだろう。確かに成功したはずだという手応えは、各自が精魂込めて書いてくれた最終課題の出来に表れていたと思う。文学に限らず様々な芸術や文化現象の中から問題を抉り出してその本質を認識し、議論する方法をこれからも追求していって欲しいと思う。	10	0	—
英語文学論研究（Q3）	吉本 和弘	少人数で作品を読み込む作業ができたことはとても良かったのではないと思う。結局取り上げたのはメアリ・シェリーの『フランケンシュタイン』と、シェイクスピアの『テンペスト』という重要作品だった。英文を読み込むことをある程度はできたが、もっと量をこなし、できれば両作品について全体を原文で読むというような活動にできれば良かったが、授業内ではそれはできなかった。読んでくれた学生もいたであろうし、そうであればそれは非常に良い経験になったはずである。少なくとも翻訳では読んでくれたと思う。それぞれの作品が持つ深い意味合いについて各自が独自の視点を持って取り組んでくれたことは、最終的なエッセイの質に表れていたと思う。皆真剣に取り組んでくれていた。このような重要な作品について考えた経験が、今後の各自の研究の指針になったとしたら嬉しいことである。	6	0	—
英語学研究（Q3）	草薙 邦広		30	3	10.0%
中国社会文化論研究（Q3）	上水流 久彦	授業中の双方向的なやりとりが、もっと盛んになるように授業を運営していきたい。回答率が低く、回答率もあげるよう工夫したい。	18	4	22.2%
中国語文化論研究（Q4）	工藤 卓司	受講者がわずか3名だったことから、大幅に授業内容を変更して行うことになった。また、インフルエンザも流行し、全員が揃うことが難しかったが、所定の授業内容は終えることができたと思う。少しでも基礎的知識を多く獲得し、4年生の卒論執筆へとつなげたいと考えていたが、ある程度はその目的を達することができたように思う。	3	3	100.0%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
東アジア比較文化論研究（Q3）	鄭 銀志	回答率は11.8%と低く、結果の解釈には一定の留意が必要であるが、回答者はいずれの設問においても肯定的評価を示している。回答率は低いものの、15回の授業を通して受講者は積極的に参加しており、授業全体として真剣で積極的な学修姿勢が維持されていた。授業への集中度については「強く思う」および「そう思う」がそれぞれ50%であり、受講者が概ね真剣に取り組んでいる状況が示されている。 また、課題の提示、能動的学修機会の設定、課題の内容・量の適切さ、到達目標の達成、教材・教具の妥当性、学修支援体制、総合満足度に至るまで、すべての項目で100%が「そう思う」と回答しており、授業設計および運営は一定の評価を得ていると判断できる。特に、能動的学修機会について全員が肯定している点は、学生による発表と質疑応答を中心とした参加型学修が有効に機能していたことを示すものである。一方で、授業外学修時間が回答者全員「2時間未満」であった点は重要な課題である。研究の演習科目として発表とレポート提出を軸に構成しているが、今後は課題の目的や具体的な学修方法の提示を通して授業外学修の質と量の向上を図る必要がある。また、回答率の向上に努め、より多くの学生の声を反映した検証が可能となるよう改善を進める。次年度も主体的かつ継続的な学びを支える授業運営に努めていきたい。	17	2	11.8%
日本地域論研究（Q4）	加藤 博和	「出席カード」を毎回提出してもらい、履修者の理解度や反応を知ることに努めた。また、授業の中で履修者に発表してもらう機会を作り、できるだけ双方向となるようにした。 アンケートの設問10：総合的な満足度について、「強く思う」75%・「そう思う」25%という結果で、安堵している。ただ、アンケートの回答率が20%弱と低いのは残念である（回答するようアナウンスしたのですが）。 この授業に関連して行っている授業外学修（課題、準備、復習等）時間（設問2）は、「全くしていない」が25%であったが、本授業では、受講者による報告等を行い、成績評価にレポート（課題提出）が大きなウェイトを占めているため、この回答結果には疑問もあるが、授業外学修を増やすよう改善を図っていきたい。 また、このCampus-Xsでの連絡（講義お知らせ）を見ていない履修者もいて、課題提出がそろわなかった。今後は早めに口頭での連絡も併用し履修者全員に伝わるようにしたい。	22	4	18.2%
日本文化史論研究（Q3）	杉山 聖子	1 昨年度の結果を踏まえた授業改善点 該当なし 2 履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 日本文化史論研究は、日本文化史論から一歩進んで、自分自身の関心にもとづき発表することを目標としました。教員が提示した文献の全体要約を行ったうえで、自分自身の関心を掘り下げて発表する方法を実施しました。発表に対する意見交換も重視し、自分自身の持つ意見、感想を伝える時間を設定しました。 教員が予想していた以上に活発な意見交換が行われ、そのやりとりのなかで、自分とは異なる発想や着眼点に気づいた学生もいました。 次回は、より発表内容の完成度を高めることを目標とし、要点のまとめ方、参考文献の探し方等について提示していきます。 3 アンケート結果から見た今後の課題 ・資料の紙面配付 本授業の資料は、Teams上で全回数分を一斉公開し、各回受講者数の半数程度の分量を印刷して、希望者のみ配付していました。受講者全員への配付については、今後検討します。 ・発表順について 発表者については、初回発表者との差を生じさせないように、一週間前に通知していました。発表順の通知方法については、今後検討します。	18	16	88.9%
日本文化論研究（Q3）	目黒 将史	回答数が少ないのが気にかかる。授業内で話しているが、すべての物事を批判的に検証すべきである。 回答があった項目に関しては、それなりに授業内容が受けとめられていると判断できる。	29	6	20.7%
日本語表象論研究（Q3）	福田 涼	本科目に関して、特に後半（第7回以降）においては、先行研究の調査や、それに基づく報告と議論といった、受講者自身の主体的な学修活動が求められている。 そのような中で、今年度の「日本語表象論研究」に関しては、特に意欲的・積極的な姿勢で授業に臨んだ学生らが散見された。彼女ら彼らが醸成してくれた良好な学修の雰囲気の下で、建設的な議論・意見交換を実施することが可能になった。そのことは、たとえば「議論するのがめっちゃくちゃ楽しかったです」といった自由記述にも表れていると考えられる。 また2025年度に関しては、受講者数がある程度落ち着いていたため、例年よりも、より多くの時間や労力をフィードバックにかけることが可能であった。授業アンケートにおいては、「私たちの発表に対して先生がフィードバックを基に丁寧にご指導してくださったため、スキルアップした気がします。」という嬉しいコメントも見受けられた。 受講生各位には、そうした「スキル」を来年度の「卒業論文」・「卒業研究」で発揮してくれることを期待する。そして担当教員自身も、今年度の状況や、アンケート結果に鑑みつつ、更なる授業改善を図ってゆく所存である。	24	4	16.7%

■担当教員コメント（専門科目） 地域創生学部 令和7年度後期

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
東アジア地域史論研究（Q3） （東アジア地域史論基礎演習 読替）	岡本 弘道	回答数が少ないため、個別の回答内容が授業全体に敷衍できるかといえは難しいと考えるが、受講生の発表機会と授業内での議論のバランスは改善の余地があると考え。特に今年度まではクォーター制で2コマ連続の開講であり、演習スタイルの授業形式を実施する場合、受講生の準備期間や相互のケミストリーが大きく制約を受けたことは否定できない。受講人数が少なければうまくいくスタイルが多数では機能しなくなることへの配慮も必要だろう。来年度からはセメスター制となり、その分余裕はできるが、受講生数に合わせた授業形式を工夫したいと思う。	14	3	21.4%
証券論（Q3）	鈴木 喜久	アンケートに回答いただいた受講生の皆さん、回答ありがとうございます。大学での学習を一過性のものに終わらせず、部分的でも良いので、気になった内容についてもう一度考えるなどして復習してみてください。少しでも知識として定着させてくれることを願っています。鈴木	42	5	11.9%
監査論（Q3）	橘 俊夫	①昨年度の結果を踏まえた授業改善点 特になし。 ②履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 授業中に一度匿名でアンケートを行った。 ③アンケート結果から見た今後の課題 事業中にアンケートの時間を割いたにも関わらず、提出率が悪い。よって、単位取得のために必須とするなどの対応が必要と考える。	45	12	26.7%
パブリックファイナンス論 （Q4）	新宅 公志		31	7	22.6%
データ構造とアルゴリズム （Q3）	陳 訓泉	本授業では、データ構造とアルゴリズムの基本概念を理解することを目的として課題を設定しましたが、課題の難易度や開発環境（Visual Studio）の使用に関して、難しさを感じた学生がいたことを認識しています。Visual Studio の操作についてはマニュアルを配布し対応しましたが、理解をより促進するため、今後は導入説明や支援方法のさらなる工夫を検討していきます。一方で、演習時間には学生同士が自由に議論できる時間を設け、試行錯誤しながら主体的に学習に取り組める環境づくりを行いました。今後は、課題内容の段階化やグループワークなどの能動的学習をさらに取り入れ、理解を深めやすい授業構成へと改善していきます。	43	9	20.9%
情報ネットワーク（Q4）	陳 春祥	履修登録者49人に対し、回答者は10人で、回答率は20.4%であった。授業の最終回にアンケートへの回答を指示したものの、依然として回答率は低い水準にとどまった。今後は、組織的な回答率向上策の検討が必要である。学生自身に関する設問（Q1、Q2）からは、多くの学生が真剣に授業へ取り組んでいることがうかがえる。一方で、約3割の学生は学外学習時間が十分ではないと回答しており、継続的な学習習慣の定着が課題である。授業内容に関する設問（Q3以降）では、取り組むべき課題の提示（Q3）、修得できる知識・技能（Q6）、学習活動に必要な支援（Q9）、および授業満足度について、いずれも肯定的回答が100%であった。本科目はクォーター制であり、毎回の課題量はやや多かった可能性がある（Q5）。しかし、課題の提出状況は昨年度より改善が見られ、指示に沿った提出が増加した。本授業は知識および技能の体系的修得を目的とし、指定テキストを使用している。しかし、テキストを準備していない学生も一部見受けられた。予習範囲および復習内容、ならびにテキストの重要箇所は毎回明示している。また、期末試験はテキストの演習問題および課題を基に出題したが、期待した水準に達しない学生も一部存在した。今後は、インターネット情報に過度に依存するのではなく、テキストを精読する学習習慣の定着を促すことが課題である。	49	10	20.4%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
応用プログラミング（Q3）	佐々木 宣介	【昨年度の結果を踏まえた改善点】 専用の演習環境（サーバ）を用意して、そこに各自がアクセスする方式で実施しているが、できるだけ学生のPCもしくは演習室設置のPC上で作業を行い、サーバ側には最後にファイルの転送をするだけで動作確認するという手順にしている。ただ、演習環境の問題から、学生自身のPCのみではプログラムの最終的な動作結果までは確認が難しい、また、データベースの操作など、一部の操作をサーバ側で実施する必要もあることなどから、受講している学生は一定の難しさを感じているようである。 【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】 授業中の学生の様子に注意をして、演習の進捗を確認しながら進めるよう配慮した。 【期末アンケート結果から見た今後の課題】 難易度が高いという趣旨の個別コメントがあった。基本的な機能を中心に実施しているが、さらに資料による解説等の改善を検討したい。また、資料中のソースコードを全てプログラムファイルで配布することを希望するコメントがあったが、一定のソースコードはファイルで事前配布し、重要な部分のみ、実際に自分で作成する形で、ごく簡単な修正で進められるような内容で実施している。ただ、今後も演習の作業進捗を確認して、現在よりも追加で事前配布することも検討したい。	53	9	17.0%
データマイニング（Q3）	陳 訓泉	本授業では、前半は基礎的内容を中心に理解しやすい説明を心がけましたが、後半の内容については難易度や説明の分かりにくさに関する意見が見られました。 今後は、配布資料や説明の構成を見直し、学習内容の目的がより明確に伝わるよう改善していきます。 また、レポート課題や出席確認等の運用面についても学生の意見を踏まえ、提出期限や実施方法に配慮しながら、より受講しやすい授業運営を目指します。	41	11	26.8%
グラフィカルプログラミング（Q3）	宇野 健	・昨年度の結果を踏まえた授業改善点 昨年度は特にコメント等は無かったが、冒頭の口頭説明部分では学生があまり手を動かすように設定していなかったため、今年度はサンプルプログラムを作って実行させるようにした。また、授業期間の後半で実施するオリジナルアプリケーション開発では、進捗の把握と、1週間の課題の設定を細かく行うため、毎週授業中に個別での報告をさせるようにした。 ・履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 履修人数が少なかったため、出来るだけ直接声を掛けて、わからない箇所などを直接聞き取った。また、独自開発しているプログラミング演習システムから得られる情報から、演習の進度や理解をリアルタイムで把握し、次の授業の内容の調整や、補足情報をTeamsで公開するなどした。 ・アンケート結果から見た今後の課題 後半のオリジナルアプリケーション開発については、クオータ制だと1か月しかないため、かなり厳しいとの声があった。これについては、来年度以降はセメスター制に戻るため、十分な期間を取って開発ができるのではないかと考えている。	9	9	100.0%
多変量解析（Q3）	韓 虎剛	数学に対して苦手意識を持つ学生がいるため、基本概念の説明および関連計算に重点を置いた。さらに、MATLABを用いた計算・シミュレーションを取り入れ、理解と応用力を深めるよう努めた。 文系・理系を問わず基礎力のばらつきが大きく、数学やプログラミングに対する苦手意識が学習意欲の阻害要因となっている。今後は、そのような学生に対する有効な支援方法を引き続き検討していきたい。	4	2	50.0%
情報セキュリティ実験（Q4）	佐々木 宣介	【昨年度の結果を踏まえた改善点】 本科目は演習が中心の科目であり、特別な機材を利用するため、その環境における授業資料等の教材の共有方法について昨年よりも改善を行った。Teamsで共有する以外にも、使用中の機材からも簡単にアクセスできるようなWebサイトの整備など、複数の手段で対応できるようにした。 【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】 授業中の学生の様子には注意をして、演習の実施に問題が発生していないかを確認しながら進めている。 【期末アンケート結果から見た今後の課題】 個別のコメントも含め、大きな問題はなかったと認識している。特別な機材を利用する関係で、授業時間内に演習が終了しない場合の対応が難しいと感じている。こまめな演習室の解放などの検討を行いたい。	42	10	23.8%
Webインテリジェンス（Q3）	岡部 正幸	アンケートの中に、課題の提出期限が少し早いという意見が見受けられたが、2週に1つのレポート(4コマに1レポート)で、講義全体では合計4つの課題であり、特に多すぎる内容にはなっていないと考えている。	7	1	14.3%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
コンピュータシミュレーション (Q3)	重丸 伸二	授業への取り組み状況は良く、概ね良好なアンケート結果になっている。自由記述欄を見ても、授業の実施方法、学生の質問への対応等のサポートは概ね好意的受け取られている。ただし、資料の一部に分かり難いところがあるので、修正を検討したい。また、授業アンケートの回答率が低いことから、回答期間中にさらに学生に案内・依頼を行おうと考えている。	23	6	26.1%
技術英語講読Ⅱ (Q4) 肖	肖 業貴	この授業は、昨年度から一部変更し、学生自らの取組をより充実した形にしました。 期末試験では、7割が学習した内容から出題し、のこりの2、3割は実力向上 したかどうかを図るための内容にしています。授業開始の際、その理由等を詳しく説明しています。 受講生のコメントに対する回答は以下の通りです。 ① 授業内容は個別の受講生の得意や不得意に対応しておりません。情報の学生全員として 備えるべき技術英語力を養う内容にしています。 ② 解説内容は事前公開しないのが当然です。学生自ら事前翻訳したものについて、 授業解説に合わせてミスを直し、理解を深めてもらうのが目的にしています。 ③ 成績評価においては、クラス別による不公平が起きないように、調整しています。 授業の開始時にも説明しています。授業内容によってはレポートでいいか、それとも 期末試験でいいか、総合的に判断をしています。次年度は教員同士による議論をしたいと思います。	22	12	54.5%
技術英語講読Ⅱ (Q4) 折本	折本 寿子	1) 昨年度の結果を踏まえた授業改善点 授業中に翻訳した内容を配布プリントに書き込み、授業後にはそのプリントを Teams の課題機能を使って提出させるようにした。 2) 履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 毎回授業後に確認テストを行い、授業中の取り組み状況および理解度を確認した。 3) アンケート結果から見た今後の課題 昨年度と同様に肯定的な意見が多く寄せられたが、特にすべての項目で「強くそう思う」と回答した学生が50%を超えた点は印象的だった。授業中にメモを取り、それを提出するという新しい取り組みを導入したことで、学生自身がこれまで以上に学びの充実感や達成感を得られたのではないかと考える。	19	14	73.7%
臨床栄養学実習Ⅱ (Q3)	神原 知佐子	昨年度のアンケートでは全項目で肯定的な回答を得ており、特筆すべき自由記述はなかった。本年度は、履修者によるロールプレイングの発表を中心に、自己・他者・教員の三者による評価をくり返す形式で授業を展開した。また、実習1週間後を期限とするレポート提出を課し、翌週までに教員の添削、コメントを付して返却した。この修正・再提出のサイクルをくり返すことで、履修者の理解度や意欲の把握に努め、授業運営に反映させた。本年度のアンケート結果も昨年度と同様に全項目で肯定的な評価を得た。自由記述には「実習に向け、個人・集団に向けた臨床栄養教室の実践方法を具体的にイメージすることができました。」との意見があった。ロールプレイング後のフィードバックによる行動改善、及びレポート課題の継続的な添削指導は、能動的学修を促し、専門的スキルのみならず、コミュニケーション能力や実行力といった基礎的・汎用的能力の育成につながっていると考える。これらの授業方法は本科目の学修教育目標達成に不可欠であると考えたため、次年度も継続的に実施していきたい。一方で、アンケート回答率の低さが課題となった。これは授業時間内に回答時間を設けなかったことが主因と推察される。	37	9	24.3%
多文化社会とことばの教育 (Q4) (R5年度以前日本語・日本事情同時)	中石 ゆうこ	アンケート結果では、おおむねどの項目でも好評であったが、教材がふさわしくない、フィードバックが十分に得られない、今後学びたいとは思わないという否定的回答が1件ずつあった。授業の時の受講生の様子を見ると、他のグループの発表の際に聴かずして別の授業の課題を行ったり、居眠りしたり、ネットサーフィンをする受講生もごく少数ながら見られた。このクラスは受講生が50名となり、これまでのこの授業の中で最も多い受講者数となった。発表の回数を確保するために、10班に分かれてグループ活動を行った。できれば留学生が1つの班に1名はいるように配置したかったが、受講者数の関係で、留学生がいない班ができた。ディスカッションの際、グループに留学生がいないことで、日本語学習者からどう見えるかというコメントをもらえない班があったが、発表の準備の際、別の班の留学生に話を聞きに行く受講生が見られた。積極的に自分たちの発表を複眼的に見ようとする態度を目指しつつ授業に参加する受講生も多くあった。グループ活動に貢献しようとしないう受講生、興味を持たない受講生を、どのように授業に巻き込むかが次の課題である。	50	42	84.0%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
国際経営論（4Q）（R6以前入学者組織文化論読替）	長桶 和也	今年度より本科目を担当したが、受講者から肯定的な評価・コメントをいただいた。しかしながら、至らぬ点が多々あり、次年度の講義で改善していきたい。【履修者の反応を知るため学期中に実施した方法・その結果を踏まえた講義改善点】 毎回の講義にて講義後レポートを提出してもらう形を取り、その際にコメントや質問を記述する欄を設けて学生からコメントや質問を募った。受講者からのコメントは次の講義の最初に取り上げること、受講者からの質問には口頭で補足することと必要に応じて追加で資料を作成して説明することを実施した。また、講義の中で受講者に質問し、受講者が講義内容を理解できているのかを確認した。その反応が悪い時は、再度丁寧に説明することを心掛けた。【期末アンケート結果から見た今後の課題】アンケート内容を確認すると設問4を除いて肯定的な回答が90%以上あった点は評価に値し、次年度以降も継続していきたい。しかしながら、設問4の能動的学修に対する評価が低く、教員もそのような機会を作ることができなかったので次年度以降の課題としたい。	42	34	81.0%
ITパスポート試験対策演習（Q3）	小川 仁士	今年度は受講生が多く、学習モチベーションも様々だった。主体的な学習を促すために反転学習を取り入れているが、趣旨が浸透していないのが残念である。次年度からは理解度確認テストに応用問題を追加するなどして、緊張感を与えるよう工夫したいと思う。	46	26	56.5%
基本情報技術者試験対策演習（Q3）	小川 仁士	今年度は受講生がいなかったため、特にコメントは無い。	0	0	—
IoTシステム開発プロジェクト演習（Q3・Q4）	宇野 健	・昨年度の結果を踏まえた授業改善点 これまでは履修者が少なかったため、最終発表も本人任せでまとまりに欠けることが多かったため、今年は予め発表の形式や発表時間を決めて、事前に履修派に通知した。結果、これまでにない履修者数だったにも関わらず、全員まとまった発表を行い、時間内で終わることができた。・履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 少人数の演習授業だったため、各個人に声をかけて質問を促したり、進捗をじっくりと判断しながら授業を行った。・アンケート結果から見た今後の課題 アンケートの回答が1件しかなかったので、来年度はまずは回答率を上げることが優先される。	8	4	50.0%
AIシステム開発プロジェクト演習（Q3,Q4）	岡部 正幸	この授業は、今年は少人数で開講した。7人の先生はそれぞれ異なるAI技術の演習を行った。昨年度と同様、学生も概ね積極的に演習に参加した。次年度はより多くの学生に受講してほしい。	5	1	20.0%
知能情報演習（Q3）	韓 虎剛	授業内容については、学生がさらに学びたいと感じ、総合的に本授業に満足していることがアンケートから読み取れる。ただし、演習中心の授業であるため、プログラミングに不慣れな学生が多い中で、計画した演習内容をどのように確保するかが課題として残る。また、アンケートの回答率が低かったため、今後は回答率向上のための対策を講じたい。	16	4	25.0%
ニューラルネットワーク（Q3）	肖 業貴	この授業は、内容をどこまで削減するか、より簡単にするか、苦悩してきました。昨年と同様、難しいとの評価は想定していました。数学の基礎がかなり必要です。今後も改定していきたいと思います。課題の一つは授業の延長線上にあるため、書面での説明を省きましたが、聞きに来た学生もいました。来年度はすべて書面で出すようにします。	8	6	75.0%
深層学習（Q3）	市村 匠	深層学習の理論的な理解と、深層学習のライブラリを利用したプログラミングと、大容量のデータを活用した学習・予測システムの構築は初めての経験であったと思われる。サンプルコードを入力することで、その仕組みを理解する。実際の活用シーンなどを想定した学習結果に対する考察は、実践的な開発力、データ分析能力が身に着いたと思われる。さらに、ライブラリは日々更新されるため、動いたプログラムが急に動かなくなるなど、AI活用の問題点も体感したと思われる。最終的な課題の提出をもって、本講義は終了となるが、提出された課題を見ていると、少しずつ理解が深まっているのが感じられる。Colabの利用環境によって、GPUが装備されたPCでないと演習できなくなってしまったことは問題になるが、時間のあるときに夜遅くまでソフトウェア開発を演習できたことは有意義であったに違いない。願わくば、講義前に、もう少しプログラミング能力をもっているとうち少し複雑な操作も体験できたと考えられる。	9	5	55.6%
IoT・AI特別講義（Q4）※R4年度以降入学者対象	肖 業貴	この授業では、外部講師による各特別講義に対する報告書を提出してもらって成績を評価しています。どの講義も充実した内容になっています。受講生の視野を広げ、最新の情報技術への興味や感動を喚起すること等を狙っています。ほぼ予定通りの結果です。次年度も同様な形で行いたいと考えています。	37	10	27.0%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
生化学（Q3）	岡田 玄也	第2Qの基礎生化学と同様、今年度よりワークブックを採用し、授業外学修の課題として利用した。また能動的学修機会としてグループワーク後の反転授業を実施した。 アンケートの結果では、授業外の課題提示が十分に提示できたことから、半数程度の学生で授業外学修時間が一定以上確保されていた。また総合的な授業評価も概ね良好であった。その他、視聴覚教材（生命科学に関する特集などをまとめた動画）について良好な意見が自由記載欄に記載されていた。 次年度も継続してワークブックを使用し、明確な課題提示を行うこととする予定である。また視聴覚教材やグループワーク・反転授業についても講義時間とのバランスに配慮しながら次年度も実施していきたいと考える。	36	33	91.7%
生化学実験（Q4）	岡田 玄也	アンケートの結果では、授業外の課題提示が十分に提示できたことから、9割程度の学生で授業外学修時間が一定以上確保されていた。また総合的な授業評価も概ね良好であった。これらは担当助手及びSAとして補助してくれた4年生の指導・支援も寄与していると考ええる。一方で、自由記載欄への記入は2件と少なく、次年度以降はアンケート回収の際に積極的な自由記載への記入を呼びかける必要である。 次年度も学生が安全に実験できるよう、担当助手及びSAと協力して授業を行いたいと考える。また授業時間内外での課題に対する補足説明も継続して行う予定である。	36	23	63.9%
解剖学・病理学Ⅰ（Q3）	北台 靖彦		36	14	38.9%
解剖学・病理学Ⅱ（Q4）	北台 靖彦		36	14	38.9%
生理学（Q4）	辻 文	1. 昨年度の結果を踏まえた授業改善点 これまでの授業で課題と感じていた点を踏まえて改善を行った。知識の暗記にとどまらず理解を深めることを目的に、毎回のミニッツペーパーとカンニングペーパー（まとめ資料）の作成を取り入れた。これにより、授業内容を振り返り、自ら整理する機会を設けた。また、スライドや動画教材を見直し、より分かりやすい構成とした。 2. 履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 毎回のミニッツペーパーの記載内容を確認し、理解が不十分と思われる点は授業で補足説明を行った。 3. 期末アンケート結果から見た今後の課題 自由記述では、「理解できていない点がかかる」「まとめることで復習になる」といった意見が見られ、一定の効果があったと考えている。一方で、グループでの発表については不要と感じた学生もいたため、実施方法や目的の提示の仕方については今後検討したい。「授業に集中して取り組んでいる」「目標とする力が身につく」「総合的に満足している」といった設問では肯定的回答が100%であり、授業の方向性は概ね適切であったと考える。一方で、「能動的学修機会」に関しては否定的回答も見られたため、活動の意図をより明確に示し、主体的に参加しやすい授業形態へ改善していく。また、授業外学修時間の確保についても、具体的な復習方法を示すなど支援を強化したい。	36	34	94.4%
分析化学実験（Q3）	岡田 玄也	アンケートの結果では、授業外の課題提示が十分に提示できたことから、8割程度の学生で授業外学修時間が一定以上確保されていた。また総合的な授業評価も概ね良好であり、自由記載欄にはグループでの実験に関して好意的な意見が記載されていた。これらは担当助教及びSAとして補助してくれた4年生の指導・支援も寄与していると考ええる。 次年度も学生が安全に実験できるよう、担当助教及びSAと協力して授業を行いたいと考える。また授業時間内外での課題に対する補足説明も継続して行う予定である。	36	27	75.0%
食品学実験（Q4）	谷本 昌太	1) 昨年度の結果を踏まえた授業改善点 前年度に引き続き、実験への積極的な関与を促すため、実験担当を明示したシートを配布した。各自が実際に担当した内容にチェックを入れて提出させ、その内容を成績評価に反映させた。 2) 履修者の反応を把握するために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 各授業終了後にコメントシートを提出させ、内容を確認した。 3) 期末アンケート結果から見た今後の課題 自己評価項目では、設問2において1名を除き、授業外学修に時間を充てているとの回答であった。また、設問1（授業への取り組み）からは、ほとんどの学生が授業に真摯に取り組んでいることがうかがえた。授業評価については、設問5・7・8において一部（12%、3名）の学生を除き、「そう思う」以上の回答であった。設問10（総合評価）においても、1名を除き「そう思う」以上の回答であった。その他の項目についても、すべての設問で「そう思う」以上の回答が得られた。今年度も一部の学生から、内容・分量および教材（教科書・配付資料など）に関する課題が指摘されたため、今後これらについて検討を加える必要がある。	36	25	69.4%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
食品加工学（Q3）	谷本 昌太	1）昨年度の結果を踏まえた授業改善点 前年度と同様の方法で実施した。また、体調不良者について、オンラインで対応した。“すべてオンラインで実施してほしい”との意見については、管理栄養士課程の科目であるためできなかった。 2）履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 これまでと同様に、コメントシートを実施し、必ず質問については回答するとともに、改善点があれば検討した。授業の双方向性を保つためにできるだけ、授業時に必ず質問をし、回答を求めた。 3）期末アンケート結果から見た今後の課題 “受講生の自己評価についての質問”において、“授業に集中し、真剣に取り組んでいる”について2名の学生以外が“そう思う”以上と回答し、授業学修時間は、すべての学生が2時間以上であった。管理栄養士の国家試験の科目であるため、これからも学修の重要性を説明していきたい。授業評価では、“そう思わない”以下の回答が、6から18%の範囲で認められ、これまでとほぼ同様な結果であった。一部の学生において、授業の満足度の低い傾向にあり、どのように改善を行うか、課題である。一方、アンケートの回答を複数回促したものの回答率が今年も低かった。	36	18	50.0%
基礎栄養学（Q4）	山岡 雅子	1）昨年度の結果を踏まえた授業改善点 昨年度の授業評価は、肯定的な回答が多かったため、今年度も基本的には昨年度と同様の授業内容とした。 2）履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 受講生を6名程度のグループに分け、授業内容に関する質問に対する回答をグループ内で話し合い発表する場を設けた。また、毎回の授業毎にグループ内でリーダーを決め、リーダーがグループの意見をまとめて発表するといった役割を行った。また、能動的学修として、学生自らが設定した健康情報に関する課題をグループで検討させ、powerpointを用いて発表を行うことで、学生の授業への積極的な参加や学習意欲の向上を高めるよう努めた。また、発表を学生同士で評価することにより、より他グループの発表内容に集中できる環境を整えた。 3）期末アンケート結果から見た今後の課題 「能動的学習機会」は肯定的な意見が多く、来年度も引き続き、学生自らが課題を設定し、グループで協力して課題に取り組み、成果発表を行う機会を設けたい。自由記述：プレゼンの準備は大変だったけれど皆の発表を聞くのは楽しかったです。テストが大変だったので、復習をしっかりとしたい。テストに関して、チェックシートから6割と仰っていたが実際は3割程度しかなく、自分が勉強した成果が出せるテストではなかった。解きがいがある勉強の成果が出せるようなテストにして欲しいと思った（教員コメント：チェックシートの問題を組み合わせで6割は出題しています）。難しい内容だったけど知識が身についたと思う。 講義形式の授業でも教員から問われた質問に考えて答えることでグループワークにも集中しやすい。教室で机が中心に向かって囲われたところのため、後ろに人がいる不快感がなく快適な上に集中して授業が受けられたため非常に嬉しかった。	36	17	47.2%

【 前 期 】

- 授業科目の概要 生物資源科学部専門科目
- 授業科目の名称 担当教員コメント欄参照
- 回答数 855
- 回答率 23.9%

【 総 評 】

授業評価アンケートの回答率については、昨年の前期 19.8%、後期 12.2%と比較すると若干の向上が見られてはいるものの、他学部の回答率と比較するとまだ低い値となっている。アンケートの回答率については学生への呼びかけを強化するなど、向上に向けた取り組みを継続して実施してゆく必要がある。

設問への回答結果については、昨年と大きな変化はなく、ほとんどの項目で「4.強くそう思う」および「3.そう思う」の肯定的な回答が約 9 割であり、今期も概ね良好に授業等が進められていることが読み取れた。そのうち、「Q1 私はこの授業に集中し、積極的に取り組んだ。」については 98%の学生が「強くそう思う」または「そう思う」と自己評価していた。また、「Q6 この授業の目標とする力が身につく」についても 92%の学生が肯定的な回答をしており、回答した学生の授業や学修に積極的に取り組もうとする姿勢と、学部教員の授業や学習支援への積極的な取り組みが強く感じ取られる結果であった。今後も授業を含む学生への指導などの取り組みを継続して、良好な状態が維持されるよう務めたい。

一方、学生の授業外での取り組みについての設問「Q2 私がこの授業に関連して行っている授業外学修時間」については、週に 1 時間あるいは 30 分未満との回答が最も多くなっていた。授業外での学修を効率的に行うように働きかける措置が必要と思われた。また、「Q4 この授業では能動的学修機会がある」については「4.強くそう思う」および「3.そう思う」と回答した学生の割合が他の項目と比較して 63%と低かった。座学の科目については、能動的な学修方法をより取り入れるなどの工夫を進める必要があるが、生物資源科学部のカリキュラムには、いずれの学科/コースにおいても「能動的な学修」を主体とする実験系科目が多数含まれている。座学と異なり、実験系科目は実験室等で実施しており、アンケートの回答が得にくいことも関係していると思われるが、本設問において肯定的な回答が比較的低かったことについては、実験系科目からのアンケートの回答が少ないことも影響していると考えられ、アンケートの回答率の向上によって本設問への回答も相対的に改善されるものと考えられる。

■学部・学科	生物資源科学部	■受講登録者数	3,576
■科目名	生物資源科学部専門科目	■回答者数	855
		■回答率	23.9%

■設問別評価集計

アンケート設問内容		強く そう思う	そう思う	そう 思わない	全くそう 思わない	当該 科目区分 平均値
		評価4	評価3	評価2	評価1	
Q1	わたしはこの授業に集中し、真剣に取り組んだ。	361 42.3%	446 52.2%	38 4.4%	9 1.1%	3.36
Q2	わたしがこの授業に関連して行っている授業外学修（課題,準備,復習等）時間。（1週間の平均）※	146 17.1%	316 37.0%	340 39.8%	53 6.2%	2.65
Q3	この授業では授業時間外に取り組むべき課題が示されている。	282 33.0%	427 49.9%	114 13.3%	32 3.7%	3.12
Q4	この授業では能動的学修機会がある。	207 24.2%	329 38.5%	228 26.7%	91 10.6%	2.76
Q5	この授業の課題の内容・量は適切である。	275 32.2%	484 56.6%	70 8.2%	26 3.0%	3.18
Q6	この授業の目標とする力（知識や技能など）が身につく。	306 35.8%	480 56.1%	48 5.6%	21 2.5%	3.25
Q7	この授業の教材（教科書・資料など）・教具（アプリ・ファイルなど）は適切だ。	327 38.2%	467 54.6%	39 4.6%	22 2.6%	3.29
Q8	この授業の内容に関してさらに学びたい。	265 31.0%	448 52.4%	106 12.4%	36 4.2%	3.10
Q9	この授業での学修活動（発言や提出物など）に対して必要な支援を得ている。	269 31.5%	492 57.6%	64 7.5%	29 3.4%	3.17
Q10	総合的に判断して、この授業に満足している。	293 34.3%	474 55.5%	61 7.1%	26 3.0%	3.21

※平均時間数の評価

2 単位科目：4 時間以上…4 / 2 時間以上 4 時間未満…3 / 2 時間未満…2 / 全くしていない…1
1 単位科目：1 時間以上…4 / 30 分以上 1 時間未満…3 / 30 分未満…2 / 全くしていない…1

■設問別科目平均の範囲と中央値

平均の範囲（当該学部・学科科目）					
最小値	25%点	中央値	75%点	最大値	標準偏差
2.64	3.24	3.33	3.56	3.82	0.41
1.75	2.50	2.68	2.95	3.66	0.65
2.30	3.00	3.29	3.50	3.84	0.52
2.13	2.56	3.00	3.50	3.73	0.55
2.32	3.00	3.25	3.39	3.84	0.48
2.46	3.03	3.33	3.50	3.80	0.44
2.46	3.10	3.33	3.47	3.82	0.46
2.25	3.00	3.23	3.45	3.80	0.50
2.36	3.00	3.25	3.34	3.75	0.42
2.41	3.00	3.29	3.45	3.77	0.44

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
数学ⅠQ1	岩田 貴樹	アンケート自体の回答は前向きな評価が多く（設問10の「総合的に判断して、この授業に満足している。」では83%が「強くそう思う」「そう思う」であることから、現在の授業内容・形式を大きく変える必要はないと判断している。アンケートにあった自由回答については、（要約すると）「第一クォーターは一人暮らしの雑務が多く、本科目に学修が不十分となった」ため「1年第一クォーターの時間割を見直してもらいたい」というものがあった。これについては、当方では如何ともし難く、他部署での対応をお願いしたい。また、「授業時間が90分を超えている」という指摘もあったが、これについては、「オーバーした分は教室外での学修分」と説明しており、その分は学修しなくてもいいとも伝えている（但し、1コマ当たり計30時間、この科目の場合は2コマなので60時間の教室外学修を何らかの形で行う旨も伝えている）。この点は強調して伝えたつもりであったが、それでも不十分であったようなので、来年度以降、さらに強く伝えるように努める。	176	59	33.5%
数学ⅡQ2	岩田 貴樹	アンケート自体の回答は前向きな評価が多く（設問10の「総合的に判断して、この授業に満足している。」では93%が「強くそう思う」「そう思う」であり、コメントも（コメント数自体はあまり多くないが）肯定的なものである）、現在の授業形式から大きく変える必要はないと考える。「昨年度からの授業改善」としては、回によって教室で授業を行うと共にそれをオンラインで同時配信することを行い、またその録画もOneDriveに上げることとした。また、授業内で簡単な選択形式の設問を出し、その場でオンラインで解答してもらうことで受講学生の理解度を把握するよう試み、それに基づいて授業内容の微調整を試みた。試験終了後にアンケート回答する時間を設けたにも関わらず、回答率があまり高くない（43%）ので、回答を促す一層の努力が必要と感じている。	62	27	43.5%
化学ⅠQ1：地域資源開発学科	原田 浩幸	学生の理解度を深めるために、演習の時間を多くとるようにした。そのため従来の内容から範囲をセレクトした。 テストの反映では効果あったものと判断した。	44	8	18.2%
化学ⅡQ2	小関 良卓	①昨年度の結果を踏まえた授業改善点 今年度から講義を担当しているため該当なし。 ②履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 講義終了後のFormsにより質問を受け付けた。講義のスピードや難易度から講義室の空調まで意見が寄せられ、適宜改善した。 ③アンケート結果から見た今後の課題 講義の目標の明確化、講義内容のスライドの配布による復習のしやすさについて、ポジティブなコメントが寄せられた。 ネガティブなコメントは見受けられなかったが、回答率が低かったため、回答を促す呼びかけが必要と考える。	120	32	26.7%
生物学ⅠQ1：地域資源開発学科	谷垣 悠介	昨年度に比べ軟化させ、期末テストに加え、中間点テストも実施した。 アンケートについては回答数が少ないので、傾向を読み取れないのでコメントはできない。	58	11	19.0%
生物学ⅡQ2	齋藤 靖和	①昨年度の結果を踏まえた授業改善点（前半担当齋藤、後半担当長尾より）特に大きな変更の要望、必要性はなかったため、昨年の授業の進め方を踏襲しつつ、一部内容をアップデートするなどして授業に取り組んだ。 ②履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点（前半担当齋藤、後半担当長尾より）2コマ連続の講義となっているため、映像資料等を使う事で受講生の目先を変え、集中を促すようにした（昨年度以前より継続中）。アンケート結果からも映像資料等の使用は効果があったと感じている。引き続き、学生の興味を喚起したり、学習のサポートになるような資料を用意して対応したい。 ③アンケート結果から見た今後の課題（前半担当齋藤、後半担当長尾より）総合的に満足（強くそう思う、そう思う）という意見が9割を超えているが、今年度のコメント内容も参考に、学習内容が上手く定着するよう一層の改善を試みたい。 ○担当教員へのメッセージに対する回答 (1)「試験のねらい」を複数回説明したので理解いただけたと思っておりましたが不十分でした。次年度はさらに丁寧に試験開始直前にも出題意図を改めて繰り返し説明します。(2)ネット上の情報だけでは満足できないとする姿勢がとても重要だと思います。古い書籍では現在では否定された学説等もありますので新しい書籍や新しい情報を取り入れる必要がある一方で、古い書籍からは基本となる研究への考え方や、知識がどのように積み重ねられてきたかが分かるなどの利点もあります。ネットの情報も新旧書籍からの情報もどちらも数多く読み込み、最新情報と古い情報を対比することで理解がより深まり、情報を批判的に読み解く姿勢も身に付くと思います。	152	35	23.0%
有機化学Q1：地域資源開発学科	山本 幸弘	回答率が低いので何とも言えないが、適宜内容はアップデートしながら同様な授業スタイルで進めてゆきたい。 なお、今回、有機化学に不慣れと思われる学生が毎回質問に来てくれて、最終的に期末テストで最高点を取得した。 より学生と対話しながら進めると、授業内容理解につながると感じた。	23	2	8.7%

■担当教員コメント（専門科目） 生物資源科学部 令和7年度前期

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
微生物学Q2：地域資源開発学科	馬淵 良太	昨年度は、アンケートの回答率が非常に低く、授業に対する評価を客観的に考えることが困難であった。本年度は、講義の最終日にアンケートへ回答する時間を設け出来る限りアンケートに答えてもらうように協力を促した。その結果、回答率84%となり回答率が大幅に向上した。ほとんどの設問で「強くそう思う」「そう思う」は、回答者のうち9割程度でありおおむね授業に対して肯定的な評価となった。しかしながら「そう思わない」「全くそう思わない」の評価も10%前後あったため、学生の意見を吸い上げ来年度の改善に活かしたい。	25	21	84.0%
生態学Q2：地域資源開発学科	荻田 信二郎	今後も適切に講義を工夫する。テスト実施の内容を事前とりまとめさせているが、説明等を改善する。	29	1	3.4%
植物生理学Q1：地域資源開発学科	荻田 信二郎	受講していただきありがとうございます。講義内Formsで頂いたコメントや、本アンケート結果を参考に授業改善に努めます。 本講義は学部共通科目2年次配当で、専門分野学習の基礎となる知識を身に着ける目的がありますので、指定教科書内容の理解は必要となります。そのため教科書内容以外の話題提供、論文やデータベース検索実習などで主体的に学習に取り組んでいただける様、サポートしております。 また、専用Teamsを組んで情報共有していますので、今後もサイト内に蓄積した情報は学習に役立てていただければ幸いです。 各回のFormsに質問コーナーを設けております。こちら解説や運用について今後改善していきたいと思います。	34	15	44.1%
食品資源フィールド科学演習Q2前期集中夏季	朴 壽永		23	2	8.7%
基礎園芸学Q1	藤田 景子	能動的な学修を適切に指示できていなかったので、来年度は明確に示すように心がける。また、コメントで「去年の実習や講義、高校生物の知識の延長線の内容が多く面白かった。」とあったので、他の授業との関連をより意識しながら講義を行うようにする。	46	10	21.7%
植物発生制御学前期	荻田 信二郎	今後も適切に講義を工夫する。	2	1	50.0%
基礎食品学Q2	山本 幸弘	設問1, 3-10の結果から、授業内容・方法については、今後も同様に対応してゆきたいと思う。ただし、設問11でのコメントから、改善の余地もうかがえる。たとえば毎授業に実施している振り返り用小テストの意味をしっかりと説明することが必要と感じたし、教員と学生との双方向の授業となる工夫も必要であると感じた。	79	9	11.4%
食品流通学Q1(2019以前農産物貿易論読替)	村田 和賀代	毎週回収するコメントと配布により、学生相互で着眼点を参照することができる。	10	3	30.0%
農業経営学ⅠQ2	朴 壽永		44	15	34.1%
地域商品開発論前期(2019以前バイオ商品開発論読替)	村田 和賀代	様々なものの見方を知ることができたと思います。	38	6	15.8%
科学英語前期集中：地域資源開発学科	甲村 浩之		42	2	4.8%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
科学英語前期集中：生命環境学科	山下 泰尚	専門英語では、当該分野の最新かつ高インパクトファクターの英語総説を題材にした。この理解のためには、専門英語の英単語の知識を得るのみならず、その背景にある生殖生理学に関する理解が必要である。このため、配当学年の3年生には、英語の約を担当してもらい、その内容理解のために上級生を交えたスライド作成を行わせ、評価を行った。スライド作成は、総説内容を理解し、これを聴衆に理解しやすくまとめることや図を作成する技術、わかりやすく解説することが必要であるため、単に英語約を答えさせるのみならず、卒業研究を意識したものとした。	—	—	—
農業環境制御学Q1(2019以前 土壌肥科学読替)	古山 真一	(1) 昨年度の結果を踏まえた授業改善点：昨年度は前任の先生が行われており、本年度から担当した。授業では、パワーポイントを用いて概論を説明した後、学生にレジュメの該当箇所を音読させ、その内容を改めて解説する形式をとった。さらに、一つの答えがない事項については、学生に多様な意見を出させ、それを整理しながら考え方を伝える流れで授業を進めた。(2) 履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点：授業外での学習時間を確保することを目的として、毎週小テストを実施した。小テストの結果に加え、各授業後に実施するアンケートを参考にして授業進度を調整することで、学生の理解度向上を図った。(3) アンケート結果から見た今後の課題：学生に様々な意見を出してもらい、考え方を伝えるという授業スタイルは、実践的な農業を扱う講義ならではのものであり今後も続けていきたい。また、音読による振り返りは理解の定着に寄与していると考えられる。学生のなかには声が小さいなどの課題も見られるが、適切に声掛けを行うことで対応可能であり、この形式を継続していきたい。	31	26	83.9%
総合防除管理学Q1	甲村 浩之	総合防除管理学の授業評価のアンケート回答数・率は22人中、19人で、回答率86%と高い。最終日のプレゼン発表日に時間を取って回答いただいたこと、農食分野に進むことを前提に熱心に学習する学生が多かったことが回答の高さに表れている。ただ、多くの質問に対し、「そう思わない」とする学生が2名程度いたことから、授業外学修をほとんどせず、ただ履修していた学生もおり、彼らの学修意欲を十分引き出せなかったのが少し残念である。	22	19	86.4%
植物組織培養学Q1	荻田 信二郎	受講していただきありがとうございます。講義内Formsで頂いたコメントや、本アンケート結果を参考に授業改善に努めます。本講義は地域資源開発学科の学科専門基幹科目で3年次配当です。他学科、コースからの履修も可能ですので、専門分野の異なる学生諸子に植物組織培養の具体的な事例を理解できる基礎知識を身に付けていただく様、教材や外部リンク、論文を専用のTeamsにて共有しております。授業の連絡はポータル配信でなくTeamsで統一している旨、当初ガイダンスやシラバス上で説明しているところですが、メンションやリマインドなど工夫して連絡等改善したいと思います。発表につきましては作成時の指示に事前提出していただいたスライドを一次評価して、評価の高い方を選抜して発表する旨、発表すること（選ばれること）を前提として準備することを説明しておりました。当日授業開始直前に発表者を公表する形になりましたが、この点は今後の対応を検討させていただきます。	81	13	16.0%
植物病理学Q1	安藤 杉尋	初年度のため昨年度からの改善点は該当なし。期間中に小テストを行い、受講者の理解度をモニターした。その結果、期末試験の平均点が高く、理解度は高かった一方で試験の難易度は検討の余地があると思われた。アンケートの結果、回答率は47.5%であったが、試験の前の時間に回答時間を10分以上とったが半数は回答しなかったのは残念だった。クォーター制で次の時間が試験だったので、その時間も試験勉強していた可能性がある。次年度は工夫したい。総合的には満足している学生が90%を超えていたので概ね良好であったと思われる。アンケートでは授業外学習時間が少ないようだった。今年は毎回授業の最後に小テストを行ったが、一部レポート提出などに変え、取り組む課題を明示するように次年度は改善する。また、能動的学修機会が少ないという評価だった。59名とやや大人数の講義だったこともあり、一方的な授業になってしまった点は反省し、次年度は事前に前回の授業質問を受け付けるなどの双方向要素を取り入れたい。	59	28	47.5%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
蔬菜園芸学Q2	甲村 浩之	履修学生には各自回答するようにと伝えていたものの3名の回答しかなく大変少なかった。昨年は回答のための時間をとり、40名以上、約60%の回答率だったが、今年は授業時間的に余裕がなく、回答時間を取れなかったことが少なかった原因と思われる。また、自主的に自分や後輩のために授業評価をしていることを理解できていない学生が増えてきたことも考えられる。回答した3名はいずれも熱心で、授業の内容、量には総じて満足してくれているようである。しかし、定期試験時の対応についても指摘もあり、今後よく考慮していきたい。	73	3	4.1%
果樹園芸学Q2	藤田 景子	アンケートの回答者が少なかったが、全員から高い評価を得ていた。来年度も引き続き同様な形式で実施していきたい。	90	2	2.2%
次世代農業学Q2	谷垣 悠介	今年から教員をもう一名加え、実際の施設園芸に近い形での実習を行った。 センサ類の構築から設置までも行い、生育と環境の関係性を安易に見れる形を用いた。 本来であれば、植物工場での実習であったが、今年度は、工場のメンテナンスと授業期間が重なり、温室での実施となった。 実施時期がQ2であったことから、真夏での作業となり野菜栽培には不向きだったので、次年度以降は植物工場の栽培日程を調整し、植物工場での実習が中心となるように組み直す予定である。	2	0	0.0%
食品化学Q1	山本 幸弘	回答率が低いので何とも言えないが、適宜内容はアップデートしながら同様な授業スタイルで進めてゆきたい。	99	12	12.1%
食品分析学Ⅱ Q1	山本 幸弘	回答率が低いので何とも言えないが、適宜内容はアップデートしながら同様な授業スタイルで進めてゆきたい。	23	2	8.7%
食品加工学Q2	吉野 智之		43	32	74.4%
農業経営学Ⅱ Q1	朴 壽永	回答者全員が受講効果に関する質問項目において、「強くそう思う」「そう思う」と回答しており、満足度が非常に高い。次年度もこれらの評価結果が継続できるようにしていきたい。	16	9	56.3%
フードシステムマネジメント Q2	村田 和賀代	1回目の講義で説明した通り、1単位の授業科目は45時間の学修が必要。この講義は、15回講義で2単位であるため、90時間の学修時間が必要です。これを満たすために、1回90分の講義のほか90分の予習・復習をしてください。（参照： 「大学設置基準」第21条） レポートの序論では、論ずるテーマの背景を述べる必要があります。アカデミック・ライティングの教科書を活用してレポートを構成してください。	40	9	22.5%
アグリツーリズム論Q2	上水流 久彦	昨年度は文献発表が十分に効果ができる形でできなかったが、今年度は人数も少ないことから各個人の感想や質問に答えることができるようになり、その点は良かった。また、今年度は実際にアグリツーリズムを実践している方をゲストに招くこともでき、その点も改善できた。学生発表においては、学生なりに工夫した発表内容であり、こちらに刺激もあった。庄原キャンパスの教員も聴講に来てくれ、コメントをしてくれるなど学生への気づきを広げることができた。	5	4	80.0%
6次産業政策法律論Q1(2019以前6次産業政策論読替)	朴 壽永		25	18	72.0%
地域ブランド(商品開発)実習前期	村田 和賀代	講義の内容を卒業論文に繋げて学修を続けることを期待する。	8	1	12.5%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
化学ⅠQ1：生命環境学科	大竹 才人	①昨年度の結果を踏まえた授業改善点 教科書に忠実に沿った内容で進めたが、伝わりにくいところがあったようでした。理解を促しながら進めるように改めた。 ②履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 板書は要点に絞り、詳細は教科書に委ねて解説を中心にを行った。 ③アンケート結果から見た今後の課題 一定の効果があったように思われる。引き続き、この方向性で改善を行いたい。	110	72	65.5%
生物学ⅠQ1：生命環境学科	金岡 雅浩	本講義のアンケート回答者数は112人中69人で、回答率は61.6%であった。 本講義に対して、「総合的に判断して、この授業に満足している」との問いで、「強くそう思う・そう思う」は合計99%と、学生からの満足度は高い講義ができたと自負している。 講義は、冒頭の約20分は、前回の確認テストの解答解説および前回の講義での質問に対する解答、質問内容をみて理解度が足りないと感じたところの再解説、質問から派生して時事ネタを取り上げるなどして、復習および発展的学習の時間に充てた。次の約60分でその日の内容を講義し、最後の10分で確認テストをおこなった。 学生からは毎回30～40程度の質問が寄せられ、それらの回答には6000～8000字程度を要した。水曜日・木曜日と連続の講義なので、水曜日の講義の質問を翌日までに全て答えるのは正直言ってかなりの労力であったが、質問に全て答えることで学生が質問しやすい雰囲気を作れると考え、毎回全ての質問に返答した。 アンケートの自由記述では、「学生の数々の質問を積極的に収集し、答えてくれ、生物の仕組みや生物学の理論に興味を持てた」「生徒からの質問に全て答えてあり、質問がしやすい授業なので、興味を持つことができた」などと、好意的な意見が多く寄せられた。そのため、質問への返答は、今後も続けていきたい。 確認テストについては、「授業の良い復習になった」という意見の他に、「時間をもう少し長くしてほしい」という意見もあったので、問題の内容を吟味して10分でできるように調整することが今後の課題である。	112	71	63.4%
有機化学前期：生命環境学科	青柳 充	解答数が少なく十分な評価とは言えないが、概ね、予習・復習・質問・討論を15回繰り返した点が評価されていると考えている。 討論のような能動的学習に低い評価があった点は、毎回行っていた時間差ディスカッションが認知されていない／参加していないケースがあったことを意味しており、非常に残念であり、参加を促す工夫が求められている。その議論には配点があるが、その得点が極端に低い一群の受講者があり、毎週のアナウンス、Teams、CampusXの通知、講義冒頭のディスカッションの解説が全く響いていなかったことを受け止め、次年度には改善を行う（物理的にQRコードを配布して通知するなど）。	66	5	7.6%
生態学前期：生命環境学科	五味 正志	アンケートの回答者が少なかったため、評価を解釈するのが難しいですが、概ね良かったのではないかと思います。	76	2	2.6%
植物生理学Q1：生命環境学科 (基礎植物生理学読替)	福永 健二	1名からすべてにおいて満足という回答がありコメントは特になかった。問題なしということであろう。	47	1	2.1%
物理学ⅠQ1：生命環境学科	小林 謙介	予習と課題、質問の時間を設けてくれ、物理学への理解が深まったと思う。 一方向的な取り組みが、少しでもお役に立てたようでしたらよかったです。 質問を多く受け付けてくださったことが私にとっては一番ありがたかったです。ありがとうございます。ただ、授業動画などの内容は教科書を読み上げているものが多く、理解の促進にはあまり役に立たないかもしれないと思いました。自分の勉強で良かったなと思ったことなのですが、図書館にある入門者向けの各物理学分野（「古典力学」や「流体力学」など）をテーマにしている本を副読本のように使いながら、教科書を読んだり演習に取り組んだりすると理解が深まりました。 一動画については、確かに教科書を読み上げている部分が多いので改善を検討できればと考えます。 教科書は1つの説明の仕方であるので、それ以外の本を読んでみていくのはとても効果的な学習です。 声が小さくて聞こえにくい時があります。マイクを使用しているときも聞こえにくい時があるので、もう少し大きい声で話していただけると幸いです。 声が小さくて聞き取りにくいときがあった。例題をやる時間をとってすぐに解説してくれるのは理解度が深まってよかった。 →マイクについては、米村の方面と思いますが、確かにマイクの使い方が下手で改良を検討できればと考えます。 物理を高校でやっている人との差が大きいと思うので、習熟度別でやっていただけると良いと思いました。 →教員側もこれが理想と考えています。教員の確保の問題にもなるので、すぐに対応はできないかもしれませんが、検討できればと考えます。	113	45	39.8%

■担当教員コメント（専門科目） 生物資源科学部 令和7年度前期

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
物理学ⅡQ2：生命環境学科	八木 俊樹	例年、物理Ⅱでは、高校での物理履修者と非履修者で、予備知識に大きな差があり、講義の進め方にかなり気を使う必要があることを実感している。そのような中、広い履修範囲を十分理解してもらえるように講義するには、時間があまりにも足りない。多くの方に、ある程度は理解してもらうにはどうすればよいか、毎年の課題となっている。今年度は、履修予定範囲すべてを限なく講義することはやめ、履修範囲のうち、基礎の基礎を講義しつつ、それを理解する上で必要な演習問題を講義内外で解答させるようにした（つまり、宿題として解いてもらった）。その際、個人の解答をなるべく丁寧に添削して、理解のポイントを伝えた。アンケート結果を見ると、これらの点はある程度、機能したようだが、それでもまだ「わかりにくい」というコメントもあった。来年以降、やり方の工夫をさらに重ねたい。期末テストに対するコメントとして、「事前に勉強しても解けない」という感想があった。講義内外で出したものと同じ問題ではないにしても、図をよく見て工夫すれば解くことはできるような問題を作成している。その工夫こそが重要である。数理系分野では、解答の過程も評価している点に留意いただきたい。	41	14	34.1%
物理学実験前期	米村 正一郎		29	2	6.9%
地学前期集中	山崎 博史	アンケート回答数は1／55で、その結果についてのコメントは差し控えたい。	55	1	1.8%
地学実験前期集中夏季	吉富 健一	昨年度、それぞれの内容の実施にかかった時間などを記録した上で、今年度のワークシートの改善につなげました。授業中も机間巡視などを行い、課題点や不明な点については耳を傾けるよう努めたつもりです。それでもまだみなさんの学力や既習事項にこちらの想定と開きがあるようなので、来年度のワークシートをさらに修正を行なっていく予定です。	28	0	0.0%
生命環境統計学Q1	橋本 温	おおむね良好と思われるが、指摘のあった事項については教員間で共有して改善したい。	127	85	66.9%
生命環境統計学演習Q2	五味 正志	アンケートの回答者が少なかったため、評価を解釈するのが難しいですが、概ね良かったのではないかと思います。	109	4	3.7%
生物化学前期	八木 俊樹	7名の教員によるオムニバス形式の講義となっており、教員間で講義の進め方に違いがあった。複数教員の目線に立った講義という意味で、学生にとって、各回、目新しさを感じることが多かったと思う。一方、この、講義形式は対応しにくいと思っている学生もいたと聞いている。それも踏まえ、次年度は、学生がより主体的に学修に取り組むように工夫し、理解度がより深くなる講義となるようにしたい。	89	6	6.7%
物理化学Q1	内藤 佳奈子	アンケートの結果から、真摯に取り組める授業スタイルで専門知識を身に付けられるように進めることができたのではないかといえる。毎回の講義後に確認問題を明示し、授業内容の理解度を深め、次回の授業始めに解説することで、授業内容の理解度を高める工夫を施した。また、毎回の演習問題にてクラス全体の理解度と授業の方向性を確認しながら進め、中間テストを実施することによって、範囲内容の理解度を学生自らも確認することができ、やる気を引き起こすことができたといえる。これにより、設問1,5～7,9,10について肯定的な結果が得られたものと思われる。とくに、設問7と9では100%の肯定的意見を得ており、準備した教材・教具、受講生への必要な支援を提供できたと確認できた。設問3,4,8の結果から、授業中の能動的学修や授業外学修の機会を如何に取り入れることができるのか要検討し、また興味を持って自主的に学習できるように授業内容の改善と更なる工夫を凝らした授業進行に努めた。	87	9	10.3%
専門英語セミナー前期集中	山下 泰尚	専門英語セミナーでは、当該分野の最新かつ高インパクトファクターの英語総説を題材にした。この理解のためには、専門英語の英単語の知識を得るのみならず、その背景にある生殖生理学に関する理解が必要である。このため、配当学年の3年生には、英語の約を担当してもらい、その内容理解のために上級生を交えたスライド作成を行わせ、評価を行った。スライド作成は、総説内容を理解し、これを聴衆に理解しやすくまとめることや図を作成する技術、わかりやすく解説することが必要であるため、単に英語約を答えさせるのみならず、卒業研究を意識したものとした。	96	6	6.3%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
生理学前期	山下 泰尚	昨年度の結果を踏まえた授業改善点 昨年度に続き、講義資料を事前に配布すること、講義資料はあくまでも資料であり、これに自分で解説を入れることにより完全な資料となることを考慮して、講義スライドを作成した。これに加え、講義の特性上、生命の反応の生理学的なメカニズムを理解しやすいようにできるだけ図を多用し、これに書き込むように講義では促した。中間試験および定期試験では、上記講義資料をもとに体で起こるメカニズムを図示して説明させるテストを行い、理解して覚えることをの重要性を示すような定期試験を心がけた。上記の方法により、生物がなぜ外界からの刺激により様々な生理反応を生じるのかが体系的に理解させることができる程度できたのではないと思われる。コメント欄には「スライドがわかりやすかった」などの意見があり、今後も授業の改善のためにこの講義方法を踏襲する予定である。しかし、一方で、課題を課すという点においては改善が必要であると感じたことから、次年度の講義においては講義で学んだことを定着させるための課題についても取り組み、多視点からの学生評価を心がけたい。	88	3	3.4%
分子生物学Q2	松崎 秀紀		20	3	15.0%
分子進化発生学Q2	菅 裕	＜コメントをくれた学生へ＞ 高校ではあまり触れられなかった範囲だったので、とても新鮮で面白かったです。体調を崩してしまってなかなか参加できず、申し訳ありませんでした。 高校までの知識で、生物の本当に面白い話をしたい、というのが私が意図していることです。そう感じてくれたのなら大変うれしく思います。この講義では、体調不良などやむを得ない理由で休んだ場合も、すぐに録画で復習できるようにしています。それが活用できたのならよかったです。 ＜授業評価全体へのコメント＞ 好意的な反応と受け止めている。話したい内容が多くて時間が足りず、講義時間内にアンケートに回答させることができなかった（本来講義とはそうあるべきではないか）。 アドバンストプレイスメントへの対応もあり、講義はすべて録画して後程公開したが、その情報を勝手に解釈したのか、ほとんど出席せずに録画だけで済まそうとした学生が見られたのは残念であった。この講義と直接関係はないが、知りたいことを知る、というよりも、いかに効率的に単位をとるかだけを考える学生が増加した印象である。 能動的な学びがなかったと書いていた学生がいたが、おそらくその時休んでいたのであろう。グループワークなどは、教える内容によって要不要が変わるので、他の講義との比較で評価すべきではない。	55	4	7.3%
環境社会科学前期(2019以前環境社会科学Ⅱ読替)	小林 謙介	アンケートへご協力いただいた学生さん、ご回答ありがとうございました。 ご回答内容のみからですが、概ね実施内容は間違った方向ではなかったと判断しています。 今後も、さらによりよい内容を実施できるよう、精進できればと考えています。	30	1	3.3%
衛生微生物学Q2	橋本 温	補講などの影響で講義時間の確保に追われ、アンケートの指示が不十分であった。数名の回答ではあるが、おおむね良好と感じた。次回以降アンケートの時間確保に努める。	90	4	4.4%
環境応用生物学Q2	有馬 寿英	＞有馬先生の最終レポートで、レポートに書く内容をPDF資料に示してあるが、PDFに記されていない指示がキャンパスキャンバスクロスの提出先があり、「図等を入れることが望ましい」と書かれていた。レポートの書く内容の指定は一つの資料にまとめるか、共通の指示をすることが必要であると考えているため、修正したほしい。 → こちらの不備であるため今後は気を付けるつもりであるが、判断ができないのであれば担当教員に質問してもらいたい。 ＞金岡先生の授業はとても良いと感じたが、最終レポートの原著論文という指示について、原著論文自体の意味がほんわかしており、分かりにくかったので口頭 でよいので説明してほしい。 → 原著論文は未発表の結果を報告する論文で、言葉の意味は検索するとすぐ分かるはずである。自分で調べて理解することが望ましいが、調べても分からなかったのであれば担当教員に質問してもらいたい。 ＞ゲノム編集されたトマトを食べたのは印象に残った。 味は美味しかった → ゲノム編集作物を身近なものとして捉えられるようにと、市販されているゲノム編集トマトの試食を講義に取り入れている（希望者のみの試食）。今後、作物の品種改良や病気の治療などにおいてゲノム編集の利用は増えていくと考えられるので、講義で解説したことを参考に、自分がどのように向き合えば良いかを考えて欲しい。 ＞図や画像を多用し、時事的な知見を取り入れることで、学生の興味をそそるような授業であり、非常におもしろかったです。 ＞丁寧な授業をしていただきありがとうございました。 ＞毎回の資料がとても分かりやすかった。 ＞わかりやすく、深く学べる授業だった → 今後もこのようなコメントをいただけるよう心掛けるつもりである。	50	25	50.0%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
タンパク質工学Q1	松崎 秀紀	3年生以上を対象にした専門科目であることから1、2年までの学習内容の理解や配布資料だけではなく参考となる書籍を自ら探して読むなどの高学年らしい学習習慣が不可欠な講義内容である。しかしながら、実際の受講生のレベルは多様なため、講義中に高校の学習内容にまで遡っての復習や教科書のさくいんを使って必要な情報を探す練習などを取り入れている。過去数年はこの取り組みを継続しているが、今年度の自由回答をみると現在のサポートでは不十分であり不満を感じる学生が増えているようである。そこで、次年度はgoogle formを活用した質問しやすい環境の整備や講義時間中に図書館に行き教科書や参考となる書籍を自分で探して読む機会を作るなどの工夫を取り入れることが必要だと考えている。	34	11	32.4%
発生・生殖科学Q1	山下 泰尚	山下担当分 ・昨年度の結果を踏まえた授業改善点 昨年度に続き、講義資料を事前に配布し、これに自分で解説を入れる講義スライドを作成した。また、雌雄の分化、雄の生殖生理、雌の生殖生理について、自身で作成した図を中心としたオリジナルのスライドを作成し、煩雑なメカニズムについて理解しやすいように工夫した。定期試験では、単なる穴埋め問題ではなく、上記講義資料をもとに体で起こるメカニズムを図示して説明させる、あるいは生殖医療をもとにし、この患者ではどのような問題が生じているため症状が起こるのかなどの考えさせるテストを行い、理解力を問う定期試験を作成した。一方で、課題を課すという点においては改善点として挙げられることから、次年度の講義においては講義内容を定着させるための課題作成により多視点からの学生評価を行う。 阿部担当分 ・昨年度の結果を踏まえた授業改善点 授業は、発生学（阿部）と生殖科学（山下）を同時進行し（3限-生殖科学、4限-発生学）、試験日が同日にならないように1週間ずらし、発生学の最終回はグループワーク+プレゼンテーションとしている。昨年、「テスト勉強とかぶって、プレゼンのクオリティーが低くなってしまう」「試験日を1週間ずらして頂いたのはありがたい」という反する意見があったので、今年度は最初の授業で学生の希望を調べ、その希望に合わせて実施したことで不満が出なかったものと捉えている。また、昨年出された「課題の回答内容の程度を明記してほしい」に対しては、書き出しをあらかじめ明示するなど、回答しやすいように工夫した。アンケートの問5-10は、「強くそう思う」または「そう思う」で100%であり、問11の意見もなかったことから、不満は特になかったものと理解し、次年度も基本的には同様に実施する。ただし、「この授業では能動的学修機会がある。」の設問では「そう思わない」学生が6%いたことから、考察を促すような質問やディスカッションの時間を増やす。	23	16	69.6%
植物遺伝育種学Q2	福永 健二	回答ゼロであったが特に問題なしと解釈している。ただし試験の出来は今一つであった。毎回の内容を個別にまとめて最後の試験に向けて勉強するように口を酸っぱくして伝え、わかりやすい参考書も提示したのだが残念である。この科目はどういう科目でどういうことを学ぶべきなのかという受講以前の心構えができていないように見受けられる。学ぶとはどういうことからまず講義の初めに伝えるようにしていきたい。	25	0	0.0%
高分子化学Q1(2019以前機能性物質化学読替)	青柳 充	解答数が少なかったため評価の数字を鵜呑みにはできないが、回答においては概ね目標通り、授業外学修の支援に肯定的な反応があった点を評価している。 反転授業、授業外学修のアナウンスの徹底を行っており、今後も継続する予定である。	27	2	7.4%
環境管理学Q2	小林 謙介	アンケートへご協力いただいた学生さん、ご回答ありがとうございました。 ご回答内容のみからですが、概ね実施内容は間違った方向ではなかったと判断しています。 今後も、さらによりよい内容を実施できるよう、精進できればと考えています。	35	1	2.9%
水循環管理学Q2(2019以前水環境管理工学読替)	尾崎 則篤	初年度の講義なので、手探りであった。3年生向けの講義であるため様々な前提知識があるが、どの程度身につけているかが不明であるため、そのへんを確認する意図をもって小テストなども実施した(学生には趣旨を説明している)。上水道、下水道の技術的な内容を伝達することが主の講義であったが、その前提となる、公共用水質の保全政策について、更にその前段となる水質科学の説明に大幅に時間を費やした。一方、こういった内容をスキップして上下水道の技術的な内容を説明することは、特に下水道施設においては不可能であり(下水道施設は公共用水域の保全のための施策であり、その保全政策全般を理解して初めて施設、特に処理場が満たすべき能力に関する理解が可能になる)、自年度以降はそこも含んだ、カリキュラムとしての配当も目配りし、講義内容をブラッシュアップしていきたい。	20	2	10.0%
機能材料化学Q2	大竹 才人	引き続き改善に努めていきます。	56	2	3.6%

■担当教員コメント（専門科目） 生物資源科学部 令和7年度前期

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
大気環境科学Q1	米村 正一郎	大気環境科学のアンケート結果は、どの項目もおおむね普通の結果である。また、記述はなかったので、詳細はよくわからないところがあった。しかしながら、今後授業の改善に向けて、以下の2つの観点が考えられる。 ◎授業内容の改良 多少高度な内容も入れているが、学生にとっては大気系の講義を聞くのは初めての事であるため、高度な内容については、大学院講義「大気環境学」に回すなどする必要がある。また、主に、本授業は大気化学、大気物理（気象学）の内容の両方を入れ込んでいるが、気象学の方は物理現象の理解が必要で、式が多く出てくるので、授業内容の理解にはより工夫が必要である。 ◎授業の運営方法に関する改良 授業後、formsアンケートで授業内容の復習内容と行っている。しかし、授業内では、学生との双方向の情報交換については、あまり企画が練られていない。 ・知識習得科目でもあるので、授業資料のキーとなる用語について、穴埋めにして授業中に記させるなどした工夫が必要であると考えている。 ・formsについては、まだ充実しているとは言えないので、より改良を行っていく必要がある。 以上ではあるが、過去2年管理職務を担当していたため、滞っていた内容である。本年度も担当教員の授業負担がかなり大きいため、今後本授業を充実できるかは、どれだけ本授業の準備に時間を確保できるかにかかっている。	39	4	10.3%
応用生命科学実験（生命科学コース）Q1	岡田 守弘	アンケートの評価は概ね好意的であった。特に、この授業の目標とする力（知識や技能など）が身につくという質問に対しては、88%が強くそう思うと回答しており、一定の教育効果があったと考える。 また、総合的に判断して、この授業に満足している、 に対しても、88%が強くそう思うと回答しており、実習が学生の成長につながったと考えられる。 授業内で教授側から能動的な質問がある為、自主学習に繋がりがやすい。というコメントがあり、双方向の授業を学生も求めていることが強く示唆される。	53	16	30.2%
応用環境科学実験（環境科学コース）前期	五味 正志	アンケートの回答者が少なかったため、評価を解釈するのが難しいですが、概ね良かったのではないかと思います。	54	2	3.7%

【 後 期 】

- 授業科目の概要 生物資源科学部専門科目
- 授業科目の名称 担当教員コメント欄参照
- 回答数 784
- 回答率 23.5%

【 総 評 】

授業評価アンケートの回答率について、昨年度後期の 12%からは改善する傾向にあるものの、今年度前期の 23.9%とほぼ同様の回答率にとどまった。他学部の回答率と比較するとまだ低めの傾向にあることは否めず、改善の必要はあるものと考えられる。生物資源科学部においてアンケート回答率が低くなる傾向であることの要因の一つとして、講義系の科目については 50%以上の回収率の科目が多いが、本学部の特徴である実験、実習、セミナー系科目において低い回収率となっている傾向が確認できる。各担当教員へのアンケート回答率向上への働きかけや学生のアンケート回答への誘導については引き続き学部にて積極的に対応して行くが、回答率の低い実験、実習、セミナー系科目については、その実施形態(時間内にアンケートを組み込みにくい)や実施時期(集中型や学期途中で終了など、アンケートの回答期間でない時期に終了することが多い)等、アンケートの実施方法をより回答しやすい形態に変更するなどについて、全学的にもご検討いただきたい。

アンケートの回答内容については、Q2 と Q4 を除く全ての設問において「強くそう思う」または「そう思う」というポジティブな回答が 90%以上となっている。これは、前期と同様に回答した学生の授業や学修に積極的に取り組もうとする姿勢や、教員の授業や学習支援への積極的な取り組みが継続的に実施されている様子が強くうかがわれるものである。一方で、Q4 の能動的な学習についてはポジティブな回答が 73%と若干低めの値となっている。これは、能動的な学習が求められる前述の実験科目などの回答が加わることで大きく改善されるものと考えられる。また、Q2 の授業外学習への取り組み時間についても、同様にレポート課題などの多い実験系科目の回答率の向上で改善する可能性もあるものの、講義系科目を中心に、授業等の理解度の向上を目指して積極的に取り組むような働きかけを強めて行きたい。

■学部・学科	生物資源科学部	■受講登録者数	3,331
■科目名	生物資源科学部専門科目	■回答者数	784
		■回答率	23.5%

■設問別評価集計

アンケート設問内容		強く そう思う	そう思う	そう 思わない	全くそう 思わない	当該 科目区分 平均値
		評価4	評価3	評価2	評価1	
Q1	わたしはこの授業に集中し、真剣に取り組んだ。	318 40.6%	441 56.3%	21 2.7%	4 0.5%	3.37
Q2	わたしがこの授業に関連して行っている授業外学修（課題、準備、復習等）時間。（1週間の平均）※	124 15.8%	297 37.9%	307 39.2%	56 7.1%	2.62
Q3	この授業では授業時間外に取り組むべき課題が示されている。	256 32.7%	429 54.7%	84 10.7%	15 1.9%	3.18
Q4	この授業では能動的学修機会がある。	242 30.9%	336 42.9%	153 19.5%	53 6.8%	2.98
Q5	この授業の課題の内容・量は適切である。	275 35.1%	447 57.0%	51 6.5%	11 1.4%	3.26
Q6	この授業の目標とする力（知識や技能など）が身につく。	282 36.0%	468 59.7%	27 3.4%	7 0.9%	3.31
Q7	この授業の教材（教科書・資料など）・教具（アプリ・ファイルなど）は適切だ。	305 38.9%	431 55.0%	39 5.0%	9 1.1%	3.32
Q8	この授業の内容に関してさらに学びたい。	264 33.7%	442 56.4%	65 8.3%	13 1.7%	3.22
Q9	この授業での学修活動（発言や提出物など）に対して必要な支援を得ている。	266 33.9%	444 56.6%	62 7.9%	12 1.5%	3.23
Q10	総合的に判断して、この授業に満足している。	298 38.0%	438 55.9%	43 5.5%	5 0.6%	3.31

■設問別科目平均の範囲と中央値

平均の範囲（当該学部・学科科目）					
最小値	25%点	中央値	75%点	最大値	標準偏差
2.81	3.26	3.44	3.63	3.89	0.41
1.87	2.43	2.68	3.05	3.80	0.64
2.33	3.00	3.23	3.50	3.87	0.51
2.37	2.67	3.33	3.66	3.87	0.53
2.48	3.11	3.33	3.50	3.87	0.47
2.63	3.13	3.33	3.50	3.85	0.43
2.48	3.20	3.34	3.57	3.89	0.49
2.39	3.00	3.28	3.55	3.89	0.52
2.31	3.13	3.28	3.50	3.91	0.52
2.59	3.11	3.40	3.59	3.89	0.48

※平均時間数の評価
2 単位科目：4 時間以上…4 / 2 時間以上 4 時間未満…3 / 2 時間未満…2 / 全くしていない…1
1 単位科目：1 時間以上…4 / 30 分以上 1 時間未満…3 / 30 分未満…2 / 全くしていない…1

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
統計学（生物資源科学部）Q3	岩田 貴樹		158	38	24.1%
基礎分析化学Q3：地域資源開発学科	原田 浩幸		44	8	18.2%
無機化学Q4：地域資源開発学科	原田 浩幸		28	2	7.1%
遺伝学Q3	福永 健二	金岡コメント「本講義の履修登録は64名であったが、期末試験の受験者は51名であった。 アンケート回答率の分母も51名として回答率を求めると、36/51=70.5%となる。 設問1-9をみると授業の形態は概ねこれで良いと思われる。 設問4の能動的学習機会については「そう思わない」が31%と高くなっているが、講義中に演習の時間なども設けているので、学習内容を能動的に振り返る機会は十分にあると考えている。 設問11（自由記述）でも、「能動的に学習することができた」というコメントがあったのは、その証左と言える。 この講義は、1年生前期の必修科目や2年生以降の専門科目など、他の科目との連携を意識した。 設問11で、「生物学1の履修内容まで丁寧に教えられていた」というコメントがあり、教える側の意図は伝わっていたかと思う。 設問10の満足度は89%と高く、総合的に見て適切な授業と考える。 上記2点以外にコメントはなかった。 ネガティブな意見はこのようなアンケートには書かれにくいので、期末試験結果なども分析しながら、現状に満足せずより一層講義内容をブラッシュアップすることに努めたい。」 福永コメント「ほぼ上記と同じ意見であるが、福永担当部分は課題は演習問題として出し提出させることなく、解説を行った。課題を自分で考えて解説をきくことにより、真剣に取り組んだ受講生は得るものがあったのではないと思う。 講義後に質問しに来た学生にはなるべく丁寧に対応したつもりであるし、参考書なども提示した。漫然と受け身で受けているだけでは身につかないことは繰り返し伝えてつもりである。受講生が自分自身で理解不足な点について考え、自ら調べたり質問したりできるようになるのが、本来あるべきアクティブラーナーであらうと思う。」	64	36	56.3%
栄養化学Q4：地域資源開発学科	吉野 智之		27	2	7.4%
作物学Q4後期集中	荒木 英樹		79	5	6.3%
資源植物学後期	甲村 浩之	【昨年度の結果をふまえた改善点】31人中5人の回答率でした。オムニバスのもう1人の先生も書くように伝えているらしいが伸びていない。 昨年度は回答者が1名でよい評価だけだった。今年は例年通り、対面授業14回に1回グループ発表を加えた。今年度は授業の容量が適切でない（20%、1名）。満足していない(20%、1名) 学生がいたことは真摯に受け取りたい。ただ、授業内容については目標とする力身に着く(100%)、さらに学びたい(100%)とも回答しており、基本的には従来通りで進めて行きたいと考えている。	31	5	16.1%
食品衛生学Q4	馬淵 良太	アンケート回答率68.8%（88/128人）であり、次年度は回答率が向上するように促したい（履修はしているが授業に参加していない学生の人数も多いことは多少影響している）。結果は、多くの設問で「強くそう思う」「そう思う」が大半を占めており、おおむね授業の質が確保されていたと思う。設問4の能動的学修機会については、「そう思わない」35%、「全くそう思わない」11%で両方で46%もあった。実際には、ミニッツペーパーを利用した学生の質問に対する回答などを行っているため（双方向授業）、学生が能動的学修の機会がなかったと考えてしまう部分は次年度改善したい。同様の内容で実施している健康科学コースの食品衛生学のアンケートよりも否定的回答の割合が大幅に高かったため、学生への説明などで改善していきたい。しかしながら、設問10の総合的評価では、「強くそう思う」34%、「そう思う」60%で「そう思わない」5%、「全くそう思わない」1%であり、90%以上が肯定的な総合評価であった。本授業は、講義形式であり、できる限り食品衛生に関する幅広い内容を教授することが大事であるため、学びの連続性も考え、能動的学修の機会に関しては、【食品保存学3年次】で実施している。次年度はそういった学びの連続性を学生に意識させ受講する講義を選択してもらう機会も設けたい。一方、設問10の肯定的意見は、「強くそう思う」よりも「そう思う」のほうが割合が高かったため、次年度は、「強くそう思う」の割合が増えるように授業を工夫したい。自由回答では、「菌の名前を覚えることができました。特に食中毒の内容が印象に残りました。」とあり、授業内容を印象付けたのはよかった。一方、期末試験に関しては、「過去問があるのであれば提示してほしい。過去問を持っている人と持っていない人でテストの難易度が違っている」とあった。学生間での難易度を変えるようなことは全く意識していなかったが、次年度は全員にあらかじめ過去問を配布し、それをもとに学修させ、期末試験に臨めるようなことも考えていきたい。課題に関しては、「課題の量に対しメ切が早い」といったコメントが2件あった。これはクォーター制の影響もある。次年度よりセメスターでの開講であるため、この点は改善される（メ切を遅らせるではなく、毎週の課題量が半分になる）。	128	88	68.8%

■担当教員コメント（専門科目） 生物資源科学部 令和7年度後期

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
食品分析学ⅠQ3(2022以前食品分析学読替)	山本 幸弘	すべてポジティブな回答だった。 自由記述では、確認問題や振り返り資料に対する高評価があり、今後も実施する必要があると理解した。	56	3	5.4%
農業マーケティング論Q3	若林 勝史		37	2	5.4%
農業簿記後期	村田 和賀代		7	2	28.6%
畜産学概論Q3	村田 和賀代		61	3	4.9%
基礎物理学Q3	吉野 智之		17	5	29.4%
化学実験Q4：地域資源開発学科	山本 幸弘	回答率は少ないものの、すべての回答者が内容に満足していることが伺えた。 自由回答から、色の変化がわかる実験には興味が湧きやすいことが予想できるため、次年度以降も、そのような内容を維持しながら、本科目を進めたい。	44	8	18.2%
生物学実験Q3：地域資源開発学科	藤田 景子	Teamsを利用した資料の共有や事前学習の提供などを積極的に行った。昨年度は、連絡が実験の直前になったりしたので、今年度は気を付けるようにした。実験器具類の説明や安全講習をしっかりと行うようにしたため、器具や試薬の扱いがより慎重になったと感じた。アンケート結果はおおむね良好だったので、来年度も引き続き続けていきたい。	44	10	22.7%
フィールド科学Q3	荻田 信二郎	メッセージ コメントありがとうございます。 本講義は例年庄原の各団体等の方々に、庄原市の課題や魅力、取り組みを紹介して頂き、生物資源科学部の立地する庄原について学修して頂く構成となっています。また初回のオリエンテーションから説明した通り、今年度の最大の工夫として、庄原市長にお越しいただき、受講生の考えた庄原の課題解決に関する取組のアイデアを発表しました。 この内容の一部は市政の参考としてとらえて頂きました。 本講義の特色を多くの回答者にご支持頂いたと考えております。 一方で幾つかの設問に対して、講義内容、スタイルの改善や、より積極的に受講して頂く様改善を要するべきだと思われる回答を頂いております。現行の講義において1年生のほとんどが受講しており、150名近くの学生が より庄原市、備北地域に親しみを持っていただけるような工夫を導入したいと思います。	143	34	23.8%
フィールド科学実習Ⅰ通年：地域資源開発学科	甲村 浩之	【昨年度の結果を踏まえた改善】昨年の回答率は90%であり、概ね好評であった。特に実施方法は変更しなかった。また、今年度は44人中11人(25%)から回答があり、生命環境学科2年生より回答率が高かった。今年は実習担当者が1名増え、厚みを増してレポートの評価も適切にすばやく対応できた。今年度の評価では授業外学修をまったくしていない(36%)。授業時間外に取り組む課題が示されていない(18%)の2点が気になったが、それ以外は概ね良好な反応であったので、授業時間外に対応できる話をその回ごとの実習終了時点で認識できるように取り組みたい。	44	11	25.0%
フィールド科学実習Ⅱ通年：地域資源開発学科	吉野 智之		41	3	7.3%
基礎地域資源科学実験Q3・Q4	山本 幸弘	回答率は少ないものの、すべての回答者が内容に満足していることが伺えた。 次年度以降も、更新できる箇所は更新しつつ、本科目を進めたい。	44	3	6.8%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
国際異文化農業体験研修Ⅰ： 地域資源開発学科	古山 真一	（1）昨年度の結果を踏まえた授業改善点 昨年度は前任教員が担当しており、本年度より担当を引き継いだ。例年、講師派遣を依頼しているJICAについては、農業分野の派遣経験者が中国地方に少ないとのことであった。そのため、本年度は授業開始の約半年前からJICAにコーディネートをお願いし、農業分野に関する講演を実施できるよう調整を行った。（2）履修者の反応を把握するために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 履修者の理解度を把握するため、レポート課題を複数回設定し、提出内容を踏まえて授業の進度や内容を適宜調整した。また、本科目は不定期開講であるため、Teamsを活用して随時連絡を行い、学生からの質問や意見を受け付ける体制を整えた。（3）アンケート結果から見た今後の課題 アンケート結果からは、本授業が学生にとって海外や国際的な農業に目を向けるきっかけとなったことがうかがえた。一方で、授業外学修時間がやや少ない傾向が見られた。通年での不定期開講という授業形態が影響している可能性はあるが、今後は主体的な学修を促す工夫を検討したい。	44	7	15.9%
国際異文化農業体験研修Ⅱ： 地域資源開発学科	谷垣 悠介	実習が3月なので特にコメントはない	41	2	4.9%
発酵工学Q3	原田 浩幸		40	6	15.0%
食品リサイクル学Q4	原田 浩幸		34	1	2.9%
食品保存学Q3	馬淵 良太	アンケート回答率は、66.7%（40/60人）であり、おおむね多くの学生の回答が得られた（履修のみで授業に参加の学生もいるため）。アンケート結果は、多くの設問で「強くそう思う」、「そう思う」が80-95%程度であったが、数%「そう思わない」、「全くそう思わない」の回答もあったため、次年度はより授業を改善していく必要がある。設問10の総合的な評価では、「強くそう思う」42%、「そう思う」48%で、90%の学生が肯定的であったため、おおむね授業の質は担保されていたと感じるが、「そう思わない」8%、「全くそう思わない」2%で10%は否定的であったため、次年度は学生からのコメントを受け止め改善をしていきたい。自由記述では、「日常生活における食品に関する知恵から、実際に出荷され販売さえる過程の保蔵方法など幅広い保蔵について知ることができました。ありがとうございました。」「勉強すればできるテストで悔しい部分もあったが、嬉しかった。」「テストの出し方が個人的には好きでした。もっと勉強しなきゃと思いました」など、授業に対する肯定的なコメントがあり、次年度も本年度をベースに学生の学修を促せる授業を構築したい。とくに「もっと勉強しないといけないと思った」というようなコメントもあり、学生の今後の学びにもつながるような授業を次年度も行いたい。しかしながら、「先生の話が回りくどすぎてわからない」という否定的な意見もあった。学問には答えがないので、こちらが出す問いに対して、幾通りの考えを提示しながら授業を進めるようにしたつもりだが、その言い回しがうまく伝わってなかった部分があると思う。次年度は、講義中のこちらの発言・発問に注意して授業を構築していく必要がある。	60	41	68.3%
国際食料生産論Q3	村田 和賀代		9	1	11.1%
農業経営戦略論Q3	朴 壽永		33	10	30.3%
流通システムとイノベーションQ4	朴 壽永		31	3	9.7%
基礎分析化学Q3：生命環境学科	小関 良卓	全体的にポジティブな回答が得られた。	112	28	25.0%
無機化学Q4：生命環境学科	西本 潤	履修登録者の14%しかアンケートに回答してくれていないので、どこまで実情を反映しているのかわからないが、結果としては良いと評価してくれているのではないだろうか。内容は、理解するよりも慣れることが大事ことが多い。学生自身で教科書の問題を解いてみるごとの方が教育効果が高いと考えているので、教員側からの具体的な支援策は考えていない。	100	14	14.0%

■担当教員コメント（専門科目） 生物資源科学部 令和7年度後期

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
微生物学Q4：生命環境学科	有馬 寿英	このアンケートでの回答率が60％程度あり、概ね良好な回答が示されていた。 総合的な判断して、回答者全員がこの講義にある程度満足していることが示されていた。 しかし、個別の設問での回答では、不満を抱いている受講者が少なからず存在している。 この講義をより良い、そして充実した内容とするために、まずはその理由等を教えていただきたい。 特に時間外に取組むべき課題と能動的な学習の機会は、グループワークでそれを求めているが、 残念ながらそれが受講者には十分伝わっていなかったことが考えられる。 自由回答欄で示されていた事項については、以下のとおりである。 > グループワークにおいて、自身の意見を他者に理解してもらう難しさを感じた。 → 今後の活動等でその経験を是非活かしてください。 > 前期のテストが難しかったので、例題が欲しかった。 → 講義の内容等がある程度理解できていれば十分に対応できたはずです。 > 微生物についての知識がほとんど無かったレベルでも、興味を持って学べるような題材選び、 教材選びをしてもらったと思いました。とても分かりやすかったです。 → 担当者としてそれを心掛けておりましたので、この回答で少しは報われました。 > 板書のある部分を空のスライドとして資料に組み込んでいただけるとメモが取りやすくて嬉しいです。 → メモ欄を設けることは、次年度からそれを検討します。	103	61	59.2%
栄養化学Q4：生命環境学科	齋藤 靖和	①昨年度の結果を踏まえた授業改善点 より興味を持ってもらえるように授業に関連する話題を複数提供した。また、授業に対する学習を促す目的で自身の学習状況を記した授業ノートの提出を求めた（前半：齋藤）。 教科書の図表だけでなく、他の資料からの関連図表も示した。教科書を書画カメラで映しながら、本文を読むなど教科書との関連を持たせながら行った（後半：吉野）。 ②履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 中間テストを行うと共に、授業ノートのチェックを行い学習の様子を確認した。履修者の学習を促進するため授業ノートの取り組み（復習含む）も評価に加えた。（前半：齋藤）。 中間テストの結果から、後半の講義、期末試験の内容とレベル調整を行った（後半：吉野）。 ③アンケート結果から見た今後の課題 アンケートの回答率の向上が必要である。例年通りの進行スピード、内容ではあったが、アンケートには授業での話すスピードが速い、授業内容が多いとのコメントがあった。初回に説明はしているが、事前に配布している資料に目を通して授業に臨むことを繰り返しアナウンスする必要があると感じている。また、クォーター科目で2コマ連続授業であったことが学生の印象（1度に学ぶ情報量の多さ）に大きく影響していると考えている。さらに毎回、授業内容に関連する「振り返り(過去問)」を配布している。解答は学生の自主性に任せており、全体の解答解説は行っていない。しかしながら、解答を必要とした(聞きに来る)学生は十人程度(履修登録者数117人)であった。R8年度より1回1コマ授業となり、授業日あたりの情報量が半減される。予習復習の余裕が増えることから授業情報量に関する声は減るのではないかと考えている。	117	19	16.2%
生命環境科学基礎セミナーQ3・Q4(A)	橋本 温		53	9	17.0%
生命環境科学基礎セミナーQ3・Q4(B)	橋本 温		55	8	14.5%
生命科学セミナーQ3・Q4	岡田 守弘	アンケートは54名中5名からの回答にとどまり（回答率9.3％）、十分に高い回収率とは言えない結果であった。オムニバス形式の授業であることから、回答意欲の喚起が難しい側面はあるが、授業改善のためにはより多くの意見を収集することが重要であり、今後は回答率向上に向けた工夫を検討したい。回答内容としては改善を求める意見が見られた。特に、研究室配属の選考基準（GPAが前期成績のみで決定される点）の変更が十分に周知されておらず、履修計画や準備に影響があったとの指摘があった。また、研究室訪問の方法や予備調査の機会についても、より丁寧な説明や回数の充実を求める声があった。一方で、「総合的に判断してこの授業に満足している」と回答した学生は80％であり、全体として一定の評価は得られていると考えられる。今後は情報提供の時期や方法をより明確かつ早期に設定し、説明機会の充実を図りたい。	54	5	9.3%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
環境科学セミナーQ3・Q4	青柳 充	4件の回答があった。最終回の講義中、講義終了後、Teamsで、リンク先を示したうえで合計3回アナウンスしてきたが残念ながら回答が少なかった。少数ではあるが解答してくれた受講生に感謝する。真剣に取り組み、自宅学修が2時間以上であり講義外の学修に繋げることができたと考えている。取り組むべき課題の提示、能動的学修機会、適切な課題量、学びとなる、支援に関して高い評価が得られていることから現在の基本的な講義設計を維持することが重要だと考えている。目標とする力が身につく、資料の適切さの面で「そう思う」が多かったため、次年度は目標の見直しと講義終了段階でのフィードバックをレポートに組み込むなどの工夫を検討したい。総合的には満足という回答であるため、現在の講義設計を維持して改善につながる変更を検討する。	49	4	8.2%
化学演習Q4：生命環境学科	柳下 真由子		130	18	13.8%
化学実験通年：生命環境学科(A)	小関 良卓	全体的にポジティブな回答が得られた。設問「この授業では授業時間外に取り組むべき課題が示されている。」に22%の「そうは思わない」と回答があった。一方、事前に実験テキストを読み、実験内容を予習することを授業時間外に取り組むべき課題として伝えてある。	54	9	16.7%
化学実験通年：生命環境学科(B)	小関 良卓	全てのアンケート設問において、「強くそう思う」、「そう思う」のポジティブな回答が得られた。	53	6	11.3%
生物学演習Q3	松崎 秀紀	このアンケートでの回答率が12%ではあるが、幾つかの傾向が示されていた。総合的な判断して、この講義に不満を抱いている受講者が少なからず存在しているため、まずはその理由等を教えていただきたい。さらに、能動的な学習は常に求めてはいたが、それが受講者には十分伝わっていなかったことが考えられる。通常で実施する講義を反転授業の一つとして捉えていただきたかったのだが、残念ながらそうはならなかったようである。自由回答欄では、「過去問から考えられる傾向と対策の方針を学べたことが印象に残っている」とあった。傾向と対策の重要性を少しでも理解する機会となったことで、それを今後の活動等で活かしていただきたい。ポータルでの配信についてはシステムの問題であるため担当者に確認し問題があれば修正する。	131	16	12.2%
生物学実験通年：生命環境学科(A)	長尾 則男		54	9	16.7%
生物学実験通年：生命環境学科(B)	長尾 則男		54	7	13.0%
物理学演習Q3：生命環境学科	小林 謙介	本年度に限り、後半において特殊な授業形態となりましたが、また、学生の皆さんにも今回の進め方にご理解いただきながら、大きなトラブルなく進められました。計算演習が多い授業ではありますが、より理解を深めるため、今後は、より主体的・能動的に取り組めるように、授業内容の改善を図ればと考えています。	14	11	78.6%
遺伝子工学Q3	奥 尚		48	5	10.4%
生命環境リスク学Q3	橋本 温	講義内容については概ねの学生が興味を持ってしっかりと取り組んでいることがうかがわれた。難易度については学生の理解度を確認しながら次年度は調整を行う予定である。	92	55	59.8%
生物反応速度論Q4	青柳 充	回答は2件であった。講義中、講義終了後、自学のタイミングで、リンク先を示したうえで合計5回アナウンスしているが回答が少なかった。その中で回答してくれた受講生に感謝する。両者とも真剣に取り組んでいるという回答があり、講義として真摯に向かってもらえたと考えられる。時間外に取り組むべき課題、能動的学修機会についても肯定的であり、内容・量の適切さ、目標としての力がつく、配布資料の適切さ、支援、今後の学びたい気持ちも高い評価を得ていることから、基本的に現在の講義設計で進めることが適切であると判断できる。総合的にも満足、と回答があり、細かい調整は行いながら、この学生の評価が継続できるよう講義を進める。	33	2	6.1%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
免疫学Q3	岡田 守弘	アンケートは57名中43名から回答があり（回答率75.4%）、「課題の内容・量は適切である」「授業の目標とする力（知識・技能など）が身につく」との問いに対して、「強くそう思う」「そう思う」と回答した学生は98%に達した。また、「総合的に判断して、この授業に満足している」との問いには、100%の学生が肯定的に回答した。以上より、本授業は当初設定した教育目標を概ね達成できたと考えられる。特に、視覚教材として活用した『はたらく細胞』の映像は、抽象的な生体防御機構の理解を具体化し、知識の定着に有効であったと評価できる。一方で、「高校生物の復習が多く、より応用的な内容を学びたい」という意見も見られた。高度なテーマも取り上げたものの、基礎内容とのバランスを再検討し、今後はより発展的・統合的なテーマを積極的に導入することで、学修意欲の高い学生にも十分応えられる授業へと改善していきたい。	57	45	78.9%
細胞生物学Q4	岡田 守弘	アンケートは47名中32名から回答があり（回答率68.1%）、「課題の内容・量は適切である」「授業の目標とする力（知識・技能など）が身につく」との問いに対して、「強くそう思う」「そう思う」と回答した学生は100%に達した。また、「総合的に判断して、この授業に満足している」との問いには、100%の学生が肯定的に回答した。以上より、本授業は当初設定した教育目標を概ね達成できたと考えられる。特に、「動画視聴によって、これまで理解が難しかったRNA干渉や腸オルガノイド形成を理解できた」との記述があり、動画教材の活用が理解の深化に大きく寄与したと考えられる。今後も、抽象的な生命現象を扱う際には、動画教材を効果的に取り入れ、理解の促進を図りたい。また、知識の暗記にとどまらず、原理や仕組みを重視した授業構成を心がけたい。	47	32	68.1%
生体機構学後期	阿部 靖之	「設問6 この授業の目標とする力（知識や技能など）が身につく。」「設問7 この授業の教材（教科書・資料など）・教具（アプリ・ファイルなど）は適切だ。」「設問9 この授業での学修活動（発言や提出物など）に対して必要な支援を得ている。」に関しては、「強くそう思う・そう思う」が100%であり、自由回答にも特に意見がなかったため、基本的には次年度も同様に行う。ただし、「設問8 この授業の内容に関してさらに学びたい。」に「そう思わない」が33%あったため、さらに応用的な思考をできるように、授業中の問いかけや課題を検討する。	18	9	50.0%
環境衛生学Q3	尾崎 則篤	初めての講義であり、内容の選択も含めて試行錯誤の面があった。考え方と、確実な知識と両方の面から教授方法のバランスをとっているが、そのバランスは試行錯誤である。あえて番所中心の講義の進行を採用したが、これは次年度も継続したいと考えている。知識面について、あえて生成AIを活用した学びの方法を採用した。技術の進展自体が講義の方法に影響を与えざるを得ず、次年度にどのような形態が要請されるかは読めないが、基本的に活用していく考えである。	47	8	17.0%
環境・無機分析化学Q4	西本 潤	履修登録者52名の内9名しかアンケートに答えてくれていない。否定的な意見を述べる人の割合がもう少し多い方が実情を表している気はするが、学生の気持ちや考えをかなり反映しているのではないかと考えている。この授業は、分析系の他の授業で話をしていない機器分析法をなるべく話すことにしており、さらにサンプリング等についても話をするので、内容が豊富である。そのため授業時間内ですべてを話すことは無理である。結果として教員が大事と思うところばかり話すことになっている。その他の関連事項は、学生自身が教科書を読むなり他の文献を調べるなどして補ってほしい。そのことを授業の初めに伝えなかったことは悪かったと思っている。それからこちらが検討しなければいけないのは、大事なことだけの話をしたため学生にとってみれば全体像が見えなかったかもしれない点である。豊富な内容を羅列する形で話をしていくと重要度をランク付けできない学生は拒否反応を示す可能性が高いとこちらは考えていたので網羅的に話すことは止めたが、来年はもう少し全体の概略を話す意識を持っても良いのかもしれない。	52	9	17.3%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
機器分析化学Q3	青柳 充	機器分析化学 19件の回答があった。 後半の講義終了時、試験試験終了時にアナウンスを行い、Teamsでも共有したことが要因と考えている。多くの回答に感謝する。 集中して受講、自学学修も2時間以上が大半出あり、授業外の支援でも概ねそう思う以上の回答であり講義設計としては伝わる内容になっていると判断している。 また学修量、目標の到達、教材に対しては評価が高く、学修支援も満足している結果が得られている。能動的学習機会に関しては半分程度であり、これは後半の講義では毎回のディスカッションがあったことから担当者によっても分かれていると考えられる。 それらを受け満足しているという回答が多数であり、講義の基本設計は十分であると考えられる。その中で学習内容に対する支援が足りないという意見も少数ながらあることから、現状設計の中で「学びたくなる」「満足する」支援の在り方について検討し、改善したい。 コメントでは具体的に前半の小テストの回答・解説への要望と、時間割変更の要望（5,6時限であったため）があった。前者は次年度改善可能であり、後者は次年度の時間割りで解決する見込みである。	42	8	19.0%
基礎生命科学実験（生命科学コース）Q3・Q4	岡田 守弘	アンケートは55名中4名からの回答にとどまり（回答率7.3%）、十分に高い回収率とは言えない結果であった。オムニバス形式の実習であることから、回答意欲の喚起が難しい側面はあるが、授業改善のためにはより多くの意見を収集することが重要であり、今後は回答率向上に向けた工夫を検討したい。一方で、「総合的に判断してこの授業に満足している」との問いに対して、「強くそう思う」「そう思う」と回答した学生は100%であり、全体として一定の評価は得られていると考えられる。今後は、より主体性を引き出す実験授業へと発展させることで、研究室配属へ円滑につながる教育体制を構築していきたい。	55	4	7.3%
基礎環境科学実験（環境科学コース）Q3・Q4	有馬 寿英	このアンケートでの回答率が10%程度ではあるが、概ね良好な傾向が示されていた。 総合的な判断では、回答者全員がこの学生実験に対してある程度満足である、ということであった。 しかしながら未回答者が90%程度いることから、現状に満足することなく、より一層の充実化を図らなければならない。 実験の基礎・基本を重視する傾向を強めるには、実験の積み重ねと繰返しが必要となるため、 実験担当者間での認識等のすり合わせをする機会を設けることも想定している。 この学生実験では、受講者に対しては常に能動的な姿勢を求めている、それを受講者全員が理解することを切に希望する。 それとともに、この学生実験が橋渡し役を担うことにも期待している。	51	5	9.8%
環境保全生物学Q3	五味 正志	受講者に対して回答数が少なかったので明確には言えないのですが、概ね良好な結果ではないかと思われます。否定的な意見があった設問4については、本授業ではグループワークなどは実施していないのでその通りなのですが、設問8について1名が否定的な回答をしていたのは少し残念でした。自由記述では、「計算問題も丁寧に解説して下さったので分かりやすかった」とありましたので、今後も丁寧な説明を心がけるようにしていきたいと思っています。	36	7	19.4%
生物地球化学後期	内藤 佳奈子	アンケートの結果から、真摯に取り組める授業スタイルで専門知識を身に付けられるように進めることができたのではないかと見える。今年度は3,4時限のクォーター制にて授業を実施しており、毎回3時限と4時限の間に確認問題を明示し、授業内容の理解度を高め、かつ専門分野における最新知見や科学動画などを授業に取り入れて興味を高める工夫を施した。また、授業時間内での確認でクラス全体の理解度と授業の方向性を微調整しながら進めた。さらに中間試験を実施することによって、範囲内容の理解度を学生自らも確認することができ、やる気を引き起こすことができたといえる。これにより、設問1, 5～8, 10について100%の肯定的な結果が得られたものと思われる。回答率が低いので正確な状況は不明であるが、設問2～4, 9の結果から、授業中の能動的学修や授業外学修の機会を如何に取り入れることができるのか要検討し、また興味を持って自主的に学習できるように授業内容の改善と更なる工夫を凝らした授業進行に努めたい。	65	7	10.8%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
生体分子構造学Q3	八木 俊樹	個別評価は、講義内容についてポジティブな内容だったが、アンケートの設問、 授業時間外の学修時間 30分未満 授業時間外に取り組むべき課題は適切に示されているか、 示されていない 授業の内容と量は適切であるか 適切でない という評価をした学生が、それぞれ1名いた。 3つ目の「量」について、少なすぎるのか多すぎるのか、判断が つかないが、本年度は、当初予定していたレポートを課さなかったため、その点で評価が下がった可能性がある。 来年度は、授業時間外の学修が進めてより深く講義内容の理解が進むように、課題やレポートを課すようにしたい。 例年、授業内でやっている、プラスチックモデルを使ったタンパク質2次構造の作成は、理解しやすいということで 今年も好評だったようである。来年度も続けたい。	31	6	19.4%
細胞・生体機能学後期(2019以前生体機能学読替)	齋藤 靖和	①昨年度の結果を踏まえた授業改善点 特に無かったため、昨年と同様のスタイルで実施した。昨年のアンケートを踏まえ、より学生が興味関心を抱くような内容・話題を増やした（前半：齋藤・後半：長尾）。 ②履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 毎回授業レポートを書かせ、授業に対する応答をチェックし、要望等があれば改善するつもりで進めたが、特に意見は出なかった。最後に次年度の授業の参考にと印象深かった授業回を尋ねた（前半：齋藤・後半：長尾）。 ③アンケート結果から見た今後の課題 15回の講義内で度々学生の反応や意見を紙媒体やオンラインで確認し、その後の授業へ反映させている。そのため、最後のアンケートに答える必要性をあまり感じていないのではないかと分析している。次年度は学生への回答協力を促したい（前半：齋藤・後半：長尾）。	21	3	14.3%
環境有機化学Q4	小関 良卓	全ての設問についてポジティブな回答が得られた。	12	1	8.3%
環境無機化学Q3	西本 潤	教員としての悩みは、答えを教えてもわかりやすく説明しても学生の学力が上がってこない、という点である。インターネットで調べれば簡単に答えらしきものが出てくるので、答えを与えられることに慣れすぎていて考えようとしていないことが原因のように感じている。発展的内容になると答えは単純で無くなることもあり、自分で考えたり詳細に調べたりすることが必要となる。考えることを促したいという思いから現在の授業形式にしている。問題はこれまで学んだことを関連付けるようにしているつもりである。興味を持って取り組んでくれることを願っている。	32	9	28.1%
フィールド科学実習Ⅰ生命環境学科(フィールド科学実習読替)	甲村 浩之	【前年度の結果を踏まえた対策】前年度の回答者は3名だったがこちらも好意的な意見に集約されていたので特に対応方法の変更はしていない。今年度の評価者も42人中6人と少なかった。授業が終わってからメールで授業評価を書くように依頼したが、定期テスト前で忙しい時期でもあり伸びなかった。実習担当教員が1名増えたので、学生へのレポート評価対応はよりしやすくなっていると考え。今年度の評価では授業外学修をしていない学生（50%）、授業時間外に取り組むべき課題が示されていないとする学生(33%)、学修支援を得ていないとする学生（17%）が気になったので対処していきたい。特に今年度はフィールドセンターの予算削減の影響でバス見学2回を2回とも削除したため、よい印象が残りがづかったように思われる。	42	6	14.3%

【 前 期 】

- 授業科目の概要 保健福祉学部専門科目
- 授業科目の名称 担当教員コメント欄参照
- 回答数 3,586
- 回答率 50.7%

【 総 評 】

学生のアンケート回答率は 50.7%であった。これは昨年度前期の 37.4%、後期の 24.3%を上回っており、上昇傾向がみられた。前期は後期に比べて回答率が高い傾向にあるが、依然として学生の 5 割弱にとどまっている。授業の終わりに回答時間を確保する、回答期間を延長するなどの工夫にも関わらず、さらなる回答率向上のための方策が求められる。例えば全科目であらかじめ決められた時間（10 分）にて“授業内での実施”を徹底することや以前行われた紙面によるアンケートを併用するなど、個々の教員判断によるオンライン収集だけでなく抜本的な工夫が必要と考えられる。

設問ごとの平均値をみると、授業そのものの評価は高い水準を維持しており、学生の授業満足度はおおむね高い。特に Q1「真剣な取り組み」（3.53）、Q6「目標とする力」（3.45）、Q10「全体的な満足」（3.45）などでは肯定的な回答が 9 割以上を占め、授業に真剣に取り組み、必要な力を身につけ、学びに満足している学生が多いことがうかがえる。

一方で、Q2「授業外学修」（2.65）や Q4「能動的な学び」（3.33）では比較的评价が低く、授業外での学修や主体的な学びへの発展に課題が残る結果となった。これらの項目では「そう思わない」「全くそう思わない」と回答した学生の割合が一定数存在しており、授業内での学びを授業外へとつなげる仕掛けづくりが今後の課題である。

総じて、授業に対する学生の満足度は高く、授業の内容や教材、教員の対応もおおむね適切と評価されている。一方で、学生の能動的な学びを促進し、授業外学修との連動を図る取り組みを強化することで、より深い学びの定着が期待される。

■学部・学科	保健福祉学部	■受講登録者数	7,078
■科目名	保健福祉学部専門科目	■回答者数	3,586
		■回答率	50.7%

■設問別評価集計

アンケート設問内容		強く そう思う	そう思う	そう 思わない	全くそう 思わない	当該 科目区分 平均値
		評価4	評価3	評価2	評価1	
Q1	わたしはこの授業に集中し、真剣に取り組んだ。	1,928 53.8%	1,624 45.3%	31 0.9%	3 0.1%	3.53
Q2	わたしがこの授業に関連して行っている授業外学修（課題,準備,復習等）時間。（1週間の平均）※	675 18.8%	1,255 35.0%	1,395 38.9%	261 7.3%	2.65
Q3	この授業では授業時間外に取り組むべき課題が示されている。	1,574 43.9%	1,738 48.5%	232 6.5%	42 1.2%	3.35
Q4	この授業では能動的学修機会がある。	1,709 47.7%	1,431 39.9%	363 10.1%	83 2.3%	3.33
Q5	この授業の課題の内容・量は適切である。	1,608 44.8%	1,871 52.2%	91 2.5%	16 0.4%	3.41
Q6	この授業の目標とする力（知識や技能など）が身につく。	1,707 47.6%	1,797 50.1%	75 2.1%	7 0.2%	3.45
Q7	この授業の教材（教科書・資料など）・教具（アプリ・ファイルなど）は適切だ。	1,739 48.5%	1,746 48.7%	85 2.4%	16 0.4%	3.45
Q8	この授業の内容に関してさらに学びたい。	1,656 46.2%	1,817 50.7%	102 2.8%	10 0.3%	3.43
Q9	この授業での学修活動（発言や提出物など）に対して必要な支援を得ている。	1,629 45.4%	1,866 52.1%	70 2.0%	20 0.6%	3.42
Q10	総合的に判断して、この授業に満足している。	1,731 48.3%	1,763 49.2%	77 2.1%	14 0.4%	3.45

■設問別科目平均の範囲と中央値

平均の範囲（当該学部・学科科目）					
最小値	25%点	中央値	75%点	最大値	標準偏差
2.85	3.38	3.55	3.67	3.96	0.44
1.65	2.47	2.73	3.00	3.85	0.70
2.48	3.19	3.41	3.55	3.95	0.51
2.48	3.11	3.50	3.71	3.95	0.49
2.59	3.31	3.43	3.55	3.96	0.47
2.67	3.31	3.43	3.61	3.95	0.46
2.54	3.33	3.46	3.60	3.96	0.49
2.65	3.33	3.43	3.58	3.96	0.48
2.64	3.32	3.43	3.54	3.94	0.48
2.67	3.34	3.49	3.60	3.96	0.48

※平均時間数の評価
2 単位科目：4 時間以上…4 / 2 時間以上 4 時間未満…3 / 2 時間未満…2 / 全くしていない…1
1 単位科目：1 時間以上…4 / 30 分以上 1 時間未満…3 / 30 分未満…2 / 全くしていない…1

■担当教員コメント（専門科目） 保健福祉学部 令和7年度前期

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
科学と医学（Q2）（POSH・コース選択）	田口 亜紀	ほとんどのアンケート項目で「強くそう思う」「そう思う」の割合が多く、学生に満足のいく講義が遂行できたと思われる。総合的判断でも平均点3.4と比較的高い点数を得ることができた。①昨年度の結果を踏まえた改善点 オムニバスで各教員の指示がバラバラでわかりにくいという意見があったため、Teamsを用いたり、講義や課題の提示などなるべくわかりやすいように工夫した。 昨年はアンケートの回収率が低かったので、最終回の教員がアンケート協力の依頼をすることで、アンケート回収率が上がった。②履修者の反応を知るために学期中に実施した方法 附属診療センターの見学を各班に分けて行い、学生個人の反応を伺った。 アンケートでは診療センターの見学は好評であったため、来年も継続したい。③アンケート結果から見た今後の課題 講義外の学習時間をほとんど要していないため、予習課題等を検討する。 色々な分野での医師の講義は学生には興味深いという感想が多かったので、継続していきたい。	109	76	69.7%
解剖学概論（Q1）	田口 勝敏	講義担当初年度ということもあり、学生の反応と共に、得られる質問などを通じて、本学学生のレベルを把握することに努めた。また、講義内容は厳選の上、時間内で可能な限り、全コース必須の項目の解説に注力した。近い将来必要となる臨床の内容を例示し、基礎医学の知識がどのように活かせるか、またどのような考え方が必要とされるか、具体的に伝えることに留意した。講義方法の改善点としては、補助資料として追加で紹介した図譜もすべて含めて後日アップロードし、復習の補助となるよう改善する。尚、出席確認（出席票）に関するクレームについては、こちらが指示したことを忠実に守っている大多数の学生にとっては何ら支障はなく、真面目に対応している学生に幾何の不利益も生じ得ないと考え。	195	129	66.2%
生理学概論（Q1）	森 大志	学部1年生を対象とした本科目は、これまでに生物学などを学ぶ機会のない学生も受講していることを意識して実施した。学生コメントには、「文系出身だったので最初は非常に苦しみましたが、授業も勉強もすごく楽しく取り組むことができました」というコメントが届き、担当教員の意識が概ね適切だったと理解したい。一方、本科目では約3分の2の学生が能動的学修機会は十分ではないと評価した。これまでよりはその割合は減少していると思われるが、まだ改善の余地があることを理解した。どうすべきか次年度の課題とする。総合的な判断については回答した学生の98%が好意的な評価をしていた。	157	91	58.0%
発達心理学（Q1）	古屋 泉	【昨年度の結果を踏まえた改善点】心理学の授業が後期に設定されているため、内容の理解・把握が難しいため、心理学の基礎的な知識の部分を増強した。【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】身近な場面の事例を多く用いて、学生の反応を観察して、興味がある内容と思われる部分の解説により時間をかけた。【期末アンケート結果から見た今後の課題】1年生対象で講義形式のため、双方向のやりとりは少なかったと思われる。講義の内容にあまり興味がない学生も多数履修していると思われるため、課題などはほとんど与えていなかったが、今後は検討していきたい。	70	26	37.1%
生活環境科学（Q2）	吉田 倫子	講義と3回に1回程度のレポート課題を出している。また、レポート課題はグループ内で発表を行い、互いに質問等をして、理解を深めている。また、毎回の授業アンケートにより授業に理解度や考えたことなどを提出させている。こうした取り組みにより、設問1「わたしはこの授業に集中し、真剣に取り組んでいる。」や設問6「この授業の目標とする力（知識や技能など）が身につく。」の評価は比較的高い。設問2「わたしがこの授業に関連して行っている授業外学修（課題、準備、復習等）時間。」は30分未満が6割であり、授業アンケートが30分もかからず回答できていることは適切であると考え。授業アンケートにおいて質問や改善を問いかけており、適宜改善を行っている。今後も課題の量は変えず、授業内容を最新の情報に変えながら進めていきたい。	9	8	88.9%
福祉と社会問題（Q2）（看・理・作・人）	松宮 透高	オムニバス講義かつゲストスピーカーも交えての講義であるため、内容ごとの反応は読み取れないところである。設問2の学習外学修が不十分であった点は、短時間で多様なトピックを扱うため一方的なレクチャーに偏り体系的な参加型学習につなぐことができていない可能性を示唆している。テキストやカリキュラムに限定されない科目であり、バリエーション豊かに新しいテーマを提示できる機会を活かし、さらに能動的参加の方策を関係教員間で検討し、さらなる工夫を図りたい。	40	17	42.5%

■担当教員コメント（専門科目） 保健福祉学部 令和7年度前期

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
福祉と社会問題（Q2）（コミュ）	坊岡 峰子	昨年度の評価より、なるべく授業のスピードを落とすために内容を厳選し、その分資料の配付で補うようにした。しかし、福祉の範囲は広く、国試の対象科目でもあり、現場に出てからも必要な情報は多いため、どうしても毎回伝達量は多くなる。毎回授業後には、授業のまとめか、ミニッツペーパーを提出させて、内容の理解などを確認した。その結果、内容量が多いものの、その必要性は理解されていた。今回の評価でも、どの項目もおおぼろげな評価ではあり、「様々な資料を提示してくださったり、細かく説明してくださったので、分かりやすかった」という記述もあった。一方、参加型の項目では29%が「そう思わない」となっていた。本来であれば、対人援助技術など参加・体験的な内容をもう少し入れたいところだが、15コマから7.5コマに半減した際に、時間の関係で本科目では理論を中心として、体験的に学ぶ機会を、別の科目で実施することとした。今後も時間的制約はあるが、なるべく視覚的に理解しやすい資料を厳選して、授業の進行に役立てていきたい。	32	31	96.9%
チーム医療福祉論（Q2）	長谷川 純	①昨年度の結果を踏まえた授業改善点 昨年の授業では、毎回担当教員が設定する保健医療福祉のテーマについて、学生が自ら調べグループディスカッションを行いました。この形式で、テーマについての知識が得られ、問題意識が芽生え、さらにグループでの活動も活発化したので、今年度もこれを踏襲しました。教員の講義、個々の学習、グループディスカッションのバランスをはかりながら授業を進めてきました。授業後提出される課題から、学生が授業内容に興味をもって学んでいることがうかがわれました。設問1～10について、いずれも90%を超える学生が「強くそう思う」、「そう思う」と回答しており、おおむね肯定的な評価でした。②履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 各教員が、毎回授業後に提出される課題を通して、学生の理解度や関心のありどころを確認しました。合わせて、授業時の各グループの反応も見ながら、グループに与える課題を工夫するなどしました。③アンケート結果から見た今後の課題 チームスでの通知の他、最終回の授業で回答を呼びかけてはいますが、回答者が75人（38.3%）にとどまった点には、改善の必要があります。次年度は、早めに回答を促す等して、回答者を増やすよう努めたいと思います。また、自由記述の中に、課題配信が適切に行われなかったという指摘がありました。この場をお借りして、不手際をお詫びします。	196	75	38.3%
保健福祉概論（Q1）	田中 睦英	本講義は講義とグループ演習で構成されており、チーム医療を学ぶうえで必須となる各専門職についての理解と基本的な知識を修得することを目的としている。アンケート結果から各学生が能動的に学習に取り組み、特にグループ演習において他職種の理解を深めつつ、他コースの学生と交流を深める機会が提供できており、授業の目的・目標は達成できた。その一方で、各専門職が関連する関係法規については第1Q学部共通科目「保健医療福祉関係法規」と重複する内容が多く含まれているとの指摘があった。関連する講義との調整ができていなかったことが要因であることから、次年度は関連する講義の担当教員間で内容を調整して重複をなくすとともに、講義内容の充実を図る。	195	177	90.8%
保健医療福祉行政論（Q2）	安武 繁	【昨年度の結果を踏まえた改善点】 作成した授業資料をもとに、この科目の大切な内容を中心に、できるだけ具体的に詳しく、わかりやすく解説を行いました。【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】 この科目の学習では何が大切かをできるだけ具体的に説明しました。今後の学習方法についても助言を行いました。【期末アンケート結果から見た今後の課題】 今後の課題としては、限られた授業時間の中で、保健政策、医療行政、福祉行政、保健医療福祉に関する法律と制度などについて、さらに多くの項目について、幅広い内容について解説を行うようにすることです。また、具体的な事例について、保健医療福祉関連の多くの観点から、その対応方法や解決策を十分に検討することです。	20	4	20.0%
ケアマネジメント論（Q1）	金子 努	【昨年度の結果を踏まえた改善点】 より具体的なイメージをもって実践的に学習できるようにするため、より多くの事例を用いた学習内容とした。そして、最新の現場の動向を反映した内容にリニューアルした。【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた事業改善点】 Teamsを活用し、毎回授業終了後に質問や感想を提出してもらい、その質問への回答を行ったほか、感想を次回授業へ反映させた。【期末アンケートから見た今後の課題】 満足度については得ることができた。しかしながら、5コース共通科目であり、多職種協働を意識した内容にする点で不十分さが残った。理由は受講者が例年になく少なく、各コースからの受講者確保ができなかったためである。この点が課題として挙げられる。	2	2	100.0%

■担当教員コメント（専門科目） 保健福祉学部 令和7年度前期

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
エンドオブライフ・ケア（Q1）	渡辺 陽子	本科目では、毎回の授業後に、リフレクションシートへの記入を促し授業に対する理解度を確認した。全質問項目に対して学生全員が「強くそう思う」「そう思う」と回答しており、授業の目標達成に向けた学生の主体的な学修を支援できたと考える。課題としては、授業外学修の時間である。「授業の課題の量が適切か」については、8割の学生が「強くそう思う」と回答しているが、学修時間が1週間30分以下の学生が8割であり、レポートなど教員から提示された課題のみの実施となっていたことが伺える。学生の自主的な学びを促進するような課題の提示を工夫していく。	6	6	100.0%
生体機能学（Q2）（NPOS・コース選択）	森 大志	基礎医学系の科目では、能動的学修機会を設けることが容易ではない、そのため、授業では学生自らに調べさせることを意識したが、十分ではなかったのかもしれない。設問に回答した学生の97%以上が各設問に好意的（強くそう思い、そう思う）な評価をしていた（設問2、3、4を除く）。特にコメントに「あの現象はこれに関わっていたのか！とひらめきつながる瞬間がありとても好きです、そのひらめきを他者の貢献のために使えるよう繰り返し学んでいきたい」というものがあり、担当教員としては大変喜ばしいコメントであった。	154	57	37.0%
保健医療福祉関係法規（Q1）	岡田 ゆみ	【これまでの結果をふまえた授業改善】本授業では、自らの職種のみならず保健・医療・福祉分野における職種の身分法についても学ぶ構成としています。これは、将来的に多職種と連携しながら業務を遂行する上で、他職種の法的立場や役割を理解することが不可欠であるという教育的観点から設計されたものです。そのため、単に法規の条文や制度の特徴を説明するのではなく、「なぜ他職種の身分法を学ぶ必要があるのか」といった学修の目的や意義を、授業の冒頭で明確に提示するよう工夫しています。これにより、学生が学びの方向性を意識しながら主体的に授業に取り組めるよう促しています。また、オムニバス形式で展開される各単元では、講義内容に関連した課題を設定していますが、これまでは課題提出のタイミングが学生によってばらつきがあり、学習の振り返りが十分に行われないケースも見受けられました。そこで、課題は講義時間内での提出を原則とするよう改善を行いました。これにより、学生がその場で自身の理解度を確認し、講義内容を整理したうえで次の学習へとスムーズに移行できるように改善しました。時間内での振り返りを通じて、学修の定着を図ることを目的としています。【アンケート結果をふまえた今後の課題】授業アンケートでは、「学生同士の意見交換を通じて新たな価値観に気づくことができた」といった肯定的な意見が寄せられました。これは、法規という一見硬直的に見えるテーマに対しても、学生が自らの経験や考えを共有することで、より柔軟で多角的な理解が促進されていることを示しています。本授業は大人数での講義形式ではありますが、今後も、学生同士が意見を交わす機会を積極的に取り入れていきたいと考えています。	195	90	46.2%
神経内科学概論Ⅰ（Q2）	伊集院 睦雄	講義形式をオムニバスにした初めての授業であり、神経内科学の中でも中枢神経系のしくみと、リハビリテーションにおいて特に重要となる高次脳機能（障害）に焦点を当て、それぞれを専門とする講師を配した。講義に際しては、動画を利用するなどの工夫を行い、学生に各症状に対する理解を促した。総合的な評価で100%が好意的（満足している）な回答あった。一方、設問4において能動的学修の機会が少なかった点は、受講者数や講義内容の性質に寄るところが大きいと思うが、今後検討していきたい。なお、いただいた自由回答にあるとおり、オムニバスにしたことによって、コマとコマとの関係や、試験内容の配分などがわかりにくくなった点は反省材料として残る。シラバスやオリエンテーション時にわかりやすく伝えるなどの工夫を行っていききたい。また、授業環境については、学部として今後善処する。	107	37	34.6%
神経内科学概論Ⅱ（Q2）	森 大志	本科目は夏休み期間の集中講義形式で実施した。授業2日間、週末をはさんでの試験の計3日間での実施であり、学生には十分な学修期間を設けることができなかった。次年度以降は開講形式を変更して実施したい。一方、総合的満足度については回答した学生の100%が好意的（強くそう思い、そう思う）な評価であったことは担当教員としても喜ばしい。今後は学生の満足度をさらに高めるよう努めていきたい。	91	7	7.7%
薬理学（Q1）	柳瀬 雄輝		125	32	25.6%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
公衆衛生学（Q1）	安武 繁	【昨年度の結果を踏まえた改善点】 作成した授業資料を中心に、この科目の大切な内容について、できるだけ具体的に詳しく、わかりやすく解説を行いました。この科目に関連する統計学の内容についても、重要な所を中心に、できるだけ具体的な解説を行いました。 【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】 学習のポイントは何かをできるだけ明示するようにしました。 【期末アンケート結果から見た今後の課題】 この科目の大切な内容を、主な授業内容にしました。今後の課題としては、限られた授業時間の中で、公衆衛生学および統計学に関する項目について、さらに多くの項目について、幅広い内容について解説を行うようにすることです。	67	17	25.4%
内科学（Q1）	奥崎 健		154	50	32.5%
精神医学（Q2）（看・理・コミュ）	藤巻 康一郎	【昨年度の結果を踏まえた授業改善点】 昨年度は、授業外学修時間が比較的短いという結果が示された。そこで、オンデマンド講義資料等を事前に掲載し、学生に事前学習を促した。その結果、ほとんどの学生が授業外学修時間を確保できるようになった。 また、昨年度の授業評価アンケート回答率は、周知を徹底したにもかかわらず40%台にとどまった。今年度は、周知のタイミングを工夫し、授業中でも特に学生の集中度が高い時間帯に周知を行った。その結果、回答率は73.6%に上昇した。来年度も引き続き周知方法を改善し、回答率のさらなる向上を目指す。 【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】 各講義日に理解度確認テストを実施し、その場で学生本人に理解度をフィードバックした。これにより、学生は自己の理解状況を即時に把握できた。また、得られた理解度に基づき、次週の講義に向けた改善点を明らかにすることができ、講義内容のブラッシュアップにつなげることが可能となった。 【期末アンケート結果から見た今後の課題】 期末アンケートでは、設問1、3、5、6において「強くそう思う」「そう思う」が合わせて95%以上と高評価であった。一方で、設問4（双方向授業・反転授業等）に関しては、「強くそう思う」「そう思う」が60%台にとどまった。授業出席者が190名超の授業であるため、個々の学生に質問を投げかけたり、学生が積極的に発信したりする機会を頻回に設けることは難しい。しかし、オンラインツールを併用することで、学生が質問や意見を発信できる場をオンライン空間上に再構築することは可能である。今後は、そのような仕組みづくりを課題として取り組む必要がある。	125	92	73.6%
福祉支援工学（Q3）（理・作・人）	川原田 淳	回答率が18.9%（7人/37人中）であり、全受講者の意見を反映した結果ではないことを前提として回答する。 ①昨年度の結果を踏まえた授業改善点 昨年度を含むこれまでのアンケート結果から判断し、授業内容の理解が難しいと感じている受講者が少なからずいたようであった。これを受けた授業改善として、今年度も小テストを毎回の授業で実施し、受講者の理解程度を確認しながら授業を進行するように心掛けた。 ②履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 中間アンケート等の方法は実施していない。 毎回、授業の終了後にレポートの提出や小テストを課しており、その中で感想やコメントなどを記入する欄を設けているが、これまで授業改善に結びつくような意見等は提出されていない。 ③アンケート結果から見た今後の課題 アンケートの各設問毎に回答結果を判断すると、設問1について肯定的評価：100%、設問2について肯定的評価：100%、設問3について肯定的評価：100%、設問4について肯定的評価：85%、設問5について肯定的評価：100%、設問6について肯定的評価：86%、設問7について肯定的評価：86%、設問8について肯定的評価：85%、設問9について肯定的評価：85%、設問10について肯定的評価：86%であり、設問1～10に対し、すべての設問で肯定的評価が85%以上となった。設問11の自由回答には、授業の出欠の取り方に対する批判的なコメントが1件あった。これについては、初回の授業において実施方法についてきちんと説明を行っているが、その内容が十分に伝わっていない受講者が少なくとも1名存在していたのは残念な結果であった。授業の出欠や成績評価に関わる重要事項は、複数回にわたる説明が必要であることを再認識し、来年度も今年度と同様に、アンケート結果を参考にして授業改善を実施する予定である。	37	7	18.9%
医療行動科学（Q1）（理・作・人）	細羽 竜也	回答者は82%で、概ね履修生全体の反応を反映している結果が得られた。 ・授業への集中した参加（設問1）や教材等（設問7）、学修活動支援（設問9）、総合的満足度（設問10）に肯定的な回答であった者は100%であった。 ・時間外課題（設問3）、能動的学習機会（設問4）、課題の内容・量の適切性（設問5）、授業目標の達成度（設問6）に肯定的な回答であった回答者は98%であった。 ・授業外学習の時間（設問2）について、98%が一定の時間を費やしていたが、30分未満（58%）、1時間未満（36%）とやや短めであった。 ・さらなる学修ニーズ（設問8）について、94%が肯定的に回答した。 以上より、概ね良好な学修態度が形成でき、満足度も高かった。ただ授業外学習時間が短めなため、今後もう1ランクの向上を図る学習課題を工夫したい。	61	50	82.0%

■担当教員コメント（専門科目） 保健福祉学部 令和7年度前期

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
生理学実習（Q1・Q2）（理・作）	森 大志	この科目は保健福祉学部保健福祉学科所属の6名の教員によって実施した。自らが体験することでの学びをテーマとして開講している。その結果、各設問で回答した学生の100%（設問2を除く）が好意的な評価をしていた。能動的な学修機会があった、質量が適切である、授業の目標とする力が身につく、教材の評価、学習支援体制が適切であったなどについては教員側も事前に相当の準備をした結果であり、大変喜ばしい。評価方法についてのコメントがあり、次年度以降はこれまで以上に丁寧に説明するよう心掛ける。	64	14	21.9%
一般臨床医学（Q2）（理・作・コミュ）	安武 繁	【昨年度の結果を踏まえた改善点】 作成した授業資料を中心に、特にリハビリテーションと関連する大切な内容について、できるだけ具体的に詳しく、わかりやすい解説を心がけました。 【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】 症例問題などを学生に示し、解答を考えていただき、その症例問題などについて、できるだけ詳しい解説を行いました。 【期末アンケート結果から見た今後の課題】 この科目の大切な内容を中心に、特にリハビリテーションと関連する大切な内容について、重点的な解説を行いました。今後の課題としては、限られた授業時間の中で、臨床医学に関する項目について、さらに多くの領域と項目、幅広い内容について解説を行うようにすることです。	63	50	79.4%
整形外科学Ⅰ（Q1）（理・作）	河野 正明		63	59	93.7%
精神医学Ⅰ（Q2）（作・人）	藤巻 康一郎	【昨年度の結果を踏まえた授業改善点】 昨年度は、授業外学修時間が比較的小さいという結果が示された。そこで、オンデマンド講義資料等を事前に掲載し、学生に事前学習を促した。その結果、ほとんどの学生が授業外学修時間を確保できるようになった。 また、昨年度の授業評価アンケート回答率は、周知を徹底したにもかかわらず40%台にとどまった。今年度は、周知のタイミングを工夫し、授業中でも特に学生の集中度が高い時間帯に周知を行った。その結果、回答率は70.6%に上昇した。来年度も引き続き周知方法を改善し、回答率のさらなる向上を目指す。 【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】 各講義日に理解度確認テストを実施し、その場で学生本人に理解度をフィードバックした。これにより、学生は自己の理解状況を即時に把握できた。また、得られた理解度に基づき、次週の講義に向けた改善点を明らかにすることができ、講義内容のブラッシュアップにつなげることが可能となった。 【期末アンケート結果から見た今後の課題】 期末アンケートでは、設問1、3、5、6において「強く思う」「そう思う」が合わせて95%以上と高評価であった。一方で、設問4（双方向授業・反転授業等）に関しては、「強く思う」「そう思う」が60%台にとどまった。授業出席者が190名超の授業であるため、個々の学生に質問を投げかけたり、学生が積極的に発信したりする機会を頻回に設けることは難しい。しかし、オンラインツールを併用することで、学生が質問や意見を発信できる場をオンライン空間上に再構築することは可能である。今後は、そのような仕組みづくりを課題として取り組む必要がある。	68	48	70.6%
看護学概論（Q2）（看護・コース選択）	青井 聡美	・昨年度の結果を踏まえた授業改善点 今年度は卒業生を特別授業卒の講師として招聘し、診療看護師としての業務内容に関する講義を依頼した。これにより、学生が自身の将来像を具体的に描く契機を提供することができた。 ・履修者の反応を把握するために学期中に実施した方法と、その結果を踏まえた授業改善点 各回の授業終了後に、理解度の把握を目的として小テストを実施した。また、授業ポートフォリオには、主な学びや感想、自己評価を記入させ、提出を求めた。課題は3件設定し、初回授業においてすべての課題内容および提出期限を明示した。提出が遅れる学生も一部見受けられたが、概ね多くの学生が計画的に課題に取り組んでおり、学習意欲の高さが窺えた。 ・期末アンケート結果から見た今後の課題 期末アンケートでは、「課題の内容と量」「目標とする力」「授業の教材、アプリ」「必要な支援」「この授業に満足しているか」について、100%が肯定的に回答した。また、「能動的学修」「さらに学びたい」に関しても98%が肯定的であった。 自由記載では、「自分のなりたい職種について詳しく学ぶことができ、非常に楽しい、貴重な時間だった。」「プリントがわかりやすく、授業も集中して聞くことが出来ました。」「看護の基礎となる知識を学ぶことができ、とても有意義な時間になったと思います。この学習を念頭に置いてこれからも学習していきたいです。」「看護師について深く学ぶことができました。戦争や感染症などを機に大きく発展しているなという印象を受けました」といった声が寄せられ、授業が職業理解と意欲の向上に寄与したことが確認できた。	62	58	93.5%
日常生活援助方法論Ⅱ（生活援助技術）（Q1・Q2）	池田 ひろみ	授業で活用する教材は、毎回見直して提示しているが、テキストの改訂でページ数の提示が違っているとことがあり、対応できていない箇所があった。そのため、事前確認を行い、訂正が必要な場合は、その都度周知できるよう対応していく。 演習では、教員が複数の学生を担当してラウンドしているため、学生が実施する技術についてすべてをフォローできる状況ではない。 演習後にはポイントや留意点などを振り返る、質問を受けるなどの対応を行う。	61	53	86.9%

■担当教員コメント（専門科目） 保健福祉学部 令和7年度前期

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
看護倫理（Q2）	松森 直美	講義内で提示した事例について真摯に取り組んでいたと思います。今後の実習場面での倫理的課題にに取り組む際の参考にさせていただきたいと思います。	61	15	24.6%
小児看護方法論（Q1）	松森 直美	貴重な回答ありがとうございました。皆さん、真摯に取り組み学ばれたことを次の展開論、実践論、実習に活かさせていただきたいと思います。	54	3	5.6%
精神看護実践論（Q2）	井上 誠	今年度の授業では、例年通りメデイアイ（電子カルテ）を活用した2事例をもとに看護展開を行いました。新たに精神科領域における「身体的抑制」に関する学修を含めた授業展開を実施しました。抑制についての理解を深めるため、事例の一部を変更し、演習・グループワーク・発表を取り入れた構成としました。学生からは、「現場をイメージしやすかった」「グループで意見交換できたことが学びにつながった」など、おおむね良好な評価を得ることができました。抑制という倫理的にも難しいテーマを扱う中で、主体的に考える機会を設けたことは、学生の関心と理解を深める一助となったと感じています。一方で、毎年実施している「2事例による看護展開」の授業構成については、学生の学習効果や負担感を踏まえ、今後再検討していく必要があると考えております。授業の目的と到達目標を再確認しつつ、より効果的で実践的な学びが得られるよう、内容と方法の見直しを進めてまいります。	54	8	14.8%
公衆衛生看護活動論Ⅰ（保健所・市町）（Q1・Q2）	俵 志江	この科目はグループによる演習を中心にし、教員が担当グループに助言指導をする形式で進めており、学生の積極的な取り組みによって、能動的に演習を展開することができたと考えている。演習の成果物についても、学生の主体的な発想で作成、プレゼンテーションができるよう進めることができたと評価する。	20	3	15.0%
公衆衛生看護活動論Ⅱ（産業・学校）（Q1・Q2）	岡田 ゆみ	【これまでの結果をふまえた改善点】 産業保健における看護職の役割は、臨床現場により異なる特性を持つため、学生にとってイメージしづらい分野であると考えられます。そこで、授業では具体的な事例を設定したり、実際の職場を想定した場面設定を行うことで、看護職が産業保健の現場でどのような役割を果たすのかを、より具体的に理解できるよう工夫しています。また、産業保健に関連する法規は非常に多岐にわたるため、単なる暗記に頼るのではなく、授業内でミニテストを取り入れることで、知識の定着を図るようにしています。ミニテストは、理解度の確認だけでなく、学生自身が学修の進捗を把握する機会としても活用して欲しいと考えています。 【今後の課題】 現在、特別講義の中で、産業保健の実践場面の内容に触れる機会を設けていますが、今後はその授業を充実させるために、Q&A形式による対話的な授業展開を導入したいと考えています。実際の活動に携わる専門職との対話を通じて、学生が現場のリアルな声を聞きながら、産業保健における看護職の具体的な役割や課題をより深く理解できるようにすることが目的です。	28	4	14.3%
病態生理学（Q1）	安武 繁	【昨年度の結果を踏まえた改善点】 作成した授業資料を中心に、この科目の大切な内容について、できるだけ具体的に詳しく、わかりやすく解説を行いました。病態生理だけでなく、解剖生理学、病理学の内容についても説明しました。 【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】 学習のポイントは何かをできるだけ明示するようにしました。 【期末アンケート結果から見た今後の課題】 今後の課題としては、できるだけ多くの症例問題を十分に検討することです。今後の課題としては、限られた授業時間の中で、病態生理、解剖生理学、生化学、病理学に関する項目について、さらに多くの項目について解説を行うようにすることです。	61	15	24.6%
免疫と感染（Q1）	岡田 淳子	選択科目で受講生が少数であり、不明点などを確認しながら、進めることができた。本科目に関心の高い受講生であり、意欲的に質問などもあった。また、感染管理については臨床場面を想起しながら、より実践に近い内容を提示し、受講生は問題解決するための対策を適切に考えることができた。そのため、満足度の高い評価を得たと思う。本科目は今年度で終わり、他教員が全学共通科目で教授することになる。医療従事者に必要な感染管理については、専門科目のなかに含めていく必要がある。	4	4	100.0%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
診療に伴う看護方法論（Q1・Q2）（看A）	川野 綾	アンケートへの回答率は76.7%（23名／30名）であった。授業時間内に回答時間を確保し、スマートフォンから回答するよう指示したが、全員の回答には至らなかった。時期的要因として最終試験前であったことが影響したと考えられる。①昨年度の結果を踏まえた改善点 昨年度に引き続き、グループ学修や演習を通じて学生が主体的に考えられる機会を多く取り入れた。その結果、「侵襲的な看護技術における配慮を十分に学べた」など、授業・演習への肯定的な評価が得られた。②履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた改善点 毎回授業終了後に本日の学びと課題を記載する授業ポートフォリオの提出を必須としており、質問内容などの記載も折見られた。記載内容から授業の理解度や疑問点などについて知ることができた。また、授業終了後は学生からの質問が受けられるよう、一定時間教室に残り、学生と対話する時間を確保した。リアルタイムに質問ができたり、学生の生の声を聞く機会となったと考える。特に実技試験前には多くの学生からの質問に対応し、理解の定着と試験準備を支援することに重点を置いた。学生からの自由記述でも、「実技試験前に多くの質問に答え、必要な支援をしていたのがとても良かった」との回答が得られており、この取り組みが有効であったと考える。③アンケート結果から見た今後の課題 自由記載では「教材や学習活動に不適切な点はなかった」との意見がある一方で、「学修ノートと教科書のページを合わせてほしい」との改善要望もあった。また、「課題の内容や量は適切であるか」という設問において、Bクラスでは4%（1名）から否定的な回答がみられた。全体としては肯定的評価が大多数を占めていたが、今後は課題の量や難易度についても学生の学習状況を考慮しながら検討し、より学びやすい環境を整えていきたい。また、教科書の改訂に伴うページ変更についても確実に対応させていく。	30	23	76.7%
診療に伴う看護方法論（Q1・Q2）（看B）	川野 綾	アンケートへの回答率は80.6%（25名／31名）であった。授業時間内に回答時間を確保し、スマートフォンから回答するよう指示したが、全員の回答には至らなかった。時期的要因として最終試験前であったことが影響したと考えられる。①昨年度の結果を踏まえた改善点 昨年度に引き続き、グループ学修や演習を通じて学生が主体的に考えられる機会を多く取り入れた。その結果、「侵襲的な看護技術における配慮を十分に学べた」など、授業・演習への肯定的な評価が得られた。②履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた改善点 毎回授業終了後に本日の学びと課題を記載する授業ポートフォリオの提出を必須としており、質問内容などの記載も折見られた。記載内容から授業の理解度や疑問点などについて知ることができた。また、授業終了後は学生からの質問が受けられるよう、一定時間教室に残り、学生と対話する時間を確保した。リアルタイムに質問ができたり、学生の生の声を聞く機会となったと考える。特に実技試験前には多くの学生からの質問に対応し、理解の定着と試験準備を支援することに重点を置いた。学生からの自由記述でも、「実技試験前に多くの質問に答え、必要な支援をしていたのがとても良かった」との回答が得られており、この取り組みが有効であったと考える。③アンケート結果から見た今後の課題 自由記載では「教材や学習活動に不適切な点はなかった」との意見がある一方で、「学修ノートと教科書のページを合わせてほしい」との改善要望もあった。また、「課題の内容や量は適切であるか」という設問において、Bクラスでは4%（1名）から否定的な回答がみられた。全体としては肯定的評価が大多数を占めていたが、今後は課題の量や難易度についても学生の学習状況を考慮しながら検討し、より学びやすい環境を整えていきたい。また、教科書の改訂に伴うページ変更についても確実に対応させていく。	31	25	80.6%
在宅看護論（Q1）	菅井 敏行	在宅看護論については、地域看護の視点も交え法律や制度設計等も確認しながら講義をすすめました。皆さんが積極的に学ぶ姿勢がみられ、特にレポート形式の課題では、単に知識の羅列ではなく、自身が考えて自分の意見を自分の言葉で表現されていました。在宅看護を学ぶ上で必要な姿勢も教科書等によって確認し、今後の展開論、実践論などにつながっていく準備ができたのではないのでしょうか。訪問看護の保険制度上の特徴として、介護保険制度と医療保険制度の対象別や使い分けなどが若干複雑です。多くの皆さんが、試験でこの部分を間違えず解答できていました。よく勉強されていたのだと思います。	61	51	83.6%
急性期看護論（Q1）	岡田 淳子	受講生の取り組みや目標とする力の修得に関する項目において肯定的回答（強くそう思う・そう思う）の割合が100%であり、看護専門職として必要な知識・技術を学修できていると考える。授業外学修時間は「全くしていない」受講生が数名いたが、2～4時間以内がもっと多く、課題量は適正であったと思う。しかし、本科目は周術期看護から救急看護と急性期看護全般で多岐に渡り、知識量が多いため、予習・復習の時間をもう少し増加する工夫も必要と考えている。また、臨地実習や就職してから看護実践に直結する内容であるため、さらに学びたいは「強くそう思う」「そう思う」の割合が100%で、総合的な満足度も高い結果を得た。本科目は教員3名のオムニバス授業であり、これらの評価が維持できるように、今後も共同して授業構築に努める。また、授業の進行が資料の順と異っていた箇所があったとの指摘については、来年度から改善する。	61	60	98.4%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
慢性病看護論（Q2）	黒田 寿美恵	TBL、毎授業の事前事後課題（小テスト）により、授業外学修時間は概ね確保できており、自己学修の習慣化につながったと考えられる。小テストは成績に反映させることから難易度を高くしていたが、平均8割以上の得点が獲得できていたことから、十分な学修に取り組んだことがうかがえる。すべてのアンケート評価項目の学生の反応は概ね良好であった。自由記載には、授業中に提示したPPTの事後配布により、メモを取り切れないことへのストレスがなく授業に集中できたこと、課題の量が適切であったこと、など好意的なコメントが多く書かれていた。小テストの配点については、さらに小刻みな方がよいとの意見もあり、次年度に向けて、事前・事後学修として必要な内容との照合を行いつつ、内容が増えることによる学生の負担も踏まえて検討したい。	61	47	77.0%
高齢者の健康と看護（Q1）	山中 道代	【昨年度の結果を踏まえた改善点】 昨年度の結果を参照することができないため昨年度の結果を踏まえることは不可能であるため、今年度の結果を見て改善点を検討していきたい。【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法、その結果を踏まえた授業改善点】 出席を確認するためのformsに授業の感想や学びを記述してもらい、学生の反応を知る試みをした。この内容を踏まえた改善は、今年度中には実施できなかったが、次年度の授業に向けて改善していきたい。【期末アンケートからみた今後の課題】 時間外学修の時間が短めである。課題の量は適切との回答であることから、課題の内容を工夫したり量を調整するなどして時間外学修が進むようにする必要がある。高い満足度ではないが、大きな不満も認められないが、学生の反応をフィードバックする工夫をすることで満足度を高めていきたい。	61	50	82.0%
高齢者看護方法論（Q2）	山中 道代	【昨年度の結果を踏まえた改善点】 昨年度の結果を参照することができないため昨年度の結果を踏まえることは不可能であるため、今年度の結果を見て改善点を検討していきたい。【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法、その結果を踏まえた授業改善点】 出席を確認するためのformsに授業の感想や学びを記述してもらい、学生の反応を知る試みをした。この内容を踏まえた改善は、今年度中には実施できなかったが、次年度の授業に向けて改善していきたい。【期末アンケートからみた今後の課題】 時間外学修の時間が短めの学生が4割程度見られた。課題の量は適切との回答であることから、課題の内容を工夫したり量を調整するなどして時間外学修が進むようにする必要がある。高い満足度ではないが、大きな不満も認められないことから、学生の反応をフィードバックする工夫をすることで満足度を高めていきたい。	61	60	98.4%
リプロダクティブヘルス看護論（Q2）	上野 陽子		61	15	24.6%
メンタルヘルス看護論（Q1）	麻生 浩司	【①昨年度の結果を踏まえた授業改善点】昨年度同様に今年度も、全体的に肯定的な意見があり、学生が主体的に学習できるように、ロールプレイを用いて体験を経て、ディスカッションし、共有しながら、学修してもらった。【②履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】精神保健は可視化できない側面があるため、これまでの学生の生活体験を想起してもらいながら、個人ワークを行い、学生間の共通・相違を意識できるように、共有としてペアワークの回数を増やした。今年度の「新たな発見もすることができ自分自身の考えを広げることが出来た」などの意見は、意識した取り組みを反映していると考える。【③アンケート結果から見た今後の課題】学生からの意見では、「適切な課題の量・内容だった」「資料も分かりやすく復習しやすかった」などがあがっている。今後は、高等学校で精神保健の授業が始まったことを踏まえて、それらの既習内容を参考にながら、学生が興味・関心を持ち、主体的に学修できるような授業内容や課題を考えていきたい。	61	14	23.0%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
看護管理論（Q2）	奥田 玲子	1. 昨年度の結果を踏まえた授業改善点：3年次3Qに実施される「統合実習Ⅰ」の前提科目であり、実習にあたり必要となる知識を網羅する内容で構成した。臨床事例の活用により、短時間のディスカッションを毎回設定して双方向性を強化した。また、現場との関連性を高めるため、実習先で想定される場面を取り入れ、知識の実践的活用を意識した授業展開とした。 2. 履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点：授業内容の理解度は、毎回授業終了時に国家試験対策を兼ねた単元テストとリアクションペーパーにより確認した。また、リアクションペーパーに書かれた学びは次回授業で共有し、質問に対しては補足説明をすることで理解を深めるようにした。 3. アンケート結果から見た今後の課題：アンケート結果では、満足度・理解度ともに全項目で肯定的評価であった。一方、授業外学修時間が1時間未満の学生が過半数以上を占めており、学外学修習慣の定着が課題である。単元テストを“復習”ではなく“予習の成果確認”として位置づけ、予習内容の確認から、知識の補強へとつなげる授業構成とすることで、授業外学修の促進と発展的学びを促す授業設計を進める。加えて、アンケート回答率の低さも課題である。原因として、最終回授業終了後にアンケート実施期間が設定されていたことが考えられる。アンケート実施期間中にTeamsで複数回リマインドを行ったが、回答数の増加につながらなかった。今後は、最終回授業時間の一部を授業評価アンケートに充てられるよう時間割を調整する。あるいは、学生の記憶が新鮮なうちに、クラス全体に直接協力を依頼するなど、リマインド方法の工夫により回答率向上を図る。	55	13	23.6%
災害看護論（Q1）	山中 道代	【昨年度の結果を踏まえた改善点】 昨年度の結果が参照できないため、十分な比較はできない。昨年度と同様の計画で実施しており、学生の満足度は高いことから授業の構成自体に改善は必要ないと考える。しかし、教員個々の振り返りや学生個々の感想などから改善点を検討し、より良いものにしていきたい。 【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法、その結果を踏まえた授業改善点】 出席を確認するためのformsに授業の感想や学びを記述してもらい、学生の反応を知る試みをした。この内容を踏まえた改善は、今年度中には実施できなかったが、次年度の授業に向けて改善していきたい。 【期末アンケートからみた今後の課題】 全ての項目において、満足度の高い結果となっていた。自己学修するための課題を提出したこともあり、時間外学修にかかる時間も、一定量確保できていた。学生は主体的に学べたと感じ、さらに学びたいという好奇心を高める授業にできたと考える。引き続き、学生の満足度の高い授業を実施していきたい。	55	52	94.5%
家族看護論（Q1）	松森 直美	貴重な回答ありがとうございました。講義内の課題にも真摯に取り組まれていたと思います。家族の理解や家族への看護は、地域包括ケアが発展する今後の医療現場ではますます重要になってきますので、この講義で学んだことが少しでも役に立てば幸いです。	54	3	5.6%
家族保健指導論（Q2）	菅井 敏行	授業評価アンケートの回答者数は受講者48名中40名（83.3%）であった。 1）昨年度の結果を踏まえた授業改善点：昨年度に引き続き、特に地域において保健師が行う活動（指導や調整等）を中心に扱った。まず、家族全体への支援の方法を理論から情報収集やアセスメント、指導（支援）の展開までの一連の流れを学んだ。それに加えて、クラス全体を2つに分け、特に指導（支援）が困難なケースについてグループワークを行い、グループ内、またグループ間で意見交換を行った。昨年度は、情報収集、アセスメントに時間を割き、グループ間での意見交換を十分に行う時間をとらなかったことについて受講者より意見を得たため今年度はこの時間を確保することとした。また、今年度は保健師と地域資源の繋がりについて実践者より家族指導の具体例を講義していただいた。 2）履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点：受講者に対して、この科目の目的、目標は毎回の授業の冒頭で説明し、受講者がこの授業で何を学ぶべきかを都度示した。受講者の理解度は毎回、Formsよりフィードバックを得て確認し、疑問や質問等があった場合には次回の授業で解説するようにした。また、グループワークではグループ内での役割や貢献度をFormsで相互評価できるように工夫した。 3）期末アンケート結果から見た今後の課題：アンケート結果より「自身の授業への取り組みの姿勢」、「授業の目標とする力の獲得」、「総合的な授業満足度」の設問に関しては受講者全員が肯定的な回答であった。他の項目も90%以上の肯定的な回答があり、授業において科目担当者の意図は受講者に概ね伝わったと考えられる。一方で、受講者において、「学習活動支援」については5%、「さらなる学修の意欲」については8%、「教材の適切性」が2%と否定的な意見も回答されており、今後もさらに授業内容の改良、工夫を重ねていく。また、授業評価のアンケートは授業内で時間をとり受講者に回答していただいたが、回収率が83.3%にとどまったことから、次年度はより回収率を向上させることも課題の一つである。	48	40	83.3%

■担当教員コメント（専門科目） 保健福祉学部 令和7年度前期

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
看護研究の基礎（Q2）	黒田 寿美恵	アンケート回答率が14.5%と低かったが、すべての項目について概ね肯定的評価を得ており、総合的な満足度は高かった。 昨年度のアンケートが高評価であったことから、昨年度通りの内容・形式を踏襲した。 演習形式の内容も多く含めており、能動型学修としての評価が高く、全員が授業に集中し真剣に取り組んでいるという結果が得られた。 事前事後課題（小テスト）を成績対象としていたため、授業外学修時間を確保できていた学生が多くを占めていたが、30分未満の学生もいたことから、さらなる工夫が必要である。 年度末から開始される卒業研究に直結した科目であり、卒業研究の実施にあたり必要な内容を網羅している。しかし、国家試験に直接関連しない科目のため、モチベーションをいかに保つかが重要であり、学士課程で看護基礎教育を受ける学生として、学問を追究していく責任を担う自覚を促す工夫を引き続き行っていく。	55	8	14.5%
在宅看護実践論（Q1）	加利川 真理		54	2	3.7%
急性期看護実践論（Q2）	中垣 和子	本科目は、既習の学修内容を基盤とし、後期に実施される急性期看護実習へと発展させることを目的としている。授業に対する学生の取り組みは非常に意欲的であり、回答した学生全員が真剣に授業へ臨んでいた。特に、約9割の学生が授業外に2時間以上の学修を行っていたことから、高い学修意識がうかがえる。一部の学生からは、課題の内容や量に関して適切性を欠くとの意見があったものの、教材に対する評価および授業全体の満足度は高く、授業内容は概ね適切であったと判断される。授業は、個人ワークおよびグループワークを組み合わせることで理解を深め、少人数グループ毎に教員を配置することで、きめ細やかな指導が行える体制を整えている。このような授業設計が、学生の高い満足度につながっていると考えられる。一方で、複数の教員が関わることにより、学生への指示が統一されず、混乱を招く場面も見受けられた。今後は、教員間の情報共有を一層強化し、指導内容の統一を図ることで、より円滑な授業運営を目指す。	54	41	75.9%
慢性病看護実践論（Q1）	木場 しのぶ	この科目は実習の土台となる実践を含む科目であり、すべての学生が授業に真剣に取り組んだと回答している。必要とされる授業外学修については、取り組むべき課題がわかり、概ね準備して授業に臨んでいたようである。課題の内容や量に関して適切ではないという意見も少数あるが、段階的に課題を提示し、授業内で個人で取り組める時間を確保するなどの工夫を行っており、総合的な学生の満足度評価からも、目標に到達するための内容、量として適切であったと考える。グループワークやディスカッションを通して学びが深まったと回答があり、今後も引き続き、話し合いを通して思考を深めていける授業展開を行っていく。	54	39	72.2%
高齢者看護展開論（Q1）	渡辺 陽子	本科目では、毎回の授業後に、ミニテストを実施し、授業に対する理解度を確認した。 授業内容についての質問項目に対して、90～100%の学生が、「強くそう思う」「そう思う」と回答しており、授業の目標達成に向けた学生の主体的な学修を支援できたと考える。 一方で、「この授業の内容に関してさらに学びたい」については、10%の学生が「そう思わない」と回答していた。本科目は後期の高齢者看護実習につながる内容であり、授業終了後も学生が学修を継続していくことが求められる。本科目の内容について、より深く学びたいと思えるような授業内容とできるように工夫していく。	55	53	96.4%
高齢者看護実践論（Q2）	渡辺 陽子	本科目では、後期科目である「高齢者看護実習」につながる内容である。授業内容についての質問項目に対して、9割以上の学生が「強くそう思う」「そう思う」と回答しており、授業の目標達成に向けた学生の学修を支援できたと考える。 一方で、3%と少数ではあるが「そう思わない」という回答があった項目が、「課題の内容・量が適切」「授業の目標とする力が身につく」「学修活動への支援」であった。本科目は授業前に教員から学生に事前課題を提示し、学生個々人が課題に取り組んだうえで、授業内で実技演習やグループワークを行いながら展開する。そのため、事前課題に取り組む際に困難さを感じた学生がいたことが伺える。次年度は、事前課題実施時のサポート方法を工夫していく。	54	32	59.3%
小児看護展開論（Q2）	松森 直美	小児の事例についてのアセスメント課題に対して全員が期限をまもり、真摯に取り組んでいたと思います。最終回の発表についてもグループで協力して発表し、発表への質問や感想も活発に行われていました。後期の実習や小児看護実践論につなげてほしいと思います。	54	5	9.3%
周産期看護展開論（Q2）	上野 陽子		55	4	7.3%

■担当教員コメント（専門科目） 保健福祉学部 令和7年度前期

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
精神看護展開論（Q1）	井上 誠	精神看護展開論の授業では、看護3年生を対象に、精神疾患の理解から患者―看護師関係の構築、セルフケア理論の活用、具体的な症状アセスメントとケアプランに例まで、段階的かつ実践的に学びを進めている。授業では毎回、感想や質問をミニレポートに記載してもらうことで学生の理解度や疑問点を把握しており、活発な学習状況が見られる。一方で、学生アンケートでは、他科目との課題集中期に学習負担が増すことや、専門用語の難解さが課題として挙げられており、今後は課題の分散や補足資料の充実、さらにはアンケート回答の促進策を強化することが求められていると感じた。	55	2	3.6%
エンド・オブ・ライフケア看護論（Q2）	黒田 寿美恵	選択科目であり、3年生の2Qは他科目の課題に追われる忙しい時期であることから、成績には直結しない事前学修課題を課し、それに基づいて授業時間内で深く学べるよう内容と方法を構成した。 昨年度は科目開始前後のレポートのみを成績評価対象としていたが、参加態度に対する評価を求めるコメントがあったことから、今年度は、事前学修課題への対応状況やリフレクションシートへの回答状況を成績評価に含めた。 エンド・オブ・ライフ期、特に臨死期についてはイメージしづらいため、動画教材を多く用いたことに対して、「動画を見て実際の看護師としての対応を学ぶ授業が多かったため印象に残って学びが深まった。」とのコメントがあり、効果的であったと判断した。	29	21	72.4%
公衆衛生看護実践論（Q1）	俵 志江	公衆衛生看護実習Ⅰ・Ⅱの事前演習科目として、健康教育、健康相談、家庭訪問、乳幼児健診、特定健診・特定保健指導のロールプレイを含む演習を行い、また学校保健、産業保健に関わる知識の確認等を行いました。 タイトなスケジュールの科目でしたが、学生の授業への取り組みと自己学習によって、授業目標を達成できたと考えます。	20	0	0.0%
看護統合演習（Q2）	山中 道代	【昨年度の結果を踏まえた改善点】 昨年度から開講した科目であり、今年度も昨年度と同様に実施した。 【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法、その結果を踏まえた授業改善点】 4日間の日程でスケジュールを組んで実施する内容であることから、期間中に得た反応から改善した点はなく、終了後に各担当で実施内容の振り返りを行い次年度に向けて検討することとしている。 【期末アンケートからみた今後の課題】 本アンケートでの回答率は非常に低く、この結果を次年度に活用することは困難であるが、独自に作成した授業後アンケート（回収率96％）では学生の満足度は高く、ほぼ全員が学びの内容や方法に肯定的な反応であった。回を重ねるごとで見えてくる改善点があれば学生のアンケート結果を踏まえながら検討していきたい。	58	1	1.7%
理学療法学概論Ⅰ（Q2）（理学・コース選択）	梅井 凡子	アンケート回答率は100％であり、すべての学生の状況が把握できた 昨年度の結果を踏まえ最終講義で実施する体験実習の事前説明を早めに実施した毎回の授業においては履修者に質問をするなどで学修状態を確認した アンケート結果からは以下の点が把握できたため次年度も継続して授業を実施していきたい 1. 初めての専門科目ということもあり履修生全員が授業内容に興味を持ち真剣に取り組んでいる 2. 履修生はおおむね能動的に学修しており、授業に対して肯定的である 3. 本授業のみならず履修済み科目や今後履修予定の科目についての動機づけもできている	35	35	100.0%
運動学演習（Q1・Q2）	長谷川 正哉	今回の授業評価では、「授業に集中し真剣に取り組んでいる」「能動的学修機会がある」「学びをさらに深めたいと思う」といった肯定的な評価が多数を占めた。特に「能動的学修機会がある」では89%が「強くそう思う」と回答しており、グループワークや双方向的な活動が学生の主体的な学びを促進していることが示された。 授業外学修についても、週4時間以上取り組む学生が56%にのぼり、課題や復習が一定の学習習慣形成につながっていると考えられる。課題の内容・量、教材・教具についても「強くそう思う」「そう思う」を合わせて100%の肯定的評価となり、学修支援の適切さが裏付けられた。 自由記述での具体的意見は見られなかったが、総合的満足度については78%が「強くそう思う」、22%が「そう思う」と回答し、全体として授業が学習意欲や達成感につながったことが確認できる。今後も学生の主体性を引き出す授業構成を維持・改善しながら、さらなる学習効果の向上を図っていきたい。	35	18	51.4%
理学療法評価学演習Ⅰ（Q1・Q2）	西上 智彦	さらに授業の内容、とくに実技の部分を改善します	34	5	14.7%

■担当教員コメント（専門科目） 保健福祉学部 令和7年度前期

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
理学療法評価学演習Ⅱ（Q1・Q2）	小野 武也	1）昨年度の結果を踏まえた授業改善点 授業内容の理解を促すために、学生同士でのディスカッションを設けている。 毎年、講義に使用する資料やパワーポイントを改善している。 2）履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 授業の途中や後半に、講義内容が理解できているかどうか学生相互に確認する時間を作っている。疑問や不明な点に関する発言があれば、追加説明を実施している。 3）アンケート結果から見た今後の課題 アクティブラーニングによる講義形式を取り入れ引き続き計画的に実施していきたい。	34	7	20.6%
解剖学実習（Q1・Q2）（理・作）	田口 勝敏	担当初年度ということもあり、各分野（各履修領域）の実習を通じて、本学受講生の実力を見極め、講義内容に復習内容も盛りこみながら進行しよう心掛けた。また、神経分野を充実させるため（苦手な学生が多いと感じたため）、脳・神経領域を中心とした実習回を一回設け、その学修到達度の向上を図った。アンケートについては、前半の実習試験が国試に直結していないとの回答が見られたが、真に理解していれば、記述式だろうが、選択式であろうが、何を聞かれても答えられるはずである。現に、同期に入学した同学年の内、約半数は記述式でも60点以上を獲得しており、最高点数は97点に上り、70点以上も珍しくない。今回出題した問題はどれも実習内容を復習できていれば60点は獲得できる基礎的な問題であり、これに全く歯が立たないのであれば、出題形式の問題ではなく、本人の実力不足である。	64	11	17.2%
運動学（Q1）（理学）	長谷川 正哉	今回の授業評価では、「動画を用いた事前学習が理解を助けた」「体験を通じて学ぶ機会が多く、興味をもって取り組めた」との肯定的な評価が多数を占めた。特に「能動的学修機会がある」との回答が100%（うち94%が「強くそう思う」）に達し、授業構成が学生の主体的学修を促していることが示された。 授業外学修についても、週4時間以上取り組んでいる学生が約半数（48%）にのぼり、動画視聴や課題提出が一定の学習習慣につながっていると考えられる。課題の内容・量についても、82%が「強くそう思う」と回答しており、学修負担が適切であったとの評価を得た。 自由記述では、「事前に配布された重要事項の一覧が有用だった」「2Qではより早めに提供してほしい」との要望が見られた。これについては、今後の授業で改善を図る予定である。 総合的に見て、本授業は反転学習・体験型学習を組み合わせた設計が奏功し、学習意欲や満足度の向上につながったと評価できる。引き続き、学生のフィードバックを反映しながら、学修支援と内容の精緻化を継続していく。	34	33	97.1%
中枢神経機能学（Q1）	森 大志	この科目はこれまで通り3名の教員で実施した。アンケートの設問4の結果に対しては講義内容によるところが大きいのと思われるが今後の検討課題とする。 授業の目標とする力が付く（設問6）、授業の教材は適切（設問7）、授業内容をさらに学びたい（設問8）、総合的満足度（設問10）、については、回答した学生の90%以上が好意的な評価をしていた。特に設問6と8は100%好意的であり、一定の評価をしたい。一方、成績評価については我々の説明が学生の理解のためには十分ではなかったことであり、次年度以降はより明確にしたい。	64	23	35.9%
理学療法学研究法演習（Q1・Q2）	西上 智彦	資料のと教科書に書いてあることに違いがあったと指摘があったので、改善いたします。	34	32	94.1%
理学療法管理学Ⅰ（Q2）	横山 和加子	回答率は昨年度74%から100%に改善した。総合的に満足している（強く・そう思う）学生も多かった（97%）。時間外学修時間が少ない学生もいるので、講義前後課題については今後も検討が必要である。	34	34	100.0%
骨関節障害理学療法学（Q1）	西上 智彦	課題の内容・量に関して、調整を考えます	34	34	100.0%
神経障害理学療法学（Q1）	田中 聡	【昨年度の結果を踏まえた授業改善点】 昨年度に特に指摘はなかったが、脳血管障害の医療画像や医学的治療法については内容を最新版にアップデートした。授業内の一部で「血圧測定の実際」として演習を取入れた。同コースの教員の支援を受け、丁寧に指導を行うことができた。この点は、次年度も確実に確認していきたい。 【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】 授業初回時に本講義を受講するうえで必要な知識を確認するクイズを行った（成績に反映しないことを通知）。その結果は予想以上に悪く、必要な自己学修内容について自覚をもらった。講義では、講義後に質問を受ける時間（チームスでも対応）を設けた。実際の臨床実習を想定した症例を通しての授業回では、担当した特別講師とともに資料を作成し臨んだ。【アンケート結果から見た今後の課題】 設問2の授業外学習時間を1時間以上（1単位科目）行っている者は7%にとどまっているので、引き続き取り組みべき課題（設問3）を具体的に示していきたい。設問4から9までの回答では全員肯定的であったので、講義資料をアップデートしながら次年度も講義を進めたい。好評であった特別講義や実技練習の時間が増えるよう講義時間の配分を検討していきたい。	34	30	88.2%

■担当教員コメント（専門科目） 保健福祉学部 令和7年度前期

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
小児発達障害理学療法学（Q1）	島谷 康司	アンケート回答者数 18人 / 34人中（回答率 52.9%）であった。「問10. 総合的に判断して、この授業に満足している」では、強くそう思う28%、そう思う72%でありであり、おおむね満足しているようである。次年以降は、強くそう思う の割合を増やすことも目標とする。そのためには、講義内容を精査する。	34	18	52.9%
内部障害理学療法学（Q1）	横山 和加子	回答率は100%で昨年度より大幅に改善している。総合的に満足している（強く・そう思う）は100%だった。約5割の学生が2時間以上の授業外学修を実施していたが、2時間未満の学生が5割いたので講義前後の課題内容については今後も検討が必要である。	34	34	100.0%
物理療法学演習（Q1・Q2）	長谷川 正哉	【昨年度の結果を踏まえた授業改善点】 昨年度及び物理療法学の授業評価アンケートにおいて、座学と実習の時間配分に関するコメントがあったので、座学後に実技練習を行う形式を徹底した。超音波療法、極短波療法、電気刺激療法では2名の講師による実技指導を行い、丁寧な指導に努めた。 【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】 演習中は担当教員が実習室内を巡回し、学生の疑問に対応した。必要があれば、授業中に学生全体にフィードバックを行った。講義回数後半の13～15回は、3名の講師で物理療法学から演習までに学修した内容について実技練習の機会を設け、技術習得に向けた指導を行った。 【アンケート結果から見た今後の改善】 授業外学修時間については、週1時間未満が90%であるため、具体的な自己学修内容について指示する必要がある。それ以外の設問（3～10）に対しては、全て肯定的であるので今年度の授業方法を継続していきたい。	34	32	94.1%
義肢装具学（Q1）	長谷川 正哉	本授業における評価結果から、動画や装具など視覚的・体験的な教材の活用が学習理解の促進に一定の効果をもたらしていることが読み取れる。「能動的学修の機会がある」との回答は全体の100%（うち71%が「強くそう思う」）であり、実物に触れる体験や反転学習形式が学生に肯定的に受け入れられている。一方で、「この授業に集中し、真剣に取り組んでいる」という回答では、「強くそう思う」が55%にとどまり、全体的な集中度はやや分散している。また、週あたりの授業外学修時間において「2時間未満」との回答が半数を超えており、授業外での復習・準備が十分に浸透していない可能性がある。今後は、授業外学修の必要性やその方法について、授業内で明示的に伝えていく必要があると考える。自由記述では、「動画がわかりやすい」「装具を実際に見ることで理解が深まった」とのコメントが複数見られた。これらの意見は、本授業の実践的・視覚的な設計が有効であることを裏付けている。今後は、学修意欲と集中度をさらに引き上げるために、課題設計や授業導入部の工夫、学修目標の明確化を図りながら、体験型学修の質を一層高めていく。	34	31	91.2%
地域日常生活活動学（Q1）	島谷 康司	アンケート回答者数 33人 / 34人中（回答率 97.1%）であった。「問10. 総合的に判断して、この授業に満足している」では、強くそう思う42%、そう思う58%でありであり、おおむね満足しているようである。次年以降は、強くそう思う の割合を増やすことも目標とする。自由回答では、小テスト（FIMの理解、表出の問題）において、授業資料や授業からのメモ、そのほかの教材等を参考にしても、答えを編み出しにくいようなあいまいな問題があったと感じた。という意見があったが、それこそが、FIM評価の重要なポイントであることを再度認識できるよう指導していく。さらに、講義内容を精査する。	34	33	97.1%
地域理学療法学（Q1）	田中 聡	【昨年度の結果を踏まえた授業改善点】 昨年度に限らず、本科目は授業外学修時間（設問2）が短いことが課題であった。今年度は新聞記事や関連資料を講義後に読むよう配布したが、それだけでは数字の改善には表れず、全くしていない者4%、30分未満の者が43%であった。この点は次年度にさらに改善できるよう具体的な指示が必要と考えている。【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】 質問に関しては授業終了時に限らず随時受け付けた。グループワークを多く取り入れた講義であるので、グループワーク内に各グループの討議内容を傾聴し、必要な場合はファシリテーションを行った。グループワークでの結論には否定することなく、様々な考えがある点をクラスで共有した。【アンケート結果からみた今後の課題】 授業外学修時間の設問以外は肯定的な意見であり、授業の目標とする力が身につく（設問6）、授業の教材の適切性（設問7）、授業内容に関してさらに学びたい（設問8）、学修活動に対しての必要な支援を得ている（設問9）は、100%が肯定的であった。現在の授業内容を継続しつつ、授業外学修の指示を改善していきたい。その改善により総合的な満足度（設問10）が97%を100%となるよう目指したい。	34	23	67.6%

■担当教員コメント（専門科目） 保健福祉学部 令和7年度前期

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
臨床理学療法学（Q1）	小野 武也	1）昨年度の結果を踏まえた授業改善点 ・授業内容の理解を促すために、学生同士でのディスカッションを設けた。 ・講義に使用する資料やパワーポイントを改善した。 2）履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 ・授業の後半に、講義内容が理解できているかどうか学生相互に確認する時間を設けた。 ・疑問や不明な点に関する発言があれば、追加説明を実施した。 3）アンケート結果から見た今後の課題 ・さらなるアクティブラーニングによる講義形式を取り入れ引き続き計画的に実施していきたい。	34	0	0.0%
作業療法学概論（Q1）（作業・コース選択）	吉川 ひろみ	①昨年度の結果を踏まえた授業改善点：昨年度は授業評価回答者が少なかったので、今年度は最終授業日に課題を出さずに、授業評価に回答するよう促した。32名中28名が回答した。 ②履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点：毎回授業後のクイズで、学んだこと、意見・感想を提出させ、それに教員のコメントを付けて、チームスで共有した。教科書の内容をまとめた動画視聴を事前課題とした。 ③アンケート結果から見た今後の課題：必要な支援、満足度について否定的評価をした学生は1名で、その他の項目では回答者全員が肯定的回答だった。自由記載では、より多くの教員の講義を希望する記載が1件あった。その他の学生のコメントからは、作業療法の価値観を反映した教育Learning by doingの価値を理解できたのではないかと推測できる。	32	28	87.5%
作業科学（Q2）（作業）	吉川 ひろみ	1昨年度の結果を踏まえた授業改善点：課題内容と締切を明示し、リマインドを繰り返した。 2履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点：毎回の授業後にフォームズで、学生からのフィードバックを得て、次の授業で共有したり、コメントを述べた。 3アンケート結果から見た今後の課題：30名中26名が回答した。項目1, 4, 5, 6, 8, 9, 10は、全員が肯定的回答だった。特に真剣な取り組み（項目1）と能動的学修機会（項目4）は80%以上の回答者が強い肯定を示した。経験的学修が行われた結果だといえるので、今後も続けたい。自由記載では、楽しい、多様な意見を知るといった回答の他に「不思議に思っても、答えは自分で考えることが多いため、頭を悩ませることが多いです。頭を働かせるいい機会になると思いました。」というコメントがあった。暗記学習から考える学修への転換点になるとよいと思う。	30	26	86.7%
運動学（Q1）（作業）	久野 真矢	昨年度の結果を踏まえて、能動的学修を促すために授業時間内でのグループワークを多く取り入れるようにした。また、履修者の反応を知るために、グループワーク中の受講者の反応の観察や会話を通して、履修者の理解度を把握するように努めた。 アンケート結果より、概ね高い授業評価であったと思われる。本授業科目は国家試験において重要な基盤となる科目である。したがって、本授業科目に対する探求心を促すことができるように、教材やグループワーク課題の工夫を行っていきたい。	29	4	13.8%
作業療法倫理学（Q1）	吉川 ひろみ	①昨年度の結果を踏まえた授業改善点：昨年度は授業評価回答者が少なかったため、今年度は最終授業日に課題を出さずに、授業評価に回答するよう促した結果全員が回答した。 ②履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点：授業で行ったことを振り返って考えてエッセイを書き、授業の後半では自分の書いたエッセイについて考えたりディスカッションする機会を設けた。提出された5つのエッセイすべてに個別にフィードバックコメントを記載して返却した。 ③アンケート結果から見た今後の課題：否定的評価は3～7%であったが、自由記載に「～を教えてほしかった」という記載が数件あった。倫理学では教えてもらうより、考えることが重要だと繰り返し伝える必要がある。教科書についての質問がなかったことから、読んでいないのではないかと推測できるので、読むことを課題した方がよいかもしれない。	29	29	100.0%
作業科学実習Ⅱ（Q1・Q2）	高木 雅之	①昨年度の結果を踏まえた授業改善点 実習で取り組む作業の選択が難しい学生がいた。そのため、学生がこれまでの作業経験を振り返って、他者と共有する時間を増やし、興味のある作業が思い浮かびやすくなるようにした。 ②履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 教員は実習中に各グループの机を回り、実習の進み具合を確認し、必要に応じて指導や援助を行った。また毎回の授業終了時、学生に実習の感想を記入してもらった。記入内容を確認し、次の実習に活かした。 ③アンケート結果から見た今後の課題 自由記載で、「先生方(講師の先生含む)が、満遍なく学生のところをまわってくれていたら、より質問しやすかったと思う」との意見があった。来年度はクラス全体に注意を向けて、実習で躓いている学生や疑問を感じている学生がいなかをみていきたい。	29	12	41.4%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
作業療法研究法（Q1）	吉川 ひろみ	①昨年度の結果を踏まえた授業改善点：昨年度は授業評価回答者が少なかったため、今年度は最終授業日に課題を出さずに、授業評価に回答するよう促した。 ②履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点：個別質問への回答をチームスの一般に書き込み、クラス全体で共有することとした。時間外のグループ学習の経過について、グループごとのチャネルを確認した。 ③アンケート結果から見た今後の課題：例年、進捗・難度が適さない学生が3割前後いるが、今年度は2割割だったといえる。授業終了後に個別面接評価を実施し、自主的な課題の再提出もあった。	30	19	63.3%
作業療法評価学Ⅲ（Q1）	織田 靖史	①昨年度の結果を踏まえた授業改善点 昨年度と同様の授業形式で実施したが、事前課題や事後課題を準備するなど工夫をした。また、授業時間が足りない分を自己学習課題などを実践するように設定した。 また、授業感想のフィードバックの時間をしっかりとった。 実際の授業では、体験的な学習を中心に、評価表を用いた面接練習や作業を用いた評価面接などを実施した。 ②履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 毎回の授業内容と自己学習課題に関して、①小テスト、②リフレクション、③授業評価を行った。 授業評価は、理解度、満足度とも、おおむね4～5でいずれも3以上であった。 ③アンケート結果から見た今後の課題 今回独自に行う授業アンケートの結果との相違から、独自に行う各授業後のアンケート結果では十分に学生の本音が言えていない現状があることが分かった。 また学生が、自己学習することに不安を持っていることやその意欲が乏しいことも分かった。 今回のアンケートの答えている11名の能動的であろう学生の評価が強く思う45%、そう思う55%であるので、授業に工夫が必要であろうことが推察される。 精神科作業療法は回答のないことに取り組むことが重要であるが、それについて一定数が困惑している（拒否的である）ことが分かった。 何度もアナウンスしたが、11名の回答と回答率が約3割であり、回答率の低さは授業に対する評価の低さを反映している可能性がある。 今元先生の第8回目の振り返りの資料に対して、高評価のコメントがあったことは、授業のまとめなどの活用が必要なことを求められていることがわかった。	31	11	35.5%
身体障害治療学Ⅰ（Q1）	西田 征治	【昨年度の結果を踏まえた授業改善点】昨年度に引き続き、身障系作業療法の主な対象疾患について疾患基礎、作業療法治療の実態を記述した資料（レジュメ）を作成し、Teamsを使って授業前に配布して事前学習ができるよう配慮した。また、実物の義手、装具や自助具を触ったり、治療方法を体験する演習を行い、患者の病態像や作業療法治療の理解を促す工夫をした。昨年の自由記述で義肢装具演習の補講を行ったことに対する肯定的意見があったため、今年度も1コマ補講を追加した。 【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】毎回ミニッツペーパーを配布してその回の要点や質問を書かせ、学生の理解度を把握するとともに、質問に対して個別にミニッツペーパーで回答し、さらに次の回の授業で全体にフィードバックを行った。 【期末アンケート結果から見た今後の課題】「授業に集中して真剣に取り組んだ」「能動的学習機会がある」「課題の内容と量は適切である」「授業の目標とする力身に着く」「教材・教具は適切だ」「この授業の内容をさらに学びたい」「学修に必要な支援を得た」「総合的に授業に満足している」の設問で肯定的な回答がいずれも100%だった。「取り組む課題が示されている」の設問では、否定的な回答が8%あったため、次年度はこの点を改善したい。自由記述では、「資料が分かりやすく、自宅学習がしやすかった」「補講で義肢装具に触れて臨床での使用を想像しやすかった」という回答があったので、この点は継続したい。	30	25	83.3%
身体障害治療学Ⅱ（Q2）	久野 真矢	1）昨年度の結果を踏まえた授業改善点 昨年度、授業外学修の時間数が少なかったことから、具体的な指示を行ったり、授業に事例紹介を取り入れるなどの工夫を行った。 2）履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 授業ごとに行っている質問票の内容から大きな方針転換はしなかった。しかし、授業後半は集中力が途切れる場面を認めたため、課題を解いてもらうなどの授業構成の工夫を行った。 3）アンケート結果から見た今後の課題 依然として授業外学修時間は伸び悩んでいるため、テキストの使用法や予習・復習課題についてさらに工夫する必要がある。	30	3	10.0%
精神障害治療学Ⅱ（Q2）	織田 靖史	回答数が1名であるために、回答数の向上を考える必要がある。 ただ、1名の回答は好意的であり、基本的に昨年度より様々なコンテンツ（漫画など素材を増やすなど）授業を工夫したことが奏効していると思われる。 今回も回答数を増やすために頻回なアナウンスなど行ったものの回答数の向上が見られなかったため、今後の回答数の向上を工夫する必要がある。	31	1	3.2%

■担当教員コメント（専門科目） 保健福祉学部 令和7年度前期

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
認知障害治療学（Q1）	久野 真矢	昨年度の結果を踏まえて、毎回、能動的学修を促すために復習すべき箇所を明示するようにした。また、履修者の反応を知るために、学期中に不定期ではあるが自由記述式アンケートを行い、授業の進行に努めた。 アンケート結果より、資料の見やすさ、わかりやすさ、復習のしやすさ、事例検討を通じた理解のしやすさなど概ね高評価であったと思われる。しかしながら、授業外学修に関する回答結果より、授業外学修の時間を増やすための予習・復習課題の量と内容について検討が必要と考える。	30	5	16.7%
発達障害治療学（Q1）	助川 文子	学生がアクティブラーニングできるよう、講義の後、演習、グループディスカッションと発表、個人レポートを組み合わせで実施した。課題量や学習内容は適切な量として学生が捉えていると感じた。授業資料については、教員が配布資料を白黒印刷し、授業時に配布していたが、希望があったことから、カラーのPDFを再度配布した。授業資料については、印刷に加え、今後PDF配布も検討したい。	30	4	13.3%
老年期障害治療学（Q1）	西田 征治	【昨年度の結果を踏まえた授業改善点】昨年度に引き続き、作業療法士に必要とされる認知症を中心とした国の施策、アセスメントや作業療法治療に関する資料（レジュメ）を作成し、Teamsを使って授業前に配布して事前学習ができるよう配慮した。また、今年度は新規に老人保健施設における作業療法の役割や実践の理解を深めることを目的に、現場で活躍している作業療法士を講師として招聘し、講義をしていただいた。昨年の自由記述で、「授業時間内に学んだことをもとに事例検討を行ったことで知識の結び付きが強まった」との意見があったため、今年度も2つの事例を授業内する時間を設けた。 【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】毎回ミニッツペーパーを配布してその回の要点や質問を書かせ、学生の理解度を把握するとともに、質問に対して個別にミニッツペーパーで回答し、さらに次の回の授業で全体にフィードバックを行った。 【期末アンケート結果から見た今後の課題】「授業に集中して真剣に取り組んだ」「課題の内容と量は適切である」「授業の目標とする力身に着く」「教材・教具は適切だ」「この授業の内容をさらに学びたい」「学修に必要な支援を得た」「総合的に授業に満足している」の設問で肯定的な回答がいずれも100%だった。「取り組む課題が示されている」「能動的学習機会がある」の設問では、否定的な回答がそれぞれ11%、4%あったため、次年度はこれらの点を改善したい。自由記述では、「配布資料が分かりやすく説明が丁寧で分かりやすかった」「事例を通してペアで話し合いながら学ぶことができてよかった」という意見があったので、次年度も講義に加えて事例を通したPBL（問題基盤型学習）形式の授業を継続したい。	30	28	93.3%
地域作業療法学（Q1）	高木 雅之	①昨年度の結果を踏まえた授業改善点 昨年度、学生から他のグループの状況や意見も知りたいというコメントがあったため、今年度は学生がグループを超えて交流する時間を設けた。 ②履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 学外での活動を行ったあと、グループの記録と個人の記録を提出させ、学びの状況を確認した。グループの記録にはコメントを返し、学びを促した。記録の中では、記録内容では事実の記載が多く、経験からの学びが少なかったため、経験学習の方法を伝え、経験から学びを得ることを促進した。 ③アンケート結果から見た今後の課題 すべての項目で全員が「強く思う」または「そう思う」と回答した。また「実際に学外で経験しながら学ぶことができ、他のグループの活動も授業で共有できてよかった」「グループ内で話す時間がたくさんあって有意義な時間を過ごせている」とのコメントがあった。今後もグループ内のメンバーだけでなく、グループ外のメンバーや教員と意見交換する機会を積極的に設けていきたい。	30	26	86.7%
日常生活援助論（Q2）	古山 千佳子	アンケートの必要性を説明し、授業後に時間をとって回答を求めたことで回答率が90%を超えた。ほぼ全員がこの授業に熱心に取り組み、満足していると回答していた。授業では事例を中心に、グループワークを取り入れて授業したことが学生の意欲向上に繋がったと考える。今後も継続していきたい。一方で、最低限身に着けてほしい知識については資料を提供して自己学習を促し、試験で学習状況を確認した。より自発的な学習となるよう工夫が必要と考える。	30	28	93.3%

■担当教員コメント（専門科目） 保健福祉学部 令和7年度前期

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
福祉機器論（Q2）	西田 征治	【昨年度の結果を踏まえた授業改善点】昨年度に引き続き、作業療法士に必要とされる福祉用具の適用や利用可能な制度に関する資料（レジュメ）を作成し、Teamsを使って授業前に配布して事前学習ができるよう配慮した。また、実物の福祉用具や自助具を触り、その特徴や操作方法の理解を促す工夫をした。昨年の自由記述で、事例検討をすることで福祉用具の特徴や選定について学びを深められたとの意見があったため、今年度も毎回授業の中で事例検討をする時間を設けた。 【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】毎回ミニツペーパーを配布してその回の要点や質問を書かせ、学生の理解度を把握するとともに、質問に対して個別にミニツペーパーで回答し、さらに次の回の授業で全体にフィードバックを行った。 【期末アンケート結果から見た今後の課題】「授業に集中して真剣に取り組んだ」「能動的学習機会がある」「課題の内容と量は適切である」「授業の目標とする力身に着く」「この授業の内容をさらに学びたい」「学修に必要な支援を得た」「総合的に授業に満足している」の設問で肯定的な回答がいずれも100%だった。「取り組む課題が示されている」の設問では、否定的な回答が7%あったため、次年度はこの点を改善したい。自由記述では、「毎回の授業ごとに事例検討の時間が設けられており、その日に習ったことを事例に活用することができてよかった」という肯定的意見があったので、次年度も今年度の形式を踏襲したい。	30	28	93.3%
作業適用学（Q2）	坂本 千晶	●履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 毎回の授業内容に応じた実践が課題となり、その課題の記録とそれに対する意見や感想を毎回提出することとし、さらに報告や相談があればいつでも受けることとしていた。必要な支援があれば、適宜対応した。さらに学生は複数名でディスカッションしながら取り組めるよう類似した対象者によりグルーピングし、実践の報告、困りごとの相談、実践の振り返りなどを、毎授業で実施した。このディスカッションは全体でも共有し、都度教員がフィードバックし、履修者全員でシェアした。また学生が主体的に作業療法実践の経験を積めるよう授業を構築した。 ●アンケート結果から見た今後の課題 回答者してくれた学生は授業に対して概ね良い評価であった。しかしながら各学生の実践の進捗状況に合わせた細やかな支援は検討の余地があると考えため、次年度以降の課題としたい。	30	23	76.7%
感覚統合療法特論（Q2）	助川 文子	アンケートの回答に関して複数回授業で学生に説明と回答を依頼したが、本授業が第1Q後期に設定されておりアンケート回答期間と時期がずれていたためか、1名の学生の回答しか得られなかった。そのため、全体についてアンケートからは検討できない。	30	1	3.3%
クリニカルリーズニング（Q1）	吉川 ひろみ	臨床実習後の集中講義のため、授業評価回答期間に授業が終了しなかったため、回答者はいない。	18	0	0.0%
学習認知心理学（Q2）	古屋 泉	【昨年度の結果を踏まえた改善点】心理学は高校ではほとんど学習していないため、内容の理解・把握がの促進のため身近な場面の事例を多く紹介した。 【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】比較的少人数のため身近な場面の事例を挙げたときの、学生の反応を観察して、興味がある内容と思われる部分を切り口に解説を行った。 【期末アンケート結果から見た今後の課題】1年生対象で講義形式のため、双方向のやりとりは少なかったと思われる。講義の内容にあまり興味がない学生も多数履修していると思われるため、課題などはほとんど与えていなかったが、今後は検討していきたい。	29	10	34.5%
コミュニケーション障害学概論（Q1）（コミュ・コース選択）	小澤 由嗣	コミュニケーション障害学の初年次入門科目である。担当教員は、例年、受講生が当該分野への関心を深め、専門科目だけでなく、これから学ぶ基礎科目の学修の意義の理解も含めて、学修へのモチベーションを高められるよう工夫して授業を行っている。たとえば、私たちににとってコミュニケーションとは何かを具体的に考えてもらうことに始まり、そのコミュニケーションが言語聴覚障害の発症によって、どのような影響を受けるか、それに対して、言語聴覚士はどのような支援を行うかがイメージできるよう、動画、音声資料の供覧はもちろん、演習も交えて、授業を展開している。その効果は、たとえば、設問1の学生自身の授業への集中度、真剣な取り組み度の評定の高さ、設問6の目標とする力が身につくの評定の高さ、設問8のさらに学びたいなるにおいて、強くそう思うが約90%を占める点からもよくうかがえる。毎時間が楽しみだった、各教員が丁寧に教えており、とても分かりやすかったという肯定的な自由記述があった。設問4の能動的学修の機会の有無については学生の評価が分かれていた。これは1年次1Q開講の入門科目であり、コマ数も限られているため、体験学修、演習に当てる時間をもっとあるとよいと感じる学生もいたのかもしれない。分野の性質上、学年進行および学修の進行にしたがって、実際の学修、演習、実習の機会が増えていくので、楽しみにしてほしい。	31	24	77.4%

■担当教員コメント（専門科目） 保健福祉学部 令和7年度前期

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
耳鼻咽喉科学（Q1・Q2）	田口 亜紀	ほとんどのアンケート項目で「強くそう思う」「そう思う」の割合が多く、学生に満足のいく講義が遂行できたと思われる。 総合的判断でも平均点3.6と比較的高い点数を得ることができた。 ①昨年度の結果を踏まえた改善点 昨年度は能動学習型の機会が少なかったので、今年度は体験型の講義時間を昨年度より増やした結果、アンケートでも昨年度より良い結果が得られた。が、まだ少ないという意見も少数散見されたので、来年度は能動学習型の機会をもう少し増やすよう検討したい。 ②履修者の反応を知るために学期中に実施した方法 毎回講義後に課題テストを実施した。その結果、履修者は講義に真剣に取り組み、講義内容が把握できているかも確認できた。毎回のテストが良かったという感想も得られた。 ③アンケート結果から見た今後の課題 講義時間外の学習時間を要していないようなので、来年度からは講義時間以外での予習復習ができるような内容を検討していきたい。 また、今年度は講義の部屋が狭く、スライドが見にくいというコメントもあったので、座席配置等工夫したい。	30	27	90.0%
発達系障害学概論Ⅱ（Q2）	堀江 真由美	テスト当日の授業内容は、理解を深め身に付けて頂くために、事前配布し学修してもらうように考慮したいと思います。	30	18	60.0%
聴覚系障害学演習Ⅰ（基礎聴覚検査）（Q2）	長谷川 純	昨年度の結果をふまえ、各検査の聴覚検査全体の中での位置づけが理解できるような説明をしました。 授業期間中、毎回のレポートのコメント欄、および、授業Teamsのチャットでコメント・質問をできるようにし、次の授業の際にクラス全体に補足説明するなどしました。 わかりにくい内容については、まとめの授業の際に、過去回の資料をあらためて説明するなどして、理解の確認をするようにしたいと思います。	30	24	80.0%
発声発語・嚥下系障害学概論Ⅰ（音声障害・吃音）（Q1）	田口 亜紀	ほとんどのアンケート項目で「強くそう思う」「そう思う」の割合が多かったのでよかったです。 全体の平均点も3.7であった。 ①昨年度は能動学習型の機会が少なかったので、今年度は体験型の講義時間を昨年度より増やした結果、アンケートでも良い結果が得られた。 ②履修者の反応を知るために、毎回講義後に課題テストを実施した。その結果、履修者は講義に真剣に取り組み、講義内容が把握できているかも確認できた。 ③講義時間外の学習時間を要していないようなので、来年度からは講義時間以外での予習復習ができるような内容を検討していきたい。	30	28	93.3%
発声発語・嚥下系障害学概論Ⅱ（構音障害）（Q2）	小澤 由嗣	機能性構音障害、口蓋裂術後の構音障害への言語聴覚士の支援を具体的に理解できるよう、臨床の流れに沿って検査法の手続き、結果のまとめ、聴取判定トレーニング、系統的構音訓練の実際についてベアワーク、グループワークを導入しながら授業を行ってきた。また、受講者の質問、感想を次の回に全体で共有、解説し、理解を確認しながら単元を進めた。その結果、授業目標の達成度、授業内容への関心の保持、総合的な満足度は概ね良好だったと考えている。回答上、授業外学修時間が若干少ない傾向があるが、事前学修ビデオの供覧など、授業外学修をサポートしている。より活用されるよう努めたい。	30	16	53.3%
発達系障害学概論Ⅰ（Q1）	細川 淳嗣	授業スピードが速いとの意見があった。 授業外学修時間を増やすためにも、授業以外での課題（予習課題も含め）を現在よりも増やすことで、授業時間中に取り組む内容の量を減らし、ディスカッションなどの分量を増やしたい。	32	16	50.0%
認知系障害学概論Ⅰ（Q1）	津田 哲也		28	18	64.3%
認知系障害学概論Ⅱ（Q2）	津田 哲也	前年までの反省で資料の文字サイズ1スライドあたりの情報量を抑えた。今年度は資料についての指摘はなく、概ね全員が前向きに取り組んでいるとのことであった。動画視聴中の解説は動画を止めてほしいという要望があり、次年度はそのように対応したい。	30	27	90.0%
聴覚系障害学概論Ⅰ（Q2）	長谷川 純	昨年度の結果をふまえ、各回の授業内容と科目全体のテーマとの関係、また、各回の授業内容同士の関係が明確になるよう、説明を加えました。 授業期間中は、Teamsにて質問・コメント等をできるようにし、必要に応じて次の授業の際に補足説明をしました。 理念的な授業内容が多いため、試験に向けての準備のイメージがつかみにくかったようですので、授業の中で考え方のヒントを提示するようにしたいと思います。	30	28	93.3%

■担当教員コメント（専門科目） 保健福祉学部 令和7年度前期

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
生涯発達心理学（Q2）	古屋 泉	【昨年度の結果を踏まえた改善点】内容の理解・把握がの促進のため身近な場面の事例を多く紹介した。【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】比較的小人数のため身近な場面の事例を挙げたときの、学生の反応を観察して、興味がある内容と思われる部分を切り口に解説を行った。【期末アンケート結果から見た今後の課題】講義形式のため、双方向のやりとりは少なかったと思われる。講義の内容にあまり興味がない学生も多数履修していると思われるため、課題などはほとんど与えていなかったが、今後は検討していきたい。	29	7	24.1%
形成外科学（Q2）	小澤 由嗣		29	7	24.1%
歯科口腔外科学（Q2）	濱田 充子		29	7	24.1%
発達系障害学演習Ⅱ（評価）（Q1）	細川 淳嗣	①授業時間内にレポートの骨子が作成できるように、個人で考える時間→数名の学生で意見交換→全体で共有という流れで進めるように心がけた。②その結果が、学生からの事例について共有でき学習しやすかったという意見につながったものと思われる。また、時間外学習時間も多くの学生が2～4時間と回答しており妥当な量であったように思う。③レポートが多くて大変だったという意見があったが、学外臨床実習では、限られた時間の中で毎日レポート（デイリー）を書くことが求められるので、レポートの指導として時間を決めてその中で最大限の内容で書くようにといった時間管理のスキルについての指導も必要かもしれない。	31	20	64.5%
認知系障害学演習Ⅱ（評価）（Q1）	坊岡 峰子	昨年度のアンケート結果より、グループで考え発表させる課題は、テスト期間を避けるようにした。その結果、ある程度の余裕はあったようだが、集中講義などと重なることもあったようである。早くから課題を提示して欲しいといった記載もあるが、講義の進行とも関連するため限界はあり、学生の方でもグループ活動を実施する日程調整を最優先させる意識をもち、理解を示して頂ければと思う。評価は全項目、ほぼ「そう思う」以上の評価であり、また授業後の「まとめと感想」でも、大切な点を学修できている記載が多く見られた。「高次脳機能障害」をもう少し早く、もう少し多く講義してほしいという意見があり、気持ちは理解はできるが、最低限理解すべき「失語症」に関しても十分とは思えないため、難しい点もある。来年度は少し構成を検討してもよいが、専門的な見地から考えると、高次脳機能障害は理論より患者さんの症状を体験して学ぶ方が効果があると思えるし、2コマは外部講師の実践的な話もあるので必要と思う点はテキストを確認し、授業で紹介している書籍やビデオを図書館で確認して欲しい。事前動画の視聴は効果的であるようだが、テクニカルな問題も生じていたようで残念な面もあり、来年度は改善したい。一方、視聴できない場合には、遠慮せず早めに教員に知らせて欲しい。	31	30	96.8%
認知系障害学演習Ⅲ（支援）（Q2）	津田 哲也	事前動画はなるべく講義日より早めにアップしていたが接続がうまくいかなかったものもあったので次年度以降は改善したい。事前課題やレポートも提示しているが時間外学習が少ないものも多いので、レポートの設定を具体的に指定するなど調べ学習などを取り入れるなど改善したい。（津田）。	30	20	66.7%
聴覚系障害学概論Ⅱ（Q1）	佐藤 紀代子	① 昨年度、授業外学習時間が4時間未満と示した学生が多く、授業内で考えてみる課題を呈示するようにした。4時間以上を示す学生の割合は多くなったが、課題について、意見交換をする時間が少なく、物足りなかったと考えている。② 課題に対する反応から理解度を確認した。理解が難しかったところは、繰り返すなど工夫をした。③ アンケートの回収率が30%程度であった。授業時間で行えるようにしたい。ほとんどの学生が、授業に集中し、真剣に取り組んでいると回答しているが、授業外学習時間は30%が4時間未満と回答している。課題の呈示などを明らかにしていきたい。「能動的学修機会があるか」に対して「強くそう思う」と考えている学生が30%程度おり、課題の呈示について、工夫をしていきたい。また、教材の工夫を行い、さらに学びたいと回答する学生の割合が多くなるように工夫していきたい。	31	9	29.0%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
聴覚系障害学演習Ⅳ（人工内耳）（Q1）	佐藤 紀代子	① 授業中に回答を依頼したため、回答率が90%以上となった。 ② 演習の課題として、人工聴覚器について各班で調べる課題を呈示した。これによって、文献を読みこむ過程で疑問点など質問を受けるなどして、理解度にふれることができた。できるだけ、その場でフィードバックした。 ③ 授業に試験に取り組んだかについては、半数が「強くそう思う」と回答した。グループで発表するための課題を出しても、授業以外の学修時間が2時間未満が40%ほど回答していることが気になっている。また、「取り組むべき課題が示されている」に「強くそう思う」が50%近くあり、能動的学修の機会があるかについて80%以上が「強くそう思う」と回答していた。また、「授業の満足度」についても、半数近くが「強くそう思う」と回答していた。 班ごとに、人工聴覚器について調べる課題について、概ね好評な意見であった。学生どうしてで調べていくことで、覚えること、知識の定着があったという自由筆記があった。一方、班によっては、情報が少ない人工聴覚器もあり、教員からの資料の提示などの希望があった。	31	28	90.3%
発声発語・嚥下系障害学概論Ⅲ（嚥下障害・頭頸部がんりハ）（Q1）	中村 文	①昨年度の結果を踏まえた授業改善点 昨年度は前任の先生が行われており、本年度から担当したため、コメントは難しい。 ②履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 授業後に「気づき、感想、質問など」をFormsで収集したり、課題の提出によって、各学生の理解度、技術の修得状況を把握した。それらを踏まえたフィードバックや補足は次の授業時に履修生全体に向けておこなった。また、グループワーク時には、各学生・グループをみまわり、助言をしたり質問を受けられる環境を提供した。 ③アンケート結果から見た今後の課題 「文字面だけでは分らなかったところも、実践してみることで解決できた」「実際にやってみたことで、理解が深まった」といったコメントから、今後も実技演習の機会を確保し、経験することで理解を深め、定着させられる授業を提供していく必要があると考える。 「かさばるため、配布資料を両面印刷にしてほしい」とコメントがあった。印刷機の不調もあり片面印刷で提供することが多かった。今後は、印刷機のトラブルにも対応できるように早めに印刷する、学生が各自で印刷できる形で提供するなど、改善する必要がある。	30	10	33.3%
心理測定法特論（Q2）	古屋 泉	【昨年度の結果を踏まえた改善点】レポートのフィードバックを昨年度より速やかに行なった。 【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】実際の測定場面では各班に積極的に働きかけを行った【期末アンケート結果から見た今後の課題】科学レポートの書き方、さらに論文の書き方のペースとなる実習ではあるが、実際にその技能が必要とされるのは1年以上後のため、モチベーションの個人差が大きかったと感じた。また、履修者が多かったため、レポートのフィードバックが結果として遅くなった場合もあり、改善を試みたい。	28	5	17.9%
発達系障害学演習Ⅲ（支援）（Q2）	堀江 真由美		30	7	23.3%
発声発語・嚥下系障害学演習Ⅲ（嚥下・頭頸部がんりハ評価支援法）（Q2）	中村 文	①昨年度の結果を踏まえた授業改善点 昨年度は前任の先生が行われており、本年度から担当したため、コメントは難しい。 ②履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 レポートや課題の提出によって、各学生の理解度、技術の修得状況を把握した。それらを踏まえたフィードバックや補足は次の授業時に履修生全体に向けておこなった。また、実技演習やグループワーク時には、各学生・グループをみまわり、助言をしたり質問を受けたりできる環境を提供した。 ③アンケート結果から見た今後の課題 「授業プリントが前後していたので改善してほしい」について、授業の進行と配布資料の進行順が一致するように改善する必要がある。「訓練計画立案では自主的に調べながら学習をしたので、授業内容をより深く理解することができた」というコメントから、具体的な事例をとおして、授業で提供した知識・情報および関連して学生が主体的に収集する情報を活用する機会が、本科目にとって有効であった可能性を考える。今後も、具体的な臨床をイメージできる、臨床への必要性を感じられるように課題を設定したり、授業内容を改良したりする必要があると考える。設問2授業外学修の回答では「2単位科目：2時間未満」と短時間の回答もみられたが、これには同時期に臨床実習やそのほかグループワークなど時間外学修が求められる授業が複数並行していることの影響も考えられる。時間外グループワークを効率的にすすめられるように、グループ編成を他科目と揃えるなどの調整が引き続き必要である。	29	8	27.6%

■担当教員コメント（専門科目） 保健福祉学部 令和7年度前期

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
拡大・代替コミュニケーション特論（Q1）	坊岡 峰子	まず、14名履修者中1名しか提出していないため、評価の妥当性にも疑問があるので、毎時間後の「授業のまとめ・感想」の内容も考慮して回答する。評価の自由記述には、「コマ数に対する教員が授業したい内容の量が不釣り合いに感じる。その結果、授業を何度も延長したり解説が不十分になっていたりしていると思う。」とある点は、確かに教授すべき障害は広範にわたり、4年生対象であるため、なるべく臨床で役立つようにということが念頭にあり、量が多く時間を超過してしまうことが多かった。その際には、履修生には一応延長に関する都合は確認していたが、難しい点である。この点は、前年度の評価なども考慮し、なるべく内容を厳選しているつもりであるが、卒後の自己学習に委ねることも今後検討していきたい。記述に「発表について、自分で考えた仮想事例を紹介することを要求されるのならば事前に伝えておいてほしかった。その説明もないのに、発表終了後に苦言を呈されるのはどうかと思った。」とあるが、多くの履修生は指示を理解し発表しており、その内容について、助言をしたつもりであるが、再度課題の提示の仕方は具体化することも検討したい。授業後の感想では、多くの気づきが得られたこと、臨床げ現場でも生かしていきたいことなどが記載されており、基本的な内容は実践的であると考え、次年度継続していきたい。一方、「他の講義ではあまり丁寧に扱われていないAACについて、細かく具体的に学べるという点で履修して良かったと感じた。」という記述もあり、細かく、具体的に示すことの必要性は示されており、量と質を勘案した構成を再考していきたい。	14	1	7.1%
音声学Ⅰ（Q2）（コミュ）	津田 哲也	設問6 設問8については全員好意的に受け止めていたが、内容や進め方には課題が残る結果であった。単元ごとのレポートまとめ、ミニテストなどを取り入れているものの不評に感じる学生も居たので課題量は学生に確認しながら進めていきたい。昨年に続いてなるべく音声サンプルを講義中に流すようにしたがこれは好評で次年度以降も継続したい。	29	24	82.8%
社会福祉の原理と政策Ⅰ（Q1・Q2）（人福・コース選択）	手島 洋	授業に対する満足感が高かったが、授業以外の時間の学修については改善を要すると思われる。具体的には、授業の内容をより深めるための資料や文献の提示やミニレポートの設定などを次年度以降は検討したいと思う。	43	9	20.9%
社会保障Ⅰ（Q1・Q2）	崔 仙姫	①昨年度の結果を踏まえた授業改善点 本年度が初年度であるため、前年度との比較は行えない。今後は次年度以降の推移をもとに比較・分析を行う予定である。 ②履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 学期中に口頭で履修者の意見を収集し、授業運営に反映するよう努めた。例えば、資料の配布方法については一方的な形ではなく、履修者の要望を踏まえて柔軟に対応した。また、授業中の説明速度や進行方法についても集中を維持できるよう工夫し、適宜調整を行った。 ③アンケート結果から見た今後の課題 講義だけでなく、アクティブ・ラーニングを実現するためにグループワークとグループごとの発表を実施している。これらの活動を通じて、履修者が授業内容を十分に理解し、自らのものとして身につけ、自己の言葉で説明できるようにすることが本講義の目標である。	41	17	41.5%
ソーシャルワーク演習（Q1～Q2）	永野 なおみ	①昨年度の結果を踏まえた授業改善点 今年度も2名の教員で担当した。事前に次の授業で取り上げる演習のテーマを伝え、援助技術の講義との関連を意識してもらうよう努めた。 ②履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 各教員が、毎回授業後に提出されるコメントカードの内容、及び、授業時のグループでの話し合いやロールプレイの様子を観察を通して、学生の理解度や関心を確認しながら進化した。 ③アンケート結果から見た今後の課題 設問1～10について、いずれも90%を超える学生が「強くそう思う」、「そう思う」と回答しており、おおむね肯定的な評価が評価を得た。また、従来から2年次の実習が近づくにつれ、授業に対する学生の意欲、関心が高くなる傾向があり、このことがアンケート結果にも反映されていると考える。実習を支える科目としての位置付けを意識し、さらに実習との関連を活かした授業とすることを課題としたい。なお、今回もアンケート回答者数が少ないことが課題である。最後の授業時に回答を呼びかけているが、次年度からは授業時間内に十分な回答時間を設けたい。	42	17	40.5%
ソーシャルワークの理論と方法（専門）A（Q1・Q2）	金子 努	【昨年度の結果を踏まえた改善点】より具体的なイメージをもって実践的に学習できるようにするため、最新の現場の動向を踏まえた授業内容づくりや新聞記事を教材に使用したり、視聴覚教材を活用した。【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた事業改善点】Teamsを活用し、毎回授業終了後に質問や感想を提出してもらい、その質問への回答を行ったほか、感想を次回授業へ反映させた。【期末アンケートから見た今後の課題】満足度についてはある程度得ることができた。しかしながら、予習、復習を必要とする工夫が不十分であったこと、授業時間内で受講者に考えてもらい受講者同士で意見交換をするなどの時間を設けていなかったことが、今後改善を要する課題として挙げられる。	36	14	38.9%

■担当教員コメント（専門科目） 保健福祉学部 令和7年度前期

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
障害者福祉（Q1・Q2）	米倉 裕希子	昨年度の結果を踏まえ、今年度も事前学習の課題及び多様な授業参加の機会を設定したが、昨年に比べ、課題の提出率が低く、任意のプレゼンテーションに参加する学生が少なかった。他の授業でも課題や発表が多かったことが影響していると思われる。学生の負担を考慮し進めていく必要があると感じた。 履修者の反応を知るために、事前学習の課題では、前回の授業での質問や感想を自由に記述してもらうようにしており、次の回で感想を紹介したり、質問への回答を行った。授業のスピードが速い、またスライドに教科書の頁を記載してほしいなどの意見があり、できるだけ対応するように心がけた。 アンケートの結果では、全体的に肯定的な意見が多かった。自由回答では、「丁寧な授業と課題により、理解を深めることができた。」「疑問点などにも最後まで向き合ってもらい質問しやすかった。」といった意見があった。授業を受けて出てきた疑問や質問をフィードバックすることによって、さらに質問が出てくるなど良い循環になったため継続していきたい。今年度の授業方法をブラッシュアップするとともに、課題の内容や量の適切さについては否定的な回答もあった。本科目だけではなく、時間割全体を見ながら、課題量や提出期間については考慮する必要があると考える。また、今年度は授業資料は配布せず、Teams上でPDFを共有したが、資料を配布するかデータの共有とするかは今後の課題であると考えた。	41	22	53.7%
地域福祉と包括的支援体制Ⅰ（Q1・Q2）	田中 聡子	授業評価は、設問2の学習時間に関して1名のみ、学習をしていないがそのほかの設問はすべて100%、そう思う、強くそう思うの肯定評価であった。本授業は、毎回の小テストおよび課題シートの提出が評価の70%を占める。また、期末課題は毎回の課題シートを活用したものをKJ法によって図式化し、文章化する設定であるので、毎回の授業課題をしっかりとしないと期末課題ができない構成になっている。授業資料は毎年アップデートしていること、時事問題を採用し、グループワークを行い、その内容についてコメントするなどの双方向性の授業のまえ、高い評価を得ている。なお、グループワークをしやすいように席はあらかじめ確定しているため、広い教室の後ろに固まって学生が座って聞くことがないので、授業環境を前もって作っておくことも大事なことで毎年、思っている。	41	17	41.5%
ソーシャルワークの基盤と専門職（Q1・Q2）	伊藤 泰三	今後ともアクティブラーニングを推進していきたい	41	16	39.0%
ソーシャルワークの理論と方法Ⅰ（Q1・Q2）	朝比奈 寛正	②履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 2年生2Qに配置された科目であったために、ソーシャルワークの基本的理解や各種理論について知識が定着するように、講義の比率を高めても良かったかもしれない。 学生と協議し、紙ベースで書き込み可能なレジメを配布し、授業終了後に書き込まれているレジメを電子データとしてアップするように工夫した。 講義で説明や解説に時間を割いた結果、教員からの発問や投げかけが少ないことがあり、授業展開に改善が必要と感じた。 アクティブラーニングでは、現場の実践に基づくライブ感のある資料やテーマを基本にしつつ、何気ない日常生活の中でも福祉課題があることを示唆するように心がけた。 毎回の授業終了後の課題をTeamsで提出できるようにしたが、授業内で扱えなかった質問に答えられるように改善していきたい。 ③アンケート結果から見た今後の課題 2コマ続きで4、5限に配置された科目で疲労感もあっただろうが、集中力を研ぎらせず受講していた学生には感服する。 4、5限に配置されていたため、前半は講義、後半はアクティブ・ラーニングの授業展開にして集中力を維持することに努めた。反面、知識の定着が未達のままに応用が必要なロールプレイなどを行ったために上手くいかない体験を与えることになり、フォローアップが不十分であった。次年度は、学生の到達度に応じたアクティブ・ラーニングを導入することを検討する。 社会福祉の現場やソーシャルワークを展開する際は明確な正解がないこともあり、結論や結果よりもクライアントの満足感や過程が重視される傾向がある。本科目はソーシャルワークの理論と方法を学ぶ科目であるが、不変の知識や明確な答えに傾倒しないように価値や倫理を醸成できるように教授することが今後の課題である。	41	27	65.9%
現代の精神保健の課題と支援Ⅰ（Q1・Q2）	勝見 吉彰	受講者36名中13名の回答があった。毎回授業に対するコメント・質問の提出を求め、次の回に教員からのリプライを返すようにしていた。学生による評価から検討すべき課題として考えられることは、能動的学習機会を提供できるような工夫を行なうことと、授業時間外に取り組むべき課題を明示することがあげられる。次年度にはこの点を改善していきたい。	36	13	36.1%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
精神保健福祉の原理Ⅰ（Q1・Q2）	越智 あゆみ	（1）昨年度の結果を踏まえた授業改善点：昨年度の結果を踏まえ、学生自身が自主的な学修に取り組むことができるよう、毎回の小テストの実施を継続した。また、学ぶ意欲を高められるよう、グループで議論する時間を設けたり、ワークショップ形式での事例検討を取り入れた。（2）履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点：毎回の授業終了後、リアクション・ペーパーの提出を求めた。質問への回答や気づき・感想等へのコメントは、翌週の授業で全員に対して行い、クラス全体で共有できるようにした。（3）アンケート結果から見た今後の課題：時間外学修時間に関しては否定的回答が多く、授業の内容・量に否定的回答が一部あった。それ以外の項目では、いずれも肯定的回答であった。教科書を使って基本的知識を確認しながら、ソーシャルワーカーとしての着眼点や考え方も一緒に学んでいく授業内容としていたが、全般的に高い評価を得ることができた。一方、毎回の授業内容について、翌週の冒頭に小テストを実施しているものの、授業外学修を十分に行えていない学生が多くいることは今後の課題といえる。小テストを機会に基本的知識を着実に積み重ねていくことは、翌年には現場実習に出る学生にとってもメリットとなるはずである。今後この問題意識とねらいを学生と共有できるように取り組みたい。また、授業で中心的に取り上げるキーワードについては、学生の感想などを見ながら再検討し、より良い授業にしていきたい。	37	24	64.9%
社会病理学（Q2）	澤田 千恵	アンケートの回答割合は36.8%であった。おおむねどの項目も肯定的評価が得られていたが、「設問9 この授業での学修活動（発言や提出物など）に対して必要な支援を得ている。」については、「そう思わない」との回答が7%あった。 この結果から、授業全体としては学生の満足度が高いことがうかがえるが、一部の学生は学修活動に対する支援が十分でないと感じていることが明らかになった。特に、発言や提出物など具体的な学習場面において、必要なサポートが行き届いていない可能性がある。 本授業では、対面授業に出席した場合でも、授業の感想を翌日までにFormsから提出することを出席要件としていた。しかし、一部の学生が提出を忘れるケースが見られた。 これまでもグループ学習を導入し、学生同士が話し合いながら課題に取り組んできた。今後は、グループで作成した課題の提出をもって出席と見なす方式に変更する予定である。 この方式では、対面授業への参加およびグループ活動への貢献が出席認定の基準となるため、Formsによる個別提出を忘れた場合でも出席扱いにならないという不利益を防ぐことができる。また、グループでの協働を重視することで、学生同士の相互支援や学習意欲の向上も期待できる。 今後は、グループごとの課題提出状況を教員が把握し、必要に応じて個別フォローも行うことで、より公正かつ実態に即した出席管理を実現したい。これにより、学生が安心して授業に参加できる環境づくりと学習効果の向上を図る方針である。	38	14	36.8%
介護技術（Q1）	國定 美香	アンケートの結果、「設問10総合的に判断して、この授業に満足している。」を含む、「設問1 わたしはこの授業に集中し、真剣に取り組んでいる。」、「設問4 この授業では能動的学修機会がある。」、「設問5 この授業の課題の内容・量は適切である。」、「設問6 この授業の目標とする力（知識や技能など）が身につく。」、「設問7 この授業の教材（教科書・資料など）・教具（アプリ・ファイルなど）は適切だ。」、「設問8 この授業の内容に関してさらに学びたい。」、「設問9 この授業での学修活動（発言や提出物など）に対して必要な支援を得ている。」以上の8項目の設問において、全員の学生が「強くそう思う」もしくは「そう思う」と答えた。 今後の課題としては、「設問3 この授業では授業時間外に取り組むべき課題が示されている。」について、そう思わないと回答した学生が少数であったことから取り組む課題について検討する。	41	18	43.9%
総合演習Ⅰ（Q1・Q2）	松宮 透高	3年生前期に開講されるゼミナールであり、2つ以上のゼミを履修して後期からの所属ゼミナールを選択する。このため、回答者がいずれのゼミを想定して評価しているのかは把握できず、複数のゼミを評したものとしてとらえるほかない。回答率は過半数であったとはいえ、今後さらに回答を促す必要もある。設問2において授業外学修時間が不十分な回答者が3分の1に達している点は、アクティブラーニングの場としてのゼミナールにおいて大きな課題と言わざるを得ない。そのほかについてはおおむね「強くそう思う」回答が半数を占める設問もみられることから一定の満足度はあると思われるが、より一層の内容充実と学生自身の自学を促すプログラムの検討、そのゼミ間での水準統一などを図る必要がある。	38	21	55.3%

■担当教員コメント（専門科目） 保健福祉学部 令和7年度前期

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
保健医療と福祉（Q1・Q2）	永野 なおみ	①昨年度の結果を踏まえた授業改善点 講義の際の配布資料の充実をはかり、授業の進度に配慮した。 ②履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 授業後に提出されるコメントカードの内容等から、学生の理解度を確認しながら進化した。 ③アンケート結果から見た今後の課題 今年度は、講義中心の授業になり、能動的な学習の機会をあまり確保できなかったことが大きな反省点である。そのことがアンケート設問4にも反映されており、能動的な学習機会があるかについて「そう思わない」、「全くそう思わない」が計36%であった。社会福祉士に必要な知識レベルと、医療ソーシャルワーカーとして病院で求められる知識レベルの差が年々拡大しているが、前期終了後に病院で実習する学生に照準を合わせた授業内容にせざるを得ず、講義時間を大幅に拡大した。そのため、グループワークやディスカッションの時間を取れなかったことで、退屈に感じた学生もいたと思われる。次年度は、効率的な進进行を意識して改善したい。	38	18	47.4%
貧困に対する支援（Q1・Q2）	崔 仙姫	① 前年度の結果を踏まえた授業改善点 本年度が初年度であるため、前年度との比較は行えない。今後は次年度以降のアンケート結果や学期中の反応を踏まえ、継続的な改善を図る予定である。 ② 履修者の反応を把握するために学期中に実施した方法およびその結果を反映した授業改善点 学期中に口頭で履修者の意見を収集し、授業に反映するよう努めた。具体的には、グループワークやスライド発表を通じて自ら考える力や知識の整理に役立ったとの評価が得られた。また、映像教材を活用した学習が理解を深める助けになったという意見もあった。 ③ アンケート結果から見た今後の課題 講義に加えてアクティブ・ラーニングを実現するためにグループワークとグループ別発表を実施しており、これらの活動を通じて履修者が授業内容を自らの言葉で説明できる授業を目指している。教科書の活用に関して意見があったが、教科書内容は授業資料に要約して配布したものの、授業で直接参照する機会が少なかった点は課題と認識しており、今後の授業設計に反映する予定である。また、試験範囲や形式については数回にわたり案内したが、情報共有をより明確にするための追加的な改善が必要であると考えている。	39	18	46.2%
ソーシャルワークの理論と方法（専門）Ⅰ（Q1・Q2）	松宮 透高	まず回答者が半数以下であった点は、今後さらに回答を促す工夫につなごう。毎週、相当量の国家試験問題の分析を求めている。しかし、過剰な負担にならないよう解答のみを求めたことから、詳細な解説に毎回取り組んだ学生と解答のみだった学生で授業外学習量には大きな差異が生じている。設問2のレンジの幅は、これを反映したものと考えられる。質問5にも示されているように、適正な負荷と主体的な取り組みのあり方については、引き続き工夫をしなければならない。一方、講義時間では一方的なレクチャーになりがちであり、質問4の通り「強くそう思う」は相対的に小さなものであった点は、授業中にも参加度を高める構成にしたい。自由回答には肯定的なコメントがみられ、別途実施した授業コメントにも国家試験対策につながる、多様なゲストとの出会い、臨床的な内容といった点で評価が得られていた。今後、講義展開や課題の提示に修正を加え、参加やディスカッションを交えての展開に取り組みたい。	38	18	47.4%
ソーシャルワーク演習（専門）Ⅱ（Q1・Q2）	國定 美香	アンケートへの回答率は47.4%(回答者18名)である。 アンケートの結果、「設問2 この授業では、授業時間外に取り組むべき課題が示されている」、「設問4 この授業では能動的な学習機会がある。」、「設問5 この授業の課題の内容・量は適切である。」以上の3項目の設問において、全員の学生が「強くそう思う」もしくは「そう思う」と答えた。 今後の課題としては、「設問6 この授業の目標とする力が身につく」について、そう思わないと回答した学生が少数あった。目標については、資料配布したり、口頭でも説明しているが、学生にとって専門の知識と技術を身につけることは難しいことであると考えられる。また自由記述の設問で「何を教わったのかわからない」との回答があったことから、授業時に毎回演習課題のねらいを繰り返し説明し、受講生が学習の目的を理解して授業へ参加できるように改善していきたい。 加えて 「支援のイメージがしやすくなりました」、「「実際の福祉の現場がこれまでよりも具体的に想像できるようになったと思います」、「「グループワークが多く、意見交換することの大切さや他の人の思いや考えを尊重することの重要性など、授業内で多くのことを学ぶことができました」などの自由記述の回答もあったことから、引き続き、わかりやすい説明と演習の方法等について取り組む。	38	18	47.4%
社会福祉調査の基礎（Q1・Q2）	田中 聡子	回答者数18/38 回収率47.4%であった。授業評価に関して設問3、4、10は「強くそう思う」そう思う」で100%である。その他の設問も、設問2以外は概ね肯定的な評価である。自由記述に関して、卒業研究で活用できる、難しかったが、実践やグループワークが多かったので知恵を出し合いながら理解することができた。などのコメントがある。この授業は、講義科目であるが、演習やグループワークにより、学生が社会福祉調査の方法について実践できるようにしている。そのため、学生同士で事前課題に取り組むなど、主体的な学習ができている。次年度は授業外の課題について、検討し、より実践的かつ、卒業研究、卒業後に役立つようにしたい。	38	18	47.4%

■担当教員コメント（専門科目） 保健福祉学部 令和7年度前期

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
精神保健福祉制度論（Q1・Q2）	越智 あゆみ	（1）昨年度の結果を踏まえた授業改善点：昨年度の結果を踏まえ、学生自身が自主的な学修に取り組むことができるよう、毎回の小テストの実施を継続した。また、学ぶ意欲を高められるよう、グループで議論する時間を毎回取り入れた。（2）履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点：毎回の授業終了後、リアクション・ペーパーの提出を求めた。質問への回答や気づき・感想等へのコメントは、翌週の授業で全員に対して行い、クラス全体で共有できるようにした。（3）アンケート結果から見た今後の課題：時間外学修時間に関しては否定的回答が多い結果となっていた。それ以外の項目では、いずれも肯定的回答であった。教科書を使って基本的知識を確認しながら、ソーシャルワーカーとしての着眼点や考え方も一緒に学んでいく授業内容としていたが、全般的に高い評価を得ることができた。自由記述欄には、グループで感想を共有する機会を設けたことへの評価や、毎回の小テストが定着につながったなどの評価が書かれており、大変励まされた。一方で、毎回の授業内容について、翌週の冒頭に小テストを実施しているものの、授業外学修を十分に行えていない学生がいる。小テストを機会に基本的知識を着実に積み重ねていくことは学生にとってもメリットとなるはずである。今後この問題意識とねらいを学生と共有できるように取り組むなど、学生の意見を聴きながらより良い授業にしていきたい。	25	11	44.0%
総合演習Ⅲ（Q1・Q2）	松宮 透高	4年生前期に開講されるゼミナールであり、多くの教員が開講するため、回答者は所属ゼミナールを想定して回答しているが、個別の記述は見られない。また、回答率が極めて低く、今後この科目に対する評価回答について促す必要性が示唆される結果となった。回答の範囲では、満足度や必要な支援は高い評価で「真剣に取り組んでいる」ものの、ゼミであるにもかかわらず、設問2-8において「そう思う」が相対的に大きな割合を占めている点は、十分な満足度に達していないことも想定しておく必要がある。特に設問3において「取り組むべき課題が示されている」について「そう思わない」が1名とはいえる点も、課題といえる。ゼミナール間での内容チェックは不十分であるため、水準の保持に向けた働きかけを検討したい。	40	5	12.5%
地域介護実習（Q1・Q2）	國定 美香	回答した学生数が0人であった。	6	0	0.0%
心理アセスメント実習（Q1・Q2）	勝見 吉彰	受講者3名中1名が回答した。いずれの項目も肯定的評価であった。今後もより洗練された授業内容を提供できるよう取り組んでいきたい。	3	1	33.3%
ソーシャルワーク演習（専門）Ⅳ（Q1・Q2）	手島 洋	全体に満足感は高かった。その中で、アンケート結果から授業の材料についてもう少し詳しくていねいな内容のものを準備するところの強化が可能だと気付かされた。	40	5	12.5%
刑事司法と福祉（Q2）	澤田 千恵	授業評価アンケートの結果についてまとめる。まず、アンケートの回答割合は12.5%と低く、回答者が限られていた。これは、アンケート結果の信頼性や代表性に課題があることを示している。今後は、アンケートの回答方法やタイミングを工夫し、より多くの学生が参加できるよう促す必要がある。例えば、授業内で時間を設けて回答してもらい、あるいは回答をインセンティブ化するなどの方法が考えられる。「真剣に取り組んだ人」と「授業時間外に取り組む課題が示されていた」については、いずれも100%の肯定的回答であった。これは、授業に対する学生の意欲や、課題の提示が適切であったことを示している。今後もこの点は維持しつつ、課題の内容やフィードバックをさらに工夫し、学びを深める仕組みを導入することが重要である。例えば、課題を通じて自ら考え、調べ、発表する機会を増やすことで、より主体的な学びにつなげることができる。一方で、「能動的学修機会があるか」という項目については、肯定的回答が60%、否定的回答が40%と、他の項目に比べて低い結果となった。このことから、授業における能動的学修の機会が十分に提供されていないと感じている学生が一定数いることが分かる。今後は、グループワークやディスカッション、プレゼンテーション、プロジェクト型学習など、学生が主体的に参加できる活動を増やす必要がある。また、活動の目的や意義を明確に伝え、学生が積極的に取り組めるような環境づくりを心がけることも重要である。以上の結果から、授業への真剣な取り組みや課題の提示については高評価であったが、能動的学修機会の提供については改善の余地があることが分かった。今後は、学生が主体的に学べる場を増やし、アンケートの回答率向上にも努めることで、より良い授業運営を目指していきたい。	40	5	12.5%

■担当教員コメント（専門科目） 保健福祉学部 令和7年度前期

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
精神保健福祉演習Ⅱ（Q1・Q2）	金子 努	【昨年度の結果を踏まえた改善点】より具体的なイメージをもって実践的に学習できるようにするため、最新の現場の動向を踏まえた授業内容づくりや新聞記事を教材に使用したりした。【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた事業改善点】Teamsを活用し、毎回授業終了後に質問や感想を提出してもらい、その質問への回答を行ったほか、感想を次回授業へ反映させた。【期末アンケートから見た今後の課題】満足度についてはある程度得ることができた。しかしながら、予習、復習を必要とする工夫が不十分であったこと、授業時間内で受講者に考えてもらい受講者同士で意見交換をするなどの時間が不足していたことが、今後改善を要する課題として挙げられる。	18	6	33.3%
権利擁護を支える法制度（Q1・Q2）	手島 洋	全体に授業の満足度は高かったが、授業時間外の学修については改善が必要と考えられる。具体的には、既に設定している学期末のレポート以外にも、授業内容を深めるためのミニレポートの提出などを求めることも検討すべきと考えている。	40	5	12.5%

【 後 期 】

- 授業科目の概要 保健福祉学部専門科目
- 授業科目の名称 担当教員コメント欄参照
- 回答数 2,256
- 回答率 37.8%

【 総 評 】

学生のアンケート回答率は37.8%であった。これは昨年度後期の24.3%と比較すると大きく上昇したものの、本年度前期の50.7%より12.9%低い結果となった。例年、後期は前期に比べて回答率が低い傾向にあり、その差も昨年度と同程度（前期－後期＝13.1%）であった。今年度は前期において回答率が大きく向上していただけに、やや残念な結果といえるが、前期から後期への低下幅は例年並みであることから、慣れやルーティン化といった従来と同様の要因が影響している可能性が考えられる。今後は、学生・教員双方が前期と同様の緊張感を持って授業評価に取り組む姿勢が重要である。

設問ごとの平均値をみると、全体として授業評価は安定して高い水準を示しており、学生の満足度は概ね良好である。特に、Q1「真剣な取り組み」(3.53)、Q6「目標とする力」(3.46)、Q10「総合的な満足度」(3.44)では肯定的な回答の割合が高く、多くの学生が主体的に授業へ参加し、一定の学習成果と満足感を得ている様子がうかがえる。また、授業内容や教材、教員の説明や対応についても概ね適切に評価されており、教育実践の質は一定程度確保されているといえる。

一方で、Q2「授業外学修」(2.71)は他の設問と比較して平均値がやや低く、評価のばらつきも見られる。このことから、授業内での理解や満足は得られている一方で、それが授業外での学習行動に十分に結びついていない可能性が示唆される。特に、一部の学生には消極的な回答も見られ、学習の継続性や自律性の向上が今後の課題である。

総じて、本授業は学生から高い評価を受けており、教育内容および指導方法は適切に機能していると評価できる。一方で、より深い学びの定着に向けては、授業内の学びを授業外へと発展させる仕組みや工夫を一層強化することが求められる。これにより、学修の質のさらなる向上が期待される。

■学部・学科	保健福祉学部	■受講登録者数	5,975
■科目名	保健福祉学部専門科目	■回答者数	2,256
		■回答率	37.8%

■設問別評価集計

アンケート設問内容		強く そう思う	そう思う	そう 思わない	全くそう 思わない	当該 科目区分 平均値
		評価4	評価3	評価2	評価1	
Q1	わたしはこの授業に集中し、真剣に取り組んだ。	1,202 53.3%	1,038 46.0%	15 0.7%	1 0.0%	3.53
Q2	わたしがこの授業に関連して行っている授業外学修（課題、準備、復習等）時間。（1週間の平均）※	448 19.9%	791 35.1%	923 40.9%	94 4.2%	2.71
Q3	この授業では授業時間外に取り組むべき課題が示されている。	1,045 46.3%	1,090 48.3%	105 4.7%	16 0.7%	3.40
Q4	この授業では能動的学修機会がある。	1,139 50.5%	915 40.6%	166 7.4%	36 1.6%	3.40
Q5	この授業の課題の内容・量は適切である。	1,014 44.9%	1,182 52.4%	49 2.2%	11 0.5%	3.42
Q6	この授業の目標とする力（知識や技能など）が身につく。	1,088 48.2%	1,123 49.8%	35 1.6%	10 0.4%	3.46
Q7	この授業の教材（教科書・資料など）・教具（アプリ・ファイルなど）は適切だ。	1,068 47.3%	1,134 50.3%	46 2.0%	8 0.4%	3.45
Q8	この授業の内容に関してさらに学びたい。	1,026 45.5%	1,177 52.2%	41 1.8%	12 0.5%	3.43
Q9	この授業での学修活動（発言や提出物など）に対して必要な支援を得ている。	1,028 45.6%	1,176 52.1%	42 1.9%	10 0.4%	3.43
Q10	総合的に判断して、この授業に満足している。	1,058 46.9%	1,147 50.8%	38 1.7%	13 0.6%	3.44

■設問別科目平均の範囲と中央値

平均の範囲（当該学部・学科科目）					
最小値	25%点	中央値	75%点	最大値	標準偏差
2.88	3.33	3.50	3.67	3.92	0.42
1.74	2.41	2.71	3.00	3.74	0.67
2.48	3.14	3.37	3.50	3.89	0.49
2.53	3.13	3.43	3.68	3.92	0.49
2.63	3.19	3.36	3.51	3.87	0.44
2.67	3.23	3.40	3.59	3.88	0.44
2.68	3.20	3.37	3.57	3.88	0.44
2.61	3.18	3.37	3.55	3.91	0.46
2.64	3.20	3.38	3.51	3.87	0.44
2.65	3.20	3.38	3.57	3.90	0.45

※平均時間数の評価
2 単位科目：4 時間以上…4 / 2 時間以上 4 時間未満…3 / 2 時間未満…2 / 全くしていない…1
1 単位科目：1 時間以上…4 / 30 分以上 1 時間未満…3 / 30 分未満…2 / 全くしていない…1

■担当教員コメント（専門科目） 保健福祉学部 令和7年度後期

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
微生物と人間（Q3）	加藤 洋司		60	8	13.3%
人間発達学（Q4）	山下 美保		166	112	67.5%
地域包括ケアシステム論（Q4）	金子 努		196	100	51.0%
リーダーシップと協働（Q3）	坊岡 峰子	1）昨年度の結果を踏まえた授業改善点：学部共通科目のため、昨年度の授業終了後に担当教員で振り返りを行った。その結果、参加態度、授業後のリフレクションシートの配点、欠席者への対応などの修正を行い、学生にも周知した。授業は昨年度同様に、対面で実施し5コース混合の班での活動を重視した。まず、テキストである『カモメになったペンギン』の主旨について班で討議・発表を実施した。「ファシリテーションの概要と方法」に関する講義、外部講師による特別講義についても、班での討議・発表を実施した。各班は10人程だが、さらにその班を2つに分けた小グループでの討議をベースにし、各班で発表し合う形式をとった。2）履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点：授業後にはリフレクションシートの提出を課題とした。また、班での話し合いで教室を分けた際には、各教師に教員が同席し、内容や進行状況を確認した。3）期末アンケートか見た今後の課題：13/188人の回答と大変少なく、全体の評価として分析するのは難しいが、概ねどの項目も高く評価されていた。自由記述には、5コースで編成される少人数の班での話し合いを繰り返すことで、本講義のテーマである「リーダーシップと協働」について、体験的に学べたと推測できる内容が記されていた。	188	13	6.9%
チーム医療福祉演習（Q3）	古山 千佳子	昨年度の学生アンケートの結果から、今年度は3日間のスケジュールを変更した。一日目に倫理事例の検討と中グループ発表を行い、二日目に医学事例の検討と各コース実習室の見学とデモンストレーション、三日目に医学事例の中グループ発表と当事者の語りを実施した。それに対し、担当教員および学生から高評価を得ることができた。また、毎回授業後に演習における各学生の役割と感想を提出してもらった。学生からは、他の専門職の理解と共に自らの専門性を振り返る機会になった、実際に専門職として働く前にチーム医療を経験することができた等、良い評価を得ることができた。その一方で、卒業研究、就職活動等で忙しい時期に3日間の集中講義は大変だったといった意見も寄せられた。より効率的で学びの多い授業となるような工夫が必要である。	188	9	4.8%
臨床心理学（Q4）（看護）	麻生 浩司	【①昨年度の結果を踏まえた授業改善点】昨年度と同様に、個人ワークやペアワークが行われるため、全体のベースを確認しながら実施した。【②履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】学生間で相談しやすいように、声掛けやペアワークの機会を設けた。【③アンケート結果から見た今後の課題】回答は肯定的なものが多いが、援助職として必要な知識とスキルを習得できるように、適宜、授業内容を改善していきたいと思う。	57	10	17.5%
生化学（Q4）（看・理・作）	森 大志	【昨年度の結果を踏まえた授業改善点】昨年度のアンケートや学生からのメッセージでも授業について肯定的な意見が寄せられていたので、基本的には昨年度と同じ授業方法で実施した。ただし、能動的学修機会が十分ではないという意見があり、授業中に学生同士で話をしたり、調べものをしたりするなどの機会を設けた。【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】授業では小テスト（課題）を行い、当該授業回の内容についての理解度を問うようにした。これは学生がどの程度の理解度であるかを自身で知るところを目的としたものであるが、学生の中には正解を調べて回答するという使い方をしていたように思われる。主旨の理解を徹底させる必要がある。森担当領域の授業資料は、授業で供覧したスライドをA4用紙上段に、そしてその説明を下段に置いたものを用意した。この資料は新しい知見を追加するだけではなく、学生からの質問を反映させながら毎年修正を加えている。【アンケート結果から見た今後の課題】アンケート結果を見ると、授業に真剣に取り組んだ、目標とする力が身につく、内容をさらに学びたい、支援を得た、授業満足度などの設問に対しては否定的な意見はなく肯定的な回答結果であった。一方、能動的学修機会についてはやや否定的な意見もあった。前年度と同様の結果であり、まだ十分に対応しきれていないと考える。果してどのように学修機会を設定すべきかは今後の課題である。「本科目は難しかったが、受講して良かった」という前向きなメッセージは教員にも励みになり、そういう学生が増えるよう努めていく必要がある。	73	14	19.2%

■担当教員コメント（専門科目） 保健福祉学部 令和7年度後期

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
神経生理学（Q3）	森 大志	【昨年度の結果を踏まえた授業改善点】 当該科目の授業について、昨年度のアンケートや学生からのメッセージでは肯定的な意見が寄せられていた。そのため、本年度も基本的に昨年度と同じ授業方法を踏襲した。ただし、能動的学修機会が十分ではないという意見も散見されていたので、学生自身がペアになって理解度を把握するような時間を設けたり、相互で簡単な検査をしたりするような機会を設定した。 【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】 各回の授業最後の10分程度に小テスト（課題）を行い、当該授業回の内容についての理解度を問うようにした。目的は学生がどの程度理解したかを自分自身で知ることであったが、中には正答を得ることを目的に取り組んだ者もいたようだ。主旨について繰り返しの説明をしたが行き届かなかったのは課題として残る。授業資料は授業で供覧したスライドをA4上段に、そしてその説明を下段に置いたものを用意した。この資料は、新しい知見を追加するだけではなく、学生からの質問を反映させながら毎年修正を加えている。 【アンケート結果から見た今後の課題】 アンケート結果を見ると、「能動的学修の機会がある」以外の項目については肯定的な意見であった。特に、目標とする力が身につく、授業教材は適切、さらに学びたくなる、などはより多くの学生が「強くそう思う」と評した。メッセージにも「神経には苦手意識があったが、先生の配布プリントと説明が分かりやすく、真剣に授業に取り組むことができた」とあり、担当教員としては大変喜ばしい。今後もそのような学生が増えるよう努めたい。	96	30	31.3%
病理学（Q4）	小田 典子		153	35	22.9%
臨床栄養学（Q3）三原C	栢下 淳		154	42	27.3%
臨床心理学（Q4）（理・作・コミュ・人）	勝見 吉彰		88	22	25.0%
カウンセリング論（Q3）（看・コミュ・人）	勝見 吉彰		44	16	36.4%
小児科学（Q3）	山下 美保		170	116	68.2%
医療安全学（Q3）	安武 繁	【昨年度の結果を踏まえた改善点】 主担当教員の授業では、医療安全学総論の部分を中心に授業を行いました。作成した授業資料を中心に、この科目の基本的な内容について、主に医療安全学総論の内容について、できるだけわかりやすく解説を行いました。 【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】 作成した授業資料を中心に、学習のポイントは何かをできるだけ明示するようにしました。 【期末アンケート結果から見た今後の課題】 今後の課題としては、限られた授業時間の中で、この科目の重要な所を中心に、できるだけ具体的な事例について解説を行うようにすることです。	96	9	9.4%
救急医療（Q3・Q4）	武田 晃		106	23	21.7%
整形外科学Ⅱ（Q3）（理・作）	河野 正明		63	15	23.8%
リハビリテーション医学（Q4）（理・作・コミュ）	三上 幸夫		94	25	26.6%
福祉住環境論（Q4）（理・作）	吉田 倫子	設問10「総合的に判断して、この授業に満足している」では、6人中3人が「強くそう思う」と回答しており、全体としては概ね好意的な評価が得られている。一方で、「全くそう思わない」と回答した学生が1人存在しており、一定の不満を抱えている学生がいることも示唆される。また、他の設問においても同様に「全くそう思わない」との回答が1人みられた。 授業期間中には中間的に授業アンケートを実施し、意見や感想の把握に努めてきたが、結果として十分な対応につなげることができていなかった点は課題である。今後は、授業アンケート等で示された意見をより丁寧に受け止め、内容や運営面について、些細な点であっても改善を重ねていきたい。	7	6	85.7%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
福祉住環境論（Q4）（人福）	吉田 倫子	設問10「総合的に判断して、この授業に満足している」では、「強くそう思う」が17%、「そう思う」が79%であり、肯定的な回答が大半を占めている。他の設問においても同様の傾向がみられ、本授業は全体として概ね好評であったといえる。 授業期間中には中間的に授業アンケートを実施し、学生の意見や感想の把握に努めている。今後も、授業アンケート等で示された意見を丁寧に受け止め、授業内容および運営面について、些細な点であっても継続的な改善を図っていきたい。	40	24	60.0%
精神医学Ⅱ（Q3）（作・人）	藤巻 康一郎	【昨年度の結果を踏まえた授業改善点】 オンデマンド講義資料等を事前に掲載し、学生に事前学習を促した。その結果、ほとんどの学生が授業外学修時間を確保できるようになった。 また、昨年度の授業評価アンケート回答は高回答率には届かなかったが、今年度は周知のタイミングを工夫し、授業中でも特に学生の集中度が高い時間帯に周知を行った。その結果、回答率は71.2%に至った。来年度も引き続き周知方法を改善し、回答率のさらなる向上を目指す。 【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】 対面授業の中で、学生の反応をみながら、質疑応答を頻回に施行し、授業への注意維持を図ることが可能であった。 【期末アンケート結果から見た今後の課題】 期末アンケートでは、全設問において「強くそう思う」「そう思う」が合わせて90%以上（設問3のみ89%）と高評価であった。また授業双方向性は例年より改善しており、今後も一層双方向性を上げるために、オンラインツールを併用することで、学生が質問や意見を発信できる場をオンライン空間上に再構築するなど方法が挙げられる。今後は、そのような仕組みづくりを授業ブラッシュアップの課題として取り組む必要がある。	66	47	71.2%
解剖学（看護特論）（Q3）	田口 勝敏	履修生の皆様、解剖学（看護特論）の履修、お疲れさまでした。学修する内容が抑々膨大であり、より専門的な内容に触れ、やりがいがある一方、大変だったことと思います。さて、本講義では、前期の解剖学概論でのご要望にお応えすると共に、また時間外学習の充実化を図るため、講義各回は固より、重要な内容についての動画を作成・アップロードし、講義後の学修に活用して頂けるよう工夫致しました。また、講義内クイズを行い、その日の講義内で重要なトピックスについて回答して頂く機会を設けました。学修内容の定着を図る意味でも継続して復習して頂き、2年次以降の新たな専門内容の習得に励んで頂ければと思います。講義内で繰り返し同じことを言っているというご指摘、ありがとうございます。有体に申し上げれば、1回言えばわかる方から繰り返し伝える必要のある方まで、様々な学生さんがいらっしゃいます。そこはそれ、重要な内容なんだな、とお考え頂けましたら幸いです。あと、クイズの回答期限については18時30分に致しましょう。では引き続き、頑張ってください。追伸：もし今後も解剖学に関する疑問・質問が生じた場合には遠慮なく、ご連絡ください。	60	9	15.0%
日常生活援助方法論Ⅰ（共通基本技術）（Q3・Q4）	奥田 玲子	①昨年度の結果を踏まえた授業改善点 本科目は1年次後期に開講され、臨地実習を経験していない学生を対象としている。看護の実践場面を具体的に思い描くことが難しい状況にあるため、技術手順をイメージできるよう動画を活用し、視覚的理解を促した。さらに、演習は看護師役と患者役の双方を経験できる構成とし、対象の状況を踏まえて援助を考える機会を設けることで、安全・安楽への配慮や対象の立場への理解を深められるよう工夫した。加えて、各演習の冒頭で前回の学びを全体で共有する時間を設け、既習内容を整理するとともに、次の演習で学びを活用できるよう意識づけを行った。 ②履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 演習グループ内での意見交換を通して学びを共有する機会を設けた。また、各演習後に振り返りシートを課し、行為の根拠を言語化することで、知識と技術の統合を意識した授業展開を行った。学生からは、患者役を経験することで安楽や羞恥心への配慮の重要性に気づいたこと、振り返りを通して技術の意味や根拠への理解が深まったことなど、肯定的な意見がみられた。引き続き、各技術の関連性を明確にし、断片的理解にとどまらないよう支援していく。 ③アンケート結果から見た今後の課題 学生アンケートでは、振り返りの重要性への気づきや、初めて看護技術を学ぶことによる学習意欲の向上が確認された。一方で、演習において教員間で指導方法に差異があることや、配布資料で用語の表現が統一されていないことにより、戸惑いを感じる意見もみられた。今後は、教員間での事前打ち合わせを強化することで指導内容の統一を図る。また、授業資料の事前確認を丁寧に行い、学生が混乱なく学修できる環境を整えていく。	60	57	95.0%

■担当教員コメント（専門科目） 保健福祉学部 令和7年度後期

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
地域看護学概論（Q3）	菅井 敏行	①昨年度の結果を踏まえた授業改善点について:昨年度より看護や保健全般における地域看護学について考えながら今後も含め体系的に学んでいくことができるように、地域看護学における領域（例えば母子保健、成人保健、国際保健等）の横の繋がりも意識し、社会と看護・保健の関わりにも触れながら授業を構成しました。 ②履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点について：毎回の授業のレスポンスを提出してもらい、皆さんの学修状況や考えたことについても把握しながら授業にフィードバックしていきました。 ③アンケート結果から見た今後の課題について：アンケートの回答はほぼ全員からいただきました。ありがとうございました。自由記載からの回答は12名からいただきました。その中で「Teams等の連絡」について改善要望がありました。授業の情報の周知は確実に皆さんに情報が届くように（配信に気がつきやすいように）配慮していきます。また多く肯定的な意見を記述回答でいただきました。皆さんが積極的に学修しているからこそ、また、この教科に興味を持ち、自主的な学修をしているからこそ感じられたのであろうという感想・回答が多かったです。	60	58	96.7%
地域看護対象論Ⅰ（個人・家族）（Q4）	岡田 ゆみ	本授業では、地域・生活・健康を具体的に理解できるよう、地区踏査やインタビュー等のフィールドワーク、グループワークを多く取り入れ、地域アセスメントや生活機能評価、支援の視点を体験的に学ぶ工夫を行っています。今後は、ライフステージや健康課題の異なる事例を比較する機会を設け、支援の多様性や共通点を考察できるようにしていきたいと思っています。	60	9	15.0%
成人の健康と看護（Q4）	岡田 淳子	①昨年度の結果を踏まえた授業改善点 昨年度同様、Teamsに科目のチームを作成し、授業に関するお知らせや小テストの範囲などを一斉通知した。また、授業時間外学修を促すために毎回10問の小テストを実施した。 授業資料（紙媒体）は自作し数回分を一括配布して、事前に予習できるように準備した。授業資料のなかに、学修しておく課題も挿入し、自分のペースで学修できるように工夫した。 ②履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 小テストはテキストから出題し、不正解だった問題は学生が確認できるようにしている。学生がなぜ不正解なのか聞きにきた場合は、丁寧に説明した。小テストの解答率をみながら、問題の難易度を修正して提示している。 また、学生には毎回授業コメントをFormsに入力してもらい、授業の理解度や反応を確認した。必要に応じて次の授業で解説を加え、理解が深まるように対応した。 ③アンケート結果から見た今後の課題 アンケート結果は、「真剣に取り組んでいる」「課題の内容・量は適切」「授業の目標とする力が身につく」「教材・教具が適切」「さらに学びたいくなる」「学習活動に対して必要な支援を得ている」「総合的に判断して満足している」は、いずれも肯定的な回答が100%であった。授業外学修時間は1時間未満が最も多く86%で、全くしていないは6%であった。 これらのことから、授業や授業外学修に対する科目担当者の意図は受講者に伝わっていると判断し、今後もこのスタイルで授業運営していくことを考えている。	60	49	81.7%
看護理論と実践（Q3・Q4）	青井 聡美	・昨年度の結果を踏まえた授業改善点 昨年度同様、毎回、グループワーク（GW）に向けた事前課題を提示し、学生には授業前までにTeams上の指定場所へ提出するよう求めた。この取り組みにより、後半の総合演習を円滑に進めることができた。 ・履修者の反応を知るために学期中に実施した方法と、その結果を踏まえた改善点 毎回、授業ポートフォリオに主な学び・感想・自己評価を記入させ、提出を求めた。また、事前課題のアセスメント内容を確認し、理解が不十分な学生には個別指導を行った。これにより、学生の理解度を適宜把握しながら授業内容を調整することができた。 ・アンケート結果から見た今後の課題 すべてのアンケート項目において肯定的回答率は100%であった。授業外学修時間も「4時間以上」が75%、2時間以上が17%であり、事前課題に全員が真摯に取り組んだことで、演習をスムーズに実施できた。次年度も今年度の方法を踏襲しつつ、フィジカルアセスメントの授業内容を確実に定着させるため、復習内容と演習内容の関連性をより明確にし、効果的な演習方法を検討していきたい。	62	12	19.4%

■担当教員コメント（専門科目） 保健福祉学部 令和7年度後期

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
がん看護論（Q4）	黒田 寿美恵	昨年度はすべての項目について肯定的評価が100%であったことから、授業内容・方法共に昨年度を踏襲した。 毎回Teams上の課題機能を用いて事前テストを実施したことで、授業開始前の知識修得度を確認すると共に、学生のレディネスを揃えた。 また、事前・事後テストの中に設けた考えを問う記述式問題については、「素晴らしい解答」をTeams上で共有することで、多様で秀逸な考えを学生相互に学び合えるようにした。 さらに、毎回の授業後にはTeamsの課題機能を用いてリフレクションシートの提出を課し、自己の目標達成度と学び・質問などを入力してもらった。これにより、学生自身に授業を振り返ってもらうと共に、学生の反応を確認し、質問があった場合はTeams上で回答や参考となる資料を提示した。 自由記載には「毎回の小テストが難しく、多くの時間を費やす必要があった」との意見があり、現に83%の学生は必要な授業外学修時間を確保できていた。一方、残りの13%（6名）は30分未満となっており、毎回の事前・事後テストが十分な学修機会となっていなかったことがうかがえる。しかし、「この授業の内容に関してさらに学びたい」「総合的に判断して、この授業に満足している」には100%の学生が肯定的な評価をしていることから、次年度も現行通りの方法・内容を踏襲しつつ、さらに授業外学修が習慣づくような工夫をする。	61	46	75.4%
保健統計学（Q4）	安武 繁	【昨年度の結果を踏まえた改善点】 作成した授業資料をもとに、この科目の大切な内容を中心に、現代の保健統計に関する状況など、できるだけ具体的に詳しく、わかりやすく解説を行いました。保健統計に関する計算手法についても具体的に解説しました。 【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】 この科目の学習では何が大切かをできるだけ具体的に説明しました。保健統計の活用方法についても解説を行いました。また、近年の具体的な保健統計データについて、その動向や傾向などについて、できるだけ解説をしました。 【期末アンケート結果から見た今後の課題】 今後の課題としては、限られた授業時間の中で、保健統計、人口統計学、生活習慣病や感染症などに関する疾病統計などについて、さらに多くの項目について、幅広い内容について解説を行うようにすること、近年の具体的な保健統計データについて、その動向や傾向などについて検討することです。また、授業では、保健統計、人口統計学、疾病統計などの状況から、保健医療福祉に関する対策についても、多くの観点から十分に検討することです。 保健統計学に必要な計算問題について、授業で十分な演習を行う時間を持つことが大切です。	44	7	15.9%
疫学（Q3・Q4）	岡田 ゆみ	授業では、疫学をなぜ学ぶのか、臨床のどの場面で活用できるのかを具体的にイメージできるよう工夫しながら進めています。今後は、事例や練習問題をより多く取り入れ、知識が定着する授業となるよう改善を重ねていこうと思っています。	41	11	26.8%
フィジカルアセスメント（Q3）	青井 聡美	・昨年度の結果を踏まえた授業改善点 ・今年度からテキストを変更し、TBLの一部の手法を取り入れた授業展開を行った。授業開始時には小テスト（iRAT）を実施し、その一部の問題についてはグループで再度考え、回答を共有した（tRAT）。学生は演習前までに「臓器Tシャツ」を作成し、演習時に活用した。ただし、作成を希望しない学生もいたため、演習時には作成者而非作成者のグループに分けて演習を行った。さらに、例年実施している実技テストに加え、今年度から口頭試問を取り入れた。 ・履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 毎回、授業ポートフォリオに「主な学び」「感想」「自己評価」を記入させ、提出を求めた。演習後にはMicrosoft Formsを用いて課題を提示し、その日の講義・演習内容の知識定着を図った。 ・アンケート結果から見た今後の課題 全てのアンケート項目において肯定的な回答率は100%であった。授業外学修時間は「4時間以上」が67%、「2時間以上」が22%、「2時間未満」が11%であった。課題量については、当初「多すぎるのではないかと懸念していたが、アンケート結果では「強くそう思う」44%、「そう思う」56%であり、全体として肯定的に受け止められていた。自由記述欄には「疑問に思うことには助言をいただき、演習ではコツを教えていただいたことで理解につながることができました」との記載があった。今後の課題は、今年度導入したTBLの手法をさらに充実させ、事前学習教材と演習内容を工夫することで、授業内でのディスカッションや演習をより活性化させることである。授業開始時の小テストを継続し、その後にグループでの再考・再回答を行う授業形式を充実させ、知識の定着と協働的学びを促進していきたい。	62	9	14.5%
地域看護対象論Ⅱ（集団・組織）（Q4）	俵 志江		61	8	13.1%
在宅看護展開論（Q4）	加利川 真理		62	9	14.5%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
小児の健康と看護（Q3）	松森 直美	理論を裏付ける具体例を示しながら、次年度も講義内容の理解を促していきたいと思います。小児科学と重複している内容については理解を深めてもらうため敢えて調整していないところもありますが、看護の視点を伝えられるようにしていきたいと思います。	62	6	9.7%
精神看護方法論（Q3）	井上 誠	本授業では、授業時間外学修の重要性を想定していたものの、精神看護方法論においては、これまで授業時間外に取り組むべき学修内容や課題をほとんど明示できていなかった。そのため、学生にとって授業時間外学修の位置づけが不明確となっていた可能性がある。 今後は、授業時間内で学んだ内容を振り返り、理解を深めるための授業時間外学修を明確に示し、計画的に課題を設定することで、学生の主体的な学修を促進していく。	61	7	11.5%
看護教育論（Q4）	松森 直美	今学んでいるカリキュラムの意義や看護教育の現状と課題について理解を深め、今後の学修の動機づけとなることと卒後の継続教育や後輩の育成に参考となる内容を意識して次年度も講義内容を精選していきたいと思います。	59	7	11.9%
解剖学（運動特論）（Q3）	田口 勝敏	解剖学（運動特論）を履修した皆様、お疲れさまでした。前期の解剖学概論に続き、より専門的な内容になると共に、理解し、記憶しなければならない内容も非常に多くなり、大変だったことと思います。本講義では、解剖学概論でのご要望にお応えすると共に、時間外学習の充実化を図ることを目的として、全てについてではありませんが、講義動画や重要な項目に特化した解説動画を作成・アップロード致しました。また、講義内クイズの実施を通して、その日の講義のトピックスの中から重要な項目についてご回答頂く機会を設けました。コメントでもご指摘の通り、一部、講義内で終わらなかった内容もございましたが、その内容については動画による追加解説を設け、伝えるべき内容に欠落が無いように対応致しました。アップロード時にもお伝えしましたが、当該内容についてもしっかりと動画を活用しながら学修してください。さて、試験内容についてですが、必要な学修到達度から逆算して、現在必要な知識を問う問題（レベル）に設定してあります。今回の本試験で難しかったなと感じた方は、是非、講義後も復習を継続・充実させて頂き、2年次の解剖学実習につなげて頂ければと思います。試験中に質問をして恥をかいたというコメントもございましたが、恥などと考えず、不足していた内容に気づき、新たに学修する機会を得たとポジティブにとらえて頂ければ結構です。本講義を履修された理学・作業コースの皆様は、2年次においても解剖学実習において、さらに専門的な内容を学修することになります。これまで学んだ内容をしっかりと復習して定着させた上で、新しい年次に進んで頂ければと存じます。引き続き、頑張って参りましょう。お疲れさまでした。	65	24	36.9%
基礎運動学（Q3）	長谷川 正哉	全体的に評価は非常に高く、ほぼ全設問で「そう思う以上」が100%。 特に 能動的学修（設問4）は突出して高評価（強くそう思う 83%）。 一方で、相対的に改善余地が見えるのは 授業外学修時間（設問2）と 課題提示の明確さ（設問3）であった。 解決方法として毎回、同じ場所に固定表示し、自己学習につながるよう配慮する。 以下学生コメント抜粋 「授業を楽しく受けることができた」「実際に動いて確認する時間があり、理解度が上がった。」「発展した運動学でもきちんと学んだ知識を活用したい。」「実際に体を動かしながら友達と分からないことを分かるまで学修することができてとても分かりやすかった」	35	35	100.0%
理学療法学概論Ⅱ（Q3）	小野 武也	1）昨年度の結果を踏まえた授業改善点 授業終了後に学生の要望を聞いている。その結果を踏まえて、一部の内容について変更を行っている。 2）履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 授業の途中や後半に、講義内容が理解できているかどうか学生相互に確認する時間を与えている。疑問や不明な点に関する発言があれば、追加説明を実施している 3）期末アンケート結果から見た今後の課題 4 年次生から小グループで臨床実習に関する情報交換を行う内容が好評である。今後とも、学生に必要な情報提供を続ける。	35	14	40.0%

■担当教員コメント（専門科目） 保健福祉学部 令和7年度後期

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
理学療法評価学概論（Q3）	梅井 凡子	専門科目ということもあり全員が授業に真剣に取り組んでいる 時間外学修の時間は短く感じるが講義内容として日常生活の中で育める部分もあるため時間外学修と認識していない部分もあると考える その他の項目についてはおおむね良好である グループワークにおいては各グループの状況を確認しながら実施し、全体発表にて情報共有をした 自由記載にも肯定的な意見が記載されていた 初回講義でのガイダンス時に試験についての説明をしているが、試験範囲についての自由記載があったため次年度は試験前にも説明を実施する	35	33	94.3%
神経内科学クリニカルスタディ（Q3・Q4）（理・作）	伊集院 睦雄	①昨年度の結果を踏まえた授業改善点 担当教員の定年退職のため、本年度は学外非常勤講師と専任教員2名の3名で本科目を担当した。前年度にどのような意見が示されたかは不明であり、今年度担当した各教員は各回の授業内容を学生がどの程度理解したかを把握するために小テストなどを実施した。 ②履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 小テストの結果は概ね良好であり、各回の授業内容の理解度は一定程度あったと考えた。途中で実施した中間試験結果でもその傾向は確認できたため、後半以降の授業で大きな授業方法の変更を加えていない。 ③アンケート結果から見た今後の課題 アンケート結果を見ると、授業の内容・量、目標とする力が身につく、授業の教材、内容をさらに学びたい、支援を得た、授業満足度などの設問に対しては否定的な意見はなく肯定的な回答結果であった。一方、能動的学修機会についてはやや否定的な意見もあった。臨床医学科目として果してどのように学修機会を設定すべきかは今後の課題である。	63	20	31.7%
理学療法学研究法（Q4）	長谷川 正哉	アンケート回答回答率は58.8%と低値であった 全般的に講義には熱心に取り組んでおり70%が強く真剣に組んでいると回答している 各教員の研究紹介の内容についても満足度は高い結果となっている 課題については随時内容を確認し必要な助言を与えることにより学生の気づきを促した 次年度以降も引き続き学生が興味を持つ内容の講義を実施していきたい	34	20	58.8%
理学療法評価学演習Ⅲ（Q3・Q4）	金井 秀作		35	30	85.7%
理学療法評価学演習Ⅳ（Q3・Q4）	島谷 康司	おおむね良好な授業評価を得ている。ただし、アンケート回答者数が7人 / 34人中（回答率20.6%）のため、アンケート回収率を上げる工夫が必要であると考ええる。	34	7	20.6%
物理療法学（Q4）	田中 聡	講義時間中にアンケート回答を促したものの回答率は76.5%（26人/34人）であった。 全般的に講義には熱心に取り組んでおり満足度は高い結果となっている（問10：96%）。[授業改善点] 問2の授業外学修時間が30分未満の者が23%いるので、具体的な授業外学修課題につて指示する必要がある。昨年度までの自由意見をもとに、座学のみでなく、実際の物理療法機器操作と患者役を体験する時間を設けた。この点は治療手順や臨床場面が想像できるようなり、高い満足度につながった。 このことにより講義内容への理解が深まり、臨床でのイメージが容易となっているとの感想が見られた点は、臨床をイメージできるよう講義内容を工夫した成果と考える。[今後の課題] 次年度も座学と実習・体験のバランスを考慮し、引き続き臨床につながる講義を実施していきたい。	34	26	76.5%
運動学実習（Q3・Q4）（理学）	金井 秀作		34	6	17.6%
臨床運動学（Q3）	長谷川 正哉		34	2	5.9%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
基礎運動療法学（Q4）	小野 武也	1）昨年度の結果を踏まえた授業改善点 授業内容の理解を促すために、学生同士でのディスカッションを設けた。毎年、講義に使用する資料やパワーポイントを改善している。また、演習を取り入れ内容の理解を促している。 2）履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 授業の途中や後半に、講義内容が理解できているかどうか学生相互に確認する時間を与えている。疑問や不明な点に関する発言があれば、追加説明を実施している。毎回の授業内容に関して疑問を持った点をあげ、その疑問を調べるレポート課題を与え自己学習の習慣化を目指している。このレポートの中で、授業に関するコメントをもらい、授業内容の改善に役立てている。 3）アンケート結果から見た今後の課題 アンケート結果は満足いく学生が多いようであるが、アクティブラーニングによる講義形式を取り入れ引き続き魅力ある授業を提供できるように計画的に実施していきたい。	34	6	17.6%
理学療法管理学Ⅱ（Q3）	横山 和加子	回答率は100%に改善した。総合的に満足している（強く・そう思う）学生も多かった（100%）。自由記述の内容からもグループワークを交えた講義で、満足度が高かったことが伺えた。時間外課題も全ての学生が取り組んでいた。	34	34	100.0%
理学療法画像評価学（Q3）	飯田 忠行	1）昨年度の結果を踏まえた授業改善点 対面講義にて、必携PCを用いてTeamsとMoodleを駆使した。Moodleを用いた小テストを行い、Teamsではグループ内でディスカッションをさせ解を導くようアナウンスした。応用課題に関しては、Teamsにてファイルを配布し、グループディスカッションを行い、その際、何を調べてその回答を導いたのかを記載させた。また、講義後、回答に関して、考え方が合っていたのか？それとも間違っていたのか？間違っていれば何を間違えたのかを省察させた。昨年、教科書の指定および講義を行った後での小テストの意見があったため、TBLをやめ、講義→小テスト→応用課題とした。 2）履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 必要な資料を提示し講義を行い、確認テストを個人で行った。解説後、応用課題を実施した。Moodleにて小テスト、Teamsで応用課題の確認を行い、各個人、チームの学習到達度を確認した。X線画像、CT、MRIの基礎、その応用課題に分け、理学療法士・作業療法士の国家試験に近い形で学修させた。応用課題では、グループで考え方を共有し、解説後、何が間違っていたのかを省察させた。そして、応用課題の採点を即時行い、返却した。 3）期末アンケート結果から見た今後の課題 「目標とする力」「能動的学修機会」「講義の満足度」「さらに学びたいくなる」（肯定100%、否定0%）、で講義に関する内容の提示および理解の定着は行っていると考えられる。しかしながら、「課題の内容・量」（肯定97%、否定3%）であり、TBLの予習資料が多いことが関連したと考えられる。自由記載欄には、3年前期への講義希望のコメントがあった。7.5コマの制約の中で予習資料の解説を行う時間を設けるのは厳しいが、可能な限り対応を行いたいと考える。	34	34	100.0%
骨関節障害理学療法学演習（Q2・Q3）	田中 聡	回答率は97.1%であった。 4人（非常勤講師1名）によるオムニバス科目であるため講師間で連携をとり演習を進めた。その結果、問1の真剣に取り組んだか？の設問には100%の者が真剣に取り組んでいた。問10の授業満足度は？強くそう思う61%、そう思う39%と高いポイントを得た。【昨年度の結果を踏まえた授業改善点】 昨年度も高いポイントを得たので大きな変更はせず、国家試験出題傾向や医学的情報についてアップデートを行った。【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた改善点】 演習科目であるので実技練習の際に演習室内を見回り指導を行い、質問にはその場で回答するように努めた。実技練習に取り組む姿勢は、学生間で差があるので丁寧な観察を行った。学生間での実技練習には真剣度に差が生じるので細かく指導していく必要がある。【アンケート結果から見た今後の課題】 いずれのアンケート結果も高いポイントを得ているので大きな変更は必要ないと考えるが、問2の授業外学修時間で30分未満が21%、全くしていないが6%いるので、具体的な授業外学修についての指示が必要と考えている。	34	33	97.1%
神経障害理学療法学演習（Q2・Q3）	島谷 康司	おおむね良好な授業評価を得ている。アンケート回答者数が33人 / 34人中（回答率97.1%）も高く、有効データであると考え。設問2.わたしがこの授業に関連して行っている授業外学修（課題、準備、復習等）時間について、30分未満が30%であったこと、設問5.この授業の課題の内容・量は適切である。についてそう思わないが6%いたことから、もう少し課題の量と質を工夫した方が良いかもしれないと考える。	34	33	97.1%

■担当教員コメント（専門科目） 保健福祉学部 令和7年度後期

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
小児発達障害理学療法学演習（Q2・Q3）	島谷 康司	おおむね良好な授業評価を得ている。アンケート回答者数が32人 / 34人中（回答率94.1%）も高く、有効データであると考え。設問2.わたしがこの授業に関連して行っている授業外学修（課題、準備、復習等）時間について、2時間未満が25%および全くしていないが3%あり、低い値となっている。一方で、毎回の課題を出していないにもかかわらず、72%は2時間以上の自己学習に取り組んでおり、今まで以上に小児理学療法以外のその他の科目（分野）とのつながり（神経障害理学療法や地域日常生活活動学）を意識できた内容になっていたのではないかと考える。	34	32	94.1%
内部障害理学療法学演習（Q2・Q3）	横山 和加子	回答率も高く（97.1%），総合的に満足している（強く・そう思う）学生は100%だった。約6割の学生が2時間以上の授業外学修を実施していたが、2時間未満の学生が4割いたので講義前後の課題内容については今後も検討が必要である。	34	33	97.1%
義肢装具学演習（Q2・Q3）	長谷川 正哉	全体的に評価は高く、多くの設問で「そう思う以上」が9割を超えた。特に能動的学修（設問4）は肯定97%（強くそう思う50%）と高評価であった。一方で、授業外学修時間（設問2）では「短い・全くしていない」が32%みられ、また課題提示（設問3）でも否定6%が存在した。改善策として、毎回の課題を同一場所に固定表示し、内容・締切を明確化することで、授業外学修へつなげるよう配慮する。	34	34	100.0%
実践理学療法学特論Ⅱ（Q3）	西上 智彦		3	3	100.0%
応用理学療法学特論Ⅰ（Q3）	金井 秀作		32	30	93.8%
理学療法模擬患者演習（Q3）	西上 智彦		34	32	94.1%
地域日常生活活動学演習（Q2・Q3）	島谷 康司	おおむね良好な授業評価を得ている。アンケート回答者数が32人 / 34人中（回答率94.1%）も高く、有効データであると考え。設問2.わたしがこの授業に関連して行っている授業外学修（課題、準備、復習等）時間について、2時間未満が28%および全くしていないが3%あり、課題発表があったにもかかわらず低い値となっている。本年度は課題の提示を第3Qにしたが、「発表の課題提示を夏休みの間にしていただきたい」とのコメントもあったため第2Q最後（来年度は前期最後）に実施し、学ぶ時間に余裕を持たせるとともに、変更によって自己学習時間が増えるかどうかを検証したい。	34	32	94.1%
実践理学療法学特論Ⅰ（Q3）	小野 武也	1）昨年度の結果を踏まえた授業改善点 非常勤講師との連絡を密にしてより良い講義とするようにした。好評である。 2）履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 授業の途中や後半に、講義内容が理解できているかどうか学生相互に確認する時間を与えている。疑問や不明な点に関する発言があれば、追加説明を実施している。実技に関する授業であり、学生は興味深く参加しているように思う。 3）期末アンケート結果から見た今後の課題 結果は良い。今後は講義計画について非常勤講師との連絡を密にして、講義内容を検討したい。	33	31	93.9%
理学療法模擬患者（Q3）	西上 智彦		34	31	91.2%
実践理学療法学特論Ⅲ（Q3）	金井 秀作		34	32	94.1%
理学療法クリニカルリーズニング（Q3）	西上 智彦		34	1	2.9%
理学療法クリニカルリーズニング演習（Q3・Q4）	西上 智彦		34	1	2.9%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
作業療法学概論演習（Q3・Q4）	高木 雅之	①昨年度の結果を踏まえた授業改善点 学生間の学びの質や量にバラツキがあった。また学生同士でどんな学びを得ているかを知る機会が少なかった。そのため、授業中にどんな学びがあったかを学生同士で共有できる時間を増やし、学生がお互いの意見や考えを聞いて学びが深まるようにした。 ②履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 学生は毎回の授業の終了時に感想を書いた。そのコメントを踏まえて次の授業内容を考えた。次の授業の最初に、学生のコメントを全員で共有し、追加の情報提供やディスカッションを行った。 ③アンケート結果から見た今後の課題 本科目は来年度以降開講しないが、本科目で行ってきた学生が共に学び合う授業づくりの方法を他の科目でも活かしていきたい。	30	24	80.0%
作業科学実習Ⅰ（Q3・Q4）	今元 佑輔		30	8	26.7%
作業療法評価学Ⅰ（Q3）	吉川 ひろみ	①昨年度の結果を踏まえた授業改善点：事前課題が明確になるよう、授業内やチームスの投稿でリマインドした。 ②履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点：毎回の授業後にオンラインで学生全員が学んだことと意見・質問を回答することとし、2日以内に教員からの返答を追加してチームスに投稿した。授業中に学生間での対話や質問・意見の時間を豊富に設けたことで、積極的参加については、全員が肯定的評価だった。 ③アンケート結果から見た今後の課題：授業内で学生同士学習進捗状況をシェアするよう促したが、それをしない学生もいたようだ。アンケートの全項目で肯定的評価が92～100%だったが、否定的回答をした学生にとっては、より細やかな関わりが必要だったようだ。	30	26	86.7%
作業療法評価学Ⅱ（Q4）	増田 久美子	① 昨年度の結果を踏まえた授業改善点 昨年度の実施結果を踏まえ、本年度も演習・体験を中心とした対面授業を継続した。さらに新たな取り組みとして、視知覚および読み書きに関する評価を授業内容に追加し、評価領域を拡充した。これにより、発達支援におけるより幅広い評価方法について学修できる機会を確保した。 ② 履修者の反応を把握するために学期中に実施した方法と、その結果を踏まえた授業改善点 履修者の理解状況および反応を把握するため、以下の工夫を行った。 1. 演習をグループ形式で実施し、自身の体験のみならず他者の状況にも目を向ける機会を設けることで、多角的な視点の獲得と他者理解の促進を図った。 2. 重要度の高い評価方法については、全学生が実際に演習・体験できるよう時間配分を見直し、体験機会の均等化を図った。 3. グループ学修に加えて学生個々の理解度を把握するため、授業日程の中間で小テストを実施し、授業内でのフィードバックに活かした。これらを踏まえた授業改善点として、事前学修をより促進するために、テキストの該当ページや学修範囲を具体的に授業内で提示し、自己学習を支援する体制を強化する。また、授業内容に関する疑問や意見を随時把握できるよう、毎授業後に自由に質問等を記入できるフォームの活用を検討する。 ③ アンケート結果から見た今後の課題 昨年度と比較してアンケート回答数は増加した。今後さらに授業内での周知機会を増やすなど、より多くの意見を収集できる体制を整えたい。 また、自由記述では「実際に検査道具を体験する時間をもっとあればよかった」との意見があった。今後は関連科目との調整を行い、学生の主体的な経験につながる演習時間をより十分に確保できるよう改善を図る。引き続き、成績評価基準や提出方法について授業前後により丁寧な説明を行い、評価に関する齟齬やそれに伴う学生の学修意欲への影響が生じないよう改善していく。	29	17	58.6%
運動学実習（Q3・Q4）（作業）	久野 真矢	①昨年度の結果を踏まえた授業改善点 昨年度の授業評価結果では、各設問項目において概ね高評価であったことから、授業内容や方法に大きな変更はせずに、理解性を向上させるために配布資料の更新を行った。 ②履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 授業における演習中の学生の参加態度が積極的であったことから、大きな方向転換はしなかった。前期の運動学に続く実習系の授業科目であったので演習・実技を多く取り入れ、毎回の課題調べや定期的に実技試験を行うなど学習意欲の向上に努めた。 ③期末アンケート結果から見た今後の課題 各設問項目における「強く思う」の回答比率は50%～75%であった。今後、さらに「強く思う」の回答比率が増加するよう、グループワークも取り入れ、授業外学修につなげたいと考える。	29	29	100.0%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
作業療法評価学演習（Q3・Q4）	池内 克馬	【昨年度の結果を踏まえた授業改善点】 昨年度は授業評価アンケートの回答率が低かったため、今年度は回答率向上に努めた。その結果、回答率は96.6%に向上したため、来年度以降も継続する。 【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】 ①学期中に演習・実技形式を多く取り入れ、履修者の反応が即時的に得られるように工夫した。 ②予習した資料の提出を課題として課すことで、学習状況を可視化した。 ①・②により、履修者の理解度・学習状況を把握したうえで必要な知識・技術の指導に努めた。 【アンケート結果から見た今後の課題】 ①試験で問う内容を明確にするために、オリエンテーション資料の改善を図る。 ②他の科目の試験日、学祭などのスケジュールを加味し、試験のスケジュールを再検討する。	29	28	96.6%
精神障害治療学Ⅰ（Q3）	織田 靖史	アンケート回答者が29名中17名と約6割ほどであったため更なる回収率向上のために努力を要する。 回答者の内容は、基本的には好意的であるが、能動学習に不満を持っていたものが1名程度いることが分かったため、知識の伝達が主になる中で能動的授業ができるよう更なる対策が必要である。 フィードバックがおおむね好評であったため、この方式をさらに洗練させて実施することとする。	29	17	58.6%
遂行分析学（Q4）	古山 千佳子	昨年度の学生コメントを参考にして、学生同士のディスカッションの時間を多く設けるようにした。さらに、各授業で実施した観察と分析結果をクリアファイルにまとめ、学生自身が学習のプロセスを確認できるよう工夫した。学生は一方的に指導されるよりも学習の内容やプロセスを学生同士で話し合い、確認できることに満足する傾向がみられた。今後も学生自身が体験し、振り返る機会を提供していきたい。	29	26	89.7%
医療画像学（Q3）	飯田 忠行	1) 昨年度の結果を踏まえた授業改善点 対面講義にて、必携PCを用いてTeamsとMoodleを駆使した。Moodleを用いた小テストを行い、Teamsではグループ内でディスカッションをさせ解を導くようアナウンスした。応用課題に関しては、Teamsにてファイルを配布し、グループディスカッションを行い、その際、何を調べてその回答を導いたのかを記載させた。また、講義後、回答に関して、考え方が合っていたのか？それとも間違っていたのか？間違っていれば何を間違えたのかを省察させた。昨年、教科書の指定および講義を行った後での小テストの意見があったため、TBLをやめ、講義→小テスト→応用課題とした。 2) 履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 必要な資料を提示し講義を行い、確認テストを個人で行った。解説後、応用課題を実施した。Moodleにて小テスト、Teamsで応用課題の確認を行い、各個人、チームの学習到達度を確認した。X線画像、CT、MRIの基礎、その応用課題に分け、理学療法士・作業療法士の国家試験に近い形で学修させた。応用課題では、グループで考え方を共有し、解説後、何が間違っていたのかを省察させた。そして、応用課題の採点を即時行い、返却した。 3) 期末アンケート結果から見た今後の課題 「能動的学修機会」「教材」（肯定100%, 否定0%）、で講義に関する内容の提示および理解の定着は行えていると考えられる。しかしながら、「目標とする力」（肯定97%, 否定3%）であり、ピア評価を行うことへの抵抗感があると考えられる。自由記載欄には、毎年ながら「ピア評価がない方が授業がやりやすい」などの意見があるが、授業の冒頭で説明し意見を聞いている。しかしながら、自由記載欄にあるため、講義の組み立てが難しい	30	30	100.0%
作業療法評価学実習（Q3・Q4）	田中 睦英	地域の高齢者にご協力いただき、演習・実習を中心とした授業を展開しました。概ね授業内容に満足してもらい、自主学習など主体的に取り組んでくれたようで良かったです。今年度は評価にご協力いただく高齢者の人数が例年の半数だったため、5人グループで一人の高齢者を担当することになり、関わりが不十分と感じた学生もいるかと思います。これは3名の教員が各グループと密に関わり、適宜助言・指導をできるようにするための方策でした。次年度も同じ形式で進める予定ですが、学生の意見を聞きながらよりよい学びが得られるように適宜授業計画を調整したいと思います。	30	17	56.7%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
身体障害治療学演習（Q3・Q4）	西田 征治	【昨年度の結果を踏まえた授業改善点】昨年度に引き続き、身体障害領域で作業療法士に必要とされるADL指導、義手適合検査等の実技系の演習を毎回行った。昨年度の自由記述で臨床作業療法士を招聘した事例検討演習が好評であったため、講師を地域包括ケア領域に加え回復期領域からも招聘し、多様な疾病と状況を有する事例の検討を行った。また、より臨床で必要とされる技能の習得を目的とし、摂食嚥下の介助と聴診の演習を新規に導入した。更に、Teamsを使って授業前に資料を配布して事前学習ができるよう配慮した。【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】毎回ミニツペーパーを配布してその回の要点や質問を書かせ、学生の理解度を把握するとともに、質問に対して個別にミニツペーパーで回答し、重要な点については次の回の授業で全体にフィードバックを行った。【期末アンケート結果から見た今後の課題】回答者が少なく受講者の包括的評価とは言えないが、「授業に集中して真剣に取り組んだ」「能動的学習機会がある」「課題の内容と量は適切である」「授業の目標とする力身に着く」「この授業の内容をさらに学びたい」「学修に必要な支援を得た」「総合的に授業に満足している」の設問で「そう思う」がいずれも100%だった。「授業外学習時間」の設問では、十分な自己学習が行えていない様子が見えたと、課題の調整を検討したい。回答者数が少ない要因として、開講期がQ3・Q4となっているが、2コマ続きの演習形態をとっており、Q3の期間で終了するにもかかわらず、アンケート回答がQ4終了後にしかできないことが考えられるので、次年度から開講期を後期前半に変更したい。	30	3	10.0%
精神障害治療学演習（Q3・Q4）	織田 靖史	回答者が少数であるため今後回答率の向上を目指す。学生の評価は全般的に好意的な受け止めであるため、より洗練された内容を目指す。この科目は精神障害治療学実習と連動されているため、その内容を充実させるとともにその意図を学生と共有する。	30	3	10.0%
精神障害治療学実習（Q3・Q4）	織田 靖史	回答結果が少ないため、これから回答の時間を取るなど工夫したい。また、演習と連動しているためその内容を充実させるとともにその意図を学生と共有する。この講義ではLARP（リアルアクションロールプレイ）を用いてケア会議や治療場面を再現するので、より主観的な反応を通じた学びを充実させるよう工夫する。	30	1	3.3%
認知障害治療学演習（Q3・Q4）	田中 睦英	残念ながら少数の学生しかアンケートに回答していませんでしたが、授業内容については満足しているようでした。高次脳機能障害の評価に関する演習中心の授業であったため、学生によっては時間内に終了しないこともありました。資料や動画コンテンツによる反転授業にすることで、学生が事前に授業で学ぶべきことを理解した上で臨めるような工夫をしたいと思います。また実技試験についても、もう少し早めに課題を提示できるよう努めます。	30	2	6.7%
発達障害治療学実習（Q3・Q4）	古山 千佳子	昨年度は学外（総合子ども園）での実習を一人1回しか経験できなかったが、今年度は2回経験できるよう調整し、学生が子どもを対象としたプログラムを計画し実行する機会をつくった。学生は子どもの集団をファシリテートすることの難しさと充実感の両方を感じていた。学生が学び、感じたことを確認し合う目的で、実習での経験をグループごとにまとめて発表する機会をつくった。学生はとても熱心に課題に取り組んだ。しかし、授業評価アンケートへの回答が少なく、学生の意見を聴くことができなかった。授業終了からアンケートまでの期間が長く空いたことが要因と思われる。回答率を上げるための工夫が必要である。	30	1	3.3%
地域作業療法学実習（Q2～Q4）	田中 睦英	週2回ペースで地域の施設でフィールドワークを行うのは大変だったと思いますが、多くの学生が体験的に様々な学びが得られたようです。課題については活動記録と個人記録の提出や生活行為向上マネジメントの演習課題をシラバスで指示していましたが、わかりにくかった学生もいるようです。初回授業時のオリエンテーションや課題の提出方法等について、学生がわかりやすく提出しやすい方法を検討します。教材等について適切と感じなかった学生については、フィールドワークで発見した課題に直接的に解答できる資料の不足を感じたのかもしれませんが。この演習では、教科書や授業資料よりも書籍や文献等を自身で調べて眼前の課題解決に活かすことのほうが重要です。ただ、その点について具体的な指導や助言が十分に行えていなかったのは反省点ですので、次年度は資料の探し方や活用方法を含めて授業を行いたいと思います。	30	30	100.0%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
職業生活援助論（Q3）	助川 文子	今年度も就労支援を実施する作業療法士を外部講師に迎えた講義，および三原特別支援学校に協力を得て校外実習を行い，実際の職業教育による高校生との協働を体験した。しかし，予定した実習が感染症の関連で一部中止になるなど，演習部分では計画の変更が必要となった。そのため，実習結果の発表など学生の能動的な学習機会が例年に少なくなり，適切な代替えの教育を検討するなど工夫が必要であった。また，アンケート回答者数が少なく，次年度の課題としたい。	30	2	6.7%
福祉機器論演習（Q3・Q4）	田中 睦英	住宅改修に必要な基礎知識についての座学とモデル住宅・症例による演習を組み合わせた授業を展開しました。授業内容や課題、学びの内容について概ね満足してもらえたようですが、作業療法士が福祉機器の選定や住宅改修に関わる意義を理解していただけなかった学生がいたのは残念です。実際の事例の住宅改修などを通じて理解を深める努力をしましたが、なぜ作業療法士が必要とされるのかという点については、もう少し教科書的な解説が必要であったかもしれません。これは、グループ演習に対する個人の動機づけにも影響していた可能性があります。次年度はそのようなことがないよう、授業の目的とゴールを明確にし、グループ内・間で不公平が生じないよう、皆さんが主体的に取り組めるような工夫を凝らしたいと思います。	30	30	100.0%
作業療法特論（Q3）	高木 雅之	①昨年度の結果を踏まえた授業改善点 現場の実践者からの中間発表に対するコメントを最終発表に十分にいかせなかったとのコメントがあった。そのため、中間発表後に実践者と学生が話し合う時間を設けた。 ②履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 中間発表終了後にアンケートを用いて、これまでの授業の感想や今後の授業に期待することについて学生に尋ねた。その回答において、新規事業を企画するときのポイントと具体例が知りたいとの要望があった。そのため、後半の授業では、それらの内容を講義に盛り込んだ。 ③アンケート結果から見た今後の課題 実際に事業を見学せずに、現場の実践者から話を聞くだけでは現状や課題を理解することが難しく、学生の提案は現実離れしてしまう。現場の実践者と学生と一緒に考えていけように、相互の継続的な交流を図る。	30	2	6.7%
作業療法管理学（Q4）	助川 文子	作業療法管理学では、模擬病棟事例を元にマネジメントと課題を演習を通して指導しており，個々学生の検討，考察の過程を重視している。学生も趣旨を理解し，能動的に演習や発表を進めることができていたと考えているが，アンケート回答者は少ないため，次年度の課題としたい。	30	1	3.3%
音楽療法概論（Q2 作3・コミュ4）	上羽 由香		34	1	2.9%
言語理論と言語心理（Q3・Q4）	坊岡 峰子	外部講師科目	29	7	24.1%
音声・聴覚情報処理（Q3）	伊集院 睦雄		30	15	50.0%
音声・聴覚情報処理演習（Q4）	伊集院 睦雄		29	10	34.5%
言語発達（Q3・Q4）	細川 淳嗣	①昨年度の結果を踏まえた授業改善点 新課程になってこの科目の中に保育所見学・発表が入ったので、「能動的学修の機会が・・・」に対してポジティブな回答が増えたのだと思われる。 ②履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 保育所見学の後にアンケートを実施した。また、各回の授業の後に学んだこと・感想・質問をフィードバックコメントとして回答をさせ次の回の冒頭でそれに対してコメントを行なった。 ③アンケート結果から見た今後の課題 少数であるが「思わない」との回答があったがコメントに記載がないため具体的な対応策が考えられないが次年度も②のフィードバックを得て対応をする予定である。	29	7	24.1%

■担当教員コメント（専門科目） 保健福祉学部 令和7年度後期

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
解剖生理学演習（Q3・Q4）	森 大志	【昨年度の結果を踏まえた授業改善点】 昨年度は特に否定的な意見等はなかった。そのため、今年度は大幅な授業内容・方法等の変更はせず、作年度同様の形式で実施した。前半は基礎医学（解剖、生理学）、後半はやや臨床医学を意識した内容で構成した。 【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】 授業は新任教員を含む4名の教員で実施し、各教員がそれぞれに授業回に講義演習内容に関する課題の提出を求めた。あくまでも授業の理解度を学生自身が把握することを目的としたが、その主旨の浸透は十分ではなかったかもしれない。次年度はその点を十分に理解できるように説明する。 【アンケート結果から見た今後の課題】 アンケート結果を見ると、授業の教材、内容、支援、授業満足度などの設問に対して概ね肯定的な回答結果であった。一方、強く否定的な意見を持つ学生もいた。教員間の連携が十分ではないのではないかという意見であった。教員間では各自の授業内容を相互に確認しており、連携が不十分とは考えられない。しかし、学生の中にそのように感じるものがあるのであれば、この授業科目がどのような内容を扱い、その意図が何かという点などをこれまで以上に丁寧に説明する必要があると考える。次年度以降は初回授業ガイダンスだけではなく学生が十分に理解できるよう折々の機会をみて説明するよう心掛ける。	30	7	23.3%
発達系障害学演習Ⅰ（診断）（Q3）	堀江 真由美	Teamsチャンネルが多いということで、分かりやすいように日付を付けるなど整理して提供したいと思います。	29	13	44.8%
認知系障害学演習Ⅰ（診断）（Q3）	坊岡 峰子	①昨年度の結果を踏まえた授業改善点： 授業時間の割には実施すべき内容が多く、なるべく専門書による事前学習や検査実施に関する動画の視聴を促した。できるだけ、実際の臨床場面をイメージしやすいように、附属診療センターの患者さんに許可を得て動画を提示するようにした。 ②履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点：授業の翌日中に提出期限として、毎時間「授業の内容・まとめ、あれば）質問」を提出することとした。その内容から全体の習得度などを把握し、必要な補足や修正を行うようにした。 ③アンケート結果から見た今後の課題：履修者全員からの回答（100%）であったが、概ねどの項目も「そう思う」以上で、全体的な流れ・内容・構成は継続で様子をみたいと思う。自由記述には、質問をどこにするか指示との違いがあったようであるが、オムニバスの講義であり質問はCCを使いメールを使うよう周知したい。 また、授業内容に関する伝達をもう少し早くに伝えて欲しいという要望が出されていたが、全コマのスケジュールは最初の授業では周知している。今後は半期ごとにスケジュールを提示し、休暇中に復習に加えて、予習をすすめておくよう指導したい。	29	29	100.0%
聴覚系障害学演習Ⅱ（補聴器）（Q3）	長谷川 純	昨年度の結果をふまえ、理解が難しい内容について授業資料を改訂し、また、間違いやすい例を挙げて説明するようにしました。 授業期間中は、Teamsにて質問・コメント等をできるようにし、必要に応じて次の授業の際に補足説明をしました。 講義部分だけでは十分に理解できなかったり、演習の中で試行錯誤があっても、最終的に演習が終わった段階で理解が実感できればよいと思います。講義での説明、演習中の解説では、さらにわかりやすいものになるようにしたいと思います。	29	26	89.7%
聴覚系障害学演習Ⅲ（小児聴覚検査）（Q4）	佐藤 紀代子	●昨年度の結果を踏まえた授業改善ポイント 幼児聴力検査の内容だけではなく、幼児聴検の重要性や意義など派生する事項につなげた内容をプラスした。また、子どもの難聴に関連する資料などを提供し、興味を持てる内容をプラスした。問2（授業外学修（課題、準備、復習等）時間）については、全くしていないと回答するものが9%であるが見られる。事前学習を明記するなど、工夫をしてきたい。 ●履修したの反応を知るために学期中に実施した方法、結果を踏まえた授業改善点 質問がないか、授業中に反応を見るようにした。以前の授業で扱った値の換算方法などは出来ているか留意した。また、実際の実習では、できるだけ学生の疑問などにも対応するようにした。 ●アンケート結果からみた今後の課題 設問には「強くそう思う」「そう思う」の割合で100%占めるものが多かった。特に、授業外学修で取り組む課題などを呈示しながら、受講者の興味、関心を引き付けられるように工夫したい。	29	11	37.9%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
発声発語・嚥下系障害学演習Ⅰ（首声障害・吃音評価支援法）（Q3）	田口 亜紀	1）昨年度の結果を踏まえた授業改善点 昨年度は前任の教員が担当しており本年度から新たに担当したため、「昨年度の結果」がなく、それを踏まえた改善点についての詳細な検討は困難である。本講義では対面形式を基本とし、授業中に随時質問を受け付けることで学生が疑問点をその場で解消できる環境を整えた。また、学生から出された質問や意見は全体で共有し、理解の偏りが生じないよう配慮した。 2）履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 授業内では正誤問題による理解度の確認やグループワークを適宜実施し、学生の発言内容や課題への取り組み状況から学修状況の把握に努めた。正誤問題では、知識の定着度や誤解しやすい内容をその場で確認することができ、解説を加えることで理解の修正につなげることができた。また、グループワークでは評価手順や支援方法について学生同士が意見交換を行うことで、主体的に学修に取り組む様子がみられ、内容理解を深めることができた。 3）期末アンケート結果から見た今後の課題 授業外の学修時間が十分とはいえない学生が約6割を占めていることから、予習・復習を習慣化させる仕組みづくりが今後の課題である。自由記述では、試験の難易度が高いとの指摘や、毎回の振り返りテストがあると学習しやすいとの意見が見られたため、到達目標と評価方法の対応関係をより明確に示すとともに、授業内外で、学生が短時間で取り組める小テストや振り返り課題を行い、その都度理解度を確認しながら学習を進めていくことが必要である。	30	12	40.0%
発声発語・嚥下系障害学演習Ⅱ（構音障害評価支援法）（Q4）	小澤 由嗣	今年度は、学生の授業外学修と学習内容の定着を促すために、単元ごとに、確認テストを行った。また事前学修としての解説ビデオでの学修や、課題は明示したので、設問3の授業外に取り組むべき課題が示されているかに対して、ごく一部にそう思わないという回答があったのは疑問である。一方で、設問4の能動的学修、課題の内容・量については肯定的な回答が多く、設問6の目標とする力が身につくについても同様であったので安心した。前年度まではなかった意見として、配布資料（電子ファイル）について、Moodleでの提供方法や、資料のファイル名から中身を把握しにくいという指摘があった。卒業後の便宜のため、提供する参考資料が多かったことも一因と思うが、次年度からは、資料は、Teams等で、フォルダに集約し、一括DLができるようにする、ファイル名の再検討やナンバリングによる検索性の向上により、指示したときに、より取り出しやすくするようにしたい。授業時に参照する重要な資料は、DLだけでなく、事前に印刷して持参するよう依頼しているが、この点についても徹底して伝えていく。	29	7	24.1%
心理測定法（Q4）	古屋 泉		29	10	34.5%
脳機能画像学（Q4）	津田 哲也	アンケート回収率が低いので次年度も促していきたい。おおむね前向きに取り組んでいた様子だが、時間外の学習時間が延びるよう、テキストの導入や予習・復習課題を提示していきたい。	30	8	26.7%
コミュニケーション障害診断法（Q3・Q4）（～R6入学生）	中村 文	① 昨年度の結果を踏まえた授業改善点 昨年度は回答者5名と少数であったが、すべての設問で肯定的回答が得られた。これは、科目ルーブリックにおいて主体性や協働性を含む全項目で授業前後の評定が向上していたこと、ならびに時間外のグループワークや主体的学習の重要性、自身の課題や目標に関する記述と一致していた。本科目では、基礎・専門科目での学修を臨床実践に直結する統合的活用能力へ高めることを重視している。今年度も既修内容を適宜提示し、復習と応用を促した。授業はグループワークを中心に、事例を想定して観察・分析・仮説立案・鑑別を行い、協議と記録を通して検討する構成とした。 また、成人分野の面接実技試験において診断名等の公表を求める意見を踏まえ、試験後も診断名は公表しない方針を明確にした。その代わり、面接後に追加質問を受け付け、再検討のうえ報告書を提出させることとした。 ② 履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 授業中は巡回して助言・質疑応答を行い、課題やレポートから理解度・技能習得状況を把握し、次回授業で全体にフィードバックした。科目ルーブリックの自己評定は初回・中間・最終回に実施（成人・小児分野で各3回、計6回）した。中間では最終回までの目標を設定させ、自己の到達状況と課題を明確化させた。これにより、具体的目標に基づく主体的な学修が促されたことが、最終評定や記述からうかがえた。 ③ アンケート結果から見た今後の課題 今年度は29名中8名が回答し、すべて肯定的であった。一方、授業外学修時間は「4時間未満」「2時間以上」が各38%であったが、「2時間未満」も25%みられた。90分×3コマ連続の授業形態や他科目の課題との並行が影響している可能性がある。R8年度からは90分×2コマ連続となり、授業形態の変化はあるが、今後も引き続き、他科目との調整や課題提示の早期化により、計画的な時間外学修を支援する必要がある。	29	8	27.6%

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
臨床実習Ⅰ（Q1～Q4）	坊岡 峰子	①昨年度の結果を踏まえた授業改善点 昨年度の「授業評価アンケート」結果および教員コメントを確認できないため、具体的な改善点については言及できない。ただし、各演習・実習ごとに別途実施したアンケートには履修生から、特に必要な改善点は挙げられておらず、基本的には昨年度の内容を踏襲した。 ②履修者の反応把握の方法と改善点 本科目は、附属診療センターにおける言語聴覚療法の見学、仮想症例による一連の流れの体験、模擬患者とのコミュニケーション演習、血圧測定および車椅子操作演習など、複数の演習・実習で構成している。いずれも少人数グループ（3～10名）に教員が付き、内容・手順ごとに問いかけや実践を通して理解度・技能習得状況を把握し、適宜質疑応答や助言を行った。加えて、学生同士の議論やグループワークを取り入れ、アウトプットの機会を設けた。さらに、担当教員間での情報共有や提出レポートの内容を通して理解度や学習姿勢を把握し、指導の改善に努めた。実際の訓練場面を初めて見学したり、自身の実習生としてのコミュニケーション態度を振り返ったりする体験は、より実践的な学びにつながり、今後の学習意欲の向上にも寄与したものと推測される。 ③アンケート結果から見た今後の課題 今年度は履修者29名中4名が回答し、いずれも肯定的であった。授業外学修時間は「2時間以上4時間未満」「2時間未満」が各50%であったが、本科目は毎週定期的に実施する形式ではないため、時間外学修の算定が難しい影響も考えられる。また、Q4後の春休みに実施する演習があり、アンケート実施時期との関係から回答数が少なく、意見が十分に反映されていない可能性がある。各演習・実習ごとに別途アンケートを行った結果、満足度は約9割が「とても満足」「満足」と高く、実施時期やグループ人数も概ね適切との評価であった。一方、時間内課題については熟考・記述時間の不足を指摘する意見があった。今後は課題量や時間設定が過度とならないよう調整するとともに、その教育的意図を丁寧に説明していく必要がある。	29	4	13.8%
聴覚系障害学演習Ⅴ（小児難聴・地域連携）（Q4）	佐藤 紀代子	●昨年度の結果を踏まえた授業改善点 今回はグループワークに基づき課題発表を1回に変更し、班ごとの活動を授業内に入れてみた。学生全体の活動の状況、参加状況がよくわかり、学生の状況を知る上では有効であった。また、加齢性難聴について、新たに他の教員が1コマ担当した。その他、これまでの授業で対応できなかった耳型採取、補聴器技能者の講義なども加え、実際に聾学校の見学、発達支援事業の言語聴覚士の話などを盛り込んでいる。学修の意欲や今後どのような言語聴覚士としてやっていくのかなどを考えるきっかけにもなっている。 ●履修者の反応を知るために学期中に使用した方法、その結果を踏まえた授業改善点 3名の教員にが順に回って実施している。昨年度の反省点を踏まえて今年度の授業を構成している。学生の状況や表情などから理解度、授業への関心を感じて授業を行った。 ●アンケートの結果からみた今後の課題 アンケート結果をみると、課題量、目標とする力、適切な教材にたいして、「かなりそう思う」と満足度60%以上と高い結果であった。また、コメントには、課題レポートを作ることによって勘違いによる理解があることに気づいたという意見もあり、結果として能動的な学修につながったと考えることができる。さらに、興味を持てるように工夫を重ねていきたい。	31	5	16.1%
コミュニケーション科学研究法（Q4）	古屋 泉		30	4	13.3%
認知系障害学演習Ⅳ（総合・地域）（Q4）	坊岡 峰子	①昨年度の結果を踏まえた授業改善点： 学外実習でのケース報告を4コマで実施した。なるべく多くのコース教員にも参加・コメント頂けるようコースに参加を呼び掛けた。訓練計画・立案・発表を行わせたが、昨年度は年末年始をまたぐと負担が大きいとの意見があり年内に実施するようにした。本年度も臨床現場の生の声を聞く機会として1コマ外部講師に講義を依頼した。講義まで、介護保険制度など授業を理解するうえで必要となる、福祉概論で学んだ内容などを確認しておくよう周知した。 ②履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点：授業の翌日中を提出期限として、毎時間「授業の内容・まとめ、（あれば）質問」を提出することとした。その内容から全体の習得度などを把握し、必要な補足や修正を行うようにした。 ③アンケート結果から見た今後の課題：90%の回答であり、どの項目も概ね「そう思う」以上であり、全体の構成や内容は基本的には継続していきたい。一方、グループワークの負担が大きいことなどが複数記されていた。短時間で考えをまとめることは臨床現場では実践力につながるが、事前学修が基本となるため、休暇中も含めては早めに予測した学習をすすめておくよう具体的な内容を指示したい。また、他の科目とのグループワークが重なる負担も記されていた。3年生の第4Qであり、自発的・実践的な力をつけるべき時期でもあり仕方がない面もあるが、できれば他の科目とも班分けは同じメンバーにするなど配慮したい。	30	27	90.0%

■担当教員コメント（専門科目） 保健福祉学部 令和7年度後期

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
コミュニケーション障害学総合演習（Q3）	長谷川 純	各回の授業について、事前に要望や質問を出せるようにしたほか、随時、Teamsを使って質問ができるようにしました。 事前に個人・グループで準備のうえ、それも反映して授業内容を組み立てることになっていましたが、結果として教員が授業内容を設定することが多くなっていました。 事前課題の意義や役割をより明確にしたうえで、授業準備の手順をわかりやすく提示するようにしたいと思います。	26	24	92.3%
音声学Ⅱ（Q3）	津田 哲也	概ね前向きに取り組んでもらえている。一方、自習時間が少なく改善を意識したい。資料やスケジュールを前年の反省をいかして余裕を持った時間を意識した。また利用するソフトウェアやフォントのサポートが不足していたというコメントもあったので対応していきたい。	30	22	73.3%
地域言語聴覚療法学Ⅰ（Q4）	津田 哲也	アンケートの回答率が低いのでさらに促していきたい。概ね前向きに取り組んでいる様子がうかがえた。講義時間外の学習時間確保のため、予習復習の教材提示など充実させていきたい。地域における言語聴覚士の専門性を活かした連携や支援を各専門分野の視点から学べた点に好意的な反応が得られた。今後は、専門的視点を生かしつつ、未学修の専門分野の多い1年次生に理解しやすい構成となるよう引き続き工夫し、2年次以降のコース専門分野での学修への関心と意欲の向上につながる授業づくりに取り組んでいきたい。	28	6	21.4%
社会福祉の原理と政策Ⅱ（Q3・Q4）	手島 洋	人間福祉学コースの1年生に対する専門科目の基礎分野として、一定の関心と理解を得ることができたと考えている。グループごとの発表も取り入れて、主体的な理解の促進を図った。次年度も引き続き主体的な学修を図ることができる授業に取り組んでいきたい。	41	9	22.0%
高齢者福祉（Q3・Q4）	國定 美香		40	9	22.5%
児童・家庭福祉（Q3・Q4）	梶原 豪人	①昨年度の結果を踏まえた授業改善点： 本年度から担当したため、省略する。 ②履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点： 毎回の授業後の課題としてリアクションペーパーの提出を求めた。リアクションペーパーではA授業内容の要約とB授業を受けての感想や疑問、の二つを課題として設定したが、平均して約350字（A）＋約200字（B）程度の分量で提出があった。Bについては、多くの履修者から「なぜ？」「どうして？」という疑問も多く寄せられるため、毎回3～5つ程度のコメントを抽出して、次回授業時の冒頭15～20分程度の時間を用いて、フィードバックを行った。ただし上記の方法であると、返しきれないコメントも多いため、次回からはオンラインQ&Aに対応したアプリケーションを活用して、授業時間内に質問を受け付け、随時フィードバックを行えるように準備したい。 ③アンケート結果から見た今後の課題： 「この授業の内容に関してさらに学びたい」という設問について「強くそう思う」「そう思う」の合計が83%、「総合的に判断して、この授業に満足している」という設問について「強くそう思う」「そう思う」の合計も83%となったが、履修生の回答率が20%を下回っているため、バイアスが生じていると考えられる。また「授業に関する具体的な気づきや、改善した方がよいと思う点、この授業で印象に残った点などについて、あなた自身の視点で、担当教員への「メッセージ」を記入してください」という自由回答の設問について回答が0件であったため、アンケート結果から今後の課題を見出すことは難しい。しかし、上記②で示した通り、今後は授業時間内で双方向で履修生と対話できる時間を確保することに試みたい。	40	6	15.0%
ソーシャルワーク実習指導Ⅰ（Q3・Q4）	楊 慧敏		40	12	30.0%

■担当教員コメント（専門科目） 保健福祉学部 令和7年度後期

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
医学概論（Q3・Q4）	安武 繁	科目「医学概論」 【昨年度の結果を踏まえた改善点】 作成した授業資料を中心に、この科目の大切な内容について、できるだけ具体的に詳しく、わかりやすく解説を行いました。臨床医学だけでなく、公衆衛生学、予防医学、保健医療福祉に関する制度の内容についても説明しました。【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】 医療福祉相談にも役立つ学習内容としました。学習のポイントは何かをできるだけ明示するようにしました。【期末アンケート結果から見た今後の課題】 今後の課題としては、できるだけ多くの事例を十分に検討することです。また、限られた授業時間の中で、臨床医学だけでなく、リハビリテーション、公衆衛生学、予防医学、保健医療福祉に関する制度などの内容について、さらに多くの項目について、幅広い内容について解説を行うようにすることです。 国家試験受験の対策としても、この科目の授業では、基本的で重要なポイントを説明することが大切です。	40	10	25.0%
適応の心理（Q3）	細羽 竜也	【今年度の取り組み】授業資料は、原則1週間程度前に配信し、課題を出すことによって、事前学習を積極的に促した。また授業冒頭に小テストを設定することで、事後学習を動機づけた。授業にはアクティブラーニングを取り入れ、授業への関心を高めるようにした。 【評価】回答率90%であった。繰り返し呼びかけに一定の効果があったと考える。真剣に取り組んだ学生は100%であった（問1）。双方向授業（問4）や課題の設定（問5）、授業目標（問6）、授業資料（問7）、今後の学習意欲（問8）について肯定的な評価を得た。授業満足度（問10）は肯定的評価が100%であった。 【来年度の取り組み】授業外学習の実施率がやや低い状況が伺えた（問2、問3）。来年度はよく調べるよう動機づける設定を導入したい。	40	36	90.0%
社会保障Ⅱ（Q3・Q4）	崔 仙姫	・前年度の結果を踏まえた授業改善点 本年度は本講義の初年度であるため、前年度との直接的な比較は行えない。そのため、学期中における履修者の反応や理解度、ならびに授業アンケートの結果をもとに、授業内容および運営方法の改善を図った。今後は、次年度以降の授業評価の推移を継続的に分析し、授業設計や指導方法のさらなる改善につなげていく予定である。 ・履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 学期中には、授業中の口頭による意見収集や、授業後の質問対応を通じて履修者の反応を把握し、授業運営に反映するよう努めた。また、授業の進行速度や説明方法についても、履修者の理解度や集中度を考慮しながら、適宜ペースの調整や補足説明を行った。その結果、回を重ねるごとに履修者からの質問が増え、内容もより深まっていく様子が見られ、主体的な学習姿勢の向上が確認された。特に後半の授業では、履修者同士の意見交換が活発になり、発表内容の質的向上も認められた。 ・アンケート結果から見た今後の課題 本講義では、講義形式に加え、アクティブ・ラーニングの一環としてグループワークおよびグループごとの発表を実施している。これらの活動を通じて、履修者が授業内容を単なる知識としてではなく、自らの理解として定着させ、自己の言葉で説明できるようになることを目標としている。アンケート結果からは、概ね高い満足度が示された一方で、より深い理解を促すためには、議論の時間の確保が今後の課題であると考えられる。今後は、グループ活動の構成や進行方法をさらに工夫し、履修者の主体性と理解度の一層の向上を目指した授業改善を行っていきたい。	41	24	58.5%
ソーシャルワーク演習（専門）Ⅰ（Q3～Q4）	永野 なおみ		42	16	38.1%
ソーシャルワーク実習指導Ⅱ（Q1～Q4）	楊 慧敏		42	13	31.0%
地域福祉と包括的支援体制Ⅱ（Q3・Q4）	田中 聡子	全ての項目で高い評価であり、否定的評価はない。特に授業外時間は毎回課題を設定し、知識の習得だけでなく、自分で授業内容をふりかえり、考えるように設定しているので、4時間以上の回答が多い。満足度も高く、必要な知識を習得しているという評価なども高い。	42	14	33.3%

■担当教員コメント（専門科目） 保健福祉学部 令和7年度後期

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
ソーシャルワークの基盤と専門職（専門）（Q3・Q4）	松宮 透高	14名（33.3％）の回答を得た。この科目では、ソーシャルワークに関連する理論科目の過去5年分の国家試験問題を出題範囲ごとに分類したワークシートを作成し、毎週の課題としている。毎回10問程度の過去問に解答し、その根拠説明を選択肢ごとにまとめるという課題であるが、解答だけでも可とし過重な負担となることを防いでいる。翌週に教員が作成した解説資料を提示するため、丁寧に取り組みれば相当の時間を授業外学習に費やすことになる。大半の学生は解説まで詳細に記入して提出しているが、一部は解答だけ、もしくは簡略な解説だけである。授業時間外学習30分未満（回答者の33.3％）はそこに該当する可能性はある。毎回の膨大な課題を全員に確実に課す方向が良いのか、ある程度の冗長性を持たせてこのような形で進めるのが良いのか、また講義内で解説をする機会を求めるリアクションもあるため、課題の取り上げ方をどう工夫するか、などが今後の課題といえる。	42	14	33.3%
ソーシャルワークの理論と方法Ⅱ（Q3・Q4）	大下 由美		42	13	31.0%
現代の精神保健の課題と支援Ⅱ（Q3・Q4）	朝比奈 寛正	この科目名の通り、現代のメンタルヘルス（精神保健）の課題を抽出し、専門職としてどのように支援していくかを講義のみならず、グループディスカッションやICTを用いた取り組みを行った。また、実務家教員の強みを活かしたライブ感や実践知、意見交換型授業を行った。近年のメンタルヘルスの課題は、時流の速さから刻一刻と変わるために課題は抽出できても、解決できるような支援を学ぶことが十分に至らなかったかもしれない。このことが授業アンケートにも反映されていることがうかがえ、学びの深化や満足感に課題を残した。次年度以降、学修活動に対する支援を適宜提供しつつ、課題解決力や満足度が向上できる授業展開を検討したい。	31	10	32.3%
精神保健福祉の原理Ⅱ（Q3・Q4）	金子 努		34	11	32.4%
医療ソーシャルワーク（Q3）	永野 なおみ		38	15	39.5%
総合演習Ⅱ（Q4）	松宮 透高	回答者が10名（26.3％）にとどまったため、またゼミごとの開講であるため、全体的な評価にはなり得ない。回答を見る限り、評価、満足度は概ね高い水準にあると言える。この科目では、前期に開講する「総合演習Ⅰ」の複数ゼミ受講を経て1つのゼミを選択し、そのまま4年次の卒業研究ゼミナールにつながるため、学生は希望するゼミナールに配属されている。第3Qを実習で使うため、「総合演習Ⅱ」の開講は第4Qに集中型となる。形式的には完了しているが春休み中にも継続開講する場合が多く、集計時点ではまだ完全に活動を終えていない場合もあることが、回収率の低さにつながった可能性はある。	38	10	26.3%
居住政策論（Q4）	吉田 倫子	設問10「総合的に判断して、この授業に満足している」では、「そう思わない」と回答した学生は0％であり、授業全体に対する否定的評価はみられなかった。一方、他の設問では「そう思わない」との回答が数％認められた。特に、「取り組むべき課題が示されている」および「学習活動に対して必要な支援を得ている」においては、「そう思わない」と回答した学生が1～2名存在している。自由記述では、「スライドの提示時間が短く、書き込みができない」との指摘があり、資料提示の方法や時間配分に課題が示唆された。今後は、スライド提示時間を十分に確保するとともに、学生が内容を書き込みながら理解できているかを適宜確認するなど、学修状況を踏まえた授業運営の改善が必要である。	36	31	86.1%
精神保健福祉実習指導Ⅰ（Q3・Q4）	細羽 竜也	【今年度の取り組み】オムニバス授業であることから、例年通りを意識した。【評価】回答率37.9％であった。真剣に取り組んだ学生は100％であった（問1）。双方向授業（問4）や課題の設定（問5）は、100％肯定的であった。授業目標（問6）、授業資料（問7）、今後の学習意欲（問8）、課題支援（問9）、授業満足度（問10）について概ね肯定的評価であるが、授業内容がそぐわない学生が少数認められた。【来年度の取り組み】授業外学習の実施率がやや低い状況が伺えた（問2、問3）。来年度は、個別の面談などの質を高めたいと考えた。	29	11	37.9%

■担当教員コメント（専門科目） 保健福祉学部 令和7年度後期

科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
ソーシャルワークの理論と方法（専門）Ⅱ（Q3・Q4）	田中 聡子	どの項目も評価は高い。この科目は講義科目ではないが、授業に積極的に取組むように、事前課題と授業の振り返りは、知識だけでなく、自分で考えるような問を設定している。課題にかかる時間はかなりかかるのでおおよその時間外の学修もできている。さらに学びたくなる点などはさらに高い評価になる。コメント欄にも、実践に即した講義内容である点を評価してもらっている。	37	11	29.7%
ソーシャルワーク演習（専門）Ⅲ（Q4）	國定 美香		38	10	26.3%
ソーシャルワーク実習指導Ⅲ（Q1～Q4）	楊 慧敏		37	9	24.3%
精神障害リハビリテーション論（Q4）	細羽 竜也	【今年度の取り組み】授業資料は、原則1週間程度前に配信することによって、事前学習を積極的に促した。また授業冒頭に小テストを設定することで、事後学習を動機づけた。国試を意識した授業内容を心掛けた。【評価】回答率56%であった。真剣に取り組んだ学生は100%であった（問1）。課題の設定（問5）、授業目標（問6）、授業資料（問7）、課題支援（問9）について肯定的な評価を得た。授業満足度（問10）は肯定的評価が100%であった。 【来年度の取り組み】授業外学習の実施率がやや低い状況が伺えた（問2、問3）。また双方向授業の内容が乏しく（問4）、今後の学習意欲（問8）を喚起できなかった学生がいたことから、来年度は双方向授業の要素を増やしたいと考えている。	25	14	56.0%
精神保健福祉演習Ⅰ（Q1～Q4）	金子 努		25	8	32.0%
精神保健福祉実習指導Ⅱ（Q1～Q4）	越智 あゆみ	（1）昨年度の結果を踏まえた授業改善点：昨年度の結果を踏まえ、実習に向けた知識の確認を図り、実習事前準備につながるように授業内容を組み立てた。（2）履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点：毎回の授業終了後、リアクション・ペーパーの提出を求めた。質問への回答や気づき・感想等へのコメントは、翌週の授業で全員に対して行い、クラス全体で共有できるようにした。（3）アンケート結果から見た今後の課題：全ての質問項目で、「強くそう思う」もしくは「そう思う」の回答となっていた。自由記述欄には、「知識の定着と実習準備の両方を行うことができた」との感想があり、本科目の目的が達成できているように感じられた。今後も学生の声を聴きながら、より良い授業にしていきたい。	25	8	32.0%
総合演習Ⅳ（Q3・Q4）	松宮 透高	回答者が3名に過ぎず、代表性のある会頭にはなり得ていない。とはいえ、講義資料への満足度は高く、全体的な評価は高い。オムニバスの講義であるため、科目担当者ごとの評価たり得ず、全体的な満足度や妥当性の評価になっていない。	40	3	7.5%
福祉サービスの組織と経営（Q3・Q4）	伊藤 泰三	国家試験前という時期を踏まえ感染対策に留意した講義を行う事を来年度の課題とする	40	3	7.5%
ソーシャルワークの理論と方法（専門）B（Q3・Q4）	大下 由美		18	3	16.7%
精神保健福祉演習Ⅲ（Q3・Q4）	金子 努		18	3	16.7%
精神保健福祉実習指導Ⅲ（Q1～Q4）	越智 あゆみ	（1）昨年度の結果を踏まえた授業改善点：昨年度の結果を踏まえ、実習に向けた知識の確認を図り、実習事前準備につながるように授業内容を組み立てた。また、4年間の学びの総まとめとなる学生プレゼンテーションも継続して取り入れた。（2）履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点：毎回の授業終了後、リアクション・ペーパーの提出を求めた。質問への回答や気づき・感想等へのコメントは、翌週の授業で全員に対して行い、クラス全体で共有できるようにした。（3）アンケート結果から見た今後の課題：全ての質問項目で、「強くそう思う」もしくは「そう思う」の回答となっていた。4年間の学びの総まとめを行う授業となるため、学生の主体性、積極性を引き出し、学生自身の学びの定着に寄与できるよう、今後も学生の声を聴きながら、より良い授業にしていきたい。	18	3	16.7%

教職課程

【 前 期 】

- 授業科目の概要 教職課程科目
- 授業科目の名称 担当教員コメント欄参照
- 回答数 113
- 回答率 25.6%

【 総 評 】

回答率が低く、評価の妥当性に疑念はあるが、とりあえず示された数値に関してコメントを記すこととする。Q2の質問項目を除いて、他の9つの項目では、すべて3.40以上の数値を示しており、高く評価されていることがうかがえる結果である。Q2については最頻値が評価2（2時間未満）となっており、とりあえず授業外学修をやっていないことはないが、それに費やす時間が少ない学生が多いことがうかがえる。また、全くしていないとの回答も3名あり、このような学生に対する対応も考慮する必要があるだろう。

教員コメントについても、授業アンケート回答者数が少ないにもかかわらず多くの非常勤講師からもコメントを作成していただいたことに謝意を称したい。また回答が少ないながらも今後の講義の改善に向けたコメントも見られており、この傾向が続くことを期待する。

■学部・学科	教職課程科目	■受講登録者数	441
■科目名	教員免許関係科目	■回答者数	113
		■回答率	25.6%

■設問別評価集計

アンケート設問内容		強く そう思う	そう思う	そう 思わない	全くそう 思わない	当該 科目区分 平均値
		評価4	評価3	評価2	評価1	
Q1	わたしはこの授業に集中し、真剣に取り組んだ。	65 57.5%	48 42.5%	0 0.0%	0 0.0%	3.58
Q2	わたしがこの授業に関連して行っている授業外学修（課題,準備,復習等）時間。（1週間の平均）※	22 19.5%	39 34.5%	49 43.4%	3 2.7%	2.71
Q3	この授業では授業時間外に取り組むべき課題が示されている。	53 46.9%	55 48.7%	5 4.4%	0 0.0%	3.42
Q4	この授業では能動的学修機会がある。	55 48.7%	51 45.1%	6 5.3%	1 0.9%	3.42
Q5	この授業の課題の内容・量は適切である。	59 52.2%	51 45.1%	3 2.7%	0 0.0%	3.50
Q6	この授業の目標とする力（知識や技能など）が身につく。	66 58.4%	47 41.6%	0 0.0%	0 0.0%	3.58
Q7	この授業の教材（教科書・資料など）・教具（アプリ・ファイルなど）は適切だ。	63 55.8%	48 42.5%	1 0.9%	1 0.9%	3.53
Q8	この授業の内容に関してさらに学びたくなる。	52 46.0%	56 49.6%	4 3.5%	1 0.9%	3.41
Q9	この授業での学修活動（発言や提出物など）に対して必要な支援を得ている。	57 50.4%	53 46.9%	3 2.7%	0 0.0%	3.48
Q10	総合的に判断して、この授業に満足している。	62 54.9%	49 43.4%	2 1.8%	0 0.0%	3.53

※平均時間数の評価

2 単位科目：4 時間以上…4 / 2 時間以上 4 時間未満…3 / 2 時間未満…2 / 全くしていない…1
1 単位科目：1 時間以上…4 / 30 分以上 1 時間未満…3 / 30 分未満…2 / 全くしていない…1

■設問別科目平均の範囲と中央値

平均の範囲（当該学部・学科科目）					
最小値	25%点	中央値	75%点	最大値	標準偏差
3.32	3.33	3.67	4.00	3.84	0.24
2.56	2.50	3.00	3.67	3.64	0.42
3.12	3.31	3.67	4.00	3.84	0.30
3.16	3.00	3.67	4.00	3.80	0.27
3.20	3.31	3.67	4.00	3.80	0.26
3.40	3.50	3.75	4.00	3.88	0.23
3.24	3.50	3.67	4.00	3.88	0.26
3.16	3.13	3.50	4.00	3.80	0.24
3.24	3.19	3.67	4.00	3.80	0.24
3.32	3.33	3.75	4.00	3.88	0.24

■担当教員コメント（教職科目） 令和7年度前期

キャンパス	科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
広島	道徳教育論（前期集中）	宮里 智恵		16	1	6.3%
広島	特別活動論（Q2）	山田 浩之		18	8	44.4%
広島	教育相談（前期集中）	森田 裕司	回答率が94%で評価も概ね高く、嬉しく思います。教材はテキストと配布資料のほか、画像や動画なども使い、変化を持たせました。また、実践的なワークで体験からも学ぶよう工夫したのがよかったようですので、今後も続けます。何より受講生がとても熱心だったことで本授業を共に創ることにになり、実りあるものになったと思います。ありがとうございました。	17	16	94.1%
広島	教育実習指導（前期）	向居 暁	回答を促したが、回答がなかったため、何とも言い難い。毎年学生に合わせて授業を改善しており、今後もそうするつもりである。	6	0	0.0%
広島	特別支援教育（Q2）	平田 香奈子	8回の授業ありがとうございました。毎年、教職課程を志望される学生さんたちに、児童生徒たちの学びや育ちが保障されるということと、その障壁をどのようにお伝えするか、取り組んでおります。聞きなれない用語や内容も多い中で、日々のリアクションペーパーなどからも、学生さんが自身の経験などとも繋げながら、知ろうとしている様子が感じられました。全8回では取扱い内容の領域が広く、次年度からはその内容も吟味しながら授業を展開しようと考えております。	18	4	22.2%
広島	国語科教育法Ⅱ（Q1）	谷口 直隆	①昨年度の結果を踏まえた授業改善点：設問2「授業外学修の時間」と設問3「取り組むべき課題の明示」について、他の質問項目に比べると評定が低いため、授業外学修の課題を示すようにしている。②履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善：毎回の授業でリフレクションカードを回収し、受講生の認識や学びの実態を把握するように努めた。また、リフレクションカードについては、毎回全てのものにコメントを付けて返却し、内容については、次回の授業内で扱うなど、全体へのフィードバックも行うようにした。それから、受講生の学びや課題意識などを基に次回以降の授業内容を検討し、再構成した。授業内容の検討にあたっては、授業内での受講生間あるいは受講生と授業者との話し合いの結果も踏まえて検討・実施した。③アンケート結果から見た今後の課題：依然として、設問2と設問3の評定が相対的に低いため、授業外課題を明示することを継続し、授業外学修の見通しが立てられるようにする。ただし、受講生の負担感が過剰にならないように工夫・配慮したい。	4	4	100.0%
広島	国語科教育法Ⅲ（Q2）	出雲 俊江	この科目では、これまでの教職課程での学びを踏まえて、いよいよ授業者としての実践力をつける段階になりました。授業全体を通じて、皆さんが、未だ見ぬ生徒のことを考えながら、熱心に学習指導案の作成に取り組まれたこと、とても嬉しく頼もしく感じていました。国語科の授業を作ることの中には、今まで想像していたものとは違っていた点もあって、とまどいもある様子でしたが、のびのびと発言のあるディスカッションのおかげで、受講者同士で迷いも共有でき、指導者である私にも伝わって、全体に良い授業になったと思っています。短い時間の中で急速にたくさんを身につけるのは大変なことですが、意欲的な皆さんの姿勢に期待しています。これに続く「国語科教育法Ⅳ」ではいよいよ模擬授業に取り組みます。ぜひこの調子で、支え合いながら成長してゆける授業になればと思っています。どうぞ頑張ってくださいね。	4	1	25.0%
広島	英語科教育法Ⅱ（Q1）	馬本 勉	英語科教育法Ⅱは、テキストに取り上げられた重要なトピックについて、学生が分担して発表し、相互のディスカッションを通じて理解を深めるスタイルで行なった。教職を目指す履修者の意識は高く、教える場面で生じるであろう具体例について真剣な議論が行われたこともあり、満足度の高い授業が展開できたと考えている。今後も更なる充実を図っていきたい。	3	1	33.3%

キャンパス	科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
広島	学校栄養教育論Ⅰ（Q1・Q2ペア）	杉山 寿美	○ 学校栄養教育論Ⅰ（杉山寿美・辻愛） １）昨年度の結果を踏まえた授業改善点 今年度からの担当のため、昨年度との比較は不可能であるが、昨年度までご担当いただいた熊谷先生（客員教授）と情報交換をしつつすすめている。栄養教諭免許状取得のため科目であり、杉山が栄養教諭の職務および学校給食の部分、辻が食に関する指導の背景の部分を担当した。円滑に実施できていると判断している。 ２）履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 本科目と3Q開講の学校栄養教育論Ⅱの2科目において、学生は4年次の教育実習に向けて、栄養教諭の職務の概要から教科や給食時間における食に関する指導の実際まで、多くのことを主体的に学ばなければならない。そのため、学生の学びの様子（理解度等）を常に把握しつつ授業を進めている。 ３）期末アンケート結果から見た今後の課題 アンケート回答者は3名であり、回答率が27.3%と極めて低い。この低さを授業担当者として反省している。栄養教諭（教員）を目指す学生であり、他の科目で回答を強く促していることから、本科目では回答の声かけを他の科目ほどには言わず、学生の判断を信じた。今後は、学生が回答の必要性を理解して、自ら回答するよう、本アンケートの意味を伝えたい。評価については「この授業に関してさらに学びたい」「総合的にこの授業に満足している」はいずれも「強くそう思う」3名（100%）であった。今年度からの授業担当者として、担当者2名の事前打ち合わせ等を含め、授業準備に時間をかけ、また、丁寧な授業を行った結果であると考えている。卒業後、栄養教諭として活躍できるよう、今後もしっかり支援したい。（回答数3：履修登録者数11名、回答率27.3%）	11	3	27.3%
広島	教育実習指導（栄養教諭）（前期集中）	山岡 雅子	本授業においては、全設問において「強くそう思う」「そう思う」といった肯定的な回答が100%を占めており、学生が授業に対して高い満足度と学習意欲を持って取り組んでいたことがうかがえる。特に、「授業に集中し、真剣に取り組んでいる」「授業時間外の課題に取り組んでいる」「能動的学修機会がある」といった項目に対して高評価が得られており、学生が自律的に学ぶ姿勢を育みながら、実践的な力を養っている様子が見て取れる。 また、自由記述においても、「模擬授業の実施や他者の授業を通じて自身を振り返る良い機会となった」「丁寧な指導によって多くの学びを得ることができた」といった前向きなコメントが見られ、教育実習に向けた意識づけや準備が効果的に行われていたことが確認できる。 教育実習に必要な基礎的能力の育成を目的とした指導案の作成や模擬授業、実習後の報告会といった一連の学習活動は、学生にとって意義深い学びの機会となり、教員免許取得に向けて必要な知識・技能の理解を深めることにつながったと考える。 これらの成果を踏まえ、来年度も同様の内容・構成で授業を実施する予定である。	3	3	100.0%
広島	総合的な学習の時間の指導法（Q2）	尾川 満宏	①昨年度の結果を踏まえた授業改善点：今年度からの担当のためコメントなし ②履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点：毎回コメントシート等で学習状況を把握し、理解不十分と思われた場合には次回授業で補足説明などを行った。 ③アンケート結果から見た今後の課題：授業目標はおおむね達成されたと判断され、学習内容の意味・意義、必要性については十分に伝えられたと考えられる。一部、提示教材に不満を示す回答があったが、具体的な問題・課題が把握できないため精確な対処が難しい。来年度に向け、授業者なりの改善を試みたい。加えて、授業者の説明が婉曲的で理解しづらい、直接的に答えを明示してほしいという自由記述回答が複数あった。説明する内容によって改善すべきかどうか異なるので、これもコメントが難しいが、授業中発問の多くは明確な答えがないものであり、受講者自身が考えを整理したり、無自覚だった前提を言語化する努力を求める意図を込めた結果、婉曲的な説明・発問になっていた可能性がある（この意図は明示すべきだったかもしれない）。ある程度分かりやすい説明は授業者に求められることであり、話が長くなりがちというのも自覚があるので、反省し可能な部分は改善に努めるが、他方で、分からりづらい、瞬間的には理解しづらい説明や問いに対峙・応答しようとする背伸びの姿勢を、受講者には期待したい。なお、分からないことや、こうしてほしいということがあれば、授業中に発言したりコメントシートを活用して伝えてほしい。対応可能なものは対応したい。	18	16	88.9%
広島	教育社会学（Q1）	藤井 宣彰	開講直前にキャンパスごとの対面授業から、庄原キャンパス発信のオンライン授業に変更になったため、授業者も試行錯誤しながらであった。にもかかわらず、受講者が前向きに取り組んでくれたようで、ありがたく思う。 対面での定期試験は難しいため、レポート課題での評価とした。今後も同様にして考えている。 広島キャンパスと三原キャンパスについては、今後もオンライン主体でやむを得ないと考える。コミュニケーションをとうとうと試みたこともあったが、チャットでのやりとりでないと難しい環境の受講者も多いようで、口頭でのコミュニケーションは断念して、課題等を通じたコミュニケーションとしたい。なんらかの機会があれば、参観という形で受講者の様子を見る機会を設けたい。 庄原キャンパスについては、対面でのやりとりが必要になる可能性があること、受講者の教育実習に向けての様子を見たいことから、ハイブリッドとした。初回は対面とし、その後は受講者が対面かオンラインか選択するようにした。毎回対面受講をした学生もいたが、オンライン受講をする学生の方が多かった。教室から対面授業の様子を配信したところ、教室のインターネット接続環境が悪く、受講に不都合があった。授業者としてもたびたび困難を感じた。この現状から、環境がこのままであれば完全オンラインとして、研究室の有線環境から配信する方が望ましいのだろうと考えている。 ー教員にできることではないが、インターネット環境の整備はお願いしたい。学生からも要望してほしい。また、これも私にできることではないが、このような3キャンパスの同時開講で学生の学修環境が悪化した状態は解消できるよう、教職課程の体制整備を期待したい。	23	8	34.8%
広島	教育心理学（Q2）	向居 暁	7名の回答があった。おおむね予想通りであった。課題については他の授業と比べて多いと思うが、学習量としては多いとは全く思わない。授業内において、学生間でコミュニケーションをとる機会をより増やすように心がけた。	24	6	25.0%

キャンパス	科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
広島	教育課程論（Q1）	今井 航	今年度から本科目を担当することになりました。 回答結果からは、次の六点が皆が肯定していると見られました。授業に集中し、真剣に取り組んでいる。授業の課題の内容・量は適切である。授業の目標とする力が身につく。授業の教材・教具は適切だ。授業での学修活動に対して必要な支援を得ている。総合的に判断して、この授業に満足している。 反対に、次の三点で否定的に見る受講者のいることが判りました。授業では授業時間外に取り組むべき課題が示されている。授業では能動的学修機会がある。この授業の内容に関してさらに学びたい。とりわけ「能動的学修機会がある」に対して「そう思わない」とする回答が24%でした。 この回答結果が得られる前から、もう少し受講者らとのやり取りがあった方がよかったかな、と振り返っていました。およそ四名に一人の割合で、そうした回答が見られたのには納得がいきます。本科目の中身に関することで議論を要する点が多くあります。そうした点を受講者らと話し合えるような機会を作っていこうと思います。	26	21	80.8%
広島	情報通信技術の活用（前期）	松田 充	授業評価で回答いただいた数が少なかったので、適切な返答を行うことが難しいのですが、前向きに授業に取り組んでくださっていることがアンケートから伝わりました。今後も授業改善に努めていきます。	8	1	12.5%
庄原	農業科教育法Ⅰ前期	近藤 寿		1	1	100.0%
庄原	教育社会学Q1	藤井 宣彰	開講直前にキャンパスごとの対面授業から、庄原キャンパス発信のオンライン授業に変更になったため、授業者も試行錯誤しながらであった。にもかかわらず、受講者が前向きに取り組んでくれたようで、ありがたく思う。 対面での定期試験は難しいため、レポート課題での評価とした。今後も同様にしようと考えている。 広島キャンパスと三原キャンパスについては、今後もオンライン主体でやむを得ないとする。コミュニケーションをとうとう試みたこともあったが、チャットでのやりとりでないと難しい環境の受講者も多いようで、口頭でのコミュニケーションは断念して、課題等を通じたコミュニケーションとしたい。なんらかの機会があれば、参観という形でも受講者の様子を見る機会を設けたい。 庄原キャンパスについては、対面でのやりとりが必要になる可能性があること、受講者の教育実習に向けての様子を見たいことから、ハイブリッドとした。初回は対面とし、その後は受講者が対面かオンラインか選択するようにした。毎回対面受講をした学生もいたが、オンライン受講をする学生の方が多かった。教室から対面授業の様子を配信したところ、教室のインターネット接続環境が悪く、受講に不都合があった。授業者としてもたびたび困難を感じた。この現状から、環境がこのままであれば完全オンラインとして、研究室の有線環境から配信する方が望ましいのだろうと考えている。 一教員にできることではないが、インターネット環境の整備はお願いしたい。学生からも要望してほしい。また、これも私にできることではないが、このような3キャンパスの同時開講で学生の学修環境が悪化した状態は解消できるよう、教職課程の体制整備を期待したい。	17	4	23.5%
庄原	教育心理学Q2	坪田 雄二	アンケートに答えた学生が21名中1名と非常に少なく、回答の信頼性が疑問であるため、コメントが難しい。本講義の意図として、心理学的知見を解説するだけにとどまらず、それを教育場面にどのように活用するかを自分で考えられることも重視している。今後もこの方向で進めていこうと考えている。	21	1	4.8%
庄原	特別支援教育前期集中夏季	平田 香奈子	3日間、8回の授業ありがとうございました。 教職課程の必修の授業であったため、履修等の動機も主體的なものではなかったかもしれませんが、 その中でも様々なことに興味を持ちながら学んでおられたのではないかと思います。 グループワークやディスカッションを通じて感じたこと、学んだこと、また 動画等を通じて今回得ることができた情報について、柔軟に今後も学んでいくことが大切だと思います。 集中講義であったため、事前学習・事後学習の時間を取ることは困難ではありましたが、 これからも見識を拡げ、考え続けて行ってください。	17	0	0.0%
庄原	教育課程論前期集中	吉田 成章		18	1	5.6%
庄原	総合的な学習の時間の指導法前期集中	林原 慎		17	1	5.9%
庄原	教育相談前期	坪田 雄二	アンケートの回答数が17名中1名であり、回答の信頼性に疑問があるため、コメントが難しい。示された評価はすべて良い評価となっており、どこ部分の不足しているのかも明確でなく、また、自由記述にも記載がないため、改善すべき点についても明確でない。現状からはこれまでのやり方で今後も進め行こうと考えている。	17	1	5.9%
庄原	情報通信技術の活用（前期集中）	松田 充	授業評価で回答いただいた数が少なかったので、適切な返答を行うことが難しいのですが、前向きに授業に取り組んでくださっていることがアンケートから伝わりました。今後も授業改善に努めていきます。	15	0	0.0%

■担当教員コメント（教職科目） 令和7年度前期

キャンパス	科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
庄原	理科教育法Ⅱ前期集中	磯崎 哲夫	回答を寄せてくれた学生さんには、謝意を表します。後期も、学生さんの興味関心を考慮しながら、授業を進めます。	15	1	6.7%
三原	教育社会学（Q1）	藤井 宣彰	開講直前にキャンパスごとの対面授業から、庄原キャンパス発信のオンライン授業に変更になったため、授業者も試行錯誤しながらであった。にもかかわらず、受講者が前向きに取り組んでくれたようで、ありがたく思う。対面での定期試験は難しいため、レポート課題での評価とした。今後も同様にと考えている。広島キャンパスと三原キャンパスについては、今後もオンライン主体でやむを得ないとする。コミュニケーションをとろうと試みたこともあったが、チャットでのやりとりでないと難しい環境の受講者も多いようで、口頭でのコミュニケーションは断念して、課題等を通じたコミュニケーションとしたい。なんらかの機会があれば、参観という形で受講者の様子を見る機会を設けたい。庄原キャンパスについては、対面でのやりとりが必要になる可能性があること、受講者の教育実習に向けての様子を見たいことから、ハイブリッドとした。初回は対面とし、その後は受講者が対面かオンラインか選択するようにした。毎回対面受講をした学生もいたが、オンライン受講をする学生の方が多かった。教室から対面授業の様子を配信したところ、教室のインターネット接続環境が悪く、受講に不都合があった。授業者としてもたびたび困難を感じた。この現状から、環境がこのままであれば完全オンラインとして、研究室の有線環境から配信する方が望ましいのだろうと考えている。一教員にできることではないが、インターネット環境の整備をお願いしたい。学生からも要望してほしい。また、これも私にできることではないが、このような3キャンパスの同時開講で学生の学修環境が悪化した状態は解消できるよう、教職課程の体制整備を期待したい。	10	2	20.0%
三原	教育心理学（Q2）	古屋 泉	【昨年度の結果を踏まえた改善点】内容の理解・把握の促進のため身近な場面の事例を多く紹介した。【履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点】比較的人数のため身近な場面の事例を挙げたときの、学生の反応を観察して、興味がある内容と思われる部分を切り口に解説を行った。【期末アンケート結果から見た今後の課題】講義形式のため、双方向のやりとりは少なかったと思われる。講義の内容にあまり興味がない学生も多数履修していると思われるため、課題などはほとんど与えていなかったが、今後は検討していきたい。	10	3	30.0%
三原	教育課程論（Q2）	今井 航	今年度から本科目を担当することになりました。回答結果からは、次の五点で皆が肯定していると見られました。授業に集中し、真剣に取り組んでいる。授業の課題の内容・量は適切である。授業の目標とする力が身につく。授業の教材・教具は適切だ。授業の内容に関してさらに学びたい。反対に、次の四点で否定的に見る受講者のいることが判りました。授業では授業時間外に取り組むべき課題が示されている。授業では能動的学修機会がある。授業での学修活動に対して必要な支援を得ている。総合的に判断して、この授業に満足している。「そう思わない」とする回答が、それぞれで25%でした。最後のメッセージでは「授業自体は円滑であり、知識の定着も感じた」とあるものの「もう少しグループワークがあると能動的に学べるのではないかと感じた」ともありました。上で「能動的学習機会がある」に対して「そう思わない」とした回答があったのを思い起こします。またさらに「試験」のあり方への意見も見られました。グループワークを取り入れたり、本科目における「試験」のもつ意味を受講者らへ説明したりする等の必要があると思いました。とは言え、問題なのは、その回答率です。40%でした。まずは、この向上を図ろうと思います。	10	4	40.0%
三原	教育相談（Q1）	勝見 吉彰	受講学生からのアンケートの回答は提出されていない。次年度は回答を促していきたい。	8	0	0.0%
三原	養護実習指導（Q1）	沖西 紀代子	アンケートの回答を履修生には数回促しましたが、回答者なしの結果となりました。次年度は、最終日に回答について説明するのではなく、アンケートがあることを事前にアナウンスし、授業中に回答時間を設けるなどして回答率を上げる努力をしたいと思います。	11	1	9.1%
三原	養護実習Ⅰ（特別支援学校）（Q2）	沖西 紀代子	履修生に数回アンケート入力について促しましたが、誰も回答していない結果となりました。実習寡黙なものもありますが、次年度からは、実習のまとめをする学内日に回答時間を設けるようにして学生が回答してもらえるように努力したいと思います。	11	0	0.0%

教職課程

【 後 期 】

- 授業科目の概要 教職課程科目
- 授業科目の名称 担当教員コメント欄参照
- 回答数 114
- 回答率 24.6%

【 総 評 】

全体として回答率が低く、教員側のコメントも苦勞がうかがえる状態である。ただ一部の科目では、回答率を上げる施策が効果を上げ、高い回答率を示すものもあるため、全体として共有することが求められる。コメントされた内容を見ると、各教員の工夫や今後の改善点などに言及されているものもあり、一定の効果がうかがえる。

また、コメント入力システムについて、一度提出してしまうと訂正ができない仕様となっているように思われる。個人的な経験であるが、同じ科目名の講義を複数キャンパスで実施しており、コメント入力後に間違いに気づいて修正しようと試みたが、できなかった。提出期間内であれば修正できるようにしてもらいたい。

令和07年度後期 授業評価アンケート集計結果

県立広島大学

■学部・学科 教職課程科目
■科目名 教員免許関係科目

■受講登録者数 464
■回答者数 114
■回答率 24.6%

■設問別評価集計

アンケート設問内容		強く そう思う	そう思う	そう 思わない	全くそう 思わない	当該 科目区分 平均値
		評価4	評価3	評価2	評価1	
Q1	わたしはこの授業に集中し、真剣に取り組んだ。	59 51.8%	52 45.6%	2 1.8%	1 0.9%	3.48
Q2	わたしがこの授業に関連して行っている授業外学修（課題、準備、復習等）時間。（1週間の平均）※	10 8.8%	45 39.5%	51 44.7%	8 7.0%	2.50
Q3	この授業では授業時間外に取り組むべき課題が示されている。	55 48.2%	51 44.7%	7 6.1%	1 0.9%	3.40
Q4	この授業では能動的学修機会がある。	54 47.4%	55 48.2%	5 4.4%	0 0.0%	3.43
Q5	この授業の課題の内容・量は適切である。	53 46.5%	54 47.4%	5 4.4%	2 1.8%	3.39
Q6	この授業の目標とする力（知識や技能など）が身につく。	50 43.9%	63 55.3%	1 0.9%	0 0.0%	3.43
Q7	この授業の教材（教科書・資料など）・教具（アプリ・ファイルなど）は適切だ。	55 48.2%	52 45.6%	6 5.3%	1 0.9%	3.41
Q8	この授業の内容に関してさらに学びたい。	50 43.9%	61 53.5%	3 2.6%	0 0.0%	3.41
Q9	この授業での学修活動（発言や提出物など）に対して必要な支援を得ている。	50 43.9%	61 53.5%	1 0.9%	2 1.8%	3.39
Q10	総合的に判断して、この授業に満足している。	56 49.1%	52 45.6%	4 3.5%	2 1.8%	3.42

■設問別科目平均の範囲と中央値

平均の範囲（当該学部・学科科目）					
最小値	25%点	中央値	75%点	最大値	標準偏差
3.11	3.31	3.50	3.88	3.81	0.30
2.26	2.21	2.50	3.00	3.22	0.41
2.85	3.00	3.33	3.56	3.59	0.33
3.04	3.00	3.43	3.73	3.70	0.30
2.78	3.00	3.17	3.55	3.63	0.37
3.15	3.00	3.33	3.55	3.67	0.25
2.85	3.00	3.29	3.68	3.59	0.35
3.04	3.00	3.48	3.50	3.63	0.29
3.00	3.00	3.30	3.65	3.59	0.28
2.85	3.00	3.33	3.59	3.67	0.38

※平均時間数の評価

2単位科目：4時間以上…4 / 2時間以上4時間未満…3 / 2時間未満…2 / 全くしていない…1

1単位科目：1時間以上…4 / 30分以上1時間未満…3 / 30分未満…2 / 全くしていない…1

キャンパス	科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
広島	教育方法学（Q3）【広島C】	深澤 悦子		16	6	37.5%
広島	教職実践演習（中・高） （Q3・Q4木曜ペア）	向居 暁	回答者数は6人中2人（33.3%）と限定的ではありますが、回答者の範囲では、授業への集中度、到達目標（身につく力）、教材・資料、学修活動への支援、課題の適切さ、総合満足度のいずれも高い評価が示されました。とくに「能動的学修機会」や「授業時間外に取り組むべき課題の提示」についても肯定的に受け止められており、授業設計の意図が一定程度届いていたことを確認できました。受講とフィードバックに感謝します。自由記述では、体験を通じて理解が深まったこと、ロールプレイングが有効だったことが挙げられました。また「内田先生は教育のスペシャリスト」というコメントは、退職校長として実務と意思決定の経験をもつ先生が共同担当してくださった点が学びの質に寄与したことを示しています。学校現場を熟知した教員が大学教育の側にも常勤として一定数配置され、理論と実務が往復できる体制が本来は望ましいという点も、この授業の経験から改めて意識されます。今後の課題は、授業外学修時間の回答が分かれていた点を踏まえ、課題の「目的・優先順位・目安時間・評価上の位置づけ」を提示時点でより明確にすることです。量を増減するというより、スケジュールの見通しが立つ形に調整します。あわせて、ロールプレイングを「体験して終わり」にしないために、各回の振り返り観点（判断根拠、代替案、次回の改善点）を短いフォーマットで共有し、フィードバックの観点も統一して返却します。強みである実践性と支援の手応えを維持しつつ、学びの言語化と蓄積が進む運用に改善していきます。	6	2	33.3%
広島	国語科教育法Ⅳ（Q3）	出雲 俊江		3	1	33.3%
広島	英語科教育法Ⅰ（Q4）	馬本 勉	本授業は、英語の教員を目指す学生を対象とし、英語の授業に必要な基礎知識と技能を高めることを目指した。少人数の授業であることから、様々な場面で問いを投げかけ、履修者相互に意見交換を行う活動を取り入れた。また、実際の英語教科書を用いた「マイクロ・ティーチング」により、教える側、教わる側双方の立場を経験し、コメントし合う時間を設けた。アンケートでは、履修学生の積極的な取り組みと、好意的な評価を見て取ることができた。自由記述には、「実際に授業をして、フィードバックをもらうことで改善点について考えることができた」というコメントがあり、効果的な活動であったことが伺える。 授業後には感想や質問等の記入を求め、次の回に返却する「コメントシート」の往復を続け、毎回の小さな授業改善に役立てた。今後は、実践的な活動を支える理論的な背景にも踏み込み、教員となったときに支えとなるようなインパクトのある授業を目指したい。	4	2	50.0%
広島	学校栄養教育論Ⅱ（Q3）	杉山 寿美	学校栄養教育論Ⅱ（杉山寿美・辻愛・山岡雅子） 1）昨年度の結果を踏まえた授業改善点 回答数は4/10名である。「総合的に判断して、この授業に満足している」の評価は3.75であった。今年度からの担当のため、昨年度との比較は不可能であるが、昨年度まで担当いただいた熊谷先生（客員教授）と情報交換をしつつすすめている。栄養教諭免許状取得のため科目であり、「栄養教諭の役割及び職務内容に関する事項」のうち、杉山が全体計画と給食に関する部分を、辻が教科に関する部分を担当した。また、教科・給食の時間の実践演習に関する部分は、山岡、杉山、辻、外部講師の4名で担当した。円滑に実施できたと判断している。 2）履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 本科目は、4年次の教育実習に向けて、教科・給食の時間における食に関する指導について、模擬授業を計画・実施する科目である。模擬授業は教員4名で学生を分担担当し、学生の進捗を常に把握しつつ行った。学生が懸命に取り組み、多くの学びを得たと思う。教育実習で模擬授業を計画する際に、この科目の学びが活かされると感じている。 3）期末アンケート結果から見た今後の課題 今年度からの授業担当者として、担当者4名の事前打ち合わせ等を含め、授業準備に時間をかけ、また、丁寧に授業を行った。卒業後、栄養教諭として活躍できるよう、今後もしっかり支援したい。（回答数4：履修登録者数10名、回答率40.0%）	10	4	40.0%
広島	教職実践演習（栄養教諭） （Q3）	山岡 雅子	今年度は集中講義であったため、アンケート回収時期と授業日程が重ならず、授業評価に関する案内ができなかったことから、アンケートを回収することができなかった。来年度以降は、必ず授業内で案内を行い、受講生が確実にアンケートへ回答できるよう改善したいと考えている。履修者の反応を把握するための取組として、学期中に履修カルテを作成させるとともに、教職実践演習の授業で自ら学びたい内容を考えさせ、可能な範囲で授業内容に反映させた。また、教育実習や栄養教諭免許取得に関連して振り返りを行わせ、「教職を履修してよかったこと」「教育実習を通して見えた自身の課題」「教職の意義や教員の役割・職務内容」「子どもに対する責任」等について考察させた。さらに、特別支援学校勤務の現職栄養教諭や、教員・教育委員会指導主事経験者を外部講師として招聘し、栄養教諭に求められる授業力や児童生徒理解について、教育実習の経験を踏まえて改めて考える機会を設けた。また、学校における食物アレルギー対応については、ロールプレイング等の実践的な活動を取り入れ、具体的な対応力の向上を図った。	3	0	—

キャンパス	科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
広島	教育学概論（Q4）	藤井 宣彰	本年度より、庄原と広島でのキャンパス間同時オンライン開講となった。昨年度までは授業者がキャンパス移動して対面で行っていたため、試行錯誤があつて、受講生にもやりにくさがあつたのではないかと想像する。しかしながら、しっかりと受講している様子も見受けられ、受講生には感謝する。ただし、教育効果という点ではどうしても対面授業に劣る印象があり、十分に理解していないと授業後の提出物で感じることもあつた。対面授業ならさほど意識せずとも学生の反応を確認できるものの、オンラインではわかりにくいところがある。発言できない環境で受講する学生もいるため、チャットや投票等を用いることを検討したい。 前期授業で教室から発信したところ、通信状況の不具合があつたため、研究室からの完全オンラインにした。来年度からは別の教員とのオムニバスであり、教室からの配信を希望されている。WiFi環境など確認し、できるだけ不具合のないようにしたい。また、授業開始までに教員間で確認事項をつめるとともに、できるだけもう一人の教員が授業しやすいよう協力したい。	43	21	48.8%
広島	教職入門（Q3）	中村 勝美	①昨年度の結果を踏まえた授業改善点 Teamsを開設し、学生とのコミュニケーションや早めの課題提示と授業内での丁寧な説明を心掛けた。 授業開始時に、簡単な設問に対して、受講者が発言する時間を設け、クラスのコミュニケーションを活性化しよう努めた。 グループワークの際は、机間巡回をこまめに行い、議論が活性化していないグループには助言や声掛けをして進度の把握に努めた。また、発表後には、グループごとのフィードバックを丁寧にするよう努めた。 授業で使用する動画は、YoutubeやNHKティーチャーズライブラリなどを利用し、最新の内容のものを活用した。 ②履修者の反応を知るために学期中に実施した方法・その結果を踏まえた授業改善点 授業の際、コメントペーパーを配布し、感想や質問を書いてもらい、必要に応じてフィードバックした。また、Teamsの課題にも必要に応じてフィードバックを記入した。 ③アンケート結果から見た今後の課題 ほとんどの質問に対し、「強くそう思う」「そう思う」の肯定的評価がなされており、回答した学生からおおむね高評価が得られた。今年度の学生は、課題の提出率、出席率も非常に高く、クラスの雰囲気もよかったように思う。 この数年間、2コマ続きの授業をストレスなく受けられるための工夫をしてきたが、次年度から1コマ15週に戻るので、シラバスをそのスケジュールに合わせて改善していきたい。	24	15	62.5%
広島	生徒・進路指導論（Q4） （地域創生学科対象）	坪田 雄二	7名中2名の回答であり、コメントは差し控える。	7	2	28.6%
広島	生徒指導論（後期集中）	坪田 雄二	15名中2名の回答となっており、数値評価に関するコメントは差し控える。自由記述についても無記入でありコメントはない。	15	7	46.7%
庄原	職業指導後期	近藤 寿		4	2	50.0%
庄原	教育学概論Q4	藤井 宣彰	本年度より、庄原と広島でのキャンパス間同時オンライン開講となった。昨年度までは授業者がキャンパス移動して対面で行っていたため、試行錯誤があつて、受講生にもやりにくさがあつたのではないかと想像する。しかしながら、しっかりと受講している様子も見受けられ、受講生には感謝する。ただし、教育効果という点ではどうしても対面授業に劣る印象があり、十分に理解していないと授業後の提出物で感じることもあつた。対面授業ならさほど意識せずとも学生の反応を確認できるものの、オンラインではわかりにくいところがある。発言できない環境で受講する学生もいるため、チャットや投票等を用いることを検討したい。 前期授業で教室から発信したところ、通信状況の不具合があつたため、研究室からの完全オンラインにした。来年度からは別の教員とのオムニバスであり、教室からの配信を希望されている。WiFi環境など確認し、できるだけ不具合のないようにしたい。また、授業開始までに教員間で確認事項をつめるとともに、できるだけもう一人の教員が授業しやすいよう協力したい。	29	3	10.3%
庄原	教職入門Q3	藤井 宣彰	クォーター制は授業時間が長く、50分程度経過すると受講生に疲れが見えるため、前半授業時には休憩を挟むようにした。特に意見はなかったが、どちらかといえば歓迎されていたのではないと思う。来年度からはセメスター制になるが、様子を見ながら休憩や作業の時間を設けるようにしたい。 授業者が担当する他の授業がキャンパス間同時開講となり、受講生の人柄が把握しにくくなった。また、オンラインで課題を提出する場合、文章力がわかりにくいように思う。教育実習に向け、学生の様子を観察する必要は感じている。教職入門は現在のところ、庄原キャンパスのみの対面開講であるため、名前を呼んで出席を確認する、手書きで課題を提出する、指名で発言を求めるといった古いアナログ形式をあえて続けようと思う。 真面目に講義形式の授業をしすぎたかと思っていたものの、授業中の活動や授業者の発言に意外と好意的な反応があつた。正直なところ深く考えて行っていたわけではないが、意識して行っていこうと思う。また、テキストがやや古くなってきたため、改訂版が出なければ受講者の金銭的負担も考慮し、資料を配付して進めようと考えている。	30	10	33.3%
庄原	特別活動論後期集中	山田 浩之		16	1	6.3%
庄原	教育方法学Q3(庄原C)	深澤 悦子		16	2	12.5%

■担当教員コメント（教職科目） 令和7年度後期

キャンパス	科目名	記入者名	コメント内容	履修登録者数	回答者数	回答率
庄原	生徒・進路指導論後期	坪田 雄二	17名中4名の回答であり、結果の信頼性に疑問はあるが、概ね高い評価が得られているようである。ただ能動的学習の機会に関する評価が低い傾向にあり、今後はこのような機会を増やすよう努力していく。	17	4	23.5%
庄原	教育実習指導通年	坪田 雄二	15名中2名の回答であり、数値の結果には信頼性が欠けると思われるため、コメントは差し控える。ただ、自由記述に関して要望が示されているため、それについてコメントする。講義形態が一方的な講和の形で進められることに対する批判が寄せられていた。これに関しては、本講義は教育実習に臨むために必要となる事前の準備が主要な目的であり、伝えるべきことをもれなく取り上げる必要があるため、講和の形をとらせていただいた。ただ、それを重視するあまり、しんどさを感じさせてしまったことは反省したい。このような反応では伝えるべきこともうまく伝わらないことにもなりかねないため、一部を対話形式で進めていこうと考えている。	15	2	13.3%
庄原	教育実習Ⅰ通年	坪田 雄二	15名中2名の回答であり、信頼性に欠けると思われるため、数値の結果に関してはコメントを差し控える。なお自由記述は記入なしであった。	15	2	13.3%
庄原	教育実習Ⅱ通年	坪田 雄二	11名中1名の回答であり、数値の結果に関しては、信頼性に欠けると思われるため、コメントは差し控える。自由記述なし。	11	1	9.1%
庄原	教職実践演習（中・高）後期	坪田 雄二	15名中2名の回答であり、数値の結果に関しては、信頼性に欠けると思われるため、コメントは差し控える。自由記述の内容について回答していく。まず、外部講師の回の講義時間の延長についての疑義が示されたことについては、経験者の講和であり、今後、教職に進むうえで有益な点が多くあると考えるあまり、時間について無頓着であったことは誠に申し訳ない。今後は定められた時間の中での実施、あるいは時間の延長に伴う代替え措置等の修正をしていきたいと考えている。また、欠席の際の課題について、欠席理由に応じて対応を替えるべきであるとの意見については、今後も理由を問わず、欠席した際はその代替えとして課題レポートを課す予定である。体調不良、就職活動と学会参加の理由が示されていたが、どのような理由であれ、欠席したことには変わりなく、本学では公欠の制度も存在していないので、対応を替える必要性を感じない。	15	2	13.3%
庄原	理科教育法Ⅰ後期集中	清水 欽也		14	2	14.3%
庄原	理科教育法Ⅲ後期集中	磯崎 哲夫	回答者数を含め結果は次年度の講義の参考します。	16	2	12.5%
庄原	理科教育法Ⅳ後期集中	鹿江 宏明	今年度はこれまでの学生の学生状況を踏まえ、各授業後に授業内容をテキスト化しpdfで配付することにより、授業外でのふり返りに活用できるようにした。また、学生の模擬授業に向けた教材研究を円滑に実施できるよう、授業内の実験時間を増やした。さらに、初回の授業で事前に授業科目全体の評価規準を配付し、履修前の状況を確認できるようにするとともに、15回の授業後に再度同じ評価規準を配付し、力量が成長した項目が実感できるようにした。課題としては、アンケート回答が得られなかったことである。集中講義の授業終了から2か月後のアンケートとなるため、回答率を上げるための工夫が必要と考える。	16	0	—
三原	養護概説（Q3・Q4）	沖西 紀代子		17	3	17.6%
三原	教育学概論（Q3）	田中 崇教		17	2	11.8%
三原	教職入門（Q4）	中村 雅子		17	3	17.6%
三原	学校健康相談（Q3・Q4）	沖西 紀代子		10	1	10.0%
三原	生徒指導論（Q3）三原C	坪田 雄二	11名中2名の回答であり、信頼性に欠けるデータのため、コメントは差し控える。	11	2	18.2%
三原	特別支援教育（Q3）	古山 千佳子	昨年度のアンケート回答率の低さを踏まえ、今年度は授業後にアンケートの必要性を説明し、回答を依頼した。その結果、受講生全員の回答を得ることができた。各授業後に授業内容の理解度を確認するための課題を提示した。学生全員が授業および課題にまじめに取り組み、高成績を修めることができた。少人数の授業であり、今後は学生一人一人の反応を確認しながら授業を進めたいと考える。	10	10	100.0%